国道485号道路改築事業（松江第五大橋道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

山辺遺跡・鞍切遺跡
米坂古墳群・貝先遺跡 ほか

2011年3月

島根県教育委員会

17-1

17-1

17-1

17-1

17-1

18-1

18-2

18-2

18-3

18-3

18-4

18-4

18-5

18-6

18-7

18-7

18-7

18-7

Ⅲ区・Ⅴ区　出土炉壁

序

島根県教育委員会では島根県土木部の委託を受けて、平成 17 年度から平成 22 年度にかけて国道 485 号道路改築事業（松江第五大橋道路）予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施してまいりました。本書はそのうち松江市東津田町や西尾町、上東川津町、下東川津町に所在する 18 遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では縄文時代から近世までの様々な遺構や遺物を発見しました。

このうち、西尾町の山辺遺跡では、中世と推定される炉壁等の鋳造関連遺物が多数出土しました。島根県内では鋳造関連遺物が出土した遺跡は少なく当時の生産活動を考える上で、重要な発見となりました。

また、同町の米坂古墳群では古瀬戸の壺のほか、多数の経石や石塔を伴う中世墓が発見されました。これらは当時の文化や生活を知る上で貴重な発見となりました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と本書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の方々、松江市教育委員会、島根県土木部高規格道路事務所、その他関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成２３年３月

島根県教育委員会
教　育　長　　今　井　　康　雄

例　言

1．本書は島根県教育委員会が平成 17 年度から平成 22 年度に実施した、国道 485 号道路改築事業（松江第五大橋道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書で報告する遺跡は、次のとおりである (南から順)。

島根県松江市東津田町地内

石台Ⅱ遺跡

島根県松江市西尾町地内

梅面遺跡　観音山古墳群　山辺遺跡　中坪遺跡　鞍切遺跡　客戸遺跡

米坂古墳群　米坂遺跡

島根県松江市上東川津町地内

一の谷遺跡　藤廻遺跡　仲田遺跡　蟻越古墳群　貝先遺跡　番貫Ⅱ遺跡

島根県松江市下東川津町地内

番貫Ⅰ遺跡　長池Ⅱ遺跡　長池Ⅰ遺跡

3．調査組織は以下のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成 17 年度

(事　務　局)　卜部吉博 (埋蔵文化財調査センター所長)、永島静司 (同総務 G 課長)

(調査担当者)　川原和人（同調査第 1 G 課長）、是田　敦 (同調査第 1G 第 2 SG 文化財保護主事)、寺本和明 (同補助員)

平成 18 年度

(事　務　局)　卜部吉博 (埋蔵文化財調査センター所長)、坂本憲一 (同総務 G 課長)

(調査担当者)　川原和人（同調査第 1 G 課長）、油利　崇 (同調査第 1G 第 3 SG 補助員)

平成 19 年度

(事　務　局)　卜部吉博 (埋蔵文化財調査センター所長)、川原和人 (同調整監)
坂本憲一 (同総務 G 課長)

(調査担当者)　宮澤明久 (同調査第 1 G 課長)、阿部賢治 (同補助員)、人見麻生 (同補助員)

平成 20 年度

(事　務　局)　卜部吉博 (埋蔵文化財調査センター所長)、川原和人 (同副所長)
赤山　治 (同総務 G 課長)、

(調査担当者)　宮澤明久 (同調査第 1 G 課長)、伊藤徳広（同文化財保護主任）
阿部賢治 (同補助員)、是田和美（同補助員）、大田晴美 (同補助員)
野津研吾 (同補助員)

平成 21 年度

(事　務　局)　川原和人 (埋蔵文化財調査センター所長)、山根雅之 (同総務 G 課長)

(調査担当者)　宮澤明久 (同調査第 1 G 課長)、内田律雄（同主幹）
伊藤徳広（同文化財保護主任）、阿部賢治 (同補助員)、是田和美（同補助員）
寺本和明 (同補助員)、大田晴美 (同補助員)

平成 22 年度

(事　務　局)　　川原和人 (埋蔵文化財調査センター所長)、山根雅之 (同総務 G 課長)

(調査担当者)　　内田律雄（同調査第２G 課長)、伊藤徳広（同文化財保護主任）

是田和美 (同補助員)、大田晴美 (同補助員)、山本　遥（同補助員）

４．現地調査及び整理作業にあたっては、以下の方々に調査指導いただいた。

（指導者）

田中義昭 (島根大学名誉教授)、渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館館長)、池上　悟（立正大学教授)、大橋泰夫（島根大学教授)、五十川伸矢（京都橘大学教授)、藤澤良祐（愛知学院大学教授)、伊藤幸司（(財）大阪文化財協会保存科学室長)、狭川真一（(財）元興寺文化財研究所研究部長)、井上寛司（島根大学名誉教授)、西本豊弘（国立歴史民俗博物館教授)、住田雅和（国立歴史民俗博物館研究員)、中村唯史（島根県立三瓶自然館学芸員)、今岡利江（八雲立つ風土記の丘学芸員）

また、次の方々から御助言・御指導をいただいた。

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館特別学芸顧問)、清水重敦（奈良文化財研究所景観研究室長)、米田克彦（岡山県教育委員会主任)、重根弘和（備前市教育委員会主査)、上浜正信、松尾和夫

５．挿図中の北は測量法に基づく平面直角座標系第Ⅲ系の X 軸方向を指し、座標系の XY 座標は世界測地系による。レベル高は海抜により標記している。

６．図２は、国土地理院発行の 1/25,000(松江) を使用した。

７．本文、図版中に用いた遺構の略号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物　SD：溝状遺構　SK：土坑　SX：性格不明遺構

８．本書の執筆は、担当職員が協議分担して行い、文責は目次に記した。

９．本書の編集は、各担当者と協議のうえ、伊藤が行った。

10．本書に掲載した写真は、空中写真を除き調査員が撮影した。

11．本書に掲載した実測図作成およびトレース・デジタルトレースは、調査員、調査補助員のほか陶山佳代・天津文子・瀬川恭子が行った。

12．本書の編集にあたっては DTP 方式を採用し、adobe 社　InDesign CS4、Photoshop CS4、Illustrator CS4 を用いて編集作業を行った。

13．本書掲載の出土遺物や、図面、写真等の記録保存資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町 33 番地）で保管している。

目次

第１章　調査に至る経緯（宮澤・伊藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査の経緯
　第２節　調査の経過
第２章　遺跡の位置と歴史的環境（伊藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第３章　発掘調査の概要（宮澤・内田・伊藤）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第１節　山辺遺跡
　第２節　鞍切遺跡
　第３節　米坂古墳群
　第４節　米坂遺跡
　第５節　客戸遺跡
　第６節　藤廻遺跡
　第７節　仲田遺跡
　第８節　石台Ⅱ遺跡
　第９節　梅面遺跡
　第 10 節　観音山古墳群
　第 11 節　中坪遺跡
　第 12 節　一の谷遺跡
　第 13 節　貝先遺跡
　第 14 節　蟻越古墳群
　第 15 節　番貫Ⅰ遺跡
　第 16 節　番貫Ⅱ遺跡
　第 17 節　長池Ⅰ遺跡
　第 18 節　長池Ⅱ遺跡
第４章　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142

挿図目次

第１図　事業の位置　……………………………………… 1
第２図　事業の工事範囲　………………………………… 3
第３図　遺跡の位置（松江市下東川津地域）　…………… 3
第４図　遺跡の位置（松江市西尾町地域）　……………… 4
第５図　遺跡の位置（松江市東津田町地域）　…………… 4
第６図　周辺遺跡位置図（Ｓ＝１/25,000）………………… 8
第７図　山辺遺跡　調査区位置図（S=1/800）　………… 11
第８図　山辺遺跡　トレンチ土層図（S=1/200）　……… 12
第９図　山辺遺跡　Ⅰ・Ⅱ区　調査前測量図（Ｓ＝１/300）…… 13
第10図　山辺遺跡　Ⅲ・Ⅳ区　遺構配置図（Ｓ＝１/300）…… 15
第11図　山辺遺跡　Ⅲ区　SK01実測図（Ｓ＝１/40）　…… 16
第12図　山辺遺跡　Ⅲ区　段状遺構実測図（Ｓ＝１/100）…… 17
第13図　山辺遺跡　Ⅲ区　SK06･07実測図（Ｓ＝１/20）…… 19
第14図　山辺遺跡　Ⅳ区　SX01･SX02実測図（Ｓ＝１/150）…… 20
第15図　山辺遺跡　Ⅴ区　遺構配置図（Ｓ＝１/150）…… 21
第16図　山辺遺跡　Ⅴ区　SX03実測図（Ｓ＝１/30）…… 22
第17図　山辺遺跡　Ⅲ･Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図（1）（Ｓ＝１/4）…… 23
第18図　山辺遺跡　Ⅲ･Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図（2）（Ｓ＝１/4）…… 24
第19図　山辺遺跡　Ⅲ･Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図（3）（Ｓ＝１/4）…… 25
第20図　山辺遺跡　Ⅲ･Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図（4）（Ｓ＝１/4）…… 26
第21図　山辺遺跡　Ⅲ･Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図（5）（Ｓ＝１/4）…… 27
第22図　山辺遺跡　Ⅲ区　出土遺物実測図（S=1/2・1/3）…… 28
第23図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑴（S=1/3・1/6）…… 28
第24図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑵（S=1/3･1/6）…… 29
第25図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑶（S=1/3）…… 30
第26図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑷（S=1/3）…… 31
第27図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑸（S=1/3）…… 33
第28図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑹（S=1/2･1/3）…… 34
第29図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑺（S=1/4）…… 35
第30図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑻（S=1/2･1/4･2/3）…… 36
第31図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図⑼（S=1/4）…… 38
第32図　鞍切遺跡　調査区位置図（Ｓ＝１/1000）…… 40
第33図　鞍切遺跡　1区遺構配置図（Ｓ＝１/300）…… 41
第34図　鞍切遺跡　1区1号墳（SD02）実測図（Ｓ＝１/80）…… 42
第35図　鞍切遺跡　1区1号墳（SD02）遺物出土状況図（Ｓ＝１/50）…… 43
第36図　鞍切遺跡　1区2号墳（SD03）実測図（Ｓ＝１/40）…… 45
第37図　鞍切遺跡　1区2号墳（埴輪溜まり・SD06）実測図（Ｓ＝１/40）…… 46
第38図　鞍切遺跡　1区2号墳遺物出土状況図（Ｓ＝１/100）…… 47
第39図　鞍切遺跡　1区SK08･09実測図（Ｓ＝１/30）…… 48
第40図　鞍切遺跡　1区　道路状遺構1実測図（Ｓ＝１/50）…… 49
第41図　鞍切遺跡　1区道路状遺構1土層図（Ｓ＝１/40）…… 50
第42図　鞍切遺跡　1区　道路状遺構2実測図（Ｓ＝１/50）…… 51
第43図　鞍切遺跡　1区　道路状遺構3実測図（Ｓ＝１/150）…… 52
第44図　鞍切遺跡　1区　SK05･06･07･10･11実測図（Ｓ＝１/20）…… 53
第45図　鞍切遺跡　２区　遺構配置図調査前測量図（Ｓ＝１/600）…… 54
第46図　鞍切遺跡　2区　3号墳（SK01）実測図（Ｓ＝１/100・20・40 ）…… 55
第47図　鞍切遺跡　２区　4号墳調査前測量図（Ｓ＝１/160）…… 56
第48図　鞍切遺跡　２区　4号墳東西土層図（Ｓ＝１/40）…… 57
第49図　鞍切遺跡　２区　4号墳南北土層図（Ｓ＝１/40）…… 58
第50図　鞍切遺跡　２区　4号墳主体部実測図（1）（Ｓ＝１/30）…… 59
第51図　鞍切遺跡　２区　4号墳主体部実測図（2）（Ｓ＝１/30）…… 60
第52図　鞍切遺跡　２区　4号墳完掘状況図（Ｓ＝１/160）…… 61
第53図　鞍切遺跡　２区　街道実測図（Ｓ＝１/200･100）…… 62
第54図　鞍切遺跡　出土遺物実測図⑴（S=1/3・2/3）…… 64
第55図　鞍切遺跡　出土遺物実測図⑵（S=1/6）…… 65
第56図　鞍切遺跡　出土遺物実測図⑶（S=1/6）…… 66
第57図　米坂古墳群　調査区位置図･調査前測量図（Ｓ＝１/1000）…… 69
第58図　米坂古墳群　1･2区　調査後測量図（Ｓ＝１/500）…… 70
第59図　米坂古墳群　1区　遺構配置図（Ｓ＝１/500）…… 71
第60図　米坂古墳群　1区　集石1検出状況図（Ｓ＝１/４0）…… 72
第61図　米坂古墳群　1区　集石1基壇検出状況図（Ｓ＝１/40）…… 74

第62図　米坂古墳群　1区　集石1基壇基礎検出状況図（S＝1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　74
第63図　米坂古墳群　1区　集石1立面図・土層図（S＝1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　75
第64図　米坂古墳群　1区　集石1中心主体部実測図（S＝1/10）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　76
第65図　米坂古墳群　1区　集石1蔵骨器出土状況図（S=1/10）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　77
第66図　米坂古墳群　1区　集石2・3実測図（S＝1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　78
第67図　米坂古墳群　1区集石7実測図（S＝1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
第68図　米坂古墳群　1区　1号墳実測図（S＝1/80）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
第69図　米坂古墳群　2区　2号墳実測図（S＝1/80）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　80
第70図　米坂古墳群　3区　3号墳実測図（S＝1/150・100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　81
第71図　米坂古墳群　4区　SD01・02実測図（S＝1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　82
第72図　米坂古墳群　寺跡区　遺構配置図（S＝1/120）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　83
第73図　米坂古墳群　寺跡区　SB01実測図（S＝1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　84
第74図　米坂古墳群　寺跡区　土器溜まり1・2実測図（S＝1/10）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　85
第75図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑴（S=1/3・1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　87
第76図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑵（S=1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　89
第77図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑶（S=1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　90
第78図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑷（S=1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　91
第79図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑸（S＝1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　92
第80図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑹（S=1/6・1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　93
第81図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑺（S=1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　95
第82図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑻（S=1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　96
第83図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑼（S=1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　97
第84図　米坂古墳群　1区　出土遺物実測図⑽（S=1/6）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　98
第85図　米坂古墳群　2区・3区・寺跡区　出土遺物実測図（S=1/6　1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第86図　米坂遺跡　トレンチ配置図（S＝1/1000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
第87図　米坂遺跡　トレンチ土層図⑴（S＝1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
第88図　米坂遺跡　トレンチ土層図⑵（S＝1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
第89図　米坂遺跡　遺構配置図・土層図（S＝1/200）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　105
第90図　米坂遺跡　SD01実測図（S＝1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
第91図　米坂遺跡　SD02実測図（S＝1/20）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第92図　米坂遺跡　SD03・4実測図（S＝1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
第93図　米坂遺跡　焼土実測図（S＝1/10）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
第94図　米坂遺跡　出土遺物実測図⑴（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
第95図　米坂遺跡　出土遺物実測図⑵（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
第96図　客戸遺跡　調査区位置図（S＝1/500）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第97図　客戸遺跡　トレンチ土層図（S＝1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第98図　客戸遺跡　遺構配置図・土層図（S＝1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第99図　客戸遺跡　SB01実測図（S＝1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第100図　客戸遺跡　出土遺物実測図（S=1/3）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
第101図　藤廻遺跡・仲田遺跡　調査区位置図（S＝1/2000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第102図　藤廻遺跡・仲田遺跡　調査区位置図（S＝1/1000）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第103図　藤廻遺跡　測量図（S＝1/200）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
第104図　藤廻遺跡　盛土状遺構実測図（S＝1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
第105図　藤廻遺跡　ピット測量図（S＝1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
第106図　石台Ⅱ遺跡　調査区配置図（S＝1/500）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第107図　石台Ⅱ遺跡　土層図（S＝1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第108図　石台Ⅱ遺跡　出土遺物実測図（S=1/3）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
第109図　観音山古墳群　トレンチ配置図（S＝1/1000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
第110図　梅面遺跡　調査区配置図・土層図（S＝1/120）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第111図　観音山古墳群　トレンチ土層図（S＝1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
第112図　中坪遺跡　トレンチ配置図（S＝1/2000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
第113図　中坪遺跡　トレンチ土層図（S＝1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第114図　一の谷遺跡　トレンチ配置図（S＝1/1500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第115図　一の谷遺跡　トレンチ土層図（S＝1/200）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第116図　長池Ⅰ・Ⅱ・番貫Ⅰ・Ⅱ・貝先遺跡　調査区配置図（S＝1/4000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
第117図　貝先遺跡　遺構配置図（S＝1/200）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130
第118図　貝先遺跡　SD01・03・04・SB01実測図（S＝1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
第119図　貝先遺跡　SD02・06・SB02・03実測図（S＝1/60）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
第120図　貝先遺跡　SX01実測図（S＝1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
第121図　貝先遺跡　出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
第122図　窯状石組遺構類例実測図（S＝1/40）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
第123図　蟻越古墳群　トレンチ配置図（S＝1/200）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第124図　蟻越古墳群　トレンチ土層図（S＝1/100）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第125図　番貫Ⅰ遺跡　遺構配置図（S＝1/250）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137

第126図　番貫Ⅰ遺跡・番貫Ⅱ遺跡　土層図（S＝1/150/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138
第127図　番貫Ⅰ遺跡・長池Ⅰ遺跡　出土遺物実測図（S＝1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139
第128図　長池Ⅰ遺跡・長池Ⅱ遺跡　トレンチ土層図⑴（S＝1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
第129図　長池Ⅰ遺跡・長池Ⅱ遺跡　トレンチ土層図⑵（S＝1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第130図　米坂古墳群　出土石塔分類図⑴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第131図　米坂古墳群　出土石塔分類図⑵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・144

写真図版目次

山辺遺跡

巻頭図版１　Ⅲ区・Ⅴ区出土炉壁
図版１　Ⅲ区Ⅳ区空中撮影（上から）　Ⅲ区Ⅳ区空中撮影（北から）
図版２　Ⅲ区 SK01 炉壁出土状況（北から）　Ⅲ区 SK01 完掘状況（北から）
図版３　Ⅲ区 SK08 炉壁出土状況（北から）　Ⅴ区 SX03 検出状況（西から）
図版４　Ⅴ区漆塗碗検出状況　Ⅴ区第 28 図３出土状況アップ
図版５　調査前風景　Ⅲ区南壁土層堆積状況（北西から）　Ⅲ区 SK01・SK08 検出状況（北から）
図版６　Ⅲ区 SK08 検出状況（北から）　Ⅲ区 SK01・SK08 検出状況（北東から）　Ⅲ区 SK01 掘下状況（北から）
図版７　Ⅲ区 SK01 炉壁出土状況（東から）　Ⅲ区 SK01 東西土層堆積状況（北から）　Ⅲ区 SK01 東西土層堆積状況（北から）
図版８　Ⅲ区 SK08 東西土層堆積状況（北から）　Ⅲ区 SK01 遺物出土状況（南西から）　Ⅲ区 SK01・SK08 完掘状況（北から）
図版９　Ⅲ区段状遺構完掘状況（西から）　Ⅲ区 SD01 北側土層堆積状況（北西から）　Ⅲ区 SD01 南側土層堆積状況（北西から）
図版 10　Ⅲ区 SD01 土層堆積状況（東から）　Ⅲ区 SD02・SD03 遺構検出状況（東から）　Ⅲ区 SD02 東西土層堆積状況（南西から）
図版 11　Ⅲ区段状遺構西側完掘状況（東から）（北西から）（西から）
図版 12　Ⅲ区ピット群検出状況（北西から）　Ⅲ区ピット 群完掘状況（北西から）　Ⅲ区 SK06・ピット 40 土層堆積状況（南東から）
図版 13　Ⅲ区 SK06・ピット 40 完掘状況（北から）　Ⅲ区 SK07 土層堆積状況（西から）　Ⅲ区 SK07 完掘状況（西から）
図版 14　Ⅲ区ピット 56 土層堆積状況（東から）　Ⅲ区ピット 47 土層堆積状況（西から）　Ⅲ区ピット 107 土層堆積状況（南から）
図版 15　Ⅳ区 SX01 完掘状況（南から）　Ⅳ区 SX02 完掘状況（南西から）　Ⅳ区完掘状況（南西から）
図版 16　Ⅴ区 SX03 検出状況（南東から）　Ⅴ区 SX03 出土状況アップ　Ⅴ区漆塗碗出土状況（南から）
図版 17　Ⅴ区第 28 図３出土状況　Ⅴ区第 28 図１出土状況
図版 18　Ⅴ区調査風景　Ⅴ区第三層第 19 図１出土状況　Ⅴ区第三層第 24 図４出土状況
図版 19　Ⅴ区完掘状況（東から）　完掘状況（北から）　Ⅴ区 SX03 調査風景
図版 20　Ⅲ区・Ⅴ区出土炉壁
図版 21　Ⅲ区出土炉壁・羽口
図版 22　Ⅲ区出土遺物　Ⅴ区出土遺物
図版 23　Ⅴ区出土陶器　Ⅴ区出土褐釉陶器
図版 24　Ⅴ区出土中世土師器　Ⅴ区出土青磁・白磁
図版 25　Ⅴ区出土埴輪　Ⅴ区出土土錘
図版 26　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区出土石器　Ⅲ区出土玉類
図版 27　Ⅴ区出土遺物
図版 28　Ⅴ区出土遺物
図版 29　Ⅴ区出土木製品
図版 30　Ⅴ区出土木製品
図版 31　Ⅲ区 SK01 出土鉄滓　Ⅲ区出土鉄滓　Ⅴ区出土鉄滓

鞍切遺跡

図版 32　１区空中撮影（西から）　２区街道跡調査風景（北から）
図版 33　１区空中撮影（上から）　１区 SD02 検出状況（東から）
図版 34　１区 SD08 セクション２・３（北西から）　１区道路状遺構１礫出土状況（東から）
図版 35　２区４号墳主体部箱式石棺検出状況（南より）　２区４号墳主体部完掘状況（上から）
図版 36　２区街道跡完掘状況（北から）　２区街道跡完掘状況（南東から）
図版 37　１区調査前状況（東から）　１区 SD03 検出状況(東から)　１区 SD02 遺物出土状況(東から)
図版 38　１区 SD02 土層堆積状況（南から）　１区 SD02 遺物出土状況（南から）　１区 SD02 遺物出土状況（北から）
図版 39　１区 SD02(奥)･SD03(手前)遺物出土状況(東から)　１区 SD03 遺物出土状況（北西から）
図版 40　１区 SD03 遺物出土状況（南から）　１区 SD03 土層堆積状況（南から）（北から）
図版 41　１区 SD03 出土埴輪　１区埴輪溜り遺物出土状況（南西から）　１区埴輪溜り土層堆積状況（南西から）
図版 42　１区 SD06 セクション（南から）　１区 SK09 検出状況（東から）　１区 SK09 検出状況（南東から）
図版 43　１区 SK08 礫検出状況（北東から）　１区 SK08 完掘状況（南西から）　１区 SD03・SK08 完掘状況（南から）
図版 44　１区 SK09 検出状況（南から）　１区 SK09 完掘状況（南西から）　１区 SD06・SK09 完掘状況（南から）
図版 45　１区 SK11 完掘状況と土層堆積状況（南から）　１区 SK10 検出状況（北から）　１区 SK10 土層堆積状況（北東から）

図版 46　1 区 SK10 完掘状況（北東から）　1 区 SK07 土層堆積状況（西から）　1 区道路状遺構 1 検出状況（南東から）
図版 47　1 区道路状遺構 1 土層堆積状況（西から）　1 区道路状遺構 1 検出状況（北東から）（上から）
図版 48　1 区道路状遺構 1 完掘状況（西から）　1 区道路状遺構 1 土層堆積状況（北東から）　1 区完掘状況（東から）
図版 49　2 区 4 号墳調査前状況（東から）（南西から）　2 区 4 号墳南北土層堆積状況南半分（南西から）
図版 50　2 区 4 号墳南北土層堆積状況（西から）　2 区 4 号墳南北土層堆積状況北側中央寄り（東から）　2 区 4 号墳主体部上部東西土層堆積状況西半分（南から）
図版 51　2 区 4 号墳主体部上部東西土層堆積状況東半分（南から）　2 区 4 号墳周溝土層堆積状況（南から）　2 区 4 号墳周溝土層堆積状況東端（南から）
図版 52　2 区 4 号墳主体部箱式石棺検出状況（上から）　2 区 4 号墳主体部蓋石除去後（上から）　2 区 4 号墳主体部石棺内完掘状況（上から）
図版 53　2 区 4 号墳主体部棺外大刀出土状況（南西から）　2 区 4 号墳主体部棺外大刀出土状況（上から）　2 区 4 号墳主体部石棺内完掘状況（南西から）
図版 54　2 区 4 号墳主体部石棺北側土層堆積状況（北東から）　2 区 4 号墳主体部完掘状況（東から）　2 区 4 号墳主体部墓坑完掘状況（上から）
図版 55　2 区 4 号墳完掘状況（南東から）　2 区 SK01 土層堆積状況（南西から）　2 区 SK01 遺物出土状況（上から）
図版 56　2 区 SK01 完掘状況（上から）　2 区街道跡北端土層堆積状況（南から）　2 区街道跡土層堆積状況上半分（西から）
図版 57　2 区街道跡土層堆積状況下半分（西から）（南西から）（北西から）
図版 58　2 区街道跡調査風景　2 区完掘状況（東から）
図版 59　2 区 SK01 周辺完掘状況（南から）　現地説明会風景　一丁地蔵　一丁地蔵陰刻部分
図版 60　1 区出土埴輪
図版 61　1 区出土埴輪
図版 62　1 区出土埴輪
図版 63　1 区出土埴輪
図版 64　1 区出土埴輪
図版 65　1 区出土埴輪
図版 66　1 区出土埴輪
図版 67　1 区出土埴輪
図版 68　1 区・2 区出土須恵器・鉄器
図版 69　1 区・2 区出土遺物

米坂古墳群

図版 70　南西から米坂古墳群と和久羅山を望む　1 区集石 1 基壇 1 検出状況（西から）
図版 71　1 区集石 3 上面除去状況（北から）　1 区集石 1 主体部蔵骨器土層堆積状況（東から）
図版 72　1 区調査前風景　1 区集石 1 検出状況　1 区集石 1 調査前状況（西から）
図版 73　1 区集石 1 表土除去状況（北西から）　1 区集石 1 東西土層堆積状況（南西から）　1 区集石 1 基壇上面検出状況（西から）
図版 74　1 区集石 1 基壇上面検出状況（北西から）　1 区集石 1 基壇上面検出状況（南西から）　1 区集石 1 作業風景
図版 75　1 区集石 1 南北土層堆積状況（南東から）　1 区集石 1 南東隅土層堆積状況（南から）　1 区集石 1 南北土層北側堆積状況（東から）
図版 76　1 区集石 1 蔵骨器（第 75 図 1）（上から）　1 区集石 1 蔵骨器（第 75 図 1･3）出土状況（西から）　1 区集石 1 蔵骨器（第 75 図 1）出土状況（西から）
図版 77　1 区集石 1 蔵骨器出土状況（北から）　1 区集石 1 蔵骨器調査風景　1 区集石 1 蔵骨器調査状況（西から）
図版 78　1 区集石 1 蔵骨器（第 75 図 3）調査状況（上から）　1 区集石 1 蔵骨器（第 75 図 2）完掘状況（上から）　1 区集石 1 上面除去状況（西から）
図版 79　1 区集石 1 基壇検出状況（北西から）　1 区集石 1 基壇石列 D 礫配置状況（南から）　1 区集石 1 基壇石列 B' 礫配置状況（北から）
図版 80　1 区集石 1 基壇石列 A 検出状況（南西から）　1 区集石 1 主体部土層堆積状況アップ（南から）　1 区集石 1 主体部土層堆積状況（南から）
図版 81　1 区集石 1 主体部検出状況（西から）　1 区集石 1 主体部検出状況（北から）　1 区集石 1 主体部蔵骨器完掘状況（西から）
図版 82　1 区集石 1 主体部石槨（北西から）　1 区集石 1 基壇基礎検出状況（北から）　1 区集石 1 基壇石列 A・B 検出状況（南西から）
図版 83　1 区集石 1 基壇石列 B'･B" 検出状況（北から）　1 区集石 1 基壇石列 C と主体部　1 区集石 1 礫取上げ後（西から）
図版 84　1 区集石 1 調査風景　1 区集石 1(第 76 図 6) 相輪出土状況　1 区集石 1(第 75 図 10) 石仏出土状況（西から）
図版 85　1 区集石 1(第 75 図 10) 石仏出土状況アップ（西から）　1 区集石 2 検出状況（南西から）　1 区集石 3 検出状況（北西から）
図版 86　1 区集石 3 検出状況（南東から）　1 区集石 3 上面除去状況（西から）　1 区集石 3 下段検出状況（北から）
図版 87　1 区集石 7 検出状況（北東から）　1 区 1 号墳調査状況（北西から）　2 区 2 号墳調査前状況（北東から）
図版 88　2 区 2 号墳盛土東西土層堆積状況（北東から）　3 区調査前状況（南から）　3 区 3 号墳土層堆積状況（北東から）
図版 89　3 区 3 号墳周溝完掘状況（東から）　寺跡区基本土層堆積状況（南から）　寺跡区 SB01 検出状況（西から）
図版 90　寺跡区 SB01 検出状況（南西から）　寺跡区 SB01 内基礎検出状況（南から）　寺跡区土器溜まり 1 検出状況（上から）
図版 91　寺跡区土器溜まり 2 出土状況（南西から）　寺跡区土器溜まり 2 出土状況（東から）　1 区集石 1 土器溜まり 1 完掘状況（東から）
図版 92　1 区出土経石（1 ～ 83）
図版 93　1 区出土経石（84 ～ 213）
図版 94　1 区出土経石（214 ～ 300）
図版 95　1 区出土経石（301 ～ 387）
図版 96　1 区出土経石（388 ～ 465）
図版 97　1 区出土経石（466 ～ 529）
図版 98　1 区出土経石（530 ～ 583）

図版 99　1 区出土経石（584 ～ 652）
図版 100　1 区出土経石（653 ～ 705）
図版 101　1 区出土経石（706 ～ 748）
図版 102　1 区出土経石（749 ～ 802）
図版 103　1 区出土経石（804 ～ 852）
図版 104　1 区出土石塔
図版 105　1 区出土石塔
図版 106　1 区出土石塔
図版 107　1 区出土石塔
図版 108　1 区出土石塔
図版 109　1 区出土石塔
図版 110　1 区出土石塔
図版 111　1 区出土石塔
図版 112　1 区出土遺物
図版 113　1 区・寺跡区出土遺物
図版 114　1・2・3・寺跡区出土遺物
図版 115　1・2・3・寺跡区出土遺物

米坂遺跡

図版 116　調査前状況（西から）　SD01 検出状況（西から）　SD01 礫出土状況（北から）
図版 117　SD01 完掘状況（北西から）　SD01 完掘状況（東から）　SD02 検出状況（北から）
図版 118　SD02 土層堆積状況その 1（北から）　SD02 土層堆積状況その 2（北から）　SD02 遺物出土状況（北から）
図版 119　SD02 完掘状況（北から）　SD03・04 完掘状況（西から）（北東から）
図版 120　SD03・04 完掘状況（北から）　焼土面 1 検出状況(東から)　焼土面 2 検出状況(東から)
図版 121　焼土面 2 土層堆積状況　遺物出土状況その 1　遺物出土状況その 2
図版 122　出土須恵器
図版 123　出土須恵器
図版 124　出土土師器
図版 125　出土土師器

客戸遺跡

図版 126　東壁土層堆積状況（西から）　SB01 完掘状況（南東から）（南西から）
図版 127　SB01 ピット 22 土層堆積状況（東から）　SB01 ピット 28 土層堆積状況（西から）　SB01 ピット 15 完掘状況（北東から）
図版 128　SB01 ピット 37 完掘状況（南から）　ピット 21 完掘状況（北から）　ピット 11 完掘状況（北東から）
図版 129　ピット 27 土層堆積状況（西から）　墨書礫（第 100 図 3）出土状況　調査風景
図版 130　3 トレンチ土層堆積状況（北から）　4 トレンチ土層堆積状況（東から）　2 トレンチ土層堆積状況（東から）
図版 131　完掘状況（北西から）　出土遺物

藤廻遺跡

図版 132　盛土状遺構表土除去状況（北西から）　盛土状遺構（西側）土層堆積状況（西から）　盛土状遺構（東側）土層堆積状況（西から）
図版 133　盛土状遺構（南側）土層堆積状況（南から）　盛土状遺構（北側）土層堆積状況（西から）　盛土状遺構 2 層除去状況（北から）
図版 134　盛土状遺構旧表土上面検出状況（西から）　完掘状況（南から）　SD01 土層堆積状況（西から）
図版 135　柱穴完掘状況（西から）　調査風景（北から）　出土遺物（外面・内面）

石台Ⅱ遺跡

図版 136　調査前状況(東から)　矢板打設状況(北から)　東壁土層堆積状況（西から）
図版 137　完掘状況（南から）　完掘状況（西から）　土層堆積状況（北西から）
図版 138　調査風景　出土遺物

貝先遺跡

図版 139　空撮写真（東から）　堀立柱建物跡　SX01　出土遺物 1 ～ 3

長池Ⅰ遺跡・番貫Ⅰ遺跡

図版 140　番貫Ⅰ遺跡空撮写真　番貫Ⅰ遺跡出土遺物 1・2　番貫Ⅰ遺跡出土鉄器　番貫Ⅰ遺跡出土石器　番貫Ⅰ・長池Ⅰ遺跡出土石器

表目次

表 1　周辺の遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
表 2　山辺遺跡出土中世遺物集計表・・・・・・・・・ 147
表 3　米坂古墳群出土経石一覧表・・・・・・・・・・ 151
表 4　山辺遺跡鋳造炉関係遺物観察表・・・・・・・・ 152
表 5　山辺遺跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・ 154
表 6　鞍切遺跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・ 161
表 7　米坂古墳群出土遺物観察表・・・・・・・・・・ 164
表 8　米坂古墳群石製品（石仏・五輪塔・宝篋印塔）観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
表 9　米坂遺跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・ 167
表 10　客戸遺跡出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 168
表 11　石台Ⅱ遺跡出土遺物観察表 ・・・・・・・・・ 168
表 12　貝先遺跡出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 169
表 13　番貫Ⅰ遺跡・長池Ⅰ遺跡出土出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170

第 1 章　調査の経緯と経過

第 1 節　調査に至る経緯

松江市は風光明媚な宍道湖をはじめとした、水都として全国に知られている都市である。しかし、松江市街地は宍道湖から流れ出る大橋川などに市街地を南北に分断され、限られた数の橋に車両が殺到し、通勤通学時間や道路の凍結が多い冬季には、市街地を中心に大渋滞に見舞われ、緊急車両の安全な通行も妨げられるなど、住民生活に支障を来してきた。

そこで、昭和 62 年に松江市総合交通体系調査で都市機能の強化や渋滞の緩和などを主目的とする東循環道路として国道 485 号道路（松江第五大橋道路）の位置づけがなされた。本道路は、平成 7 年に「松江第五大橋 (仮称) 計画検討委員会」が設置されて本格的な取り組みが始まり、6 回あまりの検討会を経て平成 11 年に基本ルートが発表された。

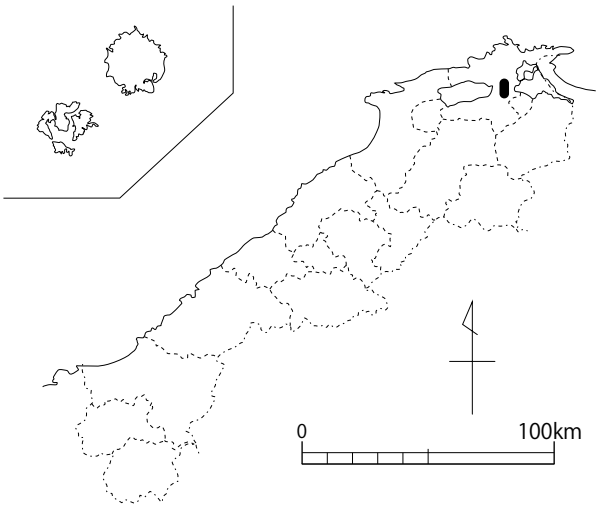
現在、松江市下東川津町の国道 431 号川津バイパスと同市東津田町の国道 9 号松江道路をつなぐ、延長 5.2km の地域高規格道路として平成 24 年度の供用開始を目指して整備が進められている。

埋蔵文化財については、平成 12 年 2 月 4 日付けで島根県土木部から遺跡の分布状況について照会があり、同年 2 月 28 日から 3 月 10 日にかけて島根県教育委員会が現地踏査を実施した。調査結果については、道路予定地周辺に 50 あまりの遺跡の存在が明らかとなり、平成 13 年 4 月 11 日付けで県土木部に対し回答した。

この結果に基づき、同年 9 月に県土木部と県教育委員会・松江市教育委員会の三者による協議を行い、道路予定地に関わる 18 の遺跡が調査対象となった。

その後、地元説明会や都市計画決定の準備が進められ、平成 15 年 9 月には整備区間として指定され、新規事業として採択された。平成 17 年 3 月 1 日付けで県土木部から文化財保護法第 57 条の 3 第 1 項に基づく手続きがなされ、平成 17 年度から県教育委員会により発掘調査を開始した。

その後の随時協議が行われ、下東川津町の千原遺跡は道路予定地から外れることが明らかとなったため、調査対象地から除外した。また、西尾インターチェンジへのアクセス道路予定地内の鞍切遺跡と大橋川橋南部で確認された石台Ⅱ遺跡と、設計変更により調査対象となった和久羅トンネル北側坑口に所在する一の谷遺跡については文化財保護法上の手続きが行われ、3 カ所が調査対象遺跡として追加され、発掘調査の年次計画に組み込まれ、順次発掘調査を行うこととなった。



第 1 図　事業の位置

第 2 節　調査の経過

（1）平成 17 年度（2005 年度）

5 月から 12 月かけて松江市東津田町所在の南外古墳群と勝負遺跡の調査を行った。南外古墳群のうち調査が行われた南外 2 号墳では一辺が約 12m の方墳であった。勝負遺跡

では縄文時代後期の住居跡や土坑、弥生時代や古墳時代の住居跡が調査されている。

また、同市西尾町の観音山古墳群のうち一部の発掘調査を 12 月に行った。発掘調査の結果、遺構や遺物が見つからず、事業範囲にかかる遺跡内には遺構や遺物の密度が薄いと判断されたため、全面を対象とした発掘調査を行わないこととなった。

（2）平成 18 年度（2006 年度）

前年度発掘調査を行った、南外古墳群と勝負遺跡の発掘調査報告書の作成と刊行と西尾町の山辺遺跡の発掘調査を行った。

西尾町の山辺遺跡では、遺跡の一部を対象に発掘調査を行った。調査の結果、丘陵の北側斜面に鉄滓が出土する土坑が存在することが判明し、次年度の発掘調査位置を丘陵の北側斜面に設定した。

（3）平成 19 年度（2007 年度）

山辺遺跡は 8 月からⅣ区の調査を行った。詳細については、第 3 章で記述するが、黒曜石製の石器が出土する遺構を確認している。また、Ⅰ区とⅡ区として丘陵の南側の発掘調査を行っている。Ⅰ区とⅡ区からは近世以降の遺物が出土している。山辺遺跡の発掘調査は次年度も続くため、丘陵の北側裾を一部発掘調査したところ、埴輪片が出土した。

また、大橋川近くで梅面遺跡の発掘調査も 5 月と 9 月に行った。調査の結果、遺構や遺物は確認できず、事業範囲内の遺跡内には遺物や遺構は少ないことが想定されたため、さらなる調査は行わないこととなった。

また、同町米坂遺跡でも一部の発掘調査を行った。調査の結果、遺跡の大部分を占める谷の中心部は和久羅山からの土石流が厚く堆積しており、遺構や遺物の痕跡は残っていなかったが、谷の東斜面については、以前の松江市文化振興財団の発掘調査により遺構や遺物が確認されているため、次年度も引き続き発掘調査を行うことになった。

12 月には平成 17 年度に発掘調査を実施した南外 2 号墳と勝負遺跡の発掘調査報告書が刊行された。

（4）平成 20 年度（2008 年度）

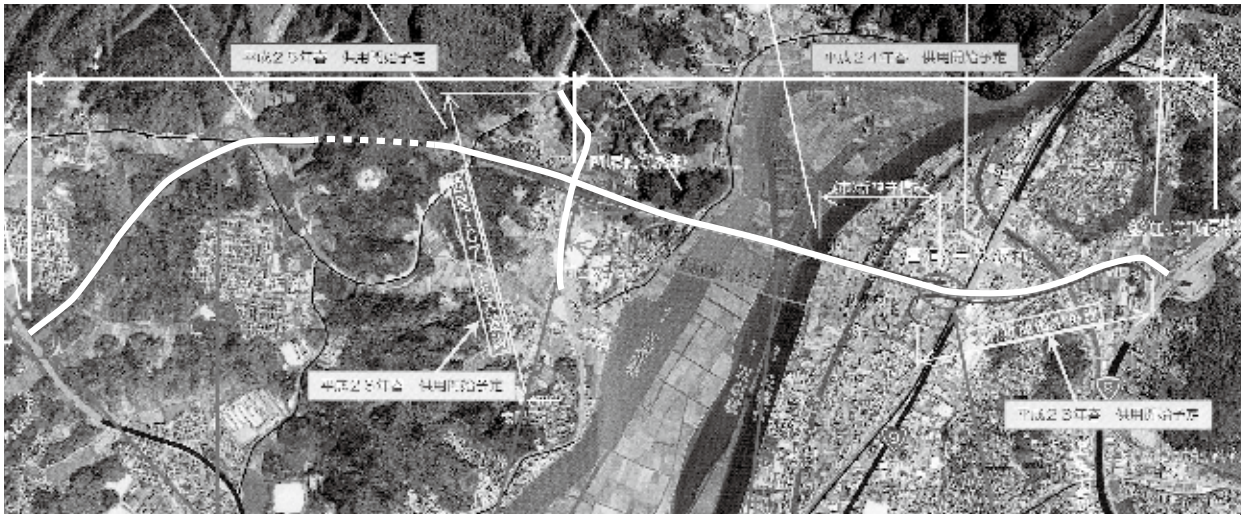
平成 20 年度は西尾町と東津田町の発掘調査を行った。

西尾町では、4 月から客戸遺跡や鞍切遺跡の発掘調査が開始した。客戸遺跡では遺跡の縁辺の調査を行ったが、遺構は確認できなかった。鞍切遺跡では埴輪の伴う古墳 2 基や、大刀が副葬された方墳 1 基、近世の街道などを発掘した。

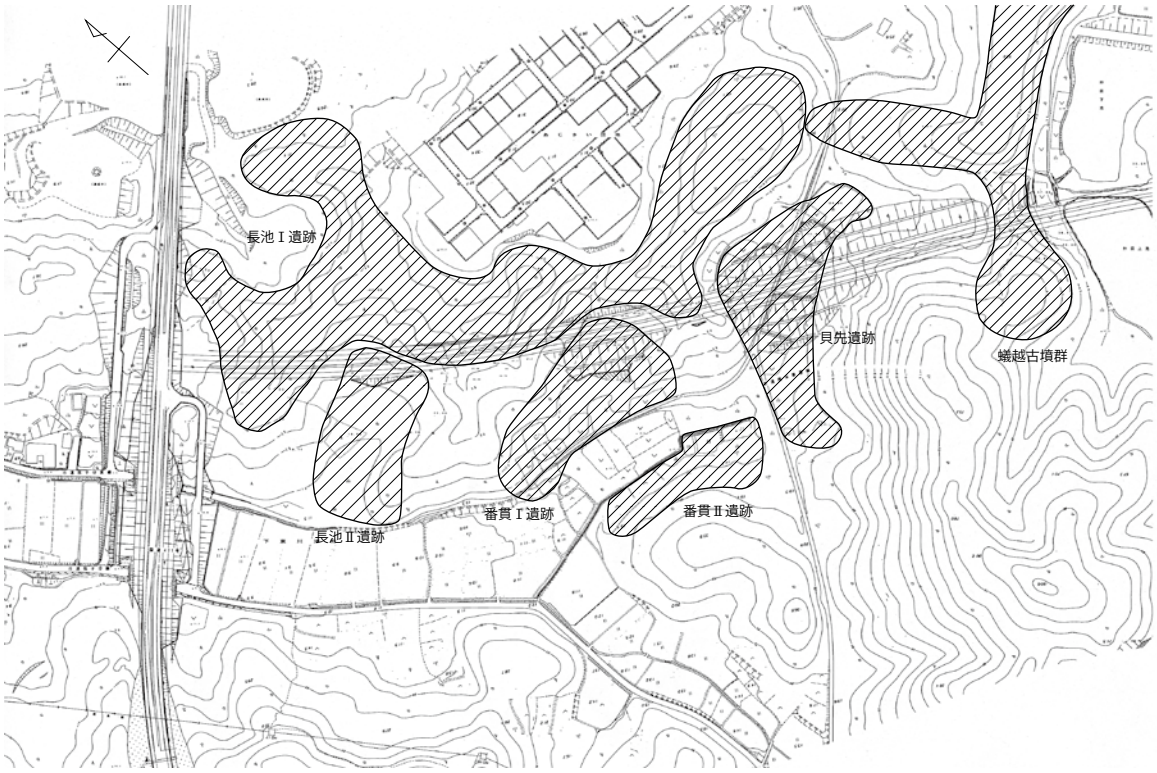
同町の山辺遺跡では 4 月から発掘調査を開始した。前年度調査を行ったⅣ区の上方にⅢ区を、下方にⅤ区を設定し、調査を行った。発掘調査の結果、Ⅲ区では鋳造炉の廃棄土坑や建物跡、Ⅴ区では、木枠を組んだ遺構や多量の輸入陶磁器を確認している。

さらに同町の米坂遺跡と米坂古墳群では、農道の迂回路建設のため、発掘調査を実施した。米坂遺跡では 10 月から、米坂古墳群では平成 21 年 3 月に発掘調査が行われ、米坂遺跡では古墳時代の遺構や遺物が、米坂古墳群では時期不明の溝跡と柱穴が確認されている。

同町の中坪遺跡では 10 月から遺跡の一部を対象に発掘調査を行った。その結果、現地表面である水田面の下には、遺物包含層はなく、遺構も確認できなかった。発掘調査の結果から、事業範



第 2 図　事業の工事範囲 (『松江第五大橋道路だより』Vol.20 の一部に加筆)

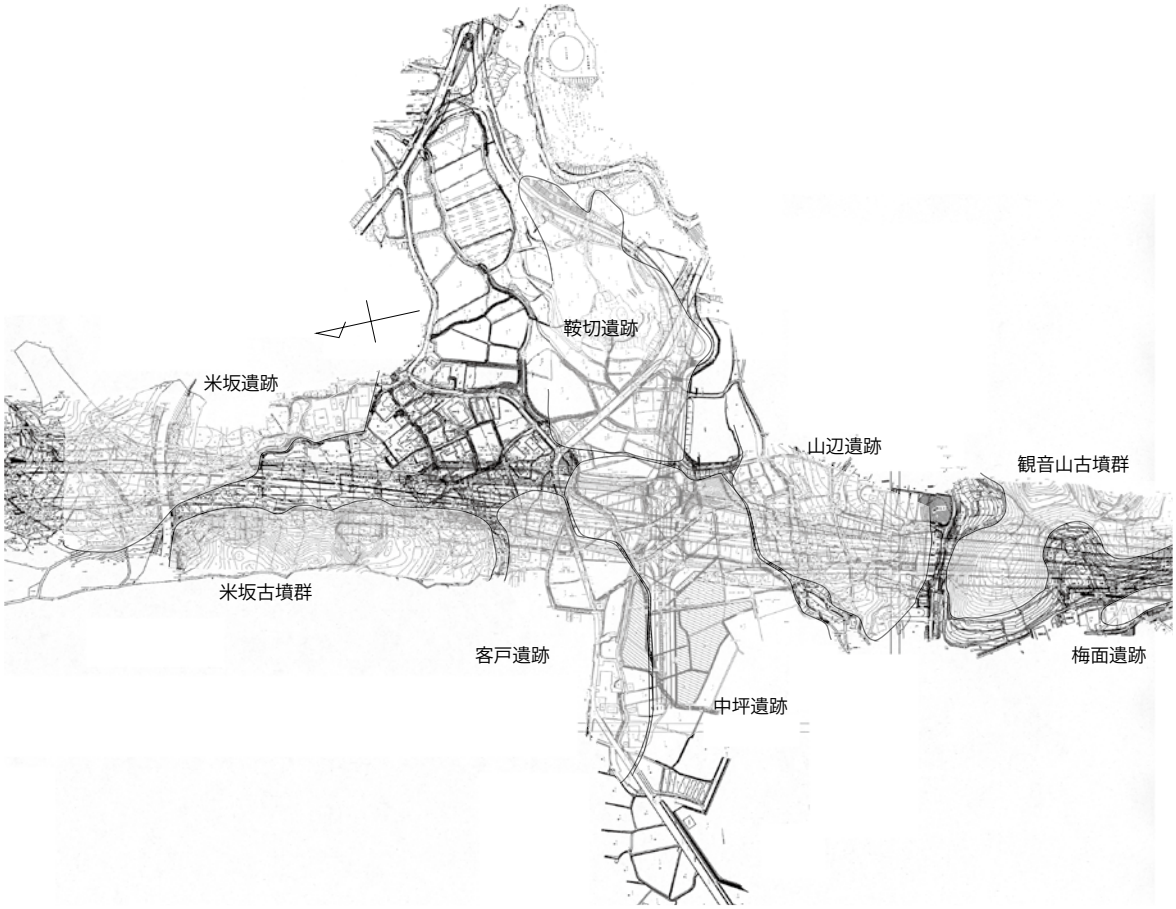


第 3 図　遺跡の位置（松江市下東川津地域）

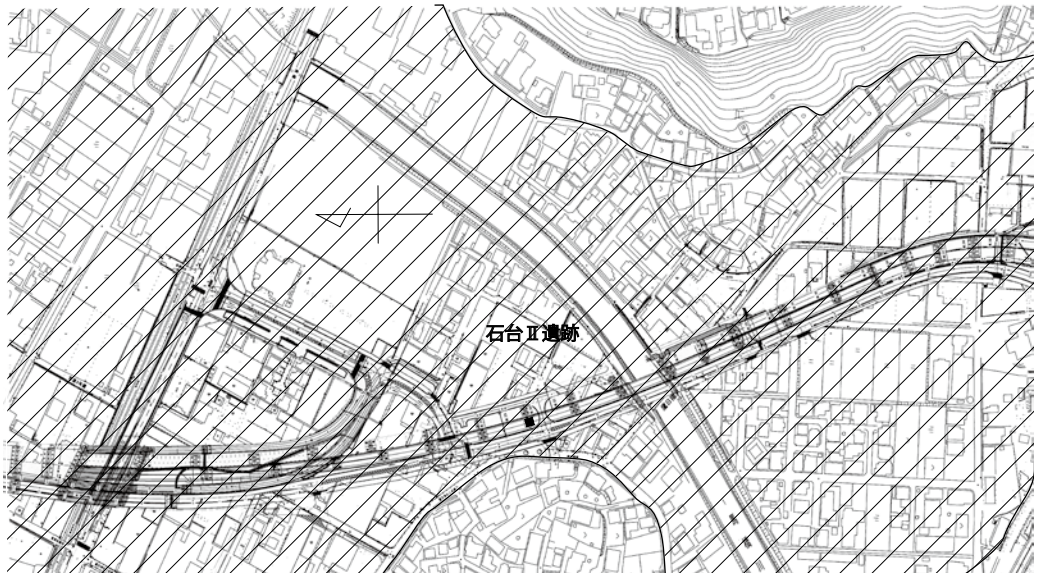
囲内の中坪遺跡は、遺構や遺物の密度が非常に薄いと判断されたため、さらなる発掘調査は必要ないと判断した。

平成 21 年 2 月には東津田町の石台Ⅱ遺跡で橋梁工事部分の発掘調査を行った。調査地は湧水が多い場所で、非常に狭く、また過去の調査事例から遺物包含層は現地表面から数 m 下方に存在すると推定されたため、調査前に矢板を打設し、打設後に遺物包含層までを重機により掘削し、遺物包含層を人力により発掘調査を行った。発掘現場は軟質の土壌であり、また調査区が狭小であったため、非常に困難を極めたが、弥生土器や中世の陶器が出土した。

9 月 6 日には西尾町の鞍切遺跡で地元向けに遺跡説明会を開催した。15 人程の参加があり、鞍切遺跡の古墳や出土した埴輪を見学していただいた 11 月 24 日には鞍切遺跡の現地説明会を開催し、新聞発表もあり約 50 人の参加者があった。



第 4 図　遺跡の位置（松江市西尾町地域）



第 5 図　遺跡の位置（松江市東津田町地域）

鞍切遺跡では、埴輪の伴う方墳が確認されたため、島根大学（当時）の渡邊貞幸氏の指導を 7 月 25 日に現地で受け、2 区の 4 号墳の指導を 11 月 14 日に受けた。また、また 10 月 24 日には同遺跡の近世の街道跡の指導を得るため、島根大学の大橋泰夫氏の指導を受けた。

（5）平成 21 年度（2009 年度）

引き続き、西尾町では米坂古墳群と客戸遺跡の発掘調査が、上東川津町では一の谷遺跡や藤廻遺跡、仲田遺跡、蟻越遺跡、下東川津町では貝先遺跡や番貫Ⅰ遺跡、番貫Ⅱ遺跡、長池Ⅰ遺跡、長池Ⅱ遺跡の発掘調査を行った。

発掘調査は 5 月に長池Ⅰ遺跡から開始された。上東川津町と下東川津町の遺跡については、事業行程の関係で、下東川津の長池Ⅰ遺跡から長池Ⅱ遺跡へ、さらに番貫Ⅰ遺跡から番貫Ⅱ遺跡へと、東に向かって発掘調査を進行していった。

米坂古墳群では、基壇の伴う中世の墓が確認され、墓からは蔵骨器が出土し、経石も伴うことが確認された。調査の内容について記者発表を行い、11 月 15 日に現地説明会を開催した。説明会には約 70 人の参加者があった。客戸遺跡では近世の建物跡が確認された。地鎮に関係すると思われる墨書された礫が 2 点出土している。

1 月に米坂古墳群の発掘調査が終了し、西尾町での本事業にかかる発掘調査はすべて終了した。

発掘調査に伴い、米坂古墳群の中世墓の調査方法等の指導を得るために 10 月 12 日に立正大学の池上　悟氏、10 月 21 日には (財) 元興寺文化財研究所の狭川真一氏の指導を受けている。10 月 23 日には、中世墓から出土した古瀬戸の浮遊環付仏花瓶の指導を、愛知学院大学において藤澤良祐氏より受けた。また、貝先遺跡の遺構の指導のために島根大学名誉教授の田中義昭氏と井上寛司氏に指導を受けた。貝先遺跡で出土した遺物については、10 月 19 日に国立歴史民俗資料館にて西本豊弘氏と住田雅和氏の指導を受けた。

（6）平成 22 年度（2010 年度）

現地調査は、4 月から上東川津町の藤廻遺跡の発掘調査を開始した。調査の結果、盛土状の高まりと須恵器が出土している。平成 23 年 1 月には同町の草町遺跡で仮設道路設置のため工事立会を行った。遺構や遺物は確認されなかった。

6 月から本格的な報告書作成にかかる整理作業に着手した。

出土遺物の分類は、主に平成 21 年度から 22 年度に行い、遺物の実測や遺構・遺物のトレース、編集等は主に 22 年度に行っている。トレースは基本的に PC 上で行っているが、染付の模様、石器等はアナログトレース後スキャニングし、配置している。

8 月 5 日と 27 日、9 月 27 日に、石塔の整理方法や分類、実測等の指導を得るため、八雲立つ風土記の丘の今岡利江氏の指導を受けている。同じく石塔の石材の同定について、三瓶自然館の中村唯史氏の指導を 11 月 16 日に受けた。また、山辺遺跡の鋳造炉の分類については、4 月 16 日に京都橘大学の五十川伸矢氏の指導を本センターで受けた。7 月 15 日には再度鋳造遺物の指導を得るため、10 数点の遺物を京都橘大学へ持参し、五十川氏に指導を受けた。7 月 15 日と 16 日には鋳造炉のまとまった調査事例は県内になかったため、鋳造炉の調査事例のある (財) 大阪文化財協会において、過去の調査で出土した遺物を実見し、同所属の伊藤幸司氏より鋳造遺物の指導を受けた。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

ここでは、まず発掘調査の対象となった道路建設事業にかかる地域の地理的環境について、簡単に述べたい。

事業地を南から見ていくと、東津田町では、大橋川南岸の安山岩を基盤とする台地となっている。そこから大橋川までは標高が低く平坦になり沖積地なっており、それは三角州性低地と呼ばれている。この沖積地に縄文時代～中世の石台Ⅱ遺跡は立地している。このあたりも深層の基盤層は安山岩である。

この沖積地の北には、一級河川の大橋川と、その北側の剣先川、さらに北側に朝酌川が並行して３本が東流している。この３つの川は中州となっている松崎島近辺で合流し、一端南へ蛇行し、矢田の渡し近辺で最も川幅が狭くなり、その後、東へ進み、中海大橋を経て、中海に流れ込む。西尾町や朝酌町の朝酌川左岸は、100m 以下の小起伏低丘陵と、和久羅山（標高 261m）と嵩山（標高 297m）の小起伏山地の間に沖積地の谷部が存在する。このあたりの小丘陵の多くは二つの山から派生している。

西尾町の松江市立女子高等学校の西側から北側にかけては若干広い沖積地が存在する。周囲を山に囲まれており、見通しは良くない。現在は水田であるが、調査の結果、以前は低湿地となっていたようである。この湿地は西谷地区まで奥深く続いている。また、このあたりで最も広い面積を持つ沖積地は西尾町の東 1km にある朝酌町の平野部である。この平野部は北東方向に広がり、嵩山の麓まで及んでいる。和久羅山と嵩山の南側で広い沖積地は、この２カ所であり、後述するが、これらの沖積地に遺跡が多数存在している。

和久羅山と嵩山は基盤層が安山岩系岩石のため非常に地滑りを起こしやすく、西谷地区は和久羅山の地滑り層の上に集落が営まれている。和久羅山で採取される安山岩の色調は淡い赤色で非常に軟らかいという特徴を持っている。

西尾町の北側 1km にある上東川津町は、和久羅山と嵩山から派生した丘陵と小起伏丘陵からなっており、その間を谷部が入り組んでいる。このうち、南外地区から中尾地区にかけてはひときわ大きな谷が広がり、そこに集落が点在している。そのうちの祖子分地区から南東に幅の狭い谷が延びており、水田として利用されている。小起伏丘陵にはあじさい団地と四季ヶ丘団地があり、ベットタウン化している。小起伏丘陵に存在する谷にはそれぞれ集落間を結ぶ小さな道があり、農作業道や通学路として利用されている。

第２節　周辺の遺跡

周辺で明確な旧石器時代の遺跡は明らかになっていない。

縄文時代になると、東津田地域には同じ第五大橋道路関連で発掘調査を行った勝負遺跡で、縄文時代後期の竪穴住居跡１棟や土坑が検出されている（注 2）。住居の平面形は方形で、残存している規模が 3.6m × 2.6m の住居で、床面の中心に炉を掘り込み、主柱穴を六角形状に配置している。住居内には土器や石器が多数出土している。住居の構造も検討できる資料である。また石台遺跡では縄文時代後期～晩期の土器や石器が多数出土している。遺構は炉跡の可能性がある集石遺構や、晩期の炭化米を伴う土坑などがみつかっている。同じく東津田町の石台Ⅱ遺跡では縄文

時代後期～晩期の土器や石器が出土している。西尾地域には本報告で記述する鞍切遺跡で落とし穴 3 基が検出されている。うち 1 基からは安山岩製のスクレイパーが 1 点出土している。その他に黒曜石製の石鏃も表土層から出土している。同じく本報告記載の山辺遺跡では、Ⅳ区で黒曜石製の石器が出土した落ち込み SX01 がある。これは楕円形の平面形で、壁面が緩やかになっており、竪穴住居跡の可能性もある。

弥生時代では、東津田町の勝負遺跡で弥生時代後期の竪穴住居跡が 9 棟発見されている。同じく石台遺跡でも弥生時代中期後半から後期初頭の竪穴住居跡が確認されている。周辺の春日遺跡や石台Ⅱ遺跡では弥生土器が出土している。しかし、西尾町周辺や上東川津町、下東川津町でも弥生時代の遺跡は今のところ発見されていない。

古墳時代になると遺跡数が増加する。古墳時代中期には西尾町を含む大橋川北岸地域に、県内最大規模の方墳である廟所古墳が築造される。廟所古墳の規模は最大で 70m にもなる可能性もあり、今後の調査研究の成果が待たれる。廟所古墳の南には 2 基の古墳からなる観音山古墳がある。1 号墳は全長 40m の方墳で、2 号墳は全長 38m の前方後円墳である。大橋川南岸では荒神畑古墳（1 辺 35m の方墳）、石屋古墳（一辺 42m の方墳）、井ノ奥 4 号墳（全長 57m の前方後円墳）が築かれるが、いずれも古墳時代中期と考えられる。このあたりから朝酌町大井では、この地方の須恵器の生産が始まり、奈良平安時代まで出雲を中心とする山陰地方に広く供給された。古墳時代中期から後期に西尾町の米坂古墳群では、30 基近い古墳が築造されている。遺跡の一部は松江市教育委員会によって発掘調査が行われている。隣接する米坂遺跡では、中期から後期の集落跡が確認されている。古墳時代後期には、大橋川北岸では、魚見塚古墳（全長 62m の前方後円墳）、朝酌岩屋古墳（規模不明、墳形不明）、南岸では手間古墳（全長 67m）や竹矢岩舟古墳（全長 50m の前方後方墳）というこの地方では大型の前方後円墳が築かれた。また終末期古墳として朝酌町に廻原 1 号墳のある廻原古墳群が存在する。30 基余りの古墳が分布していたと伝えられている。大橋川北岸には内部主体に石棺式石室を取り入れた朝酌小学校前古墳や朝酌小学校校庭古墳、九日宮古墳群、池ノ奥古墳群、イズキ山古墳群などが確認されている。朝酌町の遅倉横穴墓群には 5 穴の横穴墓が確認されている。

【本章の参考文献】

・島根県教育委員会 2008『恵谷古墳群・岩鼻古墳群・上講武殿山城跡・砥石遺跡・沢下遺跡・元宮遺跡』島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1

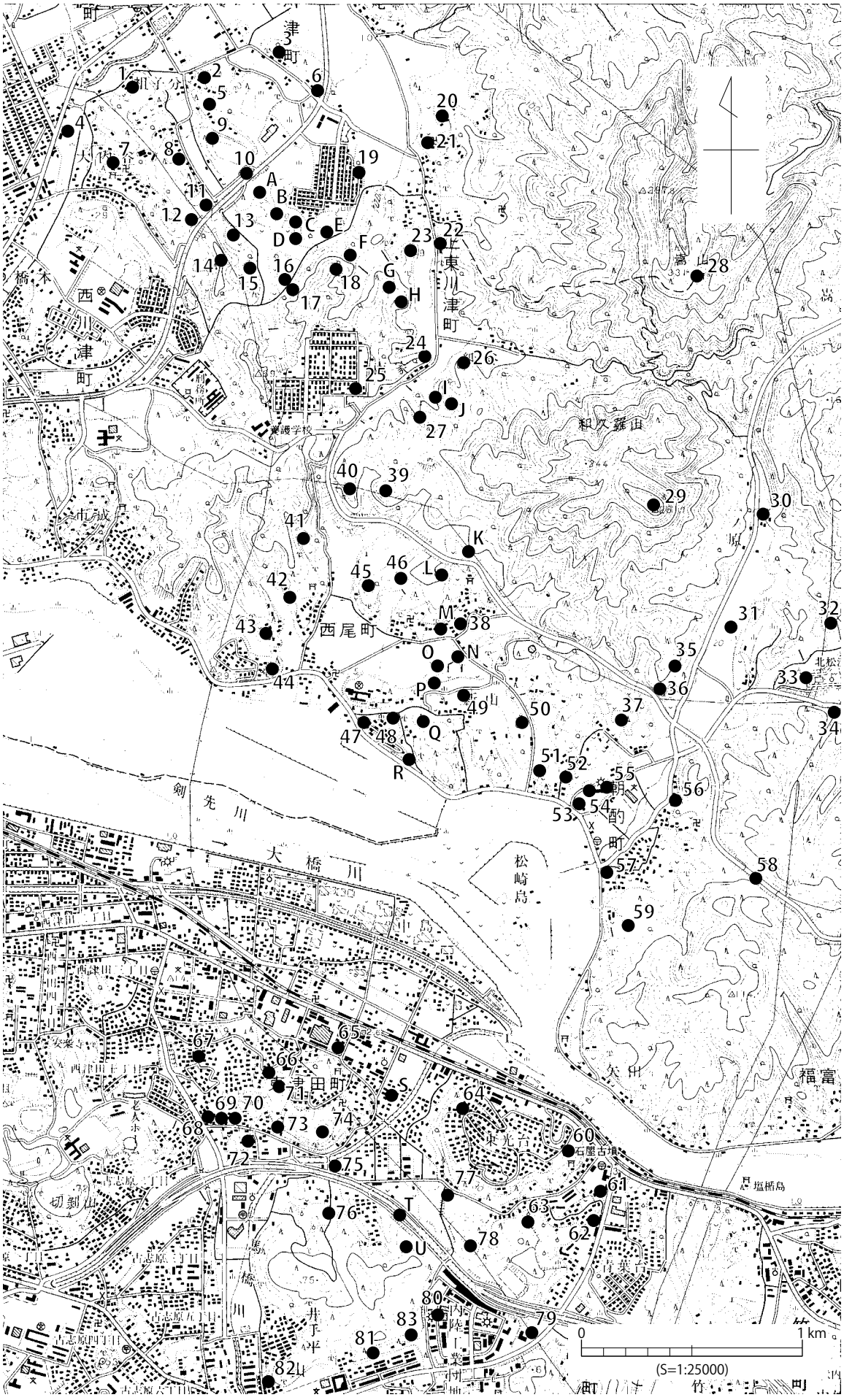
・島根県古代文化センター 2000『出雲国風土記の調査研究Ⅱ島根郡朝酌郷調査報告書』

・松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2009『石台Ⅱ遺跡』（都）東津田中央線事業に伴う発掘調査報告書

・島根県教育委員会 2007『南外 2 号墳・勝負遺跡』国道 485 号線改築事業（松江第五大橋）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I

・松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1999『西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

・島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター 2004『松江市東部における古墳の調査―廟所古墳・観音山古墳群・廻田古墳群―(附上竹矢 7 号墳・迎接寺裏山 1 号墳)』



第 6 図　周辺遺跡位置図（S＝1／25,000）

A	長池Ⅰ遺跡	1	貝崎古墳群	43	杵築尾遺跡
B	長池Ⅱ遺跡	2	前田古墳	44	志達山城跡
C	番貫Ⅰ遺跡	3	川津古墳群	45	城処城跡
D	番貫Ⅱ遺跡	4	西川津遺跡	46	垣遺跡
E	貝先遺跡	5	家の上古墳	47	南尾横穴墓
F	蟻越古墳群	6	八色谷古墳群	48	梅母遺跡
G	仲田遺跡	7	住吉神社裏古墳	49	廟所古墳
H	藤廻遺跡	8	坂口古墳	50	間谷遺跡
I	草町遺跡	9	井上古墳	51	松ヶ鼻遺跡
J	一の谷遺跡	10	祖子分長池古墳	52	新山遺跡
K	米坂遺跡	11	一の谷古墳	53	朝酌小学校前古墳
L	米坂古墳群	12	苅捨古墳	54	旧朝酌小学校前遺跡
M	客戸遺跡	13	長池Ⅲ遺跡	55	朝酌小学校校庭古墳
N	鞍切遺跡	14	川津城跡	56	朝酌上神社跡古墳群
O	中坪遺跡	15	後田Ⅰ遺跡	57	朝酌岩屋古墳
P	山辺遺跡	16	家ノ脇遺跡	58	岩汐峠遺跡
Q	観音山古墳群	17	後田Ⅱ遺跡	59	天井遺跡
R	梅面遺跡	18	千原遺跡	60	石屋古墳
S	石台Ⅱ遺跡	19	柴尾古墳群	61	保地遺跡
T	勝負遺跡	20	葉佐馬古墳	62	矢田団地付近遺跡
U	南外古墳群	21	西宗寺古墳	63	保地古墳群
		22	嵩山麓遺跡	64	東光台古墳群
		23	城山遺跡	65	鷹日神社前遺跡
		24	南下遺跡	66	伝兵衛山古墳
		25	巻遺跡	67	根屋古墳
		26	郷原遺跡	68	タルミⅡ遺跡
		27	節句谷遺跡	69	タルミⅣ遺跡
		28	布自枳美烽跡	70	タルミⅠ遺跡
		29	和久羅山城跡	71	伝兵衛山古墓
		30	朝酌荒神谷遺跡	72	タルミⅢ遺跡
		31	鈩田遺跡	73	舟津田遺跡
		32	三大寺遺跡	74	高杉古墳群
		33	薦沢A遺跡	75	石台遺跡
		34	薦沢野山遺跡	76	上谷古墳群
		35	九日宮古墳群	77	須原池遺跡
		36	遅倉横穴群	78	須原遺跡
		37	廻原古墳群	79	寺山小田遺跡
		38	草切遺跡	80	来美墳丘墓
		39	二保山城跡	81	来美廃寺
		40	稲葉城跡	82	井出平山古墳群
		41	高庭谷遺跡	83	来美東遺跡
		42	小廻石塔遺跡		

表１　周辺の遺跡一覧

第３章　発掘調査の成果

第１節　山辺遺跡

（１）調査の方法

山辺遺跡は分布調査の結果から、古墳時代や中世の遺跡ではないかと推定されていた。仮に調査区から新たな古墳の存在が確認されれば、同一丘陵に存在する廟所古墳との関係もうかがわれるため、破壊された古墳の存在も考慮した上で調査を進めた。

発掘調査は、表土（耕作土）を重機によって掘削した後に、遺物包含層を人力によって掘り進めた。人力で掘り進める中で、各層の上面や、任意の面で精査を行い遺構の検出に努めた。

Ｖ区は、調査区の立地する地形が丘陵の斜面から裾部へ変化する地点であり、また遺物も多数出土することが予想されたことから、調査区を４分割し遺物の取り上げに注意を払い調査を進めた。

（２）層序

遺跡が所在する丘陵地は全体として後世に大きく改変を受けている。丘陵の南側は宅地と放牧場に利用され、丘陵状と北側斜面は造成して茶畑に利用されている。当該丘陵地は江戸期から茶畑として利用されているのは知られているが、昭和 40 年代には重機により造成がなされ、大規模な茶畑へと改変されている。よって、丘陵上を中心に表土層は造成土の堆積が見られた。

Ⅰ区は、斜面下側で 2m ほどの盛土があり、旧地形は急斜面であったようであり、遺物も近世以降の陶磁器が中心であった。第１層からは 18 世紀中頃から現代までの陶磁器などが出土し、第２層からは 19 世紀代の地元窯産を中心とする陶器が出土している。Ⅰ区の中心部は荒神様として祀られていた大木があり、周囲は竹林となっていた。また、Ⅰ区の西側の用地外には石祠があり、現在も屋敷神として祀られている。

Ⅱ区は、過去に放牧場として利用されていた場所で、第３層が地山で、その上層の第１層と２層は客土層と、牛糞混じりの耕作土層であった。第２層から近世以降の陶磁器に混じって黒曜石製の石鏃が１点出土している。

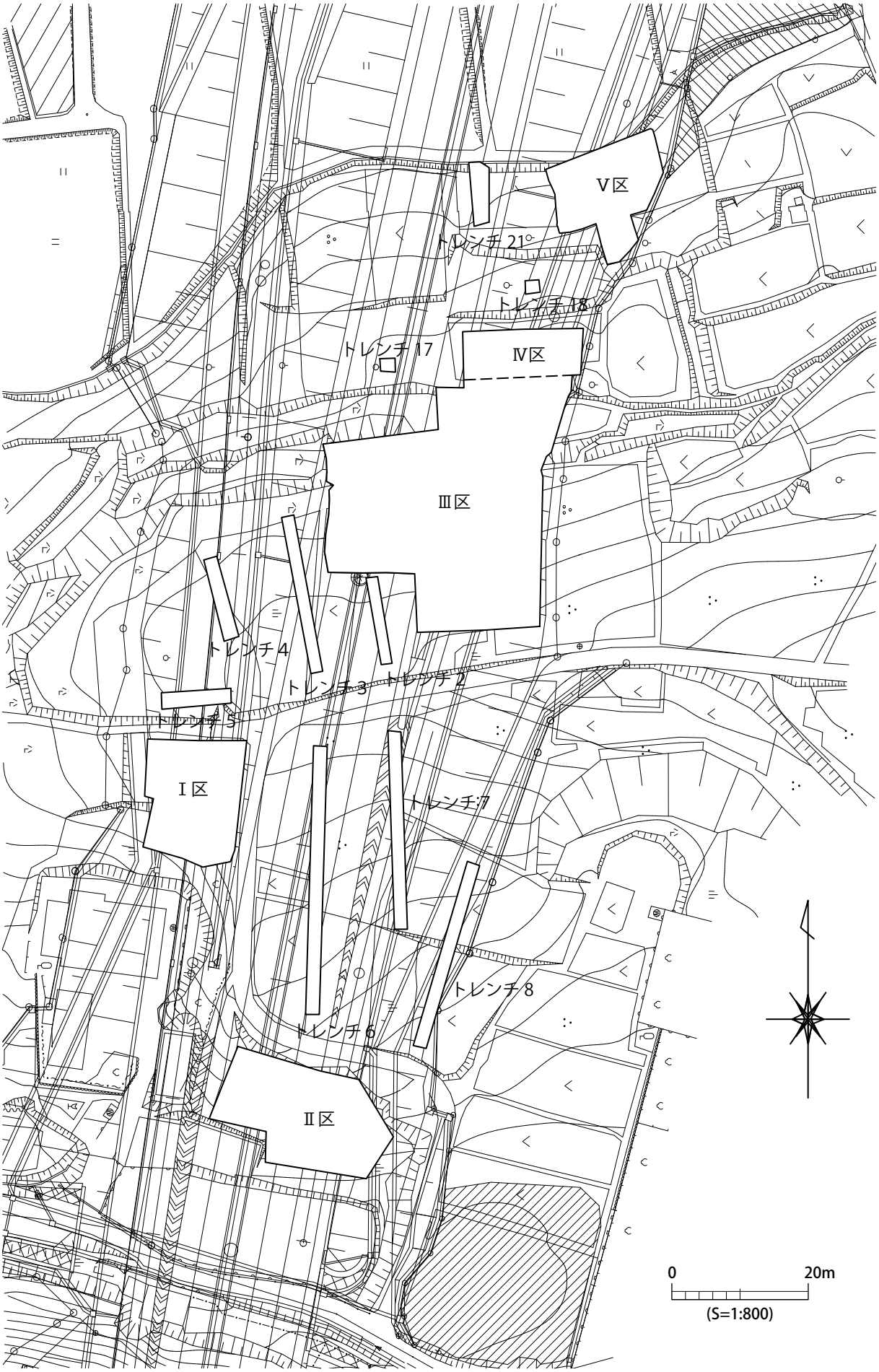
Ⅲ区は、以前茶畑と野菜畑として利用されていたが、昭和 40 年代に茶畑整地のために大きく改変され、緩斜面となっていた。調査区東壁での層序は、第１層は客土であり、第２層は耕作土、第３層は地山であった。したがって、遺構の検出面は３層上面で、遺構の埋土以外で遺物包含層は確認できなかった。

Ⅳ区は、第１層は耕作土で、遺物は第３層である淡茶褐色土層の上面で黒曜石の剥片が出土している。第４層は地山層である。

Ｖ区は、丘陵の北側裾部で柿畑として利用されていたが、柿畑に利用される前は水田であったようで、この水田面を埋めて、畑地を作り出していたようである。第５層は地山面であるが、北側の平野部へ向かって急激に落ち込んでいる。第１層と２層には近世以降の遺物が含まれていたので、造成されたのは、さらにそれ以降である。

（３）遺構

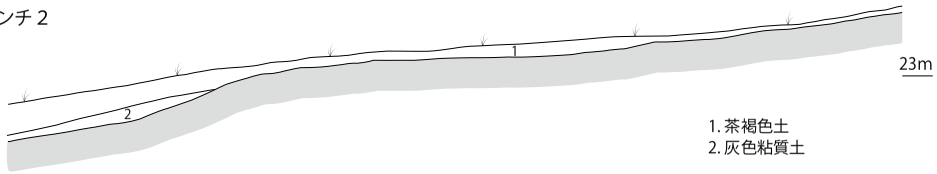
Ⅰ区は、旧地形が急斜面であり、遺構は確認できなかった。



第 7 図　山辺遺跡　調査区位置図（S=1/800）

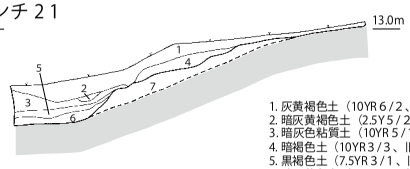
第８図　山辺遺跡　トレンチ土層図（S=1/200）

トレンチ２



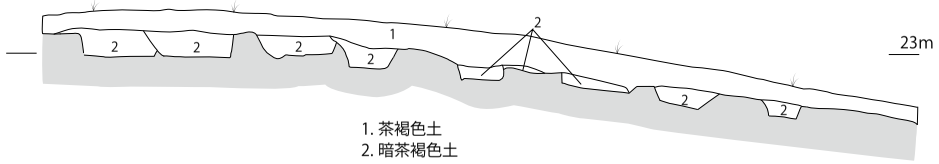
1. 茶褐色土
2. 灰色粘質土

トレンチ２１



1. 灰黄褐色土（10YR６/２、表土）
2. 暗灰黄褐色土（2.5Y５/２、暗渠）
3. 暗灰色粘質土（10YR５/１、旧耕作土）
4. 暗褐色土（10YR３/３、旧表土？）
5. 黒褐色土（7.5YR３/１、旧表土？）
6. 暗灰黄色土（2.5YR６/２）
7. 明褐色地山（7.5Y５/６）

トレンチ３

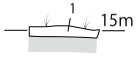


1. 茶褐色土
2. 暗茶褐色土

トレンチ１８

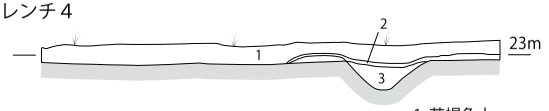
1. 黄灰色土
2. にぶい黄橙色土

トレンチ１７



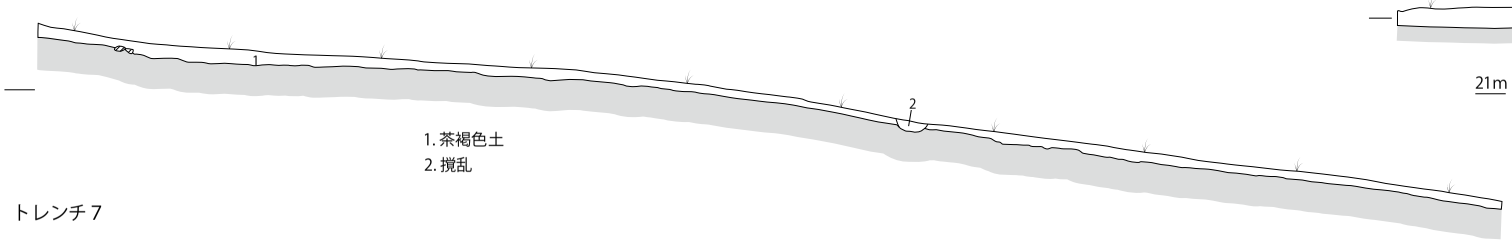
1. 暗灰黄色土

トレンチ４



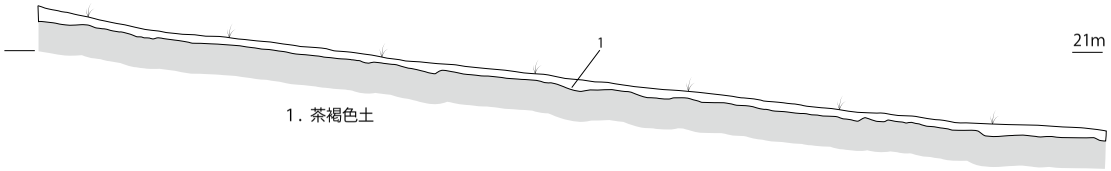
1. 茶褐色土
2. 灰色粘質土
3. 撹乱

トレンチ６



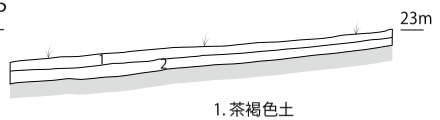
1. 茶褐色土
2. 撹乱

トレンチ７



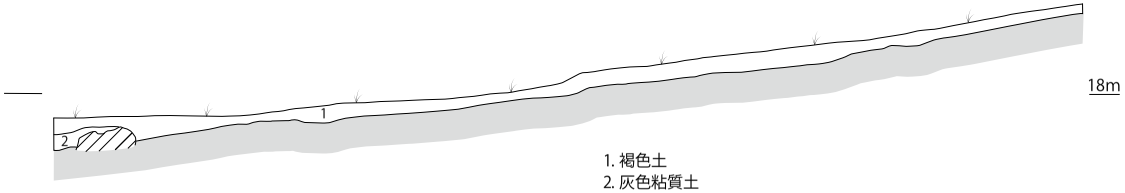
1．茶褐色土

トレンチ５



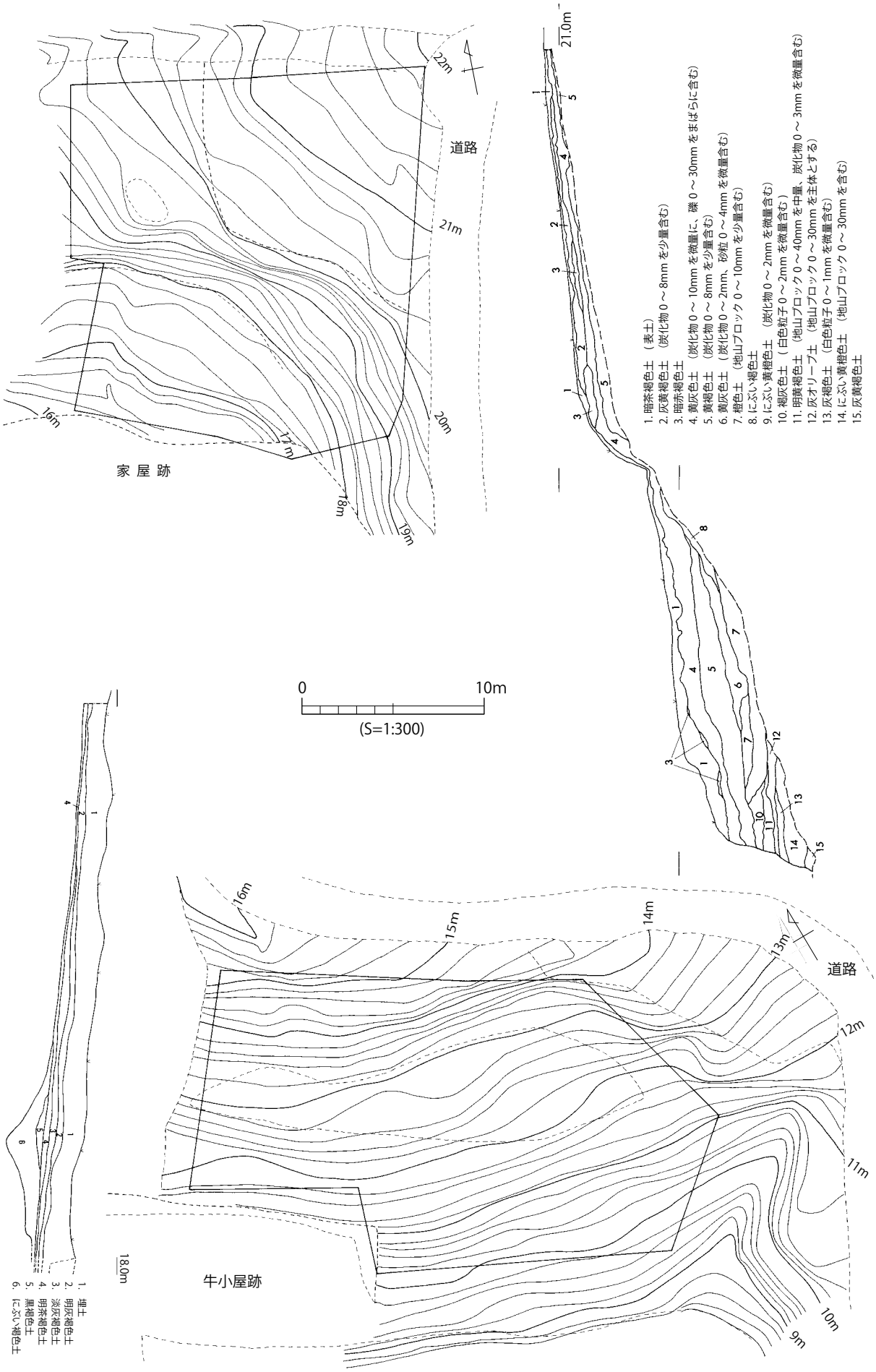
1. 茶褐色土
2. 灰色粘質土

トレンチ８



1. 褐色土
2. 灰色粘質土

(S=1:200)



第９図　山辺遺跡　Ⅰ・Ⅱ区　調査前測量図（S＝1/300）

Ⅱ区は、ピットが検出されているが、放牧場として利用され地形が大きく改変されているため時期が不明である。黒曜石の石鏃が 1 点出土している。

Ⅲ区は、遺構の検出は地山層である第 3 層である。上層の 1 層と 2 層は耕作土で、ほとんどの遺構は上部を削平されていると考えられる。しかし、削平されつつも 3 層を掘り込んだ土坑や溝状遺構、ピットが検出されている。

Ⅲ区の南東には SK01 が、その西側に SD01 ～ 03 とピットからなる段状遺構が検出された、SK01 からは大量の鋳造関連遺物が出土している。SK06 と SK07 は段状遺構の周囲で検出された遺構で、SK06 が焼土や炭化物が埋土から出土する土坑で、SK07 が非常に硬化した焼土面を伴う遺構である。

SK01（第 11 図）

Ⅲ区の南東側の緩斜面に掘り込まれた土坑で、共伴遺物から鋳造関連遺物の廃棄土坑と考えられる遺構である。この報告書では、SK01 として 1 基の土坑として名付けているが、遺構検出時には切り合い関係がある二つの土坑であると考えられていた。土層の観察では、二つの土坑により地山が掘り込まれている状況が見られたが、埋土の性質が均等で、二つの土坑として埋土を分離しづらい状況であり、SK01 を二つの土坑として捉えることが困難であったため、SK01 として一つの土坑としての名称を与えている。しかし、土坑底面と土層の観察では二つの土坑が存在すると考えられる。土層が分離できなかったのは、二つの土坑が開口している状態で、同時に埋められたためと考えられる。

SK01 の平面形は不定形で、大きさは A － A' ラインでおよそ 2.3m である。深さは最も深い地点で､約 0.6m であった。土坑の壁面は急激に立ち上がり､傾斜は急角度である。底面は平坦でなく、何カ所か凹面が形成されている。SK01 の埋土には鉄滓や鋳造炉の破片等の鋳造関連遺物が多量に出土している。鋳造炉の破片のうち、底面近くで出土する資料は比較的大型のものが多い。また、上層に炭化物と焼土塊が多く、下層では両者が少なくなる傾向が見られた。

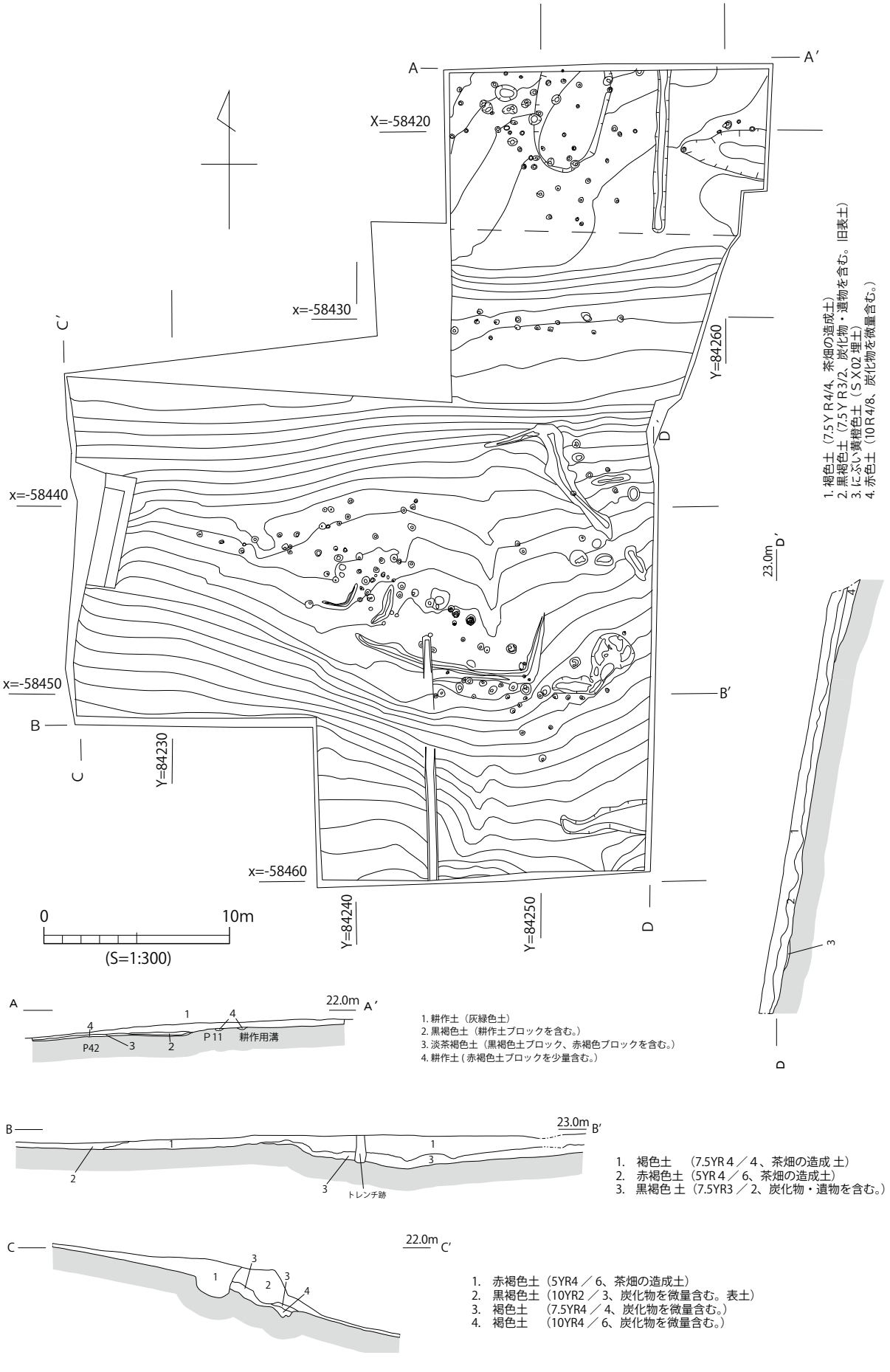
遺構の性格は、鋳造関連遺物の廃棄土坑である。しかし本来は、底面に凹凸がいくつかみられることから、鋳造炉を据えた鋳造土坑ではなく、粘土採掘坑であった可能性もある。

段状遺構（第 12 図）

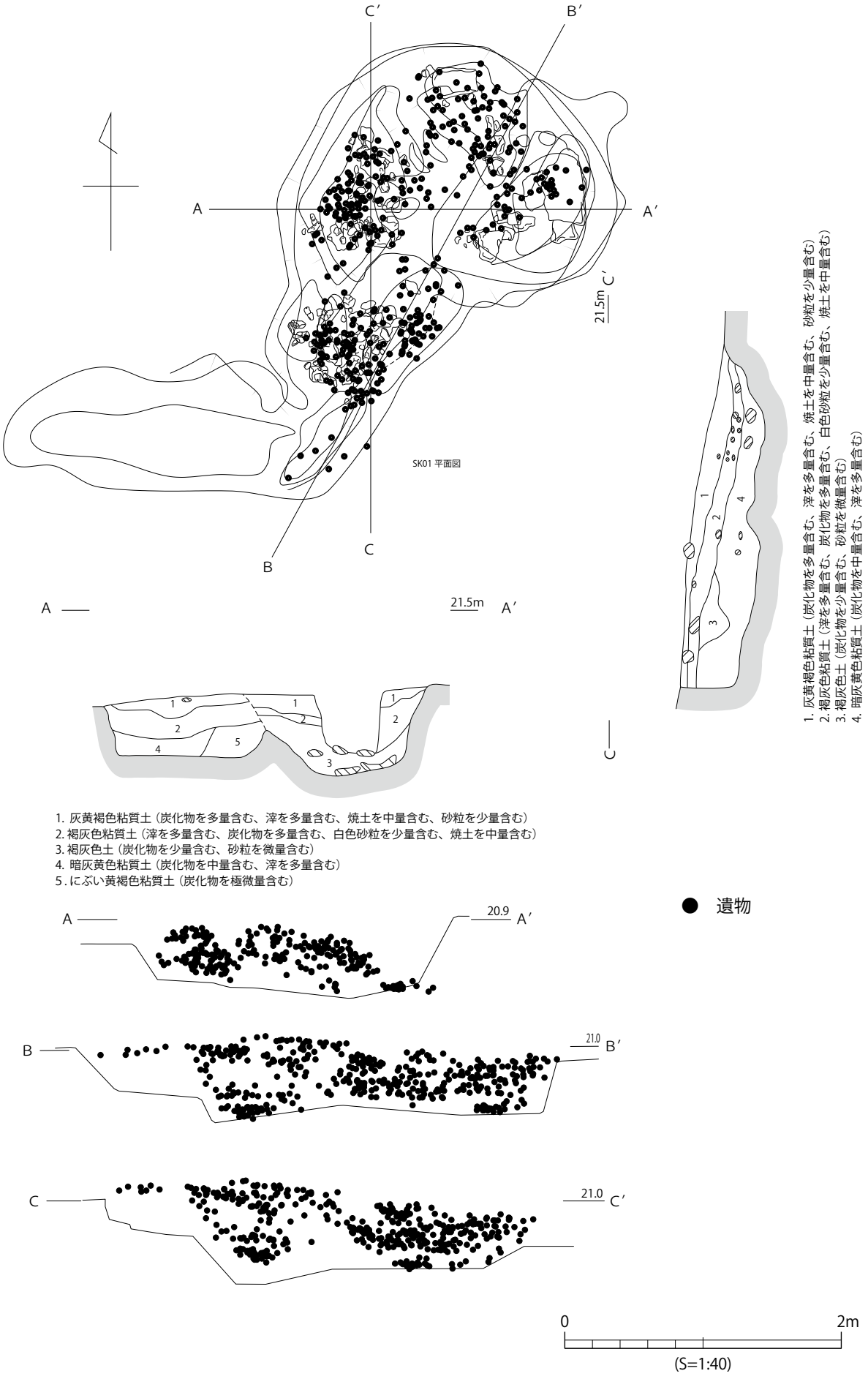
Ⅲ区の中央に位置し、3 条の溝状遺構（SD01 ～ SD03）と多数のピットからなる遺構である。この遺構は斜面を削りだして平坦面を造り出し、そこにピットを掘り込んで、建物を建てたと考えられる。3 条の溝状遺構のうち、最も規模の大きい SD01 は一番高所に掘られており、遺構の検出面から溝状遺構の底面までの深さが最大で 0.4m 残存していた。この SD01 を基準に、ピットを建物の柱穴と考えて建物跡が復元可能かどうか検討したが、建物と考えられるピットの並びは明らかにできなかった。この SD01 に接して、南の高所側でもまとまってピットが検出されており、何らかの関係があるものと思われる。

SD02 と SD03 は非常に遺存状況が悪く、屈曲部分を中心に残っているだけであった。この 2 条の溝状遺構の周囲には多数のピットが存在するが、ここでも 1 棟の建物として復元できるピットの並びは認められなかった。

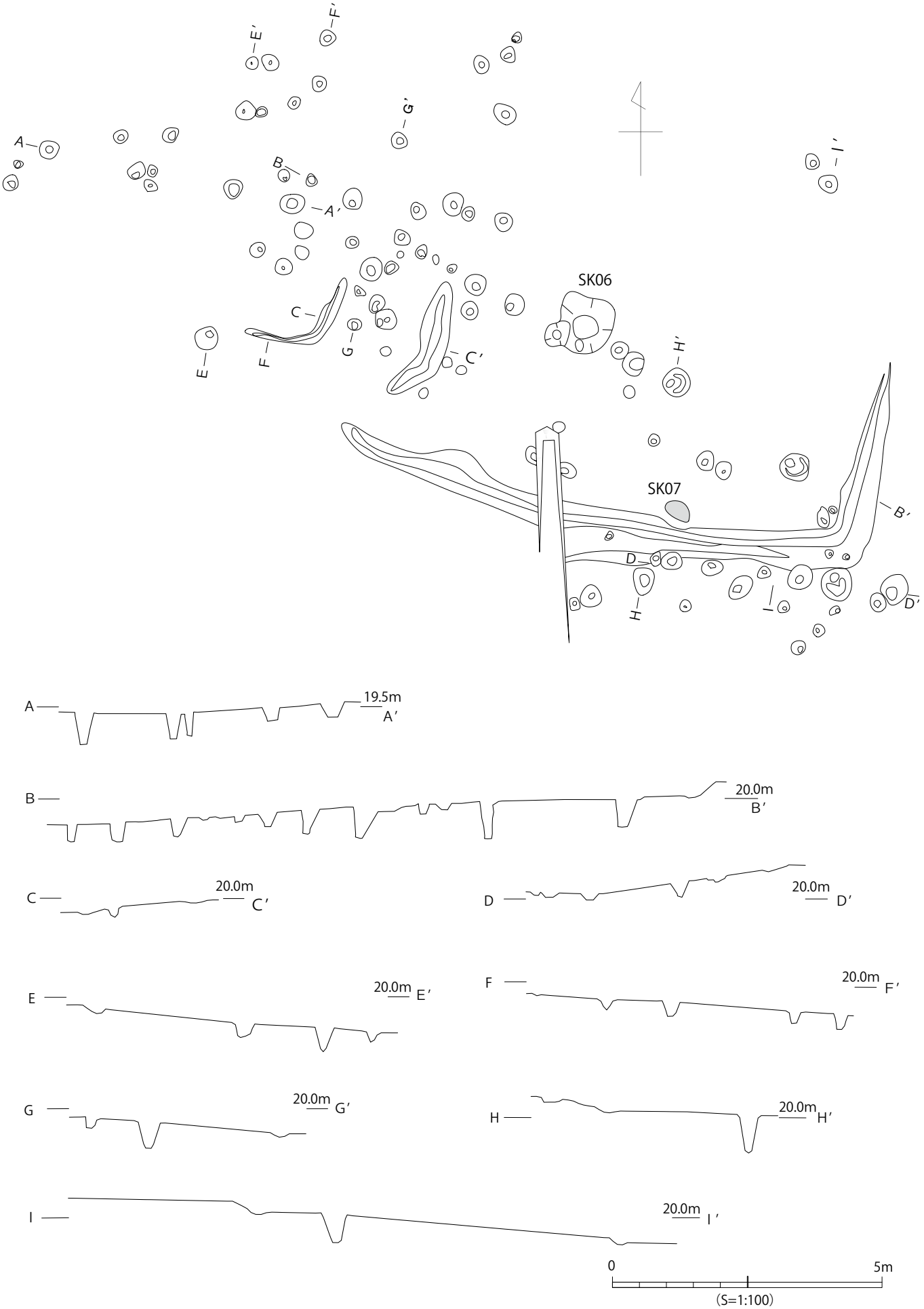
この段状遺構で確認された遺物は、SD01 やピットの埋土から出土した鉄滓や炉壁片のみであった。段状遺構との関係は不明ながら、段状遺構から斜面を下った地点で白磁（第 22 図 1）が 1 点



第 10 図　山辺遺跡　Ⅲ・Ⅳ区　遺構配置図（S＝1/300）



第 11 図　山辺遺跡　Ⅲ区　SK01 実測図（S＝1/40）



第 12 図　山辺遺跡　Ⅲ区　段状遺構実測図（S＝1/100）

出土している。段状遺構の年代を考える上で参考程度にはなるかもしれない。段状遺構で検出された鉄滓等が出土するピットは、SK01 との関係を検討する必要がある。

しかし、溝状遺構やピットの配置にまとまりが無く、遺構の時期も不明であり、全ての遺構が同時期に造られたものでは無いと考えている。SK01 や鋳造に関連する遺構の存在も考えられるが今回の発掘調査では明らかにすることはできなかった。

SK06（第 13 図）

SK06 は、段状遺構内に造られている土坑である。平面形はおよそ円形になると思われるが、遺構の西側がピット 40 で掘り込まれている。また土坑の底面にもピット 57 があり、SK06 と重なっている。SK06 の大きさは長軸が約 1.1 ｍで、短軸は約 1.0m である。埋土には焼土ブロックと炭化物が含まれていた。出土遺物はなく、遺構の年代も不明である。

SK07（第 13 図）

非常に硬化した面をもつ焼土面である。段状遺構で検出された SX01 に南側を削平されているが、本来円形の焼土面と思われる。焼土面の断面や平面の状態を観察すると、平面形は円形で、変色した硬化面が同心円状に広がっており、かなり高熱を浴びていた可能性が高い。共伴遺物はなく年代は不明である。

遺構の性格は不明であるが、非常に硬化した焼土面であること、同じⅢ区から多数の鋳造炉片が出土していることを考えると、SK07 に関係した焼土面であると考えることもできるが、今後の課題である。

Ⅳ区には、SX01 と SX02 の性格不明の遺構が検出された。SX01 は調査区の南側で、SX02 は東側で検出されている。

SX01（第 14 図）

SX01 はⅣ区の北壁近くで検出された遺構で、遺構の一部は調査区外に広がっている。遺構の平面形は小判型で、検出された規模は長軸約 5.4m、短軸約 3.4m である。遺構は非常に浅く、最も深いところで約 30㎝しか確認できなかった。SX01 内あるいは周囲には多数のピットが検出されており、またその一部は SX01 の壁面にあたる位置で確認されている。

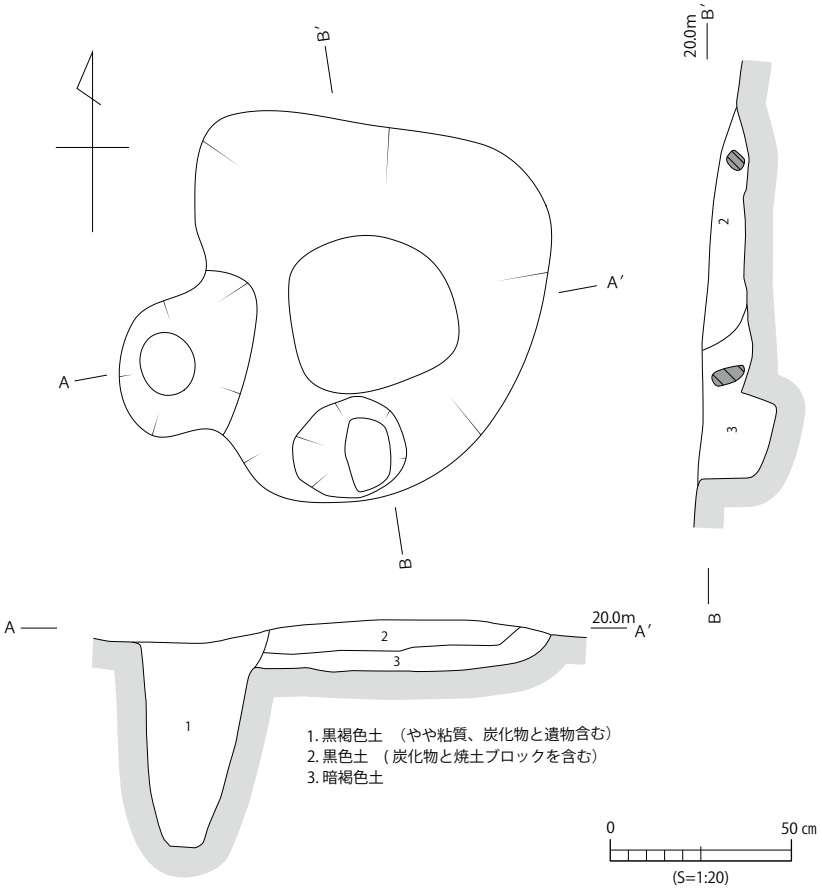
出土遺物は、黒曜石製の石鏃と石核のみであった。遺構の性格や時期は不明ながらも、黒曜石製の石器のみ出土している点、遺構の壁面にピットが検出されている点から、縄文時代の住居跡の可能性もあるのではないかと考えている。しかし、土器が出土しておらず、炉跡等も確認できなかった。今後の資料の増加を待ちたい。

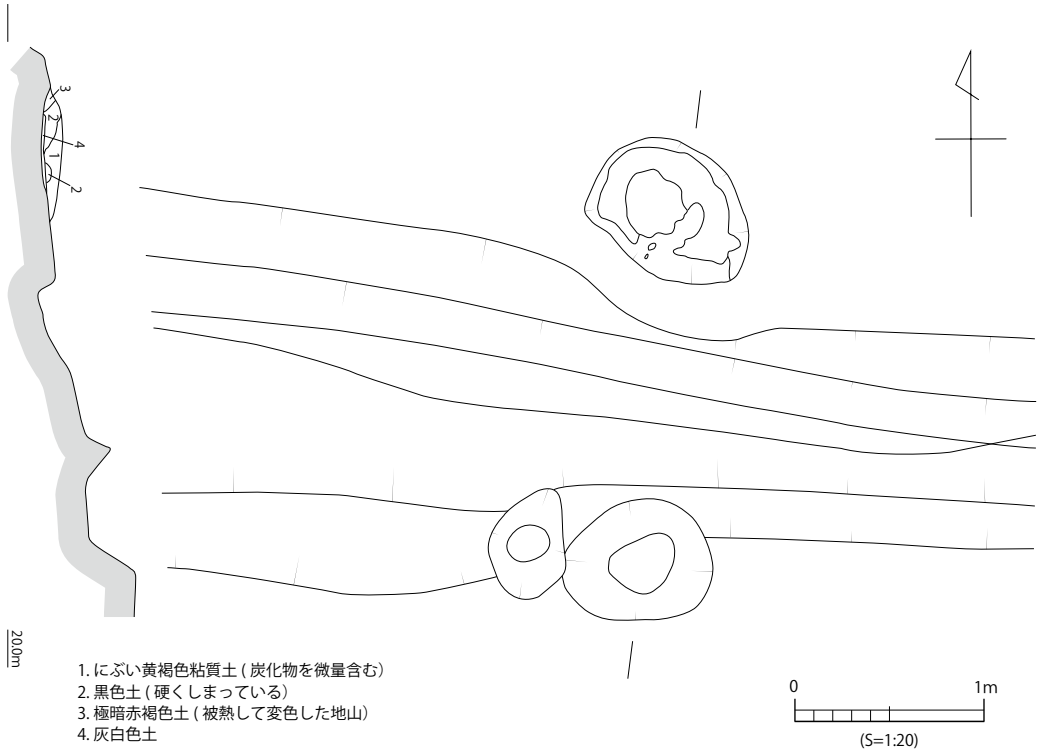
SX02（第 14 図）

Ⅳ区の東側で検出された遺構で、調査区外に遺構の一部が広がっている。SX01 よりさらに細長い遺構で、共伴する遺物もなかった。検出面の遺構の規模は、長軸約 4.7m、短軸約 2.7m、深さ約 0.5m であった。遺構の時期及び遺構は不明である。

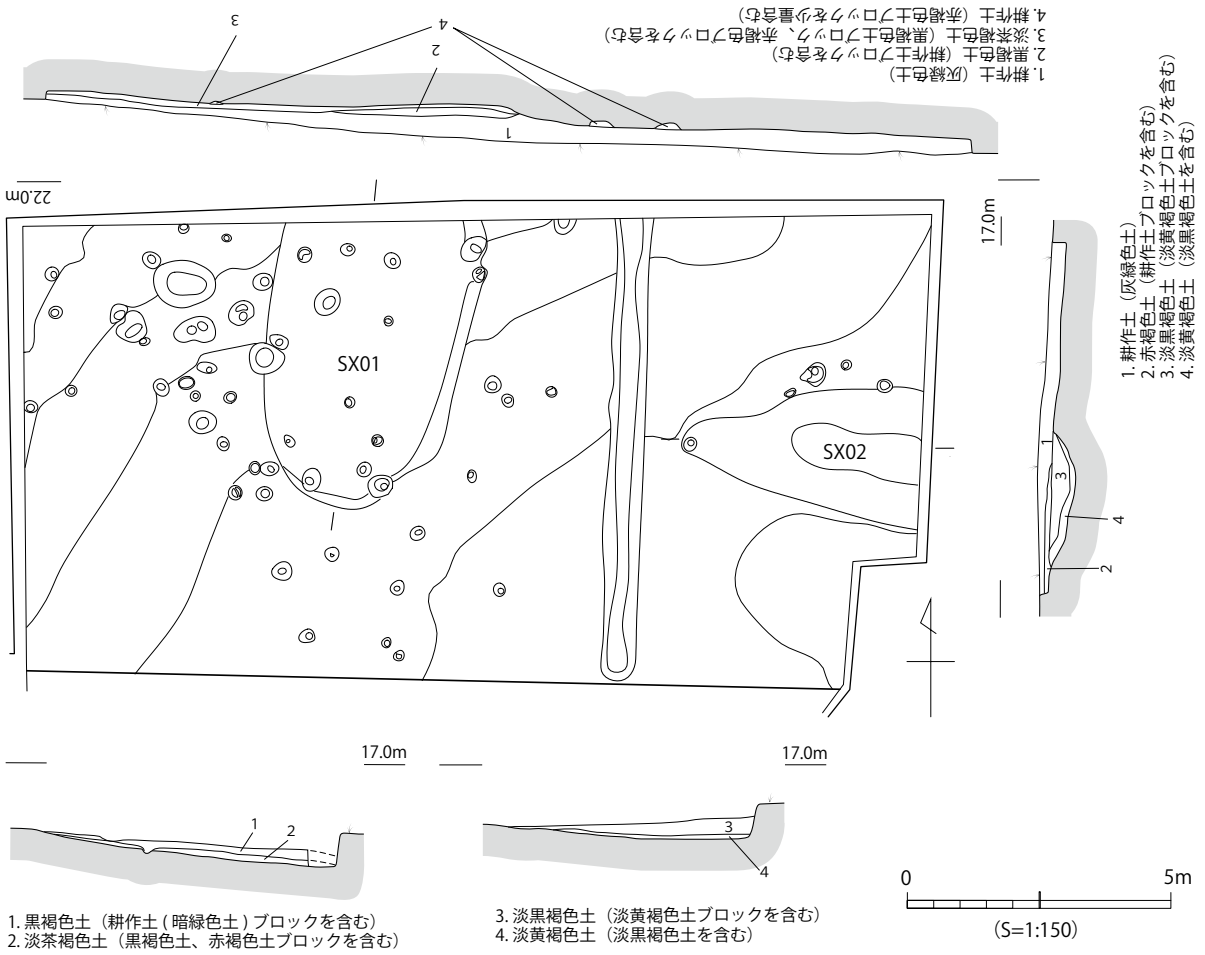
SX03（第 16 図）

Ⅴ区の中央で検出された遺構である。丘陵の北側斜面が沖積地へ落ち込んでいく地点で検出された。遺構は木杭や板材、礫からなり、板材や横に据えた木杭を、打ち込んだ木杭や礫で固定して遺構の平面形を「コ」字状になるように配置した木組み遺構である。「コ」の空いている方向は、丘陵斜面側にあたり、沖積地へ向かって遺構が張り出している状況であった。





第 13 図　山辺遺跡　Ⅲ区　SK06･07 実測図（S＝1/20）



第 14 図　山辺遺跡　Ⅳ区　SX01･SX02 実測図（S＝1/150）

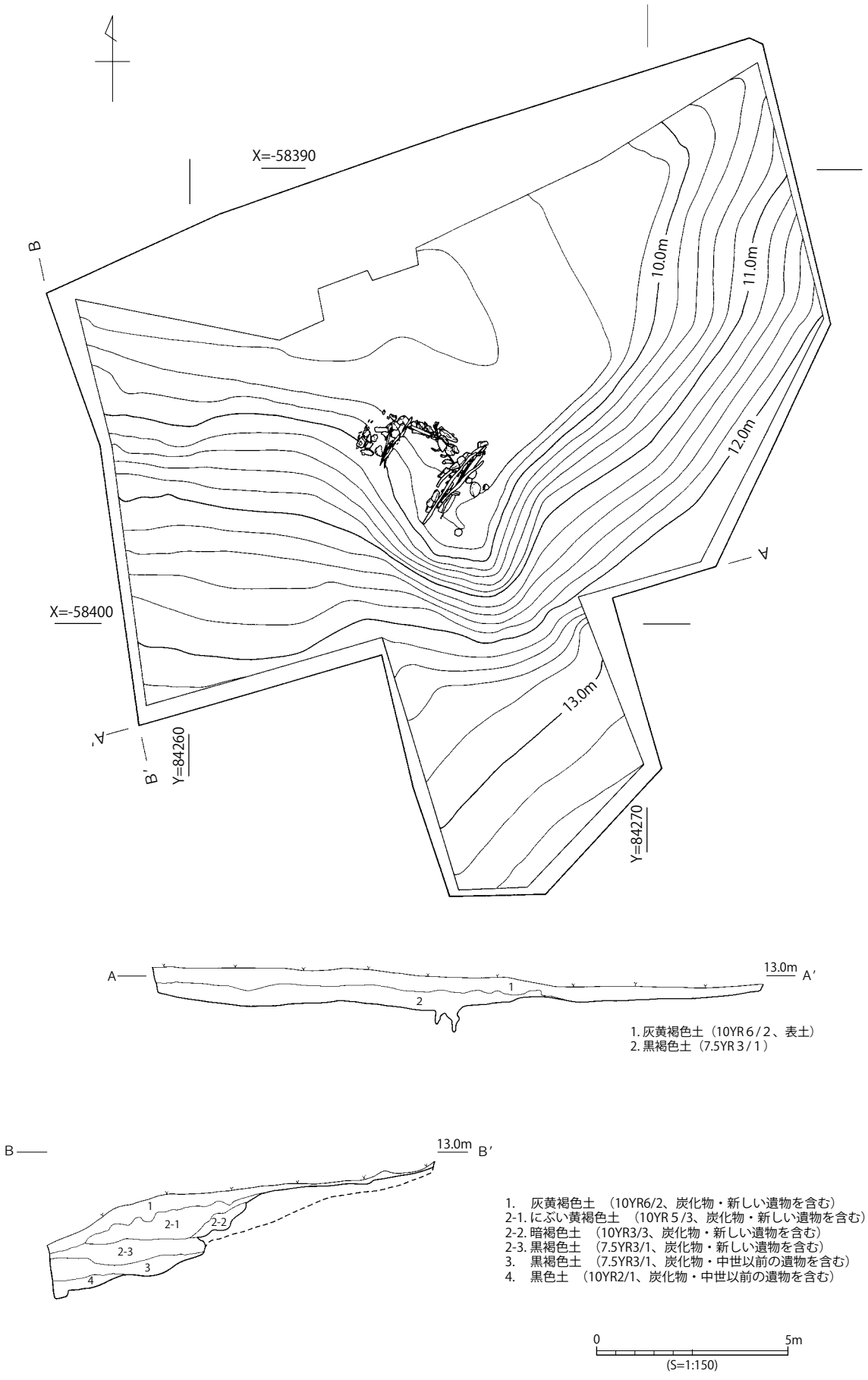
遺構の規模は、北東から南西方向の長さが最大約 2.3m で、直交する北西から南東方向の長さは約 2.9m であった。Ⅴ区の包含層を掘り進めていく中で、原位置を保っていないと思われる礫がいくつか出土していた。これらの礫は SX03 の上面や周囲に分布していたと考えられるが、遺構との関係は不明である。

打ち込まれている木杭は、最も浅いもので数㎝しか打たれておらず、深いものは約 0.5m 打ち込まれており、一定の深さまで到達している状況ではなかった。横に据えた木杭は細長い丸太の先をわずかに加工して杭先にしているものがほとんどであった。礫は角礫及び亜角礫で円礫はほとんど見られなかった。地元で産出される赤色系の安山岩が多く用いられているようで、平らな礫はこの安山岩が多く用いられている。

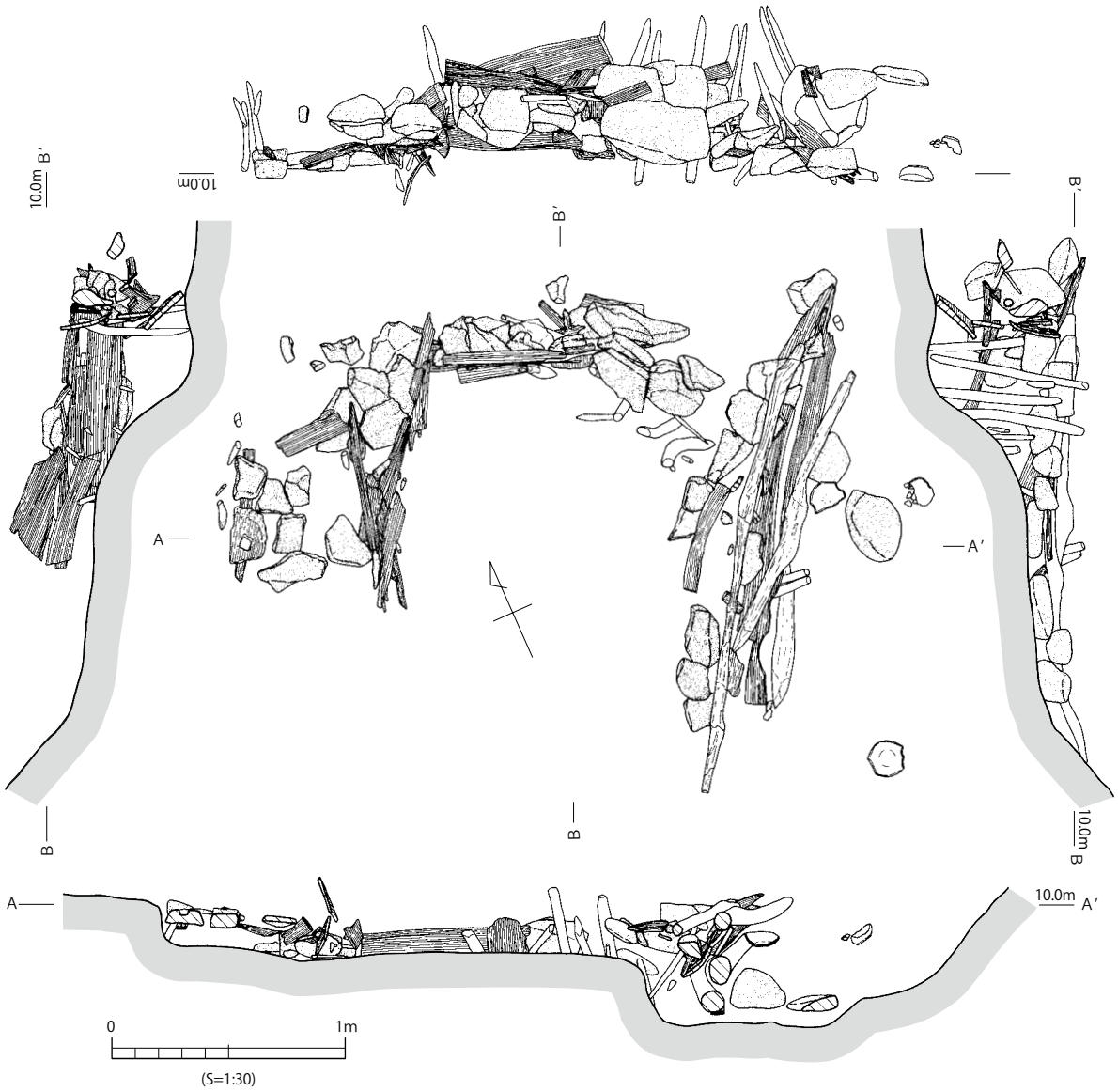
遺構の南西、木組みの外側にまとまって分布している 6 点ほどの礫は平らな面を上面に向けており、礫の平坦面が揃っていた。意図的に礫の上面を揃えている可能性がある。この礫のまとまりの中にほぞ穴の空いた板材が存在する。この板材も平らな面を上に向けて出土している。何かの木製品を転用して平らな礫と共に置いたものと考えられる。

木組みの内部には木組みの外側と同じように礫が分布しているわけではなかった。木組みの内側には粘土層が堆積していたが、砂は堆積していなかった。

出土遺物は、土師器の高台付き坏（柱状高台）数点、木製品では漆塗り椀 3 点以上、SX03 の構成



第 15 図　山辺遺跡　Ⅴ区　遺構配置図（S＝1/150）



第 16 図　山辺遺跡　Ⅴ区　SX03 実測図（S＝1/30）

材として転用された加工の痕跡が残る板材や、杭が出土している。

（4）遺物

Ⅰ区では近世以降の陶磁器が出土している。

Ⅱ区では黒曜石製の石鏃が 1 点出土している。第 30 図 10 はⅡ区で出土した石鏃である。黒曜石製の凹基式である。素材の腹面を残している。縄文時代のものと考えられる。

Ⅲ区では最も数多く出土したのが鋳造炉の炉壁である。そのほとんどが SK01 から出土したものである。その他に鉄滓や中世の土師器、白磁が出土している。

Ⅳ区では SX01 から黒曜石製の石器が数点出土している。

Ⅴ区では SX03 から柱状高台付坏や漆塗り椀が出土し、SX03 を構成していた木材のうち建築部材等で使用されて木材を転用したものが出土している。包含層からは、青磁や白磁、褐釉陶器、中世須恵器、中世土師器、須恵器、埴輪、鋳造炉の炉壁が出土している。

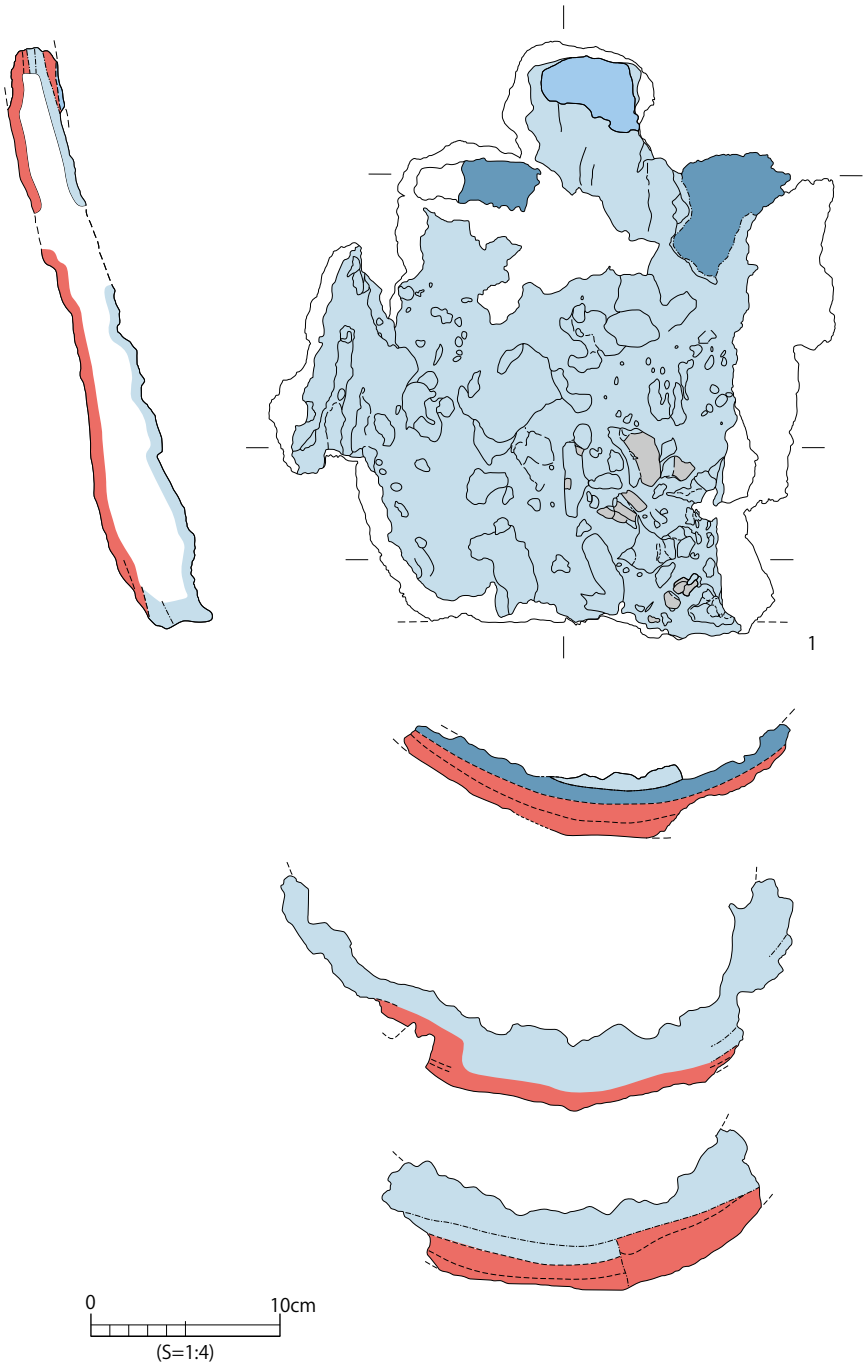
鋳造関連遺物（第 17 図～第 21 図）

第 17 図は溶解炉の炉壁である。下端部には凹凸はあるが面をなしていること、内面の溶解具合

が上部の溶解の進行具合が、後述する上段と考えられる資料より進んでおり、下部は下段と考えられる資料並みの溶解であることから、炉の中段に当たるのではないかと考えている。

外面は全面剥落しており本来の壁面が確認できなかった。器壁は直線状に広がっている。内面下端部は縦断面で確認すると、内側に飛び出している。これは炉下段あるいは接続するための粘土と繋がっていたのではないかと考えられる。内面はガラス質化が進んでおり、凹凸が激しい。

また炭化材が付着していた痕跡も多く確認できた。炉内面の凹凸状態が激しく、羽口による送風施設が周囲にあるのではないかと考えられるが、羽口の接続部分は確認できなかった。炉の平面形は円形や楕円形など整った形状にならず、横断面図を確認すると、中位の横断面図の形状だけ右側部分が内側へ折れ曲がっている形状になっている。これは、破損後、壁面を補修し直した痕跡の可能性がある。またこの部分のみ断面形状が異なることから周囲に羽口が接続されていた



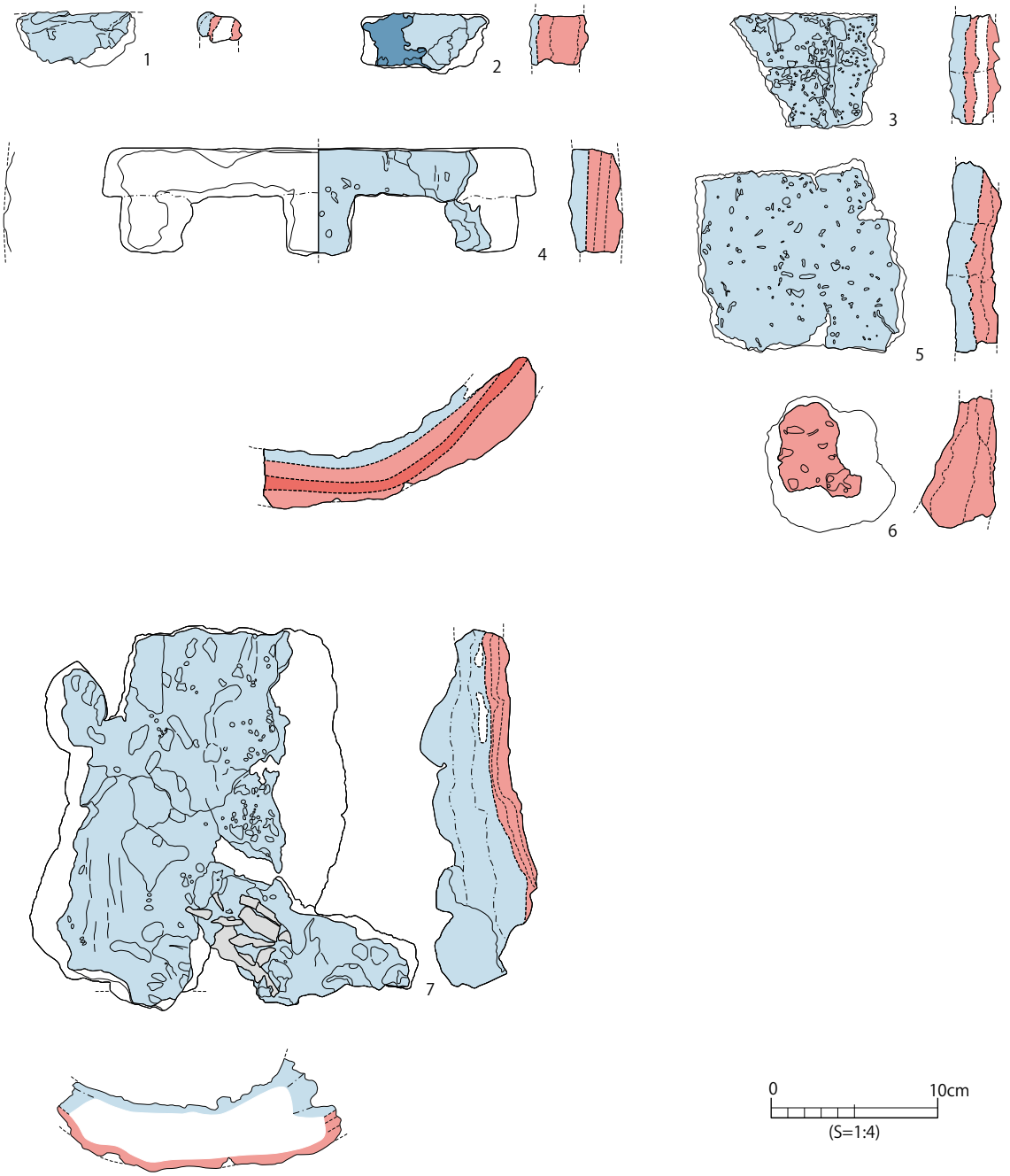
第 17 図　山辺遺跡　Ⅲ・Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図 (1)（S＝1 /4）

可能性もあるが明らかにできなかった。

炉壁の破面を観察すると、ガラス質化した硬化面が何面も断面に存在し、硬化面の上に粘土が塗られ、さらに硬化面が形成されている部分も多い。したがって、この炉壁は何度も加熱によるガラス質化と、炉壁の補修を繰り返していると考えられる。これは以下で記述する炉壁のほとんどにも言えることである。

第 18 図は炉上段と考えられる炉壁である。個々の遺物は内面が灰色にガラス質化しているものがほとんどで、炉の内面には融解した不純物など付着しておらず、炉の構造上では、上段になると考えられる。

1 は上端部が丸みを帯びており、口縁部ではないかと考えられる。口縁端部から内部にガラス質化した部分が垂れ下がっている状態と思われる。2 は直方体の炉壁である。高さが一定で、器壁の厚みも同じである。炉壁に積み上げられた粘土帯の一つと考えられる。3 ～ 5 も同様である。

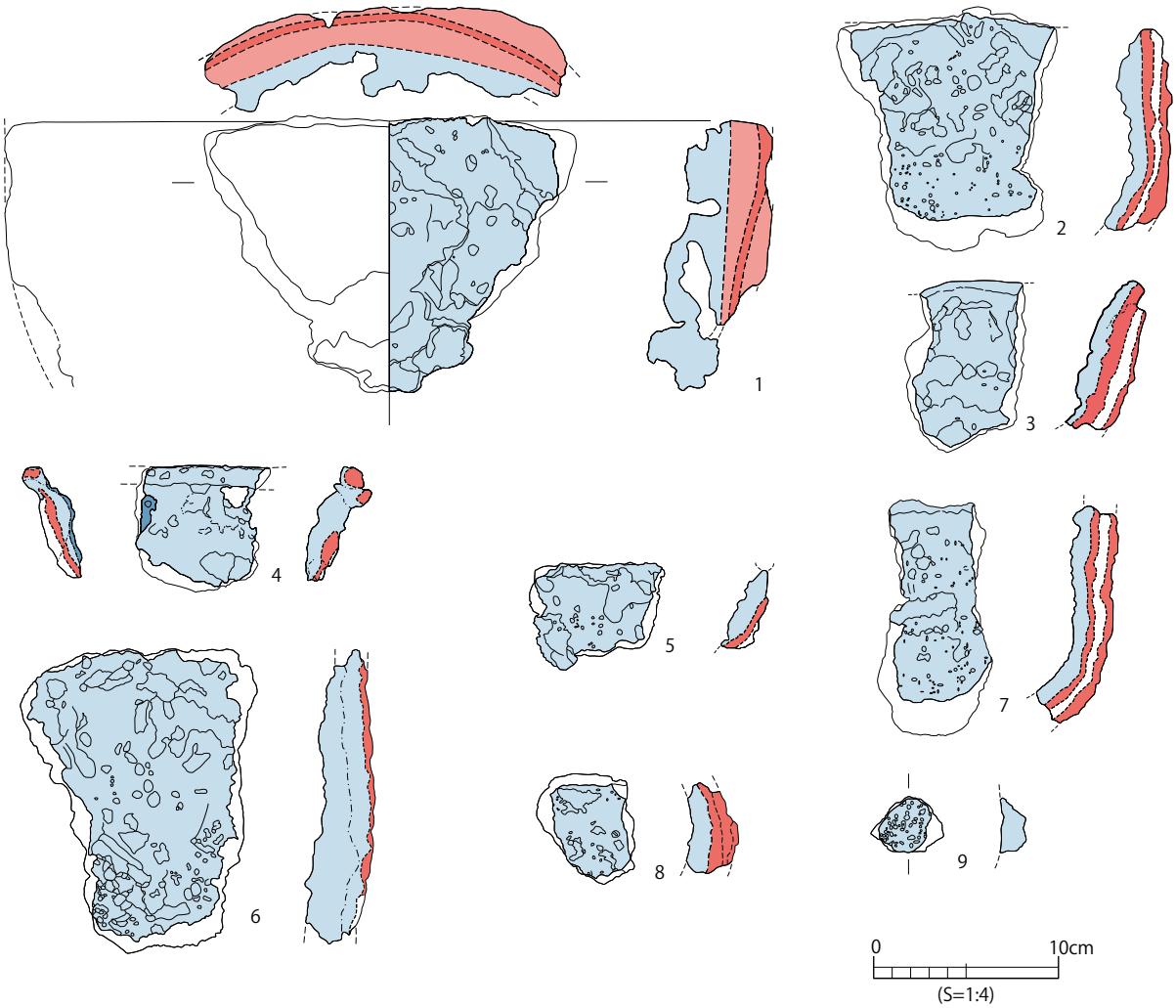


第 18 図　山辺遺跡　Ⅲ・Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図 (2)（S＝1/4）

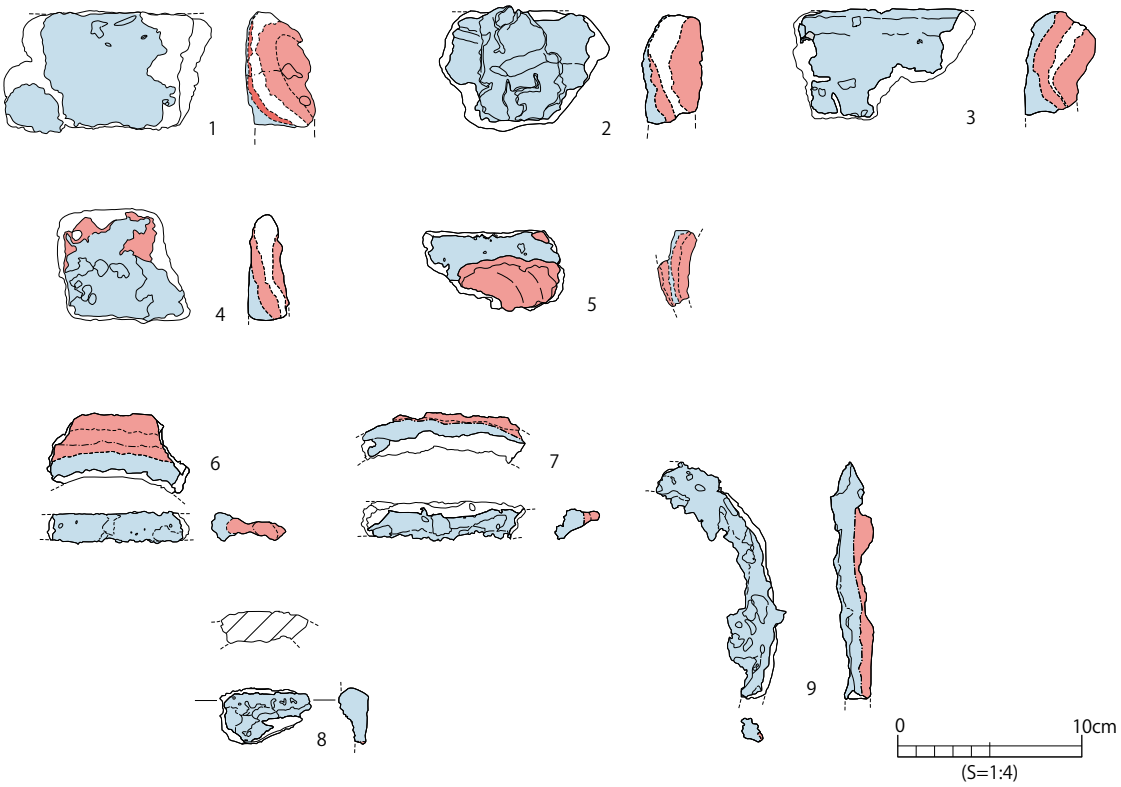
4 は最も遺存状態が良かったため、口径を復元した結果、約 0.4 mであった。6 はどの部位になるか不明である。最下段の底部に近い可能性もあるが、内面の被熱度合いから炉の上段に近い部位と考えた。7 は中段の炉壁と考えられる。第 17 図 1 と同様に平面型が不規則な円形で、炉の厚みは均一ではない。実測図（正面図）の右下には、接合によって復元された部位が突出しているが、この部位と壁面に間には明瞭な空間があいている。炉壁内を補修した面が浮き上がっている可能性もあるが、他の炉壁片とは明らかに様相が異なっている。炉壁内面が非常に荒れており、羽口と炉の接続部分に近く、第 17 図 1 と類似する部位であると考えている。

第 19 図は炉の最下段の炉壁と思われる。内面の溶解具合が進んでいるものと、器形が胴部から底部へと屈曲するもの、底部と考えられるものを図示している。1 ～ 3 は口縁端部と考えられる。

1 の口径は約 0.4m で、口縁端部には面が作られている。炉壁の内側 3 分の 1 程度はガラス質化している。外面は剥落が激しく、器壁の厚さはわからない。ガラス質部分には空洞が多く空いていた。4 は口縁端部と考えられる部位の上部に断面が円形の粘土紐が付着している。1~3 の口縁端部に同様の粘土紐が付着していれば同じ形状になると考えられる。4 の右側縁図では粘土紐と炉壁の間にさらに粘土が外面から付け足されているように付着している。5 は口縁端部に粘土紐が付着していた痕跡が残る資料である。粘土紐が剥落したようで、粘土紐のガラス質化した表面が炉壁の口縁端部に残っていた。6 は下部の内面に細かな気泡状の空間が多数存在する資料で



第 19 図　山辺遺跡　Ⅲ・Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図 (3)（S＝1/4）



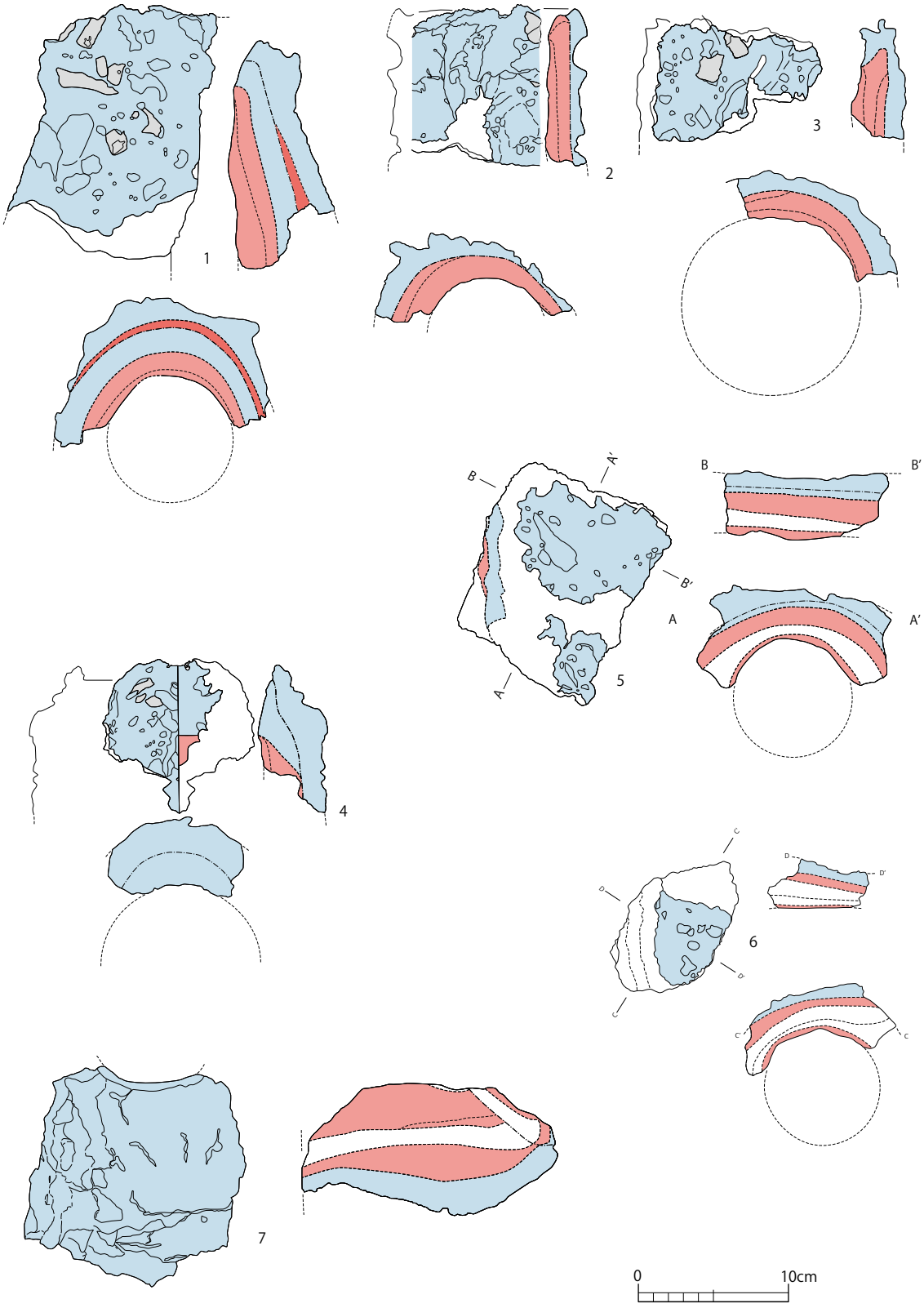
第 20 図　山辺遺跡　Ⅲ・Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図 (4)（S＝1/4）

ある。底部に近いと判断した。7 は器形が胴部から底部へ屈曲する形状のもので、8 と 9 は内面のガラス質化した表面に細かい気泡状の空間が存在することから底部と考えている。

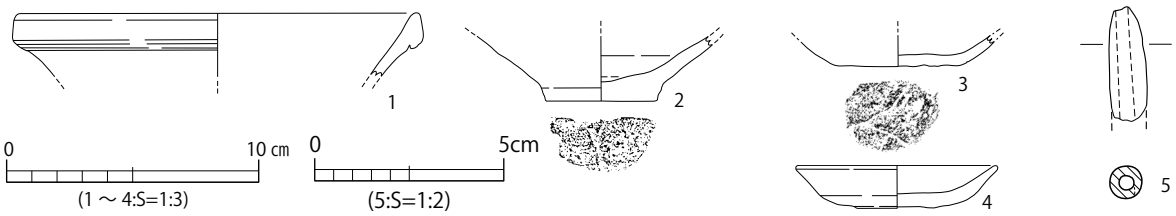
第 20 図 1 ～ 5 は炉の上段と考えられる。口縁端部の粘土帯か、あるいは口縁端部に近い粘土帯で、輪積みされていた上部の粘土帯が脱落したものではないかと考えられる。1 や 3 の端部は丸くまっており、4 の表面は剥落しているが、断面形状から丸い端部であったと考えられる。2 は端部に面があるようで、内側にガラス質化した内壁が付着している。この残存している内壁は上部へ伸びていることから、2 の上部にはさらに粘土帯が存在した可能性がある。5 は内面のガラス質化の状態から 1 ～ 4 と近い部位だと考えている。1 ～ 4 の断面を見ると、被熱の痕跡が湾曲し、下部はガラス質化した部分が炉壁外方向へ広がっていることがわかる。第 17 図～第 19 図の口縁部あるいは口縁に近い部位の被熱の痕跡は、炉壁の形状に沿って被熱の痕跡が伸びていることから、1 ～ 4 の下部には炉内部の熱が浸透する空間が空いていた可能性がある。空間は意図的に空けられていたものか、粘土帯の接着が不十分で、空いたものかは不明である。6 ～ 9 は被熱している棒状の環状粘土である。6 と 7 は棒状部分と、その外側に薄くのばされた粘土が付着しているものである。棒状部分の内面はガラス質化しており、外に付着した粘土は薄くのばされているが、被熱の度合いは低い。8 は棒状部分の下部に粘土が広がっているもので、内面はガラス質化している。9 は 6 ～ 8 と同様に環状となるが、ガラス質化しているのは環状部分の上面で、内側のガラス質化は顕著でない。6 と 7 はこしき炉の炉壁と炉壁に挟んで隙間をなくす目止め用の粘土紐ではないかと考えている。8 は炉の内面から目止めした粘土紐と考えられる。9 はガラス質化した面の位置から、炉の内面に付着していたものと考えられるため、例えば羽口の目止め用の粘土紐ではないかと考えている。

第 21 図は羽口である。外面には厚くガラス質が付着しており、炉の内側に突き出ていたと考え

られる。1 や 4 は先端の器壁は炉内の焼成によって器壁が薄くなったものと考えられる。外面に付着するガラス質は羽口の下方向に垂れ下がっている。1 は先端がすぼまっている形状で、その他は直線的な器壁である。5 と 6 の外面の左端部はガラス質化しておらず、炉内に突出せず、炉壁に接していたためガラス質化していない可能性がある。また、7 は非常に厚みのある羽口であ



第 21 図　山辺遺跡　Ⅲ・Ⅴ区　鋳造関連遺物実測図 (5)（S＝1/4）



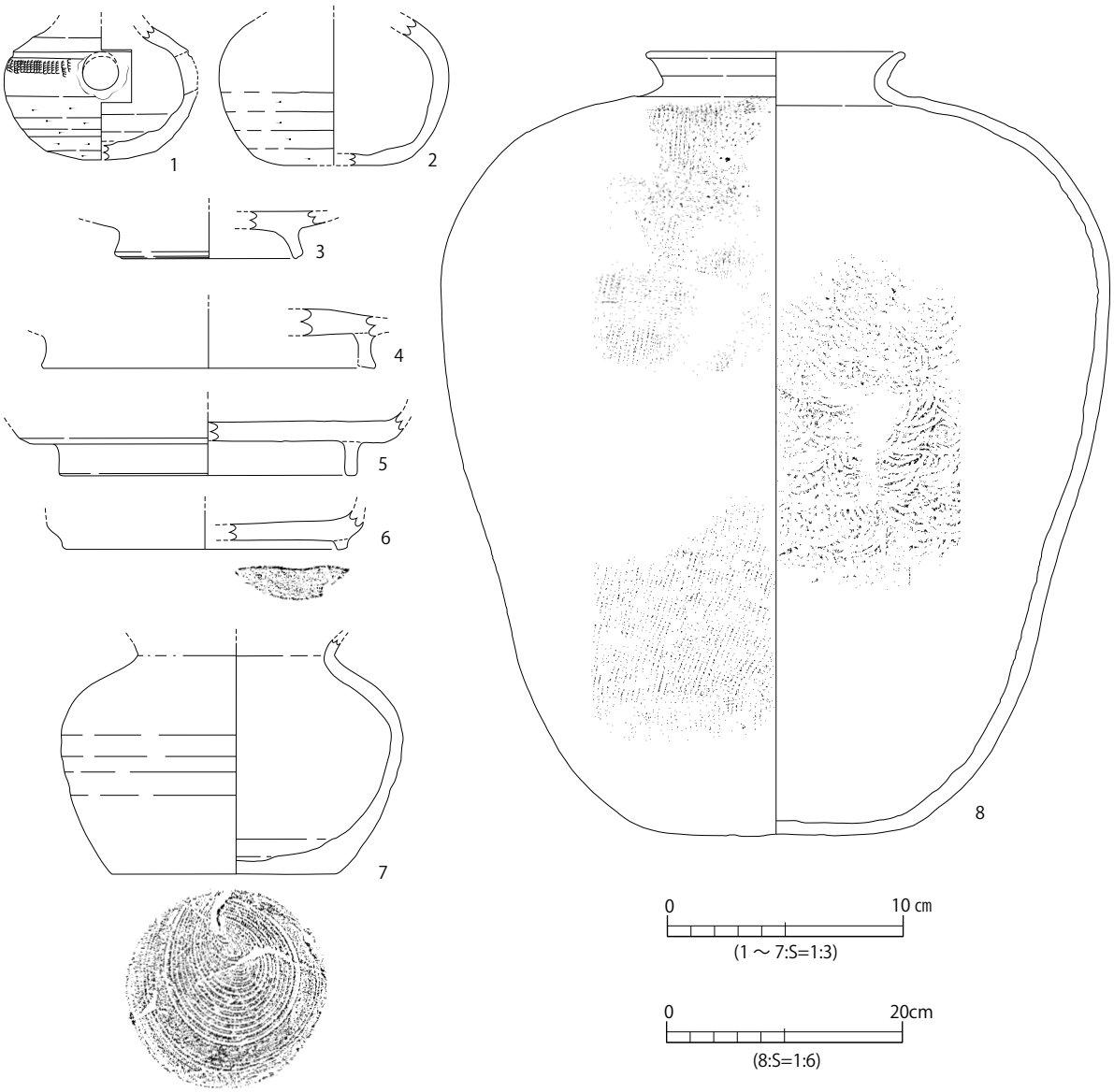
第 22 図　山辺遺跡　Ⅲ区　出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

るが、羽口本体は非常に薄くなっており、それ以外の粘土及びガラス質部分が厚みの大部分を占めていることがわかる。断面の被熱痕跡の向きと、先端部と羽口内面の方向から炉壁との装着角度は 127°で斜め下方に向けていたと考えられる。今回の調査出土した羽口は、炉壁の外側へ突き出ていたと考えられる被熱の弱いものはみられなかった。

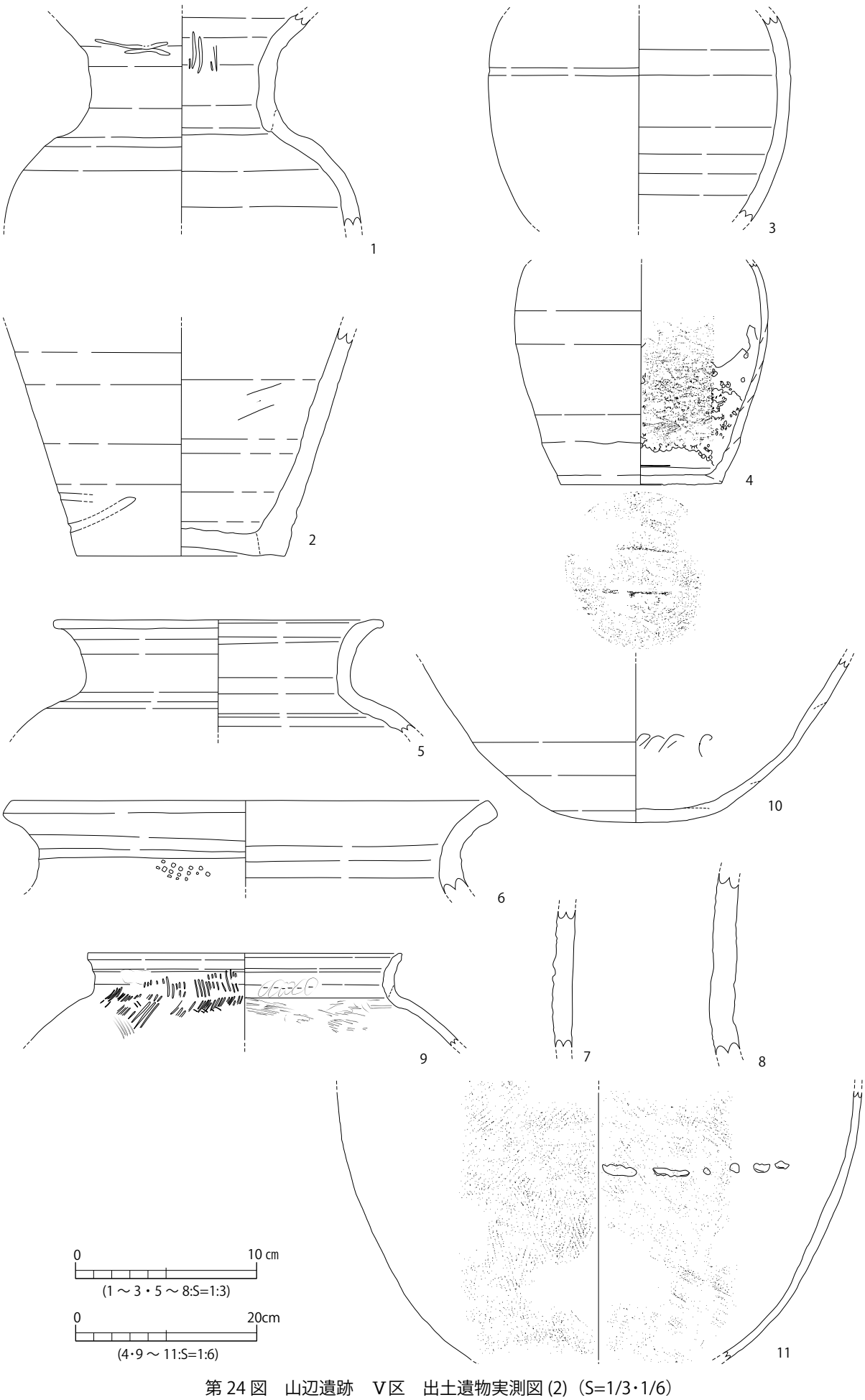
Ⅲ区出土遺物（第 22 図）

第 22 図はⅢ区で出土した遺物である。1 は白磁椀で口縁部が厚い。白磁Ⅳ類である。2 と 3 が土師器の椀、4 は土師器の皿である。5 は土錘で、下部を欠損している。

須恵器（第 23 図）



第 23 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (1)(S=1/3・1/6)

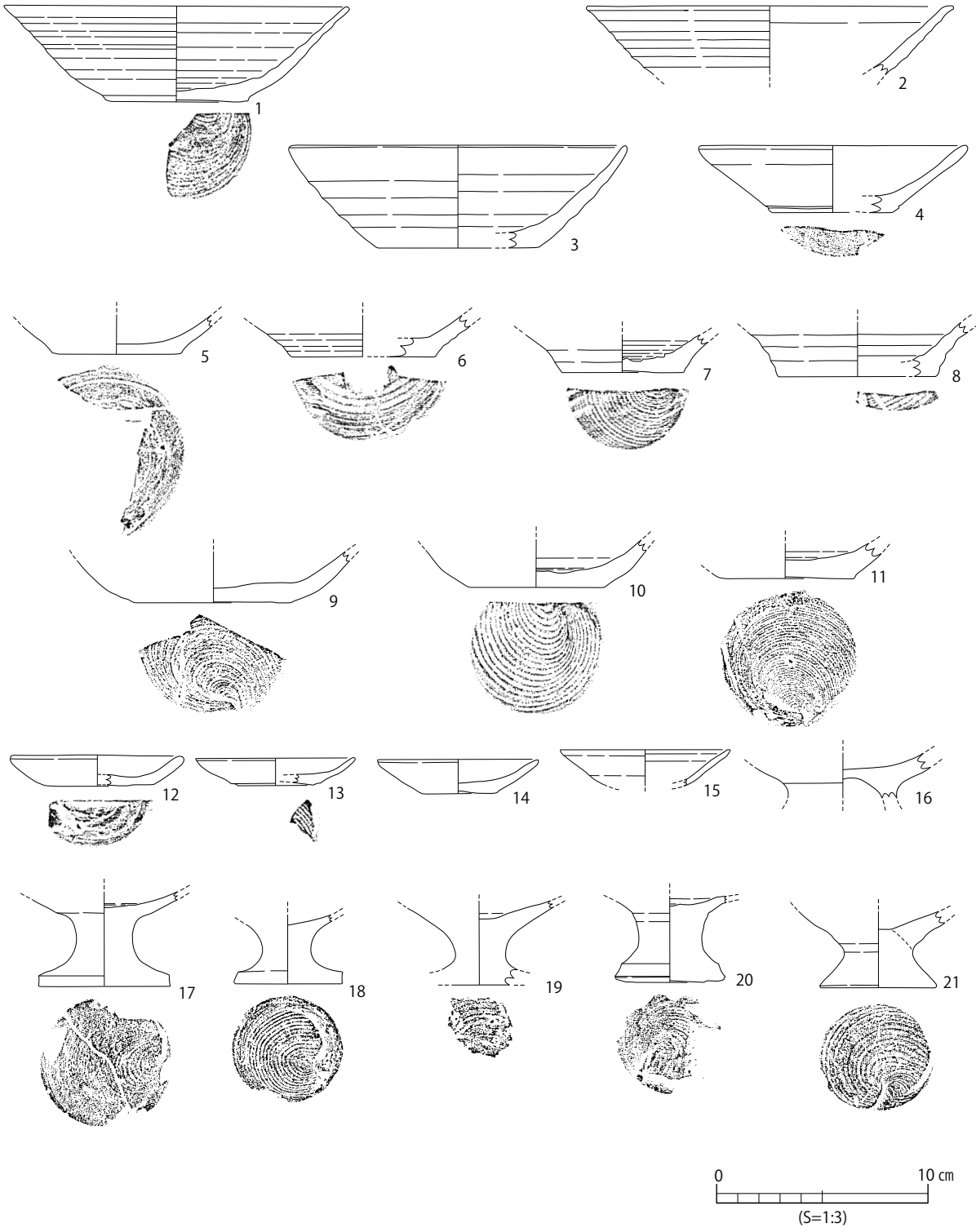


第 24 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (2)（S=1/3・1/6）

1 と 2 ははそうで 1 は丸底、2 は平底である。3~6 は高台付き坏あるいは皿とみられる。7 は壺である。口縁は外傾している。底部は平底で回転糸切り痕が残る。8 は甕である。高さが 6㎝を超える大型品である。

須恵器（第 23 図）

1 と 2 ははそうで 1 は丸底、2 は平底である。3~6 は高台付き坏あるいは皿とみられる。7 は壺である。口縁は外傾している。底部は平底で回転糸切り痕が残る。8 は甕である。高さが 6㎝を超える大型品である。



第 25 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (3)（S=1/3）

中世須恵器（第 24 図）

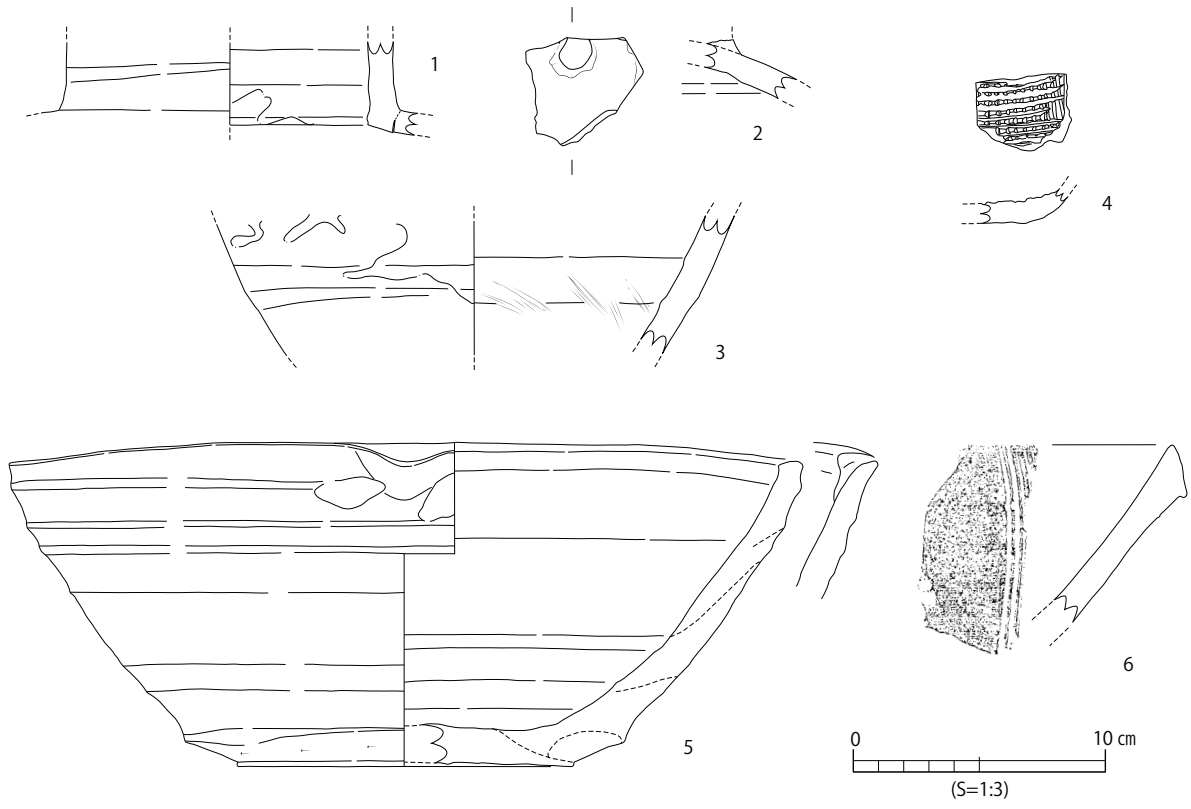
第 24 図 1 と 2 は壺と考えられる。同一個体であろう。頸部内外面の一部にヘラ磨き状の痕跡が残っている。2 の外面には乾燥する前に紐で結ばれたような痕跡が残っていた。平安期の須恵器の可能性もある。3 は丸い形状の壺胴部である。外面には釉薬が付着しており、一条の沈線が施されている。中世須恵器ではなく褐釉陶器の可能性もある。4 も壺の胴部で内面の表面がかなり剥落している。比熱による剥落ではないかと考えられる。底部にろくろ盤の痕跡が 2 条の突帯として残っている。勝間田焼と考えられる。5~11 は甕と考えられる。10 は粘土帯の接続痕が外面や断面に残っている。11 は外面の調整が平行タタキの後にクシ目が施されている。7 と 8 は 6 の胴部と考えられる破片で、6 と同様に外面に格子目タタキが施されている。在地系の中世須恵器と考えられる。50 も産地不明の須恵器である。

中世土師器（第 25 図）

第 25 図 1 ～ 12 は椀である。1 ～ 5 の胴部は逆ハの字に直線状に開く。2 のみ口縁端部が外側で引き出されている。6~9 の胴部も逆ハの字に立ち上がっている。8 は内面見込み部に強い回転ナデの痕跡がみられる。10~12 は胴部が丸く立ち上がっている。13~16 は皿で、17 は高台付き皿あるいは高台付き坏で、18~22 は柱状高台付き皿である。16 は器高が 13 から 15 よりあり、器壁が薄い。18~22 の柱状高台付き皿の高台は全て充填されている。高台部の形状は様々である。

国産陶器（第 26 図）

第 26 図 1~3 は肩部に耳が付いた灰釉陶器の壺で、双耳壺か四耳壺と思われる。1 は頸部から口縁部にかけて直口する。頸部から上は露胎である。2 は肩部に耳が付いているが、ほとんどが欠損している。外面には緑色の釉が所々付着している。3 は胴下半部で底部を欠損している。丸くすぼまる形状で、外面のうち上半分には釉薬がかかっている。これも緑色の釉薬であった。1 ～ 3



第 26 図　山辺遺跡　V区　出土遺物実測図 (4)（S=1/3）

は同一個体と考えられる。4 は大窯期の卸皿である。内面に卸し目が縦横に刻まれている。5 は勝間田焼の捏鉢である。口縁部には片口が作られていた。内面見込み部は使用により摩耗している。6 は内面に擂目があり、備前の擂鉢である。

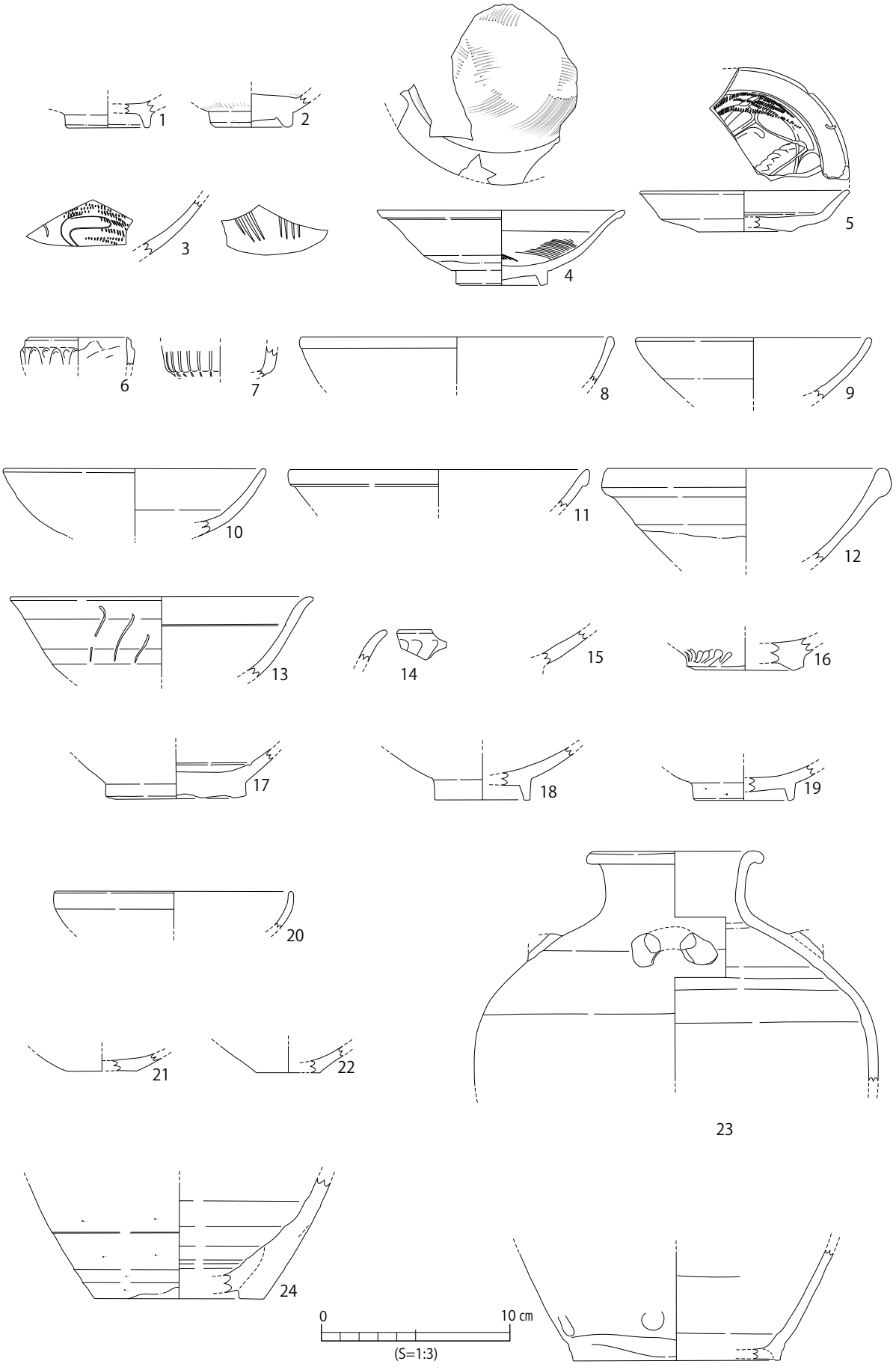
輸入陶磁器（第 27 図）

第 27 図 1 ～ 3 は青磁の椀である。1 は龍泉窯系である。2 と 3 は同安窯系である。2 は外面に櫛目文を施す。内面見込み部の釉は掻き取っていない。同安窯系青磁椀Ⅲ－ 1c である。3 は椀の胴部の破片と思われる。外面にやや粗い櫛目文を施し、内面にヘラ状工具による沈線文と櫛目文の点描文が描かれている。同安窯系青磁椀Ⅰ－ 1c であろうか。4 と 5 は青磁の皿である。4 は同安窯系の高台付き皿で内面に櫛目文を施している。同安窯系皿Ⅲ－ b である。5 は高台が付かない皿で、内面に沈線文と櫛点描文を施している。同安窯系青磁皿Ⅰ－ 2 b である。6 と 7 は青白磁の合子である。2 つとも身であると思われる。7 は口縁も底部も欠損している。6 は口縁部の内外面の釉を掻き取っている。外面は蓮弁文である。7 は青灰色の青磁で、内面上部に極わずかに釉の掻き取り痕跡が見られる。8 ～ 19 は白磁の椀である。8 は口縁部に小さな玉縁をもつものである。白磁椀Ⅱ－ 1 である。9 と 10 はやや内湾した口縁部で玉縁口縁でないものである。11 は口縁部に小さな玉縁を持ち、体部が直線的である。白磁椀Ⅲ類と思われる。12 は口縁部の玉縁が厚いものであるが、胴下半部が欠損しており、底部の形状は不明である。白磁椀Ⅳ類と思われる。13 と 14 は玉縁にならない口縁部で、外反している。外面には縦方向に篦描文が施されている。13 は内面に沈線が 1 条存在する。15 は椀の胴部である。16 ～ 19 は椀の底部である。16 と 17 は高台の内部の刳りが浅く、肉厚なものである。16 は高台外面の一部に篦状工具を押しつけたような調整が見られる。これは文様の可能性もある。17 は見込み部に 1 条の沈線が存在する。17 は白磁椀Ⅳ－ 1a の底部と思われる。16 もⅣ類の底部である。18 は高台内部が深く刳りぬかれており、細く直立する高台である。胴部外面は篦削りされており、胴部から高台内部まで施釉されていない。内面は施釉されている。白磁椀Ⅴ類と思われる。19 も椀の底部で、高台外面も篦削りである。20 ～ 22 は白磁皿である。20 は口縁部がわずかに肥厚し、内湾する。白磁皿Ⅶ類と考えられる。21 は底部の釉を掻き取っている。22 は内外面の釉は非常に薄く塗られている。外面が胴下半部から底部まで無釉である。21 と 22 とも平底で、白磁皿Ⅷ類であろうか。22 と 23 は褐釉陶器の四耳壺考えられる。23 は上半部と下半部で接合はしないが、同一個体であろう。

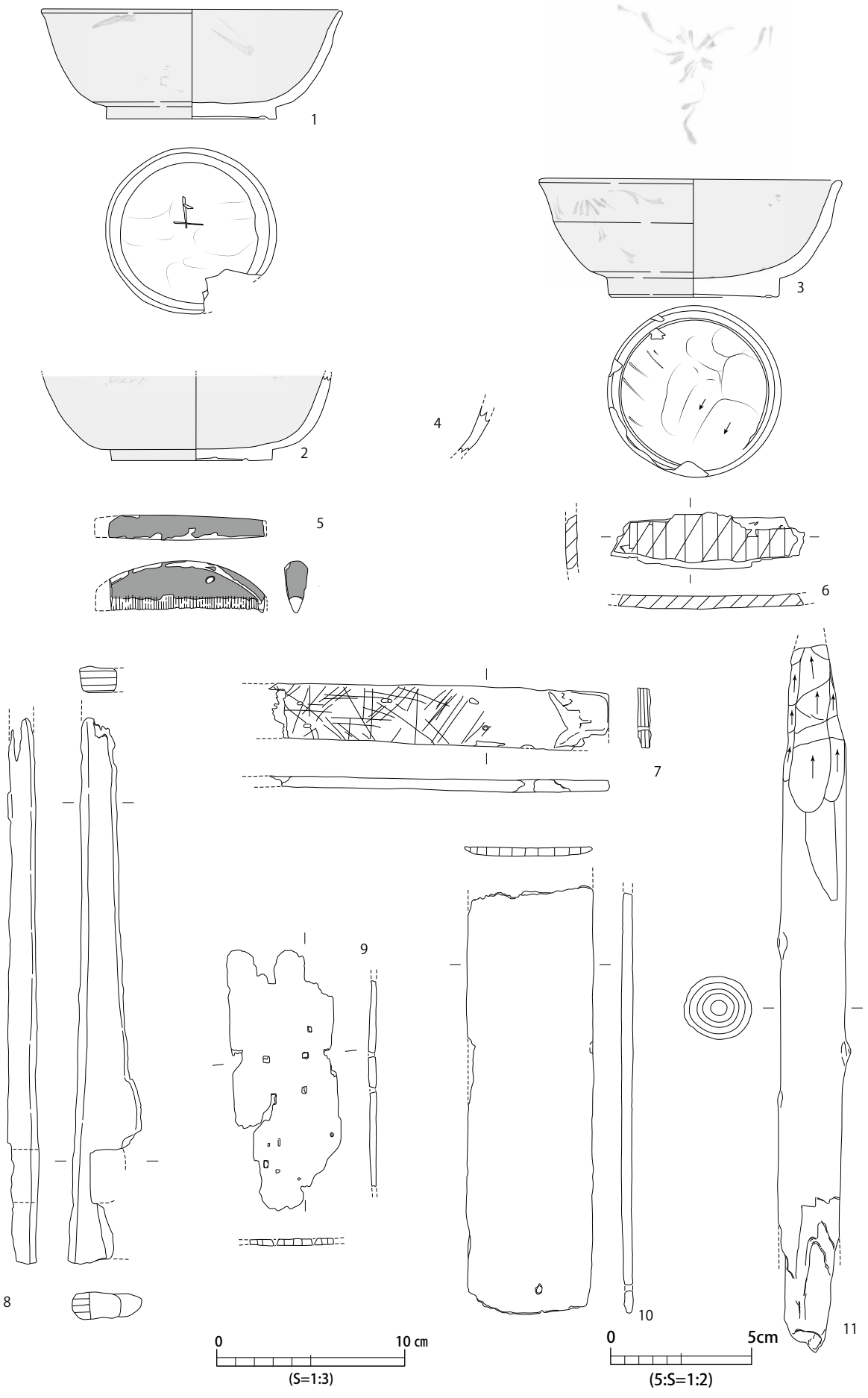
青磁及び青白磁、白磁の年代はおよそ 12 世紀～ 13 世紀前半に収まるものと考えられる。褐釉釉陶器は、11 世紀後半から 12 世紀前半頃であろう。

木製品（第 28 図・第 29 図）

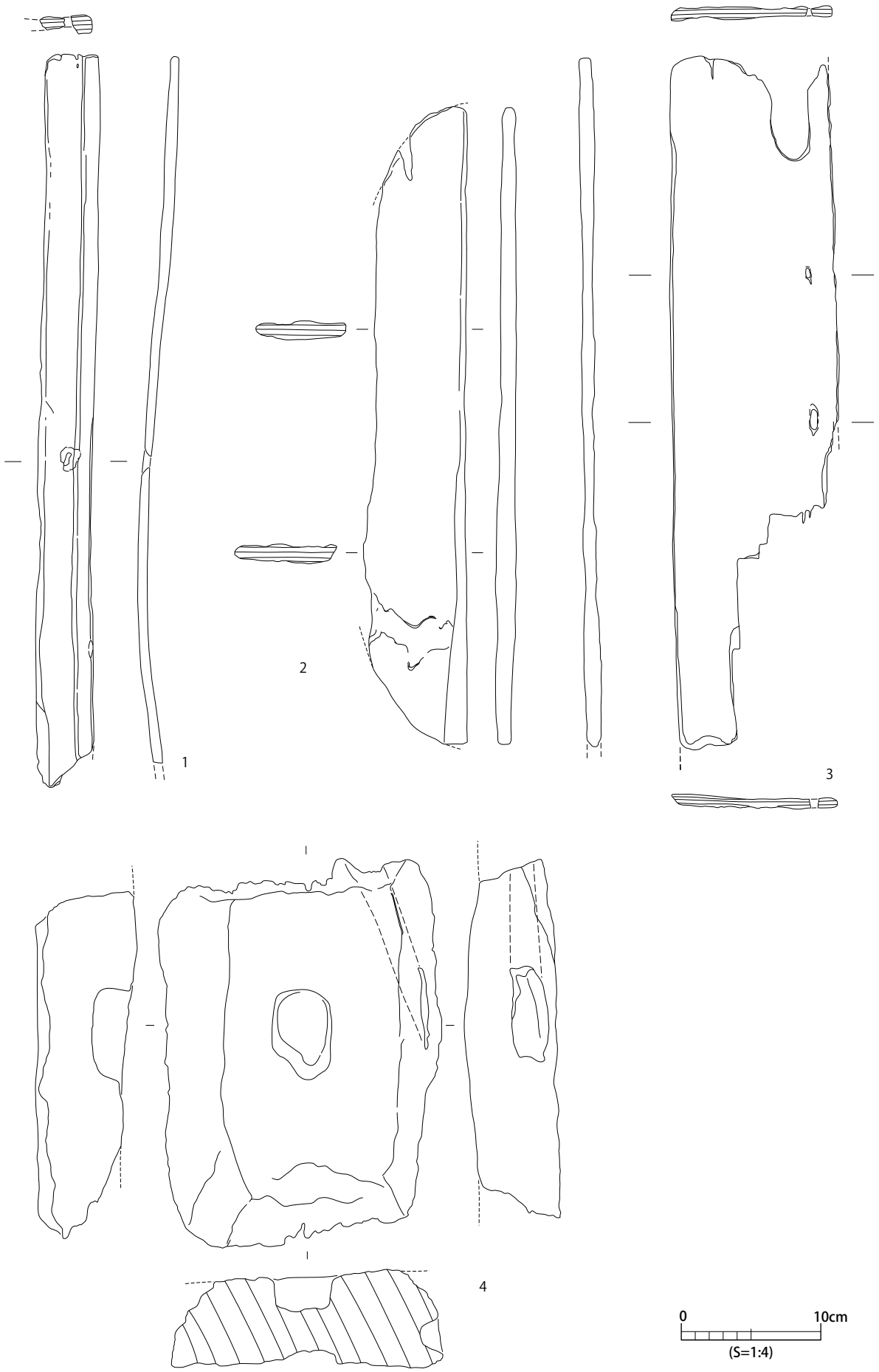
第 28 図 1 ～ 4 は漆塗り椀である。全てⅤ区 SX03 周辺で出土している。4 つとも内外面は黒漆で、文様は赤漆で描かれている。高台内には塗布していない。1 と 2 は高台が浅く削り出されており、1 条の沈線を巡らせ高台としている。3 はわずかに上げ底状に削られている状態であった。1 の高台外面には「上」と陰刻が施されている。3 の高台外面にはヘラ状工具による削りの痕跡が面や線として残っている。1 と 2 の文様は不明である。3 の見込み部と外面に描かれている文様は草花文と考えられる。5 は木製の黒漆塗り横櫛である。棟部が半月形になる形態で、歯は極めて細かく作られている。文様は描かれていない。6 ～第 29 図 4 まではⅤ区 SX03 で出土した遺物である。6 は線刻のある板材である。線刻は縦、横、斜めに引かれており、縦と横の線刻はほぼ



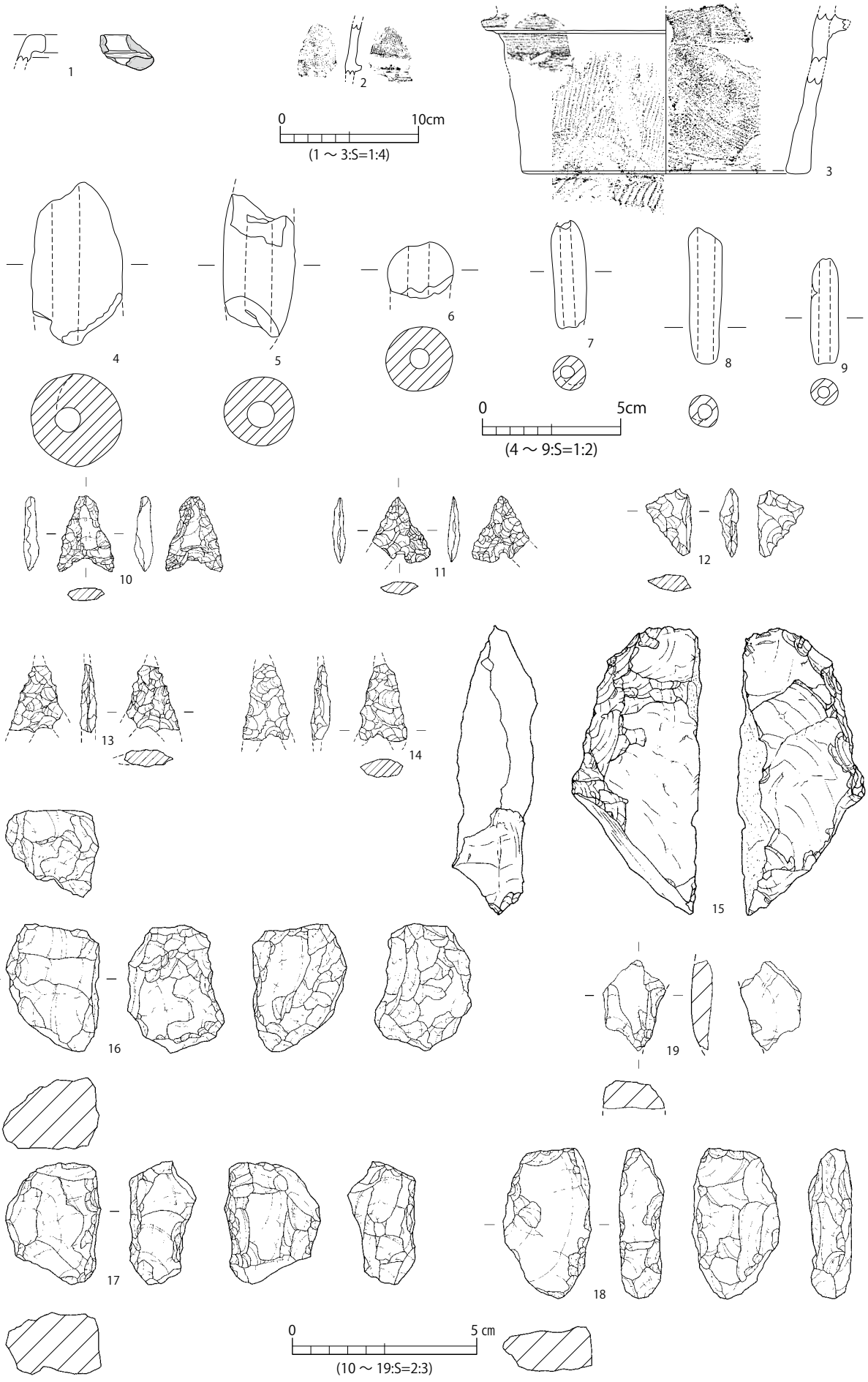
第 27 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (5)（S=1/3）



第 28 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (6)（S=1/2・1/3）



第 29 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (7)(S=1/4)



第 30 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (8)（S=1/2・1/4・2/3）

直角になるようである。斜めの線刻も規則的に引かれているが、縦と横の線刻の交点に引かれているわけではないようである。7 は板材であるが、傷状の線刻が多数見られる。1 カ所孔があるが、SX01 の部材として転用される以前の孔か不明である。8 は方形のほぞ穴が繰り込まれている部材の断面は楕円形から長方形へと変わっている。本来は建築部材であったのであろうか。9 と 10 は小孔が開く薄い板材である。11 は直線状に伸びた樹木の枝を利用して先端をとがらせた杭である。

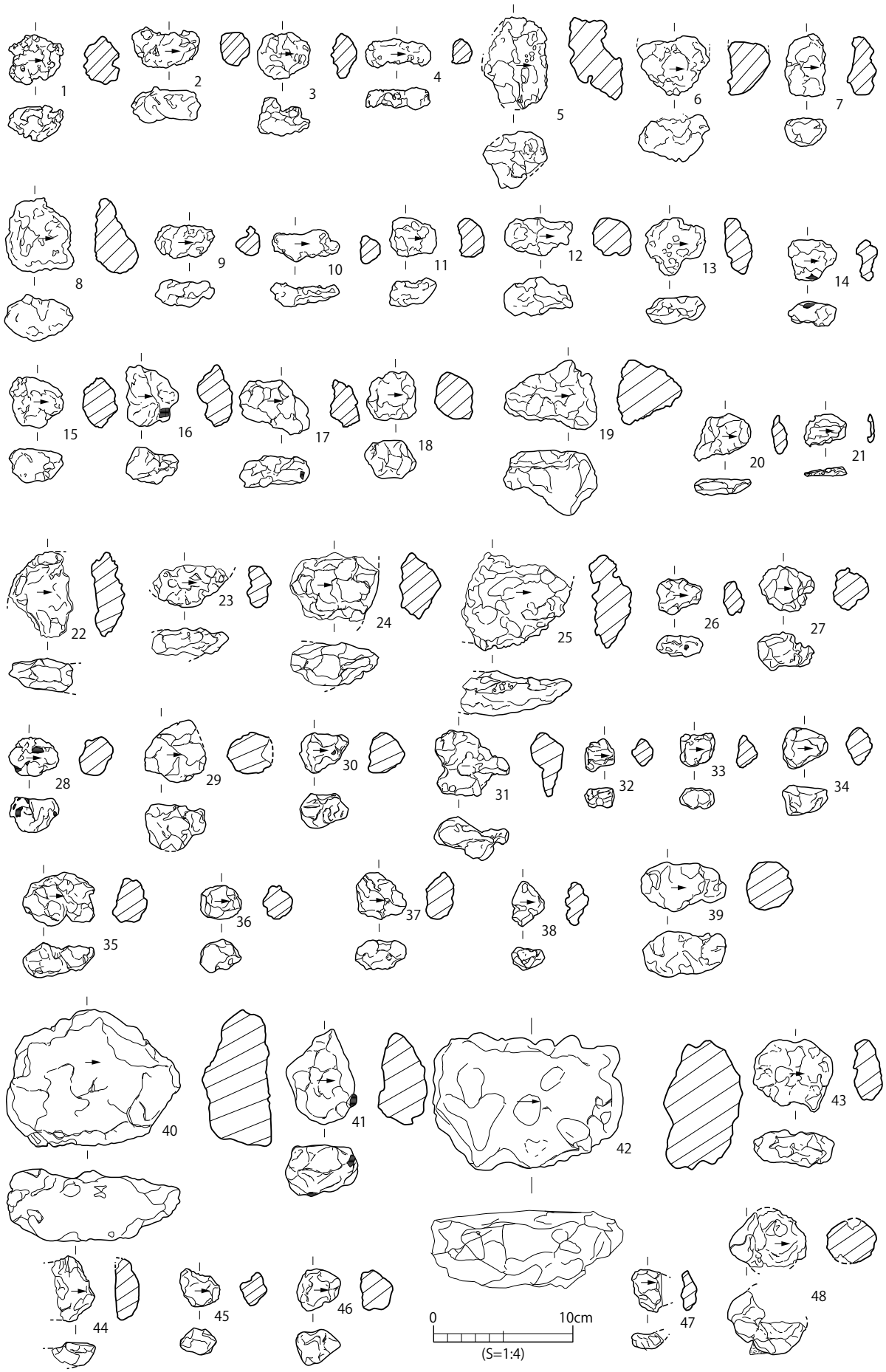
第 29 図 1 も穿孔のある板材で、穿孔は 2 カ所に認められる。意図的であるか不明であるが、側面の形状は湾曲している。2 は本来円形であったものが、破損等により板材のようになっているものと考えられる。遺物の側縁の一部は本来の円形の形状をとどめている。3 は 2 孔穿たれている板材である。建築部材であったのであろうか。4 は農具の未製品であろうか。中央に不定型なほぞと、上面から右側縁にかけて穿孔されている。

埴輪・土製品・石器（第 30 図）

第 30 図 1 ～ 3 は埴輪である。1 は口縁部で口縁端部が外側に屈曲している。口縁端面は垂直に近くなる。2 のタガは幅が狭いが、比較的高さはある。鞍切遺跡 1 区 1 号墳（SD02）や 2 号墳（SD03）には見られない形態である。3 は底部から最下段のタガまで残っている。タガ周辺の破片と底部の破片は接合しないが、同一個体と考えた。タガは 2 と同様に幅が狭いが、高さがある。底部からタガまでは外面の調整はタテハケである。底部調整はナデ調整が施されていると考えられる。藤永編年の 3 期古相頃であろうか。4~9 は土錘である。4~6 が太型で、7~9 は細型である。全てⅤ区で出土している。破損しているものが多い。10~18 は石器である。10~14 は黒曜石製の石鏃で、15 は黒曜石製のスクレイパーあるいは石核である。石鏃は全て凹基式である。10 は素材の剥離面が残っていた。12 は未製品であろうか。基部の抉りがみられないようである。15 は縁辺に剥離痕が連続しておりスクレイパーと考えているが、石鏃の素材となるような小型の不定形剥片を剥離する石核の可能性もある。16~19 は勾玉の未成品と考えられる。石材は全て碧玉であるが、19 以外は石質が均質でなく、色調も整っていない。16 ～ 18 は原石を分割して素材とし、調整を加えた調整剥片である。縁辺に細かい調整がみられる。

鉄滓（第 31 図）

第 31 図は本遺跡で出土した鉄滓である。出土地点はⅢ区 SK01 が最も多く、残りはⅤ区やⅢ区の西側で出土している。出土している種別は、鋳造関連で鋳造炉滓が、鍛冶関連では椀形鍛冶滓や鍛冶滓、その他は含鉄鉄滓や鉄塊系遺物である。1 ～ 21 はⅢ区 SK01 で出土した鉄滓である。1 ～ 5 までは鋳造炉滓で、鋳造炉滓は SK01 でしか出土してない。SK01 には鋳造炉滓以外に、椀形鍛冶滓など鍛冶関連遺物も出土しており、周囲では鋳造以外に鍛冶も行われていた可能性が高い。22~39 はⅢ区のうち、SK01 以外で出土した鉄滓である。ここでも椀形鍛冶滓など鍛冶関連遺物は出土している。40~48 はⅤ区で出土した鉄滓である。Ⅲ区の SK01 以外とほぼ同様の構成である。



第 31 図　山辺遺跡　Ⅴ区　出土遺物実測図 (9)（S=1/4）

第２節　鞍切遺跡

（１）調査の方法

鞍切遺跡は松江市西尾町に位置し、小丘陵の先端から尾根、その斜面からなる遺跡である。調査の工程上１区と２区に調査区を分けて発掘調査を行った。

１区は錠の手池横の畑として耕作していた平坦地で、２区は丘陵斜面から尾根に向かって設定された。遺跡は表土直下に遺構面が存在することから、重機による表土掘削は行わず、表土の掘り下げから遺構の掘り下げまで、人力により行った。調査区には 10m グリッドを設定し、遺物の取り上げを行った。1 区 SD02 や SD03 などの古墳の周溝から出土する埴輪などは実測図の作成と、出土位置の計測を行った。２区の街道跡は道路面の検出までを行い、一部にトレンチを設定して道路面の下部構造の把握に努めた。

（２）層序

１区と２区は表土層の下が遺構面である地山層であった。１区の２号墳の埴輪溜まり周辺は地表面から 10㎝下に地山面が表れるなど、遺構の上部は大きく削平されていると考えられた。２区も表土層の下に古墳の盛り土や、街道跡の道路面が確認されるなど、遺物包含層は検出できなかった。

（３）遺構

（A）１区の遺構

１区の遺構は溝状遺構（SD）が６条と土坑（SK）が 11 基、古道と道路状遺構（赤道）、わずかの柱穴（ピット）である。このうち、SD01 と SK01 と SK02 は近世以降に造られた遺構で、今回の報告には詳細を記載していない。

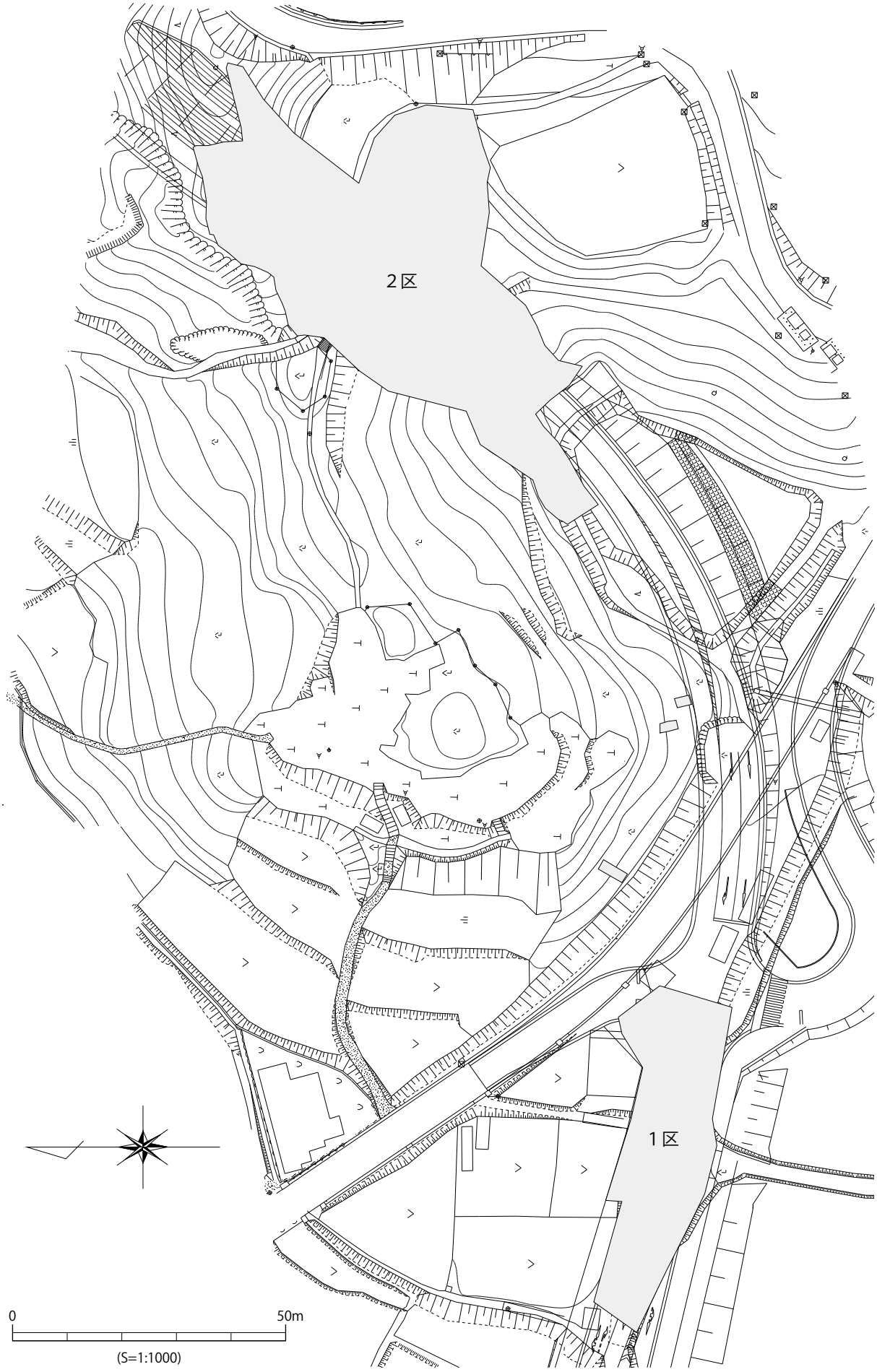
また、1 区の東側は遺構が全く確認されていないが、これはこの上に近年造られた建物があり、地山を掘り込んで大規模に造成されていたためで、本来遺構が存在したのか全く不明である。造成された土砂の中にも遺物は発見できなかった。

１号墳（SD02）（第 34 図）

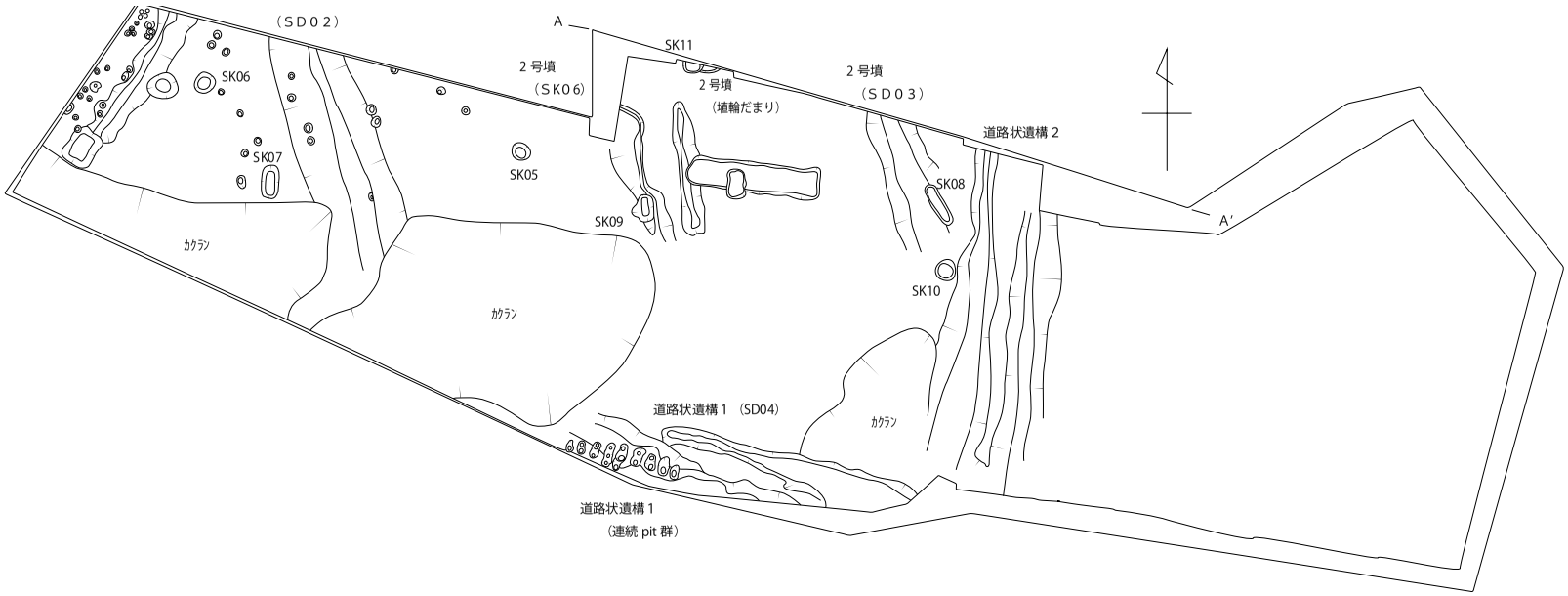
SD02 は、1 区の西側で検出された溝状遺構である。遺構検出面までは耕作によって削られており、現存の規模は、長さ約 9.2m で最大幅約 3.4m、最も深いところで約 0.5m 残っていた。遺構は調査区を北西から南東へ横切っているが、遺構の南西側と南東側は大きく削平されており、錠の手池へ遺構は続くと思われるが、この痕跡は残っていなかった。遺構の検出面及び底面の形状は、ほぼ直線になっていると判断している。

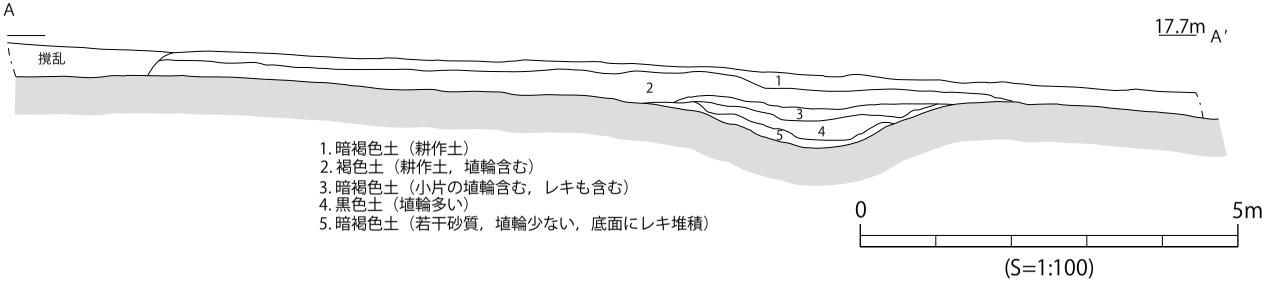
遺構の土層断面を観察すると、埋土は３層に分かれ、最下層の５層には埴輪片が少ないが、底面に礫が多数出土している。中層である４層（黒色土層）には埴輪片が多量に含まれており、上層の３層では埴輪片や礫が少なくなっている。

共伴遺物は、埴輪と須恵器で、他に多数の礫が出土している。この礫は古墳の葺石と考えられる。礫は円礫と亜円礫、亜角礫で、10㎝～ 20㎝のものが多い。埴輪は全て破片で、また非常に風化した状態で出土している。埴輪が１個体分まとまって出土している地点はなく、SD02 の南側と中央あたりの２カ所で接合可能な埴輪がまとまって出土したが、完形に復元できなかった。南側の埴輪のまとまりは、第 65 図２の朝顔型埴輪で、胎土の色調が淡褐色であった。

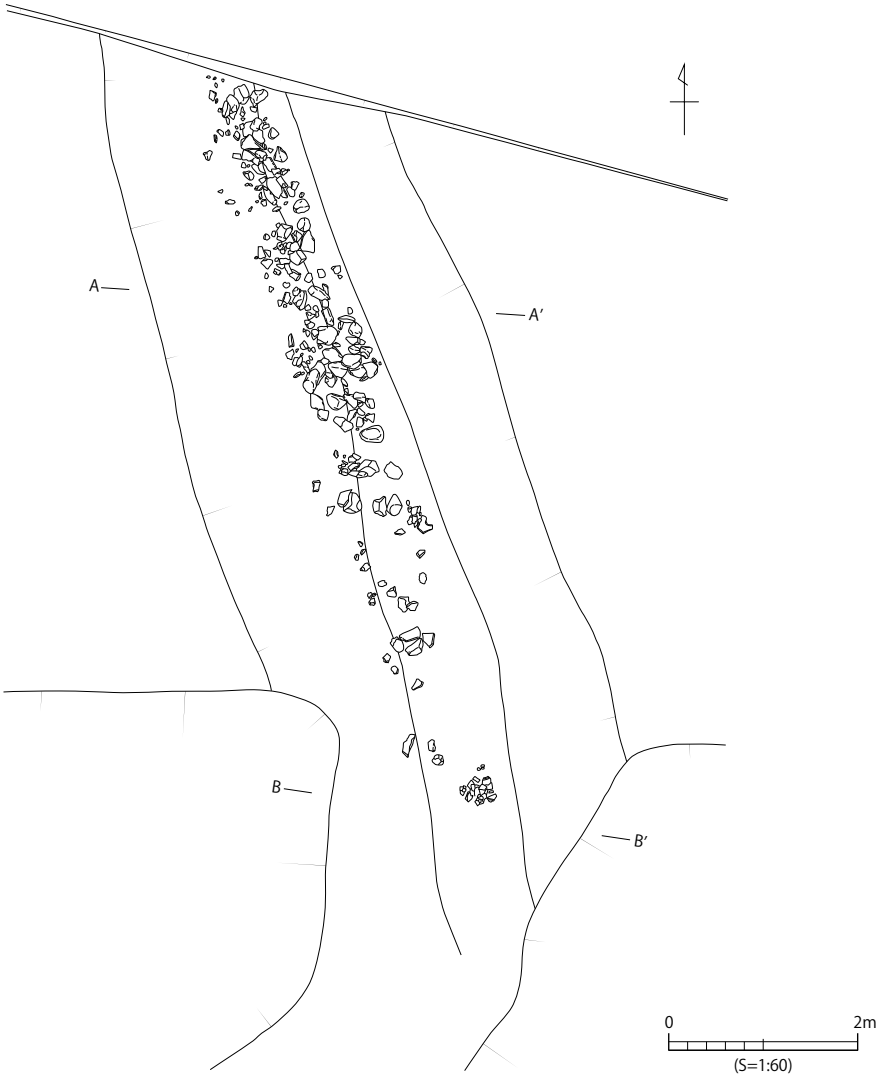


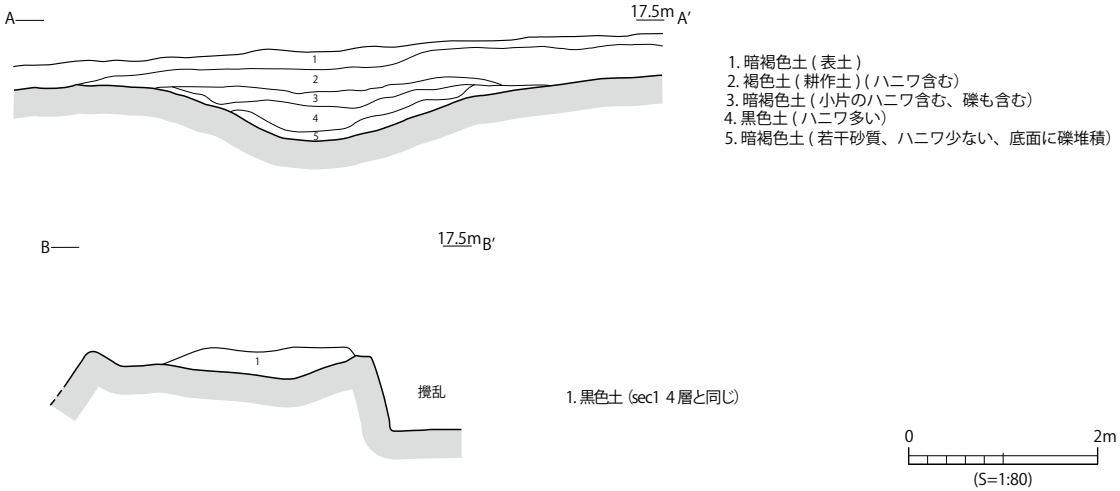
第 32 図　鞍切遺跡　調査区位置図（S＝1/1000）



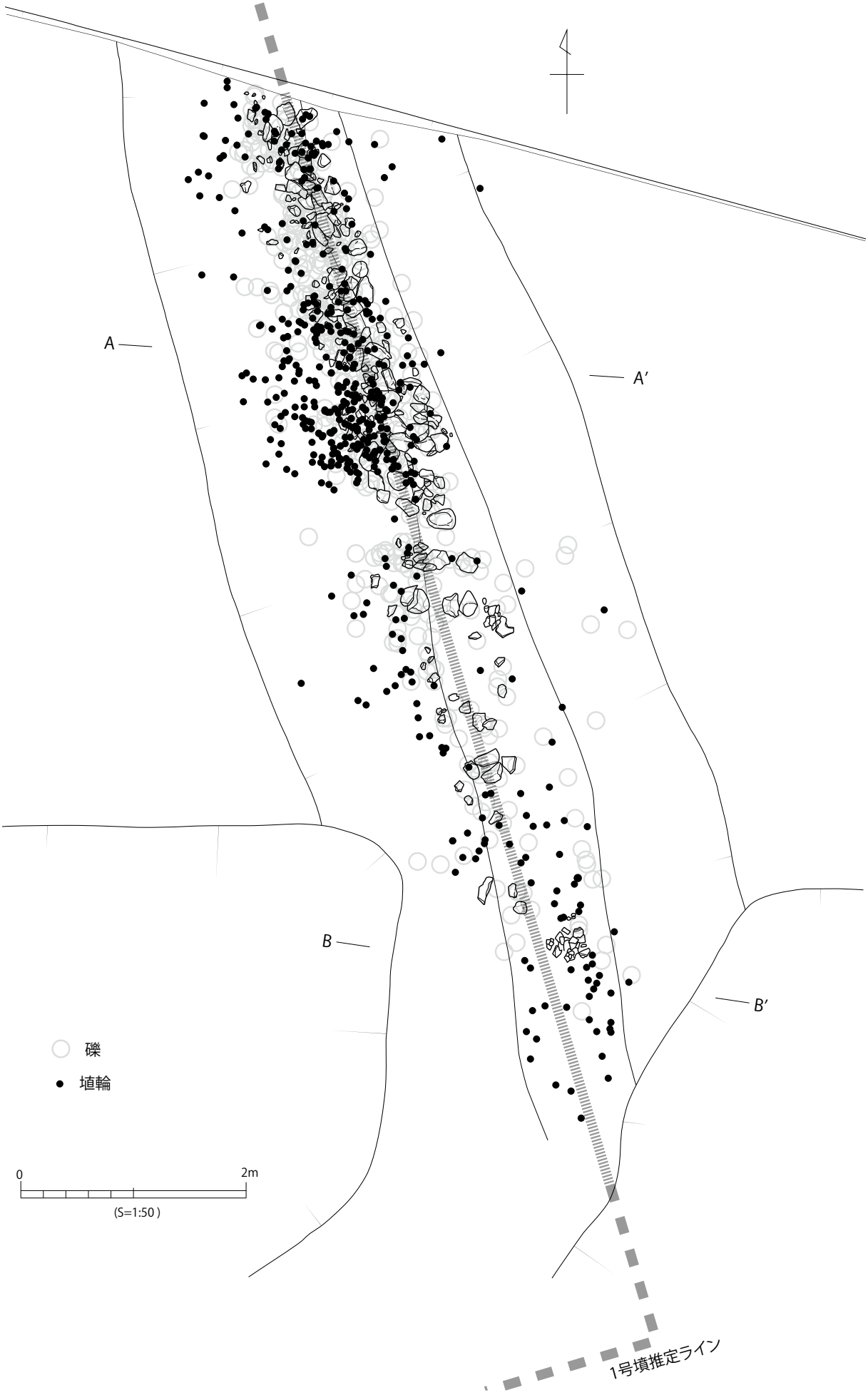


第 33 図　鞍切遺跡　１区遺構配置図（S＝1/300）





第 34 図　鞍切遺跡　1 区 1 号墳 (SD02) 実測図（S = 1 /80）



第 35 図　鞍切遺跡　1 区 1 号墳 (SD02) 遺物出土状況図（S＝1/50）

須恵器は SD02 の北側で調査区の際に近い地点で出土している。礫や埴輪に混じって出土している状況で、5 層の上面で出土している。

第 35 図の遺物分布状況を見ると、埴輪や礫の出土分布は SD02 の底面より西よりで出土している。埴輪の分布も全ての層で西側から中心であることから、これらの遺物は本来西側に存在したものが、転落したものと考えられる。

以上のことから、この遺構の規模が非常に大きいこと、埴輪や須恵器、礫を共伴すること、また遺物の出土位置から、SD02 は方墳の周溝で、古墳の主体部は SD02 の西側にあったと考えている。また、古墳築造後、最初に葺石として利用されていた礫と少数の朝顔型埴輪を含む埴輪が周構内に転落し、その後、多くの埴輪、須恵器が転落したものと考えられる。

主体部は調査区内に発見できなかったことから、調査区内にあったものが削平されているか、調査区外に主体部が存在しているのではないかと考えている。

2 号墳（SD03）（第 36 図・第 38 図）

調査区の中央に造られている溝状遺構で、調査区外から南東に向かって伸びている遺構である。南東側は道路状遺構（赤道）によって削平されているが、残存している大きさは長さ約 4.9m で最大幅約 2.2m、最も深いところで約 0.2m である。検出面及び底面から直線に近い溝状遺構であったと考えられる。共伴する遺物は、数多くの埴輪と礫である。SD02 と異なり SD03 の底面に礫が貼り付いている状況はほとんど見られなかった。埴輪と礫は埋土の最下層ではなく、中層あるいは上層に確認された黒色土層で多数出土した。黒色土層で埴輪が多く出土する状況は SD02 と同様である。

第 38 図の遺物の出土状況を見ると、埴輪と礫の出土分布は遺構の西側半分に偏っており、遺構の東際ではほとんど出土していない。埴輪の遺存状況は SD02 に比べ表面が風化しておらず、数点の資料で接合したものが多いが、完形になる資料はなかった。

以上のことから、SD03 は方墳の周溝で、古墳は SD03 の西側に存在したものと考えられる。

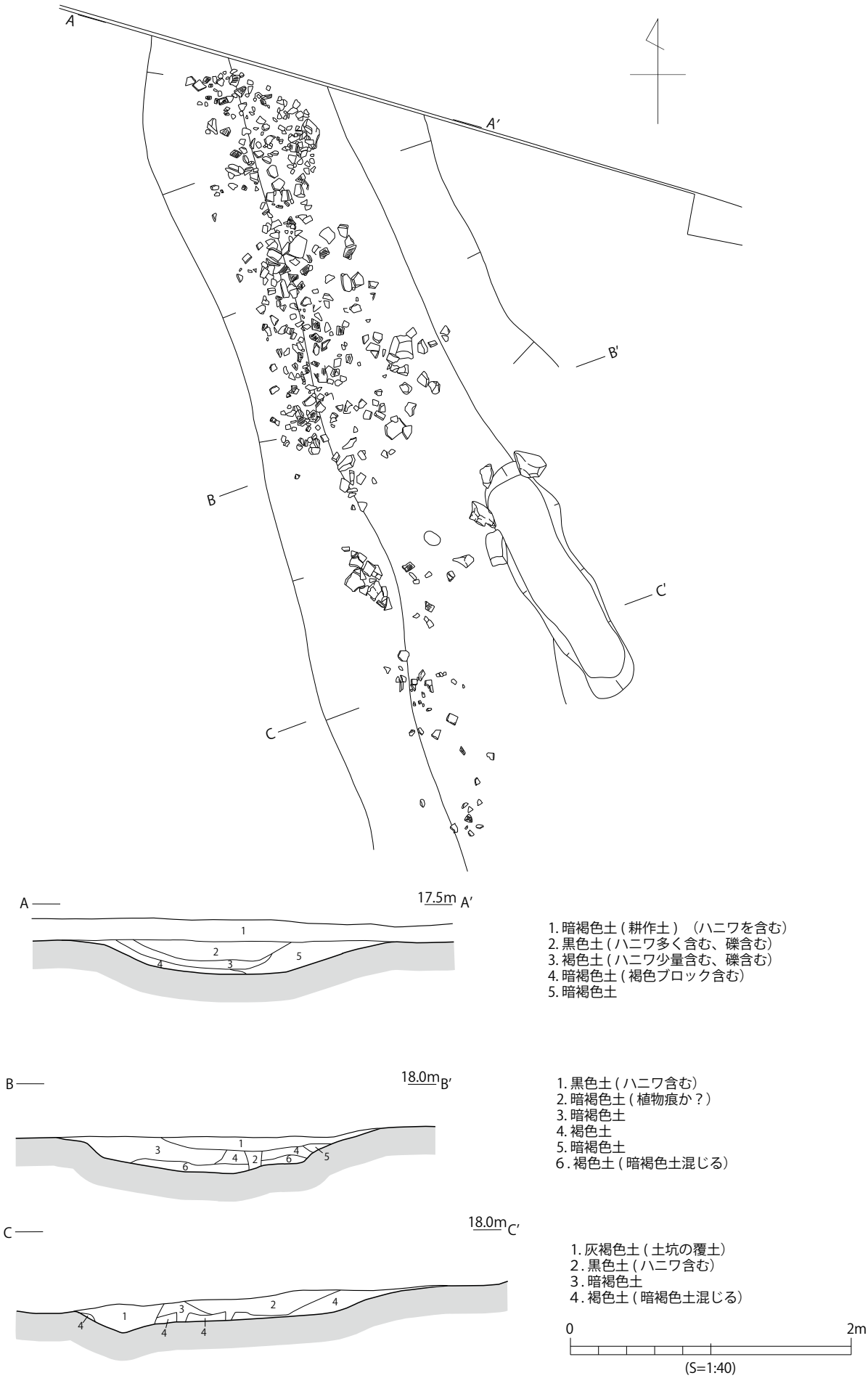
2 号墳（埴輪溜まり）（第 37 図・第 38 図）

調査区の中央、北壁近くで確認された埴輪が中心に出土する遺構である。SD02 や SD03 と同じ地山上面で検出した遺構で、発掘当初は埴輪のみで遺構が存在しないように思われたため、この名称になっている。調査を進めていき、埴輪を取り上げていくと暗褐色土層等が埋土となって堆積している溝のようになっていることがわかり、埴輪溜まりは溝状遺構であり、埴輪は溝状遺構に伴う遺物であると考えられる。調査区の際であったが、調査可能な範囲まで調査区を拡張し、遺構の全体の把握に努めたが、溝の一端は確認できなかった。したがって、溝の一端は調査区外に存在するものと考えられる。

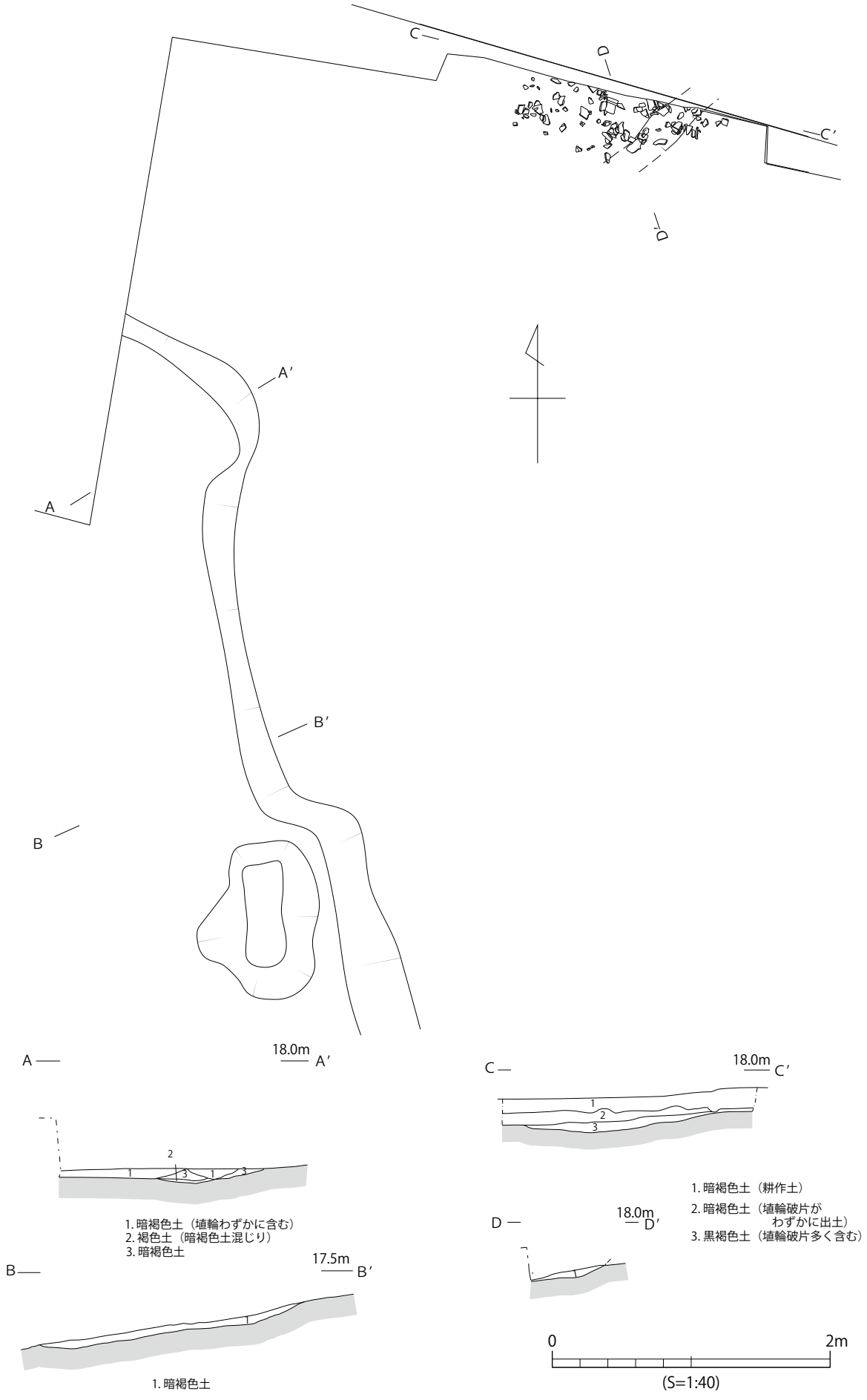
出土した遺物のほとんどは埴輪で、出土状況は検出面で確認できる状態であった。埴輪の取り上げ後の下層は、埴輪がわずかに出土する層が堆積しており、溝状に落ち込んでいた。この状況は SD03 と同様である。

また、埴輪の遺存状態も、全て破片ながら風化度合いが SD02 ほど進んでおらず、表面が残っている状況で、さらに接合が可能な遺存状況であった。この点も SD03 の埴輪の遺存状態と類似している。

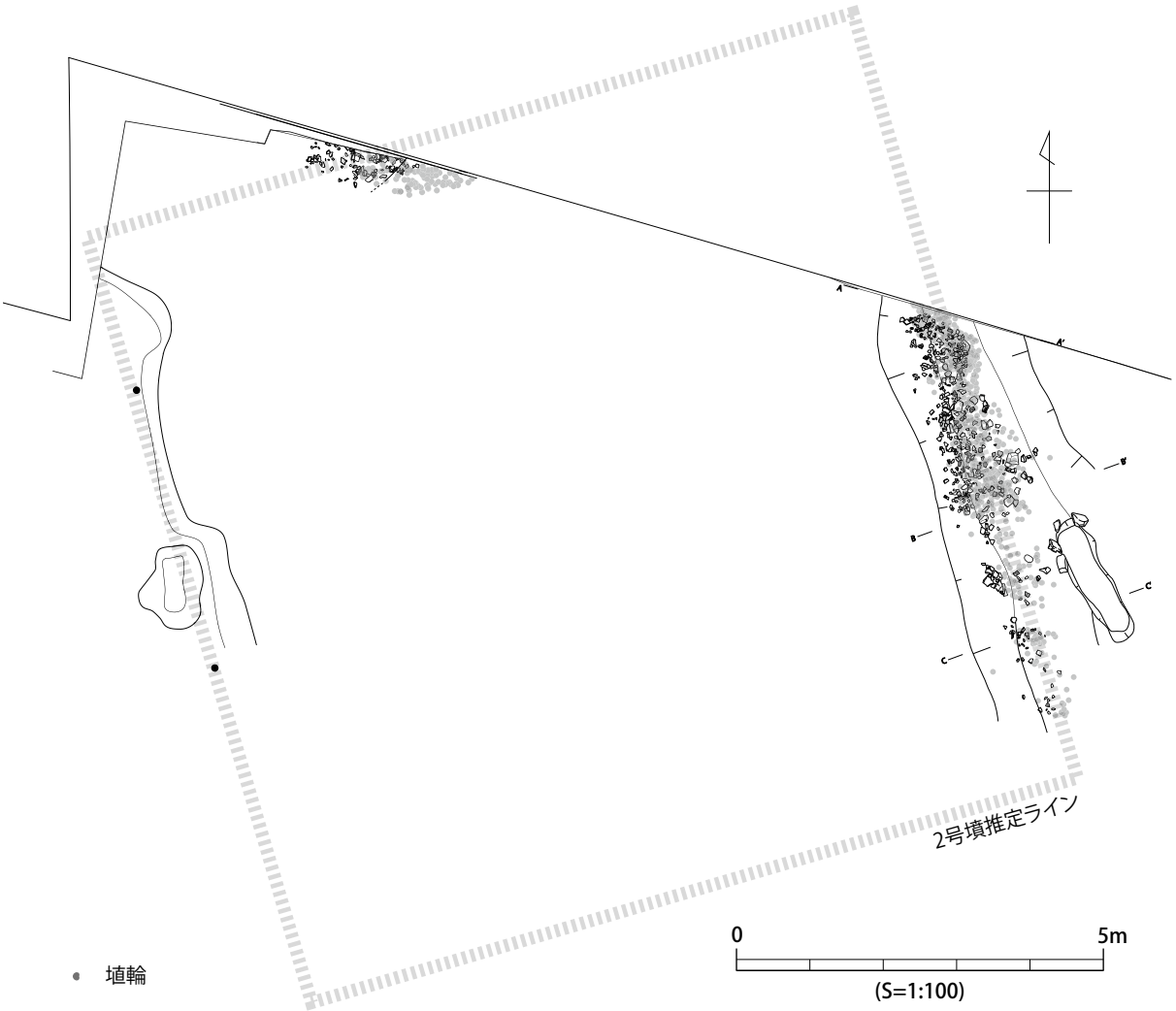
溝状遺構は調査区外から、南西方向に伸びている。しかし、北壁から南西に 0.4m までしか掘り



第 36 図　鞍切遺跡　1 区 2 号墳 (SD03) 実測図（S ＝ 1 /40）



第 37 図　鞍切遺跡　1 区 2 号墳 (埴輪溜まり・SD06）実測図（S ＝ 1 /40）



第 38 図　鞍切遺跡　1 区 2 号墳遺物出土状況図（S＝1/100）

込みを確認できず、それより先は底面が検出面より上方にあったものと思われる。

以上の点から、埴輪溜まりは、溝状遺構のように掘り込みを一部で確認できたこと、埴輪を伴うこと、SD03 と後述する SD06 に直行する方向に溝状遺構が伸びていること、溝状遺構の埋土の状況と、埴輪は底面ではほとんど出土しない点などが SD03 と似ている点から、埴輪溜まりは SD03 と同一の方墳の一辺の周溝の一部であると考えている。

2 号墳（SD06）（第 37 図・第 38 図）

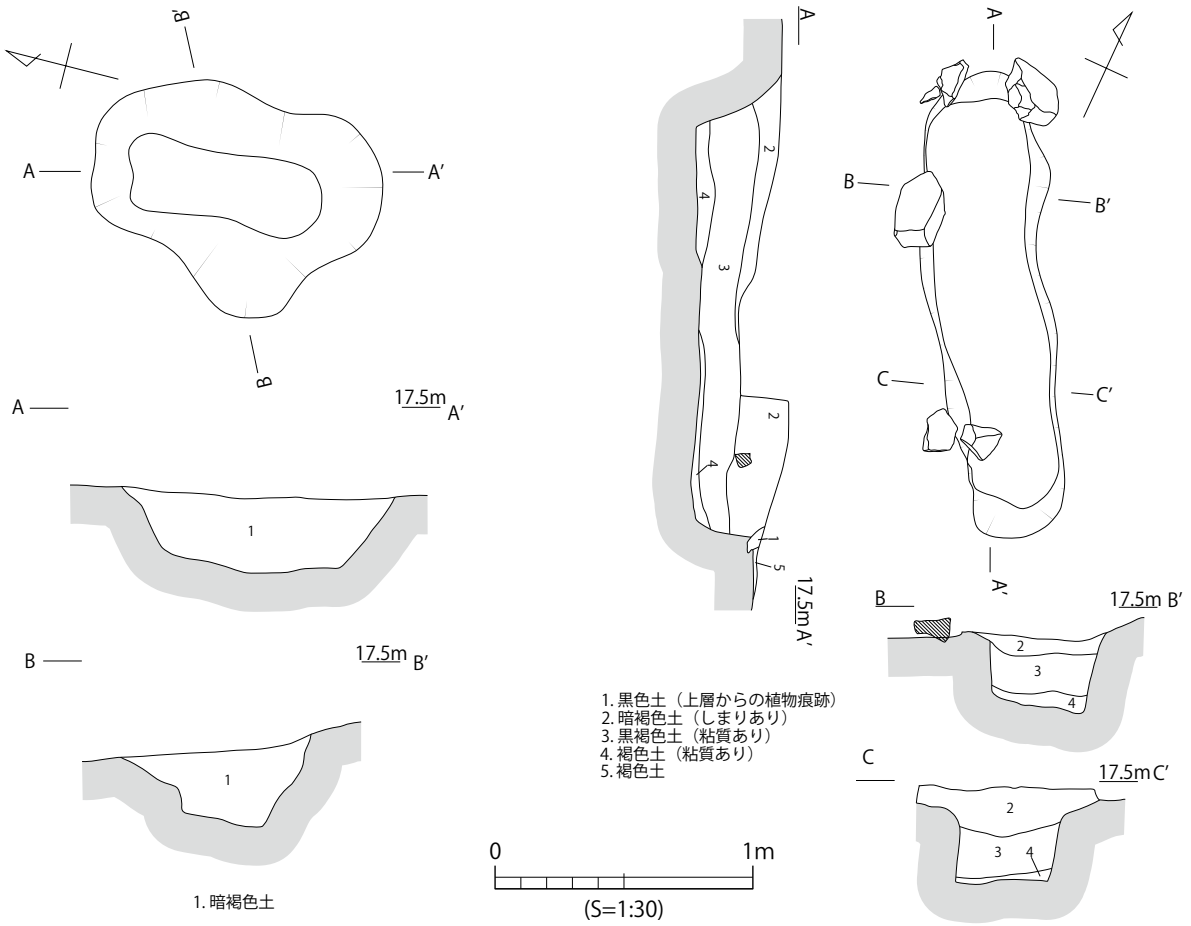
1 区の中央やや西寄りで検出した非常に浅い溝状遺構である。最も深いところで約 10㎝しかなく、ほとんど掘り込みは確認できない遺構であった。

遺構検出面は SD03 や埴輪溜まりと同一で地山面であり、共伴遺物は埴輪片が 1 点である。この埴輪片は遺構検出時に確認できたもので、遺構の底面より若干上方で出土している。

SD06 周辺は埴輪溜まりの周辺より地山が徐々に傾斜しており、溝状遺構の底面がほとんど残っていない状況で、遺構の深さがほとんどなく、非常に検出が困難な遺構であった。

出土した埴輪は、円筒埴輪片が 1 点である。小片であり図化はしてない。埴輪の表面の風化は進んでおらず、SD03 や埴輪溜まりで出土した埴輪と同程度である。

溝状遺構としては非常に浅く、出土した遺物も少ないため断定はできないが、第 38 図を見ると、SD06 の方向が SD03 とほぼ並行している点、埴輪溜まりの下部の溝状遺構の向きと直交している



第 39 図　鞍切遺跡　1 区 SK08･09 実測図（S＝1/30）

点、埴輪が共伴する点から、SD03 と埴輪溜まりと合わせて同一の方墳の周溝であると考えている。

SK08（第 39 図）

SK08 は SD03 に重複している遺構である。両者の土層の堆積状況から SD03 が造られ、埋まった後に、SK08 が掘り込まれている状況が確認できている。

土坑の規模は長軸が約 1.8m で短軸は約 0.5m、最も深い地点が約 0.3m であった。土坑の壁面に沿って礫が配置されている、この礫の石材は当地で採取される赤色系の安山岩である。礫の一部は土坑に落ち込んでいる状況が確認できた。

出土した遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、2 号墳の周溝と考えられる SD03 は埋没した後に掘られていることから、古墳時代後期以降に造られた土坑であり、検出位置が古墳の周溝内であることから、ある程度古墳を意識し造られている可能性がある。

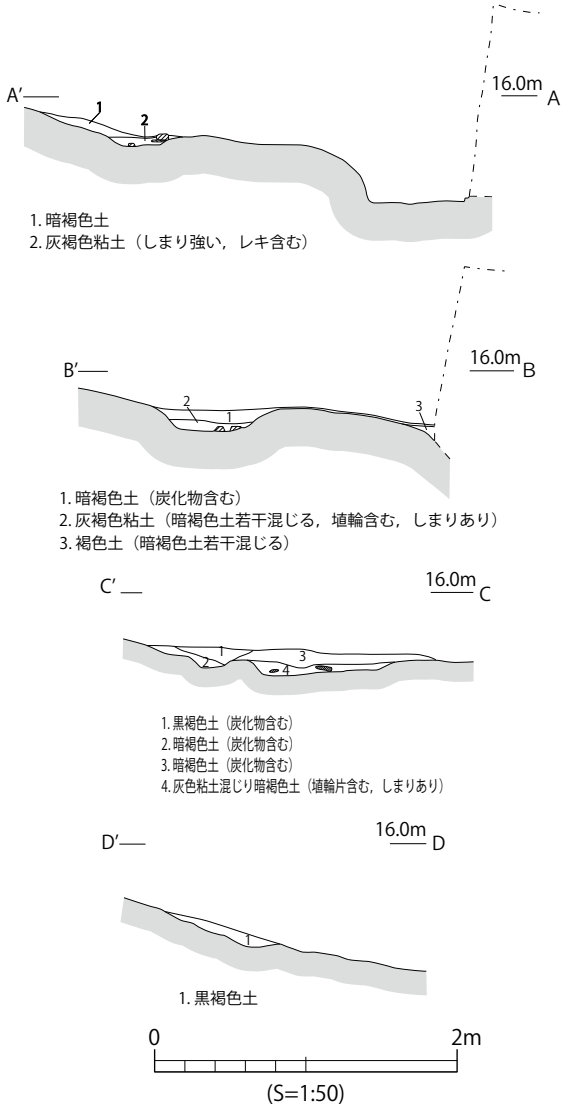
SK09（第 39 図）

SK09 は、1 区の中央に造られた土坑で、前述の 2 号墳の周溝と考えられる SD06 に重なるよう位置している。大きさが長軸約 1.5m、短軸約 1.1m、深さ約 0.4m の土坑で、平面形はやや不正形な小判形で、底面は平坦である。出土した遺物はなく、遺構の造られた時期は不明であるが、SK08 と SD03 のように古墳の周溝内で確認されているため、SD06 と何らかの関係を考える必要もある。

道路状遺構 1（第 40 図・第 41 図）

道路状遺構 1 は調査区中央の南壁に近接して検出された遺構で、2 つの遺構からなる。一つは、SD04（第 40 図・第 42 図）としている溝状遺構で、もう一つは連続するピット群で構成された遺

第 40 図　鞍切遺跡　1 区　道路状遺構 1 実測図（S ＝ 1 /50）



第 41 図　鞍切遺跡　1 区　道路状遺構 1 実測図（S＝1/50）

構である。

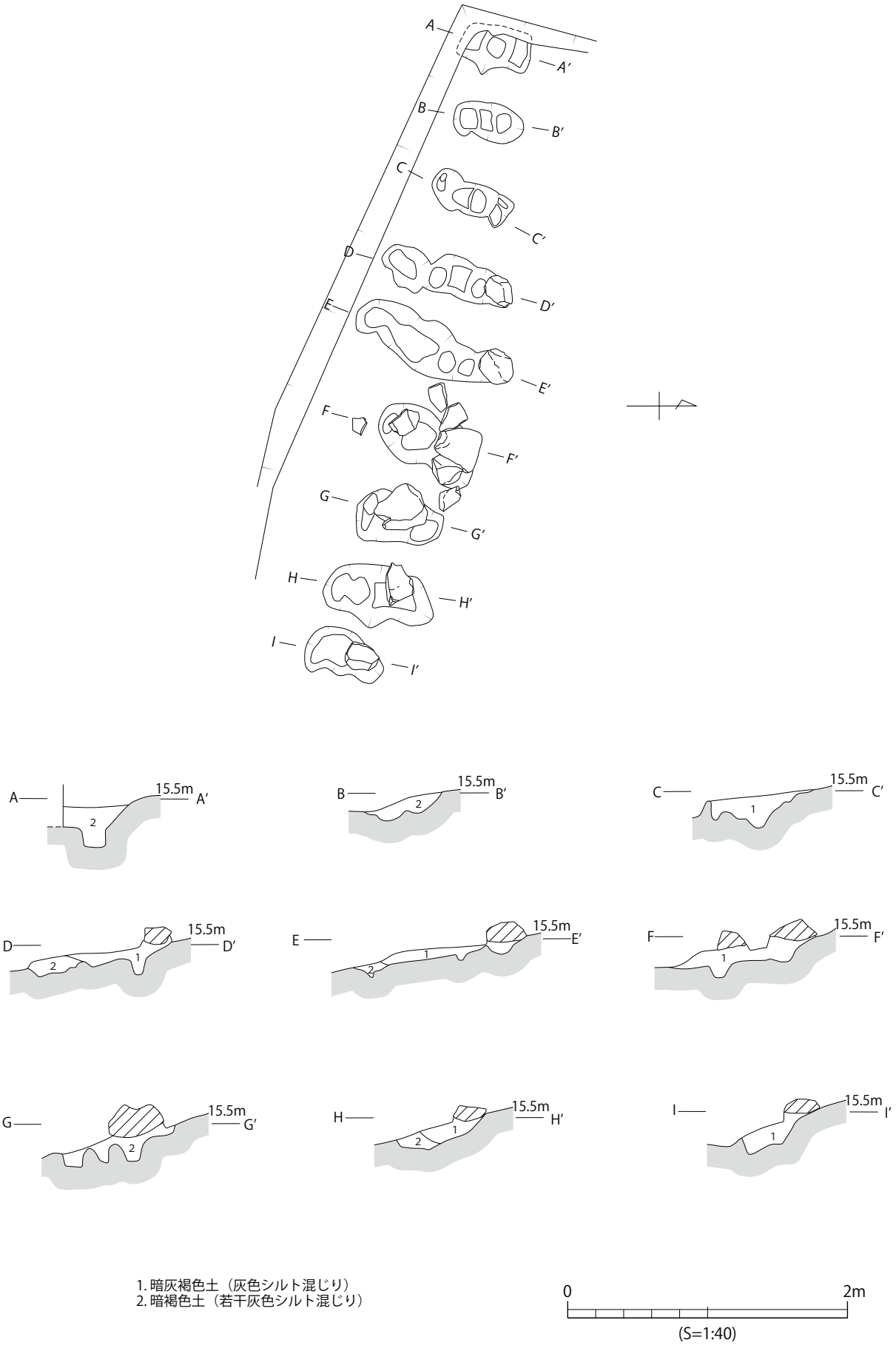
この二つは並行して調査区の南橋を東西に延びている。しかし、調査範囲内で収束せず、確認できた部分以外は調査区外に延長しているものと考えられる。

SD04 は斜面の傾斜部分に造られ、連続するピット群（第 40 図）は傾斜が緩くなって、平坦面が形成された地点に造られている。この平坦面は遺構に伴って造成されたものか、自然地形を生かし造られたのかは不明である。この二つの遺構とも等高線に沿って造られているので、何らかの関係があると思われるが、二つの遺構の関係を調査時に土層で観察しておらず、また接合遺物などもないことから、二つの遺構の関係は調査では確認できなかった。

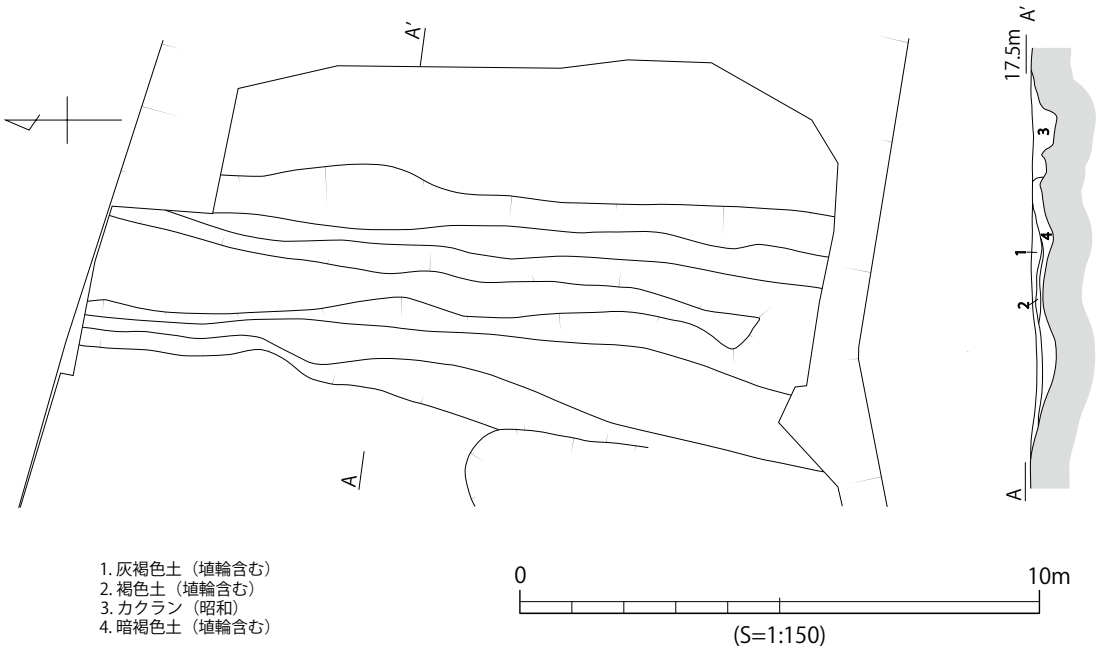
SD04 は長さが約 10.4m で、幅が約 0.5m ～ 1.6m、深さが最大 18㎝の溝状に掘りくぼめられた遺構で、底面にはピット状に凹凸が築かれている。西端は丸く収まっており、東端は調査区外に延びている。西側半分の幅は狭く、それぞれ掘り込まれたピットが連続して繋がっているような状態であった。東半分には西半分のピット状ほどの落ち込みはなく、底面に浅い凹凸がいくつかの単位となって見られる程度であった。ピット状のくぼみを中心に角礫と亜角礫が密度は散漫ながらも敷き詰められ、その上をしまりのあるシルト層が覆っている。敷かれている礫の大きさはおよそ 30㎝程度の安山岩が多く、当地で採取できる石材である。遺構の幅が広くなる東半分にも更に散漫になりつつも礫が遺構底面に見られた。出土遺物は円筒埴輪片のみであるが、この埴輪は SD04 の北側にある 2 号墳に伴う埴輪と思われる。したがって、SD04 は 2 号墳の築造以降に造られたと考えられる。

連続するピット群は、SD04 より更に南に造られている。調査では 9 つの連続するピットが確認された。このピット群を構成する個々のピットは、更に小さい複数のピットが集合し、一つのピットとなっているようである。ピットの上面には礫が配置されているが、全てピット内に落ち込んでいないことから、ピットを埋めた後に上面に配置したものと考えられる。また、この礫は一部を除いて、ピットの範囲内に収まっておりピットと何らかの関係があると思われる。さらに礫の出土位置はピット上面の北側に偏って出土する傾向が見られた。

ピットの埋土は 1 層あるいは 2 層に分けられるが、両層とも灰色シルト混じりで SD04 の埋土



第 42 図　鞍切遺跡　1 区道路状遺構 1 土層図（S ＝ 1 /40）



第 43 図　鞍切遺跡　1 区　道路状遺構 2 実測図（S＝1/150）

と同様であることからも連続するピット群は SD04 と何らかの関係があると考えられる。出土遺物はなく遺構の年代は特定できなかった。

道路状遺構 2（第 43 図）

1 区の中央東寄り、SD03 の東側で、1 区で最も東に位置している遺構である。この道路状遺構 2 の調査前の状況は里道（赤道）として周辺住民に利用されており、西谷地区から南東方向に伸びる市道から南に向かって派生し、錠の手池を分断する堤防を里道として新山地区方向に抜ける道であった。この里道の下を発掘調査した結果、南北に並行した 2 条の溝状遺構が確認された。この 2 条の溝状遺構の断面は緩やかな傾斜で落ち込んでいる。2 条の溝状遺構であるが、里道の下方で検出された点、里道と同じ南北方向に並行して掘り込まれている点からこの 2 条の溝状遺構は道路に関係した遺構と判断し、ここでは道路状遺構として報告する。

出土遺物は埴輪片や 10 枚程度が重なっていた青銅製と思われる古銭(輪銭)であった。したがって、この遺構は古銭の時期以降に造られた遺構であると考えられる。

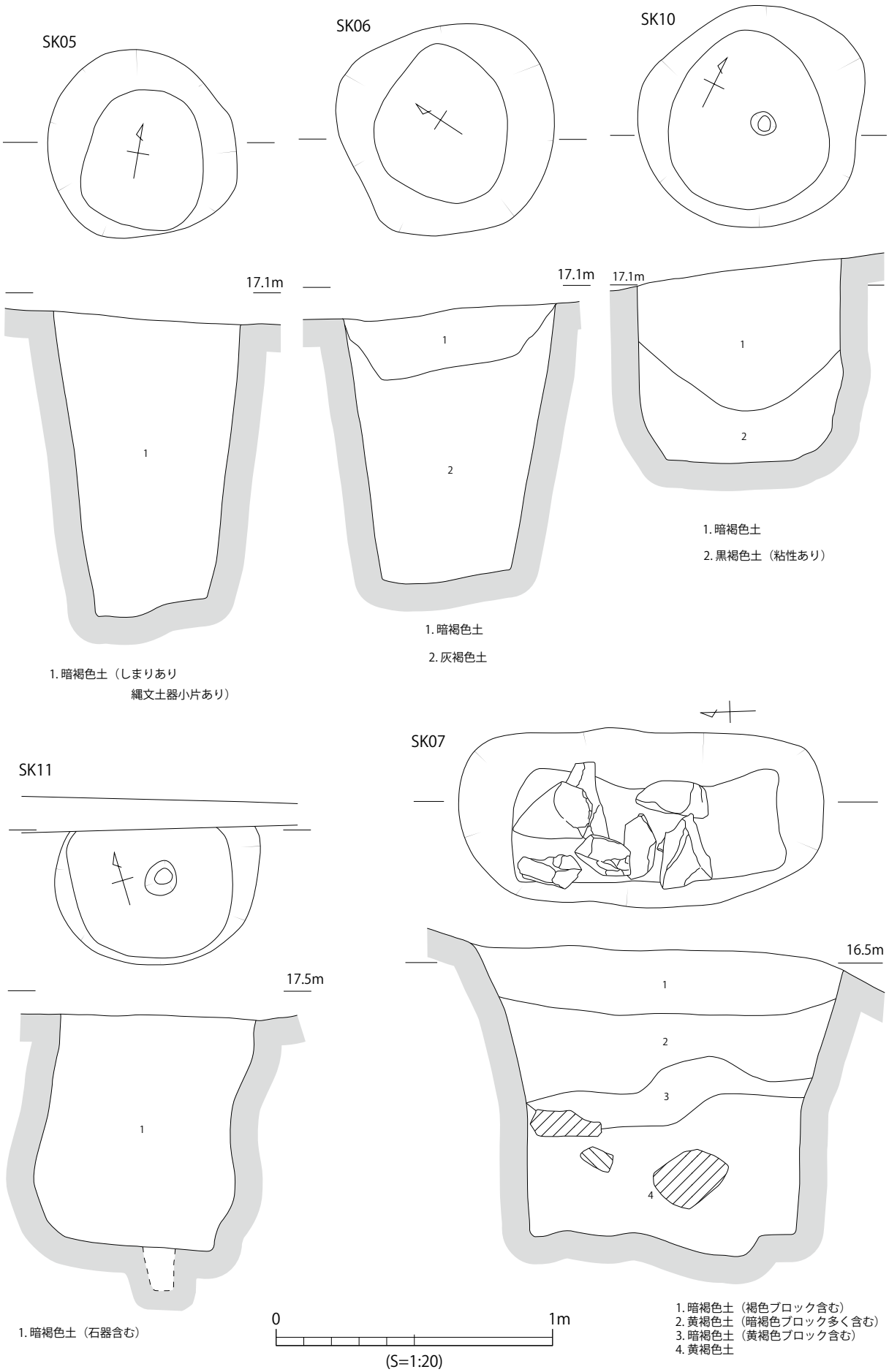
SK05（第 44 図）

1 区の中央やや西よりに位置する土坑である。SD06 と SD02 の間に掘られている。検出面は地山面で、上面に堆積しているのは耕作土であった。したがって、土坑は本来調査時より深くなっていた可能性が高い。土坑の平面形は円形で、検出面の遺構の直径は約 0.7m で、深さは約 1.1m で壁面が垂直に近くなっており埋土は 1 層で、縄文土器と思われる土器片が含まれていたが、小片であったため図化できなかった。底面は平坦で、杭穴状の掘り込みなどはなかった。周辺に同様の土坑が存在する点から縄文時代の落とし穴と思われる。

SK06（第 44 図）

SD02 の西側に位置している土坑で、検出面は地山である。埋土は 2 層で出土遺物はない。底面は平坦で、杭穴等は発見できなかった。縄文時代の落とし穴と考えられる。

SK07（第 44 図）



第 44 図　鞍切遺跡　1 区　SK05･06･07･10･11 実測図（S＝1/20）

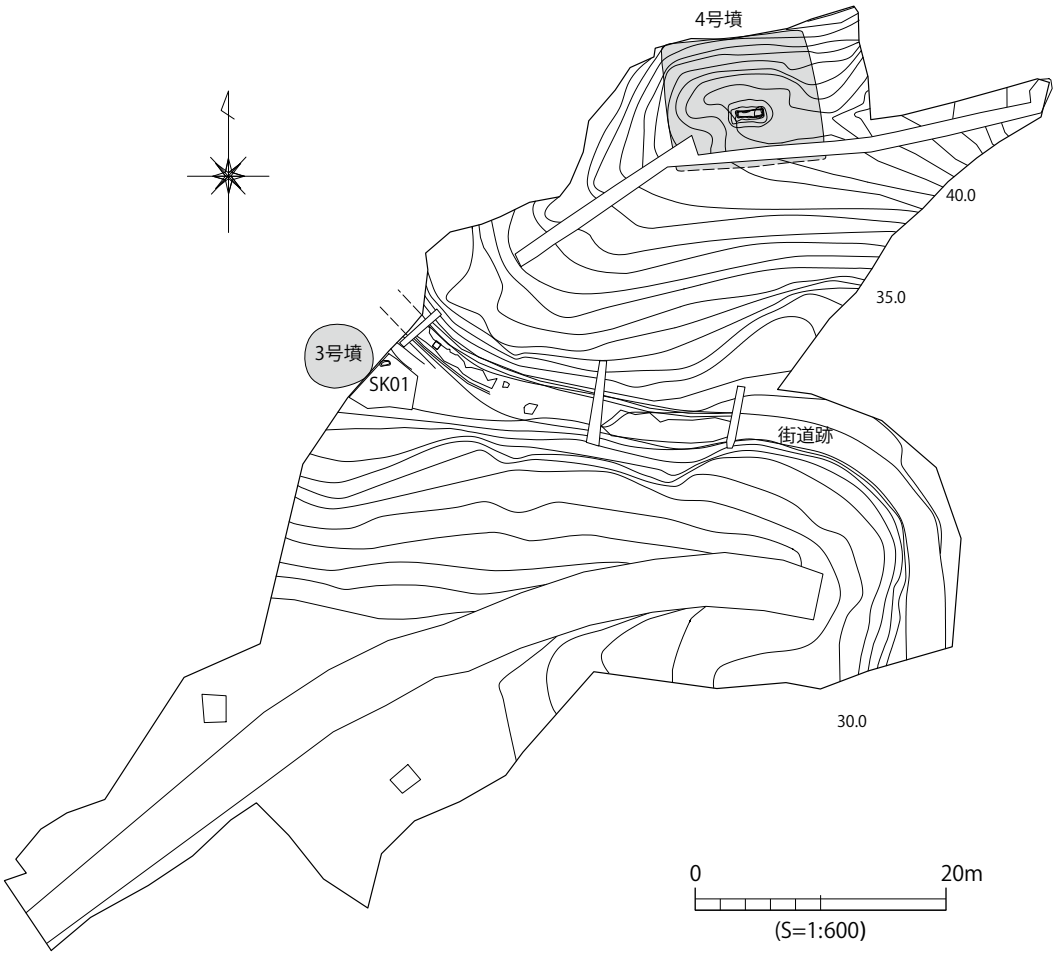
SD02 の西側で、SK06 の南東に位置する土坑である。平面形は楕円形で、長軸は約 1.3m、短軸は約 0.7m である。深さはおよそ 1.1m であった。埋土は 4 層に分けられ、最下層の 4 層に礫が確認された。礫は底面に接していなかったが、検出面はほぼ同じ面であった。礫の分布は北側に偏りがみられ、南側には礫が無かった。意図的に空間を作っていた可能性がある。出土遺物はなく、遺構が造られた時期は不明である。SK11 のように縄文時代の落とし穴と平面形も異なり、礫が土坑内部から出土していることから、時代や性格が異なっている可能性が高い。

SK10（第 44 図）

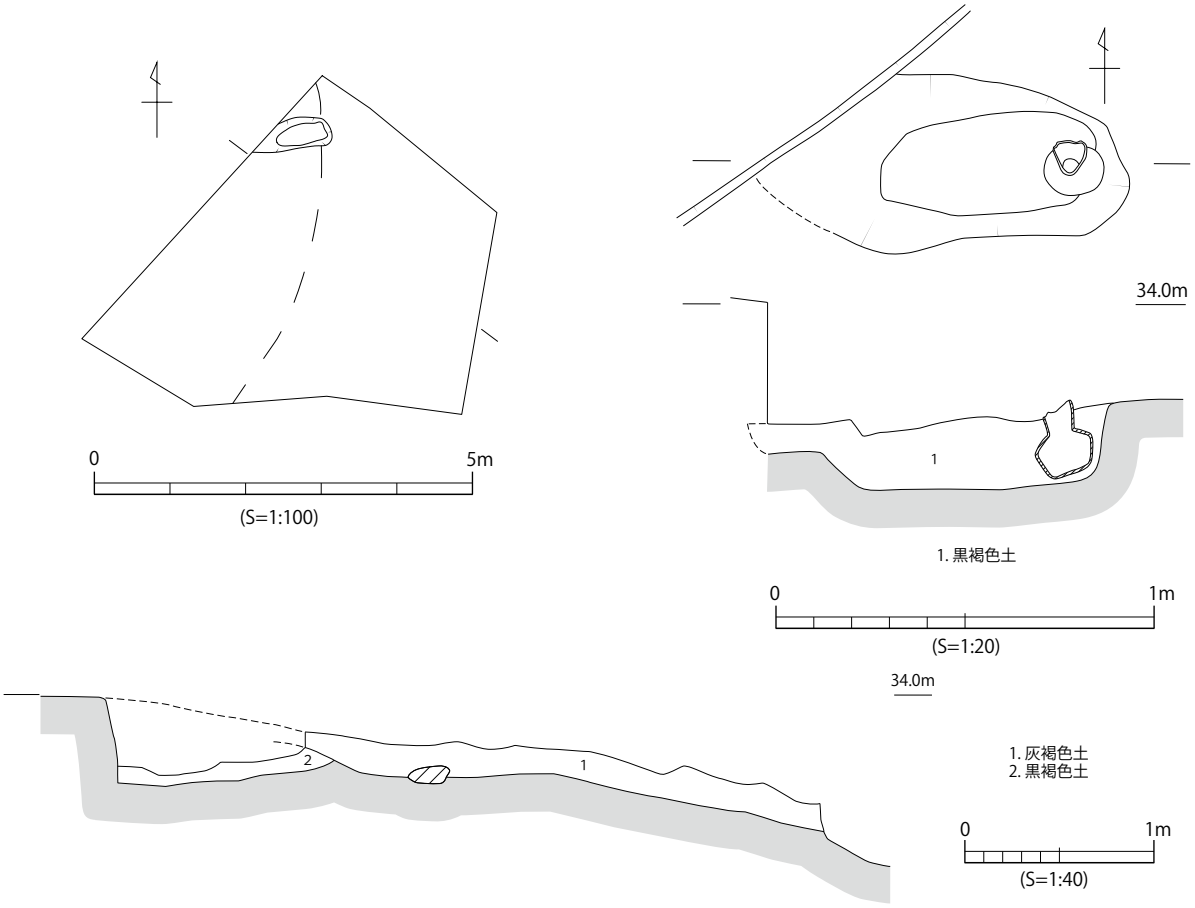
SK08 の南側、SD03 の南延長上に位置している土坑である。平面形は円形で、直径約 0.8m で、深さは約 0.7m で、SK05 や SK06 と比較すると浅くなっている。これは検出面が SD03 で上部を削平されているためと考えられる。埋土は 2 層で、下層の 2 層の堆積状況は、土坑の周囲から徐々に土砂が堆積していく状況を示していると考えられる。土坑の底面中央には小さなピットが見られた。出土遺物は極小さな土器の破片が 1 点出土している。小片であるためはっきりしないが、胎土や土器の表面の観察から縄文土器と思われる。遺構の性格は SK05 や SK06 と同様に縄文時代の落とし穴と思われる。

SK11（第 44 図）

調査区中央北壁に隣接し、埴輪溜まりと検出位置が重なっている遺構である。平面形を推定すると直径約 0.7m の円形で、遺構の深さは約 1m である。遺構の上部は埴輪溜まりや、後世の耕



第 45 図　鞍切遺跡　2 区　遺構配置図調査前測量図（S＝1/600）



第 46 図　鞍切遺跡　2 区　3 号墳（SK01）実測図（S＝1/100・20・40 ）

作によって削平されているものと考えられる。遺構の壁片は直線上に掘り込まれておらず、壁面には凹凸が見られた、底面は平坦で、中心に杭穴状の小さなピットが検出された。埋土は 1 層で、安山岩製の楔形石器（第 54 図 17）が 1 点出土している。縄文時代の落とし穴と思われる。

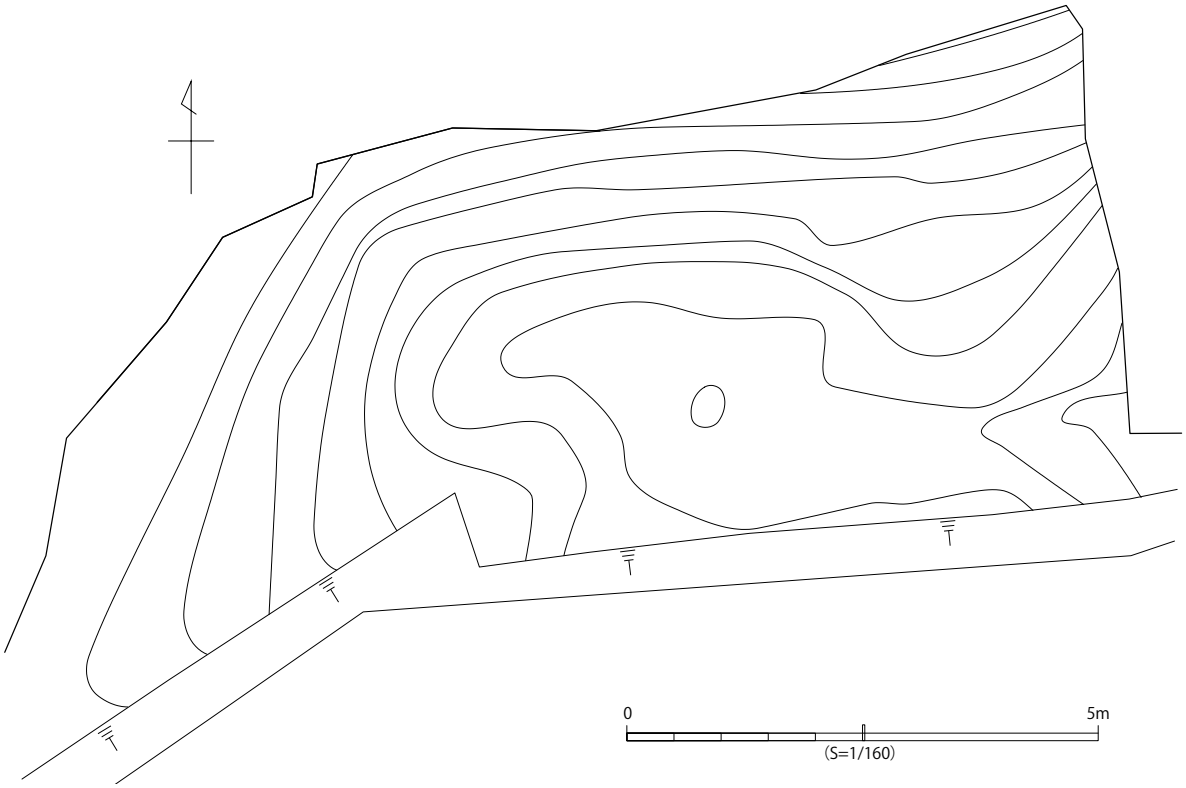
（4）2 区の遺構

2 区は丘陵の斜面から尾根にかけての調査区で、尾根上に 4 号墳があり、斜面には街道跡が存在する。また、調査区外であるが、4 号墳より下方には 3 号墳が存在する、今回の調査では 3 号墳そのものは調査範囲外に存在したため、周溝の埋土の可能性がある黒色土層の堆積について調査を行った。その黒色土が堆積している地点で、須恵器を伴う土坑（SK01）を 1 基確認した。

SK01（第 46 図）

標高約 35m の尾根に造られていた土坑である。調査区の北西壁面の土層には表土層の下に黒色土層が存在し、その黒色土層を掘り下げた後に、地山層を掘り込んで SK01 は造られている。調査区外に直径 10m ほどの円墳（3 号墳）が存在することから、この黒色土層は周溝の埋土の可能性があると考えられる。SK01 はこの周溝の底面に掘り込まれている可能性が高いが、調査中に調査区に堆積している黒色土層と SK01 との関係を考えず、掘り下げを行ってしまったために、SK01 と 3 号墳との関係は不明である。

SK01 の平面形は楕円形で、東西に長く、長軸が約 1.8m 以上、短軸が約 0.9m、深さが最大 0.4m



第 47 図　鞍切遺跡　2 区　4 号墳調査前測量図（S＝1/160）

であった。出土遺物は須恵器の長頸壺が 1 点で、ほぼ完形であった。出土位置は土坑の東端で、床面に接する位置で出土している。SK01 の埋土は調査区に堆積している黒色土層と同じであった。長頸壺の年代から 6 世紀末から 7 世紀初めの土坑と考えられる。

4 号墳（第 47 図～第 52 図）

4 号墳は、西谷地区の南東の尾根上に位置し、集落を見渡せる場所に築造された方墳である。古墳の南側が後世の攪乱により削平されており、墳丘裾部の一部、古墳の南側の一辺が残っていない。

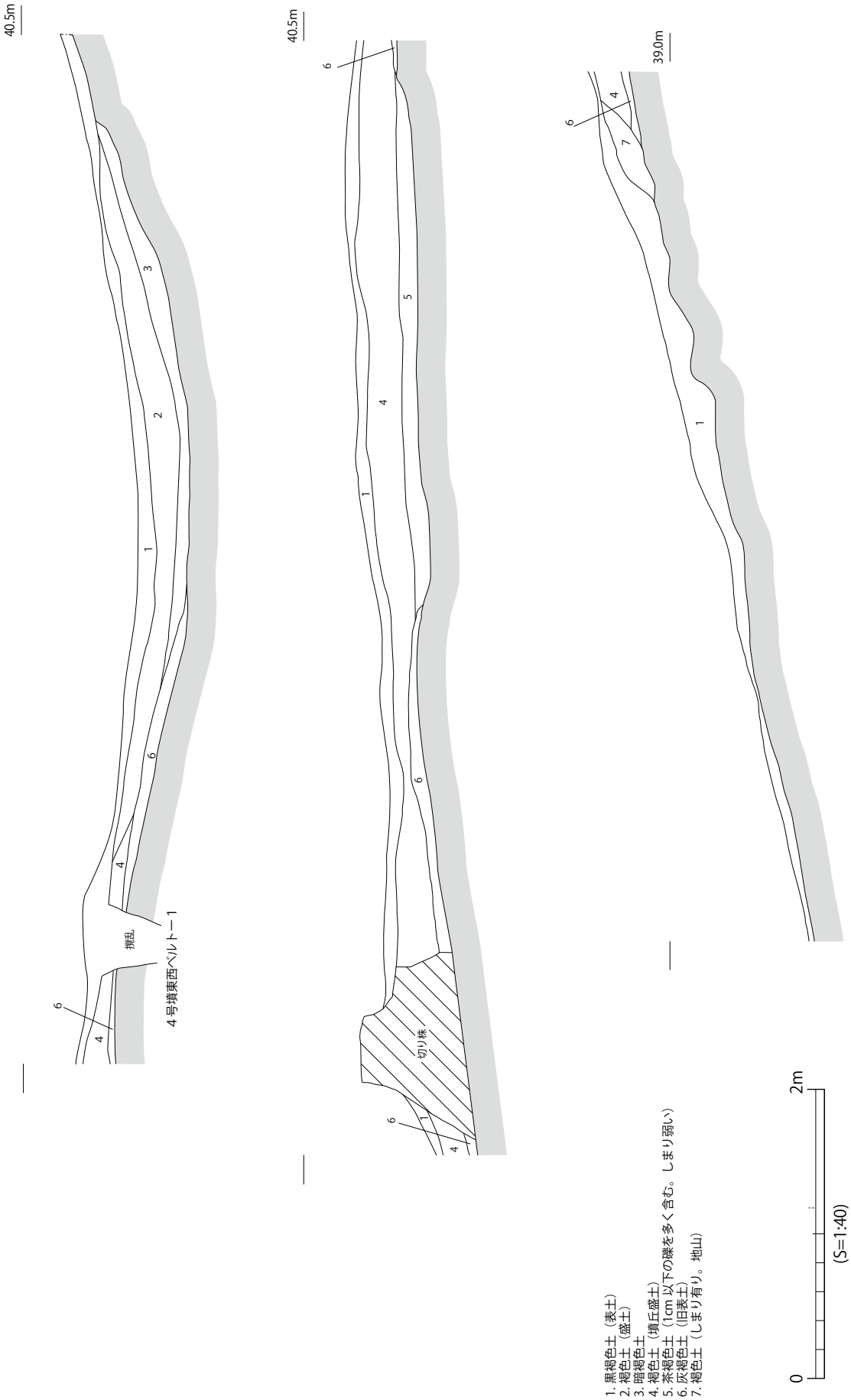
調査前には墳形は円墳の可能性もあると思われていたが、調査の結果、方墳であることが明らかとなった。主体部は 1 基で古墳の中央に造られている。

古墳の土層の堆積状況を観察すると、古墳築造前の表土層と思われる旧表土層の上に、盛土と考えられる土層が堆積している。盛土層より上層は現在の表土層であった。

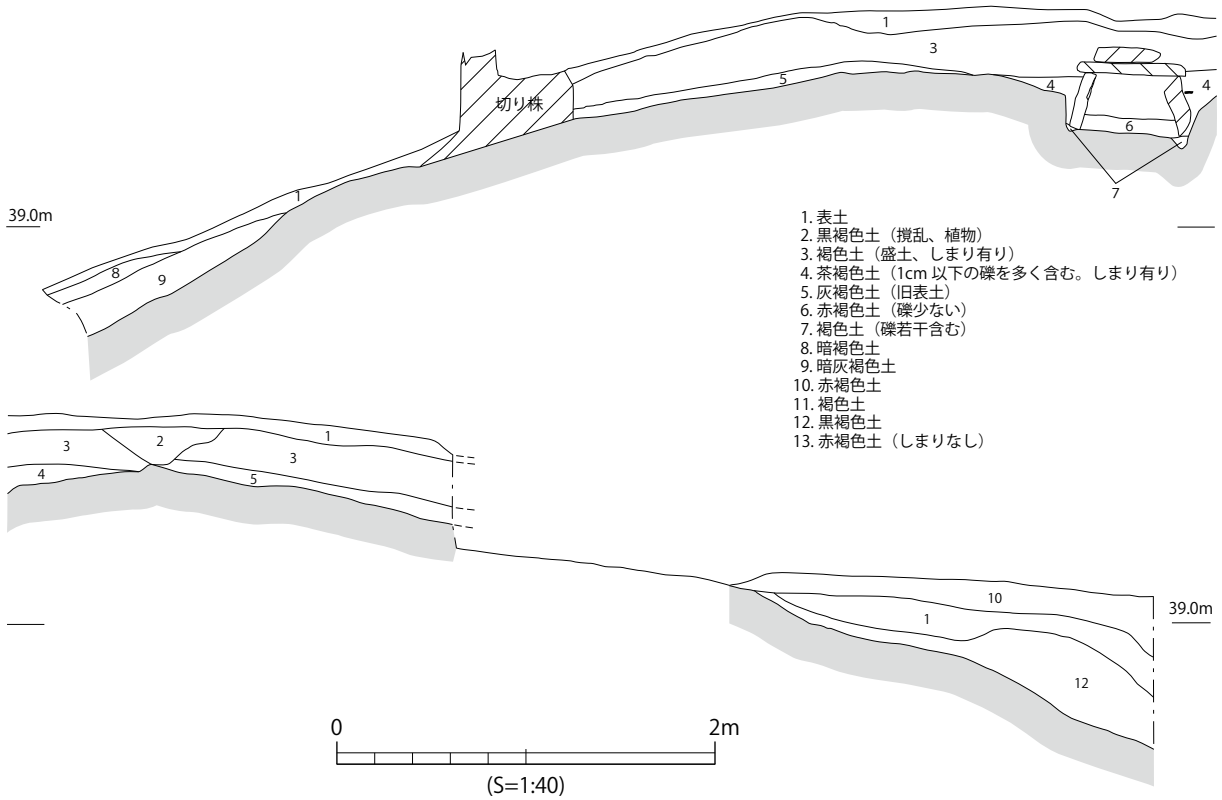
古墳は南側の墳丘裾部が破壊されており、規模は明らかでない。しかし、破壊されている南側の墳丘裾部は地形の制約があり、墳丘の南北方向は最大で 11m までにしかならないようである。規模を推定すると、東西方向は約 11m で、南北方向は約 10m で、わずかに東西方向に大きくなっている。盛土上面の高さは周溝底面から約 0.8m 程高く、墳丘の盛土の厚みは顕著でない。

また、墳丘には段築は認められなかった。墳頂平坦面の大きさを復元すると東西が約 8m で、南北が約 5m である。そのおよそ中央に主体部となる石棺が納められていた。周溝は古墳の東側に尾根に直交するように造られ、古墳を区画している。古墳の中心あたりで周溝の幅が約 5m、現地表面から約 0.4m の深さがあった。墳丘の調査では、埴輪や葺石などの出土遺物は確認できなかった。

主体部は墳頂平坦面の盛土の上から不整形な小判型の墓壙を掘り込んで、石棺を納めている。墓壙の長軸は約 3.3m で、短軸は約 2.1m である。墓壙は端が浅く、中心に向かって徐々に深くなっ



第 48 図　鞍切遺跡　2 区　4 号墳東西土層図（S＝1/40）



第 49 図　鞍切遺跡　2 区　4 号墳南北土層図（S＝1/40）

ている。墓壙の中心は長方形に深く掘り込まれており、底面の長軸はおよそ 1.8m、短軸およそ 0.5m であった。この掘り込みの壁面は、急斜度で下方に落ち込んでいる。壁面と床面の接点には溝を作り、そこに、板状の割石を据え付けて、組み合わせ式の箱式石棺としている。

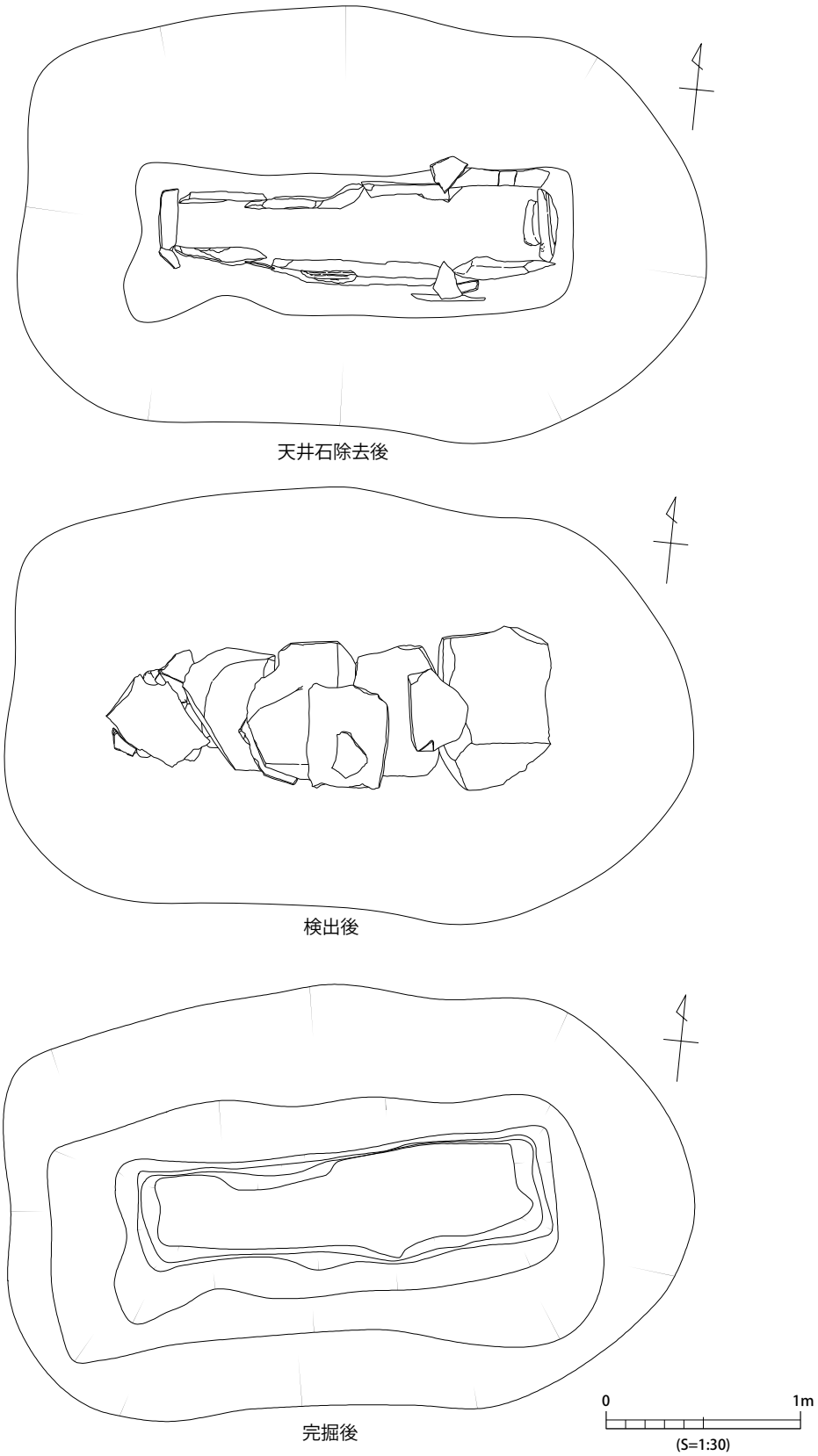
墓壙が石棺接地面へ急激に落ち込む位置に、鉄製の大刀が納められていた。長さ約 40㎝で、刀身のみ出土している。刃先を東向け、刃部を石棺とは反対の南側に向けていた。墓壙内で出土した遺物はこの 1 点のみである。

石棺内は石敷きではなく、地山を掘り込み平坦にして、床面としている。石棺内の埋土は 2 層あり、上部層は非常に淘汰された赤褐色土が充満していた。しまりが全くなく、粒度が揃っていたことから、石棺の外部から内部への水分の進入に合わせて入り込んだ盛土の一部であると考えられる。下部層は同じ赤褐色土でありながら、しまりがあり、上面が平坦となっていた。この下部層上面では後述する枕石の可能性が高い礫も出土しており、下部層は石棺の側板及び小口板を設置後に石棺内の床面として、埋葬時の床面としたと考えられる。

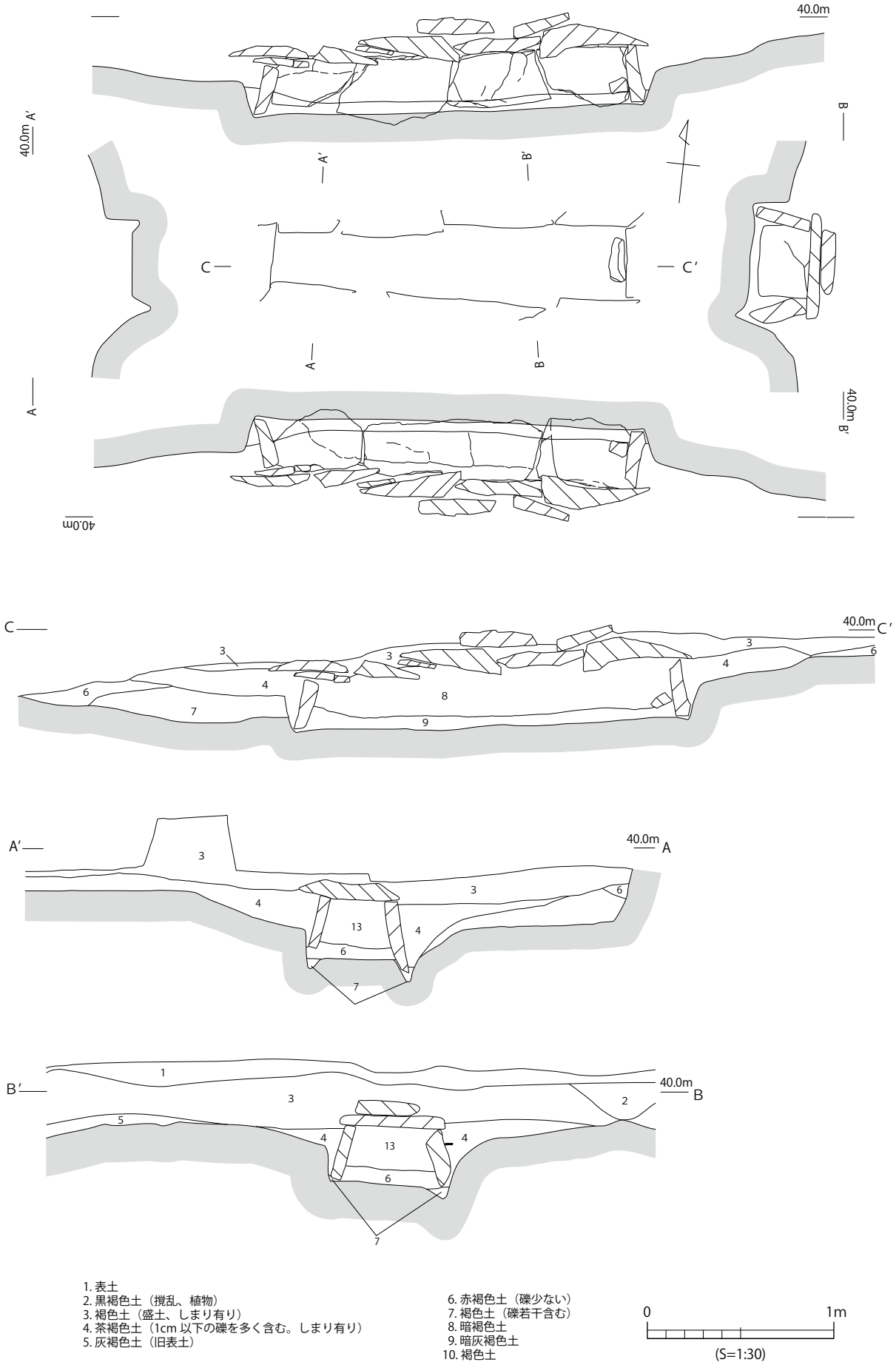
石棺内で出土した遺物はないが、主体部床面の東端、小口板近くに凝灰岩性の礫が据えられていた。この礫の大きさは縦約 20㎝、横約 8㎝で、高さ 6㎝あり、検出時上面が平らになっていた。この礫は検出された位置と大きさ、形状から枕石の可能性が高いと考えている。

石棺の側板は南側が 3 枚、北側が 4 枚で構成されている。枕石側の小口板は側板に挟まれ「H」型に、反対側は小口板が側板に挟まれない型になる。両小口板は 1 枚であった。石棺内の床面の幅は、枕石側が約 38㎝、反対側が約 20m あり、枕石側が広く、徐々に狭くなっている状況が見られた。側板と小口板の上半部は周囲からの土圧により、内側へ倒れ込んでいる状況であった。

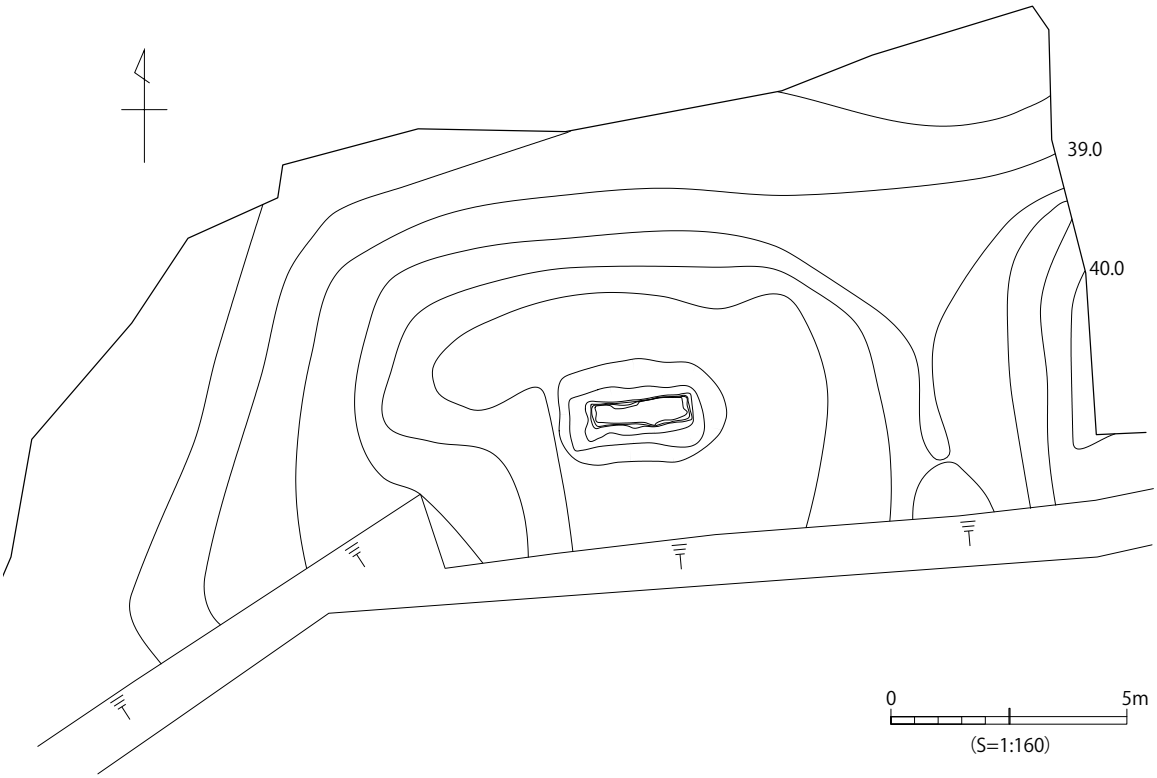
石棺の蓋石は側板と同様に平らな割石を 10 枚ほど用いており、また、大型の礫の間を小さな礫が埋めている状況が見られた。枕石の両側の側板と隣り合う側板との間には上部から小さな石材



第 50 図　鞍切遺跡　2 区　4 号墳主体部実測図 (1)（S ＝ 1 /30）



第 51 図　鞍切遺跡　2 区　4 号墳主体部実測図 (2)（S ＝ 1 /30）



第 52 図　鞍切遺跡　2 区　4 号墳完掘状況図（S＝1/160）

が側板の上面の高さを合わせるように配置されていた。蓋石の大きさは一様でなく、多いところで 3 段に石材が積まれていた。接合はしていないが、大型の石材は同一母岩のものが存在すると思われた。大型の石材を岩脈に沿って板状に割ったものと思われる。

街道跡（第 53 図）

2 区の斜面を等高線に沿いながら南から北へ蛇行しながら通じる街道で、斜面を切り崩して道幅の平坦面を造り出し、尾根を切り通して峠を越える街道の作事が今回の調査で明らかとなった。

斜面は山側を削り、谷側に土砂を盛って道幅を確保している。確認できた道幅はおよそ 1.5m で、あった。また、山側には溝を通し、導水して路面を保護できるように工夫されているようである。尾根を切り通した地点では、道幅がおよそ 0.7m になり、両端に溝が伴う。この溝も導水用である。路面は固く締まっており、小礫や砂、割れた瓦等がまかれていたり板状の石材が要所に置かれ、路面の補修や維持に利用されていたようである。調査範囲は約 14 mと街道の距離としてはわずかであるが、いかに通行しやすい街道となるか工夫された状況が見て取れる。

出土遺物は第 54 図の通りで、近世にさかのぼる資料が存在している。街道であるため出土遺物は少ないが、近世には利用されていた証左となろう。第 54 図 8 の須恵器は街道の上方に存在した遺構から流入したものと考えられる。

周辺地域での聞き取りでは、このあたりの市道が整備されるまでは生活道として利用されていたということである。調査中も農機具を操縦する地域住民の方が利用されていた。

また、街道沿いには 1 町ごとに一丁地蔵が存在しており、調査区内には無かったものの、調査区の南側と北側に 1 体ずつ一丁地蔵が見られた。これらの一丁地蔵の光背には距離が刻印されている。現存している街道を踏査したところ、和久羅山の西麓へと街道は北へ続くが、所々で一丁地蔵が見られた。現在は、一丁地蔵は供養のための地蔵と思われている事が多いようで、花など

を供えられている例が多い。

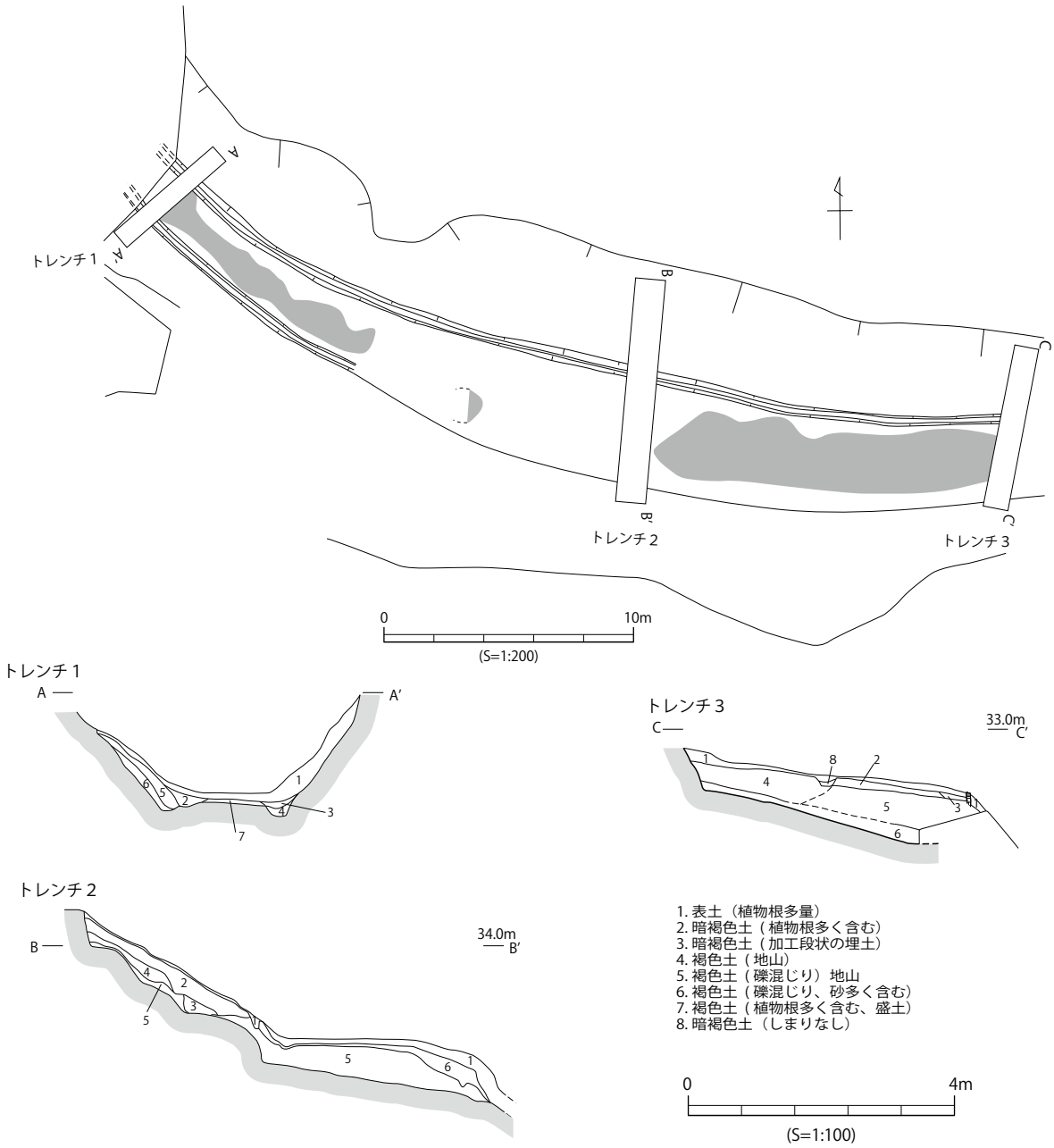
この街道は、近世初頭には始まっていたとされる観音巡礼のうち、出雲三十三観音巡礼の道として利用されていたことが明らかになっている。今回の発掘調査で検出した街道は、第 24 番札所の浄音寺と第 25 番札所の澄水寺を結ぶ地点であり、多くの巡礼者が利用したものと想像できる。

（5）遺物

第 54 図～第 56 図は鞍切遺跡で出土した遺物である。そのうち、第 55 図～第 56 図　は 1 区 1 号墳と 2 号墳に関係した埴輪である。

第 54 図は 1 区と 2 区の出土遺物で、6 ～ 10 は 2 区の出土である。

第 54 図 1 ～ 8 は須恵器で、1 は 1 区 1 号墳の SD02 から出土した須恵器の長頸壺である。胴



第 53 図　鞍切遺跡　2 区　街道実測図（S＝1/200･100）

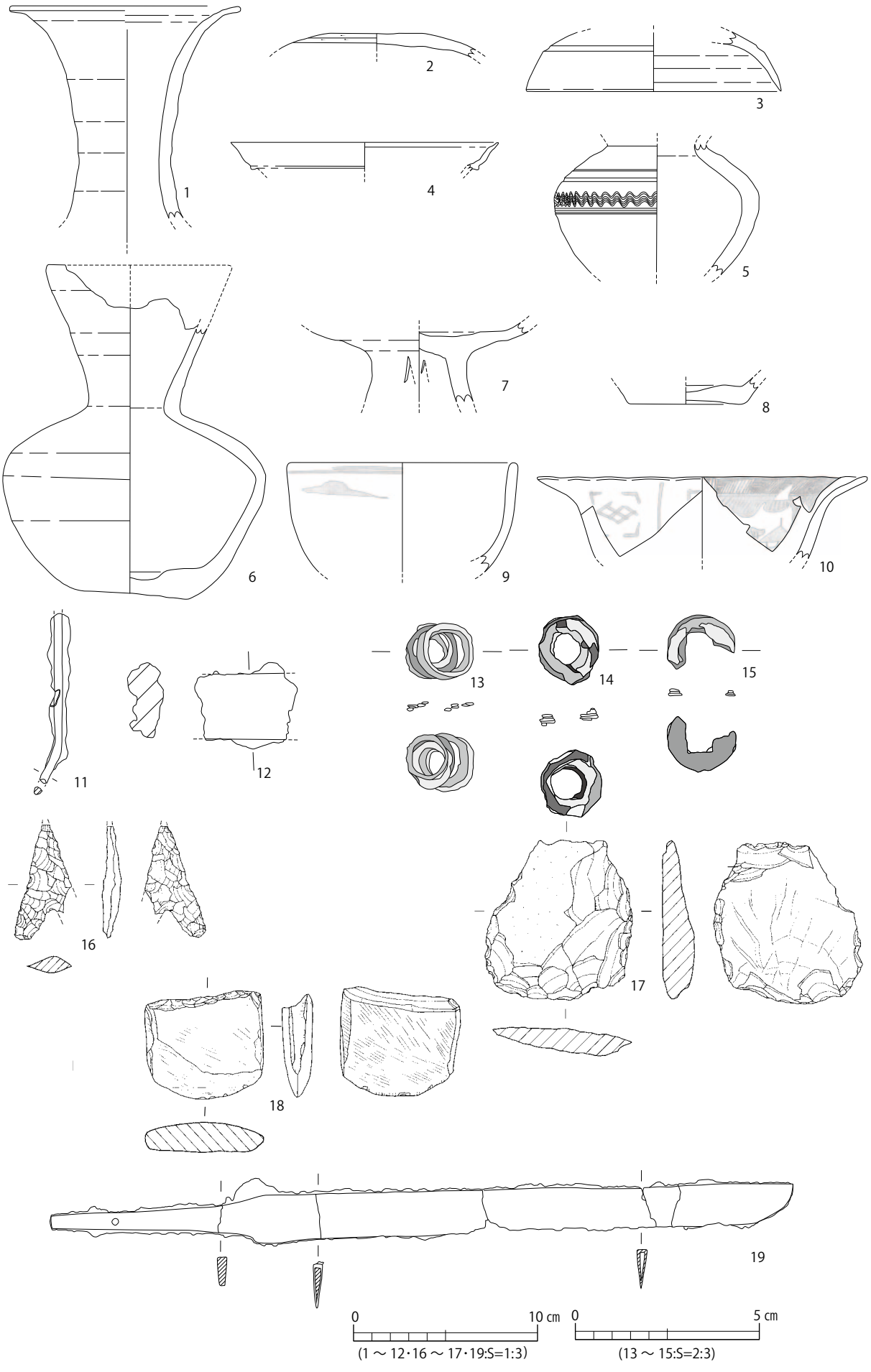
部以下は欠損している。埴輪や葺石とともに出土している。口縁は外湾している。2 は後世の攪乱から出土した須恵器の蓋坏の蓋である。天井部はヘラ削りを施している。3 も同じく蓋である。外面に沈線が 1 条施されている。4 と 5 は、はそうである。4 は口縁部で、5 は胴部である。4 の稜は鋭くはあるが、わずかに緩やかとなっている。5 の胴部は肩が張っており、外面はカキ目調整が行われている。4 本の沈線が施され、沈線の間には波状文が施されている。6 は 2 区 SK01 で出土した長頸壺である。胴部は緩やかに肩が張り、口縁部はわずかに内湾する。7 は 2 区の表採の須恵器の高坏である。透かしは三角形で 2 方向である。8 は 2 区の街道跡の盛土層から出土している坏である。底部に静止糸切り痕が残っている。9 は陶胎染付の陶器椀である。外面に山水文らしき文様が施されている。10 は 2 区街道跡で出土した磁器の輪花鉢である。口縁は大きくくびれ外反している。内面には楼閣山水文が、外面には菱文が描かれている。11 と 12 は 1 区で出土した鉄製品で、11 は鉄鏃で、12 は大刀の破片と考えられる。11 は基部で曲がっており、先端も欠けている。12 は 1 号墳（SD02）から出土しており、刀身の破片と考えられる。13 から 15 は青銅製品で無文銭である。緡銭状に数枚が重なっている状態で出土した。1 点ずつの確認は不可能であるが、13 の内孔は円形が多く、14 は方形も混じっており、15 は方形が多いようである。全て外周や内孔に縁取りはない。13 ～ 15 以外にも多数破片が出土しているが、本来は 13 ～ 15 とそれ以外の破片も合わせて緡銭になっていた可能性がある。16 ～ 18 は石器である。16 は凹基式の石鏃で、黒曜石製である。脚部の一方は欠損している。17 は 1 区 SK11 から出土した楔形石器である。上下から打撃を加えられており、上端は階段状の剥離が残っている。両側縁にも二次加工が見られることからスクレイパーとして利用されていたものと考えられる。18 は小型の磨製石斧である。途中で折れているが、折れ面の打点側からスクレイパー状の二次加工を施している。

出土遺物の年代は、1 が出雲 7 期、3 ～ 5 が出雲 3 期～ 4 期、6 が出雲 6 期頃と考えられる。8 は 9 世紀頃であろうか。9 は波佐見編年Ⅴ－ 1 期、10 は肥前編年Ⅴ期と考えられる。11 と 12 は古墳時代で、13 ～ 15 は中世後半、16 ～ 18 は縄文時代と考えられる。

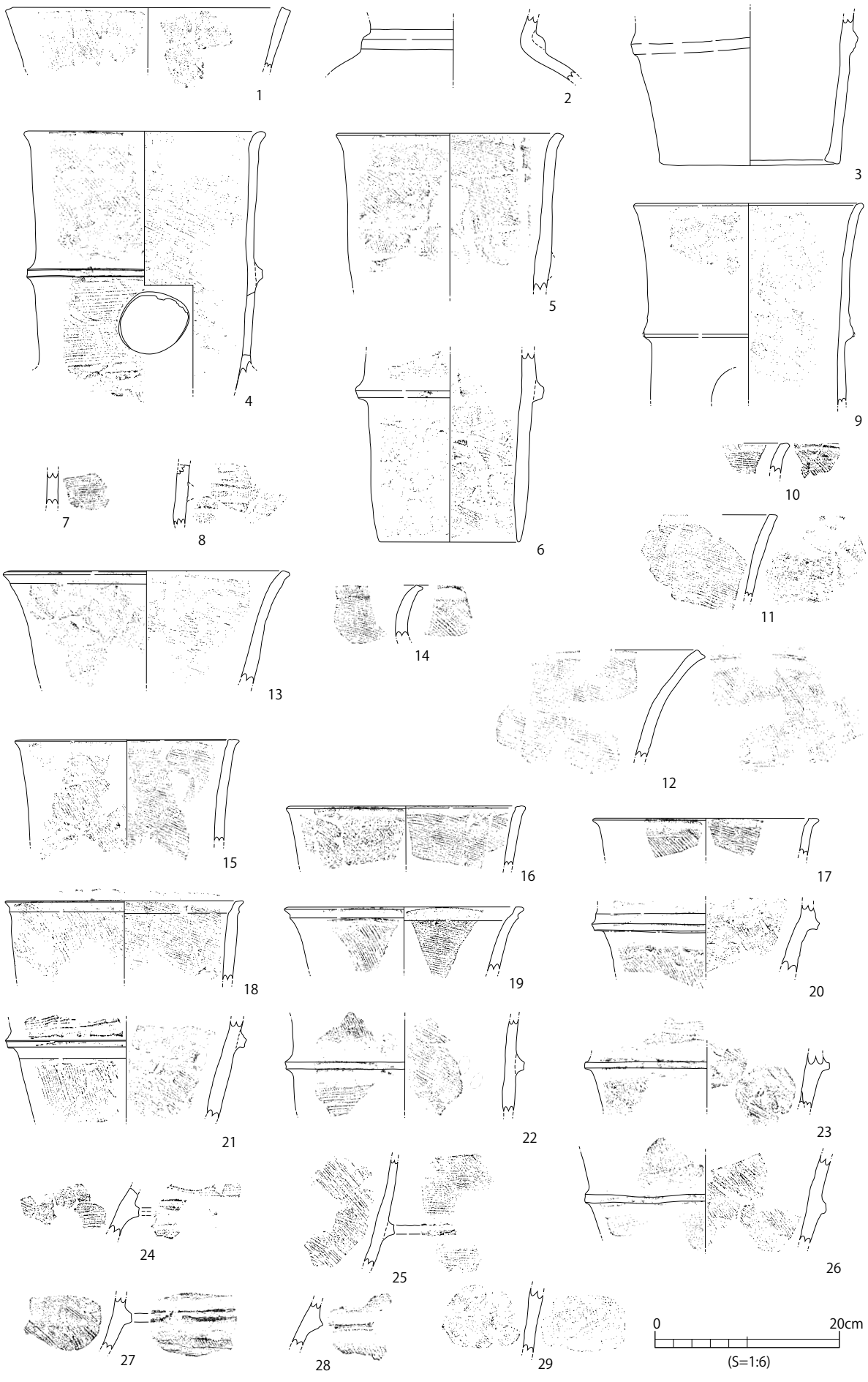
19 は 4 号墳の主体部から出土した大刀である。石棺外から出土している。破損は見られるが、ほぼ完形である。刀身の断面は三角形である。

第 55 図と第 56 図は 1 区で出土した埴輪である。第 55 図 1 ～ 3 が 1 号墳（SD02）出土で、4 ～第 56 図 1 ～ 12 が 2 号墳（SD03）で、13 ～ 15 が 2 号墳（埴輪溜まり）である。

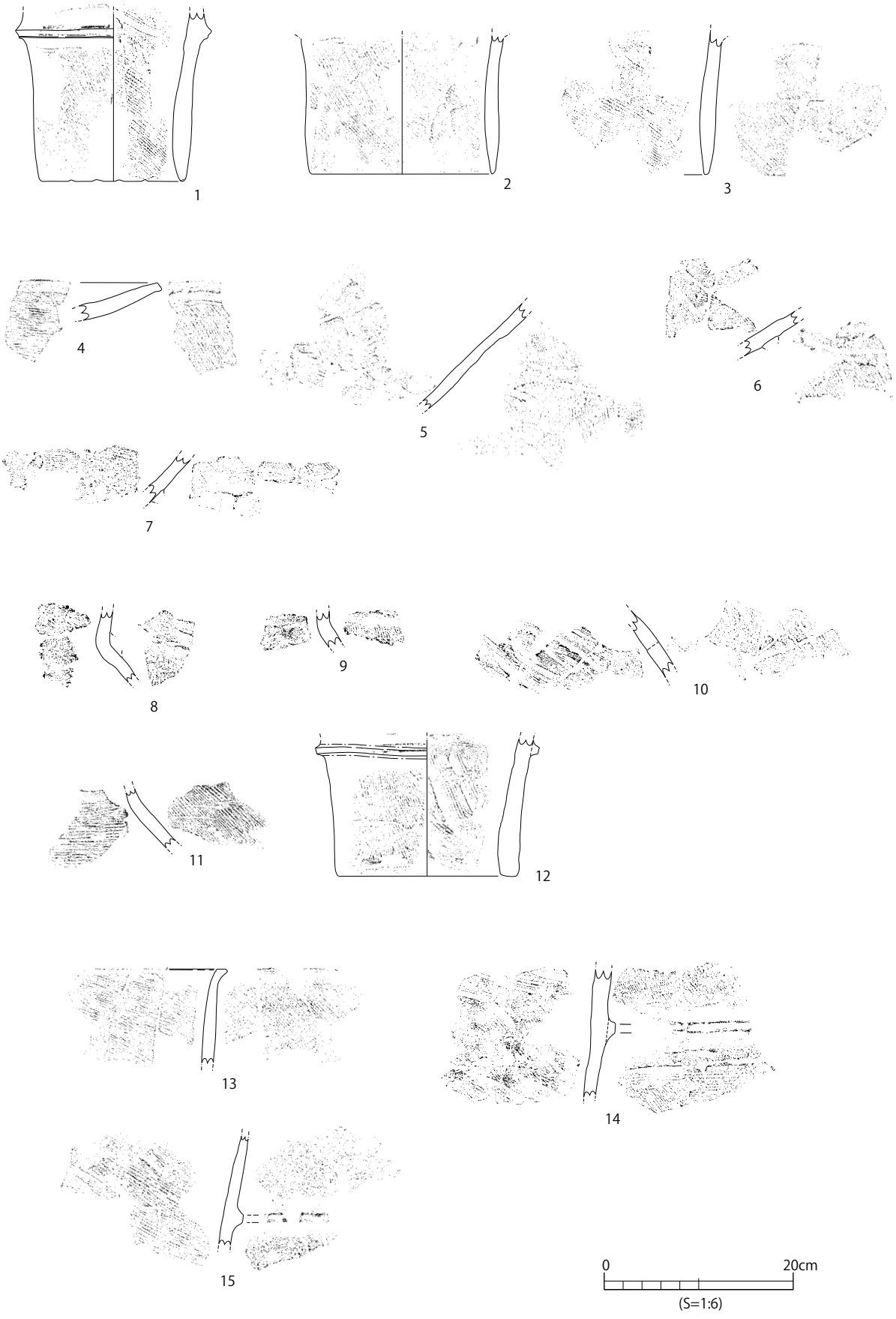
SD02 で出土した埴輪は非常に風化しており、小片も多かったため図化した資料は少ない。1 と 3 は円筒埴輪で、1 は口縁部が開く形態である。内外面の一次調整は斜め方向のハケメで、二次調整は見られない。本遺跡出土資料のほとんどは一次調整で斜め方向のハケメを施している。3 の底部は基底部から徐々に口縁部へ向かって開く形態である。タガの形状は台形で、稜は明瞭でない。タガは上端が突出している。底部調整は見られない。2 は朝顔形埴輪である。くびれ部に低いタガを貼り付けている。表面の風化が著しく調整は不明である。4 ～ 6、9 は口縁部が外反する形態で、基底部から最上段のタガまであまり開かない。4 は口縁から下段のタガまで残存しており、タガとタガの間には横方向のハケメが見られる。B 種ヨコハケであり、6 にもタガより上方にはヨコハケが見られることから、円筒埴輪のタガは 2 段であると考えられる。6 はハケによる底部調整が見られる。4 と 9 に円形スカシが 2 段のタガの間に存在する。7 と 8 はヨコハケが残る埴輪片である。8 はタガが剥離しているが、タガの上方がヨコハケ、下方がタテハケである。10 は口縁



第 54 図　鞍切遺跡　出土遺物実測図 (1)（S=1/3・2/3）



第 55 図　鞍切遺跡　出土遺物実測図 (2)（S=1/6）



第 56 図　鞍切遺跡　出土遺物実測図 (3)（S=1/6）

端部が 9 と同様に角を持つ形態である。11 は口縁端部が面取りされ、直線状に外傾するものである。12 ～ 14 は口縁端部に面があり、外反する形態で、12 は大きく広がる。15 ～ 17 は口縁部内側にくぼみを持ち口縁端部が外側に突出する形態である。18 と 19 は口縁部内面がくぼみ、外面に段が形成され､屈曲する形態である。20 ～ 28 は円筒埴輪の胴部でタガが確認できるものである。20 はタガの接着のため胴部につよいナデが見られる。タガは稜が明瞭な台形である。21 ～ 23 はタガから上下の胴部にヨコハケが見られるもので、B 種ヨコハケと考えられる。24 と 25 はタガの上下の胴部にもヨコハケが見られ、A 種ヨコハケと考えられるが、24 は上下が大きく欠損しており、タガの接続痕の可能性もある。20 と 21 はタガが斜め下方向に突出しているが、22 や 26 は横に突出しており、それぞれ異なる様相を示している。28 のタガの断面は三角形となっている。

第 56 図 1 ～ 3 は円筒埴輪の底部である。全て底部調整によって底部が薄くなっており、端部が丸く収まっている。基底部倒立再調整のハケ調整が施されている。底端部には工具によるカットの痕跡は見られない。

4 ～ 11 は朝顔形埴輪であると考えている。5 ～ 7 はくびれ部より上方の「朝顔部」か、くびれ部以下の胴部か不明であるが、傾きが顕著であるため、朝顔形埴輪とした。8 はくびれ部にタガが巡っていた痕跡が残っている。10 は円形スカシが見られる。11 はくびれ部に近いと考えられるが、内面はヨコハケである。外面は斜めのハケメに横位の沈線が施されている。12 は底部調整が施されている底部である。底部調整は基底部正立調整で外面がハケメである。強いハケメ調整により凹凸が形成されている。外面は横方向のナデ調整である。他の円筒埴輪の底部と調整方法が異なっていること、埴輪の器壁がかなり厚いことから、朝顔形埴輪の底部の可能性がある。
13 は口縁がわずかに外傾し、外反する円筒埴輪片である。14 と 15 はタガが低い。14 はタガの下方の胴部の調整はヨコハケで、B 種ヨコハケと考えられる。

第 55 図と第 56 図の埴輪の年代は、黒斑がないこと、底部調整が見られること、B 種ヨコハケが主体と見られること､朝顔形埴輪が存在することから藤永編年の 3 期新相から 4 期と考えられる。

第 3 節　米坂古墳群

（1）調査の方法

米坂古墳群は､和久羅山から派生し､西谷地区と客戸地区まで伸びる尾根に位置する遺跡である。遺跡の中心は古墳で、合計 20 基以上あるとされている。平成 8 年と 9 年に松江市教育委員会が農道建設に伴い遺跡の一部について発掘調査を行っている。松江市の発掘調査では、12 基の古墳や、土坑墓が確認されている。

今回の発掘調査は事業範囲が丘陵の斜面が中心で、古墳の大部分が尾根に存在するため、古墳の調査はほとんどできなかった。

本遺跡の存在する丘陵は所々で斜面に谷が形成されており、調査範囲はいくつかに分断されており、調査の工程上、1 区～ 4 区と寺跡区の 5 つの調査区に分割し発掘調査を行った。寺跡区は地元の伝承で寺が存在したという地点が存在したため、調査を行った結果、礎石建物跡を確認した調査区である。

調査は、樹木を伐採後に、表土も含め人力で掘り下げを行った。調査は丘陵の斜面が主であり、重機による表土掘削はほとんど行わなかった。

集石の調査は、石塔や礫が多数出土しているため、それらの出土位置の計測を行い、出土状況の実測図の作成を行った後に、遺物である石塔や陶器は個体番号を与え、取り上げを行った。

集石 1 に伴う経石は、あまりの膨大な出土数と、肉眼での墨書の有無は確認不可能であったため、まずは全ての経石を持ち帰り、埋蔵文化財調査センターの赤外線カメラで墨書の有無を全て確認することとした。経石の取り上げは個々の出土位置を計測することは出土点の多さから不可能であると判断し、基壇内を区画し、区画単位で層毎に取り上げを行った。

調査後、経石は埋蔵文化財調査センターで赤外線による墨書の有無の調査を行ったが、墨書文字がある資料と何らかの墨書の痕跡があると判断できた資料の総数は 850 点で、それ以外は、墨書を確認できなかった小礫が 35,494 点であった。しかし、墨書の無い資料も経石の一部と判断して、すべて埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

（2）層序

1 区～ 4 区は、調査前は山林で、表土の直下が地山層となっており、遺物包含層は存在しなかった。調査範囲は斜面が主で、土層の堆積は厚くない状況であった。また、寺跡区は礎石建物跡が盛土による整地面の上に存在していたが、その上には表土が堆積しており、表土直下で遺構が確認された。ここには小屋の残骸が地表面に残っており、過去に小屋が建っていたようである。

（3）1 区の遺構

1 区では、古墳の周溝 1 条や基壇を伴う墓 1 基（集石 1）、その他集石が多数が検出された。古墳は調査区の西壁近くで墳丘の一部が確認でき、その周溝を中心に調査を行った。この古墳の大部分は調査区外に広がっている。基壇を伴う墓と多数の集石は、調査区の南側で検出されている。基壇を伴う墓からは蔵骨器も 3 点出土している。集石は多数検出しているが、集石 1 の周囲で確認した。基壇を伴う墓と同様に宝篋印塔や五輪塔が出土している。

集石 1（第 60 図～第 65 図）

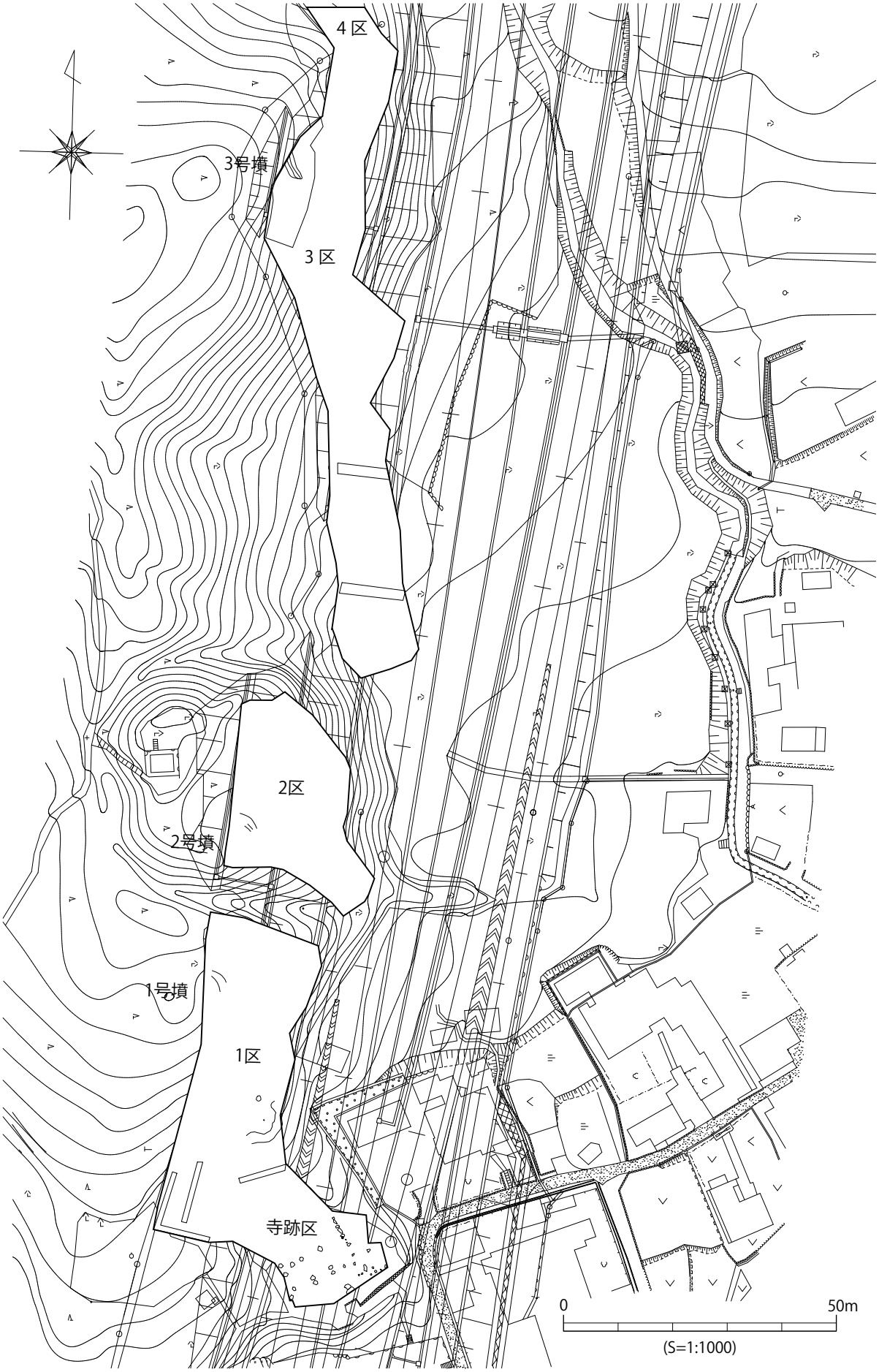
1 区の南東側の斜面に位置する遺構である。標高約 29 mあたりで斜面に緩やかな平坦面が存在し、そこに基壇を築き、墓としていたようである。

調査前は樹木に覆われ、わずかな石塔と石材の一部が地表面で確認できる程度であったが、表土を除去すると、宝篋印塔や五輪塔、基壇を構成する礫、基壇に敷かれていた経石が現れ、さらに基壇内には、蔵骨器として埋納された陶器が納められていた。当初の礫等の散布の範囲は、南北におよそ 6.1 m、東西におよそ 3.8 mであった。

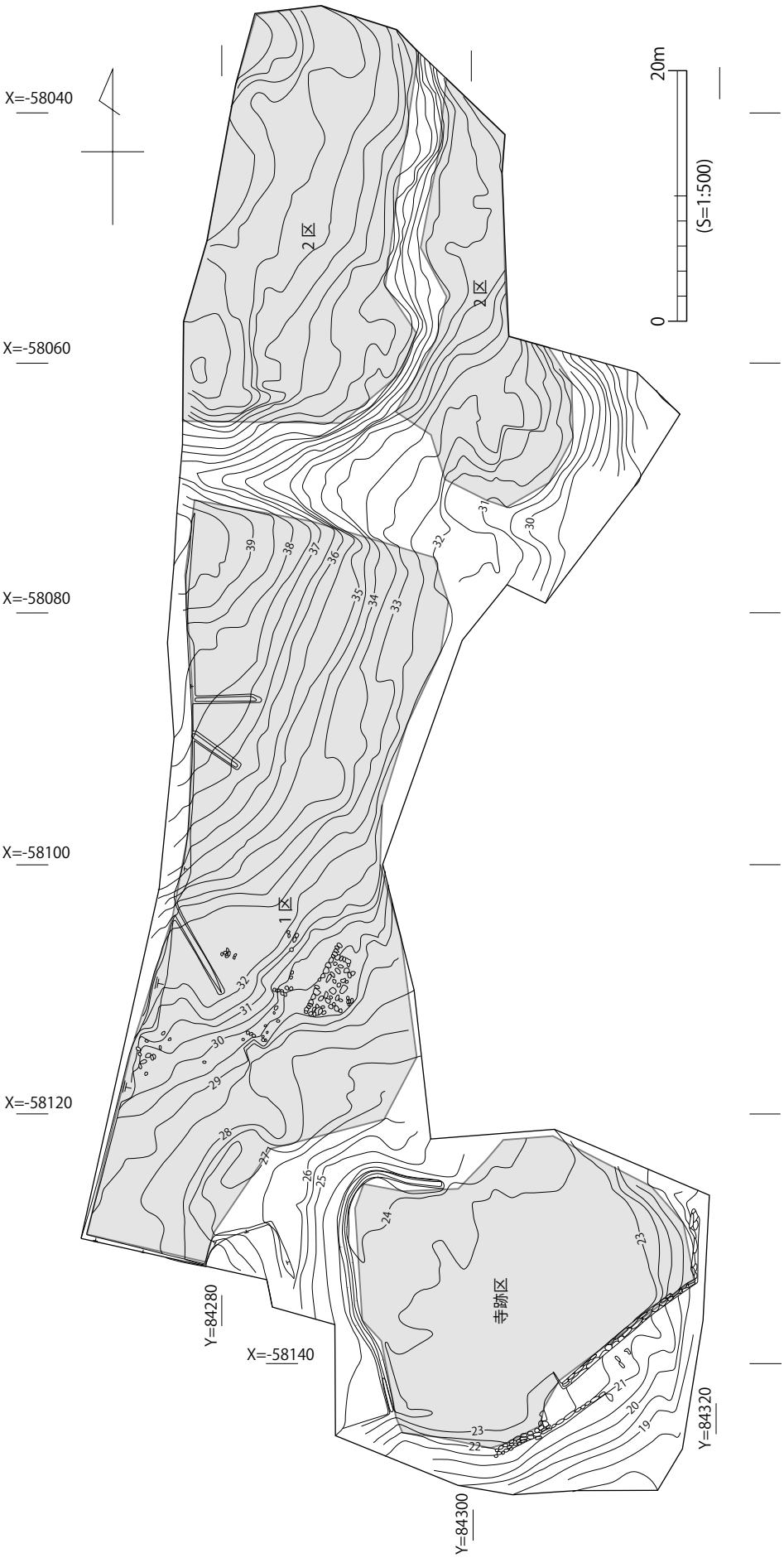
第 60 図は全ての礫や遺物を表示した実測図である。集石 1 の調査開始時はこのように礫が多数散布している状況であった。しかし、礫の散布に偏りが見られる南西側や、大型の礫が並んでいる状況が確認できる北側、中心から東寄りには、後に経石と判明する小礫が多数出土しており、多数の礫が散布している状況ではあったが、調査開始直後には基壇を伴う墓であると想定し、調査を行うことが可能であった。

散布している礫は板状になった亜角礫が多く、基壇に積み上げられていたものと考えられる。石材は安山岩や流紋岩、凝灰岩などで産出地が特定可能な石材は見られなかった。また原位置を保っている基壇の石材とほぼ同じ様相であった。

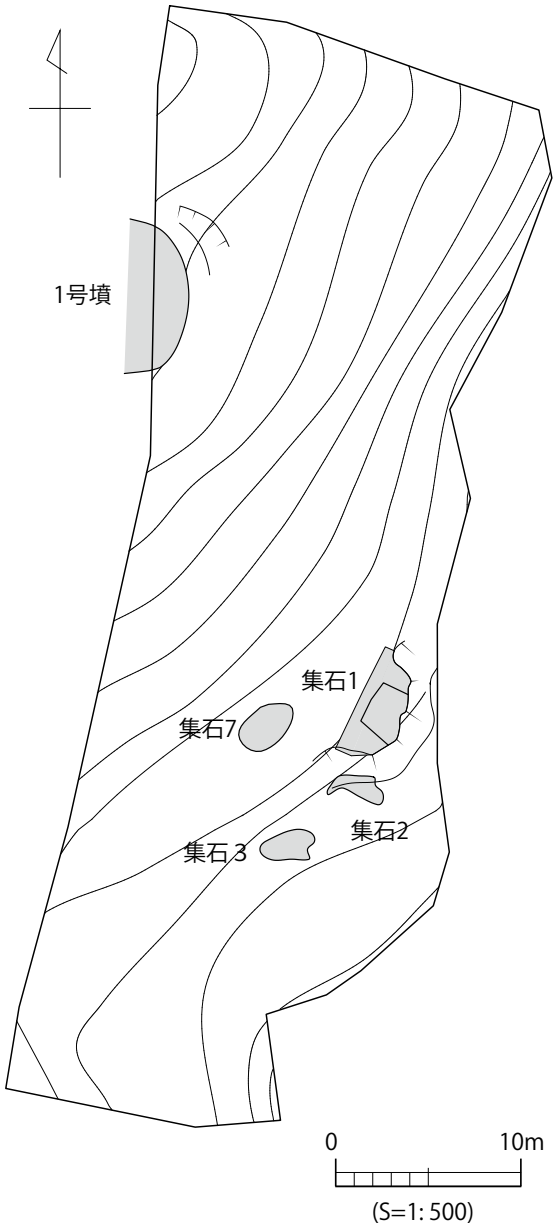
第 61 図は原位置を保っていない礫や石塔、経石を取り上げた状況である。原位置を保っていな



第 57 図　米坂古墳群　調査区位置図・調査前測量図（S＝1/1000）



第 58 図　米坂古墳群　1･2 区　調査後測量図（S＝1/500）



第 59 図　米坂古墳群　1 区　遺構配置図（S＝1/500）

い遺物のうち、第 75 図 4 の須恵器の壺は集石 1 の表土を除去後すぐ出土している。この壺は古墳時代の壺で、集石 1 では最も時期が古い遺物である。本来は尾根の上に存在した古墳の副葬品出会ったと考えられる。したがって、集石 1 の築造時か、その後、集石 1 に持ち込まれたものと考えられる。この壺は破損部分が少なく、集石 1 で出土したのは何らかの再利用が行われた可能性もあると考えている。

集石 1 の中央で、第 75 図 1 の古瀬戸の浮遊環付仏花瓶と 3 の備前焼の壺が出土している。この 2 点は集石 1 の調査開始時に、すでに陶器の上部が見えていたもので、8㎝を空けて隣り合っていた。また、周囲の経石は 2 点の陶器の胴下半部より下層になると、かなり経石の密度が高くなること、2 点とも口を上に向け傾きはないことから、原位置で出土状態したと判断した。

さらに底部付近は墓の盛土層であり、この 2 点が盛土と敷き詰められた経石を、陶器の大きさに合わせて掘り込んだ穴に納めたものと考えられる。

第 75 図 1 の内部には、人骨と思われる多数の骨片が納められていた。骨片は仏花瓶の内部の半ば以上を占めており、その上に経石が入っていた。色調は白く火葬されたものと考えられる。腕あるいは脚部の骨と思われる。歯などそれ以外の部位は確認できなかった。内部に入っていた経石は仏花瓶の開口部まで詰められていないことから、経石は後世に入り込んだ可能性を考えている。仏花瓶の中に、骨片が多量に入っていた点から蔵骨器と考えられる。

第 75 図 3 は、出土時は胴部下半しか残っておらず、胴部下半も破損している状況であった。内部には骨片はなく、経石が出土しているのみであったが、ほぼ完形に接合可能であった。これは胴部上半から口縁部にかけての破片が集石 1 で分散して出土しており、これらの破片を接合した結果、ほぼ完形に復元できたものである。したがって、本来完形で埋納されたものが、墓の破壊あるいは崩壊によって、壺も破損し、上部は散乱し、下部のみ原位置を保っている状況であると考えている。内部から骨片は出土しなかったが、第 75 図 1 と同様に蔵骨器として利用されたものと考えられる。

第 75 図 1 と 3 が出土した地点は、基壇の礫が石列となって下層に存在している。しかし、礫の上に蔵骨器が直接据えられたわけではなく、3 は石列とは出土位置が重なっていない。この 2

点の蔵骨器は下部に存在する基壇の礫を認識しないで埋めたものと考えられる。

基壇の内側の石列内では、経石が盛土の上に敷かれていた。この経石を取り上げると、長さが約 20㎝までの礫を集めて造った石槨状の礫の集合が検出された。この礫の集合の内部に第 75 図 2 の備前焼の壺が 1 点納められていた。石槨状の礫の集合は第 64 図のように板状の礫を用いて、袋状に礫を底部と壁面に貼り付けて囲いを造った後に、壺を納め、さらに上部を礫で覆っている。底部の礫は旧表土層の上面に接しており、この石槨状の礫の集合は、基壇を伴う墓の築造時に造られたもので、この墓の中心主体になると考えられる。

第 75 図 2 は上半部が大きく破損し、口縁部が内部に落ち込んでいた。しかし下半部は割れてはいるものの、ほぼ原位置を保っているものと考えられる。内部は経石と土砂で充満しており、底部近くに黒色の粘質土が薄く堆積していた。経石と土砂に混じり骨片がわずかに出土している。

第 60 図　米坂古墳群　1 区　集石 1 検出状況図（S＝1 / 40）

骨片は非常に小片で、部位は不明である。骨片の出土と出土状況から第 75 図 2 は蔵骨器として利用されていたものと考えられる。

集石 1 は本来、基壇を伴う墓であったが、基壇の上部は失われていると考えられる。しかし、発掘調査で確認された、基壇の基礎である最下段の石列は比較的遺存状況が良好であった。第 62 図には、検出された石列の並びを示している。石列は南北方向に長く、東西方向は短くなっているが、これは東側は大きく削平されているためである。便宜上、第 62 図のように石列に A 列から D 列を設定し、説明を行う。また A 列と B 列は北端で直角に曲がり、東へ石列が延びている。この東へ延びる石列を A ’ 列、 B ’ 列、 B ” 列とする。

基壇の規模は、A 列は約 6.2 m で、A’ 列は約 0.5m、B 列は約 5.4 m、B’ 列は約 1.1m、B” 列は約 2.0m、C 列は約 2.4m、D 列は約 1.2m であった。

A 列と B 列、 C 列はほぼ同一方向に伸びている。 A 列と B 列の南西端は約 0.4 m空いているが、B 列と B ’ 列の隅は A 列と開きがなかった。したがって、 A 列と B 列は平行でないことがわかる。

次に石列を構成する個々の礫の配置方向であるが、基壇で最も外周の石列である A 列は礫の長軸を石列の線上に合わせているか、礫の側面で平坦面が存在する場合、そちらを外側に向けている。これは基壇の見え方を考えた上で配置していると思われる。 A 列の南西端は短軸を外側へ向けて数点の礫を配置しているが、これは「野面積み」のように礫をある程度規則的に積み上げているため、基壇の景観上問題がないものと考えられる。

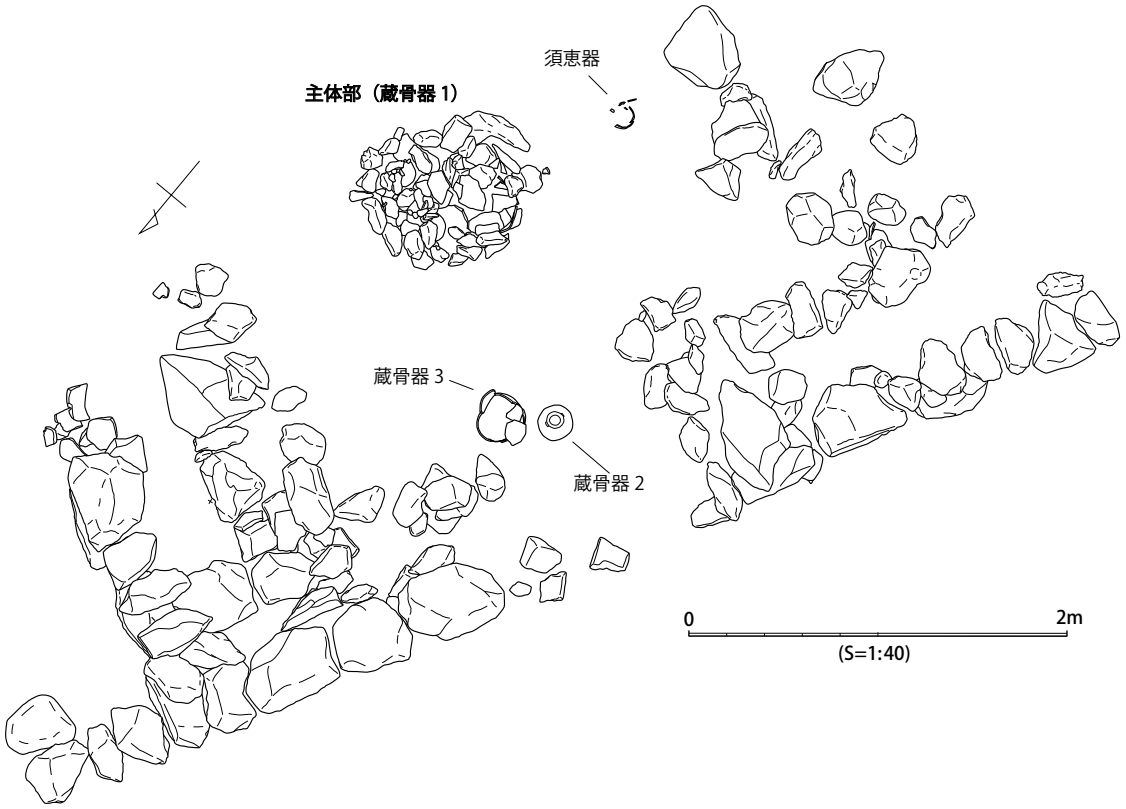
また、 A 列には B ’ 列の礫と礫の配置方向を同じくする礫が存在し、 B ’ 列が北西方向に礫 1 点分伸びているように見える。基壇の 2 段目に積まれている礫を観察しても、 A 列から B ’ 列へ連続して積まれていた。以上から、 B ’ 列が基壇の外周の石列となっていた時期が存在していると考えられる。 A ’ 列と A 列の北西角の 2 点の礫は B ’ 列とそれに連なる A 列の 1 点に比べ、礫の大きさが小さく、 B ’ 列と同時期に造られたものでないと考えている。 C 列と D 列は繋がっていないが、石列の角度が直角になることから同一の石列の可能性がある。

第 75 図 2 の蔵骨器は D 列と B ” 列のちょうど中間で出土しており、 D 列と B ” 列は基壇の初期に配置された石列の可能性がある。また C 列は第 75 図 2 の蔵骨器とは D 列や B ” 列に比べ距離が近い。しかし、基壇の最も内側に存在する石列であり、これも基壇を築造したときに造られたものと考えられる。

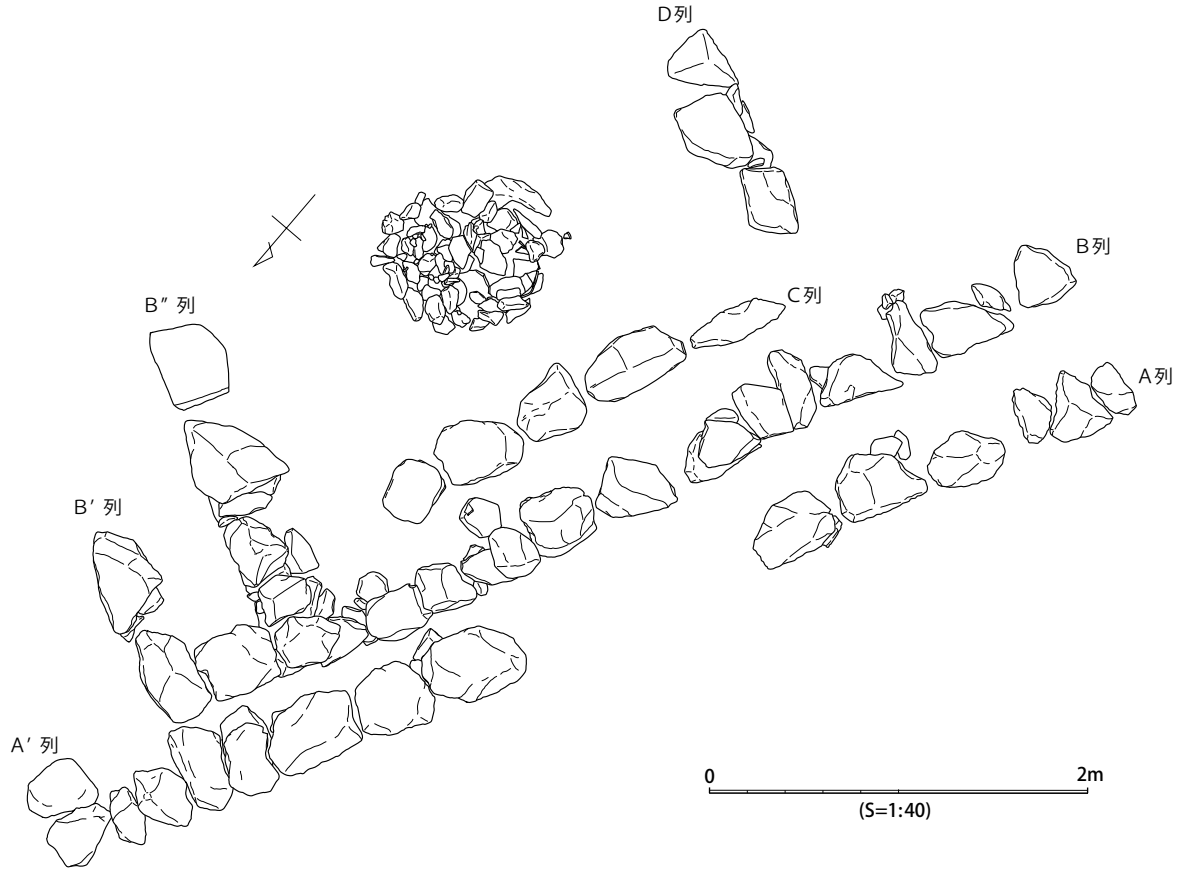
以上のように、集石 1 で検出された基壇は、複数の石列によって構成されている状態で検出されたが、これは徐々に基壇が拡充していく様子を示しているものと考えられる。

つぎに、基壇に堆積している土層であるが、南北断面及び東西断面でも基壇の下には旧表土層が存在している。旧表土層の存在は、集石 1 が斜面を削りだして平坦面を造り出し、基壇を築いたものではなく、既に斜面の途中に形成されていた緩い傾斜を持つ平坦面を利用して、基壇を築いたことが分かる。

また、土層を確認すると、第 75 図 2 の蔵骨器を囲む石槨状施設と基壇の底面は旧表土層上面に接していた。これは石列が旧表土上に盛土を施す前に、設置されていたことが分かる。石槨状の施設は盛土層を上面から掘り込んで造っている事も土層の観察から確認できる。盛土の上部には経石が敷き詰められているが、経石の分布範囲がある程度限定されると調査時に感じていた。経石が高密度で出土するのは、 B ” 列と B 列、そして D 列をつないだ方形の範囲内で多量に出土し



第 61 図　米坂古墳群　1 区　集石 1 基壇検出状況図（S ＝ 1 /40）



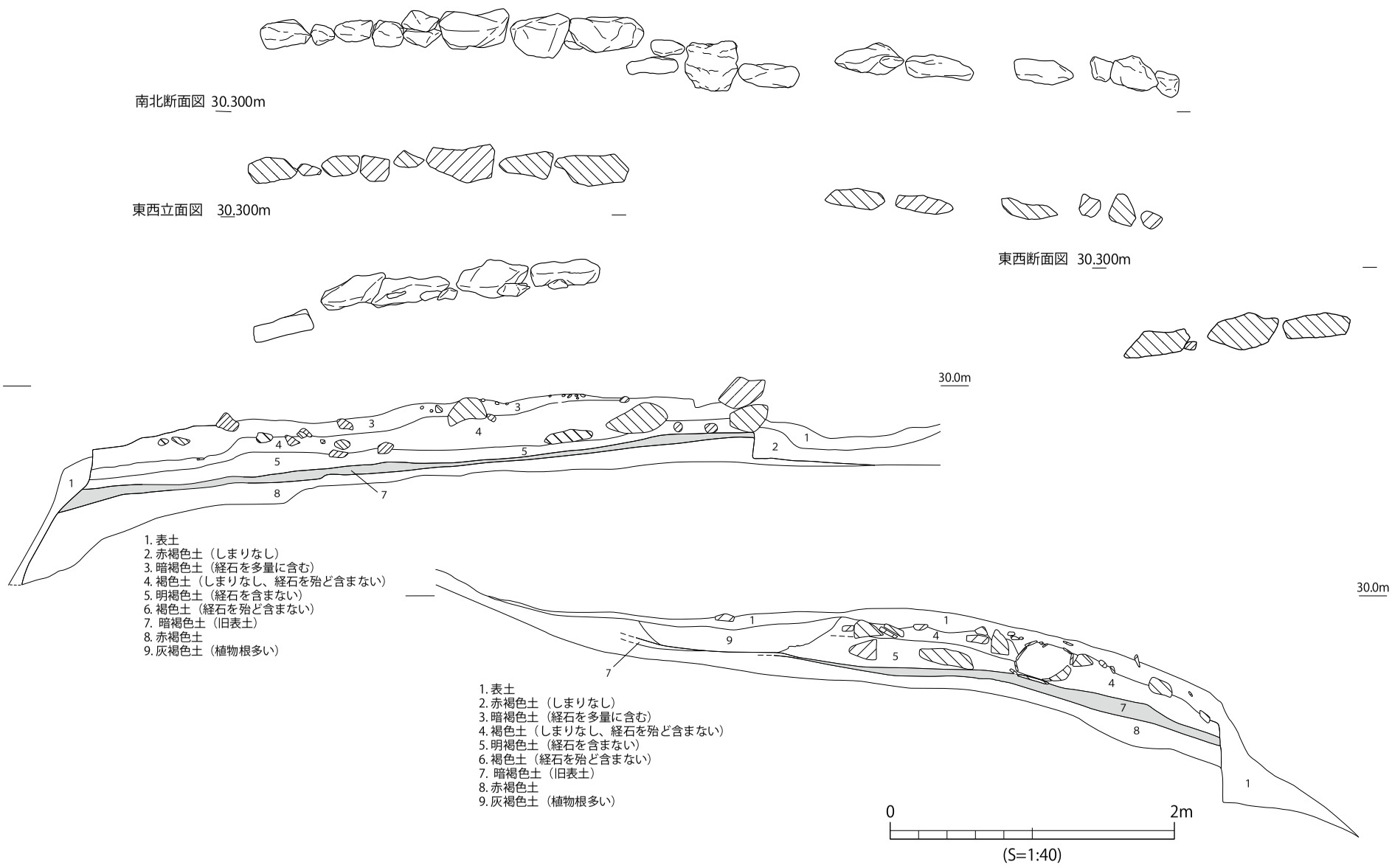
第 62 図　米坂古墳群　1 区　集石 1 基壇基礎検出状況図（S ＝ 1 /40）

南北立面図　30.300m

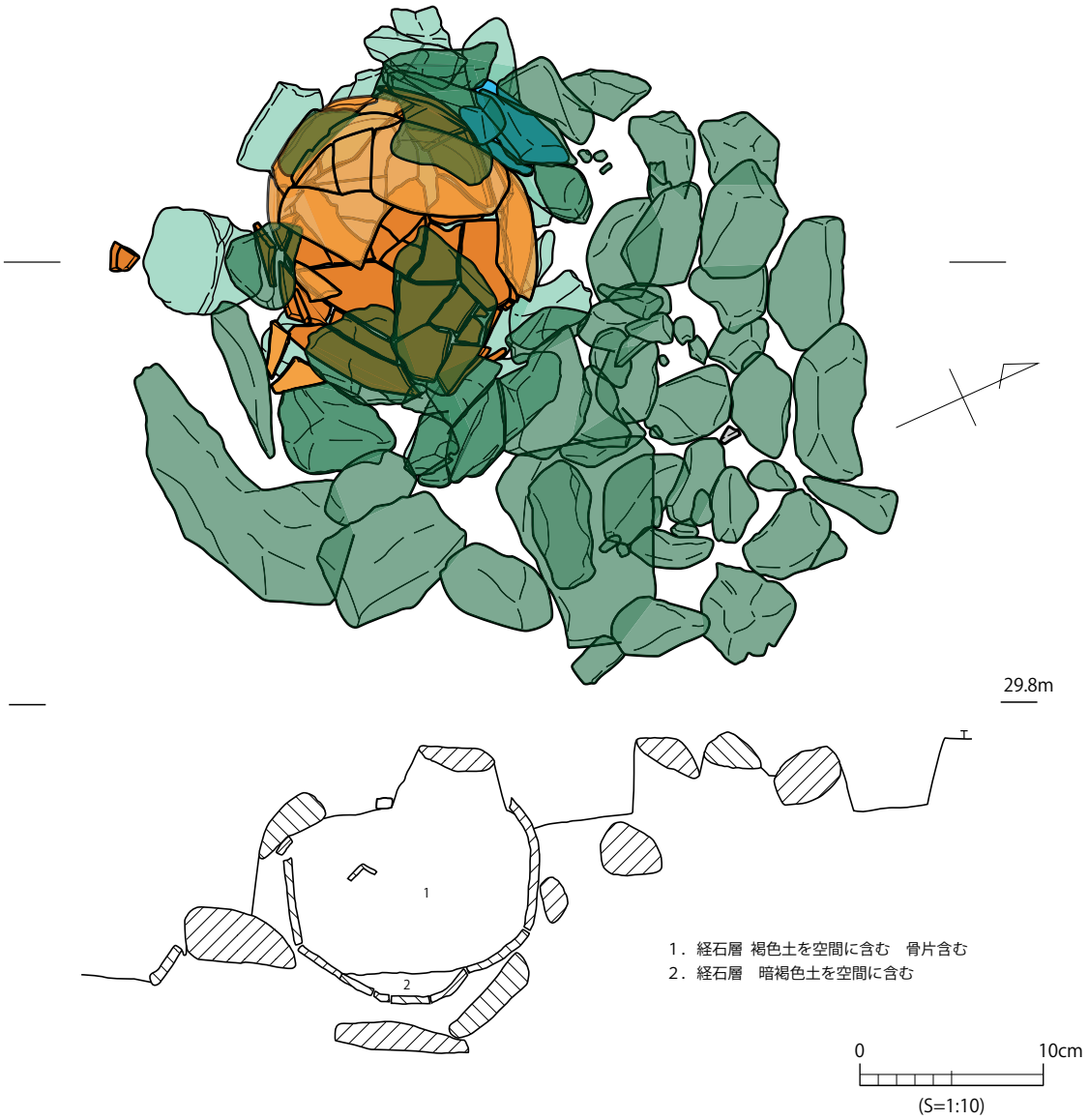
南北断面図　30.300m

東西立面図　30.300m

東西断面図　30.300m



第63図　米坂古墳群　1区　集石1立面図・土層図（S＝1/40）



第 64 図　米坂古墳群　1 区　集石 1 中心主体部実測図（S＝1/10）

ている。当然基壇の上部は崩壊していたため、それ以外の範囲でも経石は出土しているが、分布密度が範囲内と外では全く異なっていたため、経石を敷き詰めた範囲は、限定されていたものと考えられる。

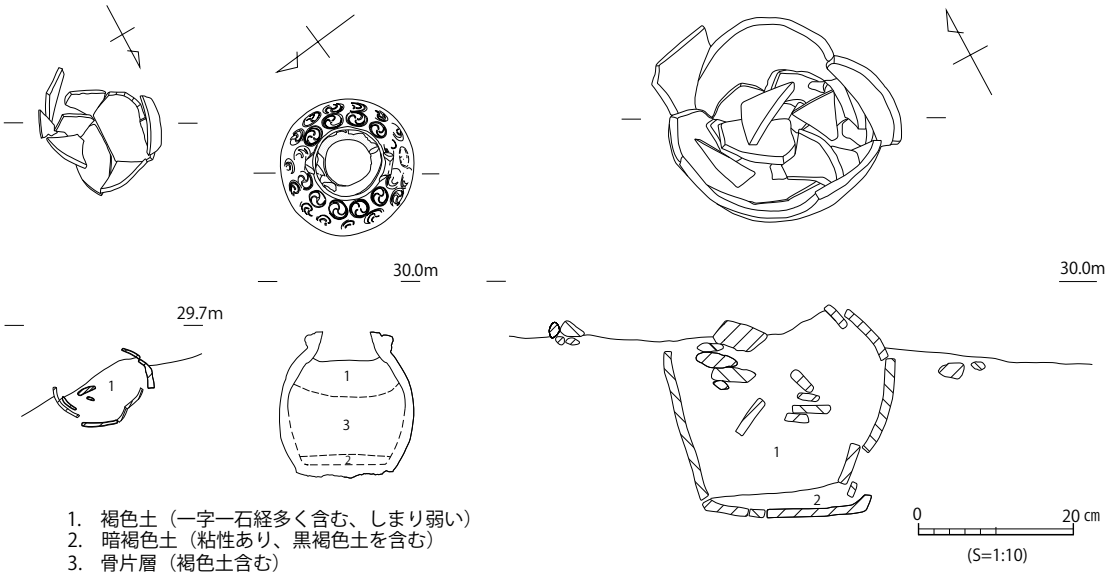
集石 2（第 66 図）

集石 2 は集石 1 の南にあり、1m ほどの下段に位置している。礫と石塔が分散しているが、分布にまとまりは見られなかった。集石 1 から転落した礫や石塔が分布しているものと考えられる。

集石 3（第 66 図）

集石 3 は、標高 28m あたりの窪地に位置している。北側は比高差約 3m の斜面が接しており、その直下ということになる。多量の礫や石塔が東西約 3.0m、南北約 2.2m の範囲に重なって出土している。礫や石塔に挟まれて、近代以降の陶磁器や瓦がわずかに出土している。

調査は礫や石塔の出土位置を実測し、取り上げを行い、下層の礫や石塔の精査を行うといった方法で進めた。集石 1 のように、遺構の下部に基壇が築造されていたり、石塔が建立されていた



第 65 図　米坂古墳群　1 区　集石 1 蔵骨器出土状況図（S=1/10）

形跡もなく、集石 3 で出土した多量の礫や石塔は周囲から持ち込まれたものと考えられる。

出土遺物は、宝篋印塔（九輪、笠、塔身、基礎）と、五輪塔（空風輪、火輪、水輪、地輪、基礎）、瓦（いぶし・施釉）、近代以降の陶磁器が出土している。

基壇が集石 3 では確認できなかったこと、近代以降の陶磁器が若干出土していることから、集石 3 は周囲の基壇や基壇に立てられていた石塔が崩壊し散乱していたものを、1 カ所にまとめた状況を示していると考えられる。礫等の集積が全て同時期に行われたかは不明であるが、近代以降の遺物が出土していること、地域の住民の方々は集石の存在を知らなかったことから、近代以降に礫等の集積が行われたが、その後、埋没したものと考えられる。

集石 7（第 67 図）

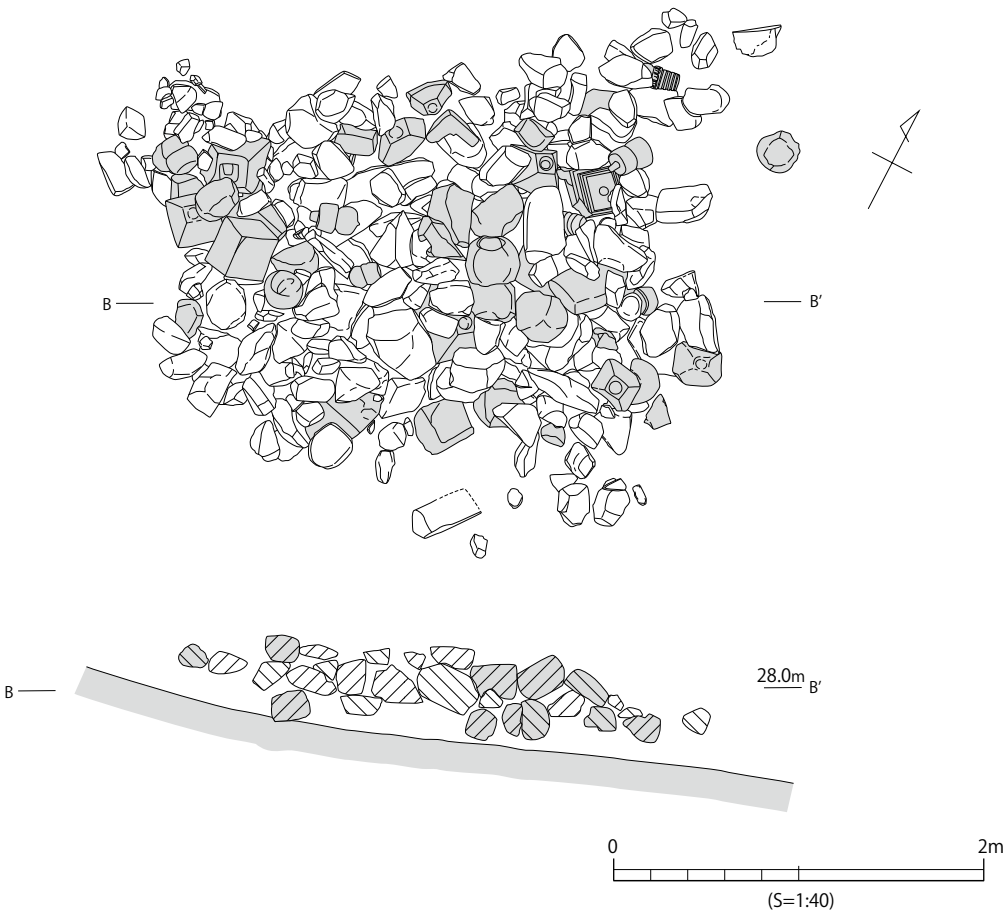
集石 7 は、標高およそ 30m の斜面で検出された遺構で、集石 1 の西側、集石 3 の北西側の斜面で検出された。出土遺物は主に五輪塔で、遺構の北半、集石 1 の東斜面では来待石製の五輪塔が空風輪、火輪、水輪、地輪と全ての部位が出土している。南半分には地輪あるいは基礎部分が出土しており、集石 7 の近隣に石塔が建立されていた可能性が高い。集石 7 には土坑などの掘り込みはなく、石塔が斜面に転がっている状態で出土していると考えられた。したがって、集石 7 より上方に石塔が建立されていたものと考えられる。石塔以外の礫は地輪の下部に敷かれていたものであろう。

1 号墳（第 68 図）

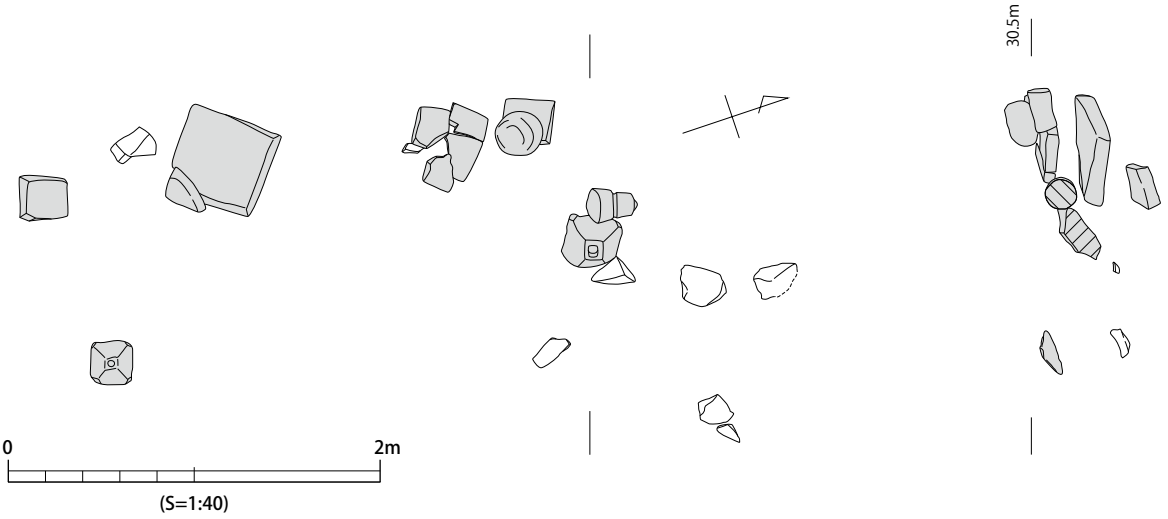
1 号墳は、1 区の西端で確認された古墳である。調査区の端で検出されたため、墳丘の調査はごく一部で、周溝も尾根から斜面へと変換する地点であったため、遺存状況が良くなかった。墳丘も調査区にほとんど広がっておらず、盛土や旧表土層存在は不明である。かろうじて調査できた周溝の一部については、形状が円形であると復元できた。周溝と墳丘の形状、調査区外に存在する古墳を肉眼で確認すると直径およそ 10m の円墳であると考えられる。

今回の発掘調査では、出土遺物はなく、古墳の年代も不明である。

（4）2 区の遺構



第 66 図　米坂古墳群　1 区　集石 2･3 実測図（S ＝ 1 /40）



第 67 図　米坂古墳群　1 区集石 7 実測図（S＝1/40）

2 号墳（第 69 図）

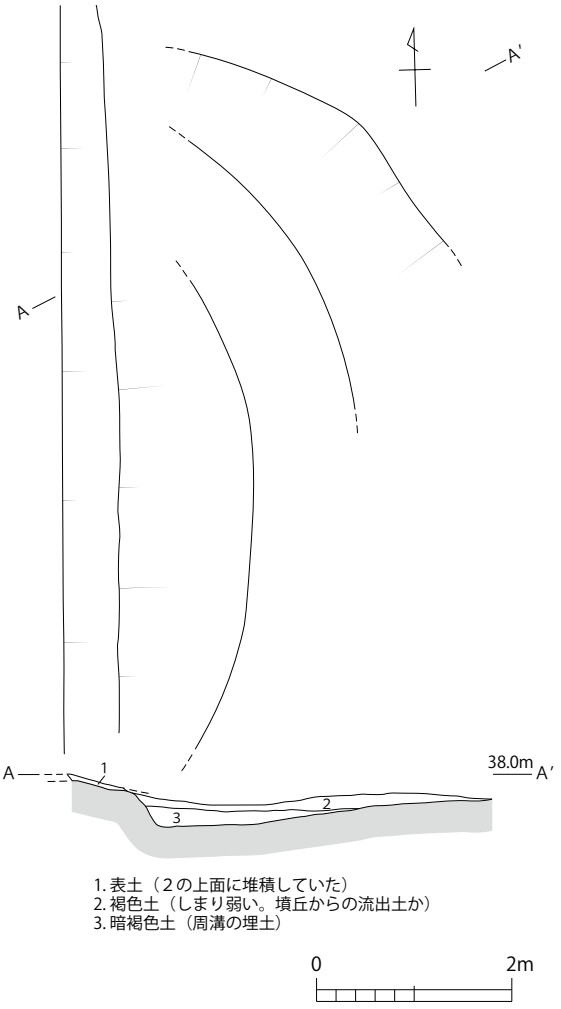
2 区の北西端で検出された古墳である。1 号墳と同様に墳丘のほとんどは調査範囲外に広がっており、今回主体部は確認できなかった。墳丘は調査範囲内にも一部存在したが、土層の観察の結果、地滑りを起こしており、土層が攪乱されている状況であった。確認できる範囲では、旧表土層の上に盛土を施している状況が見られた。周溝は古墳の北側のみで確認できた。周溝も地滑りで攪乱を受けており、古墳の北側でしか調査できなかった。周溝の深さは最も深いところで約 1,1m で、断面の形状は緩やかに底面へ向かって落ちているが、底面には平坦面は存在しない。周溝には黒色土が堆積しており、黒色土からは第 85 図 1 の須恵器の壺が出土している。

攪乱が多く、古墳の形状は明確にできないが、調査区外に広がる盛土の形状から円墳の可能性があると考えている。古墳の年代は周溝から出土した須恵器でしか検討できないが、古墳時代後期と考えられる。

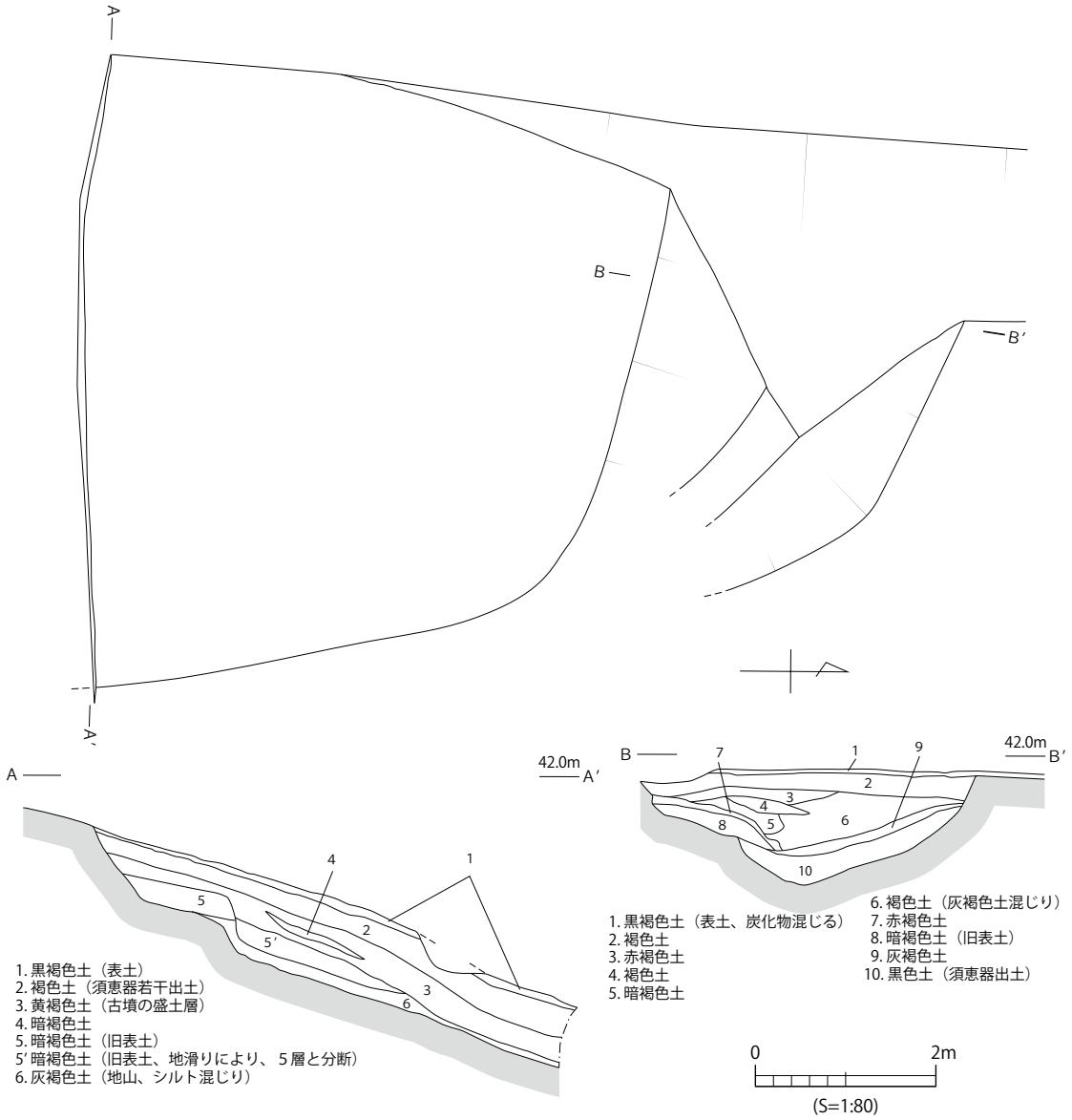
（5）3 区の遺構

3 号墳（第 70 図）

3 区の頂部に存在する古墳である。1 区の 1 号墳や 2 区の 2 号墳と同様に、墳丘のほとんどは調査範囲外にあり、墳丘の一部が調査範囲内に広がっている。墳丘は地山層の上に盛土を施していると思われるが、旧表土層も確認できなかったので、墳丘の構造は明らかにできなかっ



第 68 図　米坂古墳群　1 区　1 号墳実測図（S＝1/80）



第 69 図　米坂古墳群　2 区　2 号墳実測図（S＝1/80）

た。周溝は調査範囲内に一部が伸びており調査できた。周溝は直線状に調査範囲外から南東に伸びており、断面の形状は三角形に近く、埋土は 1 層である。出土遺物はなかった。

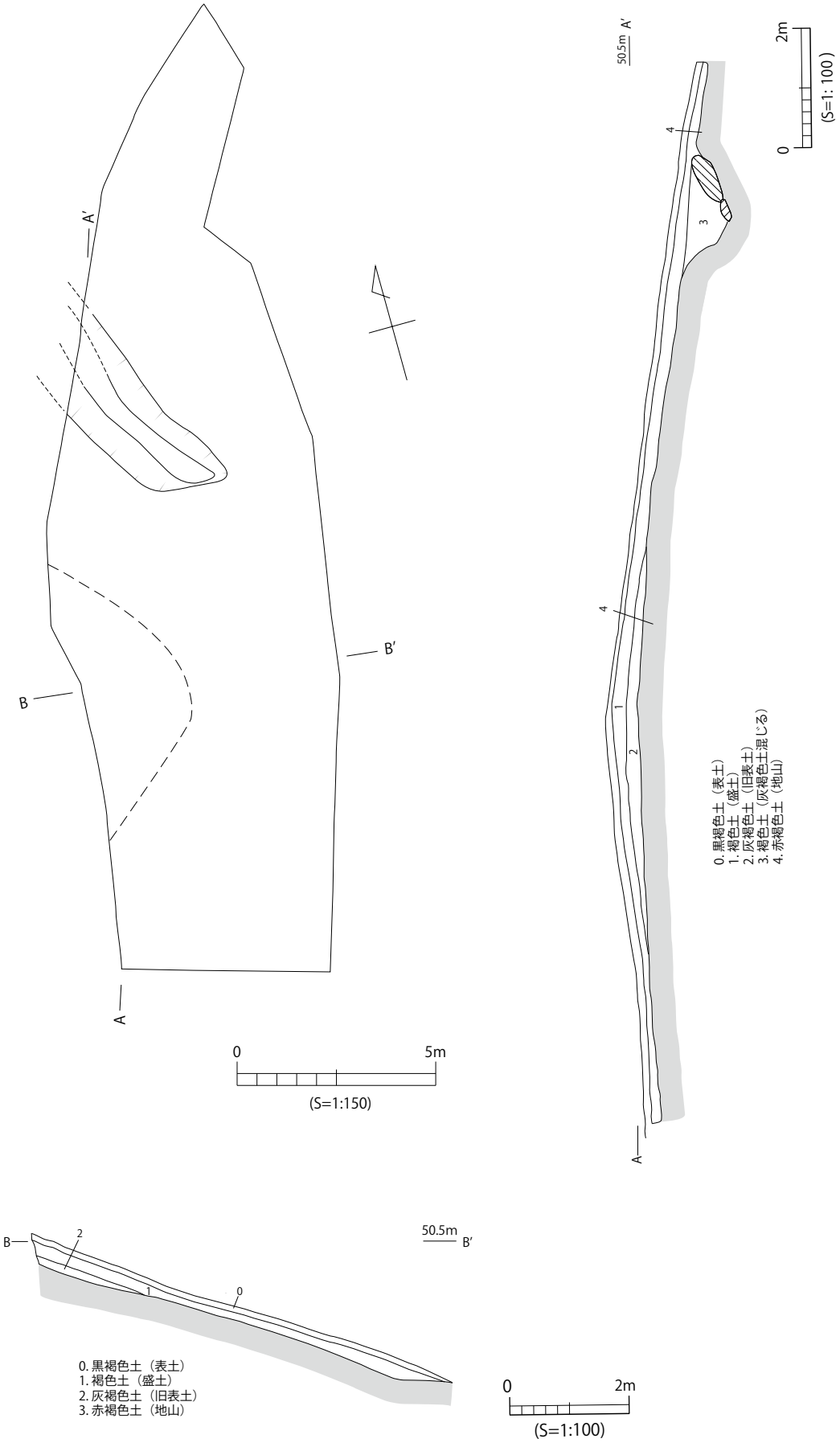
調査では古墳の墳形は明らかにできなかったが、調査範囲外の古墳を見ると円墳の可能性が高いと思われる。

（6）4 区の遺構

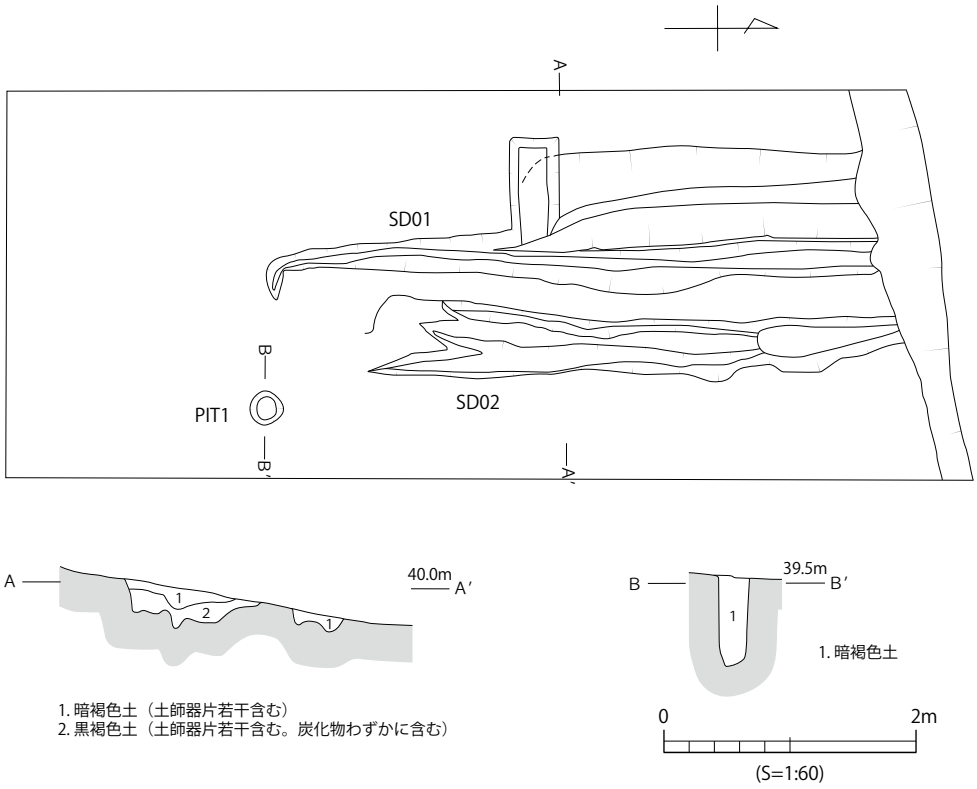
SD01・SD02（第 71 図）

二つの溝状遺構は 4 区の北端の壁際から南に延びている溝状遺構である。SD01 は南端で東に曲がっている。溝状遺構が屈曲した先には、ピットが存在している。SD01 より低い位置にある SD02 は深さが一定でなく、平面の形状も不定形であるため、溝状遺構としているが、地滑りによる、ひび割れの可能性もある。

遺構の性格は不明であるが、SD01 は建物に伴う溝状遺構の可能性がある。出土遺物がないため、



第 70 図　米坂古墳群　3 区　3 号墳実測図（S ＝ 1 /150･100）



第 71 図　米坂古墳群　4 区　SD01・02 実測図（S＝1/60）

遺構の年代は不明である。

（7）寺跡区の遺構

本調査区は、1 区の南東にあり、近年まで建物が建っていたようで、小屋の残骸が残っている調査区であった。調査区の周囲には石垣があり、その上に平坦面が造られていた。

当初、本調査区は現代の建物を建てるための造成の跡と考え、発掘調査する予定はなかったが、地元で寺院が存在したとの伝承があったため、現地を観察したところ、須恵器片などが存在しており、改めて発掘調査を行った結果、礎石建物跡が確認された。また、この礎石建物跡が立地する平坦面は大規模な盛土でできていることがわかった。盛土内からは古墳時代の須恵器の甕が 2 点と多数の石見焼きの瓦、近代以降の陶磁器が出土している。須恵器の甕 2 点はほぼ完形で出土した。盛土は近代以降に施されたものと考えられる。

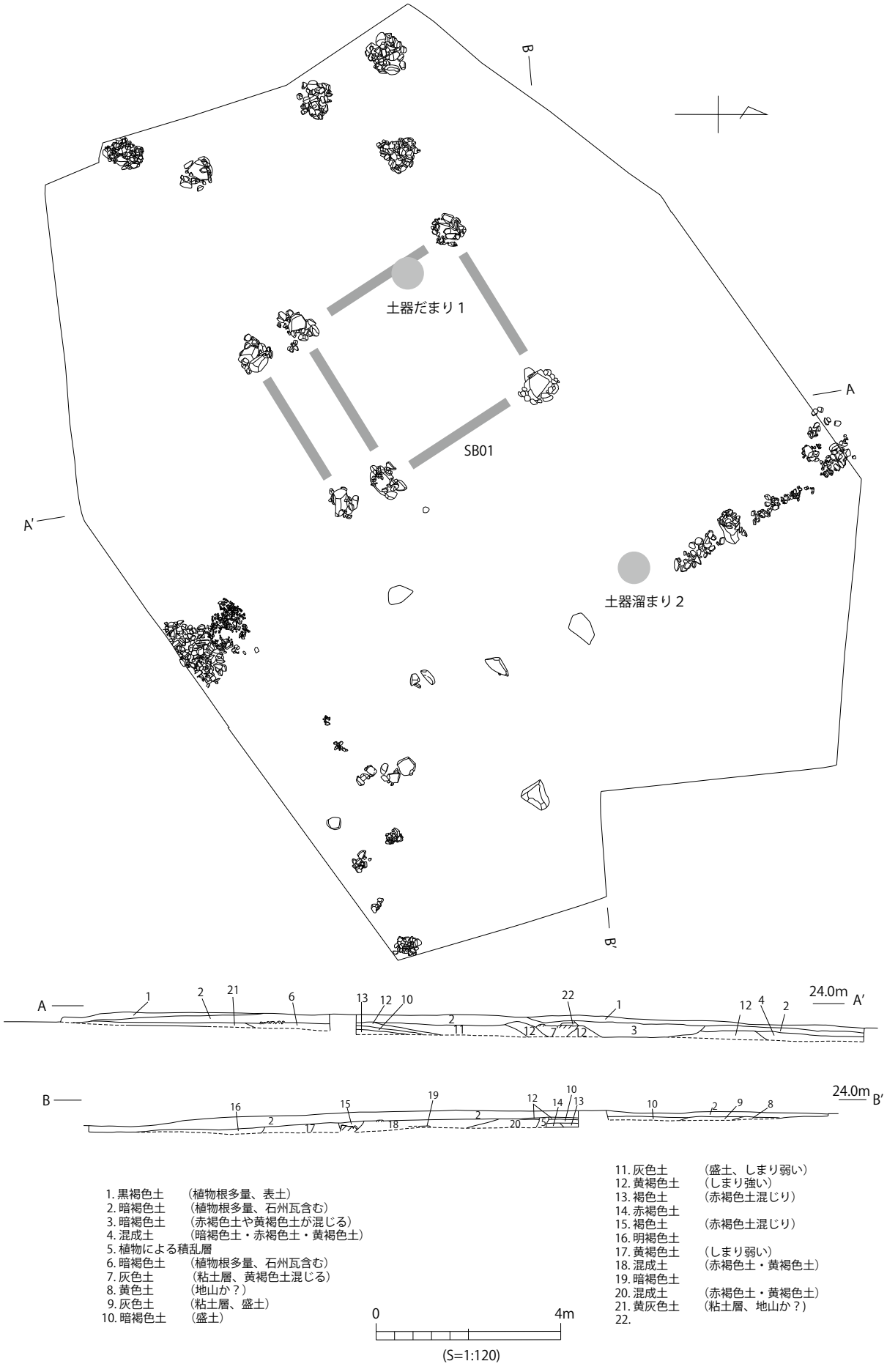
礎石建物跡（第 73 図）

寺跡区の中央から西寄りに造られている礎石建物跡である。礎石は盛土を掘り込み、その内部に大型の礫あるいは根石を入れ、その上に平坦面をもつ大型の礫を据えていると考えられる。礎石の配置を見ると、南東側に庇を伴う礎石の配置が 2 カ所で確認できる。第 73 図のＢ－Ｂ’列とＣ－Ｃ’列の礎石列は並行しており、梁間 3.8 ｍで桁行 3.9 ｍの建物跡であった可能性がある。Ａ－Ａ 1’列は南端の礎石以外は他の礎石と並ばず、建物に伴う礎石であるか明らかにできなかった。

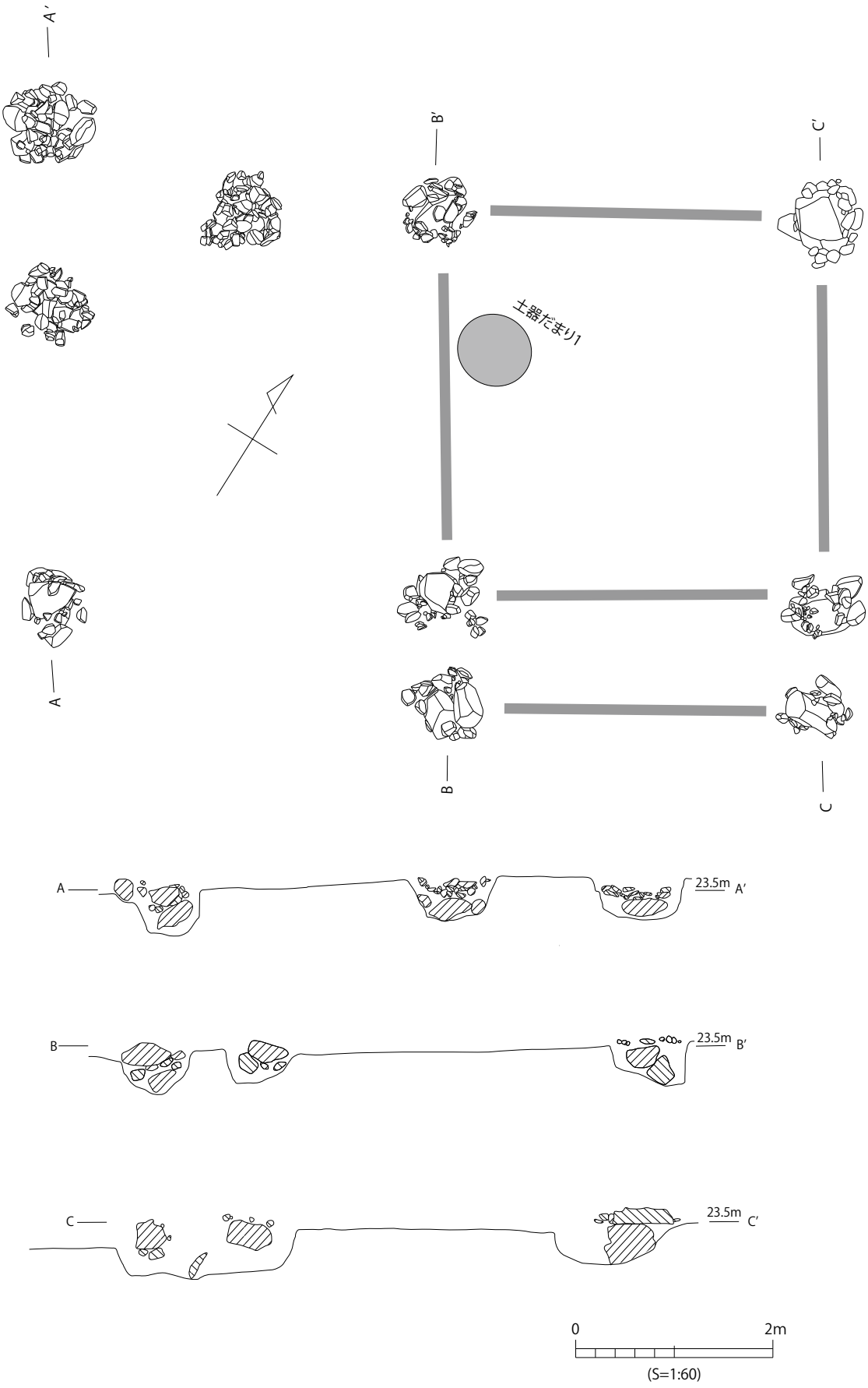
土器溜まり 1・土器溜まり 2（第 74 図）

礎石建物跡が立地する盛土層を精査していたところ、2 カ所で土器溜まりを確認した。

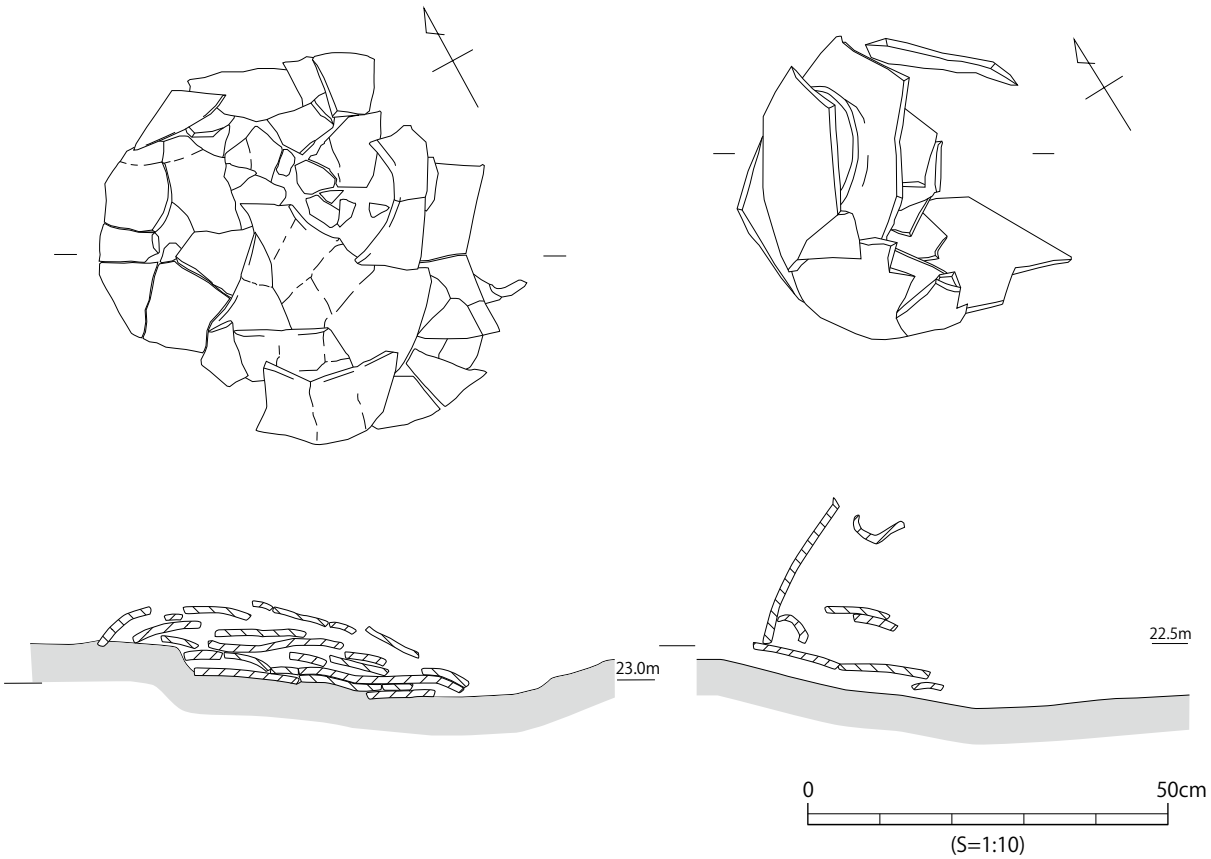
土器溜まり 1 は礎石建物跡の範囲内から出土している。造成された盛土層の上面で出土した。ほ



第 72 図　米坂古墳群　寺跡区　遺構配置図（S＝1/120）



第 73 図　米坂古墳群　寺跡区　SB01 実測図（S＝1/60）



第 74 図　米坂古墳群　寺跡区　土器溜まり 1･2 実測図（S＝1/10）

ぼ完形の須恵器の甕が上から潰れたように折り重なって出土している。破片は多数出土しているが、1 個体分である。口縁部を上方に向けて出土していた。土器溜まり 2 は寺跡区の北西寄りの盛土の底面から出土した。胴部の一部で口縁部を塞ぐように埋められていた。何らかの意図で口縁を塞いだものと考えられる。

寺跡区の盛土は近代以降に造成されたものであり、土器溜まりの須恵器との年代差が著しい。これは近代以降に造成を行うために、米坂古墳群の尾根を削平した時に、古墳等の遺構を破壊し、掘り出されたものを再利用したためと考えられる。2 点の須恵器はほぼ完形であり、口縁が上を向いている土器溜まり 1 や、口縁部を塞ぐ状態で出土した土器溜まり 2 であることから、例えば地鎮のために再利用したのはないかと考えられる。

（8）1 区出土の遺物（第 75 図～第 84 図）

1 区では、須恵器や国産陶器、土師器、輸入磁器、土製品、石塔（五輪塔･宝篋印塔）、石製品（石仏）、石器が出土している。

第 75 図 1 は古瀬戸の不遊環付き仏花瓶で大型品である。頸部から上部と高台が欠損している。集石 1 の蔵骨器として利用されていたものであるが、本来は寺院の供花用の花器である。胴部の上半には三つ巴の印花文、胴部中央から下半に 3 重の円剣先の印花蓮弁文、さらにその下に画花による草文を施している。外面は全面施釉で、内面は施釉時に垂れた釉が一部に流れているが無釉である。外面の釉は発色が悪い鉄釉である。色調は黒色から黒褐色、褐色まで様々である。外面下部の一部の草文内にのみ明るい褐色の釉が見られる。意図的な塗布か判断が難しいが、草文内に収めている点から意図的に釉薬を塗り分けている可能性も考えられる。胴部は表面に凹凸が

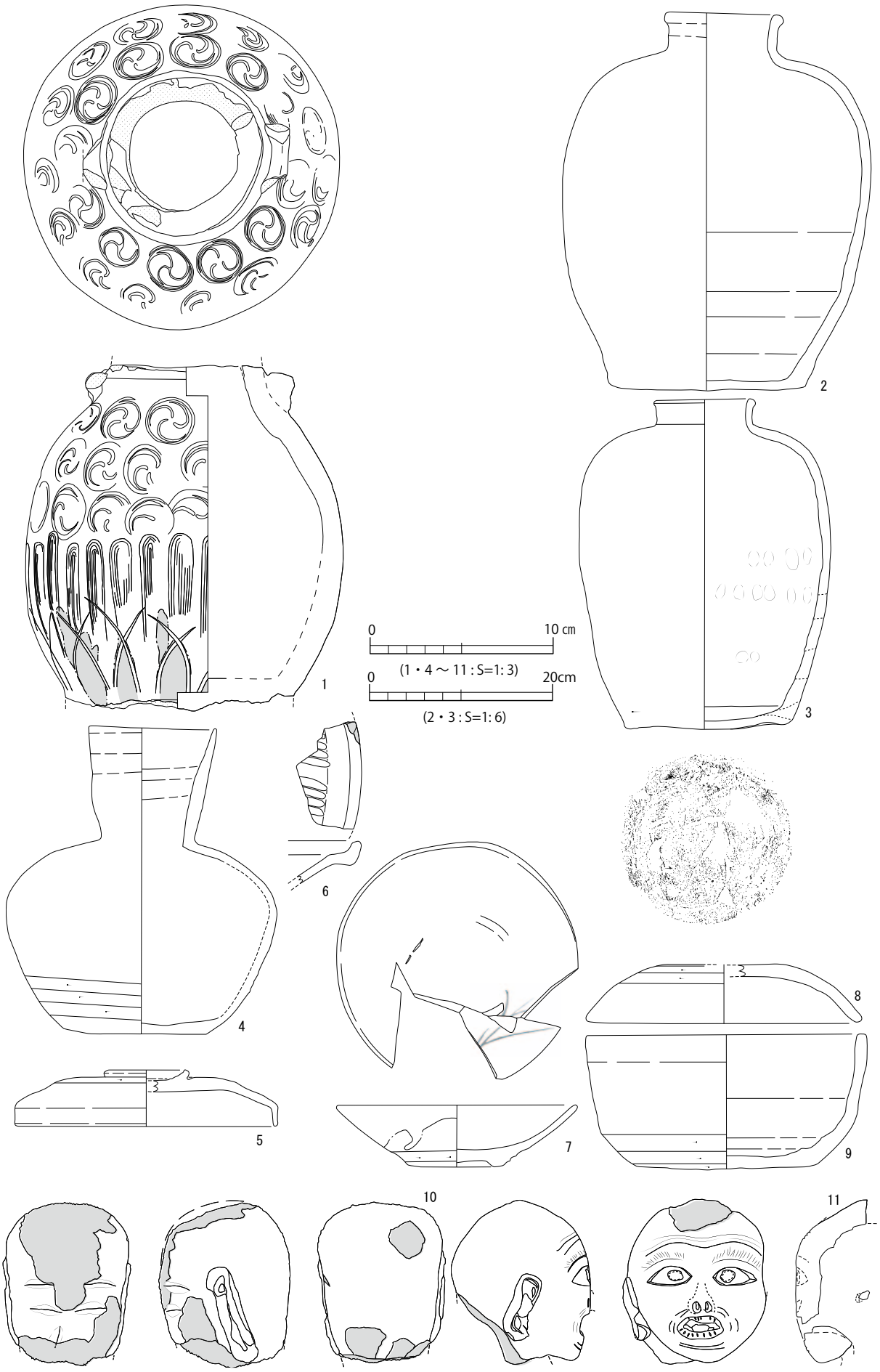
帯状に見られることから、粘土紐輪積み成形によって作られていると思われる。

胴部上端は頸部との接続部でくびれているが、このくびれ部に２個一対の環耳状の飾器が付着している。粘土紐を環状に成形し貼り付けた不遊環とみられ、その不遊環の下部が残っているものと考えられる。残存する不遊環の下部の粘土は不遊環の接着のために押しつけられたものと思われる。高台は残っていないが、胴底部外面が残っており、高台は付け高台であったと見られる。頸部より上部と高台は欠損しているが、蔵骨器として用いられた資料に頸部の打ち欠きが多く見られることから、本資料も頸部を打ち欠いていると考えられる。胴部上端面に残る打ち欠き痕は研磨されており、打ち欠いた面の高さを揃えて平坦にしている。底部も打撃による剥離面が多数残っていることから高台を打ち欠いているものと考えている。

高台が付け高台であることから花瓶Ⅱ類であり、古瀬戸編年中期様式Ⅰ期頃の遺物と考えられる。２と３は備前焼の壺である。二つとも集石１で蔵骨器として利用されていたものである。２と３の口縁部は玉縁で、頸部は口縁に向かって直立する。やや肩が張り、底部へ向かって胴部は丸みを帯びながら狭まっていく。口縁部の玉縁の幅は広くなく、あまり突出せず、断面は丸みを帯びる。３は底面に平行する２条の突帯が見られる。中世備前焼分類試案ⅣＡ～ⅣＢと考えられる。

４は集石１で出土した須恵器の直口壺である。底部は平底で、頸部から口縁部は外傾し、口縁部は直線上となっている。胴下半部はヘラ削りである。出雲５期の遺物と考えられる。米坂古墳群に存在した古墳に副葬されていたものを転用したと考えられる。５は須恵器の坏蓋である。輪状つまみがつく。出雲７期か８期である。６は青磁の坏である。口縁部は屈曲し、内面に削りによる花弁を施している。龍泉窯系青磁坏Ⅲ－３b と思われる。７は唐津焼の皿である。内面に草文が描かれている。８と９は対になる遺物で、素焼きの蓋（８）と身（９）である。蓋は天井部を、身は底部をヘラで削っている。１区の削平された壁面の表土部分から出土したもので、胎土は粗く、内面に煤けたような黒色部分が存在していること、蓋が身を塞いで出土したことから、近世以降の胞衣壺ではないかと考えられる。10 は石製品の人物頭部である。目と鼻の陰刻があり、目の上にも陰刻が見られるが、表面が剥落しており形状は不明である。眉の表現か皺であろうか。地蔵の頭部ではないかと考えている。集石１内から出土しており、所属年代が近世まで下ることは無いと考えている。11 は表採された土製の人物頭部である。中空で、口と耳が貫通している。眉間の皺と眉、目は陰刻で表現し、鼻は貼り付けていたようで痕跡が残っていた。口は舌部の表現もあり、細部まで作っている印象である。年代は不明である。

第 76 図は集石１で出土した石塔である。１～４が五輪塔の部材で、５～ 10 が宝篋印塔の部材である。１の空風輪は空輪頂部が円錐形となる。石材は角閃石安山岩である。くびれ部の抉り込みが浅く円柱状の素材の形状を残している。ほぞの断面形状は多角形である。２と３は水輪で、２が白来待で、３が凝灰質砂岩である。２のノミ等による調整の痕跡は４の地輪に残る痕跡と非常に似ている。２の上下面に抉りはなく、３は上下面が抉られており、工具の痕跡が残っている。５～９は宝篋印塔の相輪で、５～７の石材は日引である。５は完形の相輪である。宝珠の頂部は突き出る形態で、請花や九輪の表現も掘り込みが深く、しっかりとした加工である。この相輪は軸が傾いており、相輪を見る方向によってかなり一方に傾く。したがって、実測は２面記録している。傾斜するほぞの下面中央に小さな穴が抉られている。本遺跡で出土したいくつかの相輪にも同様の小穴が確認できた。６は上半部が残っていない相輪で、５に比べ九輪の輪の高さがわずかに低く、



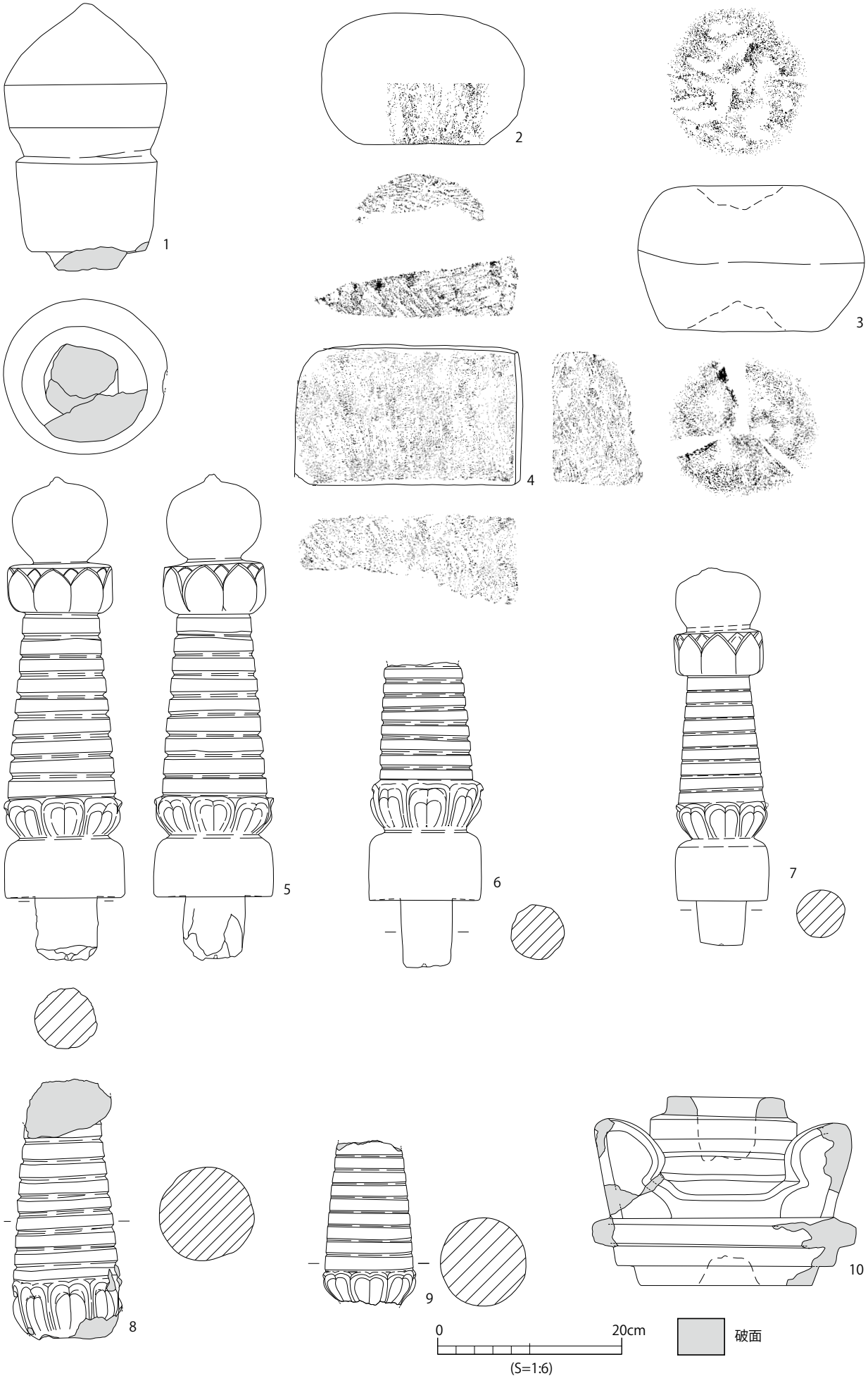
第 75 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (1)（S=1/3・1/6）

請花の高さは高い。九輪の輪は８つ残っている。九輪の輪がもう一段あったと仮定しても５より請花の下面は低くなると考えられる。加工が精美で形態も似ているが、残存している各部の大きさがわずかに異なっており、石材が同じであっても、５よりやや高さが低くなると考えられる。７はやや小さい相輪である。宝珠の頂部の突出は低く、宝珠下部の抉りは浅い。上部請花は花弁の表現が簡素化されており、直線的である。九輪は凹面の抉り込みが浅く、断面が三角形であった。下部請花の加工も浅く、表現が簡素となっている。８は凝灰岩Ｂ（火山礫凝灰岩）製の相輪で、請花の表現が５や６と異なり、特に凸部が低くなっている。９は小型の相輪で、安山岩製である。九輪の凹面は浅く、７と加工の度合いが近い。請花の幅もほぼ同じであり、大きさはほぼ同じになると考えられる。石材が安山岩質凝灰岩（いわゆる日引石）とわずかに異なるが、近似する安山岩質凝灰岩である。10 は笠である。隅飾突起は外傾し、先端は丸みを帯びる。二弧で区画はあるが文様はない。上部段形は６段で、段形の１段目から隅飾突起が造り出されている。上部ほぞ穴は壁面に縦方向の線状痕が見られる。工具で上部から削り込んで調整したものと考えられる。

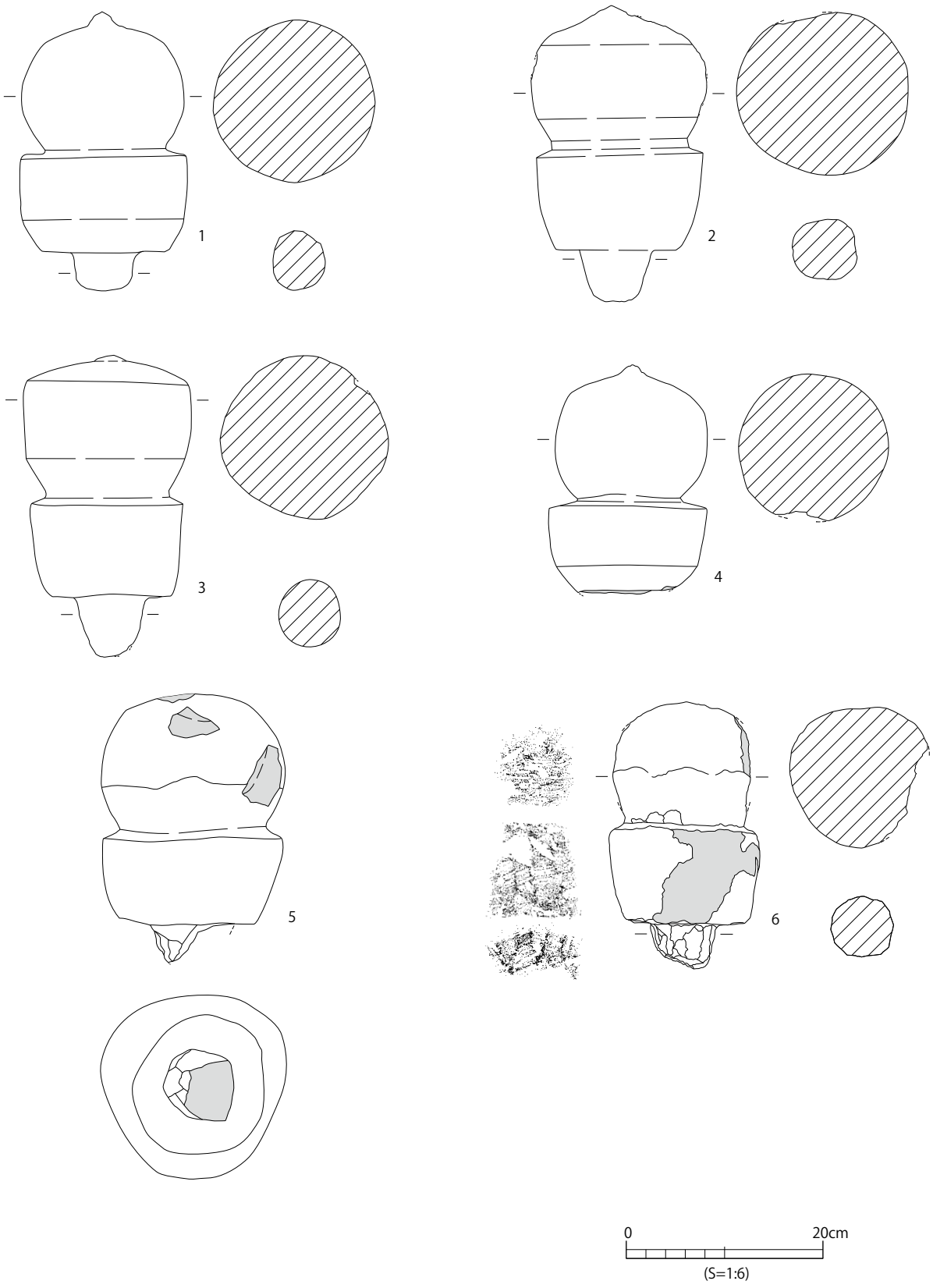
第 77 図～第 81 図は集石３で出土した石塔である。第 77 図は五輪塔の空風輪で、１～３が角閃石安山岩で、4 が安山岩、5 が石英安山岩質凝灰岩（白来待石）、6 が安山岩Ａ（大海崎石 : 和久羅）である。１～４の空輪が宝珠形で、５と６は頂部の突起が無く、丸くなっている。３はくびれ部のみ抉り込んで、円柱状である素材の形状をそのまま残している。１と４の石材は異なるが、空輪の頂部や丸みを帯びた側面の形状、風輪に稜が存在する点が類似している。石材も同じ安山岩であり、比較的近い石材産地のものを利用したものと考えられる。５と６は断面形状が円形にならず、空輪の頂部が丸く、稜が直線にならない、ほぞの加工痕が残っている点が同じである。技術的に同じ傾向が見られる。第 78 図は火輪である。１～３の石材は角閃石安山岩で、３と４は安山岩Ｂである。５は安山岩Ａ（大海崎石 : 和久羅）、６は凝灰質砂岩（来待石）である。１と３は降棟が直線的で、軒の上線が徐々に反り返るものである。１の軒の下線は両端がわずかに反り返っている。１と３は石材も同じで、大きさも類似している。２は扁平な火輪で、軒の上線と下線は両端でほぼ並行して反り返っている。降棟が緩やかであるため、高さは低い。上面の幅とほぞ穴の幅が変わらず、上面に平坦がほとんど無い。４は安山岩Ｃ火輪で、降棟は反り上がる。軒の下線は直線で、下面は平坦面である。軒の上線は端に近づき反り返っている。軒厚もあるため、全体の高さが高くなっている。６は４に形態が似ているが、軒の下線が両端で反り返っている。また、上面の平坦面が広く、ほぞ穴が広がっている。７は凝灰岩Ａ（荒島石）の火輪である。下面と軒端しか残存していない。軒の下線は直線で、下面は平坦である。軒端は広がっている。

第 79 図は水輪である。比較的扁平で大型な１や２、小型の４と６、中間の３、大型で比較的背が高い５と７に分けられる。石材は多様で、大きさとは合致してない。１と３の大きさは違うが、側面に平坦面が表現されている。梵字等の痕跡は確認できなかった。両者とも上・下面の抉り込みは見られない。石材は１が石英安山岩質凝灰岩、２と４、５が凝灰質砂岩、３が安山岩Ａ、６と７が凝灰岩Ｂである。

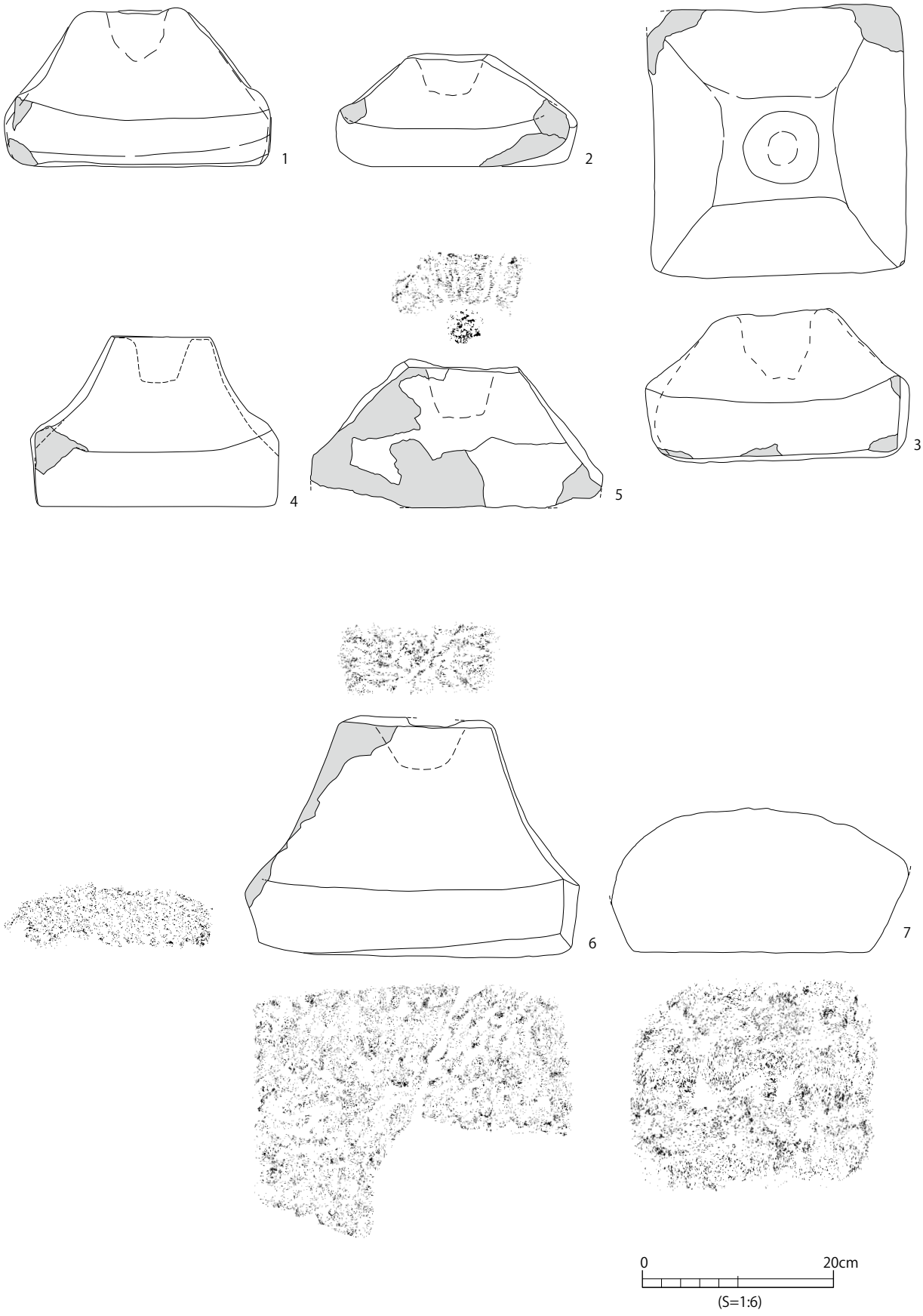
第 80 図は地輪である。石材は１が安山岩Ａ、２と３が石英安山岩質凝灰岩、４と５は凝灰質砂岩である。１が抉り込まれている地輪である。上下が逆転する可能性もある。比重の重い安山岩で、全面にわたって加工痕が残っている。各面で加工方向は異なっているが、同一面でも２方向以上から加工を行っている様子が見られる。加工具は寝かした状態で、石材を削っているものと、



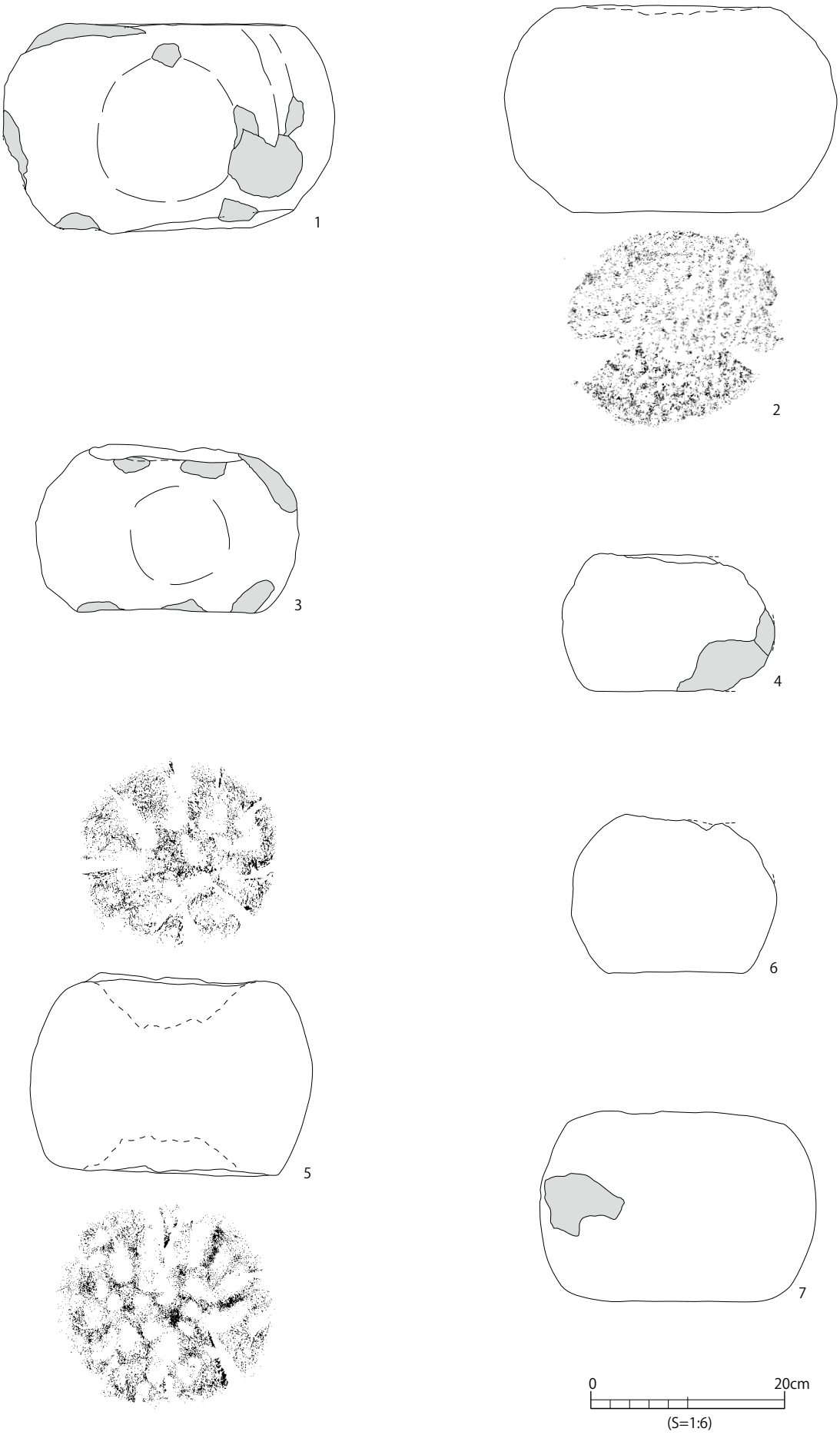
第 76 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (2)（S=1/6）



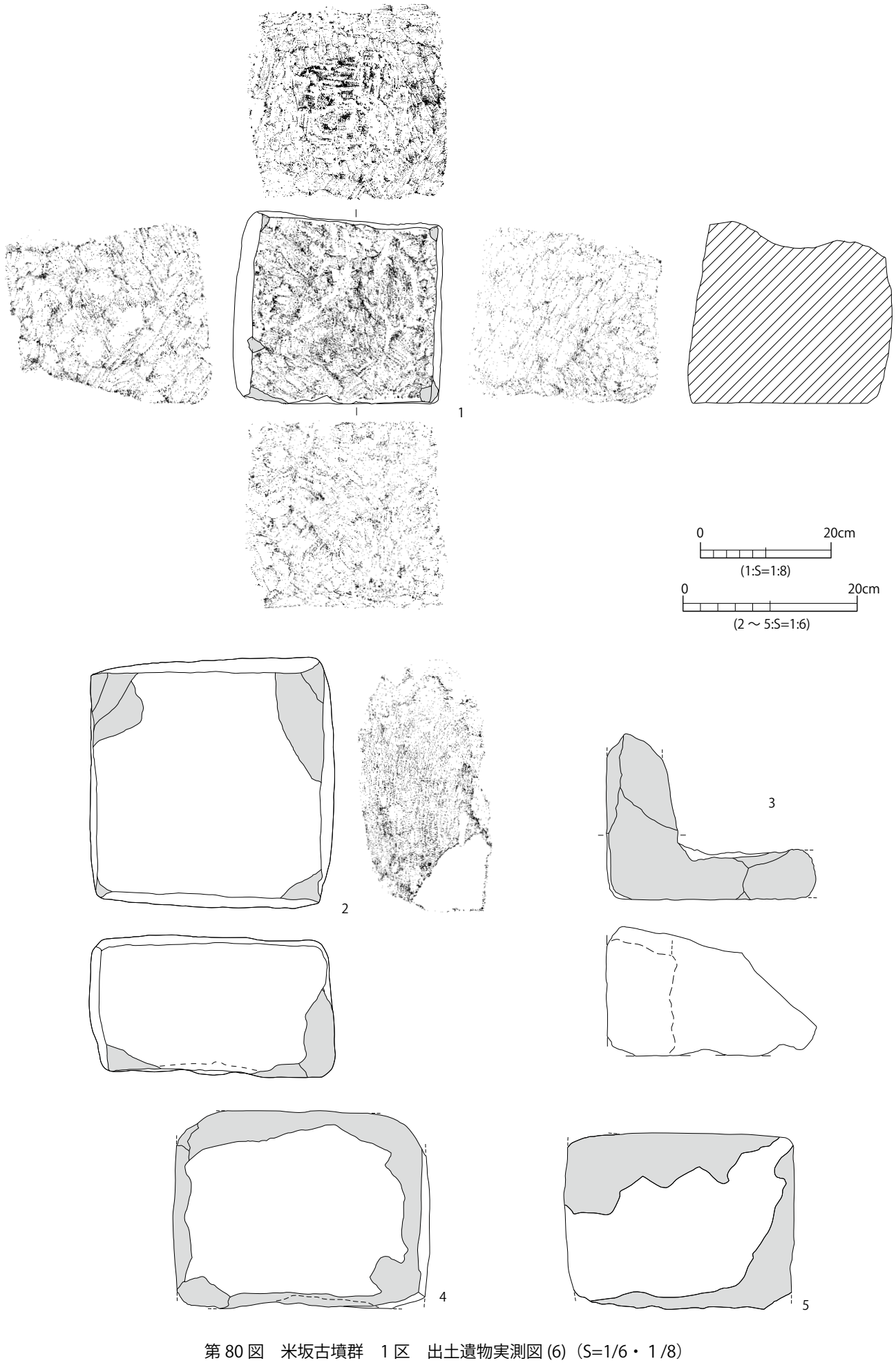
第 77 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (3)（S=1/6）



第 78 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (4)（S=1/6）



第 79 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (5)（S＝1 / 6）

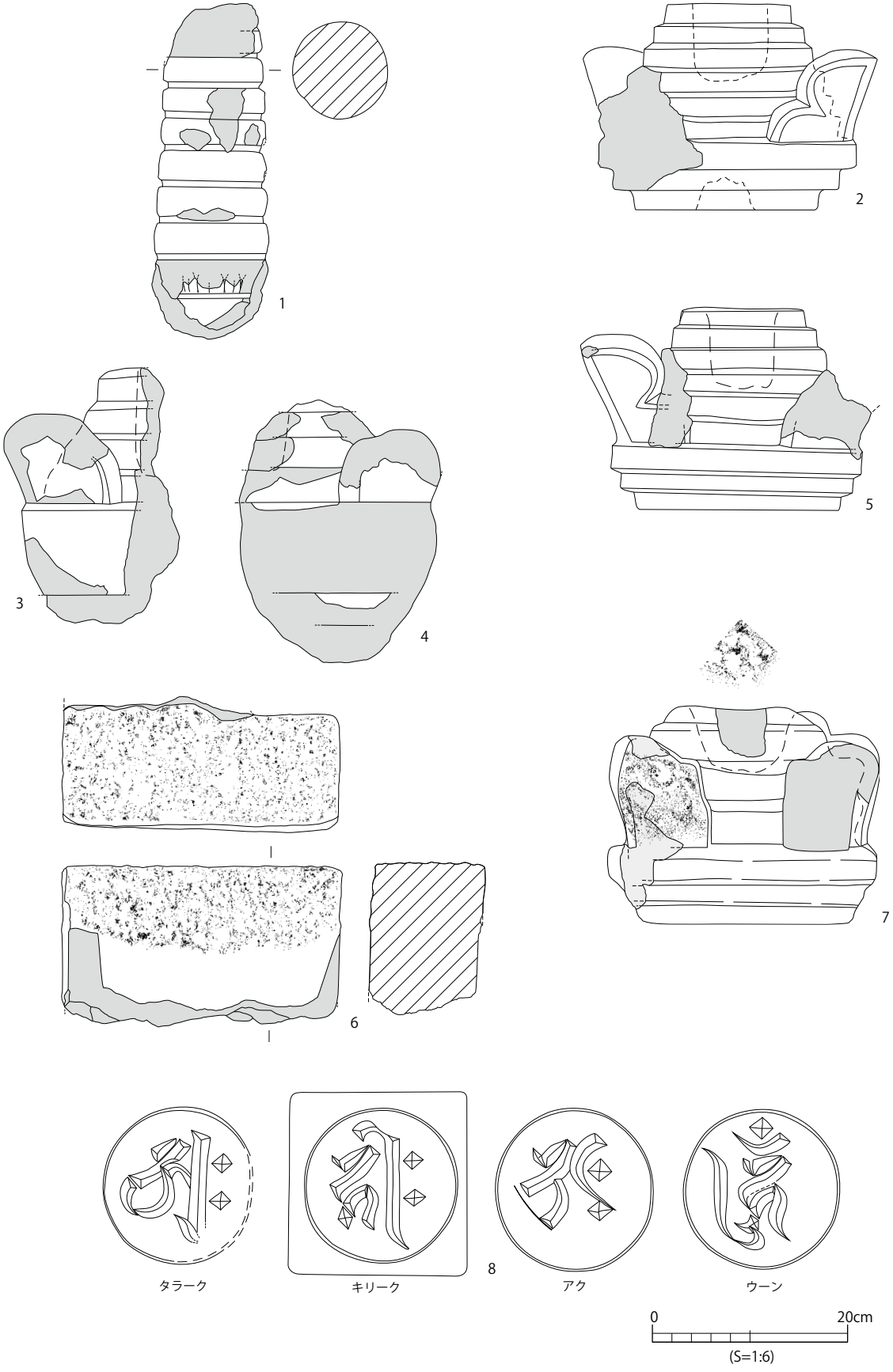


第 80 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (6)（S=1/6・ 1 /8）

加工具を立てて細かく削る手法が存在するようである。非常に粗い作りで、方形になっていない。2は扁平な地輪で、側面には細かい調整を施した工具の痕跡が残っている。この痕跡は第79図2と4に非常に似ている。3は中空の地輪と考えられるが、大きく破損しており、詳細は不明である。4と5はほぼ同じ大きさの地輪である。風化が激しく、縁辺が剥がれており、稜が残っていない。上・下面の抉りはわずかである。

第81図は宝篋印塔の部材である。1は石英安山岩質凝灰岩の相輪で、2が安山岩質凝灰岩の笠、3と4は同一個体と考えられる石英安山岩質凝灰岩の笠である。5は安山（不明）の笠で、7は凝灰岩質砂岩の笠である。6は安山岩Bの部材で、基礎である。8は石英安山岩質凝灰岩の塔身である。1は九輪の輪が7段残っている。九輪の下にはわずかに請花の表現が見られ、九輪は上部に続くものと考えられる。8段目は存在するようであるが、9段存在したかは不明である。九輪の輪の表現は明瞭で、凹面のしっかり掘り込まれている。輪の突帯は曲線である。下部請花は花弁毎に凹凸が見られるので、花弁は削り出して表現している。相輪の断面形は円形である。2の段形は6段で、隅飾突起は軒から造り出されている。隅飾り突起は二弧で段形の4段目の上面まで広がりながら立ち上がり、先端は尖っている。下部段形は2段で、下面は平坦となり、中央にほぞ穴が穿たれている。上面のほぞ穴の径は大きい。5は安山岩で同じ笠であるが、隅飾突起の高さが5段目半ばまであり、隅飾突起の形状も基部は真っ直ぐ立ち上がるため2に比べ幅が狭い。下面にはほぞ穴は見られない。2と5は非常に似ている形状であるが、わずかに異なった特徴を持つようである。3と4は軒が厚く、段形の厚さもある。上部段形は4段残っているが、それ以上存在したかは不明である。下部段形は2段存在している。隅飾突起の幅は広く、軒から造り出している。一弧か二弧かわからなかった。各部の大きさがほぼ同じ事から同一個体と考えられる。7も笠である。凝灰質砂岩で上部段形が4段残っている。軒の厚さは2や5に近い。隅飾突起は軒から造り出され、わずかに開くが軒の幅と同一程度しか広がっていない。隅飾突起は二弧と思われるが、下部が大きく上部は小さい。弧の交点に勾玉状の陰刻があり、それを囲むように線刻が描かれている。石材の性質上、風化が著しく全体的に稜が無くなっている。6は直方体の石材である。1面が破面で、本来は平坦な部材であった可能性もある。本遺跡で同様の直方体に近い部材が何点か出土しており、2から3点の石材を合わせて基礎のように利用していた可能性も考えられる。8の塔身は立方体である。稜は直角ではなく、丸みを帯びている。4面に梵字と月輪が陰刻されている。梵字は金剛界四仏を示し、東に「ウーン（阿閦）」、南に「タラーク（室生）」、西に「キリーク（弥陀）」、北に「アク（不空成就）」を配している。梵字は丁寧に掘り込まれており、陰刻の断面は三角形にして、稜を意識した作りである。上下面にほぞは見られない。

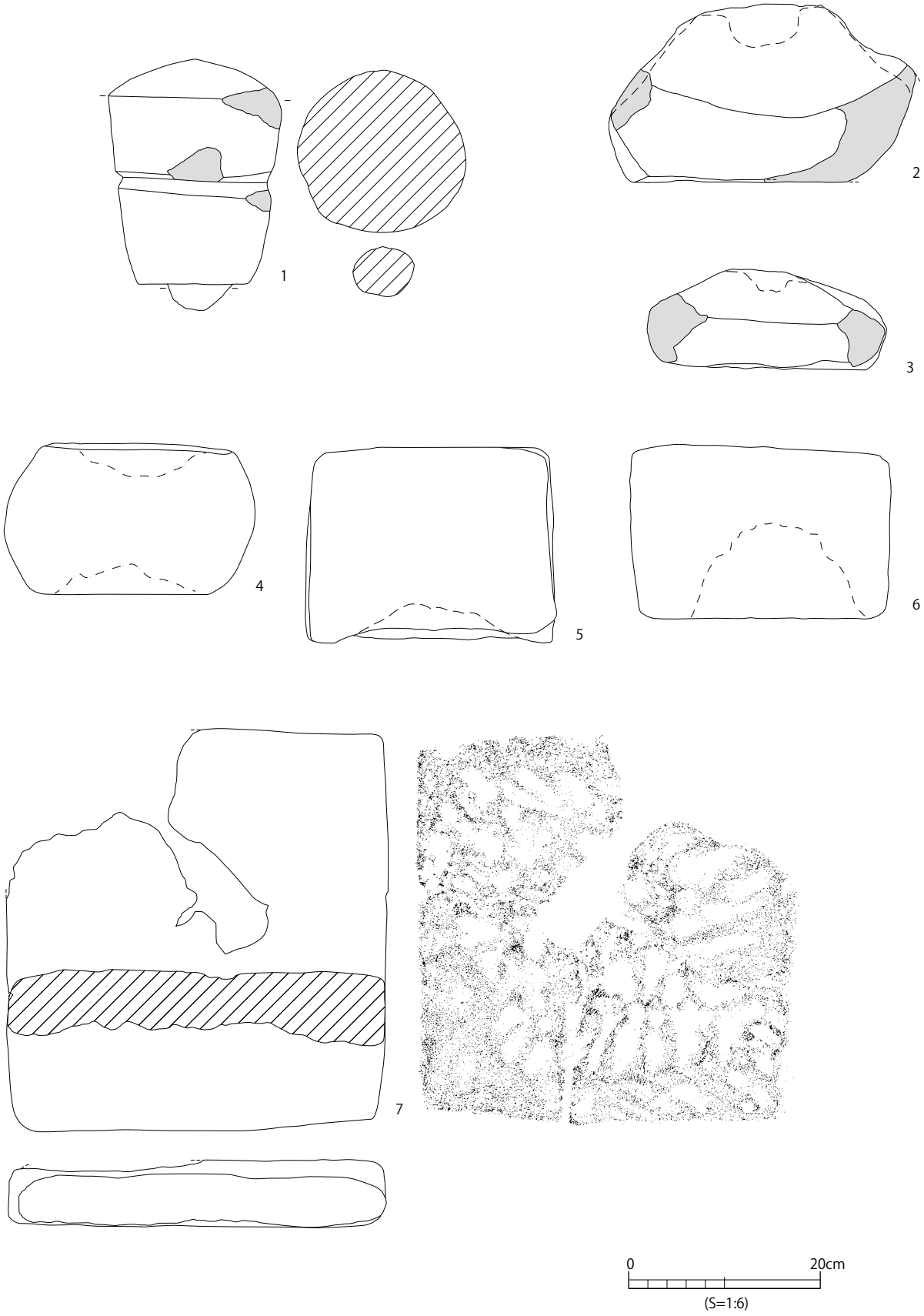
第82図は集石7の石塔である。全て五輪塔の部材で石材は来待である。1は空風輪で、くびれ部が断面三角形に刻み込まれているもので、加工が簡素化されている。空輪は頂部が直線状で、わずかに尖っている。ほぞは低く、設置した場合は不安定と思われる。2と3は火輪である。2は大型で、3は小型である。両者とも風化が激しい。2は降棟が左右非対称で、直線状になる稜と、曲線状になる稜が存在する。軒の上線は曲線で反り返り、下線は直線で、下面は平坦である。3は扁平な火輪で、軒の下線は直線で、上線は軒端で急激に反り返るとみられる。降棟は直線で立ち上がりが弱く、全体の厚みがない。4は水輪で、上下面を抉り込んでいるものである。側面のふくらみが左右非対称で、上面と下面が逆となっている可能性がある。5と6は地輪である。下



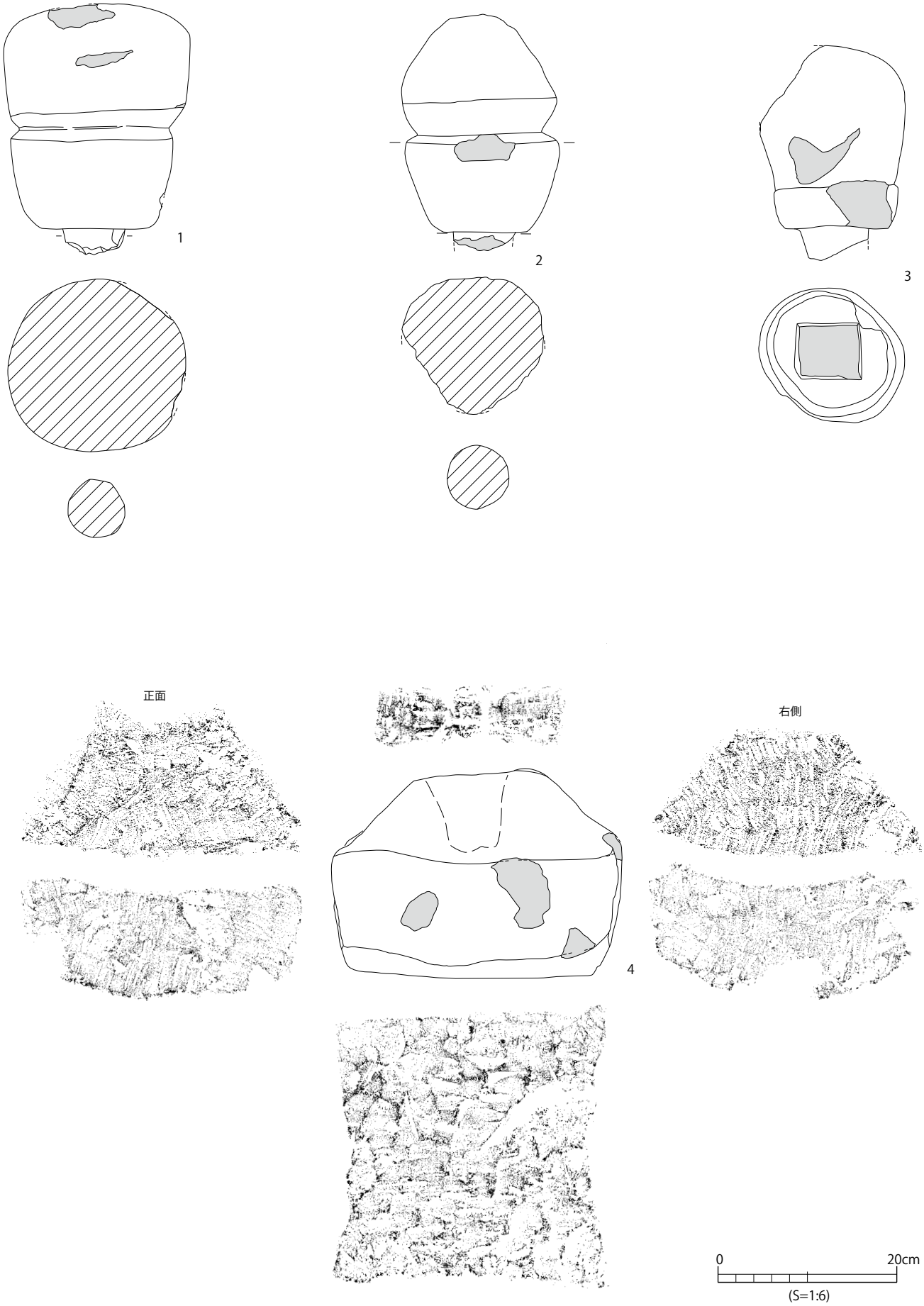
第 81 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (7)（S=1/6）

面から抉り込まれており、6 は深い。7 は地輪の下部に設置される台座と思われる。上面はやや凸面となり、下面は工具によって浅く抉り込まれている。

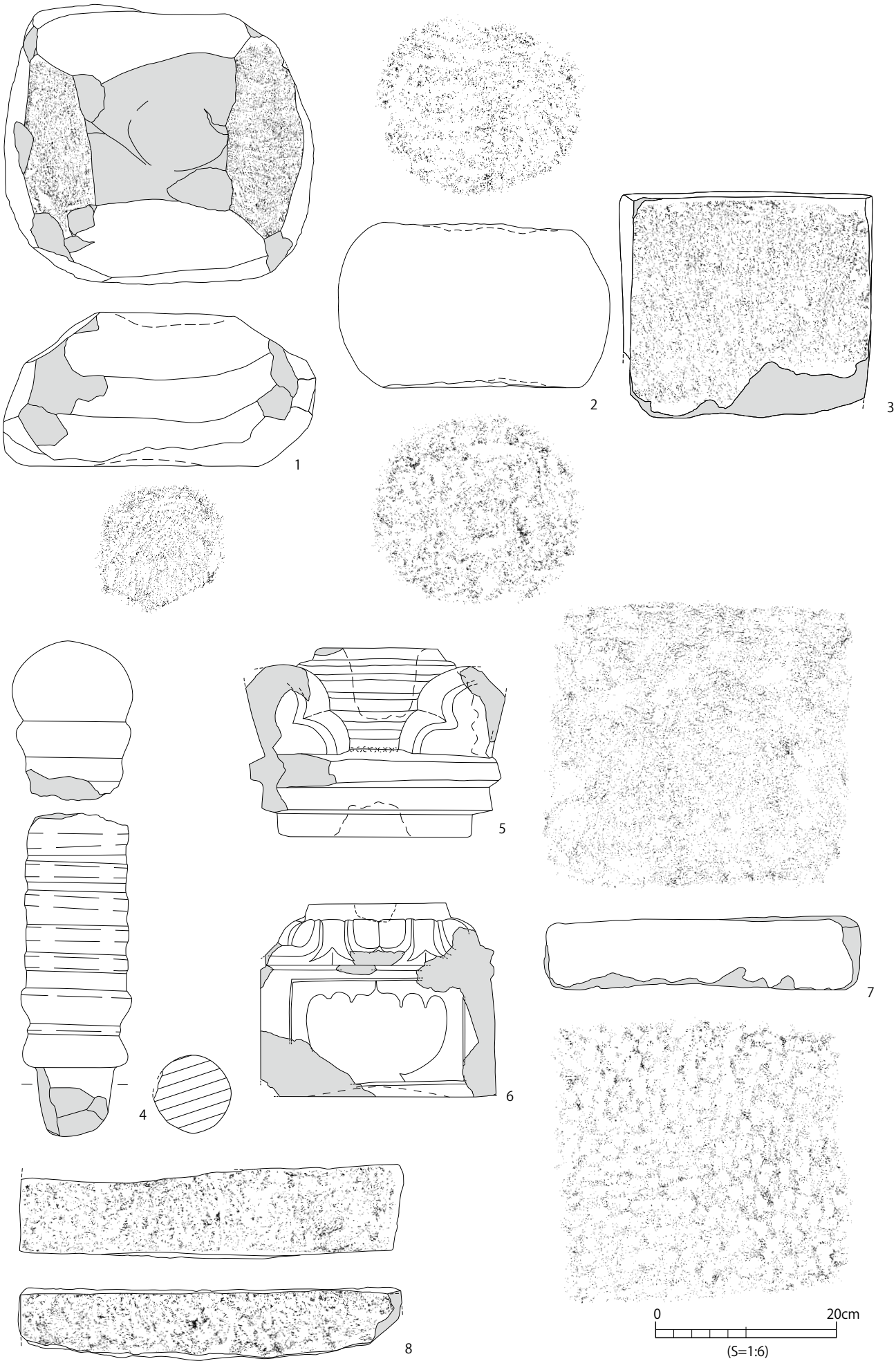
第 83 図と第 84 図は遺構外出土の石塔である。第 83 図 1 ～ 3 は五輪塔の空風輪で 4 と、第



第 82 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (8)（S=1/6）



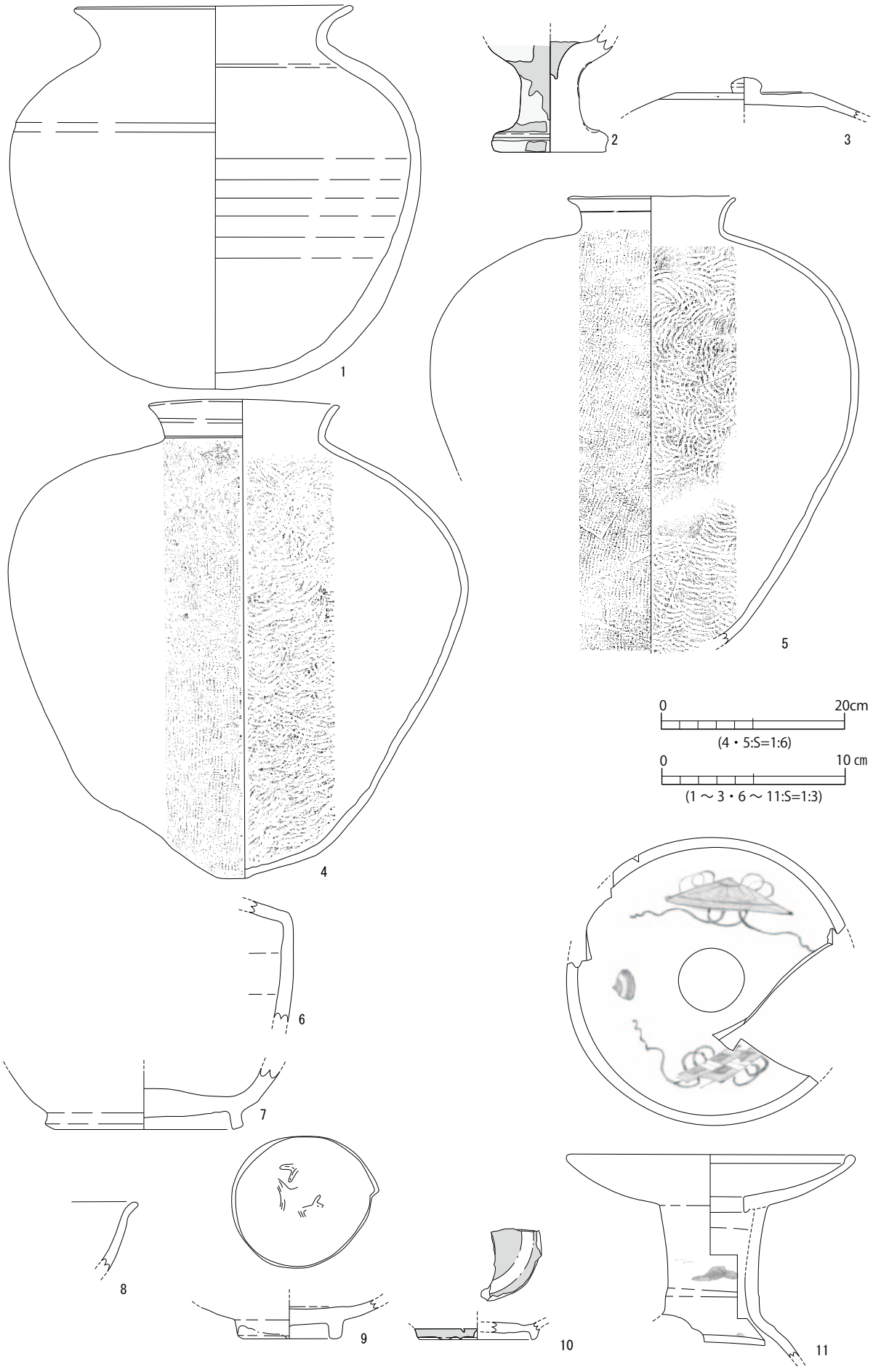
第 83 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (9)（S=1/6）



第 84 図　米坂古墳群　1 区　出土遺物実測図 (10)（S=1/6）

84 図 1 は火輪である。2 は水輪で、3 は地輪である。4 は宝篋印塔の相輪、5 は笠、6 は基礎である。7 と 8 は台座と考えられる。第 83 図 1 はくびれ部を抉り、空輪と風輪を表現している。空輪の頂部は丸みを帯びている。2 は空風輪を削り込んで作っており、素材の形状を残していない。2 と 3 は同じ比重の軽い凝灰岩 B を用いている。3 は空輪が大きく、ほぞの断面が長方形になる。本遺跡では例のないものである。風輪は帯状に表現されている。4 は軒厚が幅広の火輪である。全面に工具痕が残っており、上面のほぞ穴内にも多数痕跡が残っていた。軒の上線はほぼ直線で、下線は軒端近くでやや反り返る。石材は比重の重い安山岩 A である。風化が著しいが残存している面には工具の痕跡が残っている。工具痕は火輪に対して刃部を直角近くに傾けて調整していたようにみられる。軒の上線は両端で反り返っている。下線も同様である。非常にひずみの大きい遺物である。第 84 図 1 は安山岩 A の五輪塔の火輪である。全面に工具による細かい調整痕が残っている。軒の上線と下線は軒端で反り返っている。成形が不十分で不定形である。上面は表面が剥落している。2 は角閃石安山岩であるが、いわゆる大山系角閃石安山岩と班晶の比率が異なっている。3 は立方体に近い地輪で全面に工具痕が残っている。4 は凝灰質砂岩の宝篋印塔の九輪である。風化しており、稜は明瞭でない。宝珠は丸形であるが、やや頂部が尖る。上部請花と下部請花は簡略化され、表現はみられない。ほぞは太く、断面形は円形である。九輪は 5 段ほど残っているようであるが、凹面と凸面の境界は明瞭でない。5 は安山岩の笠で上部段形は 6 段、隅飾突起は軒から造り出されている。隅飾突起の立ち上がりは直線的に開く。上部段形の断面形状は、1 段目から 3 段目が曲線の凹凸となっており、階段状になっていない。下部段形はしっかりした作りである。下面にはほぞ穴が開く。6 は返花座と格座間が造り出されている。資料は破損しており、およそ 4 割程度しか残っていない。返花座は中央に複弁を配している。

第 85 図 1 と 2 は 2 区で出土した遺物である。1 は 2 号墳の周溝から出土した須恵器の壺である。口縁は外傾し外反している。胴部は丸く、底部も丸底である。古墳時代後期の遺物であろうか。2 は 2 区の表土から出土した小型の仏花瓶である。底部から脚部、胴部下半のみ残存している。外面は全面施釉と考えられるが、剥落が激しく、半分ほど残っているだけである。内面も施釉されているようであるが、意図的な施釉か不明である。外面の釉薬はオリーブ灰色～黒色の色調の鉄釉で、内面は透明で灰釉は施釉されているか焼成時に被った灰が溶けたものである可能性がある。脚部は充填されており、底部は回転糸切り痕が残っている。ロクロ水挽き成形と考えられる。残存部分には文様は認められなかった。高台内部が充填されており、小型であることから花瓶Ⅰa 類と考えられる。器形と釉薬の色調が不安定なことから古瀬戸編年中期様式でⅠ期～Ⅲ期であると考えられる。3 は 1 と同じ 3 号墳の周溝で出土した須恵器の坏蓋で、宝珠つまみである。8 世紀後半の遺物とみられる。4 ～ 11 は寺跡区から出土した遺物である。4 と 5 は須恵器の甕である。6 と 7 は須恵器の壺である。8 ～ 10 は青磁で、11 は磁器の仏花瓶である。4 は土器溜まり 1 で出土している。口縁部に段は付かず、頸部は「くの字」に屈曲し、沈線を施している。5 は土器溜まり 2 で出土している。口縁は外反し、沈線を 1 条施している。丸底と考えられる。6 と 7 は同一個体と考えられ、6 が同上半部で、屈曲する肩部である。7 は高台付きの底部である。8 は無文の青磁椀である。口縁は外傾し、外反している。龍泉窯系青磁椀Ⅳ類と考えられる。9 は坏である。見込み部に双魚文と思われる印文が存在する。龍泉窯青磁坏Ⅲ－ 4C である。10 は青磁の皿である。底部のみ残っており、形状は不明である。見込みに蛇の目状の釉剥ぎが見られる。11 は磁器の花



第 85 図　米坂古墳群　2 区・3 区・寺跡区　出土遺物実測図（S=1/6・1/8）

器である。口縁部内側に笠と宝珠、2 巻の巻物、紐が描かれ、頸部外面には雲文が表現されている。

第 4 節　米坂遺跡

（1）調査の方法

米坂遺跡は、和久羅山から派生する尾根に挟まれた大きな谷に立地した遺跡である。平成 5 年に松江市教育委員会が農道建設に伴い発掘調査を行っており、古墳時代中期から後期半ばの集落跡が確認されている。

今回の調査対象地は非常に広大で、農道の北と南で便宜上分割し、それぞれ数カ所で小面積の発掘調査を行い、遺物や遺構の把握に努めた。しかし、和久羅山から流出した土石流が堆積したと考えられる礫層が幾層にも堆積しており、谷部では遺物や遺構は確認できなかった。

しかし、松江市教育委員会が過去に調査を行った地点に隣接する場所も今回調査範囲になっており、そこを 1 区として発掘調査を行った。

1 区には既調査分と同様に遺構や遺物が出土する可能性が高いため、1 区の発掘調査は遺構のつながりと遺物包含層の確認に重点を置き、発掘調査を行った。

なお、1 区の西側は粘土層が広く堆積しており、遺構や遺物はみられなかった。また湧水が激しく、西側の粘土層は全面を掘り下げるには至らなかった。

（2）層序

米坂遺跡の基本層序は、表土に耕作土や山林の腐植土、農道建設時の盛土が堆積していた。この下には遺物包含層である黒褐色土層が堆積している調査区と、和久羅山より流出した礫層が厚く堆積している所があった。米坂遺跡は大きな谷全体が遺跡となっており、本来は谷の中央は低くなっていたが、谷の中央部を中心に農道建設時の表土の上に盛土を施し、大規模な平坦面が造りだし、畑や果樹園としていた。今回遺構や遺物を検出できた 1 区は谷部ではなく、丘陵の裾から斜面にかけての調査区であったため盛土が少なく、また土石流由来の礫層も無かったため、遺構や遺物の確認が可能であった。

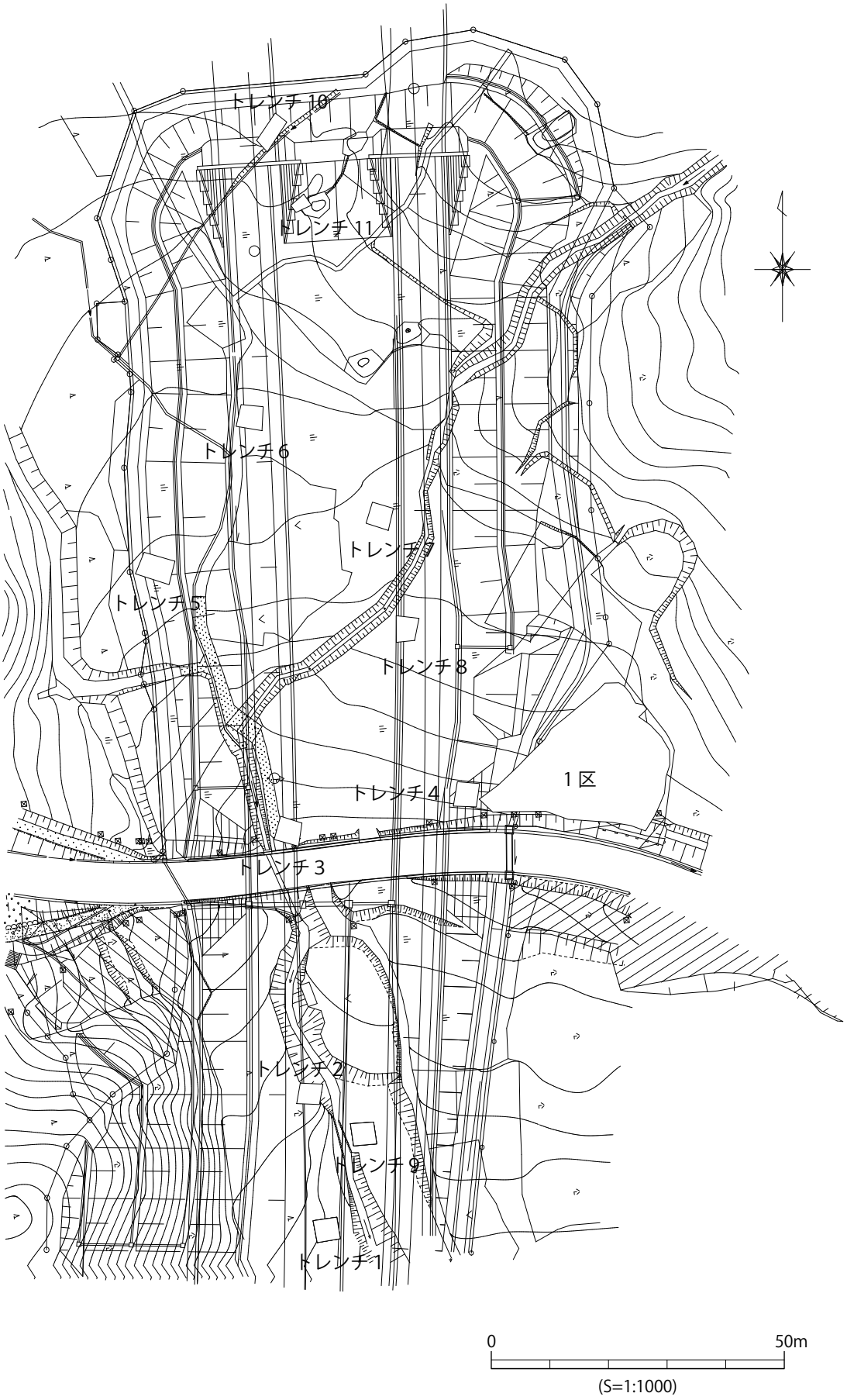
（3）遺構

米坂遺跡 1 区の遺構は東側に偏って検出されている。調査区の東半分は傾斜しており、緩い斜面となっている。西半分は灰褐色粘土層が堆積しており、沼のような水分を含んだ層が堆積していたと思われる。

SD01（第 90 図）

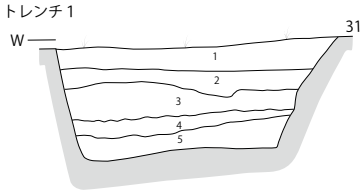
SD01 は調査区の南東から、中央に向かって延びている溝状遺構である。南東側は標高が高く、西に向かうに従って、低くなっている。確認できた規模は、長さ約 12.4m で最大幅約 2.0m、深さは約 0.2m である。南東側の検出面は幅が広く、南東壁からおよそ 4m の地点で、幅が狭くなり北西端まで続く。底面は平坦で細長く、検出面と異なり南東壁から北西端までおよそ 10 ～ 20㎝の幅となっている。

埋土は 2 層あり、上層である 1 層からは礫が出土している。出土した礫は幅の広い南東部では列状に並んでいる。礫は上面が比較的揃っている印象である。礫は底面を挟んで反対側で 1 点しか出土しておらず、溝状遺構の底面を挟んで両側に配置されているわけではないようである。



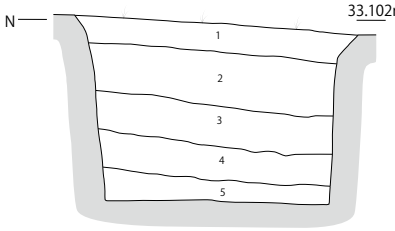
第 86 図　米坂遺跡　トレンチ配置図（Ｓ＝１/1000）

トレンチ 1



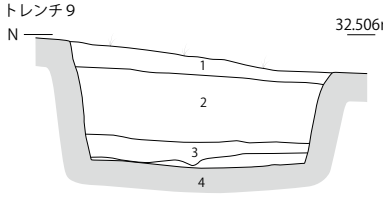
1. 黒褐色土層 (7.5YR3/1)･･･耕作土
2. 褐灰色礫層 (7.5YR4/1)･･･10 ～ 20cm 大の礫層
3. 黒褐色土層 (7.5YR3/1)･･･旧表土
4. 灰褐色土層 (7.5YR5/2)
5. にぶい黄橙色礫混じり土層･･･一部に 10cm 大の礫のかたまり

トレンチ 2



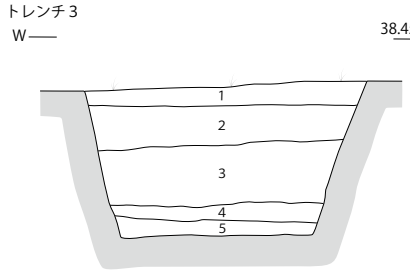
1. 黒褐色土層 (7.5YR3/1)･･･耕作土
2. にぶい赤褐色礫層 (5YR5/3)･･･40 ～ 50 ㎝大の礫層
3. 褐灰色礫層 (5YR5/1)･･･40 ～ 80cm 大の礫層
4. 灰褐色礫層 (7.5YR5/2)･･･40 ～ 50cm 大の礫層
5. にぶい褐色土層 (7.5YR5/3)

トレンチ 9



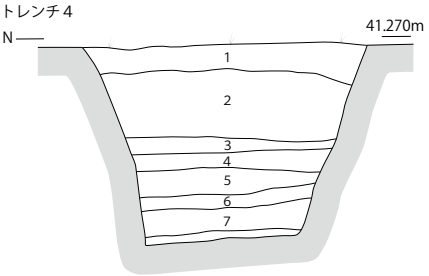
1. 褐灰色礫層（5YR5/1）
2. にぶい赤褐色礫層（5YR5/3)･･･20 ～ 40cm 大の礫層
3. 黒褐色粘土層（7.5YR3/1)･･･旧表土
4. にぶい黄橙色岩盤層（10YR6/3)･･･30cm 大の礫を少量含む

トレンチ 3



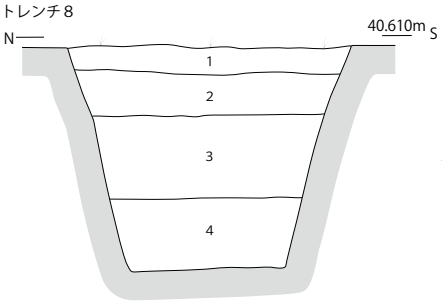
1. 黒褐色土層（7.5YR3/1)･･･耕作土
2. 橙色土層（7.5YR7/6）
3. 褐灰色礫層（7.5YR5/1）
} 客土
4. 褐灰色礫層（5YR4/1)･･･旧表土
5. 灰褐色礫層（7.5YR4/2)･･･40 ～ 50cm 大の礫層
6. にぶい橙色礫層（7.5YR6/4)･･･30 ～ 40 大の礫層

トレンチ 4

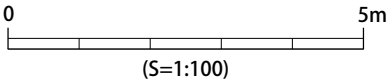


1. にぶい橙色粘土層（7.5YR7/4）
2. にぶい橙色粘土層（5YR6/4）
3. 灰色粘土層（N6/）
4. 緑灰色砂層（7.5YR6/1)･･･暗渠
5. 暗灰色礫混じり粘土層（N2/）
} 客土
6. 褐灰色礫混じり土層（5YR5/1）
7. 褐灰色礫混じり土層（5YR4/1）
8. にぶい赤褐色土層（5YR4/3）

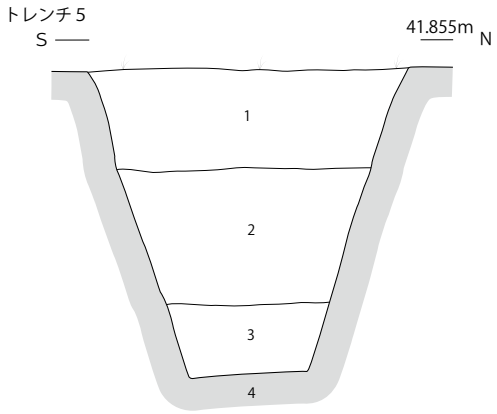
トレンチ 8



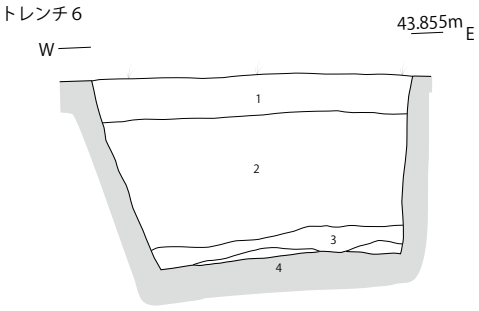
1. 明黄褐色砂層（10YR7/6）
2. にぶい橙色粘土層（2.5YR6/4)･･･45 ～ 50cm 大の礫層
3. 褐灰色礫層（5YR4/1)･･･40 ～ 80cm 大の礫層
4. にぶい赤褐色礫層（5YR5/3)･･･激しい出水
} 客土



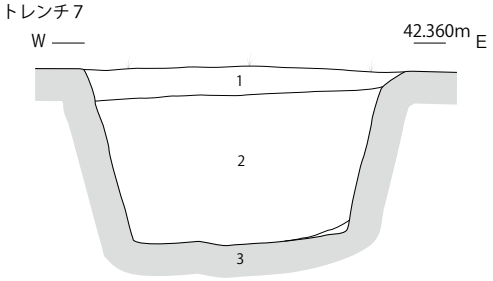
第 87 図　米坂遺跡　トレンチ土層図 (1)（S＝1/100)



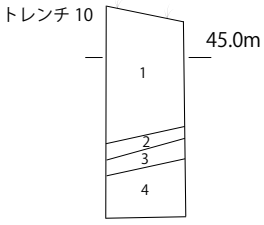
1. 明褐灰色砂礫層（7.5YR7/2）
2. にぶい赤橙色礫層（10YR6/4）
} 客土
3. 暗青灰色シルト層（5B4/1）
4. 灰オリーブ色シルト層（7.5Y4/2）



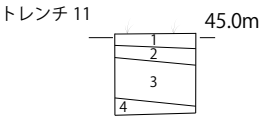
1. 橙色土層 (7.5YR7/6)
2. にぶい赤橙色礫層 (10YR6/4)
}客土
3. 暗赤灰色土層 (10YR4/1)･･･旧表土
4. にぶい橙色礫層 (7.5YR6/4)



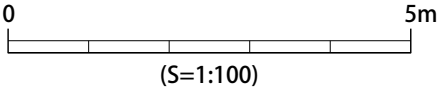
1. 橙色砂層（7.5YR6/6）
2. 灰赤色礫層（2.5YR5/2）･･･30 ～ 40cm 大の礫層
} 客土
3. にぶい橙色岩盤層（7.5YR7/4）



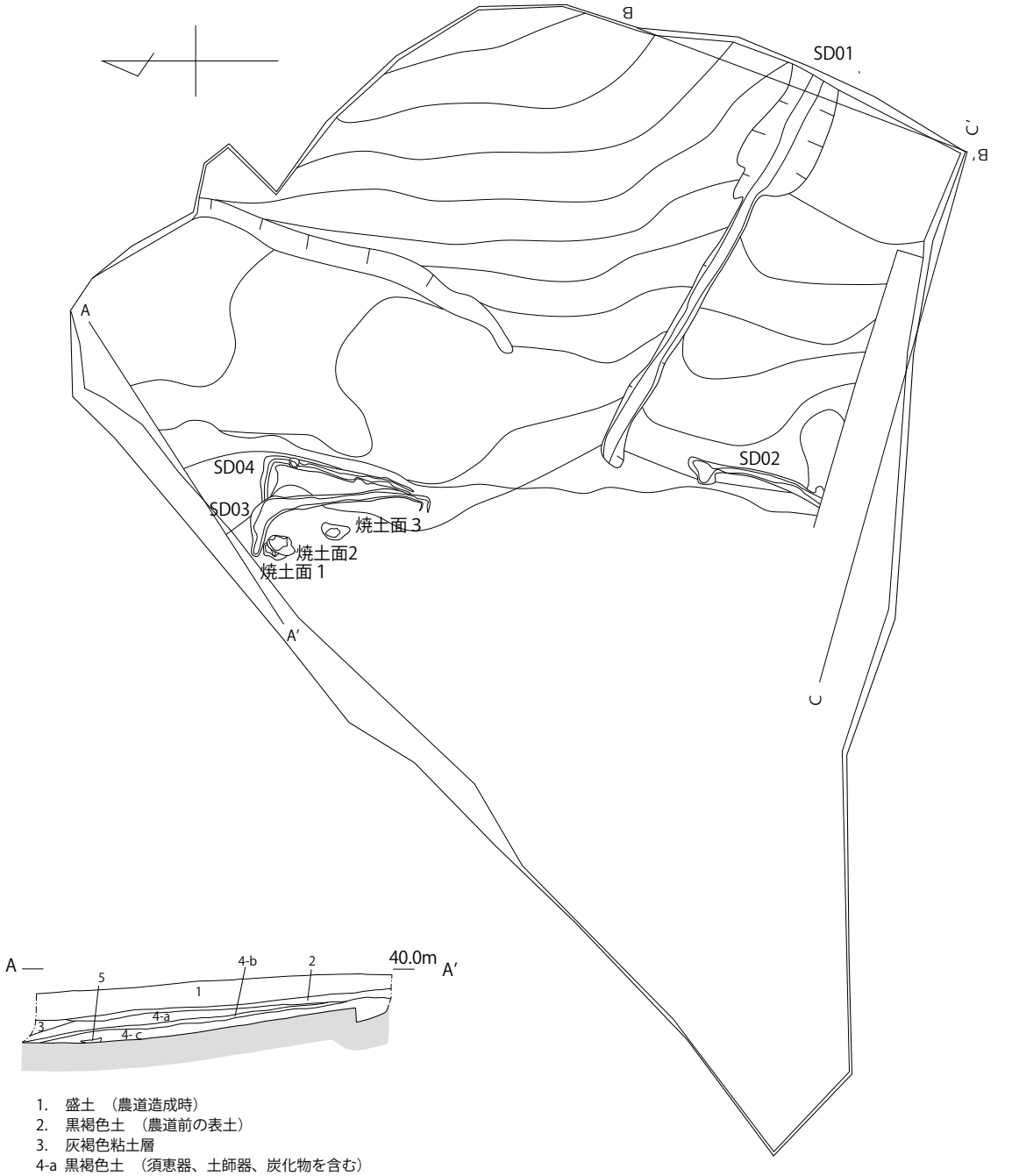
1　盛土層　　（果樹園造成のための造成土）
2　黒褐色土　　（旧表土･植物の根多い）
3　暗灰色粘質土　(20 ㎝前後の礫を多く含む）
4　黒褐色粘土　(20 ㎝前後の礫を多く含む）



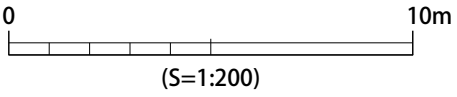
1　盛土層　　（果樹園造成のための造成土）
2　黒褐色土　　（旧表土・植物の）
3　暗灰色砂礫土
4　暗灰色粘土　(20 ㎝前後の礫を多く含む）

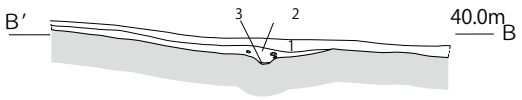


第 88 図　米坂遺跡　トレンチ土層図 (2)（S＝1/100)

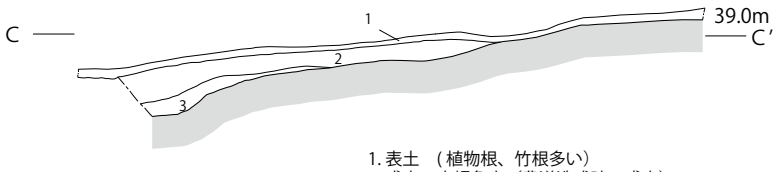


1. 盛土 （農道造成時）
2. 黒褐色土 （農道前の表土）
3. 灰褐色粘土層
4-a 黒褐色土 （須恵器、土師器、炭化物を含む）
4-b 黒褐色土 （須恵器、土師器、炭化物を含む）
4-c 黒褐色土 （須恵器、土師器、炭化物を含む）
5. 黒褐色土 （炭化物を含む）



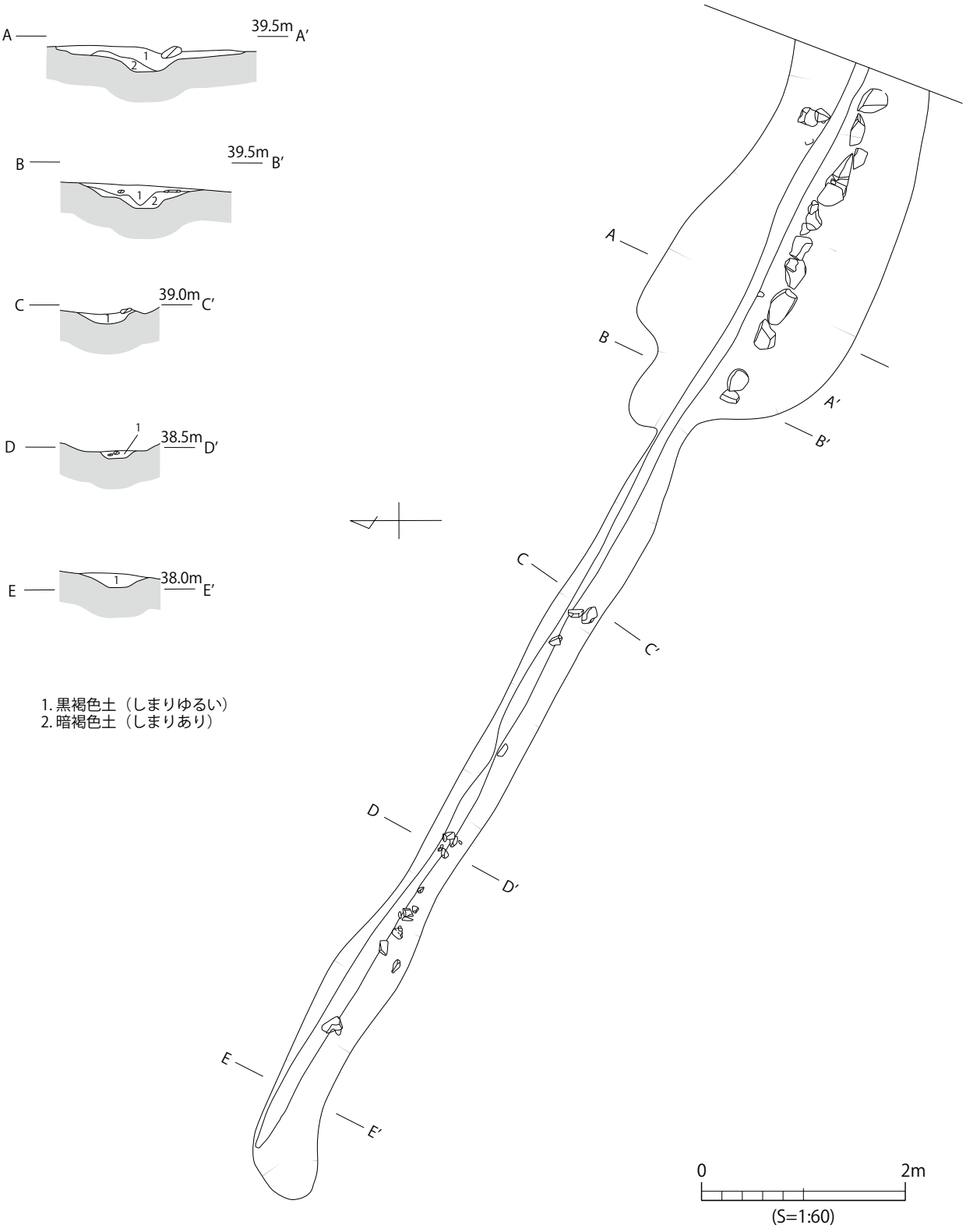


1. 表土 （植物根、竹根多い）
2. 暗褐色土（しまり弱い）
3. 褐色土（しまりあり）

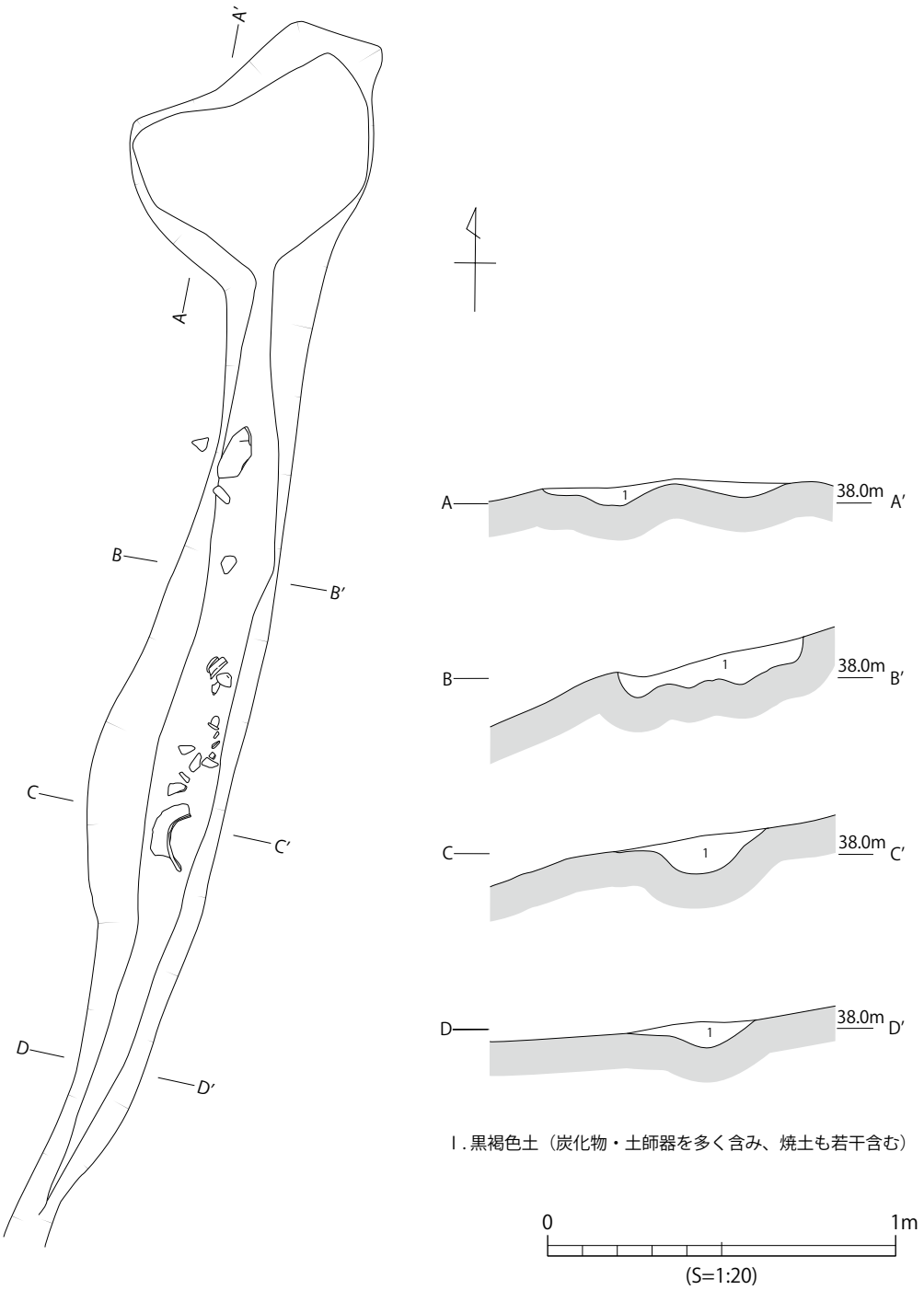


1. 表土 （植物根、竹根多い）
2. 盛土・赤褐色土（農道造成時の盛土）
3. 黒褐色土 (農道造成前の旧表土）

第 89 図　米坂遺跡　遺構配置図・土層図（S＝1/200)



第 90 図　米坂遺跡　SD01 実測図（S＝1/60)

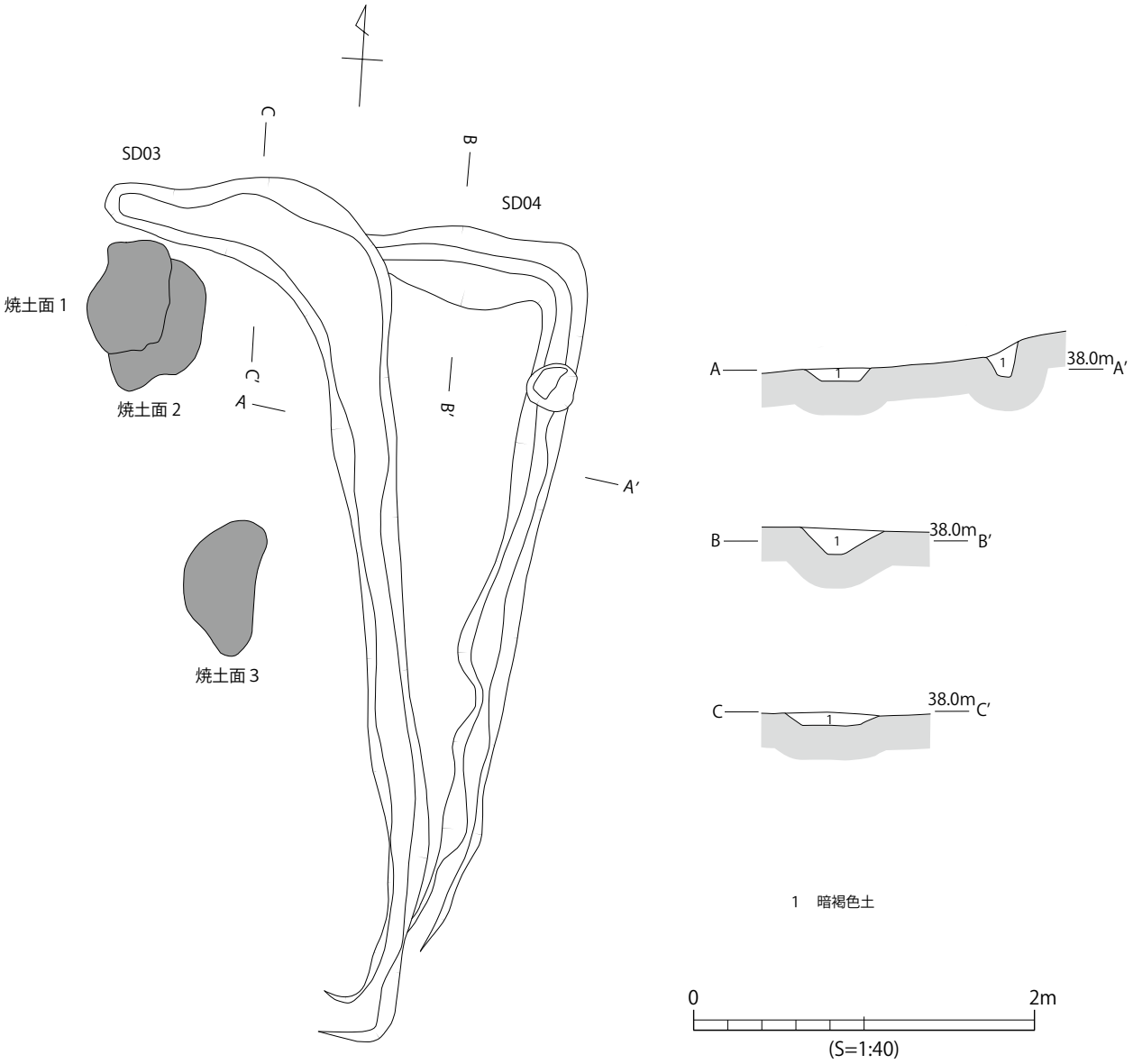


第 91 図　米坂遺跡　SD02 実測図（S＝1/20)

出土した遺物はなく、遺構の時期や性格は不明である。

SD02（第 91 図）

SD02 は、調査区の中央南寄りで検出された遺構である。検出面は地山面で、遺構の長さは約 3.6m で、遺構の中程での幅は約 0.4m、深さは最大約 0.1m である。遺構の北端は溝状になっておらず、別の遺構が重なっているか、あるいは、非常に浅いことから植物の根等によって攪乱を受けている可能性もある。出土遺物は土師器の甕と壺で、破片であるが数個体分出土している。これらの土師器は SD02 の底面近くで出土している。出土遺物のうち実測できたのは第 95 図 1 で古墳時代



第 92 図　米坂遺跡　SD03･4 実測図（S＝1/40）

中期かそれ以降の遺構と考えられる。遺構の性格は不明であるが、住居に伴う溝のように排水や区画のため掘られた溝であったと考えられる。

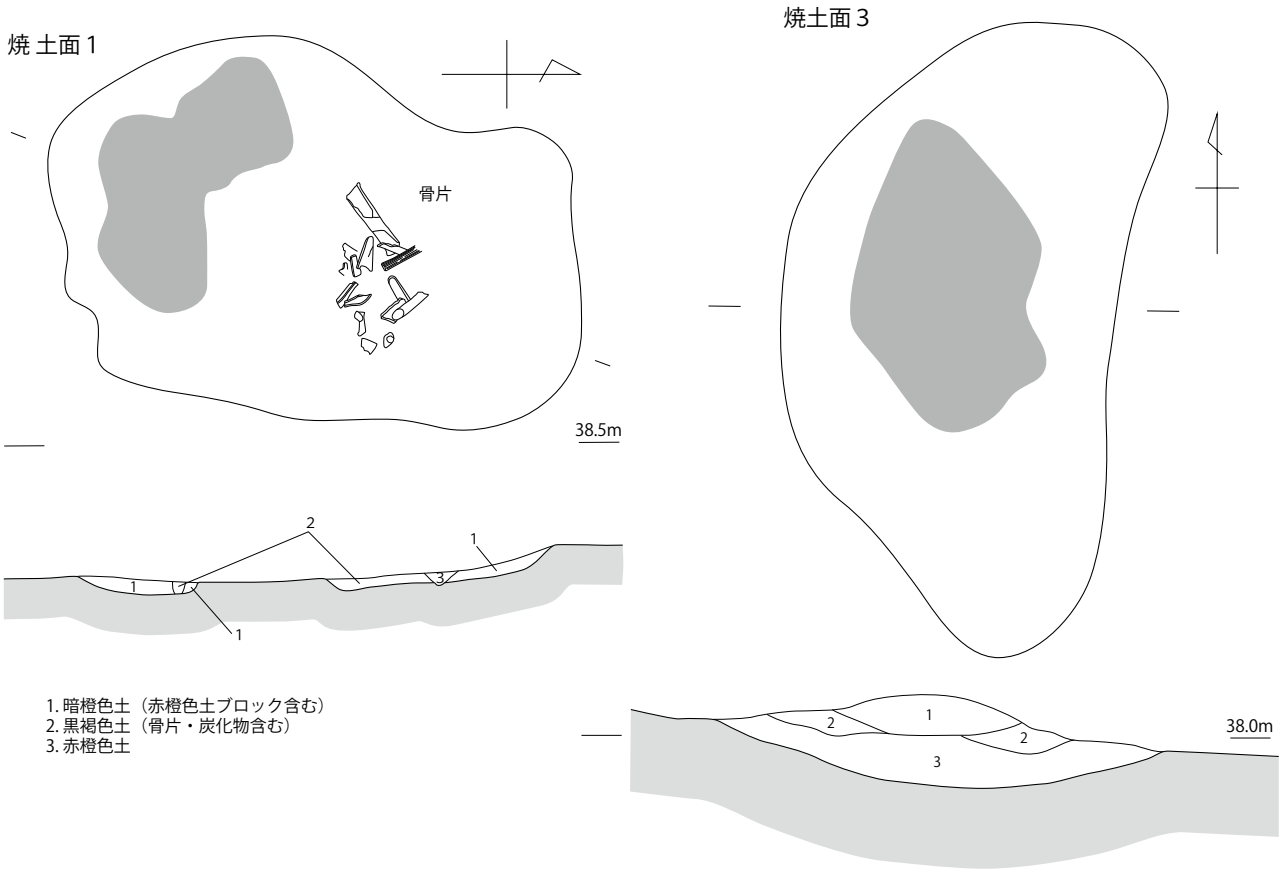
SD03・SD04・焼土面 1 ～ 3（第 92 図）

調査区の北側で検出された 2 条の溝状遺構である。SD03 は SD04 を掘り込んで造られており、SD03 の方の年代が新しい遺構である。SD03 の平面形はコ字状に、SD04 は L 字状に屈曲している。SD03 は長軸が約 5.0m で短軸が約 1.7m 、SD04 は長軸が約 4.2m で短軸が約 1.3m である。直軸の方向は SD03 がわずかに西寄りに傾き、SD04 は若干東に傾いている。二つの遺構の底面の深さはほぼ同じで､断面形状は逆台形である。SD04 を掘り込むようにピットが 1 基検出されたが、SD04 が埋まってから掘り込まれたもので、年代は不明である。SD03 と SD04 周辺では土師器や須恵器が出土している。これらの出土遺物の年代からこの二つの遺構の年代は古墳時代中期頃の遺構と考えられる。

焼土面 1 と 2 は SD03 が屈曲する内側近くで検出された。焼土面 2 が先に、後に焼土面 1 が形成されている。焼土面 1 の中心あたりに被熱した骨片が集中していた。骨片は小動物のものと思

われる。焼土面２と３では遺物は出土してない。

焼土面１～３が形成された時期は不明であるが、検出されたのが地山層の上面で焼土面１には



第 93 図　米坂遺跡　焼土実測図（S＝1/10)

骨片も伴っていることから、上面はほとんど削平されていないと思われる。検出された位置も焼土面3はSD04の長軸のほぼ中心にあたり、何らかの関係があるのではないかと考えている。

（4）遺物（第94図・第95図）

第94図1～18は須恵器で、1～4は蓋坏の蓋、5～11は蓋坏の坏身である。2は無蓋高坏の坏部の可能性もある。1は口縁端部に段を有し、肩部にはゆるやかな突帯がめぐり、器高が高い。2は器高が高く、口縁が外反している。口縁端部には段はなく口縁の内面に段が作られている。3と4は器高が低くなっており、口縁端部にはゆるい段が見られる。5は口縁が端部に向かって厚くなっている。口縁端部には面をもっている。底部外面には丁寧な回転ヘラ削りが見られる。最大径に比べ器高が高い。6は5よりも器高が低く、最大径が大きくなっている。口縁端部に段が作られるが、丸みを帯びている。7～9は器高が低く最大径が大きいものである。口縁端部は細くなる8や丸みを帯びる9がある。7は口縁が内湾し、8と9は外反している。10と11は最大径が小さくなる坏で口縁部も短くなっている。12は有蓋高坏である。口縁部の器壁は薄く、内傾している。上部が欠損しており高さは不明である。坏部外面下半にカキ目を施している。脚部は厚く、端部は下へ伸びている。スカシは1段で三角形である。13は高坏の脚部である。欠損部分が大きいが、スカシは三角形と思われる。脚部の器壁は12に比べ薄い。14と15も高坏である。14は器形から長脚無蓋高坏と思われる。16ははそうで、17は壺の底部である。18は須恵質の土器で、焼成が軟質である。口径は大きく器種は不明である。本遺跡から出土した古墳時代の須恵器と焼成や器形が全く異なっており、中世の瓦質土器などの可能性もある。第95図1～13は土師器である。1～4が甕で、5は直口壺、6は小型丸底壺、7は高坏、8～10は低脚坏、11と12は甑の把手、13は移動式竈の突帯部分と思われる。

1と2は頸部が「くの字」状に折れ、3と4は丸く屈曲している。いずれも摩滅が激しいが、胴部内面はヘラケズリ調整を施している。5は口縁が外傾外反する壺である。頸部の幅が狭く、直口壺としている。6は口縁部と底部を欠いている。胴部内面下半にはヘラケズリが見られる。13は竈の焚き口上部の突帯と思われる。突帯は薄いが非常に突出している。14は鉄製品で刀子の柄と思われる。

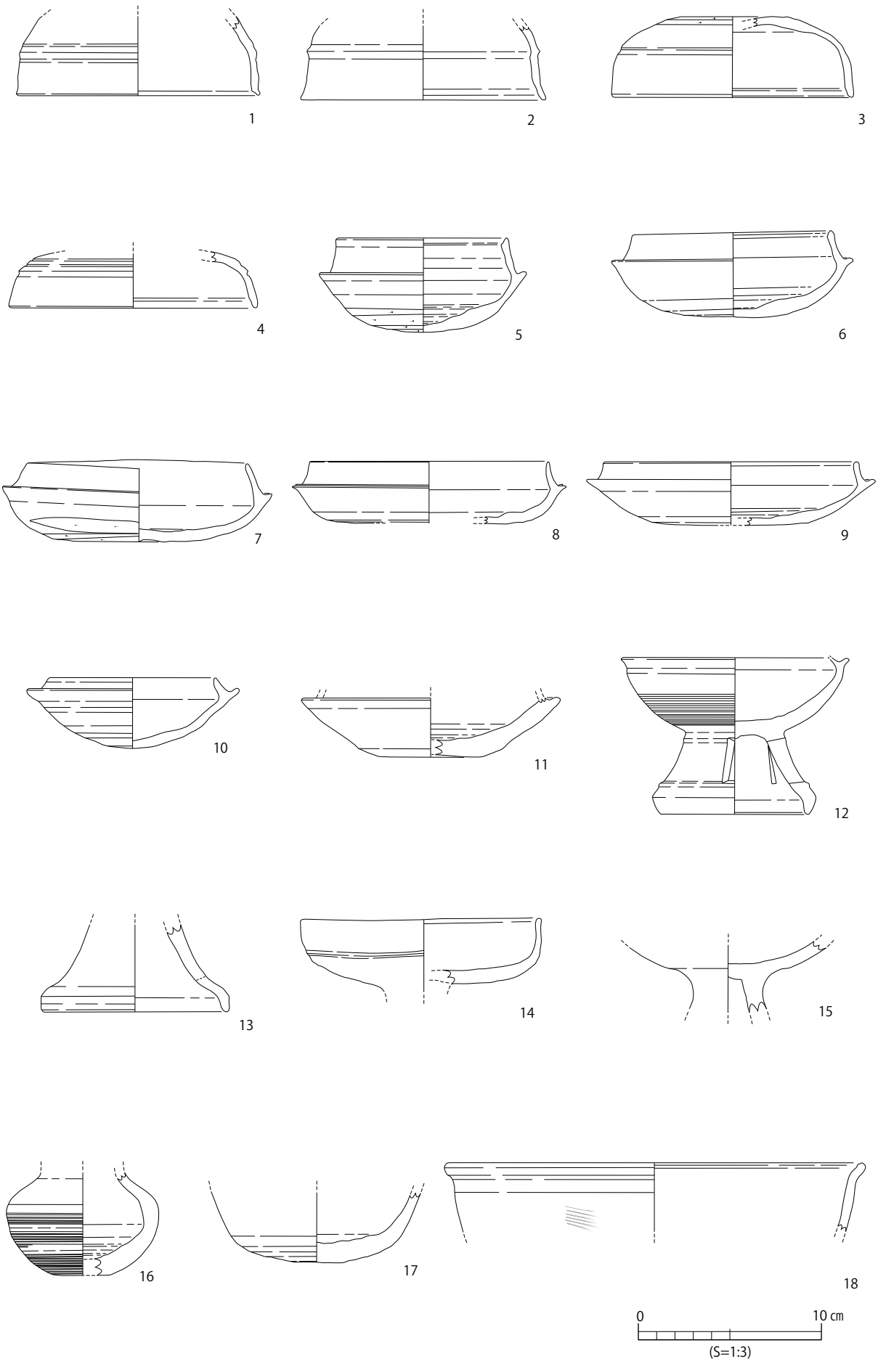
出土した須恵器と土師器の年代は、古墳時代中期から後期中頃のものであると考えられる。

（5）小結

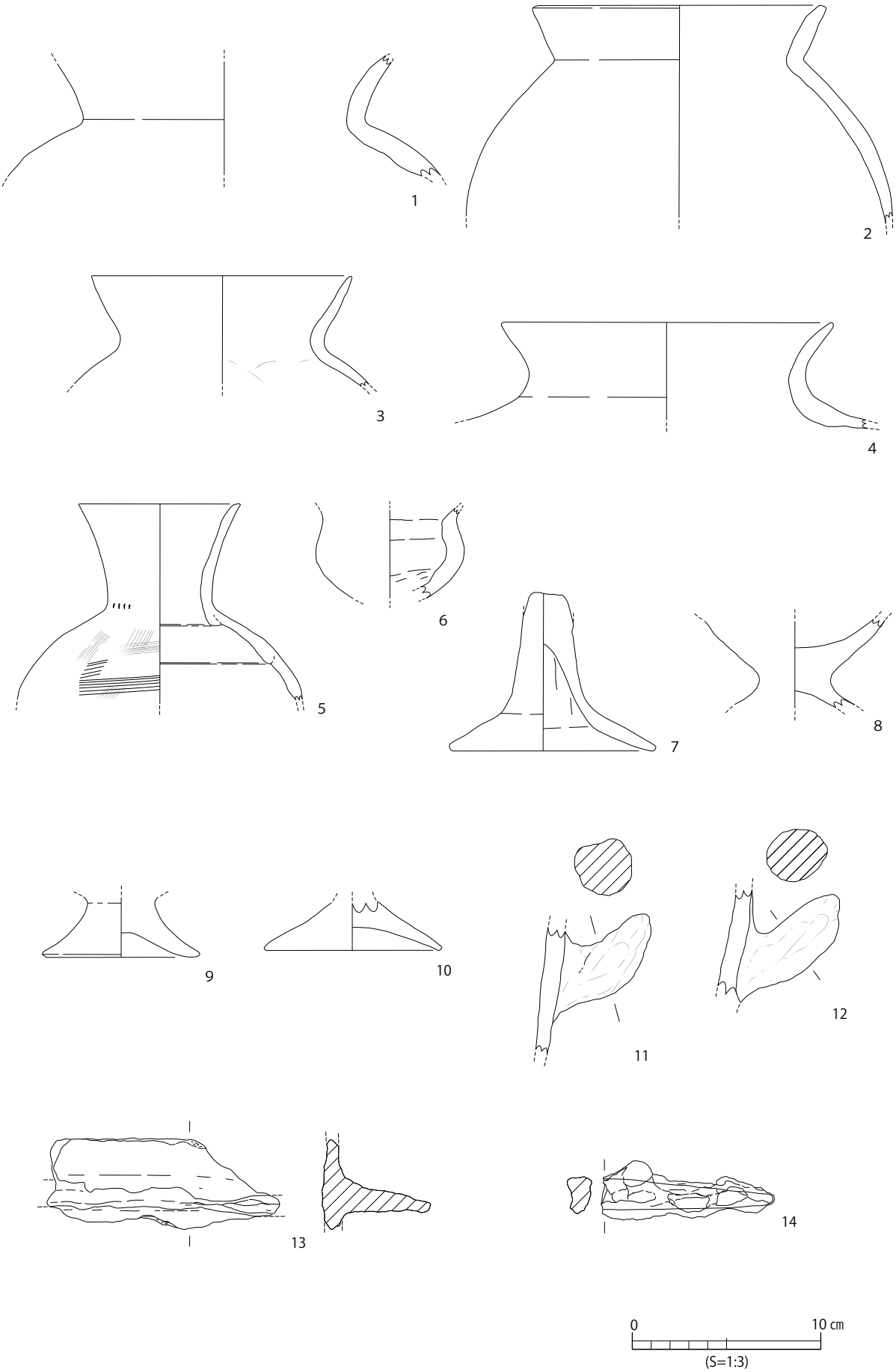
米坂遺跡は、平成5年に松江市教育委員会が発掘調査を行った調査区の北側にあたり、今回も同時期の遺構や遺物が確認できた。遺構では、SD02とSD03、SD04は当該期の遺構ではないかと考えている。これらの溝状遺構は建物に伴う溝の可能性を考えているが、今回の調査では柱穴が確認できなかった。また焼土面が3つ確認できたが、これもSD03とSD04と関係があるのではないかと考えている。

松江市教育委員会の発掘調査でも、溝跡を伴う平坦面や柱穴跡に隣接した溝跡、焼土面が検出されており、今回の調査と同様の様相を示している。

今回の米坂遺跡の発掘調査によって、古墳時代中期から後期中頃の集落が谷の東斜面に広がっていることが改めて明らかとなった。



第 94 図　米坂遺跡　出土遺物実測図 (1)（S=1/3)



第 95 図　米坂遺跡　出土遺物実測図 (2)（S=1/3)

第５節　客戸遺跡

（１）調査の方法

客戸遺跡は、米坂古墳群の丘陵の先端、中坪遺跡の所在する平野部を望む微高地に位置している。近年まで水田耕作や畑作が行われていたようで、畦も残っていた。西には同じ地形のまま宅地が広がっている。

調査はまず、市道に面した水田部分から行い、微細な土師器片が出土したものの、遺構や遺物の密度が低く、遺跡の北側で一段地形が高くなっていた地点を中心に調査を行った。

表土層は耕作土であり、重機により掘削を行った。表土除去後は人力よって地山面まで掘り下げた。検出された遺構は光波測量器によって測量し、出土した遺物は地点を明示して取り上げた。

（２）層序

水田部分は水田耕作土の下に、鉄分を含む層が堆積していた。これは水田の床土と考えられる。その下層にはしまりのある層が堆積している。この層は地山層か和久羅山からの崩落土層である。

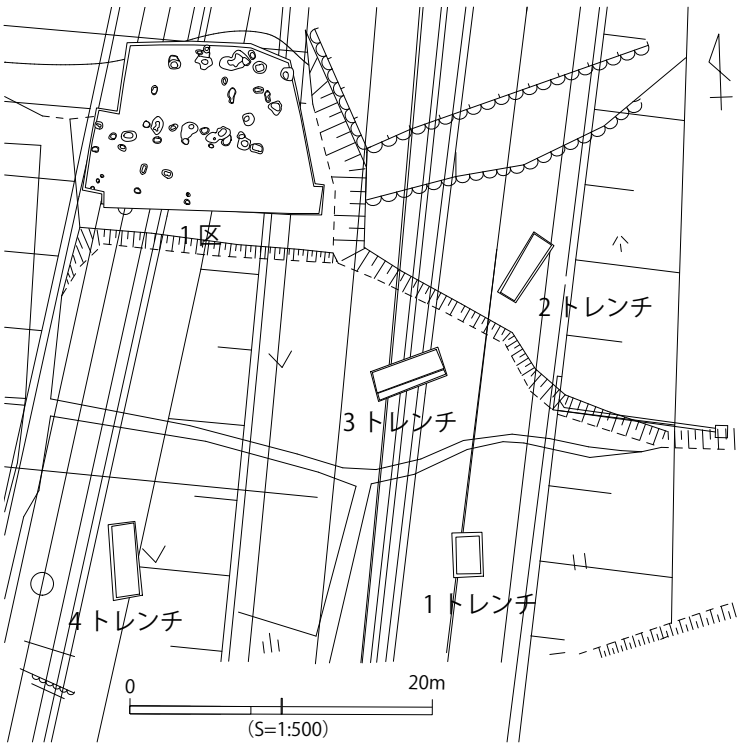
遺構が確認できた地点の層序は、表土や耕作土の下に黒褐色土層が堆積していた。この層は検出されたSB01の埋土とは異なっており、過去の耕作等により攪乱を受けているものと考えられる。

（３）遺構

客戸遺跡では、掘立柱建物跡（SB01）が１棟検出された。その他に柱穴であろうピットが多数検出されているが、建物跡に復元できるピットの並びは確認できなかった。調査区の北東隅で検出されたピット27からは第100図３の墨書礫が出土している。

SB01（第99図）

SB01は調査区の北側で検出された遺構で、掘立柱建物跡である。柱穴の並びは不規則で、かつ深さも異なっている。柱穴内には扁平な礫が出土するものもあり、柱を支える根石として埋められていたと考えられる。遺構から出土した遺物はほとんどなく、年代を特定することは困難であるが、ピット27で墨書礫が出土している、黒褐色土からは近世や近代の遺物、流れ込みと考えられる古代の須恵器等が出土していることから、SB01は近世に造られた遺構であると考えられる。

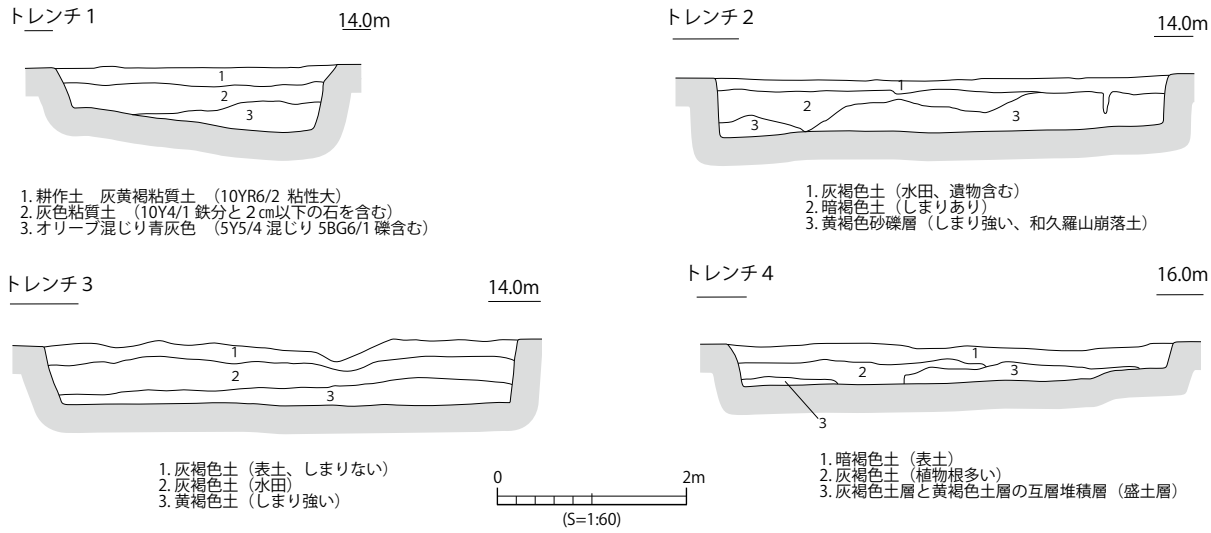


第96図　客戸遺跡　調査区位置図（S＝1/500)

（４）遺物

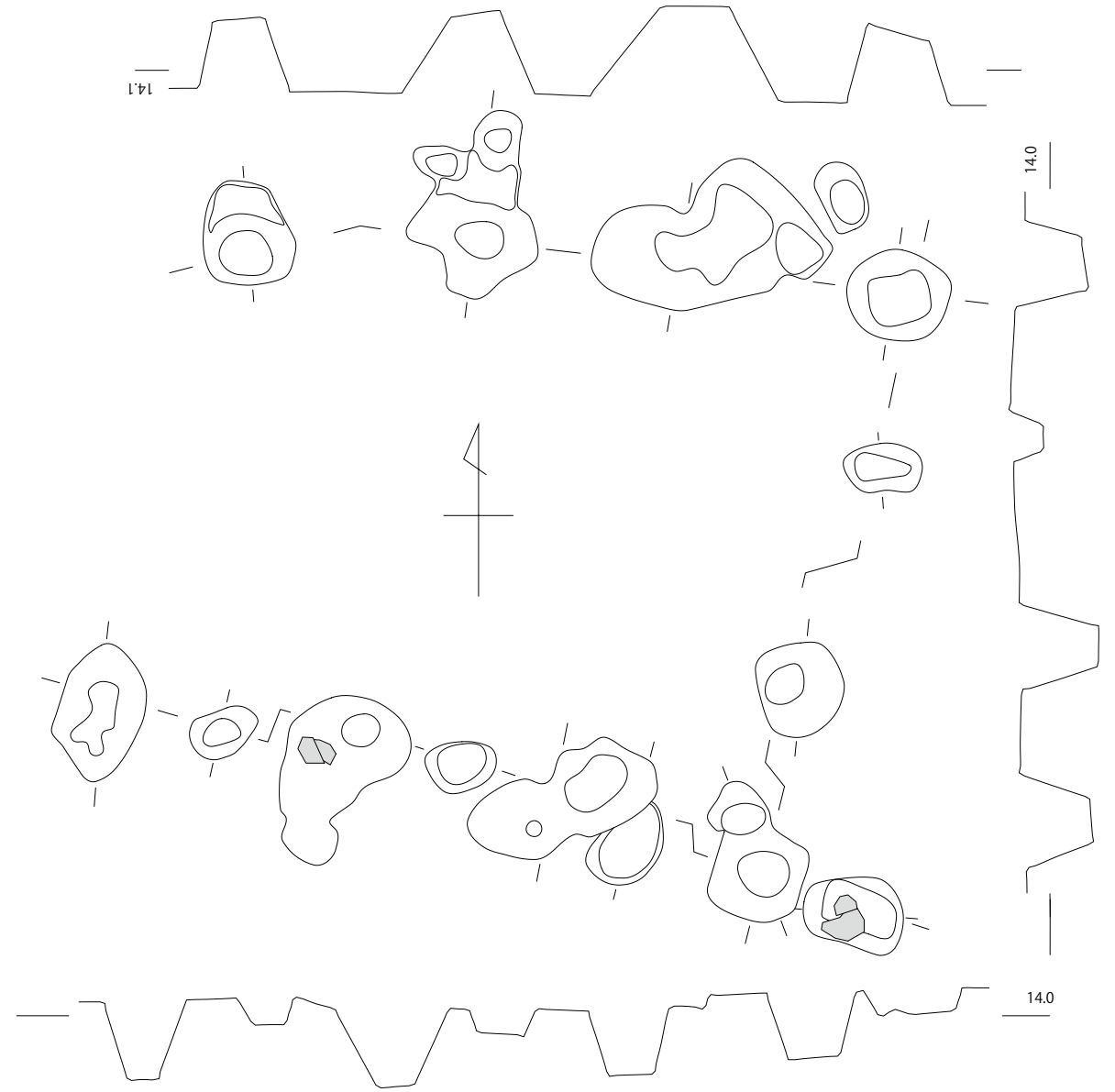
第100図１は須恵器の高台付き坏である。底部には回転糸切り痕が残る。年代は８世紀後半から９世紀と思われる。２と３は墨書された礫である。２は墨書されていた礫で、平坦面に「中」、裏面には

5 文字書かれているが、判読できなかった。裏面の文字の解読は不可能であったが、2 段目の一文字は梵字のようにも見える。3 はピット 27 から出土した六芒星と九卦が書かれている礫である。六芒星側は被熱したようで一部が煤けている。両者とも年代は不明であるが、松江城下町遺跡でも 3 と同様に墨書された礫が出土しており、2 と 3 も近世以降の年代と考えられる。2 と 3 は地

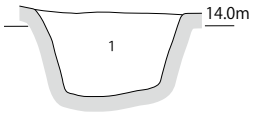


第 97 図　客戸遺跡　トレンチ土層図（S＝1/60)

第 98 図　客戸遺跡　遺構配置図・土層図（S＝1/100)



pit15



1. 灰褐色土

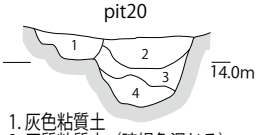
pit16

1. 灰褐色土

pit19

1. 灰褐色土

pit20

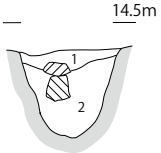


1. 灰色粘質土
2. 灰質粘質土（暗褐色混じる）
3. 暗褐色土
4. 灰色粘質土

pit21

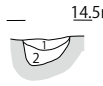
1. 灰褐色土

pit22



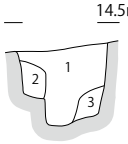
1. 灰褐色土
2. 灰褐色土と褐色土の互層

pit26



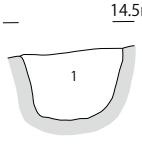
1. 暗褐色土
2. 褐色土（灰色粘質土混じり）

pit28



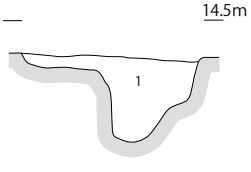
1. 灰褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土（灰色粘土層混じる）

pit30



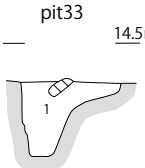
1. 灰褐色土

pit32



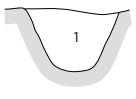
1. 灰褐色土

pit33

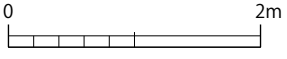


1. 灰褐色土
（10㎝以下のレキを含む）

pit35

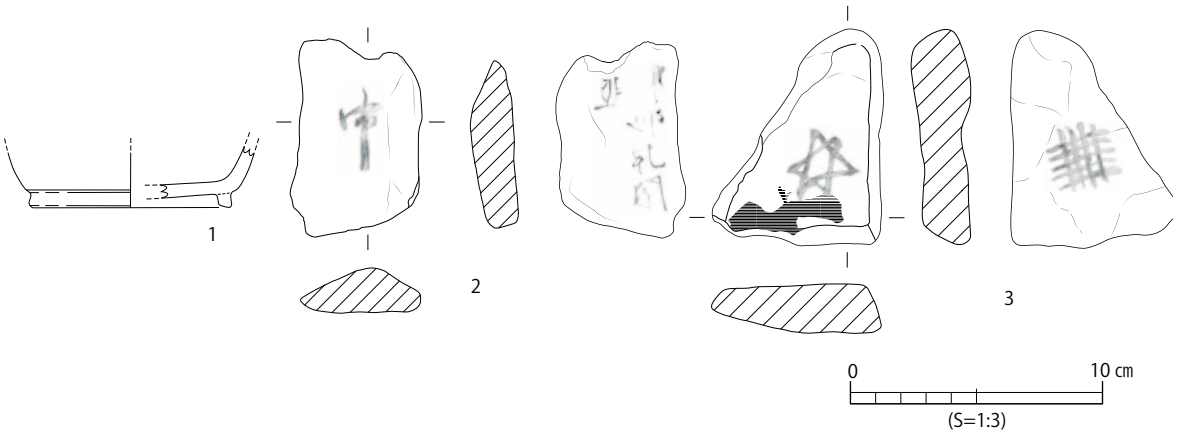


1. 灰褐色土



(S=1:60)

第 99 図　客戸遺跡　SB01 実測図（S＝1/60)



第 100 図　客戸遺跡　出土遺物実測図（S=1/3)

鎮具として埋められたものではなかろうか。

第 6 節　藤廻遺跡

（1）調査の方法

藤廻遺跡は、松江市上東川津町にあり、藤廻遺跡は和久羅山と嵩山の北側の丘陵、標高 66 mあたりの尾根に所在する遺跡である。

調査前に直径約 5 mで高さ 0.5m ほどの高まりが確認でき、周辺には礫が散布している状況が見られたため、古墳あるいは塚が存在していると考えられていた。そのため、調査は人力で層毎に掘り下げ、掘り下げ後は測量を行った。また随時遺構の検出に努めた。

（2）層序

遺跡の基本土層は上から、表土層の下に明褐色土層（地山層）が表れるが、盛土が存在する部分では、1 層（表土層)、2 層（褐色土層：盛土層)、3 層（旧表土層）である。

（3）遺構

遺構は、盛土状遺構 1 カ所、ピット 2 穴である。盛土状遺構は、平面形が直径 5 mの不整形な円で、周囲に最大幅 1 mの浅い溝状の窪みがめぐっている。窪みの底面とマウンドの最高点の比高差は 0.7 mである。マウンドの中心には自然礫が置かれていた。当初標石等の遺構に伴う可能性を考えて、下方あるいは周囲に掘り込みがないか確認を行ったが、掘り込みは確認されず、また礫の底面が盛土層である 2 層まで達していないことが判明し、近代あるいは現代に境界境として置かれた礫と判断した。盛土状遺構に主体部などの遺構が存在しないか、慎重に調査を行ったが、全く遺構は確認できなかった。また、盛土状遺構の下部には旧表土層が存在することから、その上層に堆積している 2 層は盛土であると考えられる。今回の調査で唯一出土した須恵器は盛土状遺構内の旧表土層から出土しているが、盛土状遺構の裾部に近いため、上層からの混入の可能性も否定できない。

また、ピット 2 穴を検出しているが、遺構の性格や時期は特定できなかった。盛土状遺構の下方、特に南斜面には礫が多く散布しており、大形の礫も 1 個確認されている。当初、この礫は遺構に伴うものの可能性を考えていたが、下方に掘り込みが検出できなかった。下層の確認を合わせて行ったところ、基盤層の岩盤とも石質が異なっており、何らかの意図で丘陵上に持ち込まれていると思われるが、持ち込まれた時期も不明で、遺構としては認定しなかった。石質は非常にもろく、

古墳の葺石や石器の石材として使用に耐えられるものでもなかった。

（４）遺物

出土した須恵器は非常に小片であるため図化してないが、すかしの一部が確認できる脚部であるため古墳時代の高坏であると考えられる。

古墳時代の須恵器が丘陵上それもマウンド状遺構から出土したことを考えると、このマウンド状遺構は古墳の可能性があると考えられる。

第７節　仲田遺跡

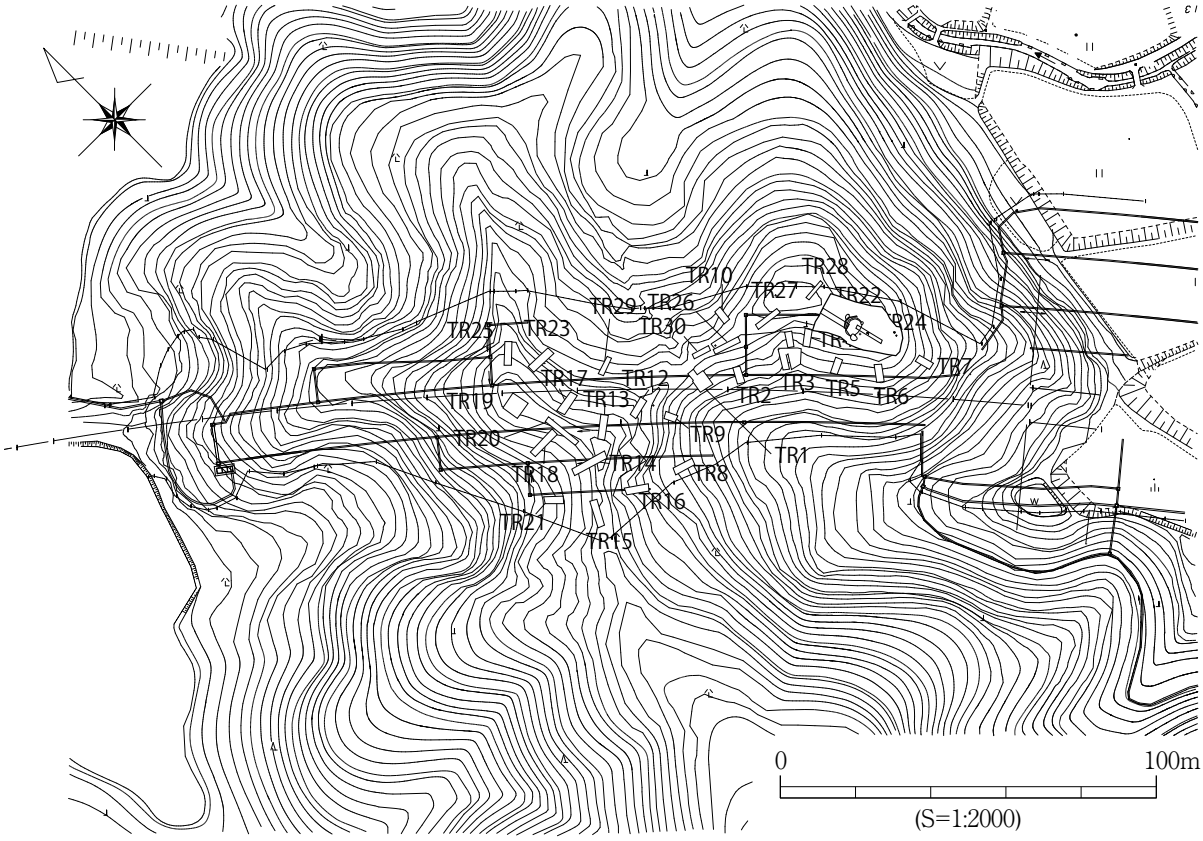
（１）調査の方法

仲田遺跡は松江市上東川津町に位置する。藤廻遺跡と同じ尾根にあり、事業範囲内を人力により発掘調査を行った。

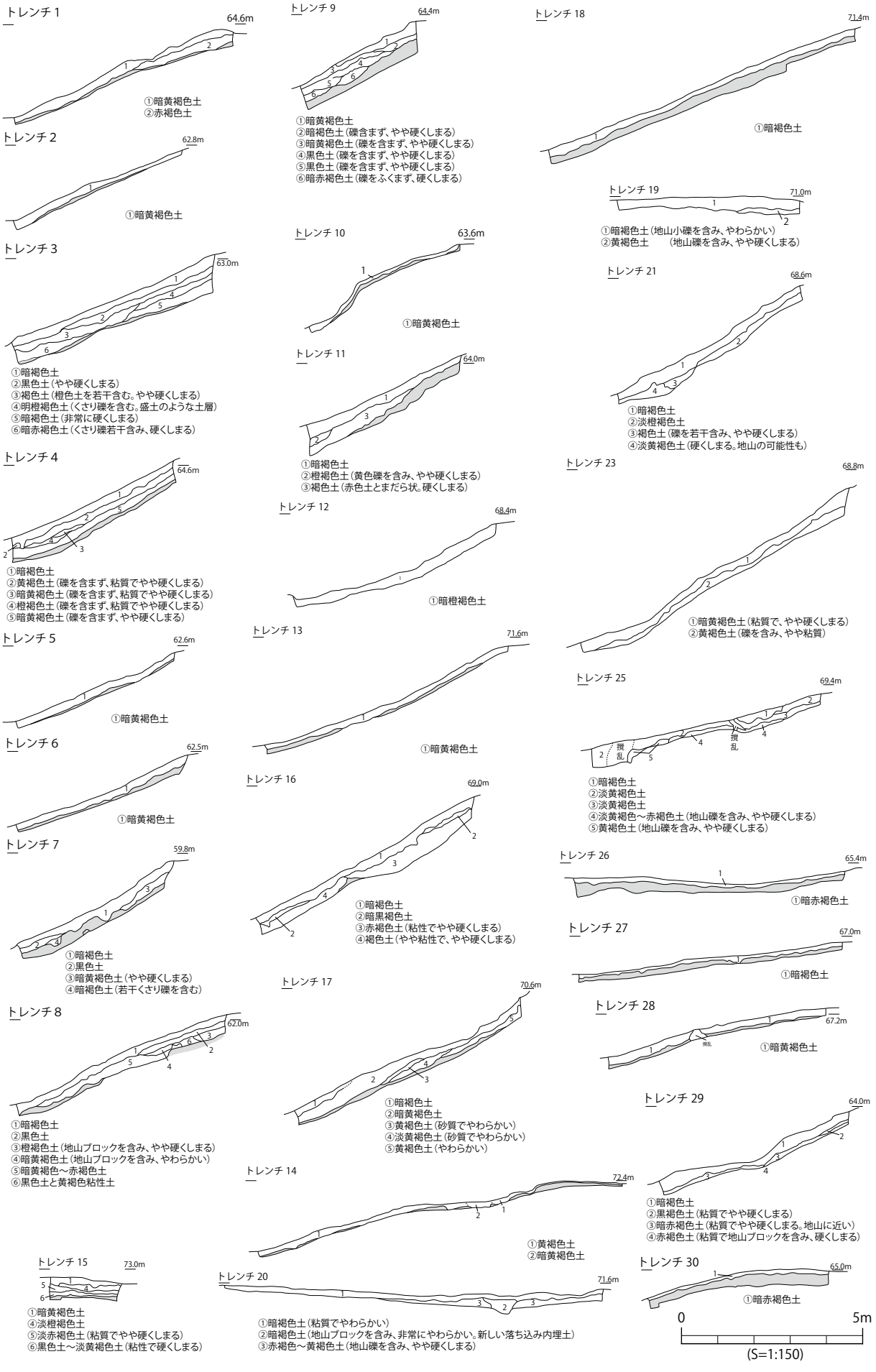
しかし、調査の結果、遺構や遺物は確認できず、事業範囲内での遺構や遺物の分布密度は非常に薄いと考えられた。

（２）層序

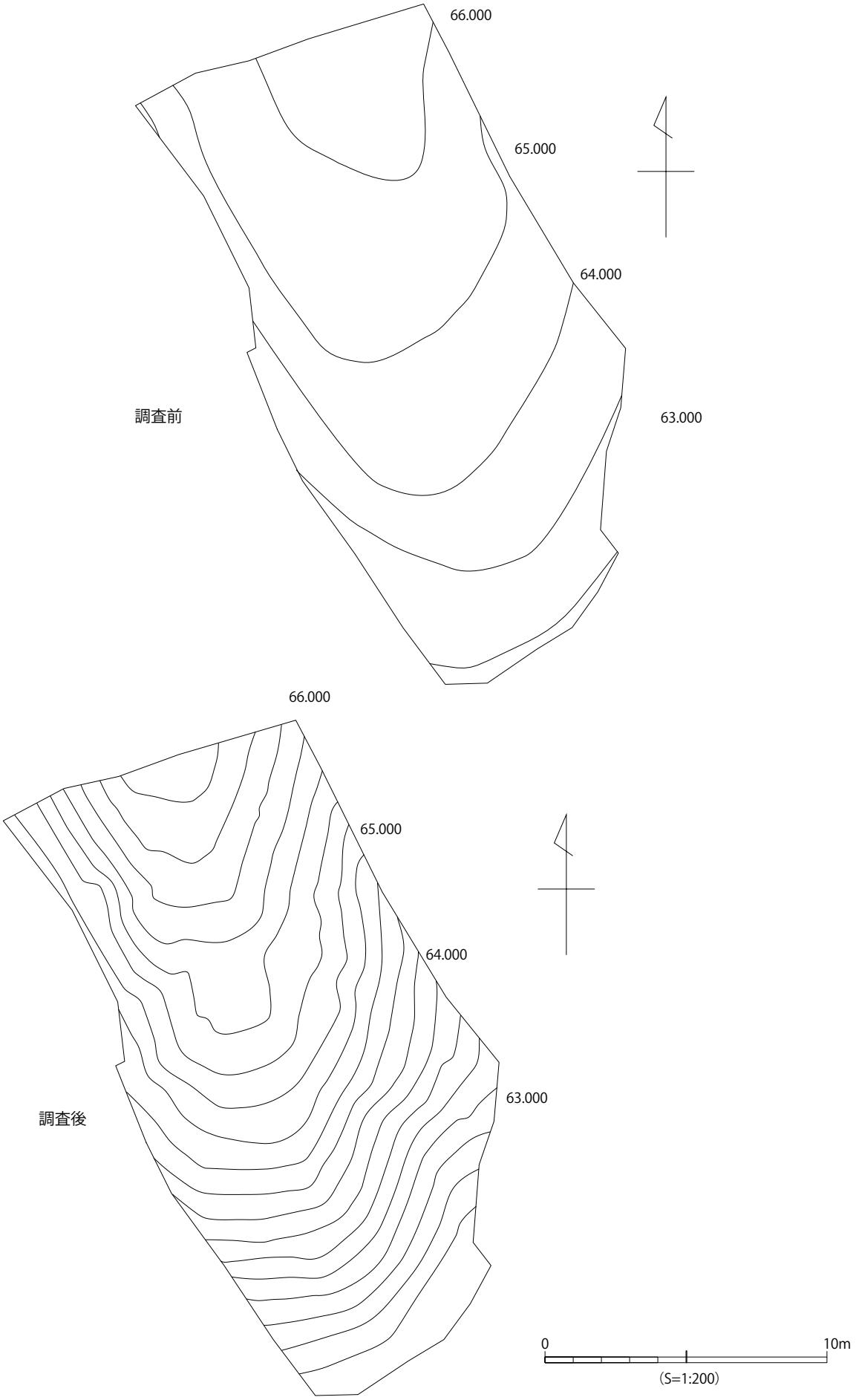
基本層序は、表土直下に黒色土層や風化した地山層等が堆積し、その下に赤色あるいは赤褐色土層の地山層が堆積している状況であった。礫を含む層も存在するが、地山に含まれる礫と考えられる。



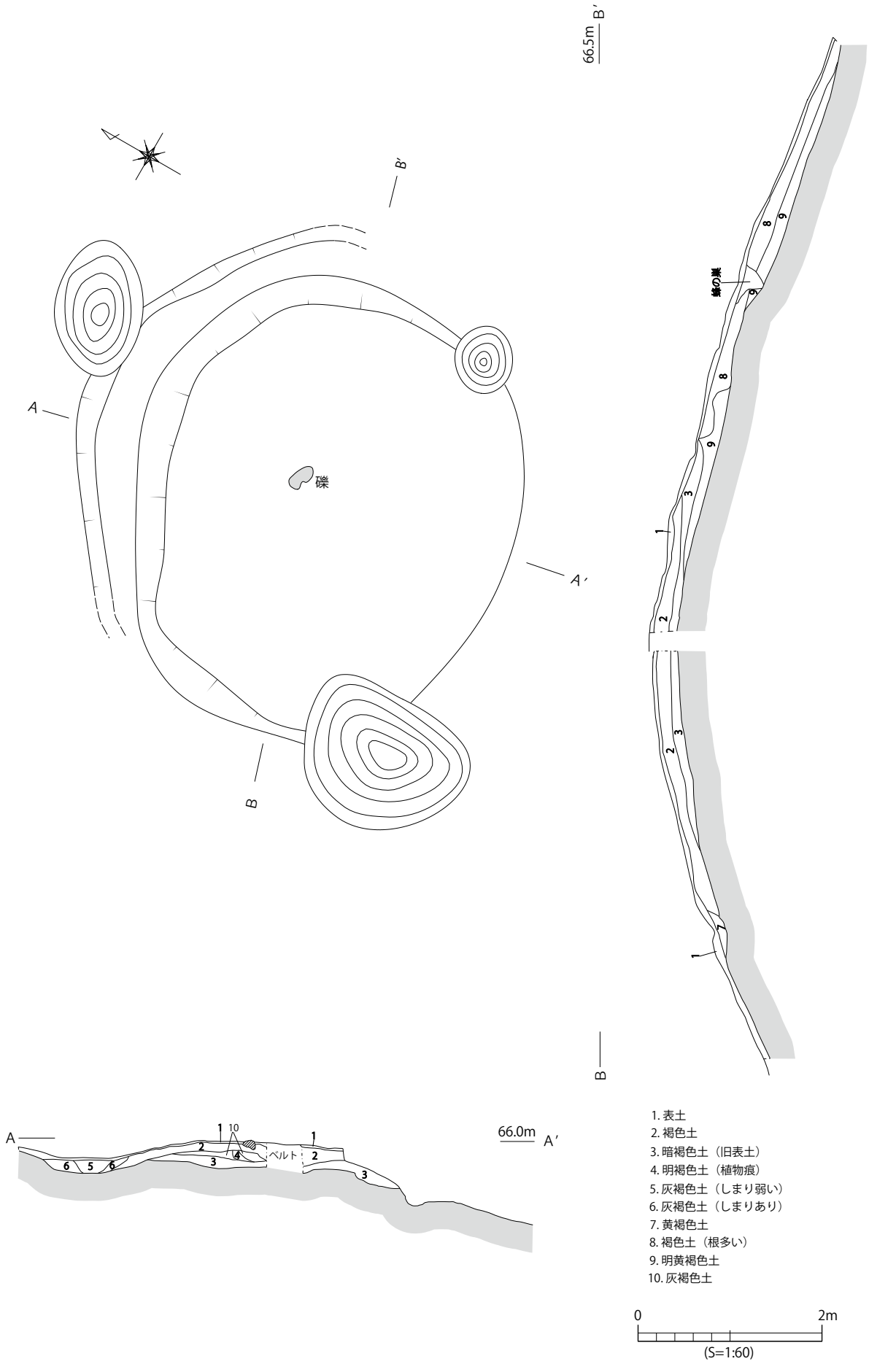
第 101 図　藤廻遺跡・仲田遺跡　調査区位置図（Ｓ＝１/2000)



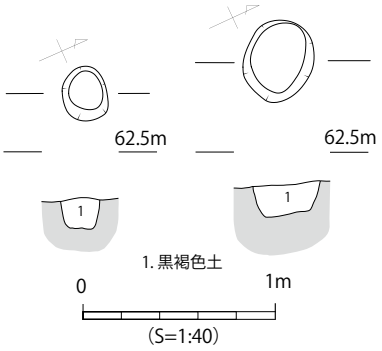
第 102 図　藤廻遺跡・仲田遺跡　トレンチ土層図（S＝1/150）



第 103 図　藤廻遺跡　測量図（S＝1/200)



第 104 図　藤廻遺跡　盛土状遺構実測図（S＝1/60)



第 105 図　藤廻遺跡　ピット測量図（S＝1/40）

第 8 節　石台Ⅱ遺跡

（1）調査の方法

石台Ⅱ遺跡は松江市東津田町の低地に位置している。石台Ⅱ遺跡の南西には縄文時代の遺跡として著名な石台遺跡が存在する。現在、本遺跡は住宅街であるが、遺跡の近くを馬橋川が流れており、平成 19 年度と 20 年度に松江市教育委員会が行った発掘調査によって、低湿地遺跡であることがわかっている。したがって、非常に狭い範囲の発掘調査は壁面の崩落を招く恐れがあるため、調査範囲を囲むように矢板を方形に打設し、その中で発掘調査を行った。遺物包含層までは重機を用いて掘削を行い、遺物包含層付近から人力による発掘調査を行い、遺物の確認に努めた。

（2）層序

基本層序は、一番上に砂層（①層）、その下に粘土層（②③層）、その下にオモカス層（④層）が堆積している。遺物が出土するのは粘土層が比較的多い。オモカス層からは遺物はほとんど出土しなかった。

（3）遺構

遺構は確認できなかった。

（4）遺物

第 108 図 1 ～ 2 は縄文土器の深鉢である。条痕文土器であろうか。縄文時代後期か晩期と考えられる。3 は弥生土器の甕である。内外面にハケメが施されている。弥生時代前期の遺物と思われる。4 は土師器の高坏である。坏部と脚部が欠損しており、時期不明である。5 は染付の水滴であろうか。天井部に染め付けが見られる。

第 9 節　梅面遺跡

（1）調査の方法

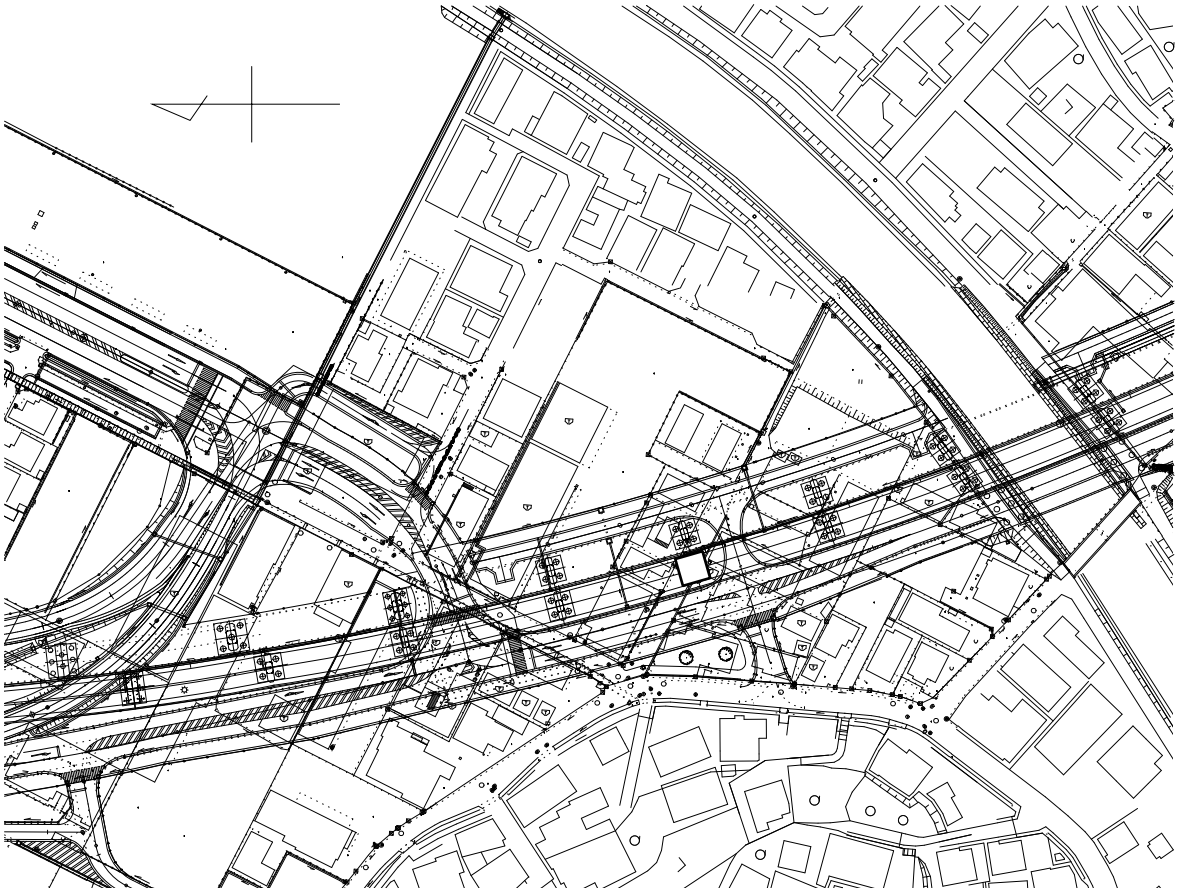
梅面遺跡は松江市西尾町の大橋川に面した狭い谷に位置する遺跡である。調査前は住宅や道路、畑が存在した。

調査は重機により表土層を除去することから開始した。表土より下層には粘質土や粘土層が堆積していたが、遺構や遺物は調査範囲では確認できなかった。

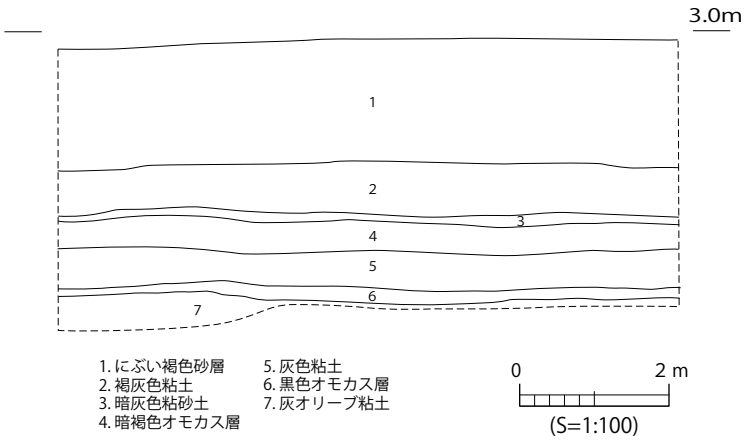
（2）層序

大橋川に近い地点は、表土層より下層には粘質土層と砂質土、砂礫層が互層に堆積している。これは大橋川からの流入した砂が遺跡内に入り込み堆積したと考えられる。反対に標高が高い北側の調査地点では、粘土層や土層の堆積が主で、河川の影響を受けていないものと考えられた。

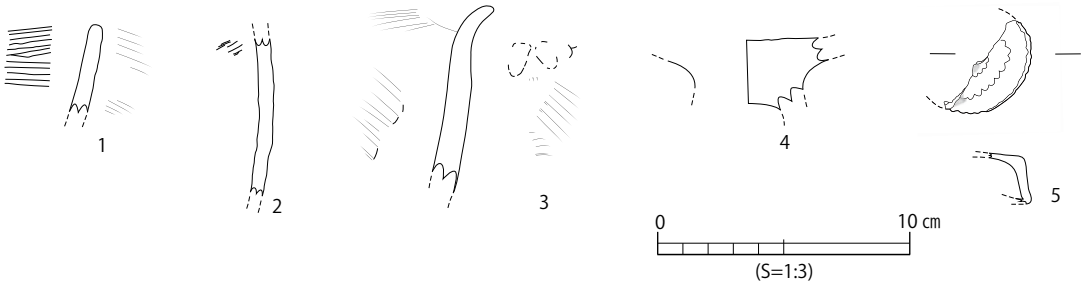
第 10 節　観音山古墳群



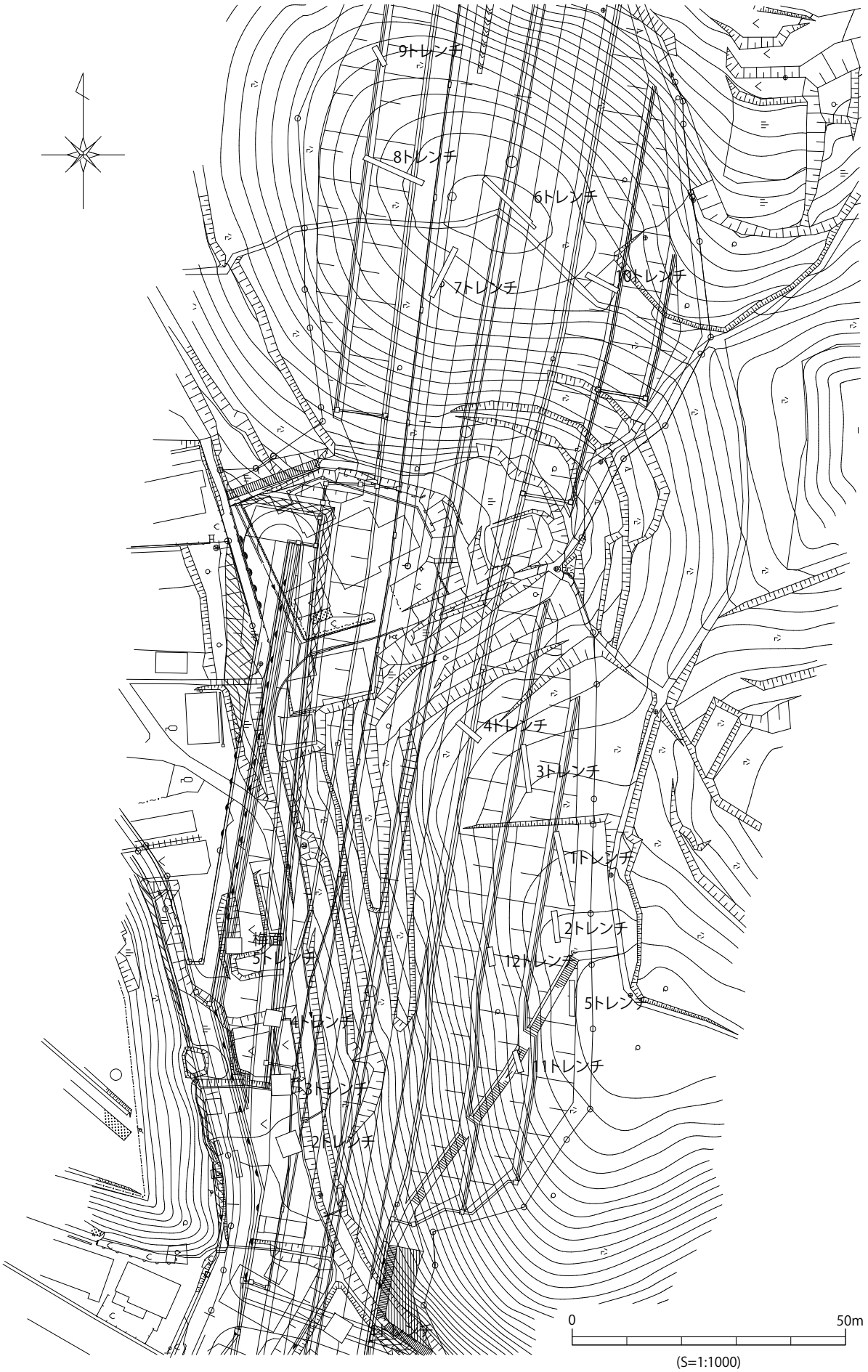
第 106 図　石台Ⅱ遺跡　調査区配置図（S＝1/500）



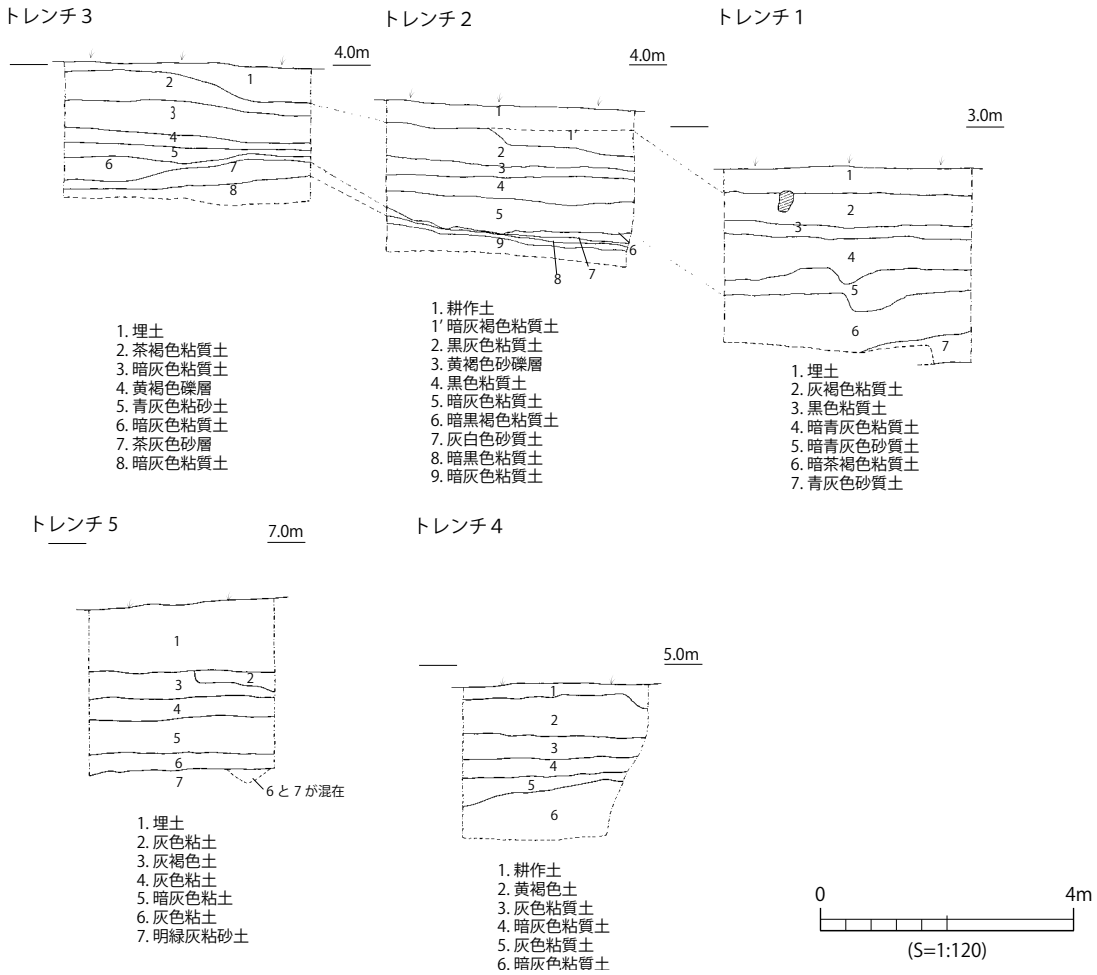
第 107 図　石台Ⅱ遺跡　土層図（S＝1/100）



第 108 図　石台Ⅱ遺跡　出土遺物実測図（S=1/3）



第 109 図　観音山古墳群　トレンチ配置図（S＝1/1000）



第 110 図　梅面遺跡　トレンチ土層図（S＝1/120）

（1）調査の方法

観音山古墳群は西尾町の丘陵上に築かれており、長さ約 38m の前方後円墳 1 基と、約 40m の方墳 1 基からなる古墳群である。今回の事業により同じ尾根筋が開発を受けることとなり、観音山古墳群として括られていた範囲のうち、事業に係る部分について 10 数カ所調査を行った。調査は山林内であったため、重機は用いず、表土掘削から全て人力で行った。

調査の結果、どの地点でも古墳などの遺構や遺物は確認できず、本事業に係る調査範囲については、古墳群の中の遺構が無い地点であると判断した。

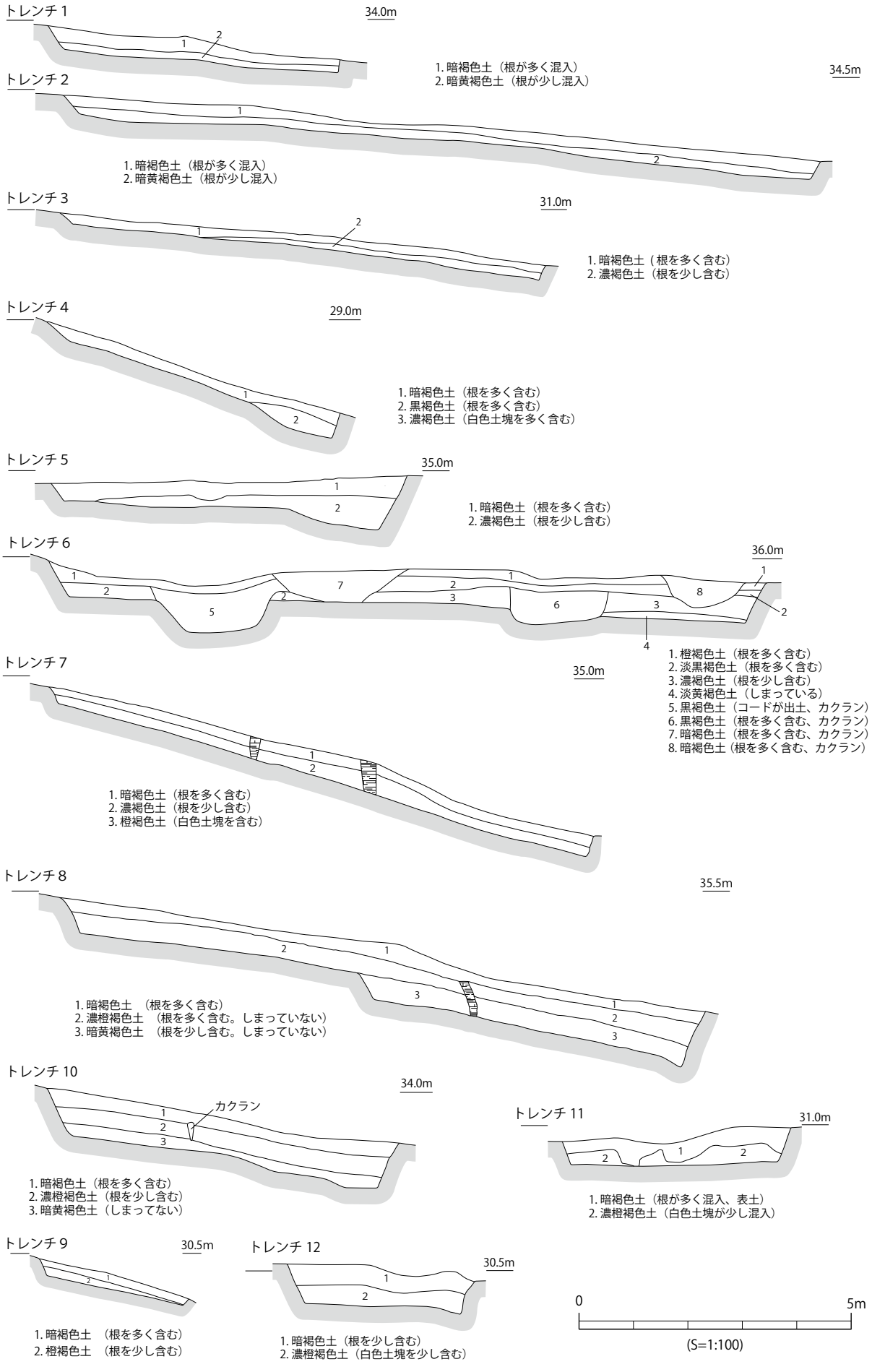
（2）層序

どの地点も、表土の地形に沿った形状で、各層が堆積していた。多くの地点は植物根を多く含む表土層を含み 2 層あるいは 3 層堆積していたが、場所によっては近年の攪乱によって地層が乱れている地点も存在した。地山まで深くなく、どの層にも植物根が含まれていた。

第 11 節　中坪遺跡

（1）調査の方法

中坪遺跡は、西尾地区の中心に広がる平野部に位置している。平野には西谷地区から流れ出る小川が流れている。近年は主に水田耕作が行われており、調査も水田部分で行った。



第 111 図　観音山古墳群　トレンチ土層図（S＝1/100）

地元住民の方々の話では、和久羅山からの地下水が伏流水として地下を流れており、また、耕作土の下には山からの土石流が多量に堆積していると考えられ、したがって、調査に伴って激しい湧水が想定された。

調査は重機により耕作土と床土を掘削することから開始した。どの調査地点でも床土の下には低地特有の粘土層や粘質土層が厚く堆積しており、壁面崩落の危険もあったため、掘削した土砂の中に遺物が存在しないかの確認を人力で行った。その結果、どの調査地点でも、遺構や遺物の確認に至らず、事業範囲内では遺構や遺物の分布は非常に低いと判断されたため、広範囲の調査は行わないこととなった。

（2）層序

基本層序は、上から耕作土層、粘土層あるいは粘質土層、そのしたに灰色砂礫層が堆積している。粘土層と粘質土層は、本遺跡がある期間に低湿地化していた根拠となるもので、その下の砂礫層は赤色系の安山岩が含まれていることから、和久羅山の山塊が崩落し、流入してきた砂礫層であると考えられる。この砂礫層及び粘土層、粘質土層が形成された年代は不明である。

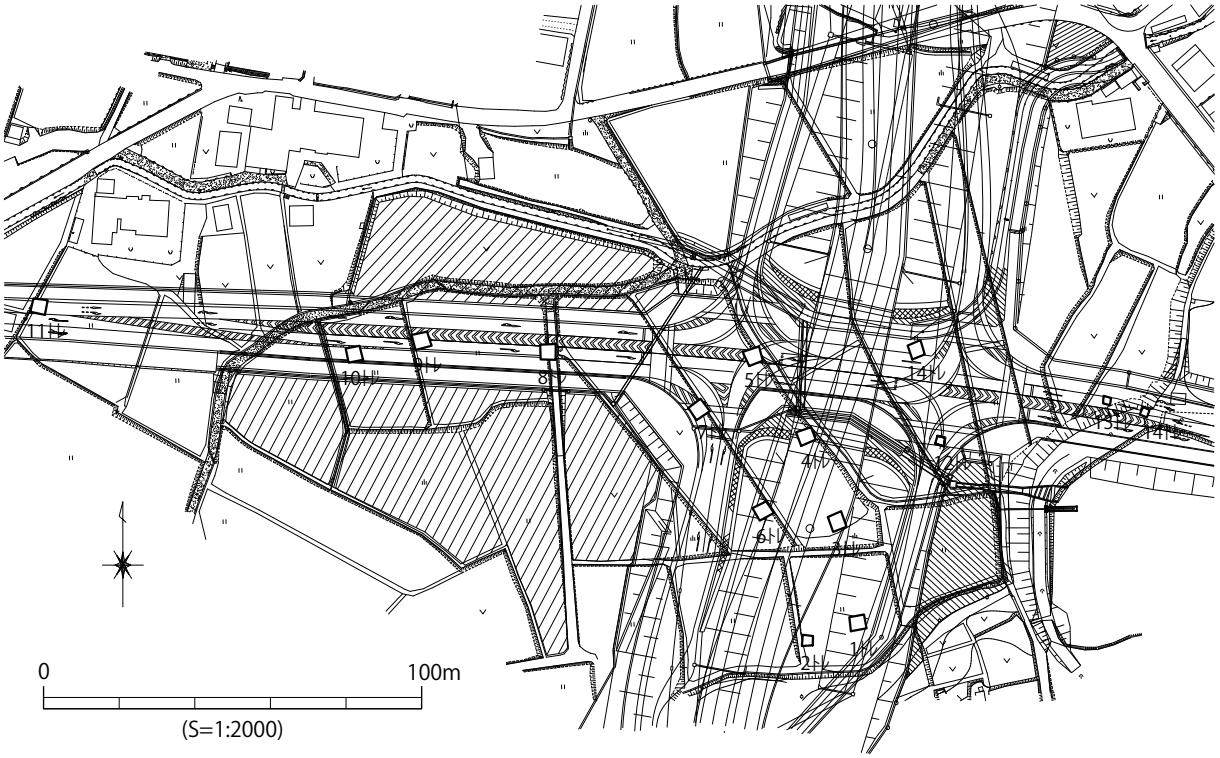
第 12 節　一の谷遺跡

（1）調査の方法

一の谷遺跡は、和久羅山から派生する尾根に位置している。北側が上東川津町の谷になり、樹木で遮られてはいたものの、わずかに遠くを見通せる場所である。

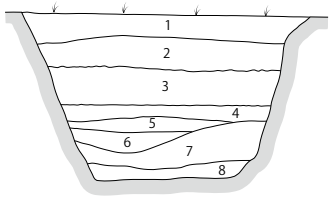
調査地点は山林であり、重機などが進入することは不可能であったため、各調査地点は人力で表土掘削から行った。

和久羅山に築かれている和久羅城跡へと続く通路が存在する可能性があったため、慎重に調査を行ったが、遺構や遺物を確認することはできなかった。



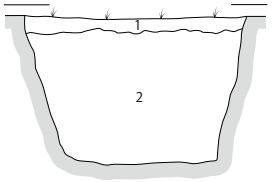
第 112 図　中坪遺跡　トレンチ配置図（S＝1/2000）

トレンチ 1



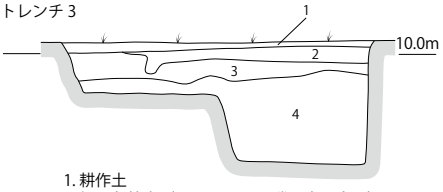
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土（30mm 以下の礫を少量含む。）
3. 褐灰色粘質土（木片を少量含む。）
4. 黒褐色粘質土
5. 黄灰色粘質土（40mm 以下の礫を少量含む。）
6. 灰色粘質土（40mm 以下の礫を少量含む。）
7. 橙色地山風化層（20 ～ 80mm の礫を多量含む。）
8. 灰オリーブ岩盤

トレンチ 2



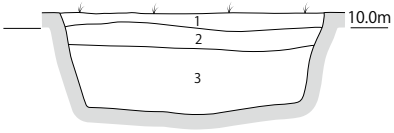
1. 耕作土
2. 暗灰色シルト層

トレンチ 3



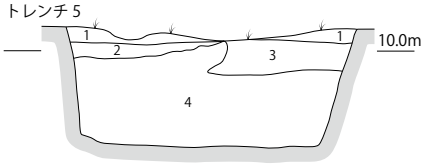
1. 耕作土
2. 褐灰色粘土（17mm 以下の礫を少量含む）
3. にぶい黄色粘土（50mm 以下の礫を少量含む）
4. 灰白色粘土と赤褐色礫混じり層
5. 黄色砂層

トレンチ 4



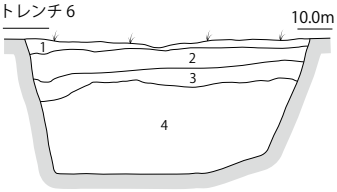
1. 耕作土
2. 灰色粘土（17mm 以下の礫を少量含む）
3. 灰白色粘土と赤褐色礫混じり層

トレンチ 5



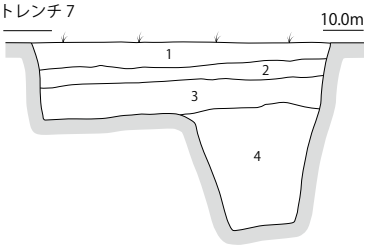
1. 黒褐色粘質土（耕作土で小石を少量含む）
2. 黒色粘質土（炭化物、小石を含む）
3. 暗灰色粘質土（小石を含む）
4. 灰色砂礫層

トレンチ 6



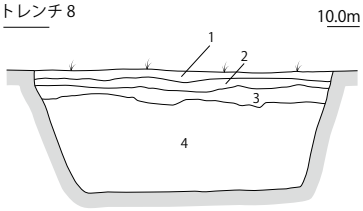
1. 黒褐色粘質土（耕作土で小石を少量含む）
2. 黒色粘質土（炭化物、小石を含む）
3. 暗灰色粘質土（小石を含む）
4. 灰色砂礫層

トレンチ 7



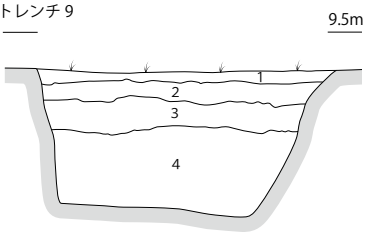
1. 黒褐色粘質土（耕作土で小石を少量含む）
2. 黒色粘質土（炭化物、小石を含む）
3. 暗灰色粘質土（小石を含む）
4. 灰色砂礫層

トレンチ 8



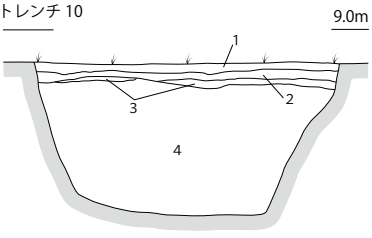
1. 黒褐色粘質土（耕作土で小石を少量含む）
2. 黒色粘質土（炭化物、小石を含む）
3. 暗灰色粘質土（小石を含む）
4. 灰色砂礫層

トレンチ 9



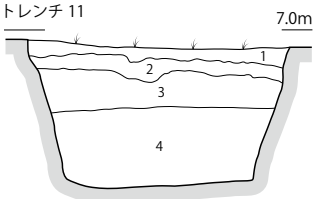
1. 黒褐色粘質土層（耕作土で小石を少量含む）
2. 明黄褐色粘質土層（炭化物、小石を含む）
3. 暗灰色粘質土層（小石を含む）
4. 灰色砂礫層

トレンチ 10



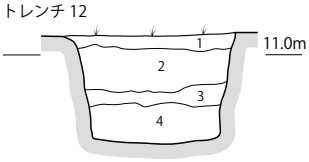
1. 黒褐色粘質土層（耕作土で小石を少量含む）
2. 明黄褐色粘質土層（炭化物、小石を含む）
3. 暗灰色粘質土層（小石を含む）
4. 灰色砂礫層

トレンチ 11



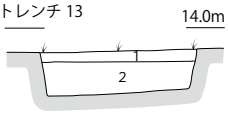
1. 黒褐色粘質土　（耕作土で小石を少量含む。）
2. 黒色粘質土　（炭化物・小石を含む。）
3. 明黄褐色粘土
4. 灰色砂礫層

トレンチ 12



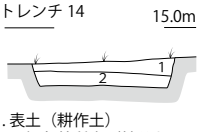
1. 黒褐色粘質土　（耕作土）
2. 黒色粘質土　（炭化物・小石を含む。）
3. 明黄褐色粘質土
4. 灰色砂礫層

トレンチ 13



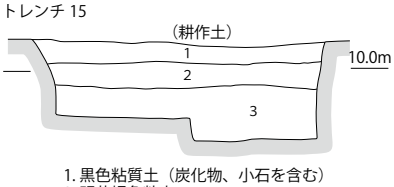
1. 表土（耕作土）
2. 灰褐色粘質土（鉄分あり、床土）

トレンチ 14

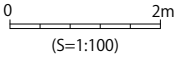


1. 表土（耕作土）
2. 灰褐色粘質土（鉄分あり、床土）

トレンチ 15



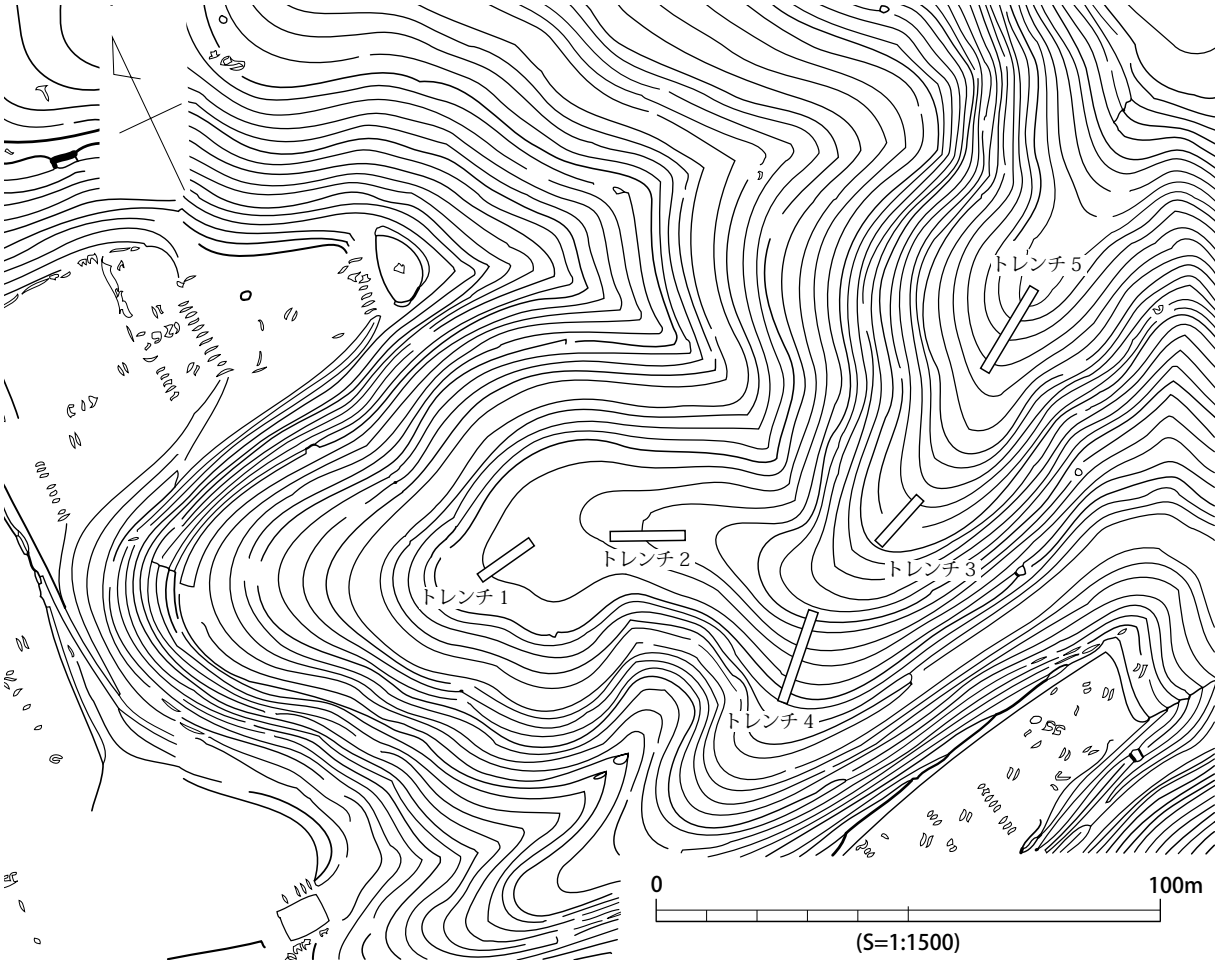
1. 黒色粘質土（炭化物、小石を含む）
2. 明黄褐色粘土
3. 灰色砂礫層



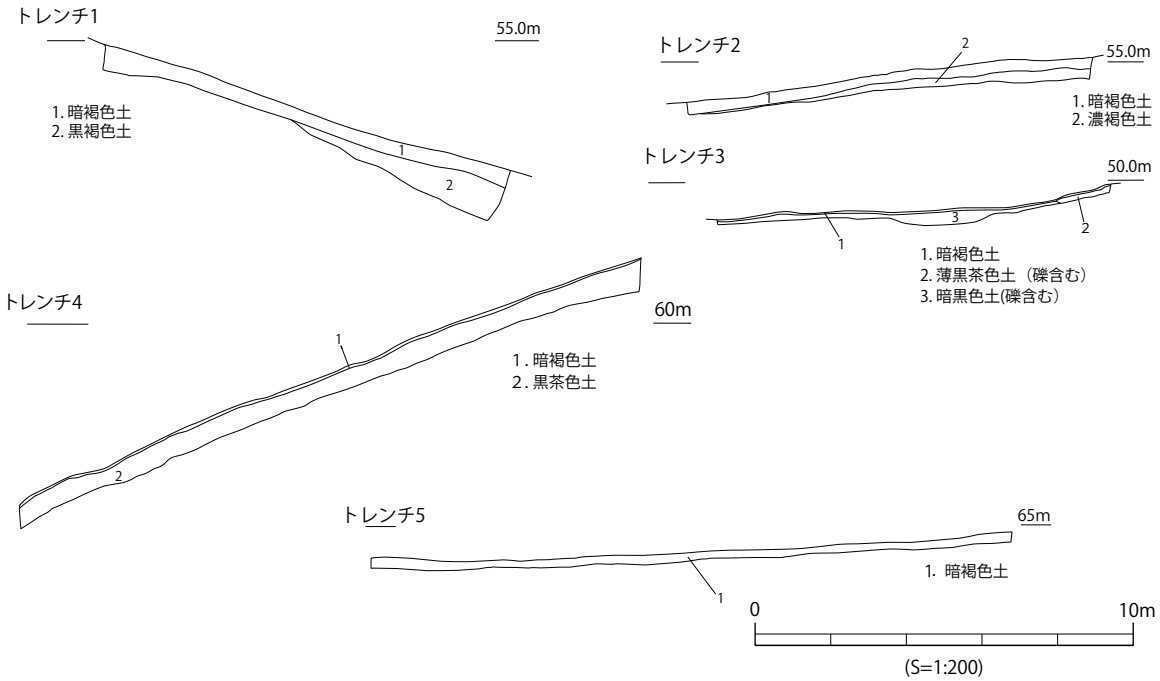
第 113 図　中坪遺跡　トレンチ土層図（S＝1/100）

（2）層序

表土は腐植土層で、その下から地山層が現れた。地山層は各地点で色調が異なっており、層は非常に締まっていたり、和久羅山の山塊を構成する安山岩の風化層であったりと一様ではなかっ



第 114 図　一の谷遺跡　トレンチ配置図（S＝1/1500）



第 115 図　一の谷遺跡　トレンチ土層図（S＝1/200）

た。地山層の異なる状況は断層などの地殻変動によるものの可能性がある。

調査地点によっては、地山上に割れた礫が散布している状況が見られたが、地山層内に同じ石材の礫が含まれていたことから、礫が地表面に浮き上がったものであると判断した。

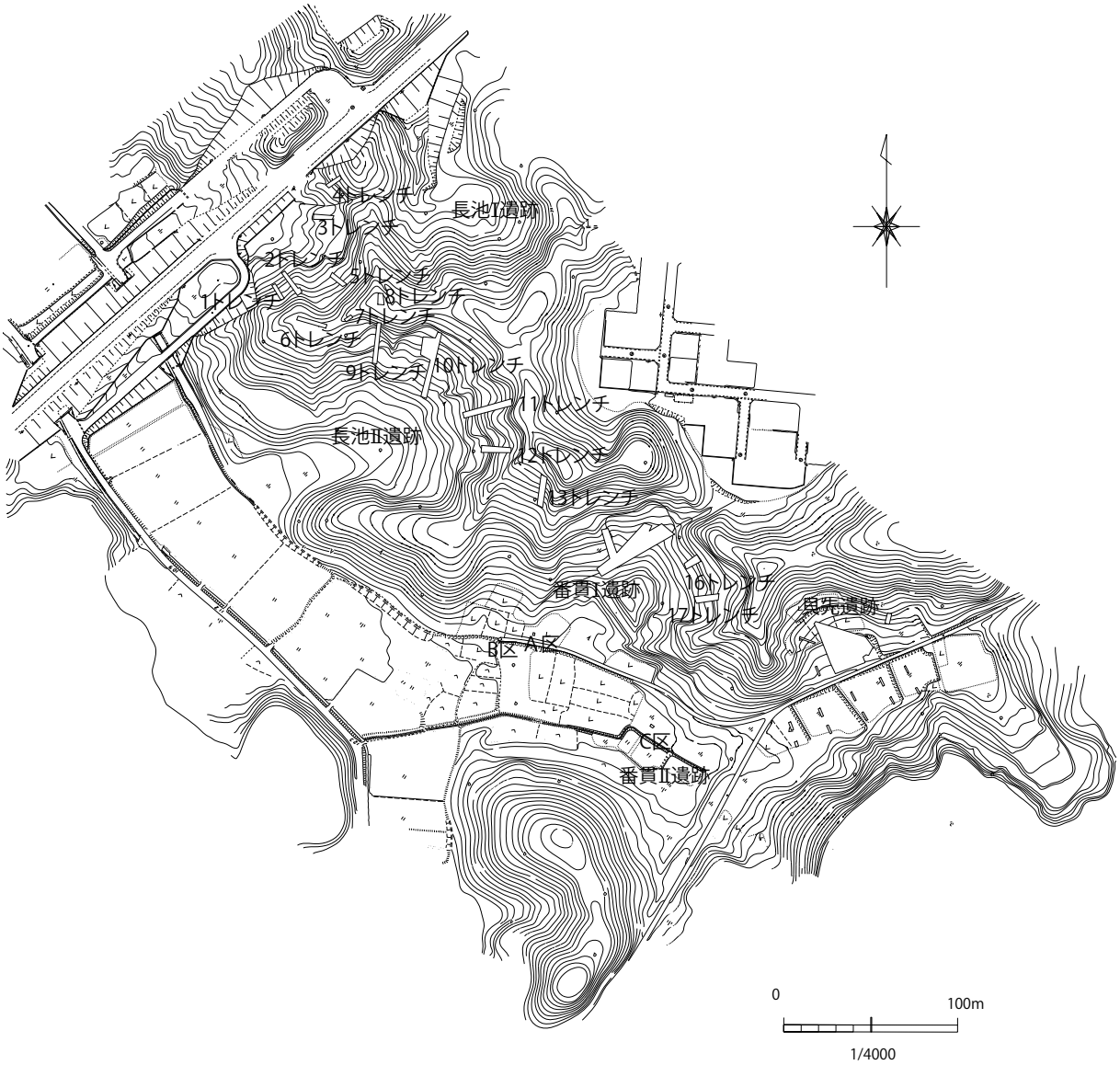
第 13 節　貝先遺跡

（1）調査の方法

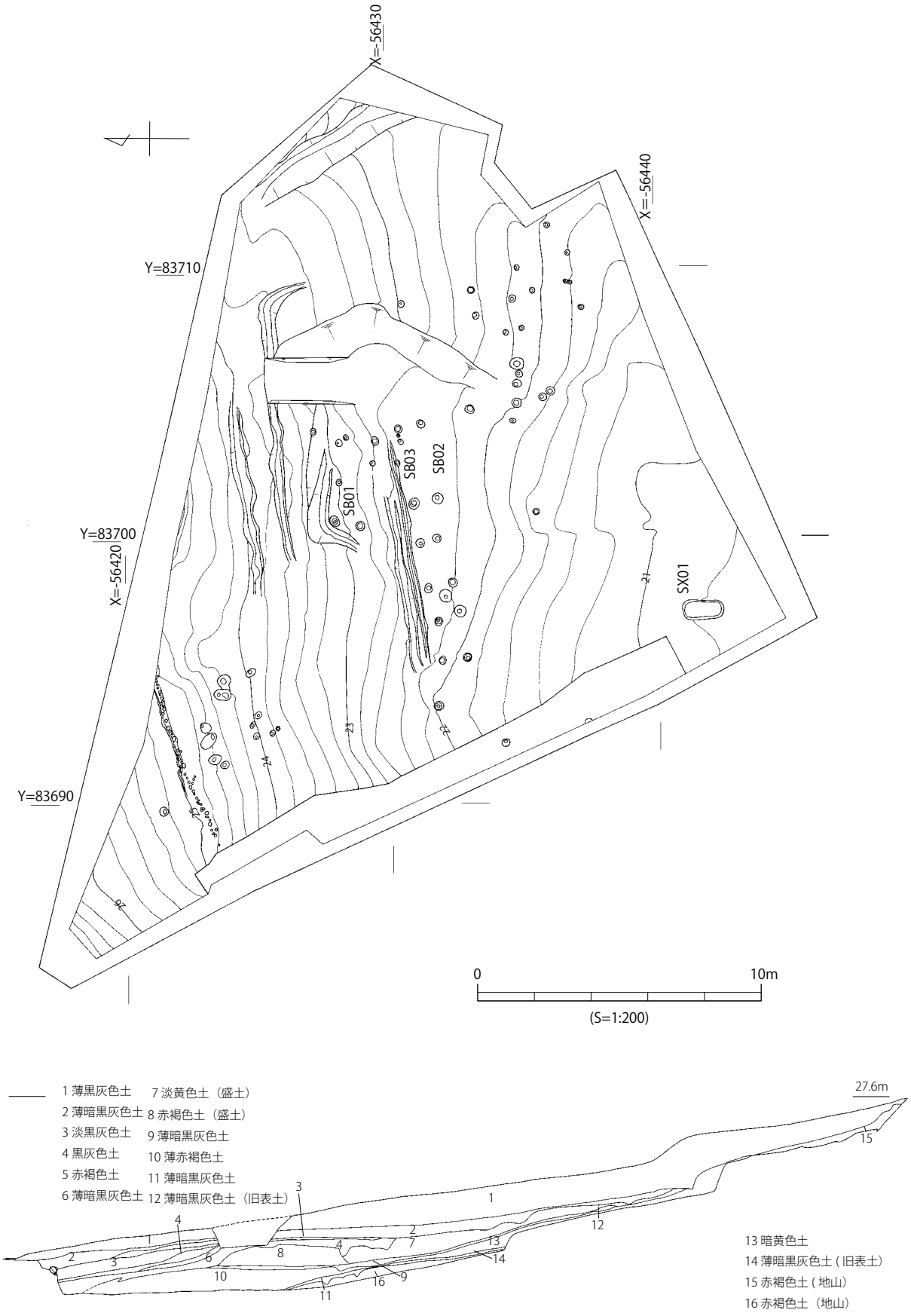
表土を重機により掘削を行い、10m グリッドを組んで遺物包含層以下を人力で掘り下げた。

（2）遺構

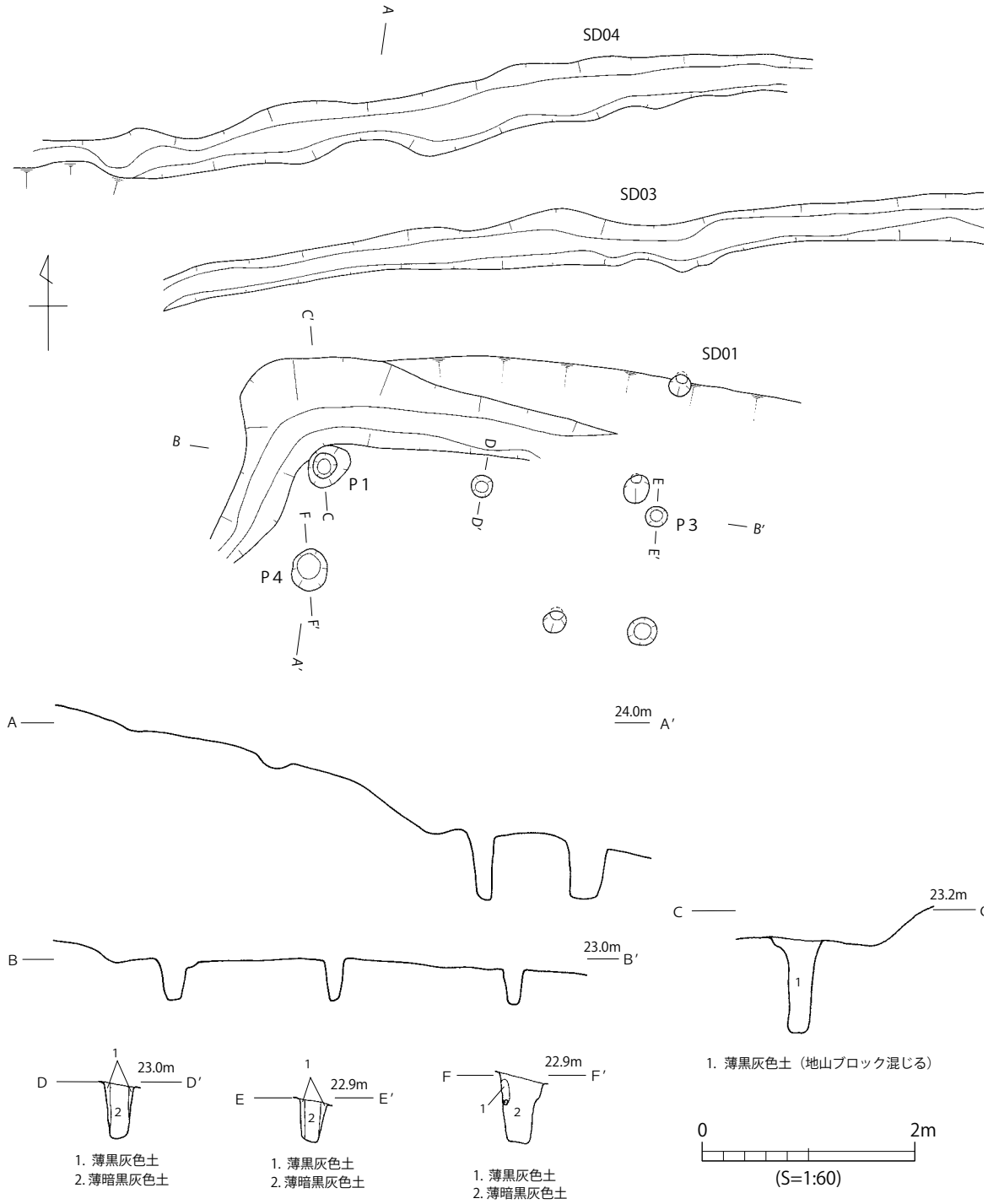
40 m四方ほどの北高南低の擂鉢状地形を利用して作られた中世の掘立柱建物跡群を検出した（第 117 図）。調査の結果、遺構はさらに北側の調査区外にも広がると思われた。調査区の南側は西川津町祖子分から上東川津町にぬける道を挟んで、現在は谷水田となっている。両地区の境には自然石を積んだ幸神が残っていて、小字名は「才の神」である。建物群は丘陵北側の高い方を削り、南側に埋めて平坦面を加工し建てられており、土層観察から二時期が確認されるが（第



第 116 図　長池Ⅰ・Ⅱ・番貫Ⅰ・Ⅱ・貝先遺跡　調査区配置図（S＝1/4000）



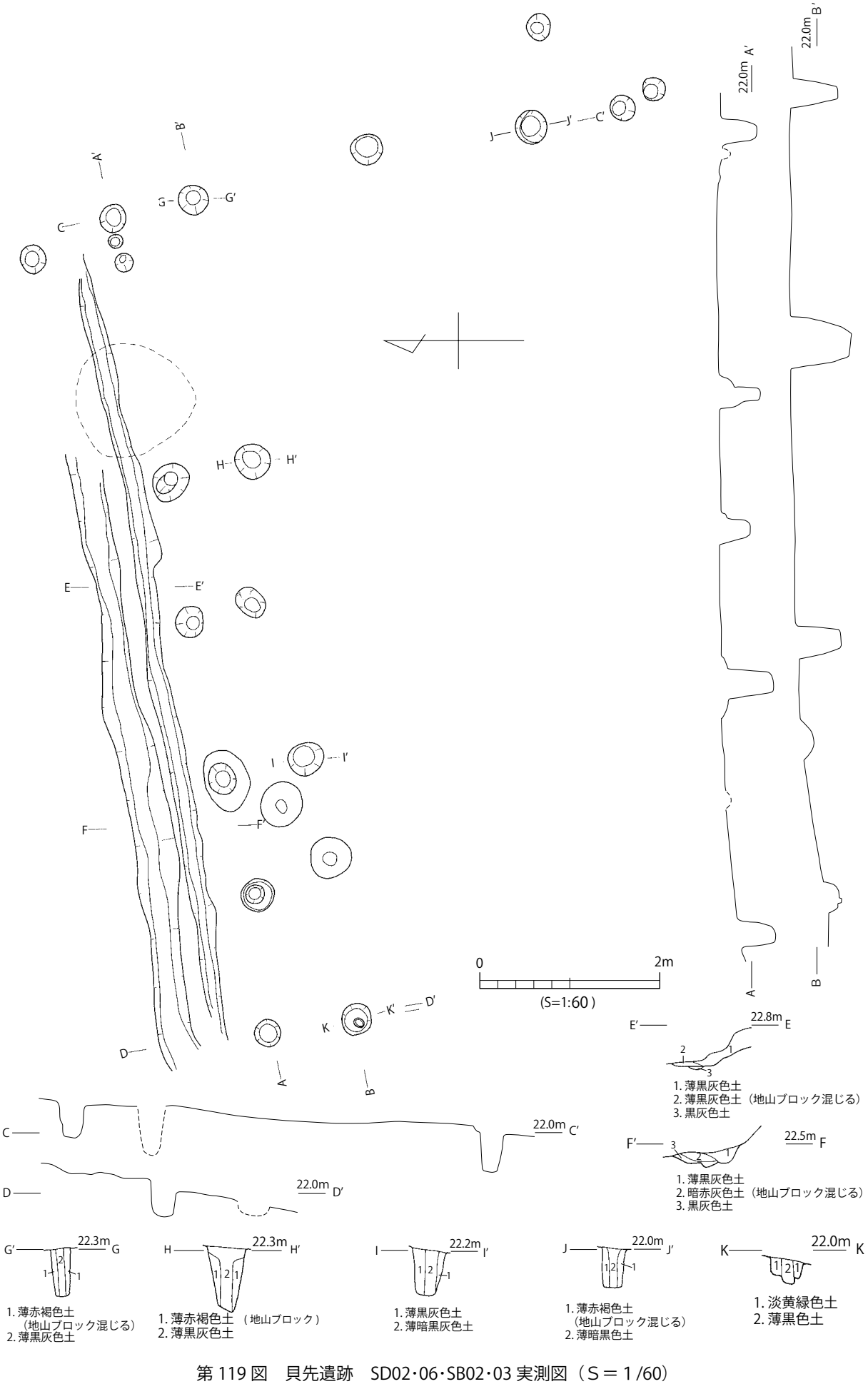
第 117 図　貝先遺跡　遺構配置図（S＝1/200）



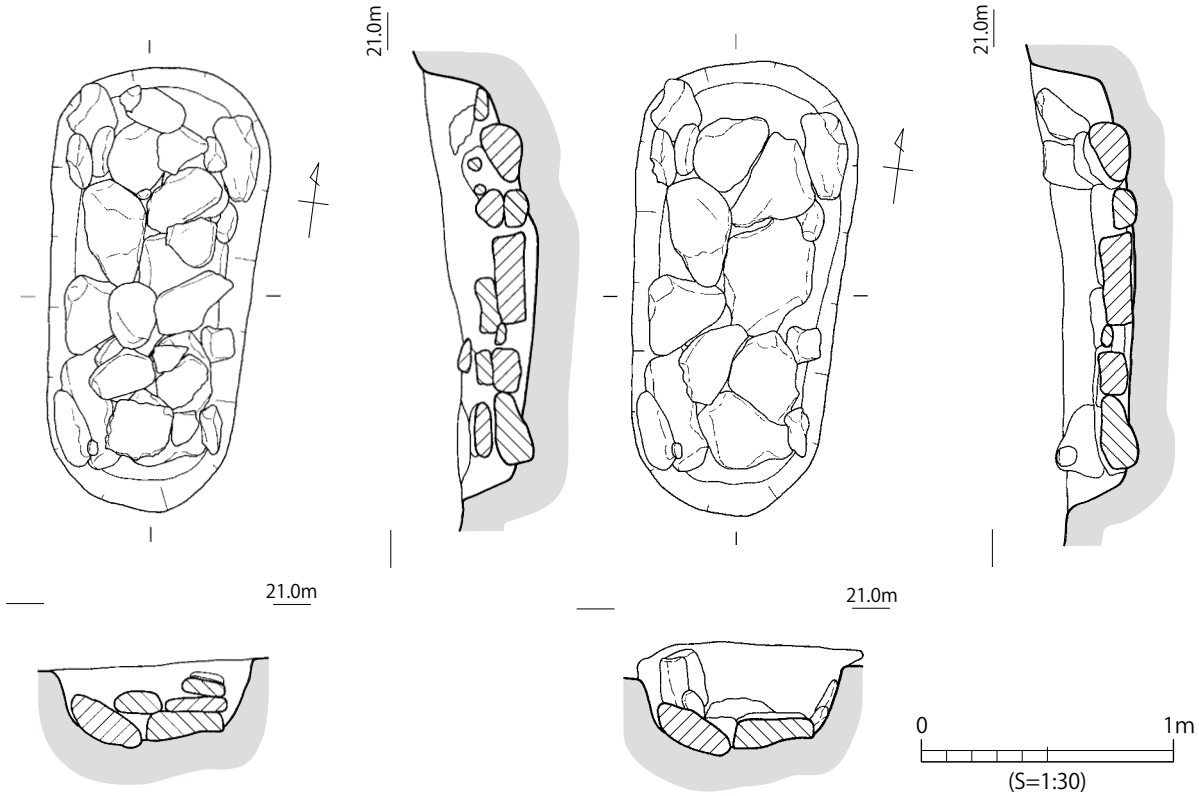
第 118 図　貝先遺跡　SD01･03･04･SB01 実測図（S＝1/60）

118 図)、それは丘陵の高い方の（北側）SB01 と低い方の（南側）SB02・03 に対応する。後者を埋めて前者が作られているが、出土した遺物にはあまり時期差はない。

SB01 は調査区の中央よりやや北寄りにあり、東西方向の柱穴三本（P1 ～ 3）とこれに伴う溝 SD01 を検出した（第 118 図)。1 × 3 間の建物構造を想定すると、柱は東側にもう一本あったはずであるが、南側と共に埋土が失われている。一尺 33㎝とすると、P1 － P2 － P3 は、それぞれ、五尺―六尺である。P1 の南側の注穴 P4 は、一本しか残っていなかったが、SB01 以前の建物の柱穴であろう。長軸方向はＮ－ 100゜－ E である。遺物は SD01 の中から 12 ～ 13 世紀の中国製白



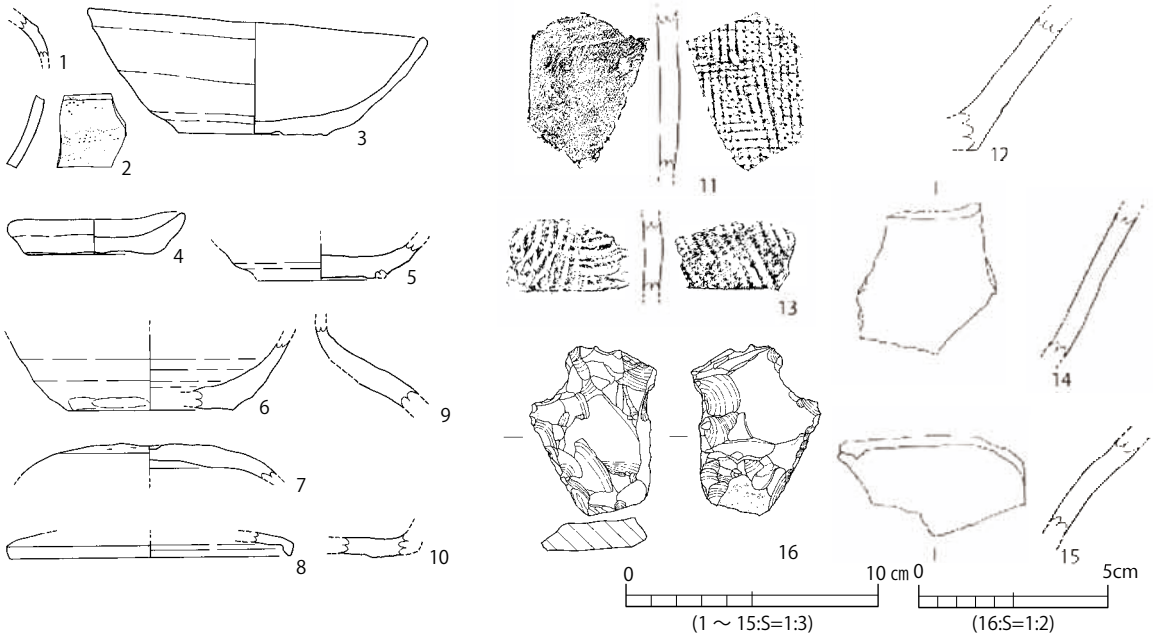
第 119 図　貝先遺跡　SD02･06･SB02･03 実測図（S＝1/60）



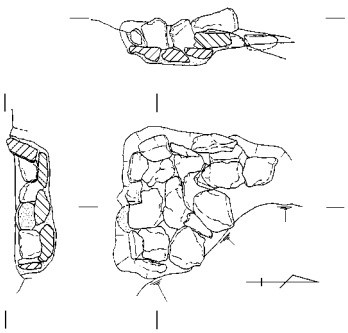
第 120 図　貝先遺跡　SX01 実測図（S＝1/30）

磁片（第 121 図２）、SB01 の P1 付近から土師質土器（第 121 図３）が出土した。

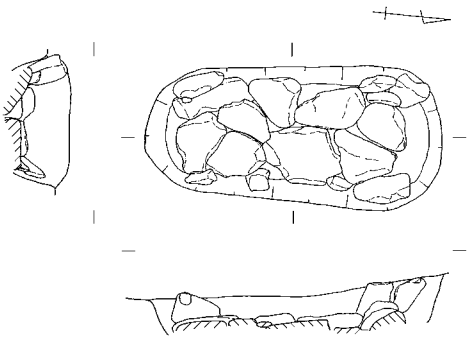
SB02・03 はそれぞれ溝 SD02・06 を伴う 1 × 3 間構造の同規模の掘立柱建物跡である（第 119 図）。建物群の南と西側の柱穴は失われている。土層の観察から SB03・SD06 を建て替えて SB02・SD02 が建てられたと考えられる（第 119 図）。SB02 の柱間距離を一尺 33㎝として検討すると、東西方向の P 14 － P 16 － P 15 － P 17 はそれぞれ、9 尺の等間隔の 27 尺となり、南



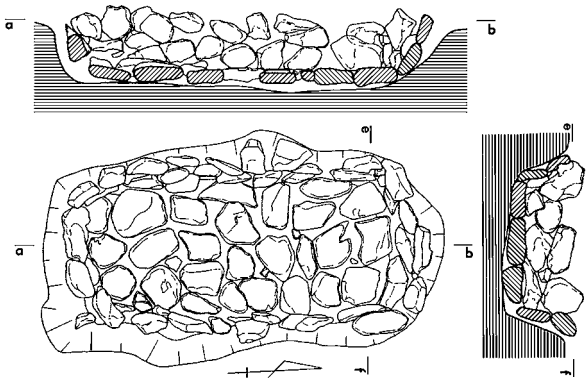
第 121 図　貝先遺跡　出土遺物実測図（S＝1/3）



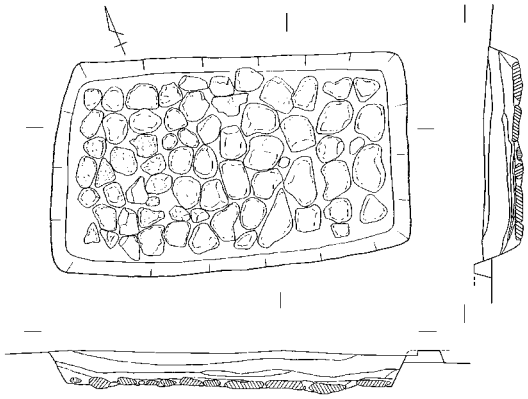
1. 松江市西川津遺跡Ｄ区



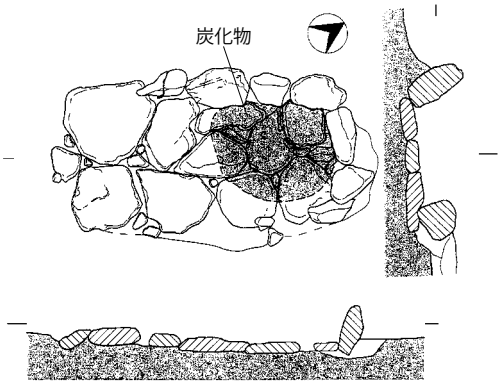
2. 松江市貝先遺跡



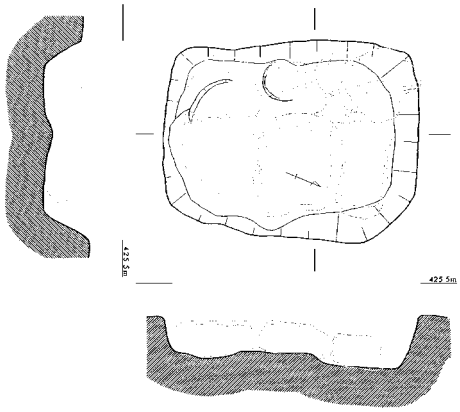
3. 飯南町・中原遺跡
（島根県教育委員会 1999『中原遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書６を加除筆）



4. 津和野町・大陰遺跡
（津和野町教育委員会 2010『大陰遺跡 1・2・4・6・7・8 次発掘報告書』津和野町埋蔵文化財報告書第 14 集を加除筆）

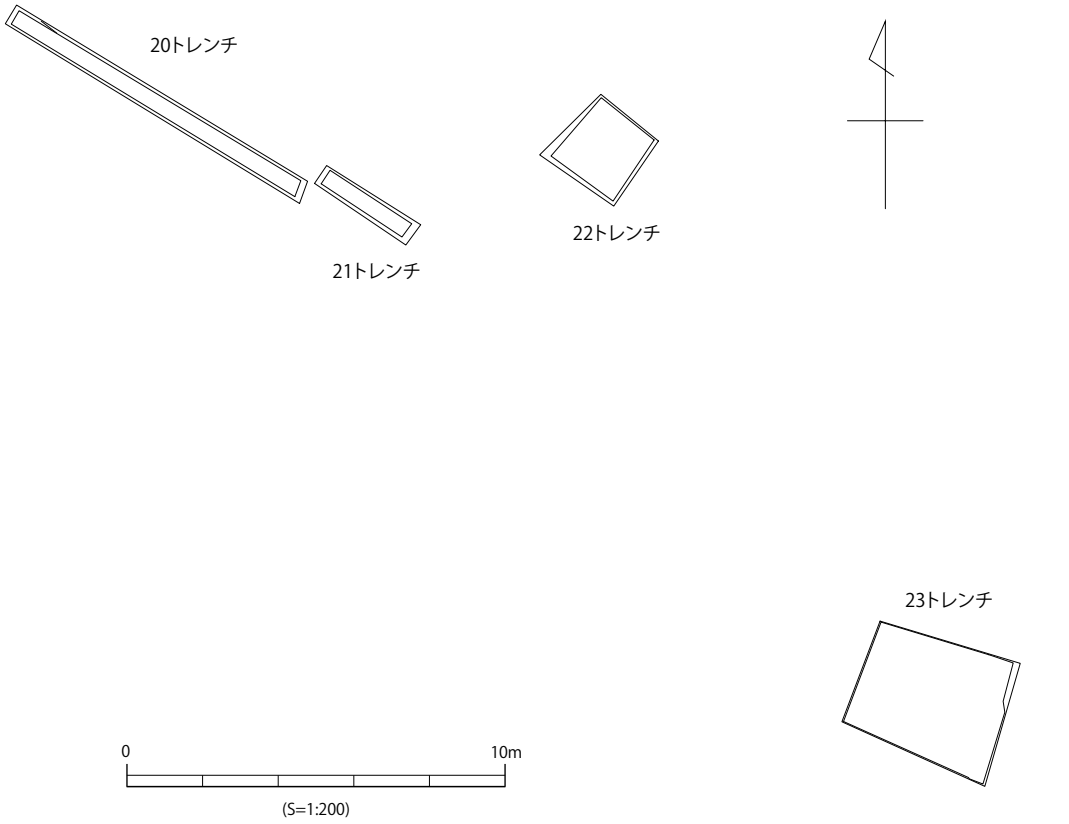


5. 益田市・下都茂原遺跡
（益田市教育委員会 2007『下都茂原遺跡』益美２期地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書を加除筆）

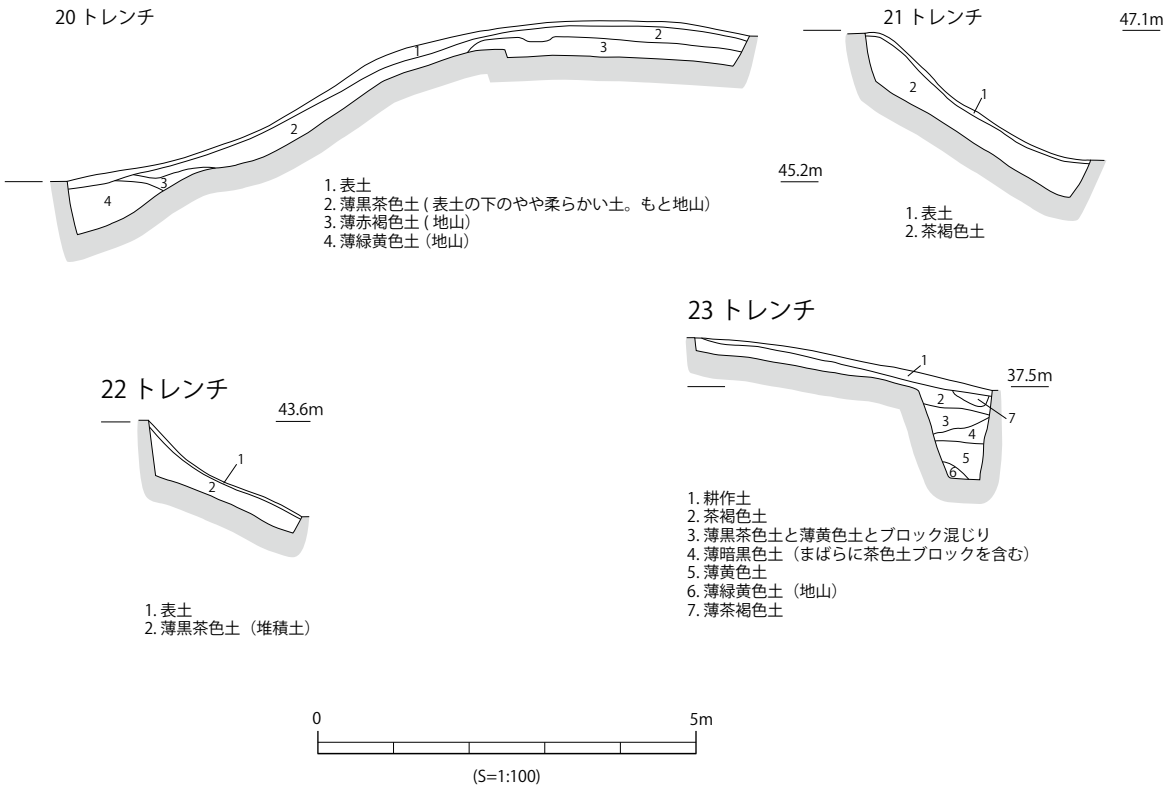


6. 飯南町・的場尻遺跡
（頓原町教育委員会 1998『的場尻遺跡・社日山城跡』県道吉田頓原線緊急地方道路整備Ａ（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書を加除筆）

第 122 図　窯状石組遺構類例実測図（Ｓ＝１/40）



第 123 図　蟻越古墳群　トレンチ配置図（S＝1/200)



第 124 図　蟻越古墳群　トレンチ土層図（S＝1/100）

北方向のＰ 17 －Ｐ 8 は 14 尺､床面積は約 41．2㎡となる。長軸方向はＮ－ 80゜－Ｅである。なお、SB02 には浅い円形の土壙Ｐ 12 が、同様に SB06 にはＰ 9 が伴うものと思われる。それぞれ、Ｐ 9 内から炭化米 1 を、Ｐ 12 内からは炭化したコメ 2、コムギを 1 検出した。これらは建物屋内の竈、或いは五徳を置いた場所であったと思われる。また、Ｐ 15 とＰ 17 の間に径 1.2 mの不整円形の範囲に炭化物の広がりがあった。どちらかの建物に伴うものと思われるが観察できなかった。水洗いでは炭化米 8 粒を検出した。また､SB02 に伴う遺物に土師質土器がある（第 121 図 4・5）。

調査区の南西、SB03・04 の南約 10 m離れた位置に、石組遺構 SX01 を検出した（第 120 図)。南北 1．58 m、東西 0．70 m、中央での深さ 0，15 mを測る。床と周囲を角の取れた扁平な自然石で覆った石組み遺構で、石は被熱している。土層には炭化物層があり、水洗したところ炭化したコメ、オオムギなどを検出した（図版 139)。建物群に伴う炊飯施設、つまり竈の一種と考えられる。中世において建物から離れた位置にこのような施設があるのは、松江市西川津遺跡Ｄ区、飯南町中原遺跡・的場尻遺跡、津和野町大蔭遺跡、益田市下都茂遺跡などがある（第 122 図)。

なお、調査区からは建物群に関係すると思われる中世陶器（第 121 図 10 ～ 15)、律令期の須恵器（同６～９)、古墳時代の須恵器（同１)、加工痕のある黒曜石片（同 16）が出土した。このうち第 121 図６はＰ 7 から出土しており、調査区内の柱穴群の中には律令期の掘立柱建物柱建物跡もあると考えられる。

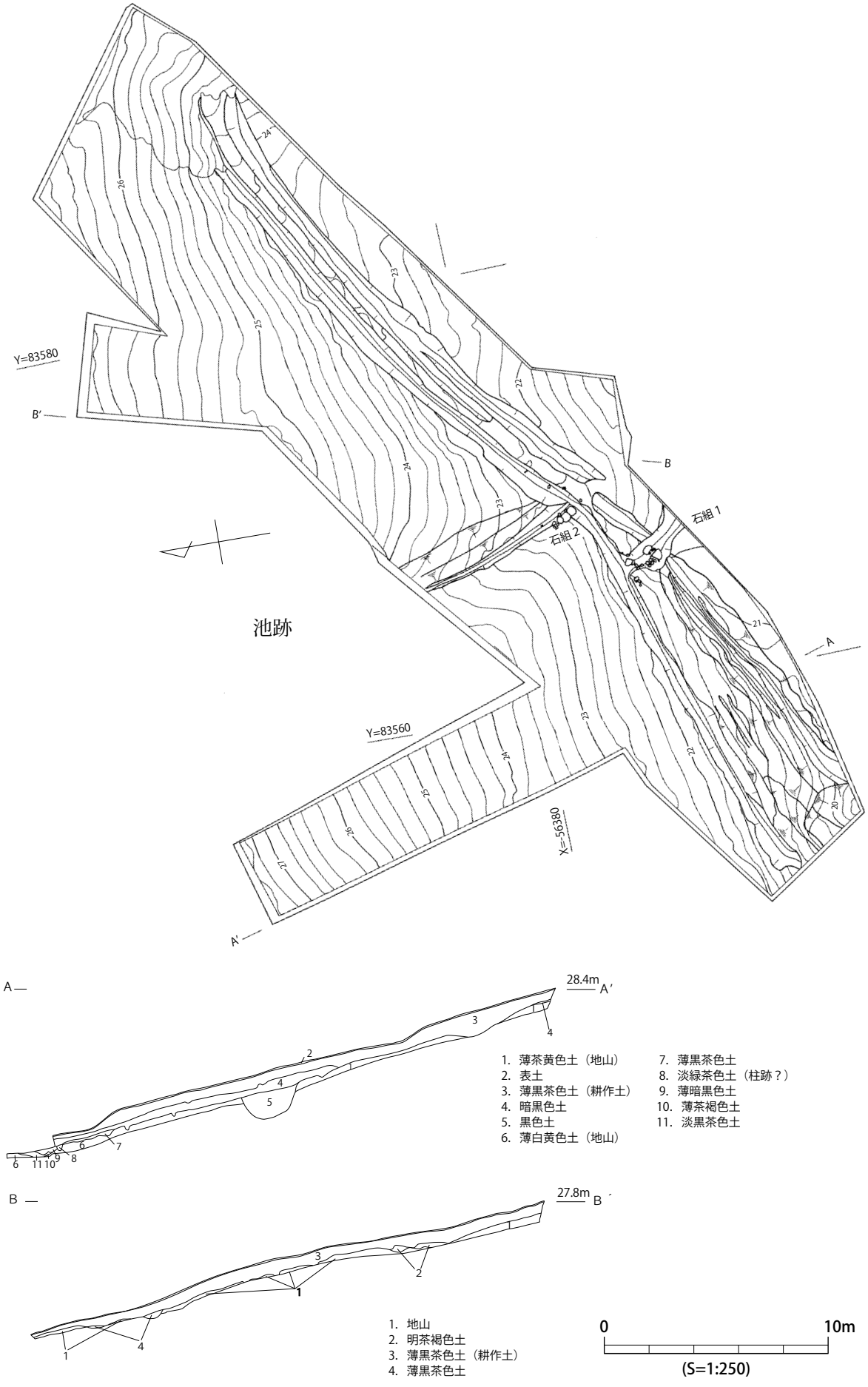
第 14 節　蟻越古墳群

遺跡内に 4 箇所の調査区を設定して発掘調査を行ったが、遺構・遺物は認めらなかった（第 124 図)。

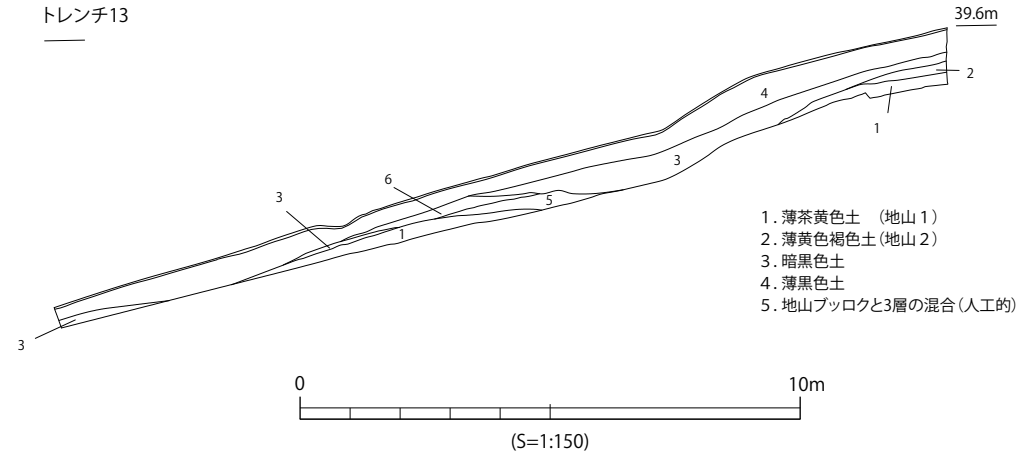
第 15 節　番貫Ⅰ遺跡

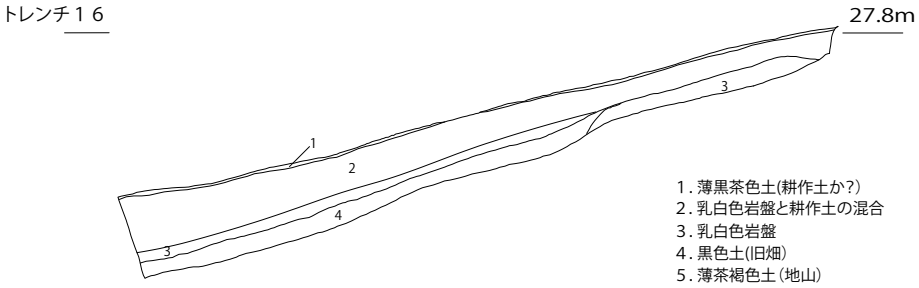
標高約 30 mの丘陵上の 18 調査区内において平行して奔る東高西低の二本の溝とこれらに直交する北高南低の二本の溝（SD01・02）を検出した（第 125 図)。調査前は赤道となっており、溝の廃絶後は西川津町祖子分から上東川津にぬける生活道路の一つになっていたようである。溝の始まりは調査区の東端の岩盤である。ここから調査区の西端まで 47 mを測る。岩盤から調査区の端までの高低差は約５mである。二本とも調査区の西端をぬけ、祖子分の谷水田に向かっている。この東西方向に奔る二本の溝の内、北側のＳＤ 01 には、丘陵の北側から直交して石組２を伴う別の溝が作られている。このＴ字路部分から西へ 4．０mの地点で、東西方向の南側の溝に向けて直交するもう一つの南北方向の石組 1 を伴う溝が作られている。それは SD02 を越えて、調査区の南側にあった池に注ぎ込むよう作られていた。これらの溝、及び周辺からは、土師器、須恵器、中・近世陶磁器、鉄製品､、径 1．5㎝の球状根付け 1 個、燻瓦片、及びチャート製の剥片 1 片が出土した（第 127 図)。遺物の中心時期は近世であり、溝の時期を表すと考えられるが、このうち 5 は 12 ～ 13 世紀の中国製白磁片で後述する貝先遺跡の建物群の時期に同じであり、溝の起源は中世まで遡るものであるかもしれない。

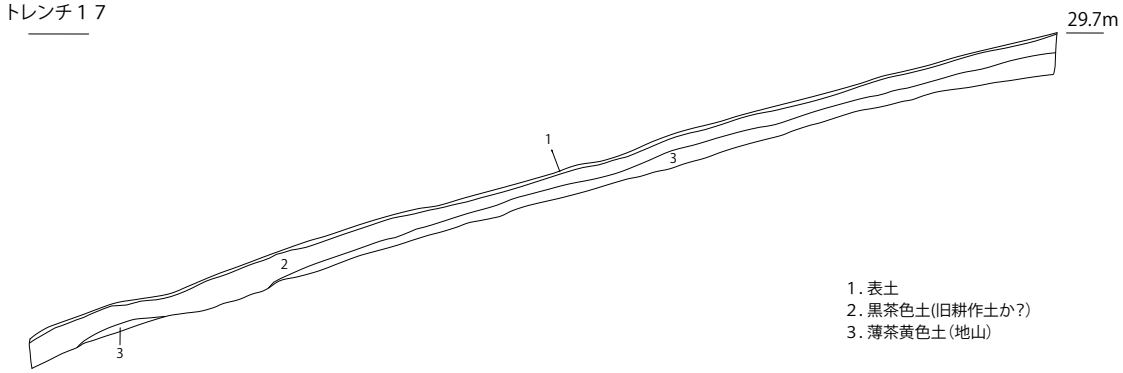
調査の結果、最初は水源地から田畑に水を供給するために、中世、若しくは近世に用水路として溝が造られたが、調査区の南に、近世、又は近代になって潅漑用の溜池が築かれたため廃止されたと考えられる。その後は、生活道路として機能し、赤道になったようである。

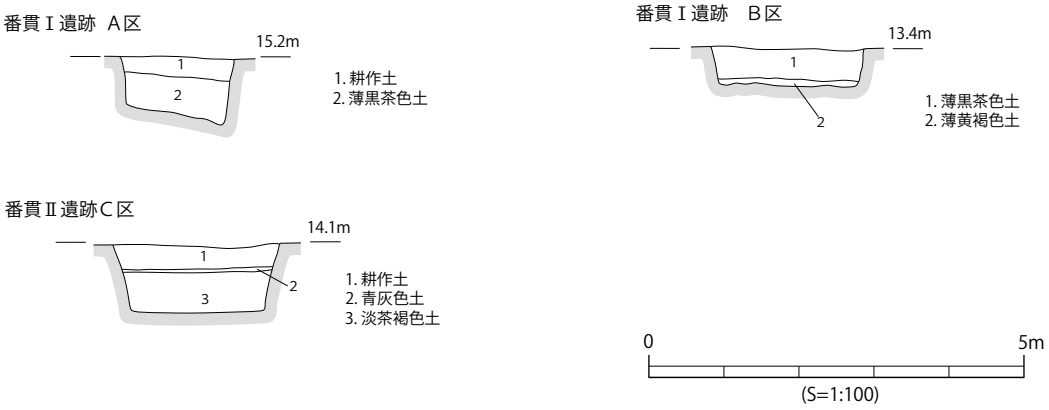


第 125 図　番貫Ⅰ遺跡　遺構配置図（S＝1/250）







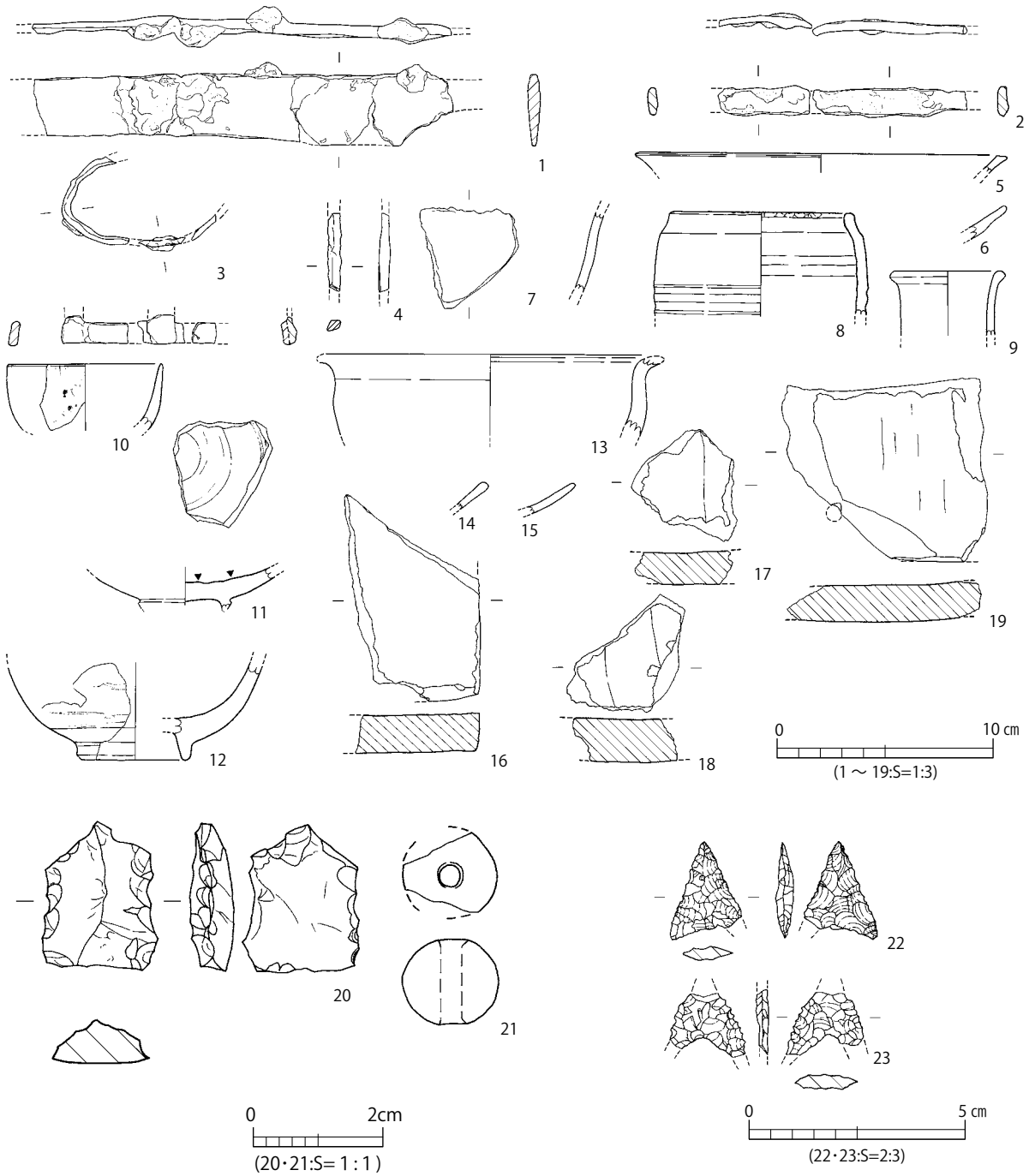


第 126 図　番貫Ⅰ遺跡・番貫Ⅱ遺跡　土層図（S＝1/150・100）

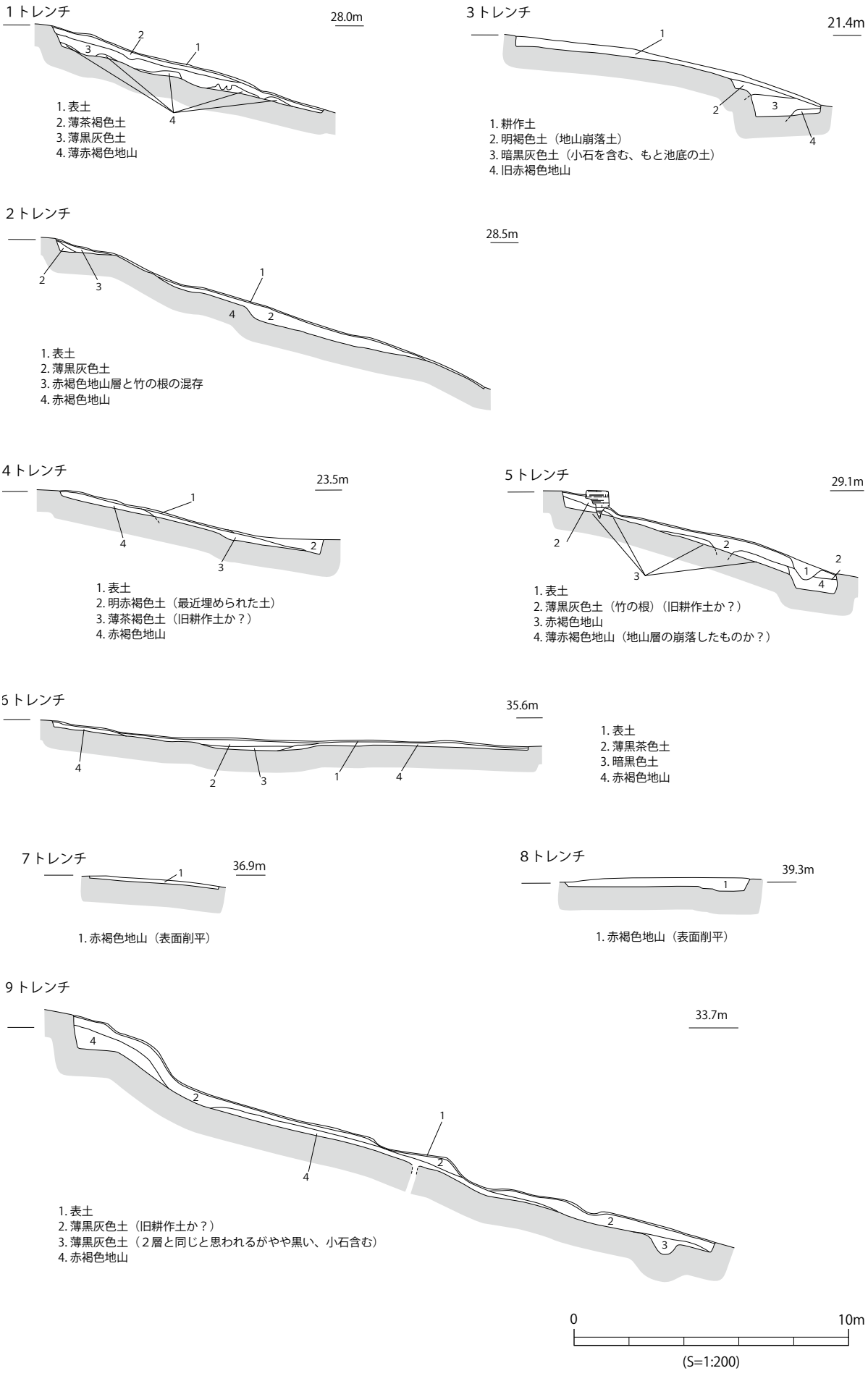
また、16 トレンチでは表土中から黒曜石製石鏃 1 点が出土したが（第 127 図 23）、遺構は検出できなかった。

第 16 節　番貫Ⅱ遺跡

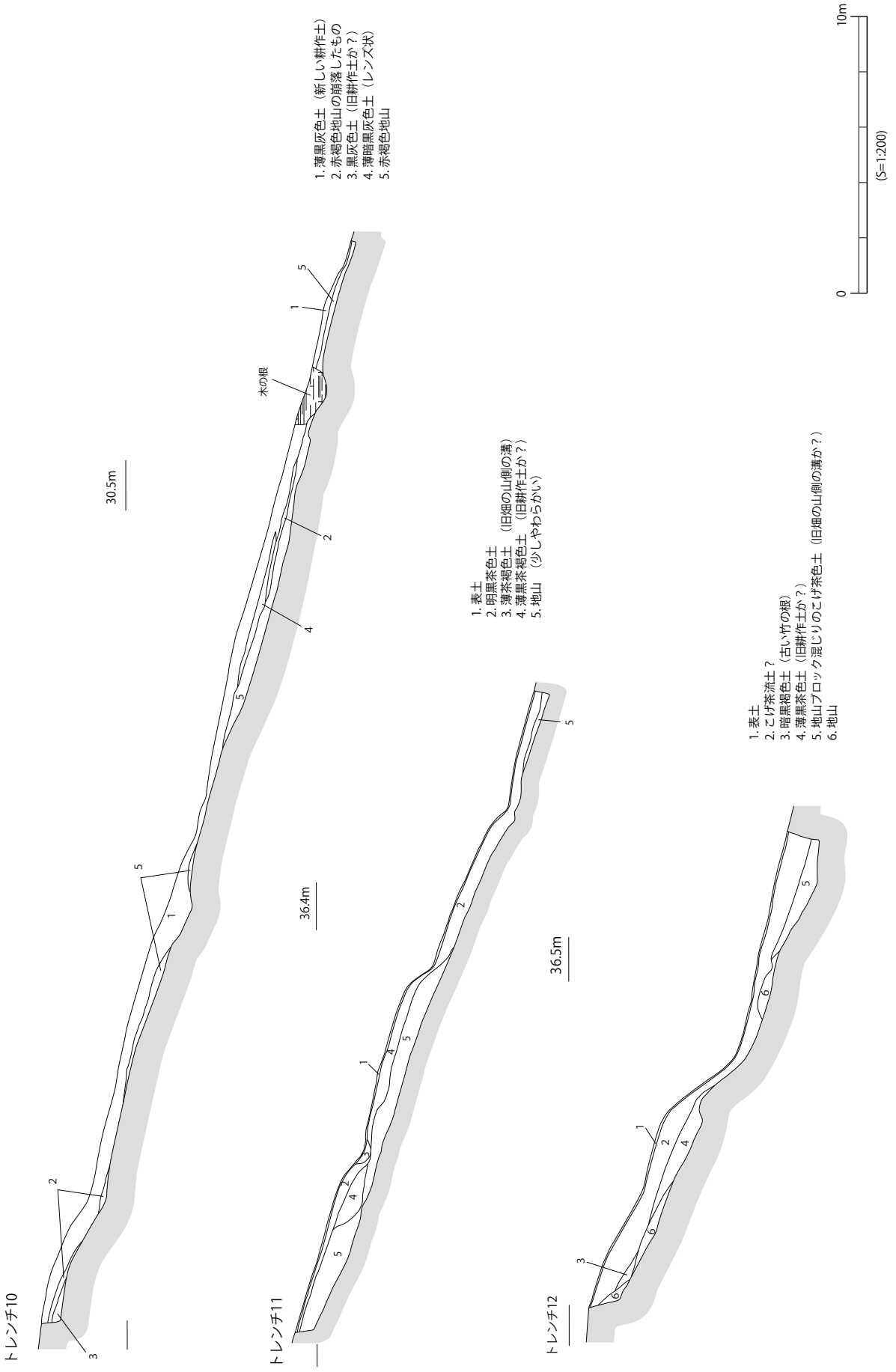
遺跡内に 1 箇所の調査区を設定し発掘調査を行ったが、遺構・遺物は認められなかった（第 126 図）。



第 127 図　番貫Ⅰ遺跡・長池Ⅰ遺跡　出土遺物実測図（S＝1/3）



第 128 図　長池Ⅰ遺跡・長池Ⅱ遺跡　トレンチ土層図 (1)（S＝1/200）



第 129 図　長池Ⅰ遺跡・長池Ⅱ遺跡　トレンチ土層図 (2)（S＝1/200）

第 17 節　長池Ⅰ遺跡

遺跡内に 9 箇所の調査区を設定して発掘調査を行った（第 128・129 図）。このうち 2 区で黒曜石製石鏃 1 点が、地山直上で出土した（第 127 図 22）。それ以外には、遺構・遺物は検出できなかった。

第 18 節　長池Ⅱ遺跡

遺跡内に 3 箇所の調査区を設定して発掘調査を行ったが、いずれも遺構・遺物は認められなかった（第 128・129 図）。

第 4 章　まとめ

第 1 節　米坂古墳群の中世墓について

米坂古墳群の発掘調査中に集石 1 としている中世墓を検出した。この墓は造営当初、基壇で区画された墓地であったが、後世に行われた削平によって基壇は本来の姿をとどめておらず、また自然崩壊等によって、基壇の基底部の礫とその上部に積まれている一部の礫を残した状況で発見された。調査前にいくつかの石塔や石材が点在していたことはわかっていたが、繁茂している樹木や表土に覆われ、伐採が終了するまで、この中世墓の存在には全く気づかなかった。

このような中世墓であったが、調査の結果、平面形が方形、あるいは長方形で、礫によって区画された基壇を築いている墓であり、3 つの蔵骨器や多数の石塔、そして 3 万点以上の経石が出土する等、規模や内容が充実した中世墓であることが判明した。

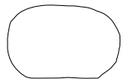
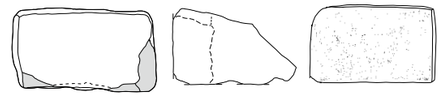
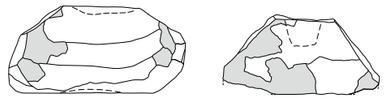
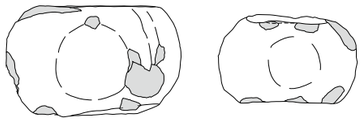
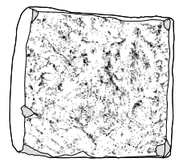
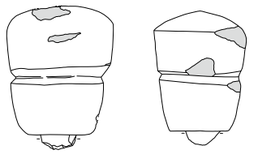
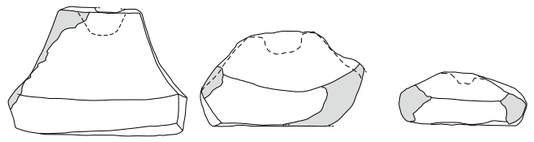
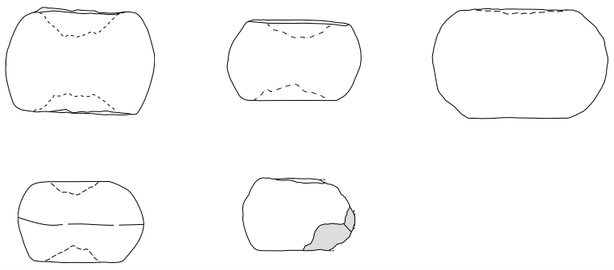
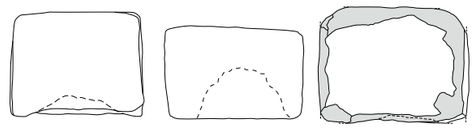
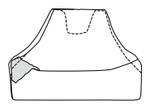
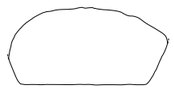
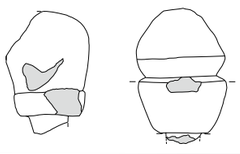
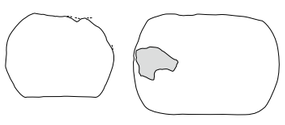
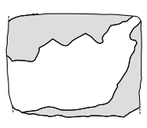
（出土遺物）

出土した蔵骨器は 2 点が備前の壺（第 75 図 2 と 3）で、1 点が古瀬戸の不遊環付仏花瓶（第 75 図 1）である。備前の壺は 15 世紀中頃、古瀬戸の仏花瓶は 13 世紀末～ 14 世紀初頭と考えられ、両者でかなり製作時期に差があるため、古瀬戸の仏花瓶は伝世した品を利用していると考えられる。古瀬戸の仏花瓶は威信財であり特注品と考えられる。また本来は寺院で供花のために使用されているものであり、集落等で出土しないものである。不遊環付仏花瓶という特殊な器種であることから、ある程度の規模の寺院に置かれていた遺物であると考えられる。

（造営手順）

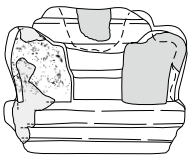
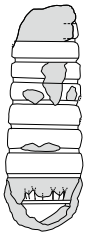
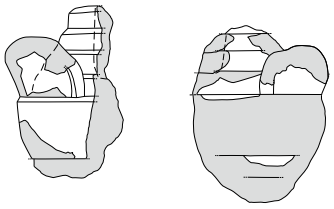
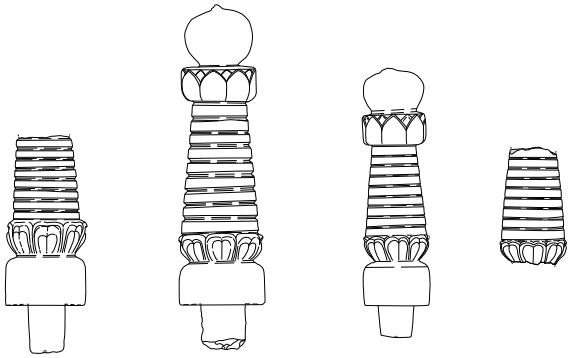
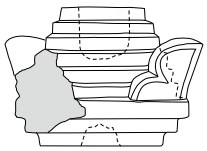
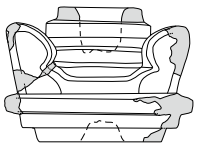
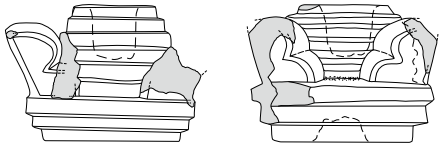
中世墓の造営手順は、出土した 3 つの蔵骨器の中で、最初に埋葬されたのは第 75 図 2 の備前の壺で、墓の造営時に計画的に埋納されたと考えられる。それは、備前焼の壺を納めた石槨状の施設と基壇を構成する礫の底面が旧表土層と考えられる黒褐色土層上面から積み上げられており、その石槨状の施設を覆うように盛土が上面に施され、その上に経石を敷き詰めていることから、一度墓は完成しているものと考えられる。その後、古瀬戸の仏花瓶と備前の壺（第 75 図 3）を、蔵骨器の埋納範囲のみ基壇の礫を取り除き、経石と盛土を掘りこんで追葬したものと考えられる。しかし、初葬と考えられる備前の壺（第 75 図 2）と追葬と考えられる壺（第 75 図 3）は、ほぼ同じ時期の遺物と考えられるため、追葬も間を置かず行われたと考えられる。

中世墓の基壇を構成する礫には石塔の部材が全く利用されていない。このことから、中世墓で出土している石塔、特に宝篋印塔は追葬後に宝篋印塔が建てられたと考えられる。集石 3 で出土

	空風輪	火輪	水輪	地輪
石英安山岩質凝灰岩（白来待石）				
安山岩A（大海崎石：和久羅）				
凝灰質砂岩（来待石）				
角閃石安山岩（大山系角閃石安山岩）				
安山岩B				
安山岩C				
凝灰岩A（荒島石）				
凝灰岩B（火山礫凝灰岩）				

第 130 図　米坂古墳群　出土石塔分類図 (1)

※（　）内は通称名あるいは分類上の名称である。

	相輪	笠
凝灰質砂岩（来待石）		
石英安山岩質凝灰岩（大海崎石：白来待石）		
安山岩質凝灰岩A（日引石）		
安山岩質凝灰岩B		
安山岩質凝灰岩C		

※（　）内は通称名あるいは分類上の名称である。

第 131 図　米坂古墳群　出土石塔分類図 (2)

した石塔の数の多さと製造年代の幅が広くないことから考えると、全てが同時期に中世墓に建てられていたとは考えにくく、斜面で検出された集石 7 のよう、斜面や平坦面を利用して中世墓の周辺に石塔が建ち並んでいたと考えたい。

中世墓の造営時期は、中心主体部となる備前の壺（第 75 図 2）の年代から 15 世紀中頃以降であると考えられる。また、中心主体部の壺と同時期の壺を追葬していることから、中世墓の造営は 16 世紀までには行われたものと考えている。

米坂古墳群で確認された中世墓は方形あるいは、長方形の基壇になると考えられる。長方形基壇の中世墓は県内でも見られるが、今回の発掘調査では、中心主体となる蔵骨器の位置から考えて、方形基壇になるのではないかと考えている。方形基壇であった場合、類似する事例は、益田市久々茂町の上久々茂土居跡の土井殿の墓と呼ばれている中世墓があげられる。2 段の積石基壇で、五輪塔が上段に設置されている。14 世紀から 16 世紀の五輪塔とされている。県外では、香川県豊浜町の大木塚遺跡では方形の基壇状石積みが確認されている。13 世紀後半～ 14 世紀とみられおり、基壇の一辺がおよそ 5m である。長崎県若松町の曲古墓群では 3 重に区画されていると考えられる基壇墓が確認されている。一辺が 8m 弱で若干大型である。15 世紀のものと考えられている。大木塚遺跡と曲古墓群の中世墓には玉砂利が出土している。

米坂古墳群の中世墓は 2 重あるいは 3 重に区画され、経石が敷きつめられていた。以上に挙げた類例は非常に形態が似ていると考えられる。方形区画の基壇墓は少ないながらも中世に造営された墓の一形態であるとわかる。

（経石）

経石は最初に納められた壺（第 75 図 2）の中にも多数は入っていた。この壺は石槨状の礫に上面を覆われているため、経石は壺を埋納した段階ですでに壺の中に入っていたことになる。したがって、経石は最初に中世墓を造営した段階で墓に敷しくことを想定していたことになる。

経石は 3 万 6 千点以上出土し、全て赤外線カメラで墨書の有無を確認した。そのうち文字あるいは何らかの墨書の痕跡が認められた礫が 850 点で、その他には墨書は確認されていない。しかし、墨書されていない礫と墨書されている礫の分布範囲や大きさ、石材等には大きな差がないことから、墨書されていない礫も経石であると判断している。墨書が確認できなかった礫の中には墨書が摩擦等で、消滅した礫も存在すると考えられる。

（被葬者）

中世墓の基壇は方形の可能性が高いと考えられ、かつ、蔵骨器に古瀬戸の不遊環付仏花瓶という特殊な器種を転用していることからも、ある程度の身分や権力を持つ被葬者であったと想像できる。特に不遊環付仏花瓶は威信財で、寺院に二個一対で置かれた供花用の瓶であり、これを蔵骨器として使用していたことを考えると、寺院に関係する僧侶や寺院の建立者、寺院の庇護者が考えられるのでは無かろうか。建立者や庇護者はある程度の権力や財力を持ち合わせていると思われる。

また、中世墓が西谷地区と和久羅山を望む丘陵斜面に造営されていることは、被葬者の社会的基盤とする地域を示しているのではないか。この西谷地区には近世に大きな寺院が建立されていた記録はないが、仏花瓶を利用するほどの寺院が中世段階にあったのかもしれない。

以上のことから、中世墓の被葬者は、僧侶か寺院の庇護者ではないかと考えられるが、今回は

5区3～4層	輸入	磁器	白磁	椀	Ⅱ類 -1	4	(11g)
					-4	2	(40g)
					Ⅲ類	1	(7g)
					Ⅳ類 -1a	8	(309g)
						17	(307g)
					Ⅴ類 -2b	3	(35g)
						4	(34g)
					Ⅵ類 -1b	5	(104g)
					不明	68	(379g)
				皿	Ⅶ類	2	(6g)
					Ⅷ類	4	(20g)
			青白磁	合子		2	(7g)
			同安窯系青磁	椀	Ⅰ類 -1	13	(60g)
					Ⅲ類 -1	1	(62g)
				皿	Ⅰ類 -2b	1	(33g)
					Ⅲ類 -1	1	(3g)
			龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ類	1	(5g)
					不明	4	(18g)
		陶器	褐釉陶器	壺		34	(576g)
	国産	陶器	瀬戸	壺		11	(540g)
		須恵器	在地系	壺		20	(1542g)
			勝間田系	甕		87	(11153g)
				壺		33	(2424g)
				捏鉢		7	(1470g)
			亀山系	壺・甕		10	(248g)
			瓷器系	捏鉢		1	(49g)
			不明	壺・甕		11	(548g)
		土器	土師器	椀・皿		984	(6527g)
				高台付椀		1	(19g)
				柱状高台付	皿	1	(53g)
						17	(603g)
				不明		17	(68g)
			土製品	土錘		6	(114g)

5区1～2層	輸入	磁器	白磁	椀	Ⅳ類	1	(4g)
					Ⅴ類	1	(2g)
					不明	3	(8g)
			同安窯系青磁	椀	Ⅰ類 -1	1	(2g)
			龍泉窯系青磁	椀	不明	3	(31g)
		陶器	中国	天目形碗		1	(9g)
				茶入		1	(4g)
	国産	陶器	瀬戸	卸皿		1	(17g)
		炻器	備前	擂鉢		1	(75g)

3区	輸入	磁器	白磁	椀	Ⅳ類	3	(50g)
					不明	2	(18g)
	国産	陶器	瀬戸	瓶ヵ		3	(19g)
		須恵器	勝間田系	甕		1	(45g)
		土器	土師器	椀		6	(25g)
				不明		4	(68g)
			土製品	土錘		1	(2g)

表 2　山辺遺跡出土中世遺物集計表

地元の領主層の可能性が高いと考えている。

第２節　米坂古墳群で出土した石塔について

第 130 図と第 131 図は米坂古墳群の 1 区で出土した宝篋印塔と五輪塔を石材毎に分類したものである。本遺跡で出土した石塔は、使用石材が多岐にわたっているのが第一の特徴である。

そのため、使用した石材数が多く、岩石学上の名称で本来なら記述するところではあるが、非常に煩雑であり、通称名あるいは、石材を分類する中で付けた名称を元にここからは記述していく。

宝篋印塔は①来待石②白来待石（大海崎石）③日引石・安山岩質凝灰岩 B・安山岩質凝灰岩 C に大別できる。①と②は相輪の加工が粗雑であるが、②の方が九輪の抉りが深く、突帯の幅が広い。笠は①と②の石材が軟質なため稜が丸くなっており、本来の形状はもう少し稜が張り出していたと考えられる。③は石質が非常によく似ている石材であるが、C は石基となる安山岩の粒が大きい点が特徴である。③の石材の相輪は 2 種類あり、大型のものと小型のものに分けられる。大型品は九輪の抉りが台形で、深く掘り込まれている。小型品の九輪は抉りの断面が三角形状で、溝ではなく線状になっている。C の相輪は請花の凹凸が少ないが、九輪の抉りが深い。C の笠は底面にほぞ穴がないものと上部段形が階段状にならないものが存在する。A の笠にはほぞ穴が開き、上部段形も階段状になるものが一般的である。B の隅飾突起は段形の 1 段目から造られている。③の様相の違いは、産地や工人の差であると考えられる。

五輪塔の一覧表は第 131 図である。大きく分けると、①白来待石・和久羅（大海崎石）②大山系角閃石安山岩・安山岩 B ・安山岩 C、③来待石、④荒島石・火山礫凝灰岩となる。

①は空風輪の加工場所や方法が同じである。火輪の重厚さや形状の粗雑さ、表面に加工痕を残している点も同様である。特に和久羅は水輪と地輪にも工具痕がはっきりと残っており石材特有の加工方法だと思われる。②は大山系角閃石安山岩の空風輪は形状に多様性がみられる。火輪も高さや幅が異なっており、年代差が存在すると考えられる。安山岩 B・安山岩 C は大山系角閃石安山岩と非常に似ている石材であり、同じ石材産地でないにしても近隣産地の石材の可能性が高い。

④の荒島石は五輪塔の火輪のみで、上部が剥落しており、下部しか残っていない。この石材特有の黒曜石に似た斑晶状の礫が含まれている。管見に触れる限り、荒島石で作られた石塔は確認されていないようである。今後の石塔研究によって類例が増加することに期待したい。

今回出土した石塔の年代は、日引石の宝篋印塔がおよそ 15 世紀中頃になると考えられる。来待石の宝篋印塔は 16 世紀頃であろうか。五輪塔は 16 世紀のものが多いと思われる。

したがって、石塔、特に五輪塔は中世墓の造営後に中世墓周辺に建立されたものと考えられる。

第３節　鋳造炉について

（Ⅲ区 SK01）

山辺遺跡ではⅢ区とⅤ区で鋳造関連遺物が多数出土している。Ⅲ区では SK01 の埋土から数多くの鋳造炉の炉壁が出土しており、他にも鋳造滓や椀形鍛冶滓、鍛冶滓が出土している。SK01 の底面に凹みが何カ所か見られ平坦でないこと、壁面や底面が熱を受けていないこと、鋳造炉を固定する礫などが出土してないことから、SK01 は鋳造を行う際に炉の下部を埋設し安定させるための、「鋳造土坑」ではなく、粘土を採掘するためや、炉壁などを廃棄するために掘られた土坑であったと考えられる。

SK01 で出土した遺物の中に鋳造や鍛冶に関連した遺物しか出土していないこと、遺構の底面か

ら上面まで炉壁や鉄滓が出土していていることから、SK01 は鋳造や鍛冶を行っていた同時期に、埋められたものと考えられる。

（鋳造炉）

鋳造関連遺物のうち、最も多く出土しているのは鋳造炉の炉壁で、調査の結果、組み合わせ式の溶解炉（こしき炉）の可能性が高いと考えられる。こしき炉は筒型の炉壁を積み上げて炉とするもので、倉吉市の民俗例では三層構造のこしき炉が知られている（注 1）。発掘調査で確認された炉の構造は、京都大学構内遺跡の三槽構造の炉（注 2）や大阪市苅田 4 丁目所在遺跡で出土した炉がこしき炉と考えられている（注 3）。山辺遺跡で出土した炉壁には口縁部と見られる破片が多数出土しており、炉壁内面に付着している不純物が炉底部や炉下段並に溶解している。このことから、山辺遺跡で出土した鋳造炉は、筒状の炉壁を重ね合わせた構造を持つ、こしき炉の可能性が高いと考えられる。

また、こしき炉は上段や中段、最下段を粘土でつなぎ合わせているが、本遺跡で出土した環状土製品は、上段と中段、中段と最下段を固定するために積み上げられた粘土紐ではないかと考えている。本遺跡例のように粘土紐状に細い環状土製品が出土している例はなく、類例の増加を待ちたい。

（山辺遺跡の性格）

今回の調査で出土したのは鋳造炉の炉壁や羽口、鋳造滓、椀形鍛冶滓、鍛冶滓である。また検出された遺構は炉壁が廃棄されていた SK01 のみで、Ⅲ区では焼土面である SK06 が検出されているが、鋳造に関係した焼土面であるか明らかでなく、時期も不明である。

以上のことから、今回の調査区周辺に鋳造や鍛冶の工房が存在し、Ⅲ区 SK01 やⅤ区に炉壁や鉄滓が廃棄されたと考えられる。また山辺遺跡の地形は大きく削平されていることが土層の観察から明らかであり、調査区内で鋳造などが行われていた場合、遺構が残っていなかった可能性もある。

鋳造の工房には、金属を溶解させる炉を設置する場所と、溶けた金属を鋳型に流し込む場所が近接して存在していると考えられる。また鋳造製品を鍛冶によって成形することもありえるであろう。

今回の発掘調査で確認できなかった鋳造や鍛冶の工房は、調査範囲外に遺構が残っている可能性もあり、山辺遺跡は今後も注目すべき遺跡であるといえる。

最後に山辺遺跡の鋳造関連遺物の年代であるが、Ⅲ～Ⅴ区で出土している遺物は大きく古墳時代と中世の 2 時期に分けられるが、古墳時代の遺物は少ない。中世の遺物はほとんどが陶磁器で、表 2 に集計している。表 2 のうち、青磁や白磁の年代は 12 世紀から 13 世紀前半と考えられ、中世須恵器の勝間田焼の遺物は 12 世紀後半頃、中世土師器は 12 世紀後半頃とみられることから、ある程度遺物の年代がまとまっていることがわかる。鋳造関連遺物がこれらの陶磁器と同時期のものか不明であるが、鋳造が行われていた年代を考える上で一つの材料にはなると考えている。

県内で鋳造炉の炉壁が出土した調査事例は、斐川町尾田瀬Ⅱ遺跡と益田市沖手遺跡の 2 遺跡である。島根県は製鉄遺跡の数は膨大であるが、鋳造関連、特に溶解炉の炉壁の調査事例は少ない。今回の山辺遺跡の調査から、鋳造関連の遺構や遺物の研究が進むことを期待している。

参考文献

・島根県古代文化センター 2000『出雲国風土記の調査研究Ⅱ島根郡朝酌郷調査報告書』
・松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2009『石台Ⅱ遺跡』（都）東津田中央線事業に伴う発掘調査報告書
・島根県教育委員会 2007『南外 2 号墳・勝負遺跡』国道 485 号線改築事業（松江第五大橋）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
・松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 1999『西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
・島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター 2004『松江市東部における古墳の調査 ― 廟所古墳・観音山古墳群・廻田古墳群 ―(附上竹矢 7 号墳・迎接寺裏山 1 号墳) 』
・藤永照隆 1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第 14 集
・庚申懇話会 1999 日本石仏事典
・立正大学考古学会 1994『考古学論究』第 3 号
・財団法人かながわ考古学財団 2007『宅間谷東やぐら群』平成 15・16・17 年度鎌倉市内急傾斜地（浄明寺宅間 C 地区）崩壊対策工事に伴う発掘調査
・島根県教育委員会 2000『社日古墳』一般国道 9 号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12
・島根県教育委員会 2006『県道浜乃木湯町線（湯町工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
・島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2003『宮山古墳群の研究』
・五十川伸矢 2005『新領域創生研究部門 A01-2 日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に・関する研究中間報告』
・財団法人大阪市文化財協会 2008『大阪市住吉区苅田 4 丁目所在遺跡発掘調査報告Ⅱ』大阪府営北第 3 期住宅建設工事に伴う発掘調査報告書
・財団法人大阪市文化財協会 2004『大阪市住吉区苅田 4 丁目所在遺跡発掘調査報告』大阪府営北住宅建設工事に伴う発掘調査報告書
・京都橘大学現代ビジネス学部　五十川伸矢 2010『京都の古鐘めぐり』― 京都の歴史と文化 ―
・今岡利江 2001「山陰の日引石製品についての一考察」『来待石を中心とした日本海文化』 石造物研究会・第 2 回研究会資料
・間野大丞 2001「来待石製五輪塔・宝篋印塔について」『来待石を中心とした日本海文化』 石造物研究会・第 2 回研究会資料
・樋口英行 2004 宍道町ふるさと文庫 19『白粉石・来待石の宝篋印塔、五輪塔』
・池上悟 2007『石造供養塔論攷』
・安来市教育委員会 1998 県道安来布部線改良工事に伴う『清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』
・島根県教育委員会 1990『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅶ』― 茶臼山城跡・市場遺跡・内堀石塔群 ―
・島根県教育委員会 2009『三大寺遺跡』島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2
・島根県八雲村教育委員会 2002『谷の奥遺跡』一般国道 432 号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ
・財団法人かながわ考古学財団 2008『円覚寺旧境内遺跡』平成 18 年度鎌倉市内急傾斜地（山ノ内端鹿地区）崩壊対策工事に伴う調査
・財団法人かながわ考古学財団 2008『上行寺裏遺跡（六浦二丁目 5 番地やぐら群)』平成 18・19 年度六浦二丁目南地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査
・島根県八雲村教育委員会 2005 復旧治山事業（秋家）予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書『寺谷五輪塔群』
・来待ストーンミュージアム 1998『来待ストーン研究』1
・島根県宍道町教育委員会 1996『宍道町歴史叢書』1
・来待ストーンミュージアム 2008『来待ストーン研究』9
・愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史』別編窯業 2 中世・近世　瀬戸系
・中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成』－中部・東海編
・中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成』－中国・四国編
・中世墓資料集成研究会 2006『中世墓資料集成』－北陸編

表 3　米坂古墳群出土経石一覧表

番号	文字	番号	文字	番号	文字	番号	文字	番号	文字	番号	文字	番号	文字	番号	文字	番号	文字	番号	文字
1	?	92	阿	183	古 or 右	274	?	365	愉	456	?	547	佛	638	菩	729	法	820	殊
2	行	93	三	184	散	275	上	366	潤	457	王	548	三	639	?	730	?	821	佛
3	會?	94	王	185	?	276	?	367	當	458	聞	549	?	640	利	731	以	822	意
4	?	95	菩	186	方	277	不	368	中	459	由	550	坐	641	?	732	?	823	億
5	念?	96	浄	187	應	278	餘	369	?	460	菩	551	?	642	思	733	?	824	六
6	万?	97	見	188	?	279	界	370	兮	461	?	552	?	643	?	734	?	825	余
7	?	98	?	189	?	280	?	371	令	462	加	553	?	644	放	735	菩	826	有
8	?	99	?	190	以	281	于	372	花	463	日	554	該	645	并	736	?	827	孝
9	養	100	?	191	諸	282	諸	373	?	464	?	555	?	646	?	737	巳	828	色
10	厳	101	循	192	丁	283	為	374	?	465	?	556	?	647	?	738	上	829	法
11	密	102	于	193	余	284	?	375	?	466	眉	557	?	648	?	739	?	830	?
12	?	103	?	194	講	285	?	376	?	467	諸	558	?	649	?	740	三	831	光
13	参?	104	参?	195	佛	286	而	377	?	468	是	559	不	650	?	741	而	832	薩
14	?	105	得?	196	我	287	佛	378	舎	469	護	560	?	651	月	742	佛	833	辱
15	成?	106	旨?	197	言	288	屯	379	利	470	?	561	?	652	?	743	?	834	意
16	?	107	下	198	提	289	目	380	業	471	得	562	此	653	?	744	?	835	人
17	應	108	塞	199	?	290	?	381	交	472	?	563	不	654	?	745	?	836	?
18	光	109	因	200	?	291	?	382	来	473	厚	564	之 / 之	655	現	746	有	837	羅
19	粋	110	水	201	生	292	蔬	383	倖	474	生	565	是	656	家	747	色	838	随
20	光	111	曽	202	?	293	?	384	除	475	?	566	量	657	?	748	?	839	菩
21	為	112	和	203	并	294	息	385	房	476	得	567	淫	658	楼	749	?	840	瑞
22	?	113	?	204	作	295	?	386	必	477	?	568	歎	659	?	750	房?	841	諸
23	法	114	?	205	大	296	?	387	?	478	?	569	?	660	?	751	神	842	?
24	刹?	115	?	206	部	297	偲	388	佛	479	?	570	?	661	多	752	其	843	子
25	?	116	正?	207	滅	298	及	389	光	480	作	571	?	662	?	753	衾	844	?
26	?	117	未	208	?	299	車	390	斤	481	者	572	得	663	?	754	干	845	皆
27	?	118	有	209	精	300	?	391	有	482	?	573	之	664	王	755	意	846	元
28	不	119	?	210	構	301	佛	392	光	483	中	574	?	665	法	756	佛	847	?
29	?	120	羅	211	?	302	薩	393	?	484	花	575	菩	666	?	757	三	848	薩
30	師	121	設	212	?	303	?	394	轉	485	目	576	如	667	目	758	積	849	是
31	傳?	122	耗	213	衣	304	倶	395	放	486	?	577	佛	668	?	759	叉	850	何
32	是	123	念	214	小	305	受	396	飾	487	百	578	方	669	剃	760	應	851	検
33	?	124	六	215	薩	306	間	397	舎	488	?	579	?	670	?	761	?	852	一
34	?	125	三	216	見	307	?	398	?	489	有	580	?	671	?	762	而		
35	天?	126	?	217	清	308	?	399	有	490	阿	581	其	672	護	763	心		
36	?	127	子	218	?	309	?	400	百	491	現	582	見	673	比	764	?		
37	沙	128	?	219	佛	310	浄	401	眷	492	闡	583	不	674	利	765	?		
38	力	129	見	220	珂	311	心	402	開	493	者	584	悉	675	?	766	見		
39	?	130	佛	221	目	312	?	403	恵	494	无	585	勒	676	下	767	何		
40	?	131	供	222	餘	313	園	404	薩	495	少	586	涌	677	五	768	求		
41	?	132	當	223	?	314	?	405	専	496	不	587	?	678	戯	769	?		
42	一	133	道	224	介	315	能	406	?	497	課	588	循	679	夭	770	?		
43	万?	134	樹	225	?	316	略	407	佛	498	方	589	界	680	?	771	?		
44	?	135	子	226	是	317	?	408	慧	499	?	590	設?	681	克	772	法		
45	?	136	教	227	雨	318	等	409	?	500	七	591	?	682	止	773	?		
46	?	137	佛	228	?	319	去	410	満	501	読? 誌?	592	羅	683	華	774	?		
47	掠?	138	佛	229	?	320	鼻	411	著	502	?	593	摩	684	等	775	?		
48	生	139	大	230	房	321	名 or 各	412	王	503	不	594	皆	685	八	776	?		
49	飾	140	三	231	今	322	持	413	戝	504	?	595	万	686	佛	777	其		
50	亘	141	?	232	火	323	大	414	文	505	?	596	?	687	希	778	?		
51	値	142	?	233	寶	324	生	415	検	506	?	597	施	688	?	779	動		
52	兮	143	?	234	三	325	?	416	?	507	設	598	?	689	?	780	由		
53	痕	144	鼻	235	?	326	尊	417	有	508	?	599	讃	690	當	781	佛		
54	?	145	無	236	佛	327	諸	418	明	509	三	600	十	691	眉	782	?		
55	光	146	?	237	漏	328	思	419	如	510	佛	601	?	692	人	783	其		
56	設	147	令	238	?	329	万	420	精	511	?	602	?	693	小	784	?		
57	薩	148	文	239	?	330	則	421	絡	512	心	603	荘	694	涵	785	?		
58	戦	149	法	240	?	331	?	422	倖	513	?	604	所	695	見	786	?		
59	設	150	所	241	?	332	?	423	?	514	厭	605	等	696	利	787	?		
60	?	151	阿	242	歓	333	而	424	衆	515	衆	606	領	697	心	788	衆		
61	天	152	此	243	?	334	意	425	佛	516	?	607	滅	698	稚	789	?		
62	十	153	一	244	?	335	?	426	智	517	寺	608	?	699	菩	790	?		
63	?	154	満?	245	?	336	法	427	無	518	?	609	諸	700	菩	791	仲		
64	?	155	達	246	佛	337	?	428	諸	519	?	610	誰	701	積	792	秀		
65	衆	156	典	247	佛	338	?	429	寺	520	?	611	放	702	諸	793	金		
66	弥	157	目	248	隠	339	衣	430	天	521	六	612	?	703	?	794	王		
67	聖	158	日	249	導	340	?	431	?	522	?	613	?	704	子	795	?		
68	厳	159	妙	250	圓	341	見	432	?	523	兮	614	?	705	得	796	者		
69	是令	160	諸	251	?	342	大	433	菩	524	?	615	月	706	?	797	悼		
70	?	161	?	252	衆	343	見	434	?	525	右	616	妙	707	?	798	大		
71	念?	162	?	253	?	344	久	435	是	526	?	617	所	708	?	799	光		
72	?	163	施	254	?	345	?	436	?	527	?	618	三	709	?	800	検		
73	?	164	房	255	伽	346	悉	437	?	528	?	619	?	710	見	801	?		
74	摩	165	服	256	有	347	?	438	?	529	?	620	?	711	?	802	800 と同一		
75	大	166	?	257	滅	348	?	439	念	530	涅	621	?	712	?				
76	是	167	者	258	帰	349	?	440	令	531	?	622	?	713	?	804	仰		
77	見	168	及	259	施	350	是	441	恩	532	倒	623	?	714	?	805	現		
78	其	169	然	260	?	351	?	442	王	533	如	624	法	715	?	806	?		
79	先	170	法	261	王	352	?	443	家	534	丁	625	菩	716	読	807	非 or 悲		
80	?	171	月	262	?	353	?	444	決	535	?	626	而	717	佛	808	?		
81	諦	172	及	263	无	354	?	445	民	536	寺	627	?	718	?	809	?		
82	有	173	?	264	設	355	園	446	?	537	?	628	之	719	?	810	?		
83	歓	174	?	265	?	356	捷	447	億	538	?	629	?	720	俊	811	?		
84	佛	175	皆	266	本	357	?	448	宿	539	求	630	万	721	?	812	令		
85	寶	176	?	267	知	358	如	449	于 or 子	540	所	631	者	722	?	813	捷		
86	衆	177	無	268	?	359	?	450	?	541	重	632	最	723	?	814	?		
87	光	178	菩	269	比	360	?	451	慎	542	?	633	万	724	佛	815	?		
88	于	179	?	270	佛	361	?	452	房	543	大	634	?	725	?	816	羅		
89	十	180	無	271	?	362	賽	453	?	544	?	635	随	726	者	817	千		
90	佛	181	?	272	?	363	土	454	?	545	?	636	佛	727	衣	818	聞		
91	又	182	?	273	?	364	立	455	奉	546	十	637	佛	728	?	819	薩		

表4　山辺遺跡鋳造炉関係遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				遺物名	法量（cm）			硬化面の数	端部の有無	炭化物の痕跡	胎土	備考
		地区	遺構	層位	P.No		最大高	最大幅	最大厚					
17図1	巻頭カラー	Ⅲ区	SK01		73 76 215 344 345	炉壁 下部下端	48.1	45.7	6.7	3	有	有	目止めの粘土は直径１㎜以下の砂粒を多く含む。炉壁の粘土は籾殻を多く含み、直径２㎜以下の砂粒を含む	内面に鉄分が点々と付着している。下端に一部目止めの粘土が残る。下部は別の粘土で補修している。外面に竹でついたような穴がある。
18図1	巻頭カラー	Ⅲ区	SK01			炉壁 上部上端	5.1	10.8	4.0	2	有	無	籾殻を含み、直径２㎜以下の砂粒を多く含む	一部に1度操業した跡、貼り付けた粘土がある
18図2	巻頭カラー	Ⅲ区	SK01			炉壁上部	5.5	11.6	5.3	1	無	無	籾殻、直径２㎜以下の砂粒を多く含む	
18図3	巻頭カラー	Ⅴ区		３層		炉壁 上部～中部	10.5	14.0	4.7	1	無	無	籾殻、直径２㎜以下の砂粒を多く含む	
18図4	巻頭カラー	Ⅴ区		３～４層		炉壁 上部～中部	17.5	19.0	5.0	1	無	無	籾殻、スサを多く含み、直径２㎜以下の砂粒を含む	
18図5	巻頭カラー	Ⅲ区	SK01		248	炉壁 部位不明	12.3	11.8	6.7	1	無	無	籾殻、スサを多く含み、直径２㎜以下の砂粒を多く含む	ガラス質の部分がはがれている可能性あり
18図6	巻頭カラー	Ⅲ区	SK01		111 229	炉壁 上部～中部	9.8	24.8	5.0	1	無	無	籾殻を多く含み、直径２㎜以下の砂粒を含む	一部に鉄分付着
18図7	巻頭カラー	Ⅲ区	SK01		224 345 187	炉壁 下部下端	40.3	35.4	10.6	3	有	有	目止めの粘土は直径２㎜以下の砂粒を多く含む。炉壁の粘土は籾殻を多く含み、直径２㎜以下の砂粒を含む	内面に鉄分が点々と付着している。下端に一部目止めの粘土が残る
19図1	20	Ⅴ区		３～４層		炉壁 最下段上端	22.8	29.8	8.0	1	有	無	籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	上部に目止めの粘土が残る
19図2	20	Ⅲ区	SK01		142 348	炉壁 最下段上端	19.9	17.9	4.0	1	有	無	籾殻、直径１㎜以下の砂粒を多く含む	上部に目止めの粘土が残る。全体的に鉄分付着
19図3	20	Ⅲ区	SK01		60	炉壁 最下段上端	14.0	9.8	4.2	1	有	無	目止めの粘土は籾殻を少し含み、直径1㎜以下の砂粒を多く含む。炉壁の粘土は籾殻を多く含み、直径1㎜以下の砂粒を含む	上部に目止めの粘土が残る
19図4	20	Ⅲ区	SK01			炉壁 部位不明	10.3	11.0	3.0	2	有	無	目止めの粘土は籾殻を少し含み、直径１㎜以下の砂粒を多く含む。炉壁の粘土は籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	破片上部に目止めの粘土が残っている。ガラス質が側面にまわりこんでいる。
19図5	20	Ⅲ区	SK01			炉壁下部	8.7	11.0	2.4	1	無	無	籾殻、スサを含み、直径１㎜以下の砂粒を多量に含む	ガラス質が上側の破面にまわりこんでいる
19図6	20	Ⅲ区	SK01		179 347	炉壁最下段	14.2	9.4	3.5	1	無	有	籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	全体的に鉄分付着
19図7	20	Ⅲ区	SK01		266	炉壁下部？ 最下段？	24.9	19.4	5.0	2	無	無	籾殻、直径１㎜以下の砂粒を多く含む。一部直径１～1.5cmの白色粘土の塊を含む	全体的に鉄分付着
19図8	20	Ⅲ区	西側			炉壁最下段	9.1	8.0	3.8	1	無	無	籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	一部に鉄分付着
19図9	20	Ⅲ区	西側			炉壁 最下段底部？	4.5	5.9	2.0	1	無	無	籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	ガラス質の部分のみが残る。表面に細かな気泡が多い
20図1	20	Ⅲ区	SK01		312 313	炉壁上部上端	10.0	17.0	5.3	1	有	無	多量に籾殻、スサを含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	炉壁上部上端と思われる。一部に鉄分付着。植物質の痕跡多い。下面が被熱により硬化している
20図2	20	Ⅲ区	SK01		358	炉壁 上部上端？	10.2	13.9	4.9	2	有	無	籾殻、直径２㎜以下の砂粒を多く含む	炉壁上部上端の可能性あり。一部に鉄分付着。下面が被熱により硬化している
20図3	20	Ⅲ区	SK01			炉壁上部上端	9.0	14.9	5.4	1	有	？	籾殻、スサ、直径１㎜以下の砂粒を含む	炉壁上部上端と思われる。一部に鉄分付着。内面に炭か植物質の痕跡有
20図4	20	Ⅲ区	SK01		359	炉壁上部	8.6	10.9	3.4	1	無	無	籾殻、直径１㎜以下の砂粒を多く含む	一部に鉄分付着
20図5	20	Ⅲ区	SK01		295	炉壁上部	6.2	11.3	2.5	1以上	無	無	籾殻、スサ、直径２㎜以下の砂粒を含む	下半に1度操業した跡、貼り付けた粘土がある
20図6	21	Ⅲ区	SK01		140	ひも状	2.7	11.6	6.1	1	無	無	目止めの粘土は籾殻を少し含み、直径２㎜以下の砂粒を多く含む。炉壁の粘土は籾殻・スサを多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	目止めの粘土と思われる。一部に炉壁の粘土が付着している。内面に一部鉄分が付着している

挿図番号	写真番号	出土地点				遺物名	法量（cm）			硬化面の数	端部の有無	炭化物の痕跡	胎土	備考
		地区	遺構	層位	P.No		最大高	最大幅	最大厚					
20図7	21	Ⅲ区	SK01		335	ひも状	2.5	13.4	2.9	1	無	無	目止めの粘土は籾殻を少し含み、直径１㎜以下の砂粒を多く含む。炉壁の粘土は籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	目止めの粘土と思われる。一部に炉壁の粘土が付着している。
20図8	21	Ⅲ区	SK01			ひも状	4.6	7.5	2.4	1	無	無	目止めの粘土は籾殻、直径１㎜以下の砂粒を多く含む。羽口の粘土は籾殻、直径１㎜以下の砂粒を少し含む	目止めの粘土と思われる。一部に羽口の粘土が付着している。
20図9	21	Ⅲ区	SK01		177 178	ひも状	19.4	10.6	3.0	1	無	無	目止めの粘土は籾殻を少し含み、直径１㎜以下の砂粒を多く含む。炉壁の粘土は籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	目止めの粘土と思われる。一部に炉壁の粘土が付着している。
21図1	21	Ⅲ区	SK01		241 258	羽口	22.0	内径8.1	6.1	1以上	有	有	羽口の粘土は籾殻を多く含み、直径２㎜以下の砂粒を含む。目止めか補修の粘土は籾殻を少し含み、直径２㎜以下の砂粒を含む	羽口に目止めか補修の粘土が張り付いている羽口の先端部分
21図2	21	Ⅲ区	SK01		232	羽口	10.7	内径8.1	4.8	1	有	有	多量に籾殻、スサを含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	羽口の先端部分
21図3	21	Ⅲ区	SK01		9 83	羽口	8.1	内径11.9	3.5	1	有	有	籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	羽口の先端部分
21図4	21	Ⅲ区	SK01		143	羽口	9.9	内径10.6	4.6	1	有	有	籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	羽口の先端部分
21図5	21	Ⅲ区	SK01		117 118	羽口	10.9	内径7.8	4.4	1	無	有	多量に籾殻、スサを含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	炉壁に差し込まれていた部分を含む
21図6	21	Ⅲ区	SK01		141	羽口	6.8	内径7.7	3.6	1	無	無	多量に籾殻、スサを含み、直径１㎜以下の砂粒を含む	炉壁に差し込まれていた部分を含む
21図7	21	Ⅲ区	SK01		236	羽口	14.8	14.6	8.6	1以上	有	有	羽口の粘土は籾殻を多く含み、直径１㎜以下の砂粒を含む。目止めか補修の粘土は籾殻、スサを多く含み、直径２㎜以下の砂粒を多く含む	炉壁との接合面がある。一部羽口の先端部分を含む

表5　山辺遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
22図1	22	Ⅲ区			222	白磁	碗	（16.0）			外：灰白色 2.5Y8/1 内：灰白色 2.5Y8/1	密 直径0.5㎜以下の黒色粒子を微量含む	全面施釉	全面施釉	
22図2	22	Ⅲ区	Pit40			土師質土　器	皿			（4.4）	外：褐灰色 10YR6/1 内：褐灰色 10YR5/1	密 直径1㎜以下の赤色粒子を中量含む	ヨコナデ・回転糸切	ヨコナデ	
22図3	22	Ⅲ区	Pit107	上面		土師器	かわらけ			（5.8）	外：橙色 7.5YR6/6 内：橙色 7.5YR6/6	密 直径１㎜以下の黒色・茶色粒子を微量含む	回転糸切他調整不明	調整不明	
22図4	22	Ⅲ区		1～2層		土師器	かわらけ	（8.0）	1.7	3.2	外：橙色 7.5YR6/4 内：橙色 7.5YR6/4	やや粗 直径1㎜以下の茶色粒子を極微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
22図5	22	Ⅲ区南側拡張区				土製品	土錘	長3.0	径1.0	孔径0.3	明赤褐色 5YR5/8	密 直径１㎜以下の黒色粒子・砂粒を微量含む			
23図1	27	Ⅴ区		3～4層		須恵器	はそう				外：灰色 5Y6/1 内：灰色 5Y6/1	密 直径2㎜以下の白色粒子を微量含む	回転ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	刺突文
23図2	27	Ⅴd区		3層		須恵器	はそう			4.2	外：灰色 5Y6/1 内：灰色 5Y6/1	直径1㎜以下の砂粒を少し含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
23図3	22	Ⅴd区		3層		須恵器	高台付坏			（8.0）	外：灰色 10Y5/1 内：灰色 10Y6/1	直径1㎜以下の砂粒を僅かに含む	回転ナデ・回転糸切	ナデ	
23図4	22	Ⅴ区		3～4層		須恵器	高台付皿			（14.2）	外：暗青灰色 10BG4/1 内：灰色N4/	直径1㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
23図5	22	Ⅴ区		4層		須恵器	高台付坏			（12.7）	外：青灰色 5PB5/1 内：灰色 5Y5/1	密 直径3㎜以下の砂粒を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ・平行ナデ	
23図6	22	Ⅴd区		3層		須恵器	高台付坏			（12.0）	外：青灰色 10BG5/1 内：青灰色 10BG6/1	直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ・ナデ	
23図7	27	Ⅴ区		4層	424 425 426 427	須恵器	壺			8.4	外：灰色N6/ 内：灰色N6/	直径1㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
23図8	27	Ⅴ区		3～4層		須恵器	甕	（22.0）	66.5	14.4？	外：灰黄色～灰色 2.5Y7/2 ～N4/～ 10Y6/1 内：灰色～灰黄色 N6/～ 2.5Y7/2	直径１㎜以下の白色粒子を少量、直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヨコナデ・平行タタキ	当具痕	
24図1	27	Ⅴ区		3～4層		中　世須恵器	壺				外：灰色N6/ 内：灰色N6/	直径4㎜以下の白色粒子、直径2㎜以下の黒色粒子を少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
24図2	27	Va区		4層		中　世須恵器	壺			（11.6）	外：灰色N6/ 内：灰色N6/	直径3㎜以下の白色粒子、直径2㎜以下の黒色粒子を少量含む	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・貼り付けナデ	20と同一個体か
24図3	22	Ⅴ区		4層		褐釉陶	壺				外：灰色～暗灰色 7.5Y6/1～ N3/ 内：灰色 N6/～N5/	直径1㎜以下の黒色・白色粒子を微量含む			
24図4	28	Ⅴ区		3～4層		中　世須恵器	甕			17.4～17.6	外：灰色 5Y5/1 内：灰色 5Y5/1	直径3㎜以下の白色粒子を少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
24図5	27	Ⅴa区 Ⅴd区		4層		中　世須恵器	甕	（18.2）			外：灰色N5/ 内：灰色N5/	直径2㎜以下の白色粒子を少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ	

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
24図6	22	Ｖｄ区		４層		中　世 須恵器	甕	（26.8）			外：褐灰色 10YR6/1 内：褐灰色 10YR6/1	直径2㎜以下の黒色粒子・直径１㎜以下の長石を少量含む	ヨコナデ・ヨコナデ後格子目タタキ	ヨコナデ	
24図7	22	Ｖｄ区		４層		中　世 須恵器	甕				外：灰白色 2.5Y8/1 内：灰白色 2.5Y8/1	直径2㎜以下の長石を微量含む	格子目タタキ	クシ目	
24図8	22	Ｖa区		３～４層		中　世 須恵器	不明				外：灰白色 2.5Y8/1 内：にぶい黄橙色 10YR7/3	直径3㎜以下の長石を少量含む	格子目タタキ		
24図9	28	Ｖ区		３～４層		中世 須恵器	甕	（34.4）			外：灰色N6/ 内：灰色N5/	直径1㎜以下の白色・黒色粒子を少量含む	ヨコナデ・ヨコナデ後平行タタキ後クシ目	ヨコナデ・ヨコナデ後クシ目	外面自然釉
24図10	28	Ｖ区		３～４層		中　世 須恵器	甕				外：灰色N6/ ～N4/ 内：灰色N5/	直径3㎜以下の白色粒子・直径1㎜以下の黒色粒子を少量含む	ヨコナデ後平行タタキ後クシ目	ヨコナデ後オサエ後クシ目	24図9と同一個体
24図11	28	Ｖ区		３～４層		中　世 須恵器	甕				外：灰色N6/ ～N5/ 内：灰色N5/	直径3㎜以下の白色粒子、直径1㎜以下の黒色粒子を少量含む	ヨコナデ後平行タタキ後クシ目	ヨコナデ後オサエ後クシ目	24図9と同一個体
25図1	24	Ｖ区		４層		土師質 土　器	坏	（16.4）		（6.8）	外：浅黄橙色～にぶい橙色 10YR8/3～ 5YR7/3 内：浅黄橙色～にぶい橙色 10YR8/3～ 5YR7/3	直径２㎜以下の黒色粒子を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図2	24	Ｖ区		４層		土師質 土　器	坏	（17.2）			外：にぶい黄橙色 10YR7/2 内：にぶい黄橙色 10YR7/2	密 直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	回転ナデ	回転ナデ	
25図3	24	Ｖ区		３～４層		土師質 土　器	坏	（16.0）	4.9	（7.6）	外：灰白色 2.5Y8/2 内：黄灰色 2.5Y5/1	密 直径3㎜以下の砂粒・茶斑を少量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	内面に一部煤付着
25図4	24	Ｖ区		４層		土師質 土　器	坏	（12.8）	3.2	（5.6）	外：灰白色～橙色 5Y8/2～ 2.5YR6/6 内：灰白色 5Y7/2	直径1㎜以下の黒雲母を極微量含む	ヨコナデ・回転糸切	ヨコナデ	
25図5	24	Ｖ区		４層		土師質 土　器	坏			（6.2）	外：灰黄色 2.5Y7/2 内：灰黄色 2.5Y7/2	直径１㎜以下の長石を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図6	24	Ｖa区		４層底部		土師質 土　器	坏			（7.0）	外：にぶい橙色 7.5Y7/4 内：褐灰色～にぶい黄橙色 10YR5/1	直径１㎜以下の長石を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図7	24	Ｖ区		４層		土師質 土　器	坏			（5.6）	外：灰黄色 2.5Y7/2 内：灰黄色 2.5Y6/1	直径１㎜以下の長石を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図8	24	Ｖ区		３～４層		土師質 土　器	坏			（7.4）	外：黄灰色 2.5Y6/1 内：黄灰色 2.5Y6/1	密 直径1㎜以下の白色粒子を極微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図9	24	Ｖa区		４層		土師質 土　器	坏			7.4	外：褐灰色 7.5YR5/1 内：にぶい褐色 7.5YR6/3	直径3㎜以下の茶斑を少量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図10	24	Ｖ区		４層		土師質 土　器	坏			（6.4）	外：灰白色 5Y7/2 内：灰白色 5Y7/2	直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図11	24	Ｖa区		４層		土師質 土　器	坏			（6.5）	外：にぶい黄橙色 10YR7/2 内：浅黄橙色 10YR8/3	密	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
25図12	24	Va区		4層		土師質土器	坏	(8.2)	1.4	(5.6)	外：にぶい黄橙色 10YR7/2 内：灰白色 10YR7/1	密 直径1㎜以下の砂粒を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図13	24	V区		4層		土師質土器	坏	(7.6)	1.3	(3.6)	外：にぶい黄橙色～にぶい橙色 10YR7/4～5YR6/4 内：にぶい黄橙色 10YR7/3	密 直径1㎜以下の砂粒を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図14	24	Va区		3層		土師質土器	坏	(7.6)	1.7	(3.6)	外：橙色 7.5YR7/6 内：橙色 2.5YR6/6	密 直径2㎜以下の砂粒を微量含む	回転ナデ	回転ナデ	
25図15	24	V区		4層		土師質土器	坏	(8.0)			外：灰黄色 2.5Y7/2 内：灰黄色 2.5Y7/2	密 直径1㎜以下の茶斑を極微量含む	回転ナデ	回転ナデ	
25図16	24	Vd区		3層		土師質土器	高台付碗				外：にぶい黄橙色 10YR7/3 内：褐灰色 10YR5/1	密 直径1㎜以下の茶色粒子を微量含む	調整不明	調整不明	
25図17	27	V区		3～4層		土師質土器	柱状高台			(6.2)	外：灰黄色 2.5Y7/2 内：灰黄色 2.5Y7/2	直径2㎜以下の茶斑を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図18	27	V区		4層		土師質土器	柱状高台			5.6	外：淡黄色 2.5Y8/3 内：灰白色 2.5Y7/1	直径1㎜以下の長石を微量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図19	27	Vd区		4層		土師質土器	柱状高台付皿				外：にぶい黄橙色～褐灰色 10YR7/3～10YR5/1 内：浅黄橙色 7.5YR8/3	密 直径2㎜以下の白色長石を微量含む	ヨコナデ・回転糸切	ヨコナデ	
25図20	27	V区		4層		土師質土器	柱状高台			(5.2)	外：灰白色 2.5Y8/2 内：灰白色～にぶい橙色 2.5Y8/2～5YR7/3	直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
25図21	28	V区			429	土師質土器	柱状高台			5.6	外：にぶい黄橙色 10YR7/3 底面：にぶい黄橙色 5YR7/3	直径1㎜以下の茶斑を少量含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
26図1	23	V区		3～4層		灰釉陶	壺（耳付）				外：灰白色 7.5Y8/1 内：灰白色 7.5Y8/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
26図2	23	V区		4層		灰釉陶	壺（耳付）				外：灰白色 7.5Y8/1 内：灰白色 7.5Y8/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
26図3	23	Va区		1～2層		灰釉陶	卸皿				灰白色 7.5Y7/2	密	回転糸切		
26図4	23	Vd区		4層		灰釉陶	壺				外：灰白色 7.5Y8/1 内：灰白色 7.5Y8/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヨコナデ	ヨコナデ	
26図5	28	V区		3～4層		中世須恵器	捏鉢	(31.4)	12.2～12.9	13.2	外：灰色N5/ 内：灰色N5/	直径2㎜以下の砂粒を少し含む	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	
26図6	23	Vd区		1～2層		炻器	擂鉢				外：褐灰色～にぶい赤褐色 7.5YR5/1～5YR5/4 内：灰色～褐灰色 N5/～5YR5/1	直径2㎜以下の白色粒子を少量含む	ヨコナデ	ヨコナデ	

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
27図1	23	Ｖｄ区		４層		青磁	碗			（4.4）	外：暗オリーブ色 5Y4/3 内：暗オリーブ色 5Y4/3			全面施釉	
27図2	23	Ｖ区		４層		青磁	碗			4.0	外：灰白色 10Y7/1 内：オリーブ灰色 10Y6/2			全面施釉	
27図3	23	Ｖ区		３～４層		青磁	碗				外：オリーブ灰色 5GY6/1 内：灰白色 7.5Y7/2		全面施釉	全面施釉	外面櫛目文 内面花文・点描文
27図4	28	Ｖa区		４層底部		白磁	碗	（13.2）	4.1	4.9	外：灰白色 5Y7/2 内：灰白色 5Y7/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヘラケズリ	全面施釉	見込みに櫛目文
27図5	24	Ｖ区西側拡　張				青磁	皿	（11.2）	2.2	（5.0）	外：オリーブ黄色 7.5YR6/3 内：オリーブ灰色 10Y6/2				印花
27図6	24	Ｖｄ区		3層		青白磁	合子	（5.2）			明緑灰色 10G7/1				陽刻蓮弁文
27図7	24	Ｖ区		３～４層		青白磁	合子				外：青灰色 5BG6/1 内：青灰色 10BGYR6/1		全面施釉	内面釉掻き取り	
27図8	24	Ｖ区		３～４層		白磁	碗	（16.4）			外：灰白色 5Y8/2 内：灰白色 5Y8/2	微細な黒色粒子を含む	全面施釉	全面施釉	
27図9	24	Ｖa区		４層		白磁	皿	（12.6）			外：灰白色 5Y8/2 内：灰白色 5Y8/2			全面施釉	
27図10	24	Ｖｄ区		４層		白磁	皿	（14.0）			外：灰白色 7.5Y7/2 内：灰白色 10Y7/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	全面施釉	全面施釉	
27図11	24	Ｖｄ区		３層		白磁	碗	（15.8）			外：灰白色 5Y7/1 内：灰白色 5Y7/1	直径1㎜以下の黒色斑を微量含む	全面施釉	全面施釉	
27図12	28	Ｖa区		４層		白磁	碗	（15.0）			外：灰白色 5Y7/2 内：灰白色 5Y7/2	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む		全面施釉	
27図13	24	Ｖ区		３～４層		白磁	碗	（16.2）			外：灰白色 10Y8/1 内：灰白色 10Y8/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	全面施釉	全面施釉	ヘラ彫り文様
27図14	24	Ｖｄ区		３層		白磁	碗				外：灰白色 7.5Y8/1 内：灰白色 7.5Y8/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	全面施釉	全面施釉	外面花弁文
27図15	24	Ｖa区		４層		白磁	碗				外：灰白色 7.5Y7/2 内：灰白色 7.5Y7/2			全面施釉	
27図16	24	Ｖｄ区		３層		白磁	碗？			（6.0）	内：灰白色 5Y7/2			全面施釉	
27図17	24	20トレンチ拡張区				白磁	碗			（7.6）	内：灰白色 7.5Y8/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヘラケズリ	全面施釉	
27図18	24	Ｖ区		４層		白磁	碗			（5.0）	内：灰白色 10Y8/1	直径1㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヘラケズリ	全面施釉	
27図19	24	Ｖ区		３～４層		白磁	碗			（5.2）	外：灰白色 2.5Y8/2 内：灰白色 2.5Y8/2			全面施釉	
27図20	24	Ｖa区		３層		白磁	皿	（12.6）			外：灰白色 10Y8/1 内：灰白色 10Y8/1	微細な黒色粒子を含む	全面施釉	全面施釉	

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
27図21	24	V区		4層		白磁	皿			（3.8）	外：灰白色 5Y8/1 内：灰白色 5Y8/2		底部釉掻き取り	全面施釉	
27図22	24	Va区		4層		白磁	皿			（3.4）	内：灰白色 10Y7/1	直径1㎜以下の黒色粒子を極微量含む	一部釉掻き取り	全面施釉	
27図23	23	V区		3～4層		褐釉陶器	壺	（8.8）		（11.0）	内：褐灰色 10YR6/1	直径2㎜以下の黒色粒子を微量含む	ヨコナデ・貼り付け	ヨコナデ	
27図24	23	Vd区		4層		褐釉陶器	壺？			（9.0）	外：青灰色 5B7/1 内：灰白色 7.5Y7/1	密 暗褐色粒子を含む	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	
28図1	29	V区	SX03		423	木製品	椀	16.0	5.9	9.1					内外面とも黒漆塗布文様有（赤漆）「上」の線刻有
28図2	29	V区	SX03		430	木製品	椀			9.0					内外面とも黒漆塗布文様有（赤漆）
28図3	29	V区	SX03		422	木製品	椀	16.1	5.3	9.0					内外面とも黒漆塗布文様有（赤漆）
28図4	30	V区	SX03		421	木製品	椀（破片）	長8.8	幅4.7	厚0.7					内外面とも黒漆塗布
28図5	30	V区		4層		木製品	櫛	長5.5	幅1.7	厚0.9					黒漆塗布
28図6	30	V区		4層	取り上げNo.2	木製品		長10.2	幅3.0	厚0.7					
28図7	30	V区	SX03	4層	取り上げNo.4	木製品		長18.2	幅3.2	厚0.7					
28図8	30	V区		3～4層	取り上げNo.1	木製品		長29.0	幅3.5	厚1.4					
28図9	30	V区	SX03		取り上げNo.15	木製品		長13.8	幅5.5	厚0.3					
28図10	30	V区	SX03		取り上げNo.56	木製品		長22.7	幅6.8	厚0.6					
28図11	30	V区	SX03		取り上げNo.11	木製品		長37.6	幅3.6	厚3.4					
29図1	30	V区	SX03		取り上げNo.60	木製品		長52.4	幅4.1	厚1.9					
29図2	30	V区	SX03	4層	取り上げNo.3	木製品		長34.2	幅5.4	厚1.1					
29図3	30	V区	SX03		取り上げNo.13	木製品		長49.5	幅12.1	厚1.0					
29図4	30	V区	SX03		取り上げNo.25	木製品		長39.4	幅28.4	厚7.0					
30図1	25	19トレンチ		1層 灰黄褐色土		埴輪	円筒				浅黄橙色 7.5YR8/5	密 直径1㎜以下の砂粒・白色粒子を全体に多く含む	ナデ・竹管状工具による沈線	ナデ	
30図2	25	Vd区		3層		埴輪	円筒				外：にぶい黄橙色 10YR7/3 内：灰黄褐色 10YR6/2	粗 直径3㎜以下の白色粒子・長石、直径4㎜以下の黒色粒子を多く含む	ハケ目	指オサエ	
30図3	25	19トレンチ		3層 黒褐色土		埴輪	円筒			（20.0）	浅黄橙色 10YR8/4	密 直径2㎜以下の黒色・白色粒子を非常に多く含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	
30図4	25	Va区	サブトレ			土製品	土錘	長5.9	径3.3	孔径1.0	灰黄色～黄灰色 2.5Y7/2～2.5Y5/1	密 直径1㎜以下の白色粒子、直径2㎜以下の黒色粒子を微量含む			
30図5	25	Va区		3層		土製品	土錘	長5.1	径2.7	孔径1.0	にぶい黄橙色～橙色 10YR7/2～5YR6/6	密 直径1㎜以下の雲母・直径3㎜以下の砂粒を少量含む			
30図6	25	Vd区		4層		土製品	土錘	長2.1	径2.4	孔径0.8	にぶい黄橙色 10YR7/2	密 直径1㎜以下の砂粒を微量含む			
30図7	25	V区			428	土製品	土錘	長3.9	径1.2	孔径0.5	にぶい黄橙色 10YR6/4	密 直径1㎜以下の白色粒子を微量含む			

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
30図8	25	Ⅴ区a			413	土製品	土錘	長4.3	径1.1	孔径0.5	褐灰色～浅黄色 10YR6/1～7.5YR8/6	密 直径1㎜以下の雲母・砂粒を微量含む			
30図9	25	Ⅴd区		4層		土製品	土錘	長3.8	径1.0	孔径0.4	灰黄色～黒褐色 2.5Y7/2～2.5Y3/1	密 直径1㎜以下の黒雲母を微量含む			
30図10	26	Ⅱ区	集石部	4層暗茶褐色土		石製品	石鏃	長2.0	幅1.55	厚4.0					重量1.00g 黒曜石製
30図11	26	13トレンチ		3層暗緑灰色土		石製品	石鏃	長1.8	幅1.55	厚4.0					重量0.5g 黒曜石製
30図12	26	Ⅲ区	下段			石製品	石鏃	長1.9	幅1.2	厚0.5					重量0.69g
30図13	26	Ⅲ区	SD01			石製品	石鏃	長1.8	幅1.5	厚0.5					重量0.80g
30図14	26	20トレンチ拡張区				石製品	石鏃	長2.1	幅1.2	厚0.5					重量1.00g
30図15	26	Ⅳ区	SX01	2層淡茶褐色土		石製品	石核	長7.8	幅3.5	厚2.05					重量53.5g 黒曜石製
30図16	26	Ⅲ区		2層		石製品	勾玉未製品	長3.5	幅2.6	厚2.5					重量21.50g 碧玉製
30図17	26	Ⅴ区		表土層		石製品	勾玉未製品	長2.4	幅2.6	厚1.8					重量17.78g 碧玉製
30図18	26	Ⅲ区		表土層		石製品	勾玉未製品	長4.1	幅2.4	厚1.2					重量14.28g 碧玉製
30図19	26	Ⅴd区		3層		石製品	勾玉未製品	長2.5	幅1.7	厚0.8					重量2.38g 碧玉製
31図1	31	Ⅲ区	SK01		163	鉄滓	鋳造滓	長4.0	幅3.2	厚2.5					重量15.84g メタル度H
31図2	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鋳造滓	長4.8	幅3.0	厚2.5					重量13.44g メタル度H
31図3	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鋳造滓	長3.8	幅3.3	厚2.8					重量18.75g メタル度銹化
31図4	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鋳造滓	長4.6	幅2.1	厚1.4					重量12.75g メタル度H
31図5	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鋳造滓	長4.7	幅6.7	厚4.0					重量70.67g メタル度H
31図6	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	碗形鍛冶滓	長5.2	幅4.3	厚4.5					重量42.30g メタル度銹化
31図7	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	碗形鍛冶滓	長3.9	幅4.6	厚2.1					重量29.40g メタル度M
31図8	31	Ⅲ区	SK01 ベルト内			鉄滓	碗形鍛冶滓	長4.9	幅5.4	厚3.4					重量62.94g メタル度M
31図9	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鍛冶滓	長4.4	幅2.4	厚2.0					重量14.47g メタル度銹化
31図10	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鍛冶滓	長4.9	幅2.3	厚1.7					重量9.58g メタル度銹化
31図11	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鍛冶滓	長3.4	幅2.9	厚2.1					重量16.14g メタル度H
31図12	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	含鉄鉄滓	長4.9	幅2.8	厚2.7					重量26.96g メタル度銹化
31図13	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	含鉄鉄滓	長4.2	幅4.2	厚2.0					重量25.8g メタル度銹化
31図14	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	含鉄鉄滓	長3.5	幅3.0	厚1.5					重量13.32g メタル度H
31図15	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	含鉄鉄滓	長3.9	幅3.7	厚2.5					重量30.24g メタル度H
31図16	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	含鉄鉄滓	長3.8	幅4.3	厚2.7					重量32.29g メタル度H
31図17	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	含鉄鉄滓	長5.0	幅3.9	厚2.3					重量36.52g メタル度H
31図18	31	Ⅲ区	SK01		2	鉄滓	含鉄鉄滓	長3.6	幅3.5	厚2.8					重量44.56g メタル度M
31図19	31	Ⅲ区	SK01	褐色土中		鉄滓	含鉄鉄滓	長6.6	幅5.0	厚4.7					重量127g メタル度L
31図20	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鉄塊系遺物	長4.0	幅3.4	厚1.1					重量16.63g メタル度L
31図21	31	Ⅲ区	SK01			鉄滓	鉄塊系遺物	長3.1	幅2.3	厚0.7					重量2.22g メタル度L
31図22	31	Ⅲ区南側拡張区				鉄滓	碗形鍛冶滓	長4.6	幅6.2	厚2.5					重量65.66g メタル度H
31図23	31	Ⅲ区西側拡張区		2層		鉄滓	碗形鍛冶滓	長5.4	幅3.0	厚2.1					重量33.38g メタル度銹化
31図24	31	Ⅲ区西側拡張区				鉄滓	碗形鍛冶滓	長6.4	幅5.0	厚3.0					重量113g メタル度H
31図25	31	Ⅲ区		2層		鉄滓	碗形鍛冶滓	長7.9	幅7.0	厚3.2					重量143g メタル度H
31図26	31	Ⅲ区	Pit85			鉄滓	鍛冶滓	長3.3	幅2.6	厚1.6					重量10.45g メタル度銹化

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
31図27	31	Ⅲ区西側拡張区		暗褐色土		鉄滓	鍛冶滓	長4.0	幅3.4	厚2.8					重量24.16g メタル度銹化
31図28	31	Ⅲ区	SD01			鉄滓	鍛冶滓	長3.6	幅2.8	厚2.6					重量22.86g メタル度H
31図29	31	Ⅲ区	SK06 ベルト内			鉄滓	含鉄鉄滓	長4.3	幅4.6	厚3.4					重量46.58g メタル度銹化
31図30	31	Ⅲ区	SD01			鉄滓	含鉄鉄滓	長3.6	幅2.9	厚2.5					重量24.29g メタル度H
31図31	31	Ⅲ区	SD01			鉄滓	含鉄鉄滓	長5.3	幅4.7	厚3.2					重量50.75g メタル度H
31図32	31	Ⅲ区	SK08			鉄滓	鉄塊系遺　物	長2.1	幅2.4	厚1.5					重量7.76g メタル度H
31図33	31	Ⅲ区	SD01			鉄滓	鉄塊系遺　物	長2.5	幅2.4	厚1.5					重量10.35g メタル度H
31図34	31	Ⅲ区	SD01			鉄滓	鉄塊系遺　物	長3.3	幅3.0	厚1.8					重量18.38g メタル度H
31図35	31	Ⅲ区西側拡張区		暗褐色土		鉄滓	鉄塊系遺　物	長5.3	幅4.4	厚2.5					重量38.46g メタル度H
31図36	31	Ⅲ区	SD01			鉄滓	鉄塊系遺　物	長2.9	幅2.5	厚2.4					重量18.31g メタル度M
31図37	31	Ⅲ区	SD01			鉄滓	鉄塊系遺　物	長3.6	幅3.4	厚2.1					重量27.45g メタル度M
31図38	31	Ⅲ区		2層		鉄滓	鉄塊系遺　物	長2.3	幅3.2	厚1.6					重量13.78g メタル度L
31図39	31	Ⅲ区南側拡張区		2層		鉄滓	碗　形鍛冶滓	長6.1	幅3.5	厚3.3					重量106g メタル度特L
31図40	31	Ⅴd区		3層		鉄滓	碗　形鍛冶滓	長12.5	幅9.9	厚5.2					重量650g メタル度L
31図41	31	Ⅴd区		3層		鉄滓	碗　形鍛冶滓	長5.2	幅6.9	厚3.7					重量136g メタル度H
31図42	31	Ⅴd区		4層		鉄滓	碗　形鍛冶滓	長6.9	幅5.0	厚2.8					重量135g メタル度H
31図43	31	Ⅴd区		3層		鉄滓	碗　形鍛冶滓	長5.2	幅5.3	厚2.7					重量78.71g メタル度H
31図44	31	Ⅴd区		3層		鉄滓	碗　形鍛冶滓	長3.1	幅4.8	厚1.7					重量24.98g メタル度銹化
31図45	31	Ⅴa区		3層		鉄滓	鍛冶滓	長2.8	幅2.8	厚2.0					重量14.04g メタル度H
31図46	31	Ⅴd区		3層		鉄滓	鍛冶滓	長3.1	幅3.0	厚2.3					重量29.12g メタル度銹化
31図47	31	Ⅴd区		3層		鉄滓	鍛冶滓	長2.1	幅3.2	厚1.1					重量8.62g メタル度銹化
31図48	31	Ⅴa区		3層		鉄滓	含鉄鉄滓	長5.6	幅4.0	厚4.7					重量61.61g メタル度H

表6　鞍切遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
54図1	68	1区	SD02		S1259 1260 1261 1262 1263 1264	須恵器	長頸壺	12.6			灰色 7.5Y5/1	直径3㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	自然釉かかる
54図2	68	1区	SD02		S1289	須恵器	蓋				灰色 7.5Y6/1	直径１㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	
54図3	68	1区	SD02		S1290	須恵器	蓋	14.0			灰色 7.5Y6/1	直径２㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
54図4	68	1区	D2	地山上層		須恵器	はそう	14.6			灰色 10Y5/1	密	回転ナデ	回転ナデ	自然釉かかる
54図5	68	1区	E2	表土		須恵器	はそう				灰色 7.5Y7/1	直径１㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
54図6	68	2区	SK01		1	須恵器	長頸壺		17.8		灰色 7.5Y4/1	直径3㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	自然釉かかる 胴部にヘラ記号有
54図7	68	2区	T3-2	表土		須恵器	高坏				灰色 10Y6/1	直径１㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	２孔のスカシあり
54図8	69	2区	T5-2 -4	盛り土		須恵器	坏			6.2	灰色 7.5Y6/1	直径２㎜以下の砂粒を含む	ナデ 静止糸切り？	回転ナデ	８C以降
54図9	69	2区				陶器	丸形碗	12.6							山水文か陶胎染付け
54図10	69	2区	5T-3			磁器	輪花鉢	18.0							菱文 楼閣山水文
54図11	68	1区	F1			鉄器	鉄鏃	長9.3	幅1.1	厚0.4					磁着有
54図12	68	1区	SD02		S19	鉄器	大刀	長5.6	幅3.6	厚2.0					磁着有
54図13	68	1区	赤道			古銭	無文銭	長1.6	幅1.8	厚0.25					無文銭
54図14	68	1区	赤道			古銭	無文銭	長1.85	幅1.6	厚0.45					無文銭
54図15	68	1区	赤道			古銭	無文銭	長1.5	幅1.85	厚0.2					無文銭。繊維付着
54図16	69	1区	SD02	上層		石器	石鏃	長3.1	幅1.7	厚0.5					黒曜石製 重量1.24g
54図17	69	1区	SK11			石器	楔形石器	長4.4	幅3.9	厚0.85					安山岩製 重量14.53g
54図18	69	2区	5T-3			石器	磨製石斧	長2.9	幅3.2	厚0.8					重量10.37g
54図19	68	2区	4号墳第一主体部石棺外	裏込め土　内		鉄器	大刀	長40.3	幅2.6	厚2.0					
55図1	67	1区	SD02		W383 400 418 445 450 482 1272 1305 1311 1323	埴輪	円筒	31.0			にぶい橙色 7.5YR7/4	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図2	67	1区	SD02		W275	埴輪	朝顔				浅黄橙色 10YR8/4	直径２㎜以下の砂粒を含む	調整不明	調整不明	風化が激しく調整不明
55図3	67	1区	SD02		W182.235 238.242 312.317 358.360 362.361 363.364 365.367 385.386 387.388 389.390 391.392 394.397 405.411 413.414 454.505	埴輪	円筒			19.4	浅黄橙色 7.5YR8/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	調整不明	調整不明	
55図4	60	1区	SD03		639.668 801.630 686.851 675.673 787.698 672.736 683.789 959.790 810.1040 1039	埴輪	円筒	(26.4)			にぶい橙色 7.5YR7/4	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・指圧痕・ナデ	

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
55図5	60	1区	SD03 T2		W1011.538 541.543 544.545 546.747 548.549 551.552 581.657	埴輪	円筒	24.4			橙色 7.5YR7/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図6	60	1区	SD03		W776.774 587.580 594.586 588.768 596.583 642.589 705.838 593.584	埴輪	円筒			15.2	橙色 7.5YR6/6	直径１㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	
55図7	60	1区	SD03			埴輪	円筒				橙色 7.5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目	ナデ	
55図8	60	1区	SD03 Y2	2層	563	埴輪	円筒						ハケ目・ナデ	ナデ	
55図9	60	1区	SD03		W1018 1008 983.981 781	埴輪	円筒	24.4			橙色 7.5YR7/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目	ハケ目	
55図10	61	1区	SD03		W528 1105	埴輪	円筒				にぶい赤褐色 5YR5/4	直径１㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図11	61	1区	SD03		W927 835 836 858	埴輪	円筒				橙色 7.5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図12	61	1区	SD03		W871 739 824 864 953	埴輪	円筒				にぶい黄褐色 10YR5/3	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	若干須恵質
55図13	61	1区	SD03		W751 611 621 627 644 691	埴輪	円筒	29.6			橙色 7.5YR6/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	
55図14	61	1区	T2	2層		埴輪	円筒				橙色 7.5YR6/6	直径１㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	内面焼成良 若干須恵質 口縁ひずみあり
55図15	61	1区	SD03		W807 1061.823 854.955 1144 1141	埴輪	円筒	23.2			明赤褐色 5YR5/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図16	61	1区	SD03 E3赤道		W529 523	埴輪	円筒	25.3			橙色 5YR6/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	内面須恵質
55図17	62	1区	SD03		W525	埴輪	円筒	24.0			にぶい橙色 5YR6/3	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	内面須恵質
55図18	62	1区	SD03		W1047 659.664 850.662 685.722	埴輪	円筒	25.3			明褐色 7 .5YR5/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ 1/3は調整不明	ヘラケズリ ハケ目・ナデ	
55図19	62	1区	SD03		W992	埴輪	円筒	25.7			にぶい赤褐色 5YR5/4	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図20	62	1区	SD03		W720 745.831 718.837	埴輪	円筒				橙色 5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ 半分は調整不明	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	スカシ有
55図21	62	1区	SD03		717.716 700.687 684.670	埴輪	円筒				橙色 7.5YR6/6	直径１㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・指圧痕・ナデ	
55図22	63	1区	SD03		W616 614.626 620	埴輪	円筒				橙色 5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・指圧痕・ナデ	
55図23	63	1区	SD03		W608 622.628	埴輪	円筒				明赤褐色 5YR5/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目･指頭圧痕･ナデ	
55図24	63	1区	SD03		W613 655	埴輪	円筒				橙色 5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図25	63	1区	SD03		W960 772 609	埴輪	円筒				明赤褐色 5YR5/6	直径１㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	タガ上方に円形のスカシあり
55図26	63	1区	SD03		W694 788.805	埴輪	円筒				明赤褐色 5YR5/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
55図27	64	1区	T2	2層		埴輪	円筒				橙色 7.5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	
55図28	64	1区	SD03		W941	埴輪	朝顔				橙色 5YR6/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目	

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
55図29	64	1区	SD03		W629 610.752	埴輪	円筒				橙色 5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目	ハケ目・指圧痕・ナデ	
56図1	64	1区	SD03		W711 710 803 667	埴輪	円筒			（15.2）	明赤褐色 5YR5/4	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	底部の一部にえぐりあり（焼成前）
56図2	64	1区	SD03		635.678 646.648 743.638 728.995 650	埴輪	円筒			（19.0）	明赤褐色 5YR5/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目	ハケ目	底部調整あり
56図3	65	1区	T2.2T SD03		W619 606.725	埴輪	円筒				橙色 5YR6/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
56図4	65	1区	SD03		W575 702	埴輪	朝顔				にぶい褐色 7.5YR6/3	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	若干須恵質。 ゆがみあり
56図5	65	1区	SD03		W844.929 1183.1184 1081.1148 1185.1189	埴輪	朝顔				橙色 5YR6/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ヘラケズリ？ ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	
56図6	65	1区	SD03		W1138 1133 1157 1256	埴輪	朝顔				橙色 5YR6/6	直径4㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目	
56図7	65	1区	SD03		W1243 1238 1239	埴輪	朝顔				橙色 5YR6/8	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	
56図8	66	1区	SD03		W937 1247	埴輪	朝顔				橙色 5YR6/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目か	
56図9	66	1区	SD03		W1202	埴輪	朝顔				橙色 5YR6/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ナデ	
56図10	66	1区	SD03		W1173 1128 1133 1255 1218	埴輪	朝顔				橙色 5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目	ハケ目	円形のスカシ
56図11	66	1区	T2	2層		埴輪	朝顔？				橙色 7.5YR6/6	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目	ハケ目・指頭圧痕	内面須恵質
56図12	66	1区	SD03		W712 715.841 1091 1111	埴輪	朝顔			（18.8）	にぶい褐色 7.5YR5/4	直径２㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ヘラケズリ・ハケ目・ナデ・タタキ	
56図13	67	1区	SD03 埴輪溜り		W69.92 134.135	埴輪	円筒				橙色 5YR6/6	直径4㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	内面須恵質
56図14	67	1区	埴輪溜り		W74.70 63.71.60	埴輪	円筒				明赤褐色 5YR5/6	直径3㎜以下の砂粒を含む	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ・指頭圧痕	
56図15	67	1区	埴輪溜り		W84.80 74.68	埴輪	円筒				明赤褐色 5YR5/6	直径１㎜以下の砂粒を含む	調整不明	ナデ	タガ上方に円形のスカシあり

表7　米坂古墳群出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
75図1	112	1区	集石1			古瀬戸	不遊環付仏花瓶	最大径17.7	残存高18.9		灰オリーブ色～黒褐色5Y 4/2～10YR2/2一部褐色10YR4/4	密	粘土組輪積み成形鉄釉		上部2/3は印花文（巴と蓮弁）下部1/3は画花文（草）
75図2	113	1区	集石1－26			備前	壺	12.5	46.6	20.5	黒褐色7.5YR3/2	密直径5㎜程度の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	灰かぶり
75図3	113	1区	集石1		11.12.22	備前	壺	10.3	36.2	16.7	にぶい褐色～黒褐色10YR3/1～10YR3/1		回転ナデ	回転ナデ・指頭圧痕・ケズリ	
75図4	114	1区	集石1－20			須恵器	長頸瓶	6.8	17.9	7.8	灰色7.5Y6/1	密直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
75図5	114	E4斜面				須恵器	蓋	14.0	3.1	ツマミ径4.6	灰白色2.5Y7/1	密直径1㎜以下の砂粒を微量含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
75図6	115	E4		表土		青磁	坏				暗灰黄色2.5Y5/2				内面陰刻あり
75図7	115	1区	集石3集石4			陶器	皿	13.2	3.4	5.3	橙色5YR7/8		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	内面草文様目跡3点あり被熱か？
75図8	114	1区D5切通斜面				土師器	胞衣壺？蓋	15.1		6.0	橙色7.5YR7/6	密直径1.5㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	一部煤痕あり
75図9	114	1区D6切通斜面				土師器	胞衣壺？身	15.2	7.7	9.8	橙色7.5YR7/6	密直径1.5㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	一部煤痕あり
75図11	114	1区		表土		土製品	羅漢								
85図1	114	2区	2号墳周溝	黒色土		須恵器	壺				灰色7.5Y5/1	密直径3㎜以下の砂粒を含む	格子目タタキ・回転ナデ・ナデ	回転ナデ・当て具痕	
85図2	114	2区E11		表土		陶器	仏花瓶			6.0	オリーブ灰色～黒色2.5GY6/1～2.5GY1.5/0	きわめて緻密	ナデ・ケズリ・回転糸切	回転ナデ	
85図3	115	3区				須恵器	蓋				灰オリーブ色5Y6/2	密直径1㎜以下の長石を含む	回転ヘラケズリ・回転糸切後回転ナデ	回転ナデ	宝珠ツマミ
85図4	113	寺跡	土器溜り1			須恵器	甕	21.0	52.5		青灰色～暗灰色5B6/1～N3/	密直径2㎜以下の砂粒を含む	格子目タタキ・回転ナデ	回転ナデ・当て具痕	灰かぶり
85図5	113	寺跡	土器溜り2			須恵器	甕	8.4			灰色～暗褐色10Y5/1～10YR3/4	密直径2㎜以下の砂粒を含む	格子目タタキ・回転ナデ・ナデ	回転ナデ・当て具痕	灰かぶり
85図6	115				150	須恵器	長頸瓶				灰色N6/	密直径1～2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
85図7	115	寺跡		暗褐色土		須恵器	高台付坏			(9.8)	灰色N5/	密直径1～4㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ？	回転ナデ	
85図8	115	寺跡		暗褐色土		青磁	碗				灰白色2.5Y7/1				
85図9	115	寺跡		暗褐色土		青磁	碗？			5.6	灰白色2.5Y7/1		ヘラケズリ		見込にスタンプ
85図10	115	寺跡		盛土	149	青磁	皿？			6.2	灰黄色2.5Y7/2		ヘラケズリ		蛇の目釉はぎ
85図11	115	寺跡T2				磁器	花器	15.8			灰白色N8/				笠・宝珠・巻物・紐・雲文

表8　米坂古墳群 石製品（石仏・五輪塔・宝篋印塔）　観察表

挿図番号	写真番号	出土地点			種別	部位	全長	最大幅(径)	空輪径	風輪径	枘幅	枘高	上面枘穴幅	上面枘穴深	下面枘穴幅	下面枘穴深	上面掘込深	下面堀込深	石材		備考
		地区	遺構	取上番号			(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	岩石名	通称	
75図10	115	1	集石１	132	地蔵	頭部	8.8	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	
76図1	104	1	集石１	113	五輪塔	空風輪	29.1	—	17.5	15.3	—	—	—	—	—	—	—	—	角閃石安山岩	大山系	枘欠損
76図2	106	1	集石１	130	五輪塔	水輪	14.4	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	76図4は石材・加工痕が似ているので、同一五輪塔の可能性あり
76図3	106	1	集石１	114	五輪塔	水輪	16	24.5	—	—	—	—	—	—	—	—	2.6	3.3	凝灰質砂岩	来待	
76図4	107	1	集石１	128	五輪塔	地輪	15.3	24.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	76図2は石材・加工痕が似ているので、同一五輪塔の可能性あり
76図5	109	1	集石１	26.42	宝篋印塔	相輪	52.5	13	—	—	6.6	6.8	—	—	—	—	—	—	安山岩質凝灰岩	日引	1400年前後　枘底部に刺突痕あり
76図6	109	1	集石１	72	宝篋印塔	相輪	33	12.2	—	—	5.6	7.5	—	—	—	—	—	—	同上	日引	上部欠損
76図7	109	1	集石１	28	宝篋印塔	相輪	41	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	同上	日引	枘底部に刺突痕あり　斜長石含む
76図8	109	1	集石３ 集石１	115 85 174	五輪塔	相輪	28	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火山礫凝灰岩	不明	紫を帯びる（安山岩質）火山礫凝灰岩
76図9	109	1	集石１	73	宝篋印塔	相輪	17.6	10.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩質凝灰岩	日引	
76図10	110	1	集石３ 集石１ 集石山側トレンチ	79 116 131	宝篋印塔	笠	20.6	27.7	—	—	—	—	8	6.7	6.2	3.1	—	—	安山岩	不明	長石が少し大きい 84図5と同一石材
77図1	104	1	集石３	8	五輪塔	空風輪	28.3	—	16.6	17.1	5.8	3.9	—	—	—	—	—	—	角閃石安山岩	大山系	
77図2	104	1	集石３	20	五輪塔	空風輪	17.8	—	17.8	17	7	5.3	—	—	—	—	—	—	角閃石安山岩	大山系	
77図3	104	1	集石３	21	五輪塔	空風輪	30.8	—	17	15.5	6.5	6	—	—	—	—	—	—	角閃石安山岩	大山系	
77図4	104	1	集石３	111	五輪塔	空風輪	23.4	—	15.4	16	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩	安山岩C	風輪下部～枘欠損 緻密な安山岩で角閃石が入る　粒状のもの多い
77図5	104	1	Ｆ４	76	五輪塔	空風輪	27.4	—	18.7	18.3	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	緻密な凝灰岩
77図6	104	1	集石３	29	五輪塔	空風輪	27.1	—	14.5	15.2	6.4	5.5	—	—	—	—	—	—	安山岩	和久羅	
78図1	105	1	集石３	30	五輪塔	火輪	16.8	28	—	—	—	—	6.4	5.3	—	—	—	—	角閃石安山岩	大山系	
78図2	105	1	集石３	44	五輪塔	火輪	11.9	25.2	—	—	—	—	6.5	4	—	—	—	—	デイサイト	大山系	大山系角閃石安山岩と若干異なる石材
78図3	105	1	集石３	40	五輪塔	火輪	15.7	26.7	—	—	—	—	7.2	7	—	—	—	—	角閃石安山岩	大山系	
78図4	105	1	集石３	62	五輪塔	火輪	17.8	26	—	—	—	—	6	4.6	—	—	—	—	安山岩	安山岩C	荒い組織を持つが緻密 筋は流理が風化したもの 目立った鉱物が見えず、異質
78図5	105	1	集石３	9	五輪塔	火輪	15.6	30.6	—	—	—	—	7	5	—	—	—	—	安山岩	和久羅？	
78図6	105	1	集石３	18 110	五輪塔	火輪	25	34.7	—	—	—	—	9.3	4.5	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	
78図7	105	1	集石３	15	五輪塔	火輪	15.1	29.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火山礫凝灰岩	荒島	
79図1	107	1	集石３	68	五輪塔	水輪	21.7	34.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	
79図2	107	1	集石３	19.61	五輪塔	水輪	21.4	34.3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	凝灰質砂岩	来待	
79図3	107	1	集石３	82	五輪塔	水輪	17.2	27	—	—	—	—	—	—	—	—	0.8	0.4	安山岩	和久羅	
79図4	107	1	集石３	37	五輪塔	水輪	14	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	
79図5	107	1	集石３	10	五輪塔	水輪	20	29	—	—	—	—	—	—	—	—	5.8	3.8	凝灰質砂岩	来待	上面径17cm下面径22.4cm

挿図番号	写真番号	出土地点			種別	部位	全長	最大幅(径)	空輪径	風輪径	枘幅	枘高	上面枘穴幅	上面枘穴深	下面枘穴幅	下面枘穴深	上面掘込深	下面堀込深	石材		備考
		地区	遺構	取上番号			(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	岩石名	通称	
79図6	107	1	集石３	12	五輪塔	水輪	16.4	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火山礫凝灰岩	軟質凝灰岩	
79図7	107	1	集石３	67	五輪塔	水輪	19.7	28.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火山礫凝灰岩	軟質凝灰岩	
80図1	107	1	集石３	7	五輪塔	地輪	29.5	31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩	和久羅	
80図2	108	1	集石３	56	五輪塔	地輪	15.8	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	わずかにノミ痕残る
80図3	108	1	集石３	45	五輪塔	地輪	14.8	24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	
80図4	108	1	集石３	32	五輪塔	地輪	22.8	29.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	凝灰質砂岩	来待	
80図5	108	1	集石３	31	五輪塔	地輪	20.2	26.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	火山礫凝灰岩	軟質凝灰岩	
81図1	109	1	集石３	38	宝篋印塔	相輪	34.3	11.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	
81図2	110	1	集石３	39	宝篋印塔	笠	21.4	30.7	—	—	—	—	7.7	8	6	3.4	—	—	安山岩質凝灰岩	日引	表面変質　81図5と同一石材
81図3	110	1	集石３	99	宝篋印塔	笠	27	不明	—	—	—	—	不明	11以上	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	81図4と同一個体と思われる
81図4	110	1	集石３	106	宝篋印塔	笠	27	不明	—	—	—	—	不明	11以上	—	—	—	—	石英凝灰質安山岩	白来待	81図3と同一個体と思われる
81図5	110	1	集石３	54	宝篋印塔	笠	20.8	30	—	—	—	—	7.2	8.2	—	—	—	—	安山岩	日引類似品	81図2と同石材
81図6	111	1	集石３	53	五輪塔	基礎	10.2	28.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩	安山岩C	
81図7	110	1	集石３	104	宝篋印塔	笠	22.6	27.5	—	—	—	—	8.7	6.4	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	枘穴方形　16ｃ以降　風化が激しい
81図8	111	1	集石３Ｄ５	55	宝篋印塔	塔身	19	18.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石英安山岩質凝灰岩	白来待	月輪の中に四面それぞれ金剛界四仏（キリーク・タラーク・ウーン・アク）を配す
82図1	104	1	集石７	167	五輪塔	空風輪	26.3	—	18	16	6.2	2.7	—	—	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	
82図2	105	1	集石７	168	五輪塔	火輪	18.7	30.5	—	—	—	—	7.3	3.4	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	
82図3	106	1	集石７	164	五輪塔	火輪	10.3	25	—	—	—	—	3.8	1.3	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	
82図4	107	1	集石７	165	五輪塔	水輪	6	26	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3.4	凝灰質砂岩	来待	
82図5	108	1	集石７	161	五輪塔	地輪	20.5	25.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.6	凝灰質砂岩	来待	
82図6	108	1	集石７	166	五輪塔	地輪	18.3	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	凝灰質砂岩	来待	
82図7	111	1	集石７	169	宝篋印塔	基礎	7	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.8	凝灰質砂岩	来待	全体に風化している
83図1	104	1	Ｅ３	1	五輪塔	空風輪	28.2	—	20.7	18	7	29	—	—	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	先端及び枘欠損
83図2	104	1	Ｅ４	158	五輪塔	空風輪	26.6	—	17	17.2	6.8	2.1	—	—	—	—	—	—	火山礫凝灰岩	軟質凝灰岩	
83図3	104	1	Ｆ４	92	五輪塔	空風輪	24	—	16.2	14	7.8	3.5	—	—	—	—	—	—	火山礫凝灰岩	軟質凝灰岩	
83図4	106	1	Ｆ４	87	五輪塔	火輪	23.5	32.2	—	—	—	—	6.2	8.7	—	—	—	—	安山岩	和久羅	
84図1	106	1	Ｆ３	3	五輪塔	火輪	17.1	33.9	—	—	—	—	—	—	—	—	1.5	—	安山岩	和久羅	
84図2	107	1	Ｆ４	88	五輪塔	水輪	18	30	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6	0.9	デイサイト	大山系	大山系角閃石安山岩と若干異なる石材
84図3	108	1	Ｆ４	89	五輪塔	地輪	25	27.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩	安山岩C	77図4と同じの可能性あり鉱物の結晶が見えない
84図4	109	1	Ｆ４	84	宝篋印塔	相輪	53.2以上	13.8	—	—	8.2	7.6	—	—	—	—	—	—	凝灰質砂岩	来待	全体に風化している
84図5	110	1	Ｆ４	77	宝篋印塔	笠	21.3	29.2	—	—	—	—	7	8	7	4	—	—	安山岩	不明	全体に風化が激しい 長石が少し大きい 76図10と同一石材
84図6	111	1	Ｅ４	83	(宝篋印塔か)	基礎	21.4	25.9	—	—	—	—	4.6	2	—	—		1.2	安山岩	日引	
84図7	111	1	集石６	126		基礎	8	34.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	凝灰質砂岩	来待	
84図8	111	1	集石６ 集石３	123 173	宝篋印塔	基礎	8	41	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩質凝灰岩	日引	

表9　米坂遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
94図1	123			4層		須恵器	坏蓋	（13.1）			明オリーブ灰色 5GY7/1	密 直径1㎜以上の砂粒を微量含む	回転ナデ	回転ナデ	
94図2	123		加工段床直上（SD03）	4層		須恵器	坏蓋	（13.2）			青灰色 10BG5/1	密 直径1㎜以上の砂粒を若干含む	回転ナデ	回転ナデ	
94図3	122			4層	65	須恵器	坏蓋	（13.1）	4.45		暗青灰色 5BG4/1	密 直径1㎜以上の雲母を若干含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図4	123		加工段（SD03）	床直上		須恵器	蓋	（13.4）			暗灰色 N3/	密 直径2㎜以下の砂粒を若干含む	回転ナデ	回転ナデ	
94図5	122			4層	61	須恵器	坏身	（9.2）	5.2		灰色 7.5Y6/1	密 直径2㎜以上の砂粒を若干含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図6	122			4層	66・67	須恵器	坏身	10.9	4.8		緑灰色 10G5/1	密 直径1㎜以下の砂粒を多く含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図7	122			4層	72・73	須恵器	坏身	12.0	4.3		灰色 N5/	密 直径1㎜以下の砂粒を多く含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図8	122			4層	50	須恵器	坏身	（13.0）	3.5		灰色 10Y6/1	密 直径1㎜程度の砂粒を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	重ね焼の痕跡有
94図9	122			4層	49	須恵器	坏身	（13.8）	3.5		緑灰色 10GY5/1	密 直径1㎜程度の雲母を若干含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図10	123			4層	40	須恵器	坏身	（9.0）	3.9		灰色 N6/	密 直径2㎜程度の雲母を多く含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図11	123			4層	54	須恵器	坏身				オリーブ色 5Y6/6	密 直径1㎜程度の砂粒を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図12	122			4層	43・51	須恵器	有蓋高坏			（8.0）	灰色 10Y6/1	密 直径1㎜以上の砂粒を若干含む	回転ナデ・カキ目	回転ナデ	スカシ3方向
94図13	123			4層	62	須恵器	高坏			（10.0）	灰色 7.5Y6/1	密 直径1㎜以下の砂粒を微量含む	回転ナデ	回転ナデ	スカシ4方向
94図14	122			4層	64	須恵器	長脚無蓋高坏	（13.0）			灰白色～暗灰色 10Y7/1～N3/	密 直径1㎜以下の砂粒を多く含む	回転ナデ	回転ナデ	
94図15	123			4層	34	須恵器	高坏				灰白色 7.5Y7/1	密 直径1㎜以上の砂粒を若干含む	回転ナデ	回転ナデ	
94図16	123			4層	63	須恵器	はそう			（3.0）	灰色 N5/	密 直径1㎜以上の砂粒を若干含む	回転ナデ後カキ目	回転ナデ	
94図17	123			4層	25	須恵器	壺				青灰色 10BG6/1	密 直径1㎜以上の砂粒を若干含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
94図18	123			4層	28	須恵器？	器種不明	（22.6）			オリーブ灰色 5GY5/1	密 直径1㎜程度の石英を若干含む	ハケ目？ナデ？	ナデ？	全面摩滅
95図1	124		SD02		19	土師器	甕	（17.8）			橙色 7.5YR7/6	密 直径1㎜以上の砂粒を含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図2	124					土師器	甕	（15.0）			黄褐色 10YR6/6	密 直径1㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	調整不明	全面摩滅
95図3	124		加工段（SD03）	床直上4層		土師器	甕	（13.8）			明赤褐色 5YR5/8	密 直径1㎜程度の砂粒を含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図4	124			4層	74	土師器	甕	（17.5）			浅黄橙色 10YR8/4	密 直径2㎜以下の砂粒を多く含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図5	124		SD04	4層	70	土師器	壺	（8.6）			明赤褐色 2.5YR5/8	密 直径3㎜以下の砂粒を多く含む	ハケ目？ナデ？	調整不明	
95図6	125			4層		土師器	小型丸底壺				オリーブ黒色 5Y3/1	密 直径1㎜以上の砂粒を若干含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図7	124			4層	71	土師器	高坏			10.6	黄橙色 7.5YR7/8	密 直径1㎜以上の砂粒を多く含む	調整不明	調整不明	全面摩滅 黒斑有
95図8	125			4層	21	土師器	低脚坏				黄橙色 7.5Y6/8	密 直径2㎜以上の砂粒を含む	調整不明	調整不明	全面摩滅

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
95図9	125			4層		土師器	低脚坏			(8.4)	浅黄橙色 10YR7/4	密 直径3㎜以下の砂粒を多く含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図10	125			4層		土師器	高坏			9.2	明赤褐色 5YR5/6	密 直径1㎜以下の砂粒を若干含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図11	125			4層	68	土師器	甑				明褐色 7.5YR5/6	やや粗 直径2㎜以下の砂粒を多く含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図12	125			4層		土師器	甑				にぶい黄褐色 10YR7/4	密 直径3㎜以下の砂粒を多く含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
95図13	125			4層	48	土製品	移動式竈				にぶい黄褐色 10YR7/4	密 直径3㎜以下の砂粒を多く含む	調整不明	調整不明	
95図14				4層	36	鉄製品	釘	長9.3	幅3.0	厚2.4					

表10　客戸遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
100図1	131	T4		床上		須恵器	高台付坏			(7.5)	灰色 N5/	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転糸切	回転ナデ	
100図2	131		SK01	灰色粘土層		石製品	墨書礫	長7.7	幅5.1	厚1.7					
100図3	131		Pit27		1	石製品	同上	長8.7	幅6.8	厚2.4					六芒星・九卦

表11　石台Ⅱ遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
108図1	138			オモカス下5層		縄文	深鉢				オリーブ黒色 7.5Y3/1	雲母を多く含む。胎土に繊維を含む？	条痕	条痕	
108図2	138			オモカス下5層		縄文	深鉢				オリーブ黒色 7.5Y3/3	粗 直径2㎜以下の石英・長石を含む。直径2㎜程度の砂粒を多く含む	ヘラケズリ後ナデ？	ヘラケズリ後ナデ？	全面摩滅
108図3	138			3層		弥生	甕				にぶい黄色 2.5YR6/3	密 直径2㎜以下の砂粒を多く含む	ハケ目・指頭圧痕？	ハケ目？	摩滅
108図4	138			3層		土師器	高坏				灰黄色 2.5Y7/2	密 直径4㎜以下の砂粒を多く含む	調整不明	調整不明	全面摩滅
108図5	138			2層		染付	水滴？	高2.1			明緑灰色 10GY8/1				

表12　貝先遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
121図1	139		SB01 Pit1			須恵器	坏蓋				灰色 N5/	密 直径1㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
121図2	139		SD01		1	白磁	碗				灰白色 10Y8/1	密	全面施釉	全面施釉	
121図3	139		SB01 Pit1		取り上げ No1～4		かわらけ	13.2	4.9	5.9	にぶい黄橙色 10YR7/4	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	調整不明	調整不明	灯明皿？
121図4	139		SB02		取り上げ No3		かわらけ	7.0	1.6	5.6	橙色 5YR6/8	密 直径1㎜以下の砂粒を含む まれに3㎜程度の砂粒を含む	回転糸切他 調整不明	調整不明	灯明皿？
121図5	139		SB02		取り上げ No2		かわらけ			(5.2)	橙色 5YR6/8	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転糸切他 調整不明	調整不明	
121図6	139		Pit7			須恵器	壺？			(6.5)	灰色 7.5Y6/1	密 直径4㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
121図7	139			表土		須恵器	坏蓋				緑灰色 7.5GY6/1	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	
121図8	139					須恵器	坏蓋	(11.2)			内：青灰色 10BG5/1 外：灰色 10Y5/1	密 直径1㎜以下の白色粒子を少量含む	回転ナデ	回転ナデ	
121図9	139					須恵器	壺？				灰白色 7.5Y7/1	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・カキ目	回転ナデ	
121図10	139	Cグリッド				須恵器	壺？				灰色 N6/	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・ナデ	ナデ	
121図11	139	Bグリッド				須恵器	甕				黄灰色 2.5Y6/1	密 直径3㎜以下の砂粒を含む	タタキ	ナデ	籾殻の圧痕有
121図12	139	Cグリッド				須恵器	甕				灰色 N5/	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ・カキ目	回転ナデ	
121図13	139			表土		須恵器	甕				灰色 7.5Y5/1	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	タタキ	当具痕	
121図14	139			廃土		須恵器	甕				青灰色 5PB5/1	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
121図15	139	Gグリッド				須恵器	甕				灰色 N4/	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	ナデ	
121図16	139					石器		長4.5	幅3.4	厚7.5					黒曜石製 重量15.91g

表13　番貫Ⅰ遺跡・長池Ⅰ遺跡出土遺物観察表

挿図番号	写真番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			色　調	胎　土	調　整		備考
		地区	遺構	層位	P.No			口径	器高	底径			外面	内面	
127図1	140		SD01		3	鉄製品	刀子	長19.5	幅3.3	厚0.6					
127図2	140		SD03		5	鉄製品	刀子	長4.3 長7.0	幅1.5 幅1.4	厚0.5 厚0.5					
127図3	140				9	鉄製品	不明	長7.0 長2.0 長1.2	幅1.0 幅1.0 幅1.0	厚0.4 厚0.7 厚0.3					
127図4	140		溝			鉄製品	釘	長3.6	幅0.5	厚0.7					
127図5	140				14	白磁	碗	(17.2)			灰白色 7.5YR7/1	白色・黒色粒子を少量含む			口唇部に付着痕
127図6	140		溝				かわらけ				橙色 7.5YR7/6	密 直径1㎜以下の砂粒を多く含む	回転ナデ	回転ナデ	
127図7	140				8	土師器	坏？				黄橙色 10YR8/6	密 直径1㎜以下の長石・白色粒子を多量含む	調整不明	調整不明	
127図8	140		SD01	上層		陶器	寸胴形甕	(8.4)			黒色 10YR2/1				口唇部に敲打痕 条線2 陰刻
127図9	140			廃土		陶器	徳利	(5.0)			暗褐色 7.5YR3/3				
127図10	140		SD01			磁器	丸形坏	(5.2)			灰白色 N8/				コバルト染付け 転写印刷 草花文
127図11	140		東側石段			磁器	平型皿				明緑灰色 7.5GY8/1				蛇の目釉はぎ 染付
127図12	140		東側石段			陶器	呉器形碗			(4.8)	明オリーブ灰色 5GY7/1				陶胎染付
127図13	140	T15		黒色土		土師質	鉢				にぶい黄橙色 10YR6/3	密 直径1㎜以下の砂粒を少し含む			
127図14	140		SD02		12		かわらけ				淡黄色 2.5Y8/3	密 直径2㎜以下の砂粒をやや多く含む	調整不明	調整不明	
127図15	140		SD02		13		かわらけ				橙色 5YR7/6	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	回転ナデ	回転ナデ	
127図16	140		SD03		7		瓦				灰白色 5Y7/1	密 直径3㎜以下の砂粒を含む	ナデ	ナデ	煤付着
127図17	140		SD03				瓦				灰色 7.5Y6/1	密 直径2㎜以下の砂粒を含む	ナデ	縄目痕	
127図18	140				2		瓦				灰色 5Y6/1	密 直径3㎜以下の砂粒を含む	ナデ	ナデ	
127図19	140				1		瓦				灰色 7.5Y6/1	密 直径4㎜以下の砂粒を含む	ナデ	ナデ	両面いぶし 穿孔有
127図20	140		SD02		11	石器		長2.3	幅1.8	厚0.7					重量2.44g
127図21	140				10	石製品	根付	長1.3	幅1.5	孔径0.3					被熱痕有 重量1.93g
127図22	140	長池Ⅰ 2T				石器	石鏃	長2.3	幅1.65	厚0.35					黒曜石製 重量0.78g
127図23	140	番貫 16T				石器	石鏃	長1.5	幅1.8	厚0.3					黒曜石製 重量0.57g

写　真　図　版

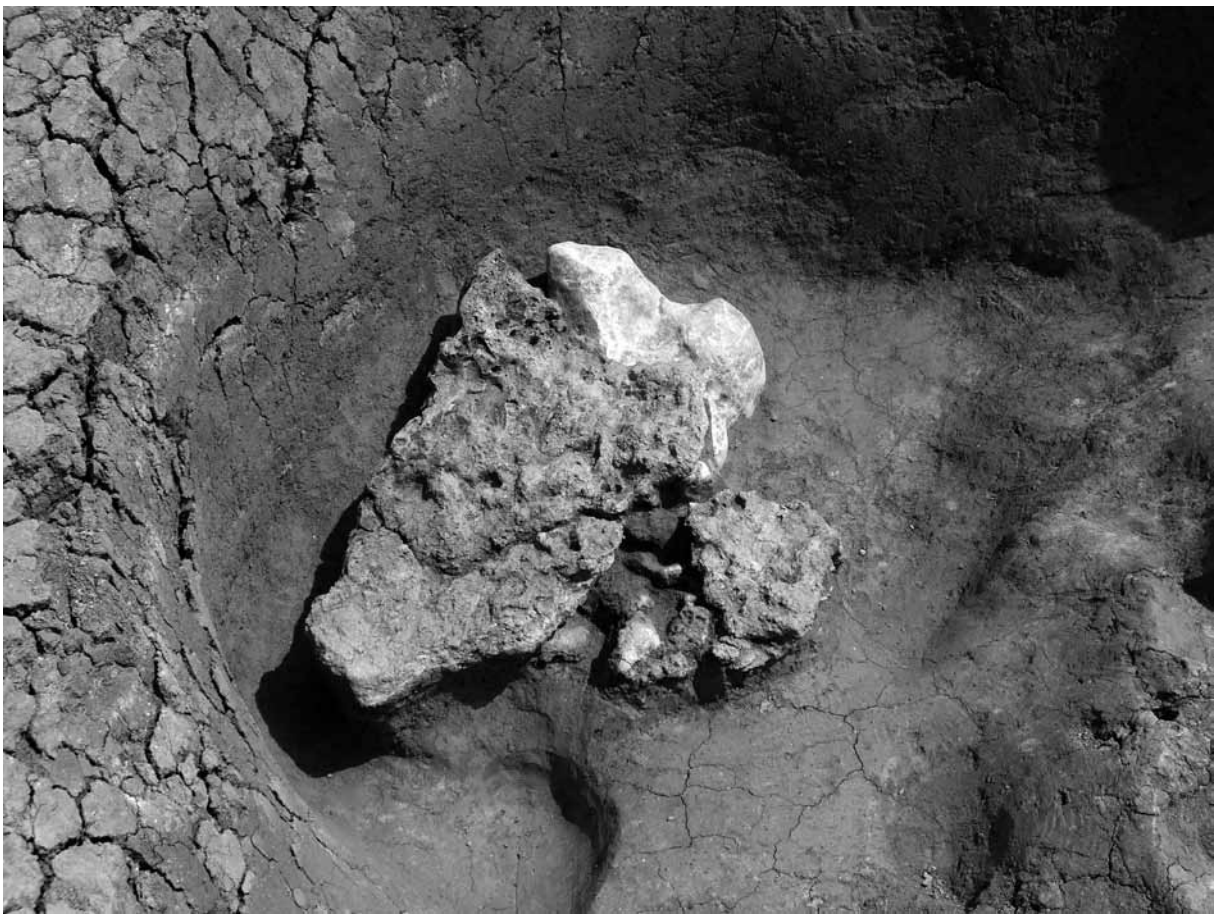
Ⅲ区Ⅳ区　空中撮影（上から）

Ⅲ区Ⅳ区　空中撮影（北から）

図版 2　山辺遺跡

Ⅲ区　SK01　炉壁出土状況　（北から）

Ⅲ区　SK01　完掘状況　（北から）



Ⅲ区　SK08　炉壁出土状況　（北から）

Ⅴ区　SX03　検出状況　（西から）

図版４　山辺遺跡

Ｖ区　漆塗碗検出状況

Ｖ区　第 28 図 3　出土状況　アップ

調査前風景

Ⅲ区　南壁土層堆積状況
（北西から）

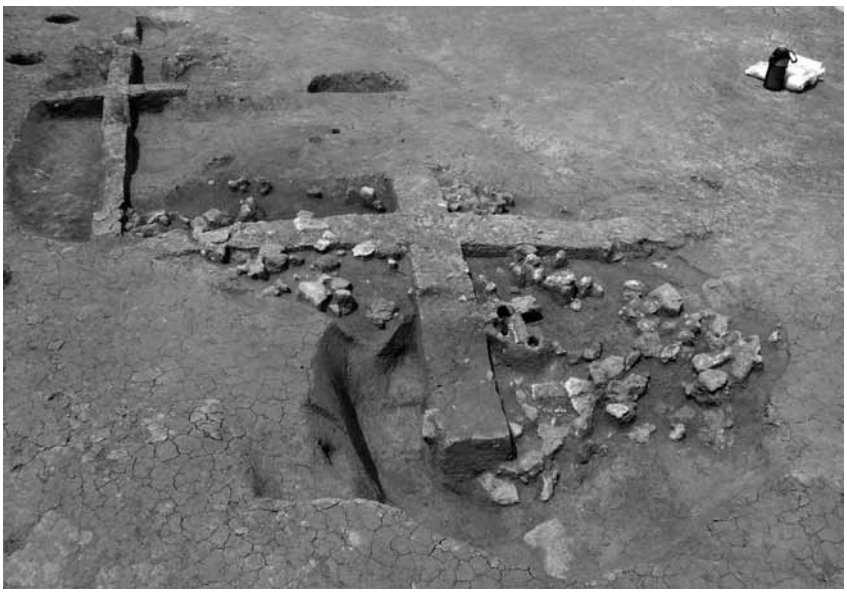
Ⅲ区　SK01・SK08
検出状況（北から）

図版６　山辺遺跡

Ⅲ区　SK08　検出状況
（北から）

Ⅲ区　SK01・SK08
検出状況（北東から）

Ⅲ区　SK01　掘下状況
（北から）



Ⅲ区　SK01
炉壁出土状況（東から）

Ⅲ区　SK01　東西土層
堆積状況（北から）

Ⅲ区　SK01　東西土層
堆積状況（北から）

図版 8　山辺遺跡

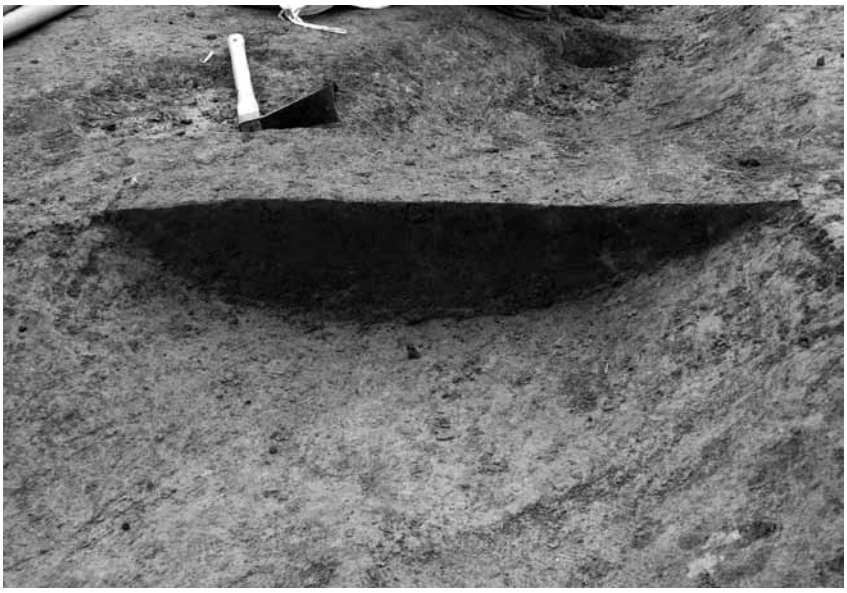
Ⅲ区　SK08　東西土層
堆積状況（北から）

Ⅲ区　SK01 遺物出土状況
（南西から）

Ⅲ区　SK01・SK08
完掘状況（北から）

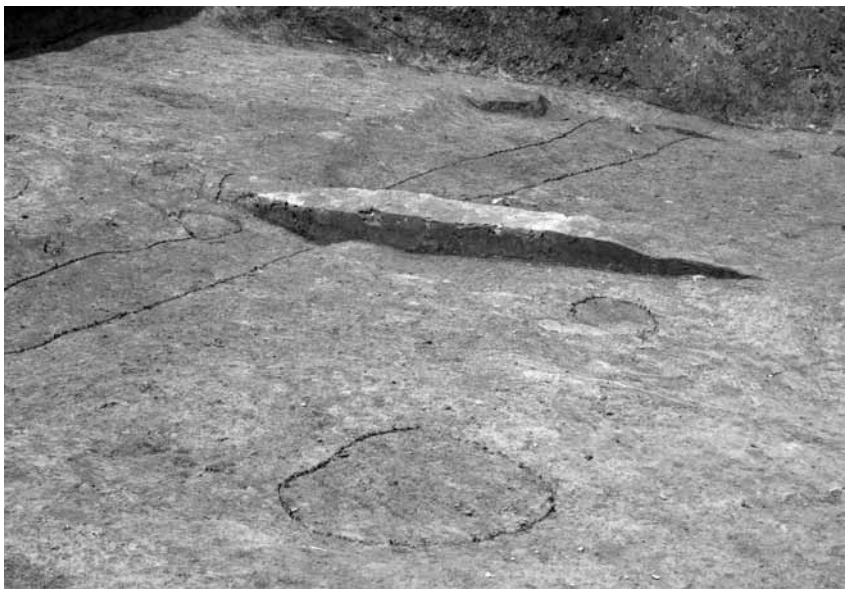
Ⅲ区　段状遺構
完掘状況（西から）

Ⅲ区　SD01　北側土層
堆積状況（北西から）



Ⅲ区　SD01　南側土層
堆積状況（北西から）

図版 10　山辺遺跡



Ⅲ区　SD01 土層堆積状況
（東から）

Ⅲ区　SD02・SD03
遺構検出状況（東から）

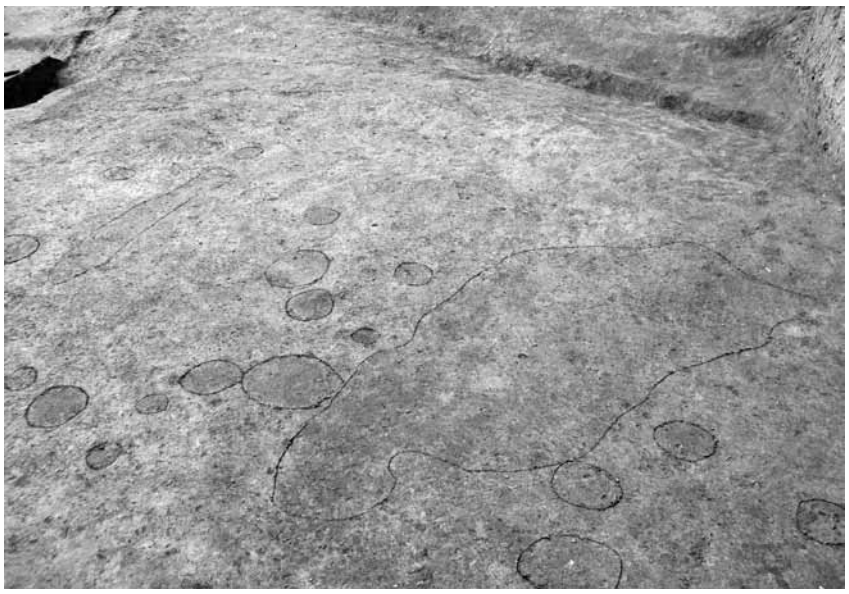
Ⅲ区　SD02　東西土層
堆積状況（南西から）

Ⅲ区　段状遺構　西側
完掘状況 （東から）

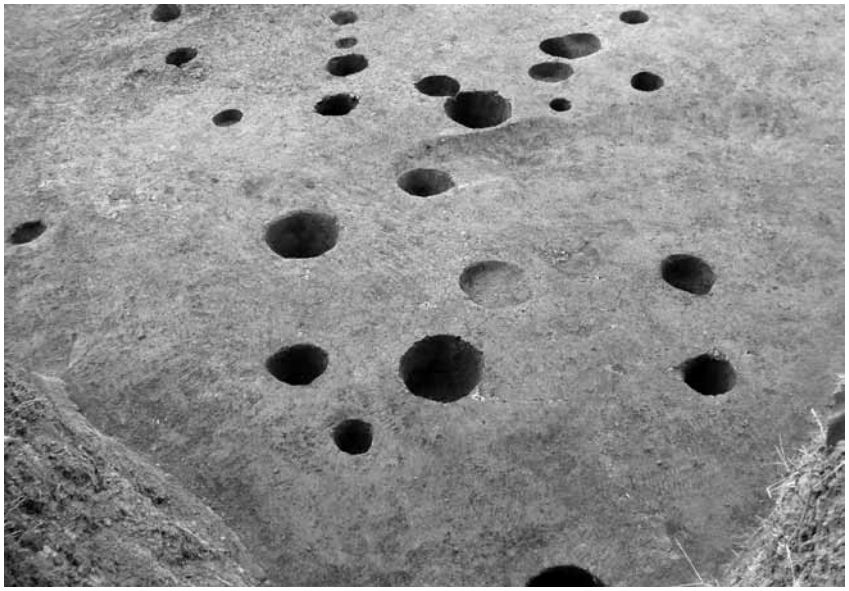
同上 （北西から）

同上 （西から）

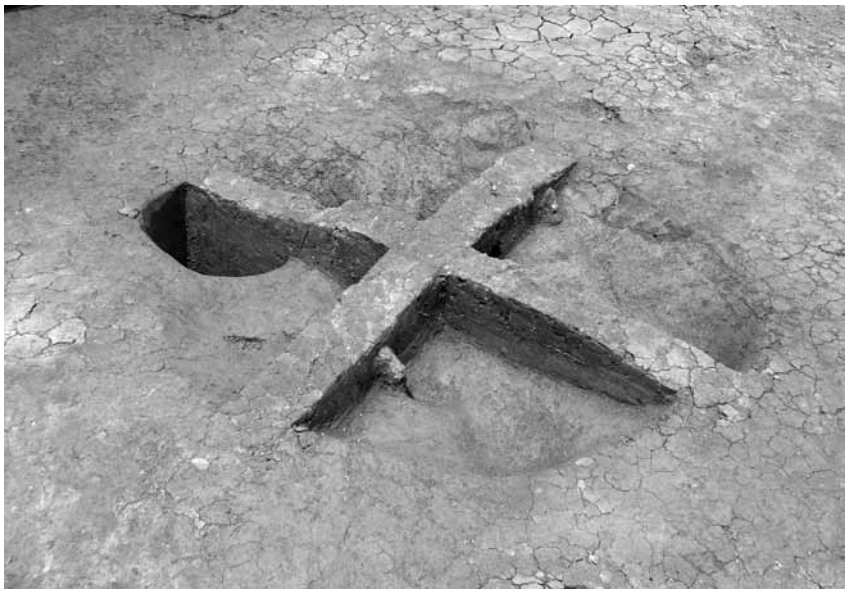
図版 12　山辺遺跡



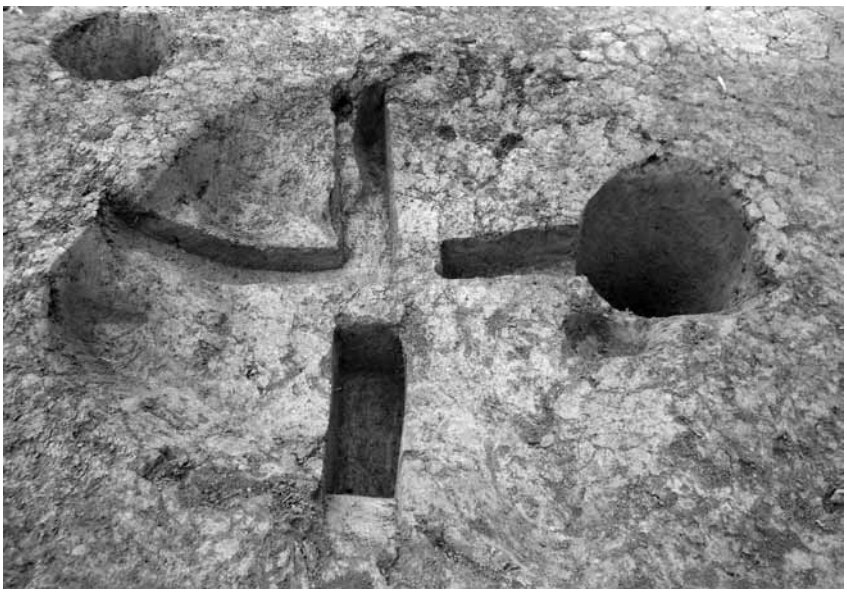
Ⅲ区　ピット群検出状況
（北西から）



Ⅲ区
ピット群完掘状況（北西から）



Ⅲ区　SK06・ピット 40
土層堆積状況（南東から）



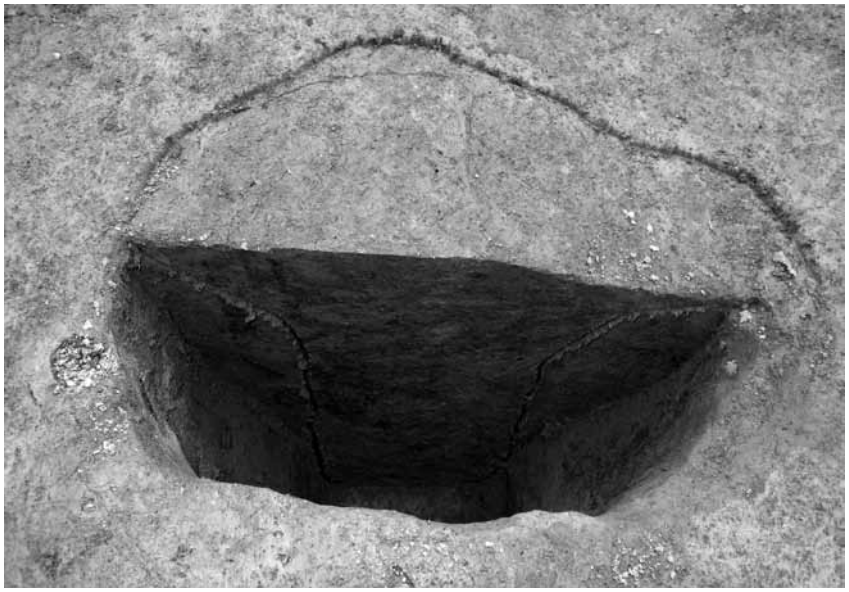
Ⅲ区　SK06・ピット 40
完掘状況（北から）

Ⅲ区　SK07 土層堆積状況
（西から）

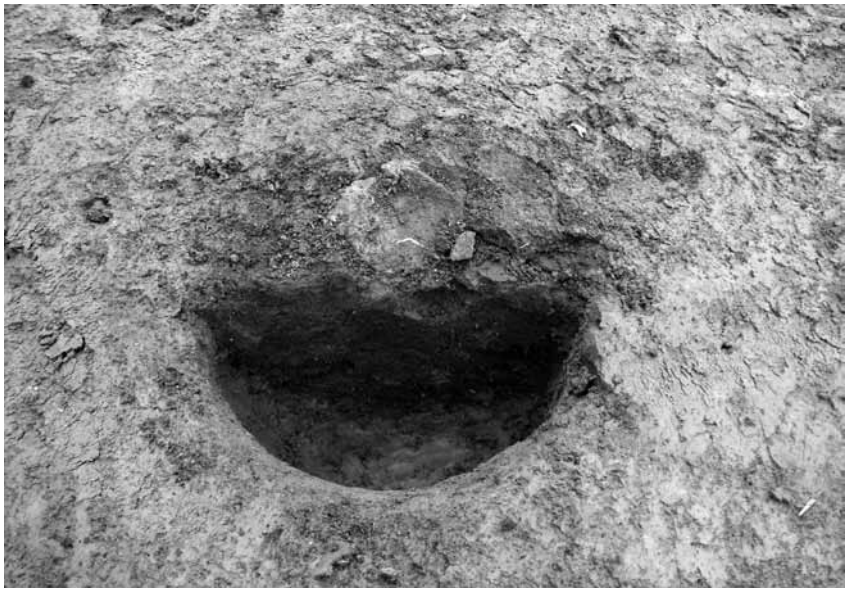
Ⅲ区　SK07　完掘状況
（西から）

図版 14　山辺遺跡

Ⅲ区　ピット56土層堆積状況
（東から)



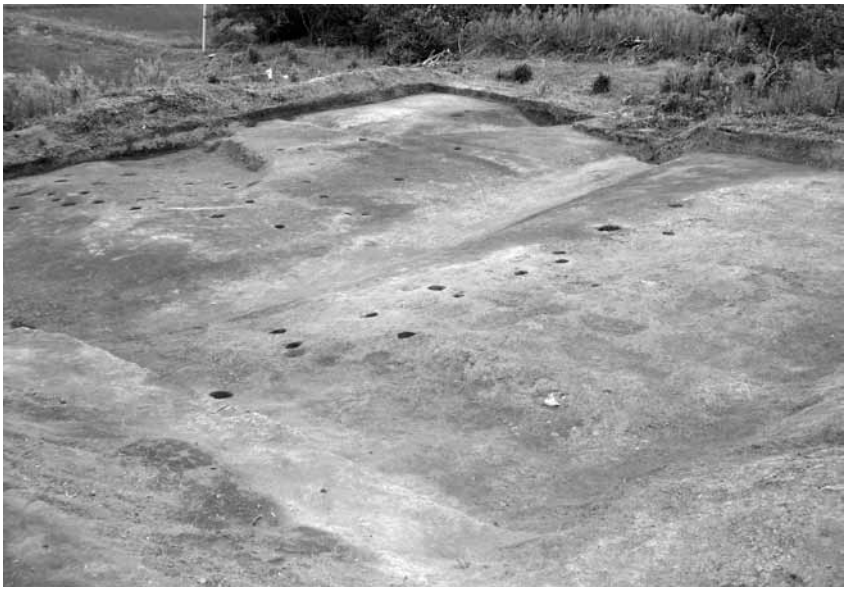
Ⅲ区　ピット47土層堆積状況
（西から）



Ⅲ区　ピット 107
土層堆積状況（南から）

Ⅳ区　SX01　完掘状況
（南から）

Ⅳ区　SX02　完掘状況
（南西から）



Ⅳ区　完掘状況
（南西から）

図版 16　山辺遺跡

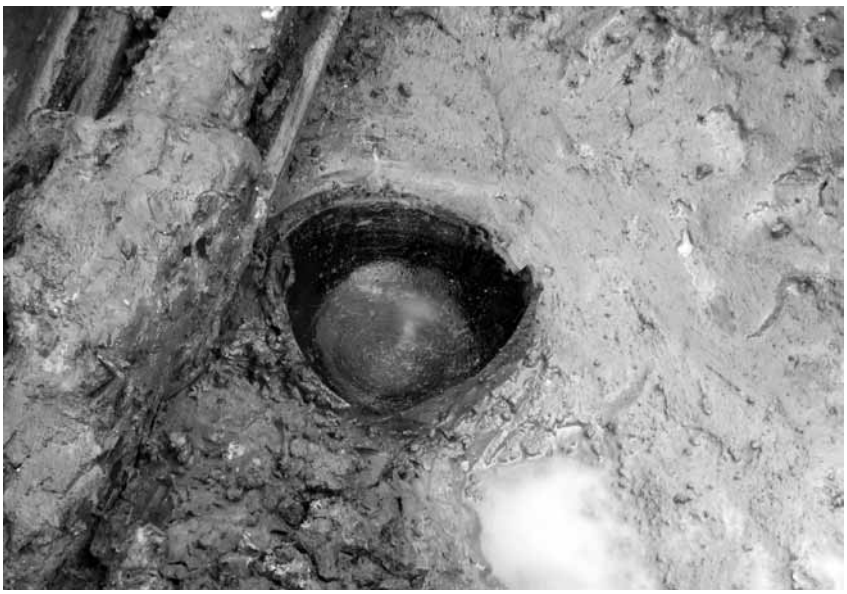
Ⅴ区　SX03　検出状況
（南東から）

Ⅴ区　SX03
出土状況　アップ

Ⅴ区　漆塗碗　出土状況
（南から）

Ⅴ区　第 28 図 3
出土状況

Ⅴ区　第 28 図 1
出土状況



Ⅴ区　第 28 図 3
出土状況

図版 18　山辺遺跡

Ⅴ区　調査風景

Ⅴ区　第三層
（第 19 図 1）出土状況

Ⅴ区　第三層
（第 24 図 4) 出土状況

Ⅴ区　完掘状況 (東から)

完掘状況　(北から)

Ⅴ区　SX03　　調査風景

図版 20　山辺遺跡

19-1

19-1

19-2

19-3

19-3

19-4

19-4

19-5

19-6

19-6

19-7

19-8

19-9

20-1

20-1

20-1

20-1

20-2

20-2

20-2

20-2

20-3

20-3

20-5

20-5

20-4

Ⅲ・Ⅴ区　出土炉壁

20-6･7･8･9

21-1

20-9

20-9

21-1

21-2

21-2

21-3

21-4

21-5

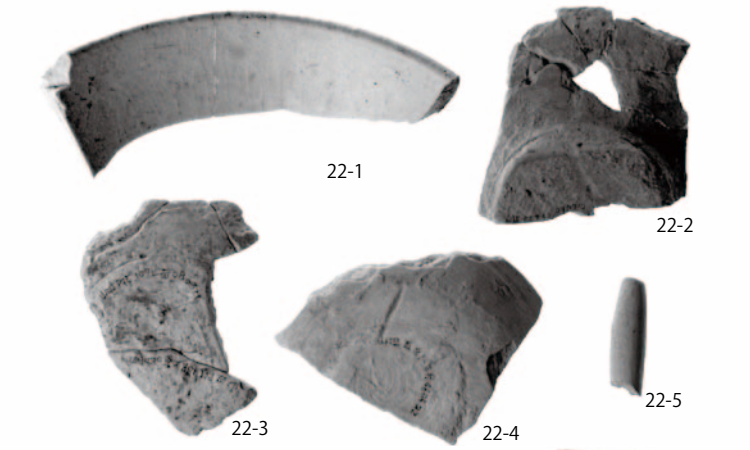
21-6

21-7

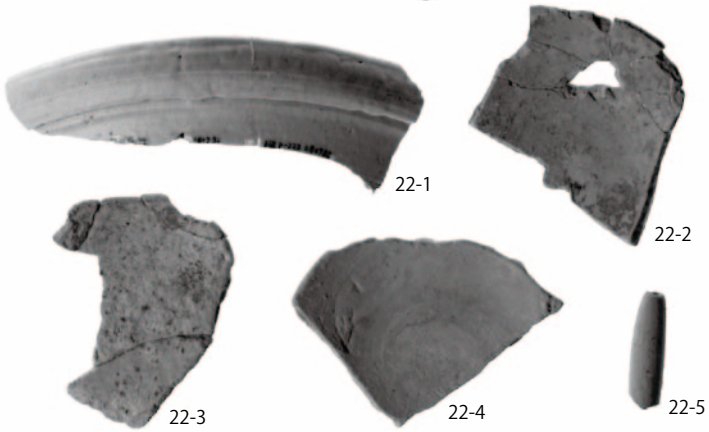
21-7

Ⅲ・Ⅴ区　出土炉壁・羽口

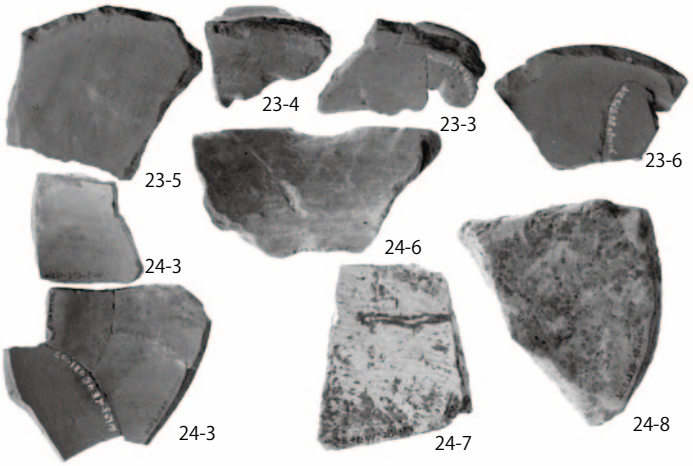
図版 22　山辺遺跡



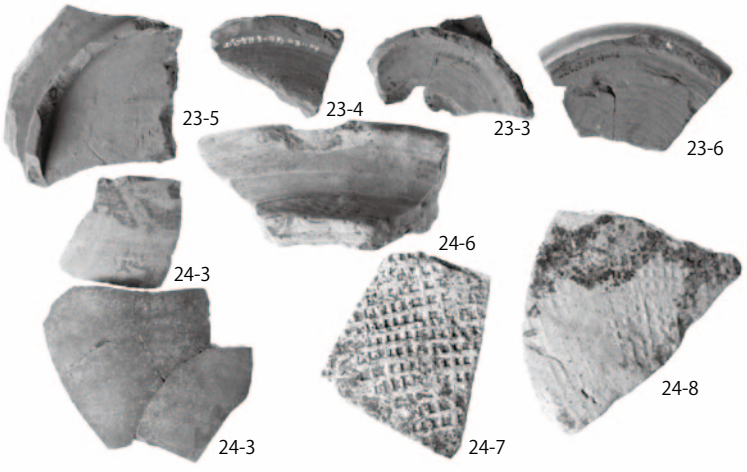
Ⅲ区　出土遺物



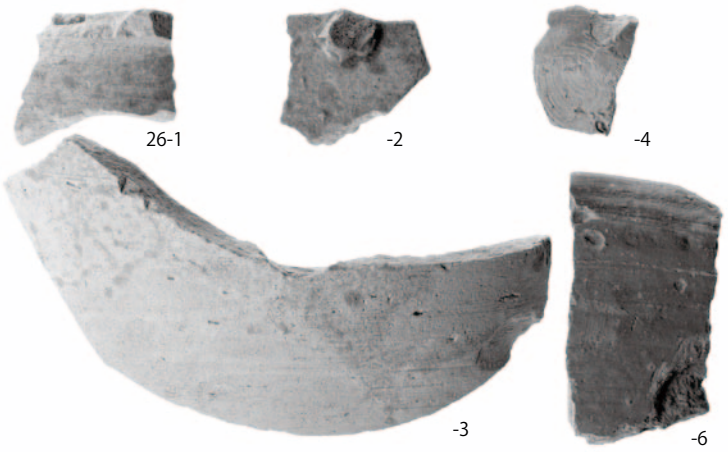
同上



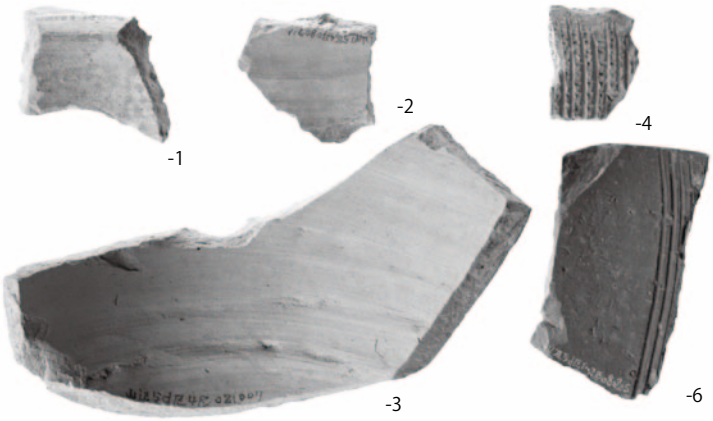
Ⅴ区　出土遺物



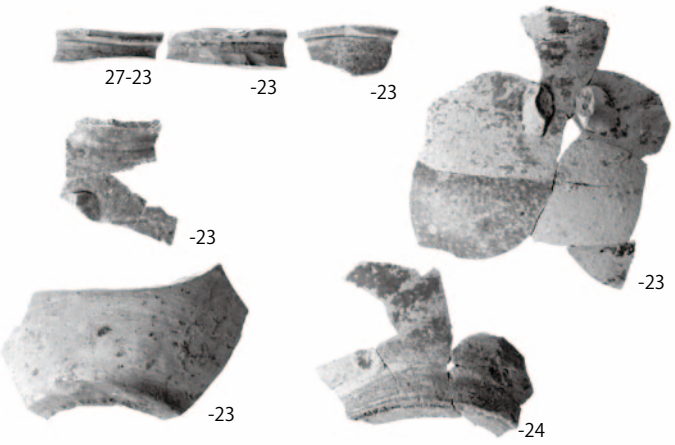
同上



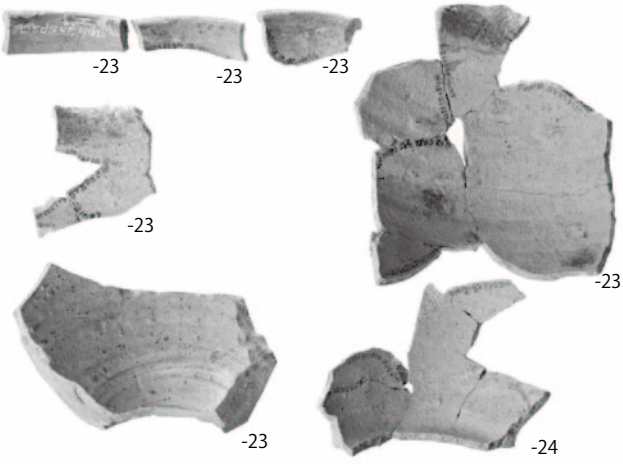
Ⅴ区　出土陶器



同上

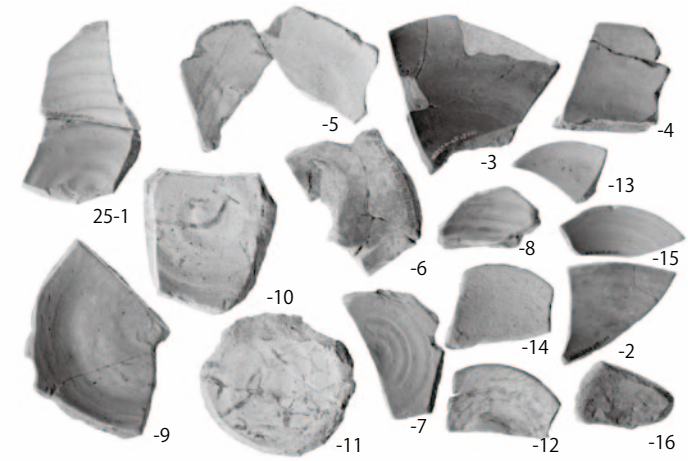


Ⅴ区　出土褐釉陶器

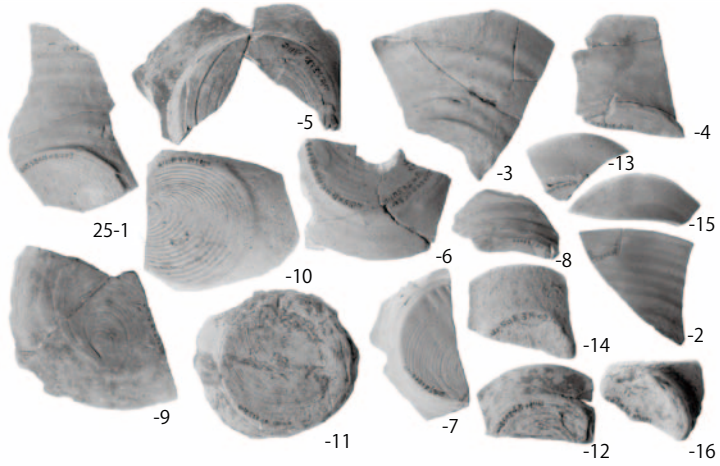


同上

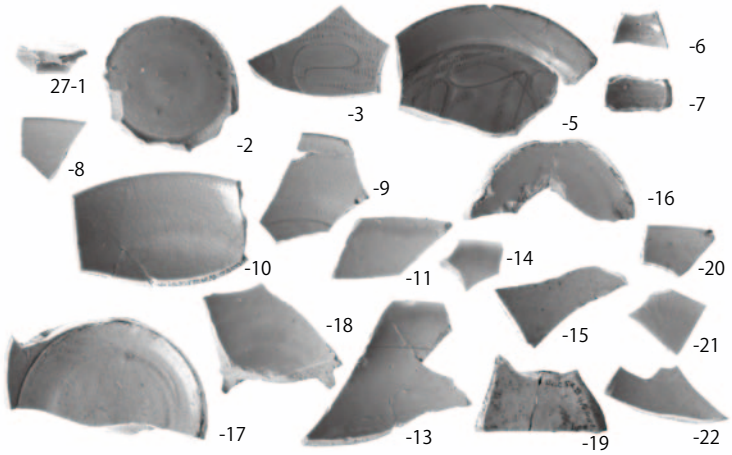
図版 24　山辺遺跡



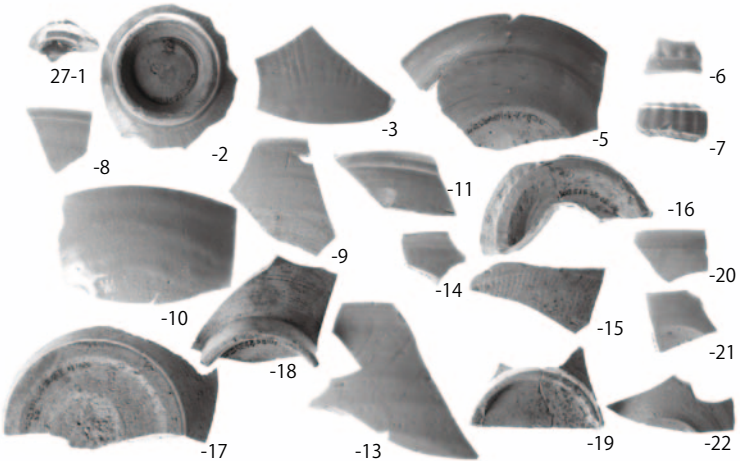
Ⅴ区　出土中世土師器



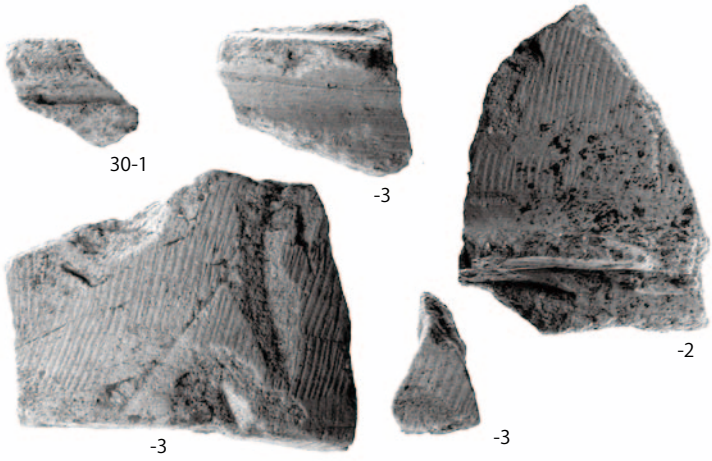
同上



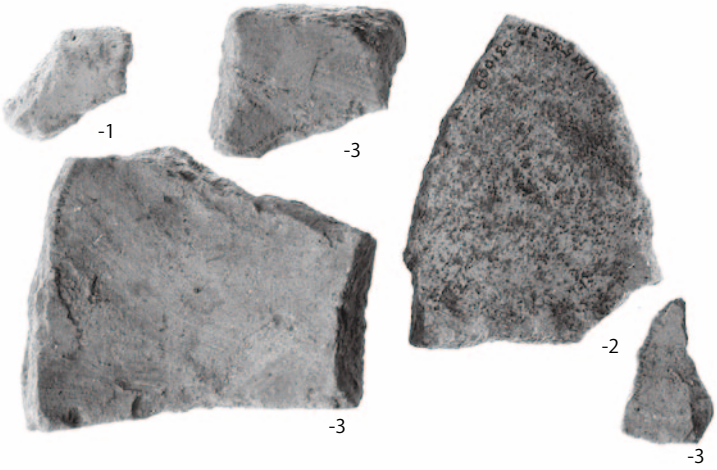
Ⅴ区　出土青磁・白磁



同上



Ⅴ区　出土埴輪

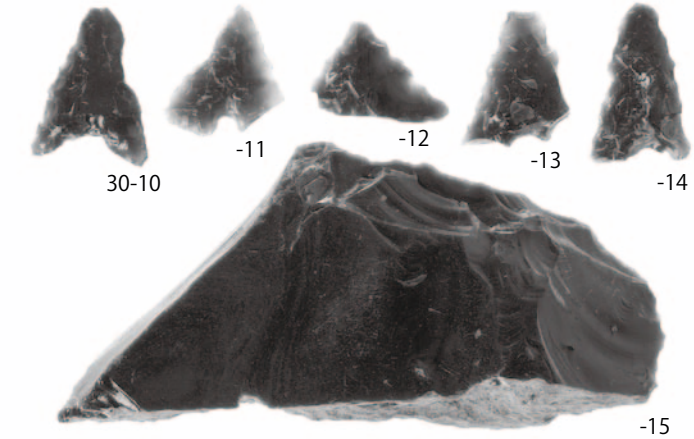


同上

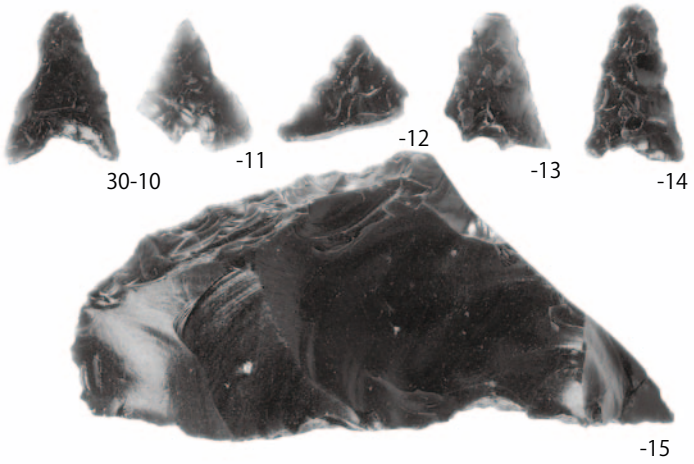
Ⅴ区　出土土錘

同上

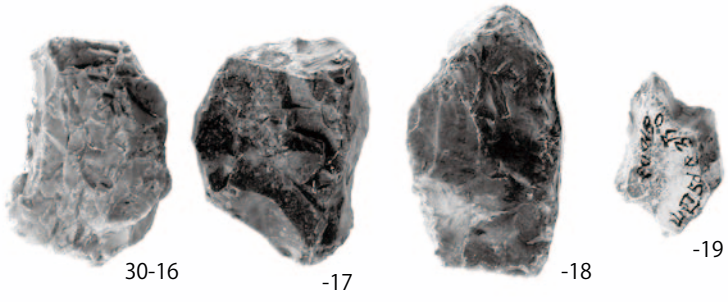
図版 26　山辺遺跡



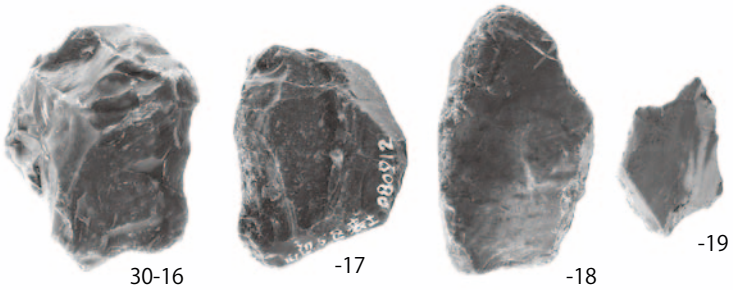
Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区　出土石器



同上



Ⅲ区　出土玉類



同上

23-1

23-2

24-1

24-2

23-7

23-8

24-5

25-17

25-18

25-19

25-20

Ⅴ区　出土遺物

25-21

27-12

27-4

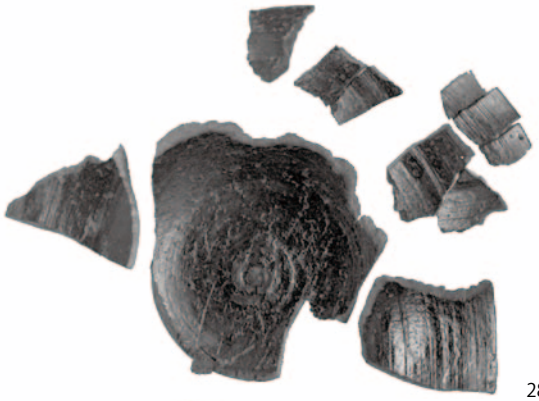
26-5

24-9

24-4

24-10

24-11

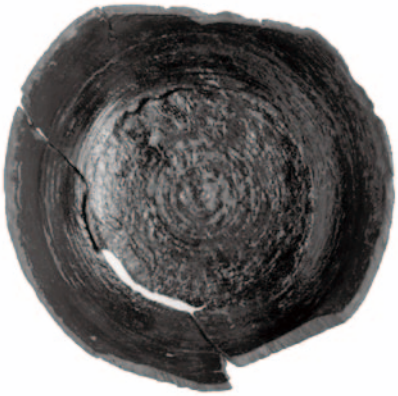


28-1

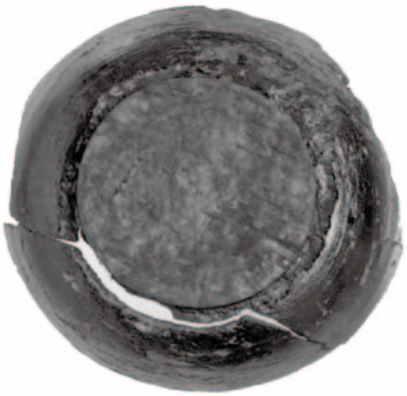
28-1

28-1

28-3



28-3



28-3

28-2

28-2

28-2

28-4

28-5

28-6

28-6

28-7

28-9

28-8

28-10

28-11

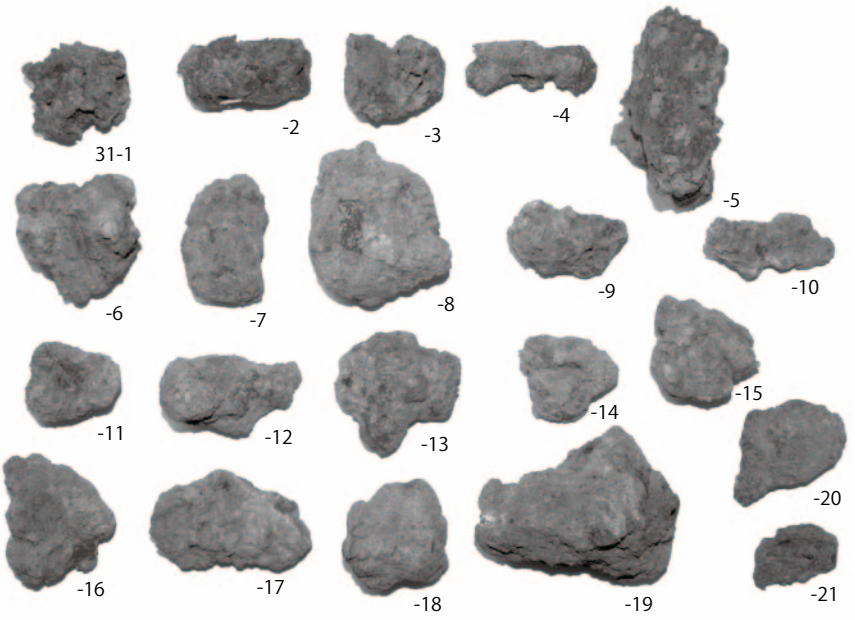
29-1

29-2

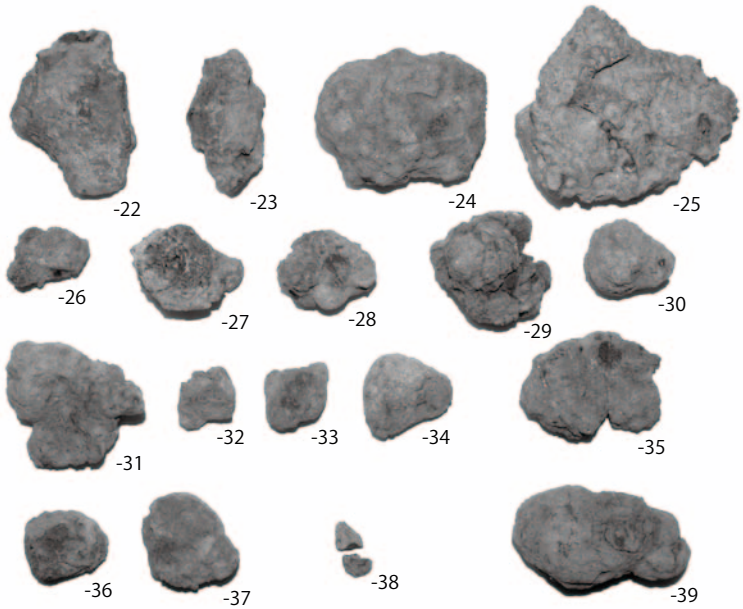
29-3

29-4

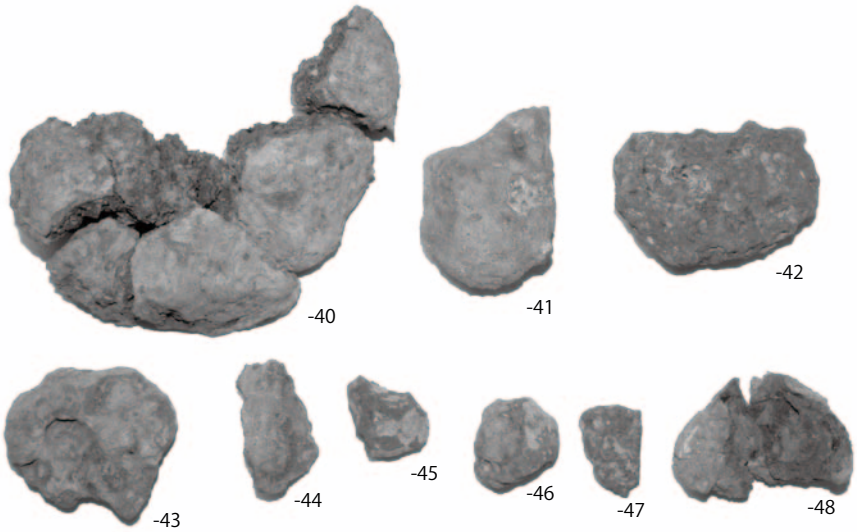
V区　出土木製品



Ⅲ区　SK01　出土鉄滓



Ⅲ区　出土鉄滓



Ⅴ区　出土鉄滓

図版 32　鞍切遺跡

1 区　空中撮影（西から）

2 区　街道跡
調査風景（北から）

1 区　空中撮影（上から）

1 区　SD02 検出状況（東から）

図版 34　鞍切遺跡

1 区　SD08 セクション 2･3（北西から）

1 区　道路状遺構 1
礫出土状況（東から）

２区　４号墳主体部　箱式石棺検出状況　（南より）

２区　４号墳主体部　完掘状況　（上から）

図版 36　鞍切遺跡

2 区　街道跡　完掘状況（北から）

2 区　街道跡　完掘状況 (南東から）

1 区　調査前状況
（東から）

1 区　SD03　検出状況
（東から）

1 区　SD02
遺物出土状況（東から）

図版 38　鞍切遺跡

1 区　SD02
土層堆積状況（南から）

1 区　SD02 遺物出土状況
（南から）

1 区　SD02
遺物出土状況（北から）

1 区　SD02(奥)・
SD03（手前）遺物出土状況
（東から）

1 区　SD03
遺物出土状況（北西から）

同上 (北西から）

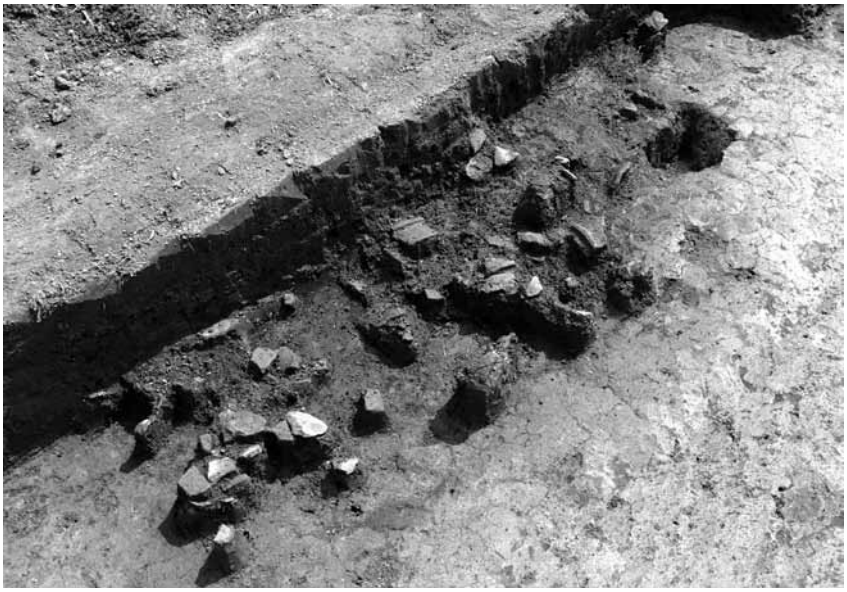
図版 40　鞍切遺跡

1 区　SD03
遺物出土状況（南から）

1 区　SD03
土層堆積状況（南から）

同上 (北から）

1 区　SD03　出土埴輪



1 区　埴輪溜まり
遺物出土状況（南西から）

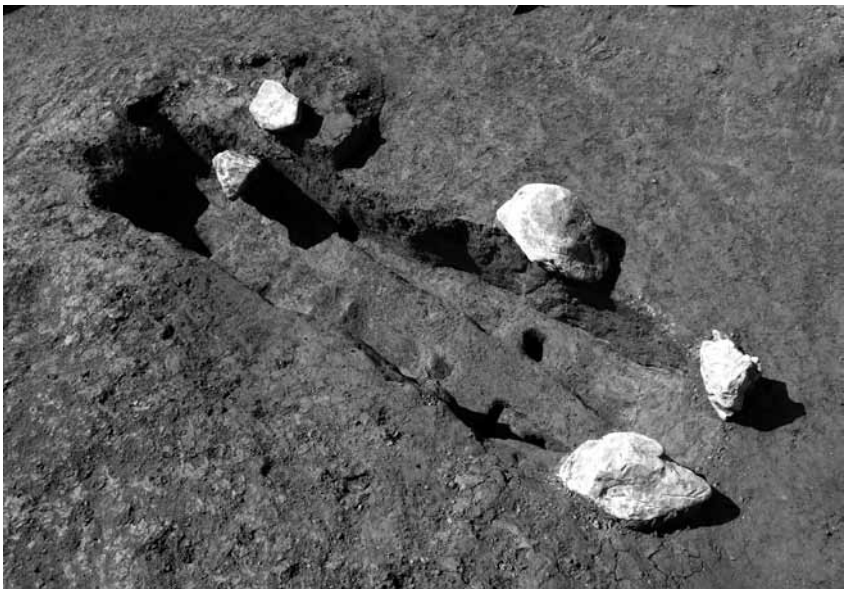
1 区　埴輪溜まり
土層堆積状況（南西から）

図版 42　鞍切遺跡

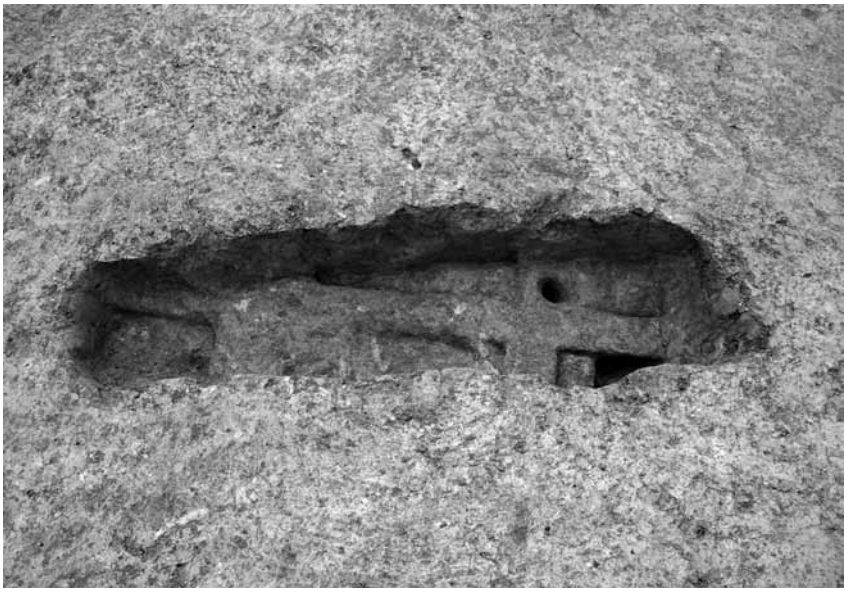
1 区　SD06　セクション
（南から）

1 区　SK09　検出状況
(東から）

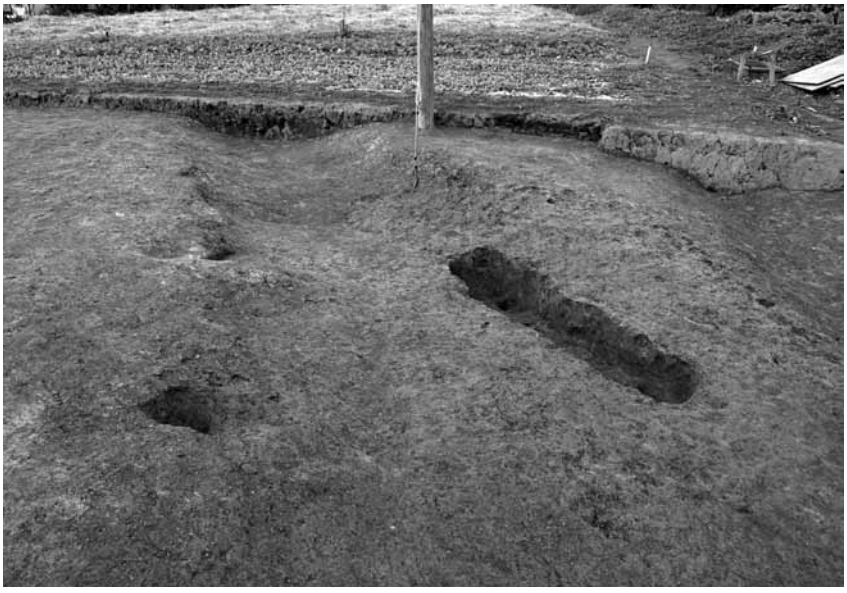
1 区　SK09
土層堆積状況（南東から）



1 区　SK08　礫検出状況
（北東から）

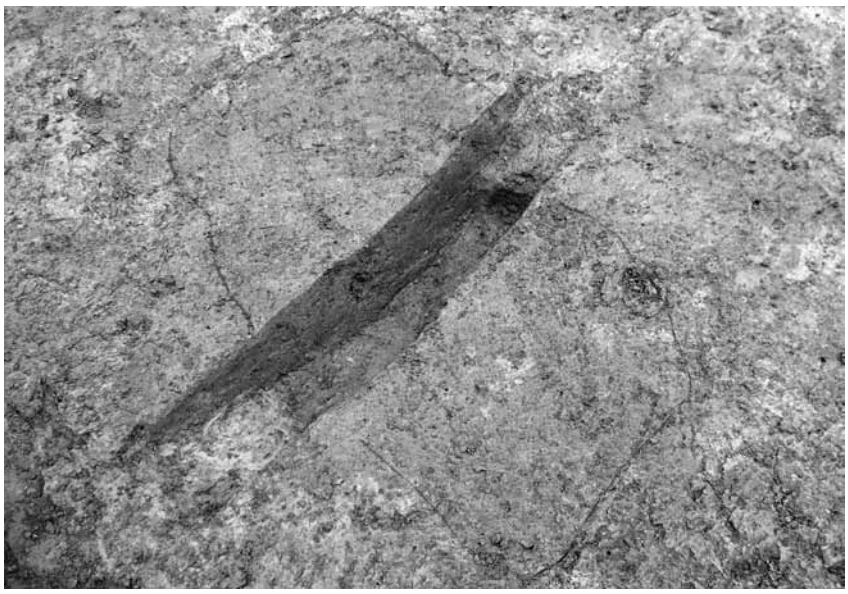


1 区　SK08　完掘状況
（南西から）



1 区 SD03・SK08
完掘状況（南から）

図版 44　鞍切遺跡



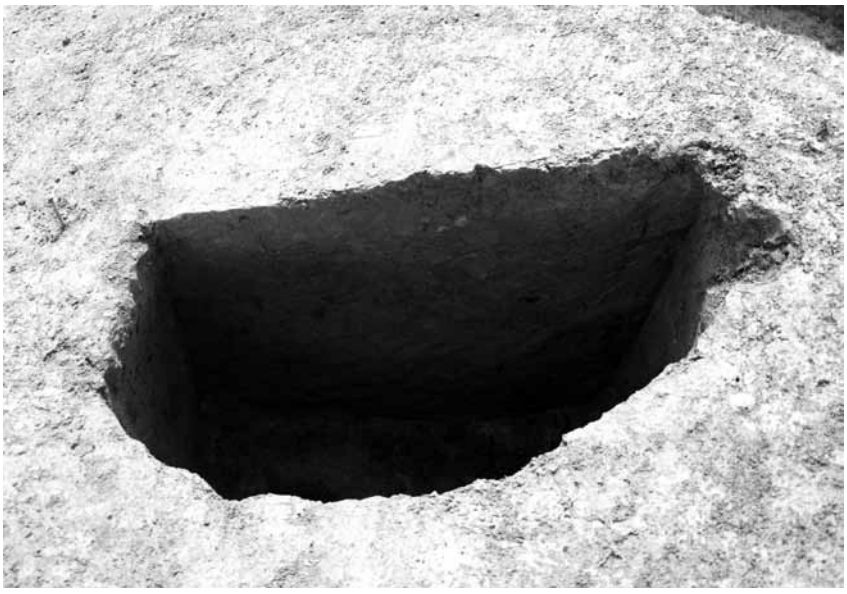
1 区　SK09　検出状況
（南から）

1 区　SK09　完掘状況
（南西から）

1 区　SD06・SK09
完掘状況 (南より）

1 区　SK11 完掘状況と
土層堆積状況（南から）

1 区　SK10　検出状況
（北から）



1 区　SK10 土層堆積状況
（北東から）

図版 46　鞍切遺跡

1 区　SK10 完掘状況
（北東から）

1 区　SK07 土層堆積状況
（西から）

1 区　道路状遺構 1
検出状況（南東から）

1 区　道路状遺構 1
土層堆積状況（西から）

1 区　道路状遺構 1
検出状況（北東から）

同上（上から）

図版 48　鞍切遺跡

1 区　道路状遺構 1
完掘状況（西から）

1 区　道路状遺構 1
土層堆積状況 (北東から）

1 区　完掘状況（東から）

2 区　4 号墳　調査前状況
（東から）

同上（南西から）

2 区　4 号墳
南北土層堆積状況
南半分（南西から）

図版 50　鞍切遺跡

２区　４号墳　南北土層
堆積状況（西から）

２区　４号墳
南北土層堆積状況
北側中央寄り（東から）

２区　４号墳　主体部
上部東西土層堆積状況
西半分（南から）

２区　４号墳　主体部
上部東西土層堆積状況
東半分 （南から）

２区　４号墳　周溝
土層堆積状況（南から）

同上　東端 （南から）

図版 52　鞍切遺跡

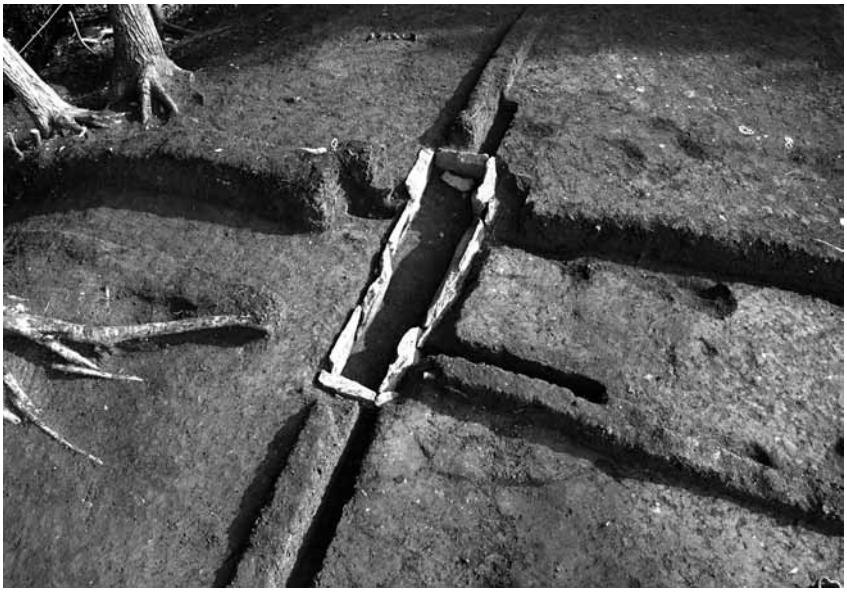
２区　４号墳　主体部
箱式石棺検出状況
（上から）

２区　４号墳　主体部
蓋石除去後（上から）

２区　４号墳　主体部
石棺内完掘状況（上から）

２区　４号墳　主体部
棺外大刀出土状況
（南西から）

２区　４号墳　主体部
棺外大刀出土状況
（上から）



２区　４号墳　主体部
石棺内完掘状況
（南西から）

図版 54　鞍切遺跡

２区　４号墳　主体部
石棺　北側土層堆積状況
（北東から）

２区　４号墳　主体部
完掘状況（東から）

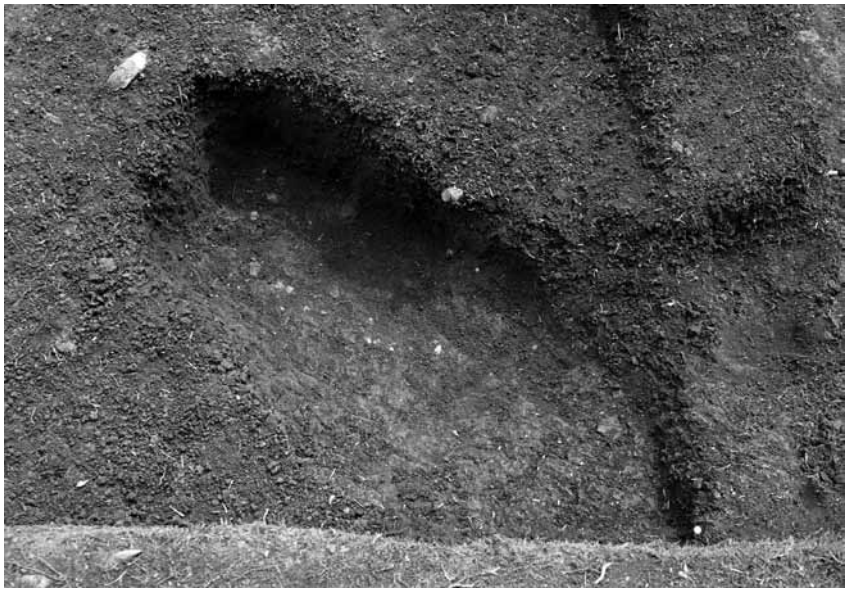
２区　４号墳　主体部
墓坑完掘状況（上から）

２区　４号墳
完掘状況（南東から）

２区　SK01
土層堆積状況（南西から）

２区　SK01
遺物出土状況（上から）

図版 56　鞍切遺跡



2区　SK01
完掘状況（上から）

2区　街道跡　北端
土層堆積状況（南から）

2区　街道跡
土層堆積状況　上半分
（西から）

２区　街道跡
土層堆積状況　下半分
（西から）

同上　（南西から）

同上（北西から）

図版 58　鞍切遺跡

2 区　街道跡　調査風景

同上

2 区　完掘状況
（東から）

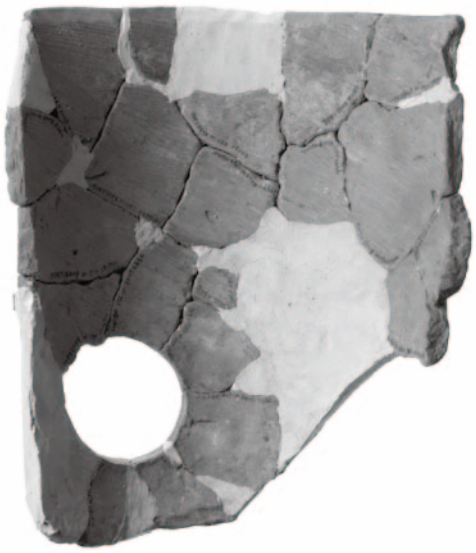
２区　SK01　周辺
完掘状況（南から）

現地説明会　風景

左：一丁地蔵
右：一丁地蔵光背陰刻
　　部分

図版 60　鞍切遺跡

55-4(表)

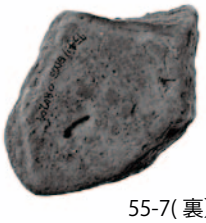


55-4(裏)

55-5

55-6

55-7(表)

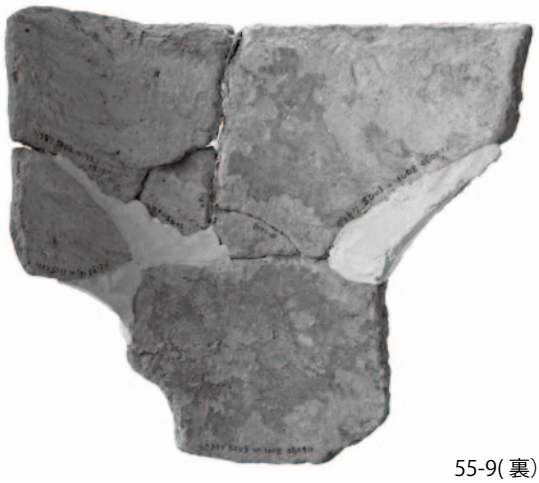


55-7(裏)

55-8(表)

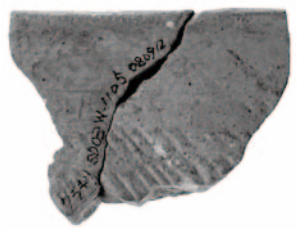
55-8(裏)

55-9(表)

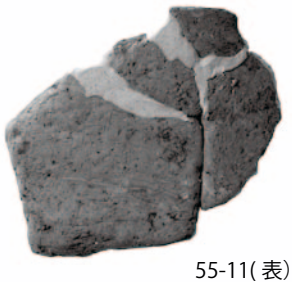


55-9(裏)

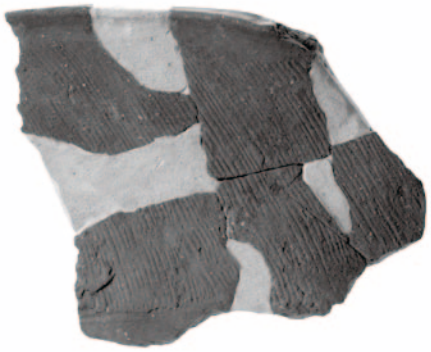
1 区　出土埴輪

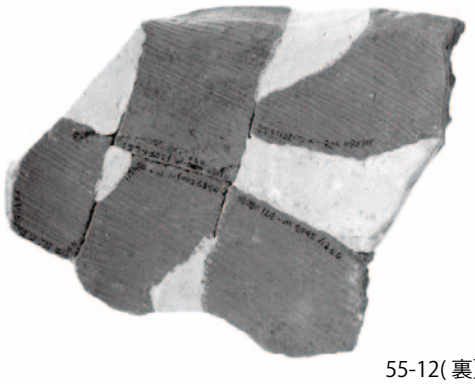

55-10(表)

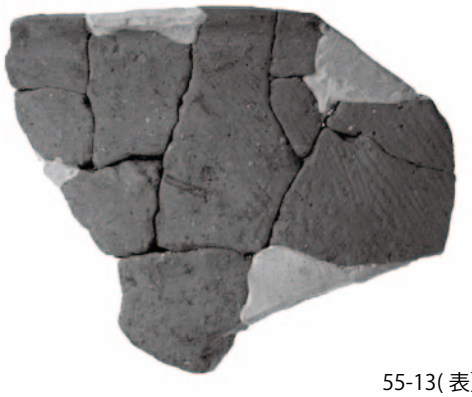
55-10(裏)

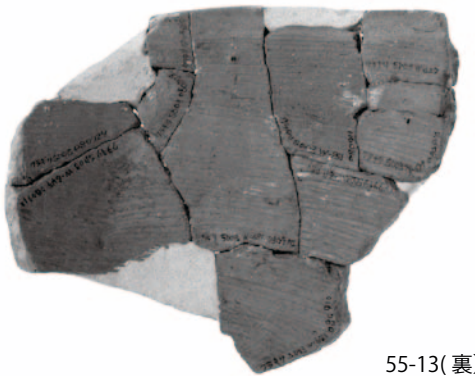

55-11(表)

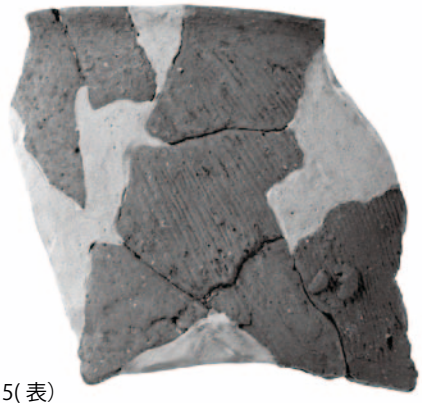
55-11(裏)

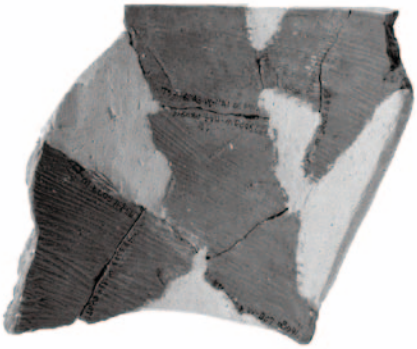

55-12(表)


55-12(裏)

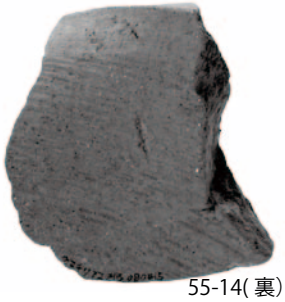

55-13(表)


55-13(裏)


55-15(表)


55-15(裏)

55-14(表)


55-14(裏)

55-16(表)

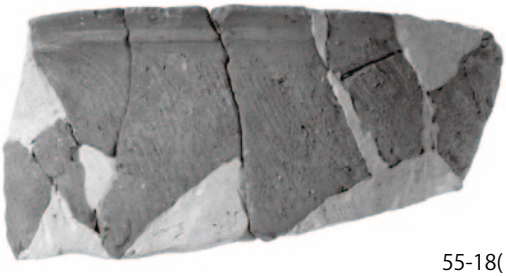
55-16(裏)

1 区　出土埴輪

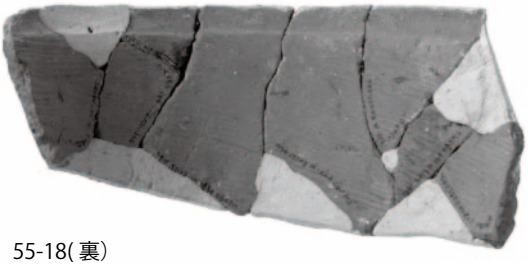
図版 62　鞍切遺跡

55-17(表)

55-17(裏)

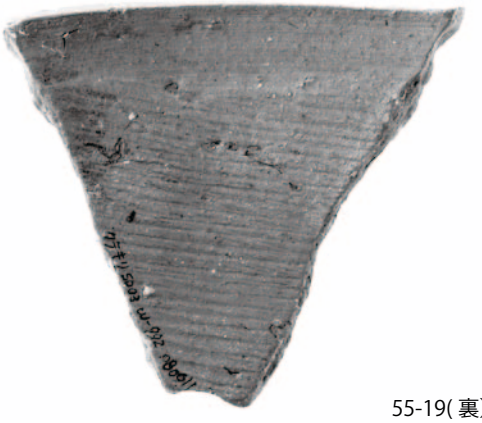


55-18(表)

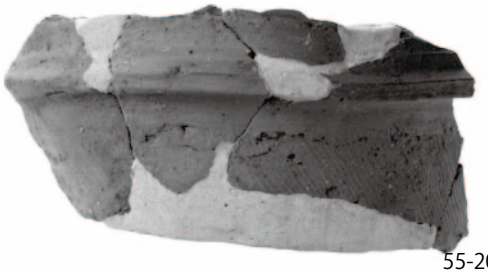


55-18(裏)

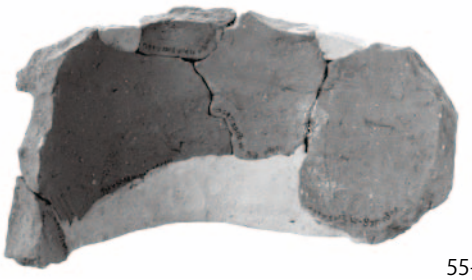
55-19(表)



55-19(裏)



55-20(表)



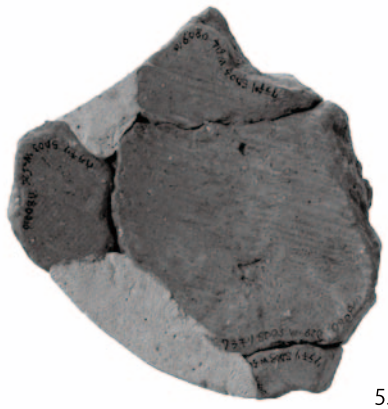
55-20(裏)

55-21(表)

55-21 (裏)

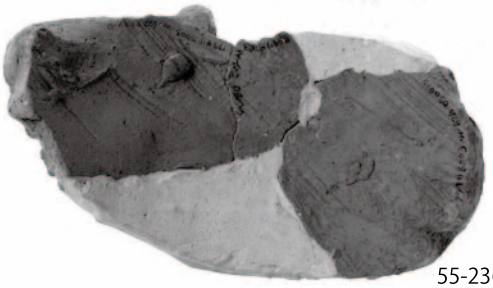
1 区　出土埴輪

55-22(表)



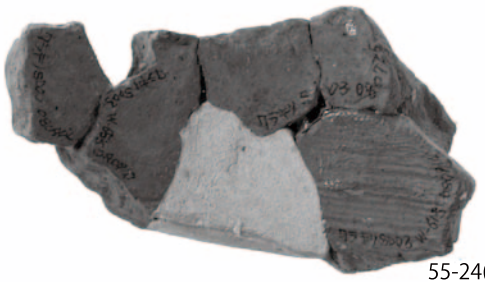
55-22(裏)

55-23(表)



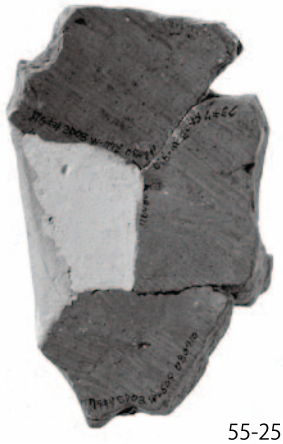
55-23(裏)

55-24(表)



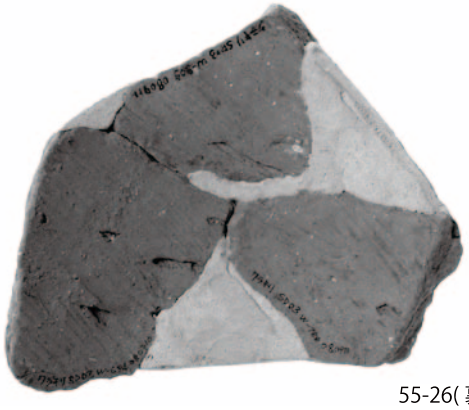
55-24(裏)

55-25(表)



55-25(裏)

55-26(表)



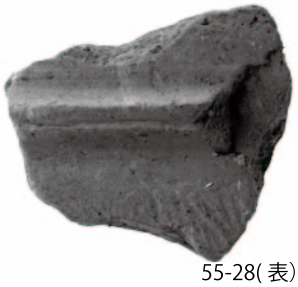
55-26(裏)

1 区　出土埴輪

図版 64　鞍切遺跡

55-27(表)

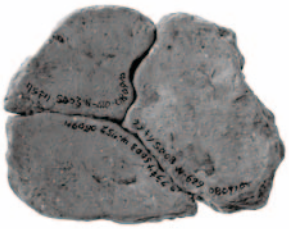
55-27(裏)



55-28(表)

55-28(裏)

55-29(表)

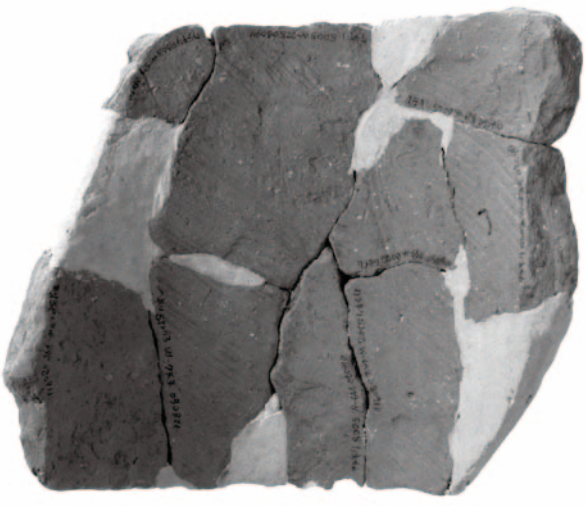


55-29(裏)

56-1(表)

56-1(裏)

56-2(表)



56-2(裏)

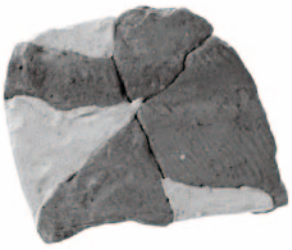
1 区　出土埴輪

56-3(表)

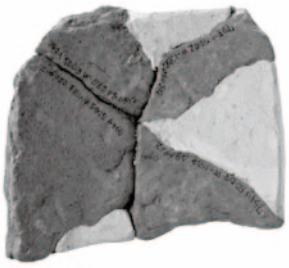
56-3(裏)

56-4(表)

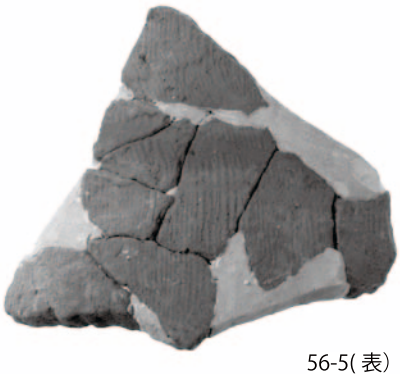
56-4(裏)



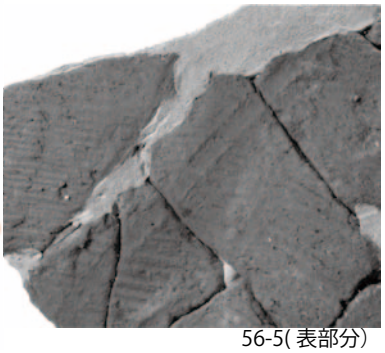
56-6(表)



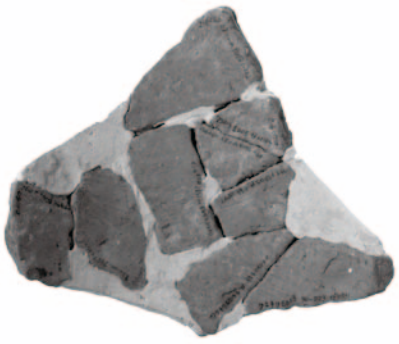
56-6(裏)



56-5(表)

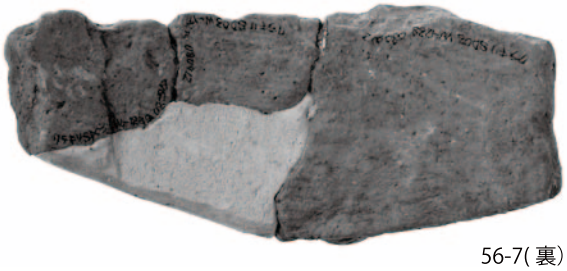


56-5(表部分)



56-5(裏)

56-7(表)



56-7(裏)

1 区　出土埴輪

図版 66　鞍切遺跡

56-8(表)

56-8(裏)

56-9(表)

56-9(裏)

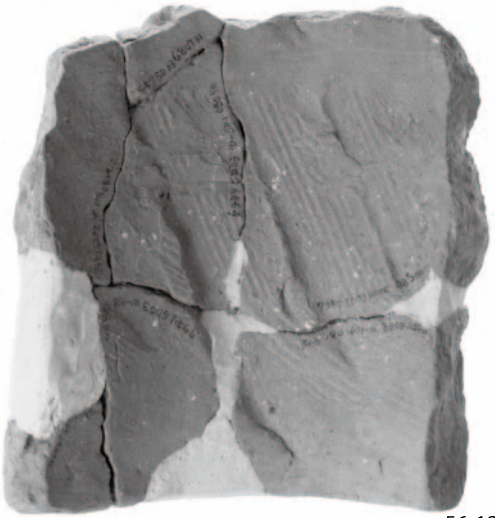
56-10(表)

56-10(裏)

56-11(表)

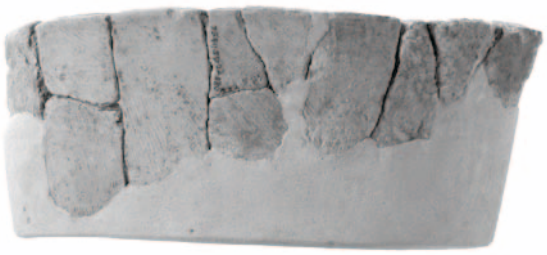
56-11(裏)

56-12(表)

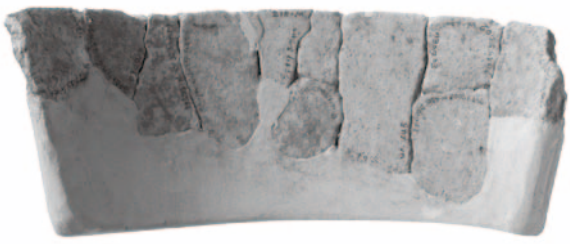


56-12(裏)

1 区　出土埴輪



55-1(表)

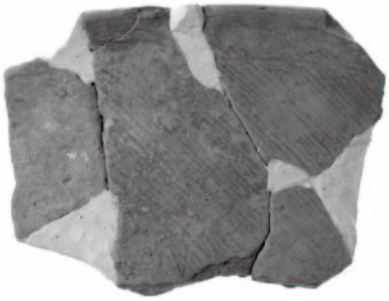


55-1(裏)

55-2(表)

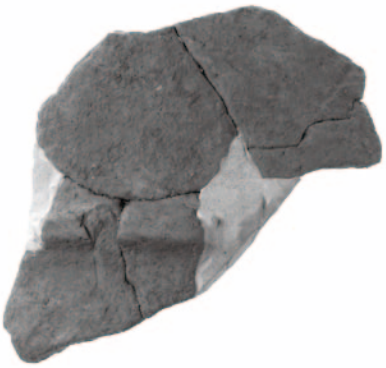
55-2(裏)

55-3

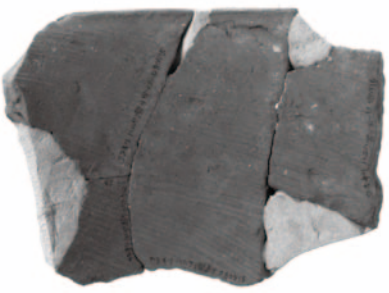


56-13(表)

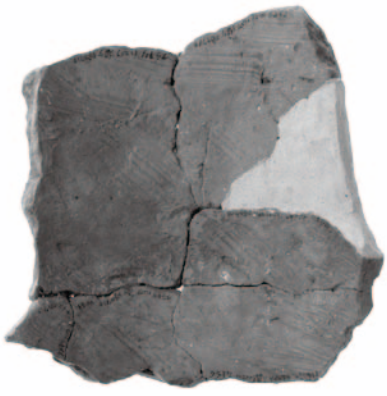
56-14(表)



56-15(表)



56-13(裏)

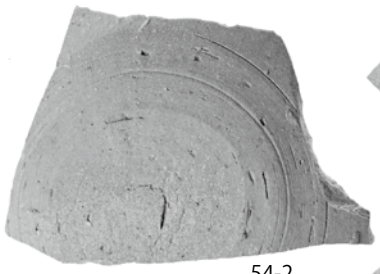


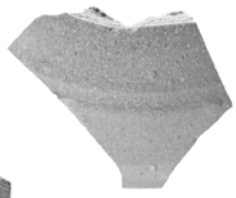
56-14(裏)

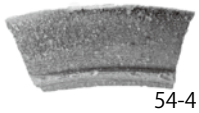
56-15 （裏）

1 区　出土埴輪

54-1


54-2

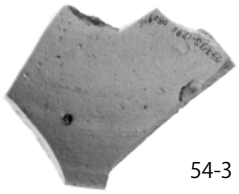

54-3


54-4

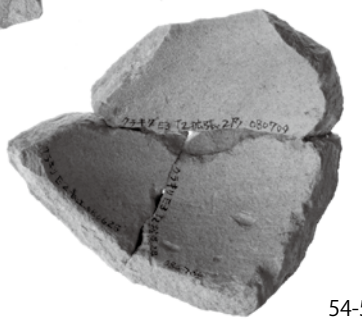
54-5

54-6

54-2

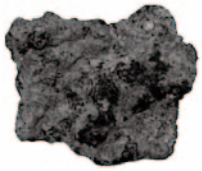

54-3

54-4


54-5

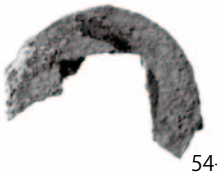
54-7

54-11

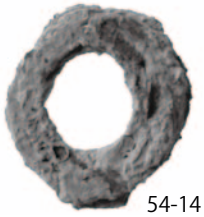

54-12

54-13

54-14


54-15

54-13


54-14

54-15

54-19

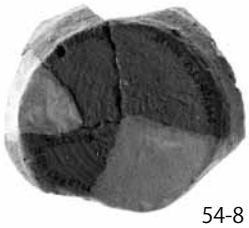
1 区・2 区　出土須恵器・鉄器

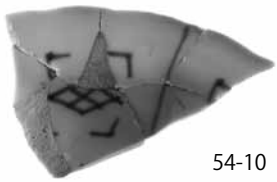
54-8

54-10

54-9

54-9


54-8


54-10

54-9

54-9

54-16

54-17

54-18

54-16

54-17

54-18

1 区・2 区　出土遺物

図版 70　米坂古墳群

南西から米坂古墳群と和久羅山を望む

1 区　集石 1　基壇 1 検出状況（西から）

1 区　集石 3　上面除去状況（北から）

1 区　集石 1　主体部蔵骨器　土層堆積状況（東から）

図版 72　米坂古墳群

1 区　調査前風景

1 区　集石 1　検出状況

1 区　集石 1
調査前状況 (西から)

1 区　集石 1
表土除去状況（北西から）

1 区　集石 1
東西土層堆積状況
（南西から）

1 区　集石 1　基壇上面
検出状況（西から）

図版 74　米坂古墳群

1 区　集石 1　基壇上面
検出状況（北西から）

1 区　集石 1　基壇上面
検出状況（南西から）

1 区　集石 1　作業風景

1 区　集石 1
南北土層堆積状況
（南東から）

1 区　集石 1 南東隅
土層堆積状況 （ 南から）

1 区　集石 1
南北土層北側堆積状況
（東から）

図版 76　米坂古墳群

1 区　集石 1 蔵骨器
（第 75 図 1）（上から）

1 区　集石 1 蔵骨器
(第 75 図 1･3) 出土状況
(西から）

1 区　集石 1 蔵骨器
(第 75 図 1) 出土状況
（西から）

1 区　集石 1　蔵骨器
出土状況（北から）

1 区　集石 1
蔵骨器調査風景

1 区　集石 1
蔵骨器調査状況 (西から)

図版 78　米坂古墳群

1 区　集石 1　蔵骨器
(第 75 図 3) 調査状況
（上から）

1 区　集石 1　蔵骨器
(第 75 図 2) 完掘状況
（上から）

1 区　集石 1
上面除去状況（西から）

1 区　集石 1
基壇検出状況（北西から）

1 区　集石 1 基壇石列 D
礫配置状況（南から）

1 区　集石 1 基壇石列 B'
礫配置状況（北から）

図版 80　米坂古墳群

1 区　集石 1 基壇石列 A
検出状況 (南西から)

1 区　集石 1　主体部
土層堆積状況　アップ
(南から)

1 区　集石 1　主体部
土層堆積状況 (南から)

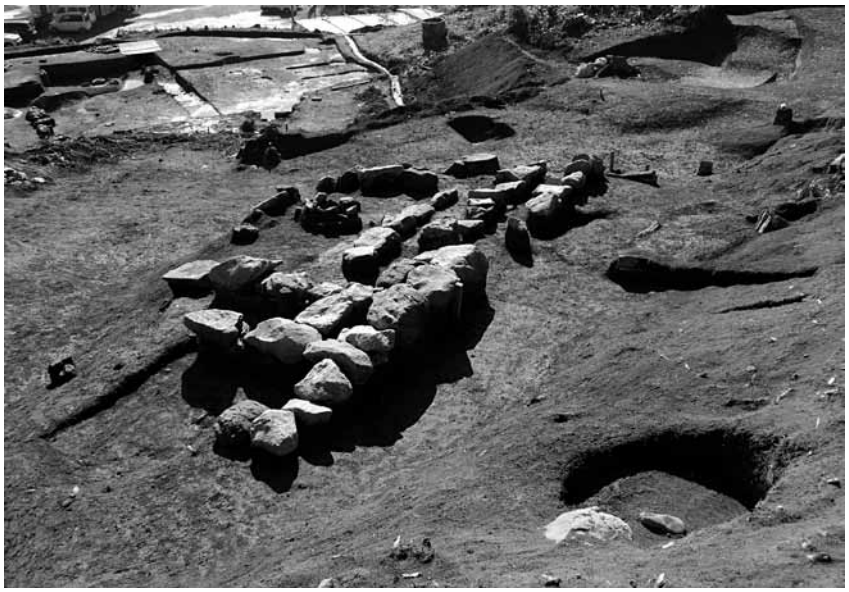
1 区　集石 1　主体部
検出状況 (西から）

1 区　集石 1　主体部
検出状況 (北から）

1 区　集石 1　主体部
蔵骨器完掘状況（西から）

図版 82　米坂古墳群

1 区　集石 1　主体部
石郭（北西から）



1 区　集石 1　基壇基礎
検出状況（北から）

1 区　集石 1
基壇石列 A･B　検出状況
（南西から）

1 区　集石 1
基壇石列 B'・B''　検出状況
（北から）

1 区　集石 1
基壇石列 C と主体部

1 区　集石 1
礫取上げ後（西から）

図版 84　米坂古墳群

1 区　集石 1　調査風景

1 区　集石 1
相輪 (第 76 図 6)
出土状況

1 区　集石 1
石仏 (第 75 図 10)
出土状況（西から）

1 区　集石 1
石仏 (第 75 図 10)
出土状況アップ (西から）

1 区　集石 2　検出状況
（南西から）

1 区　集石 3
検出状況（北西から）

図版 86　米坂古墳群

1 区　集石 3　検出状況
（南東から）

1 区　集石 3
上面除去状況（西から）

1 区　集石 3　下段
検出状況（北から）

1 区　集石 7
検出状況（北東から）

1 区　1 号墳
調査状況　(北西から）

2 区　2 号墳
調査前状況（北東から）

図版 88　米坂古墳群

2 区　2 号墳　盛土
東西土層堆積状況
（北東から）

3 区　調査前状況
(南から）

3 区　3 号墳
土層堆積状況（北東から）

3 区　3 号墳周溝
完掘状況（東から）

寺跡区　基本土層
堆積状況　(南から）

寺跡区　SB01
検出状況（西から）

図版 90　米坂古墳群

寺跡区　SB01　検出状況
（南西から）

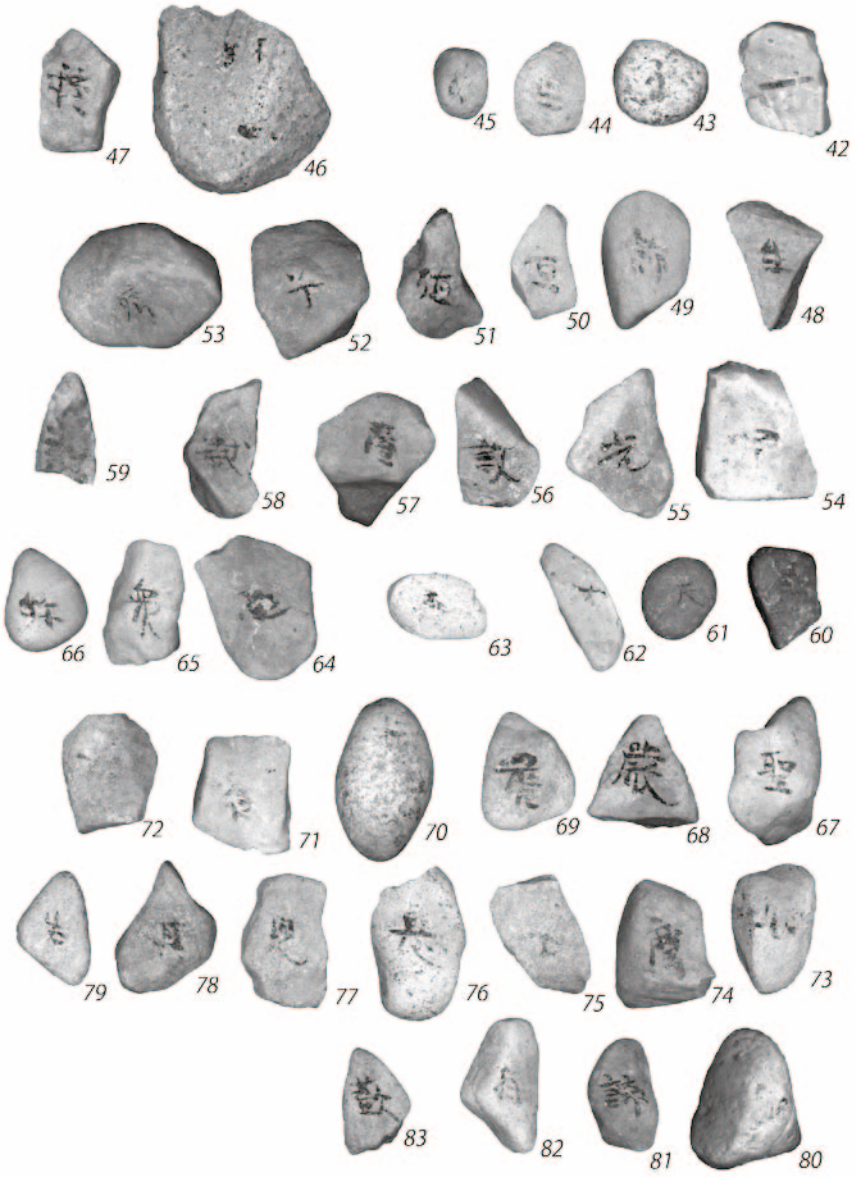
寺跡区　SB01 内
基礎検出状況（南から）

寺跡区　土器溜まり 1
検出状況（上から）

寺跡区　土器溜まり 2
出土状況（南西）

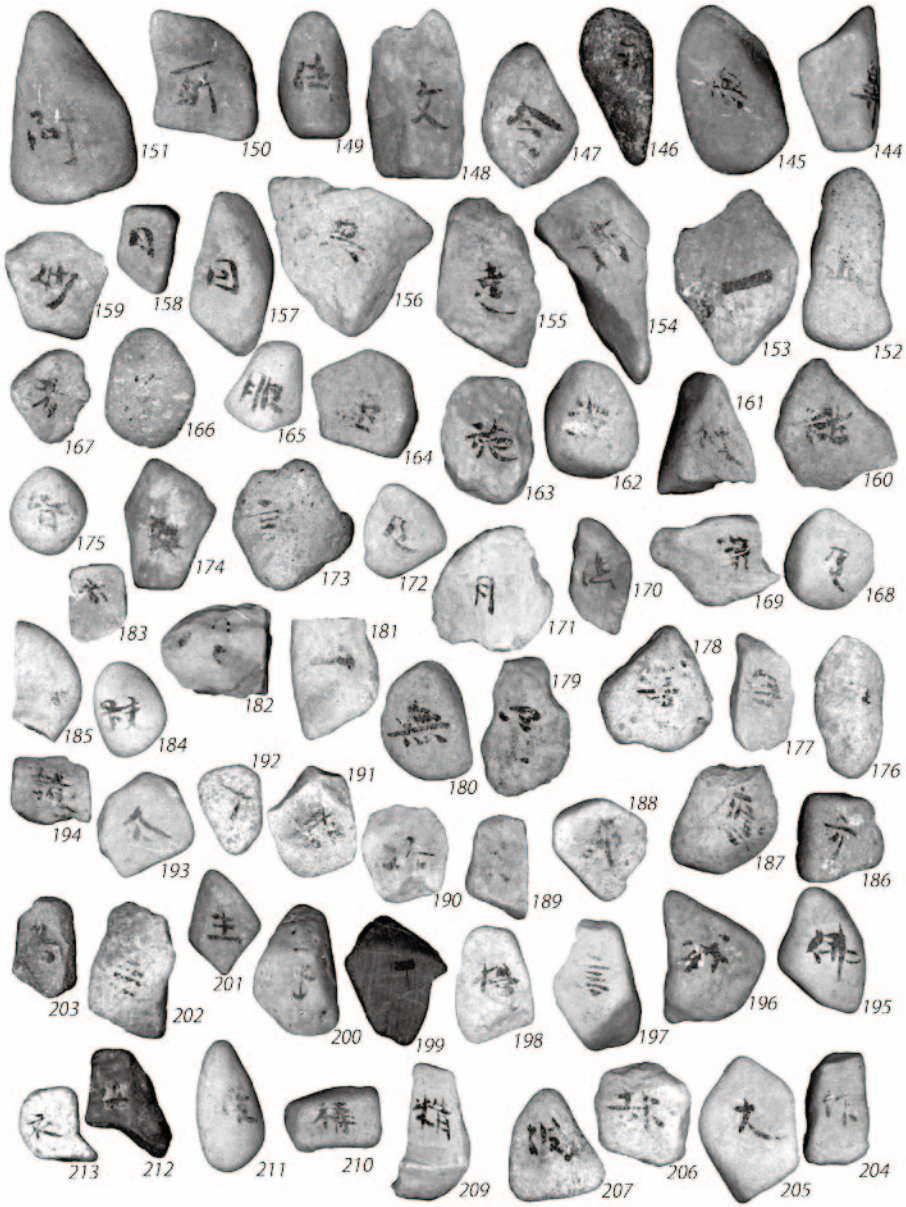
寺跡区　土器溜まり 2
出土状況 （東から）

1 区　集石 1
土器溜まり 1　完掘状況
（東から）



1 区　出土経石（2．42 ～ 83）

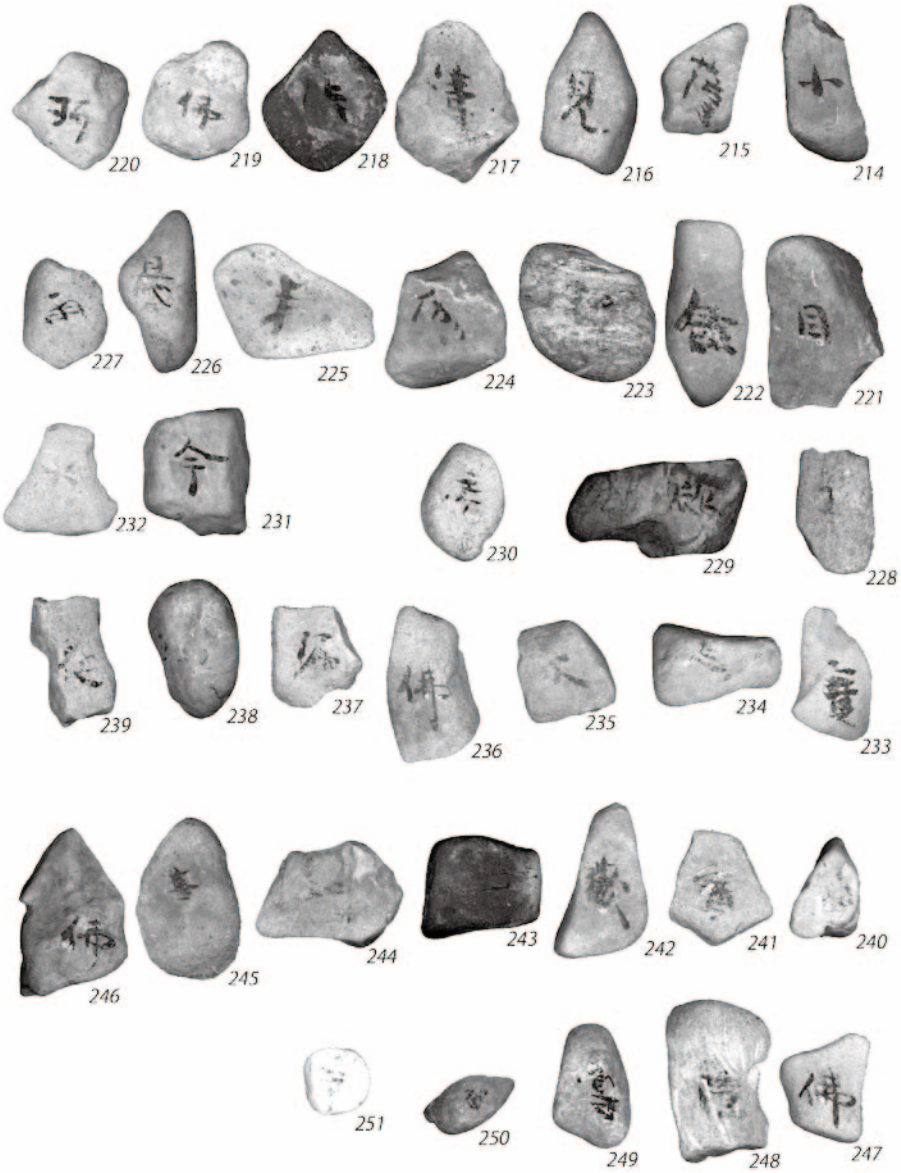
1 区　出土経石（1．1 ～ 41）



1区　出土経石（4．144～213）

1区　出土経石（3．84～143）

1 区　出土経石（6．252 ～ 300）



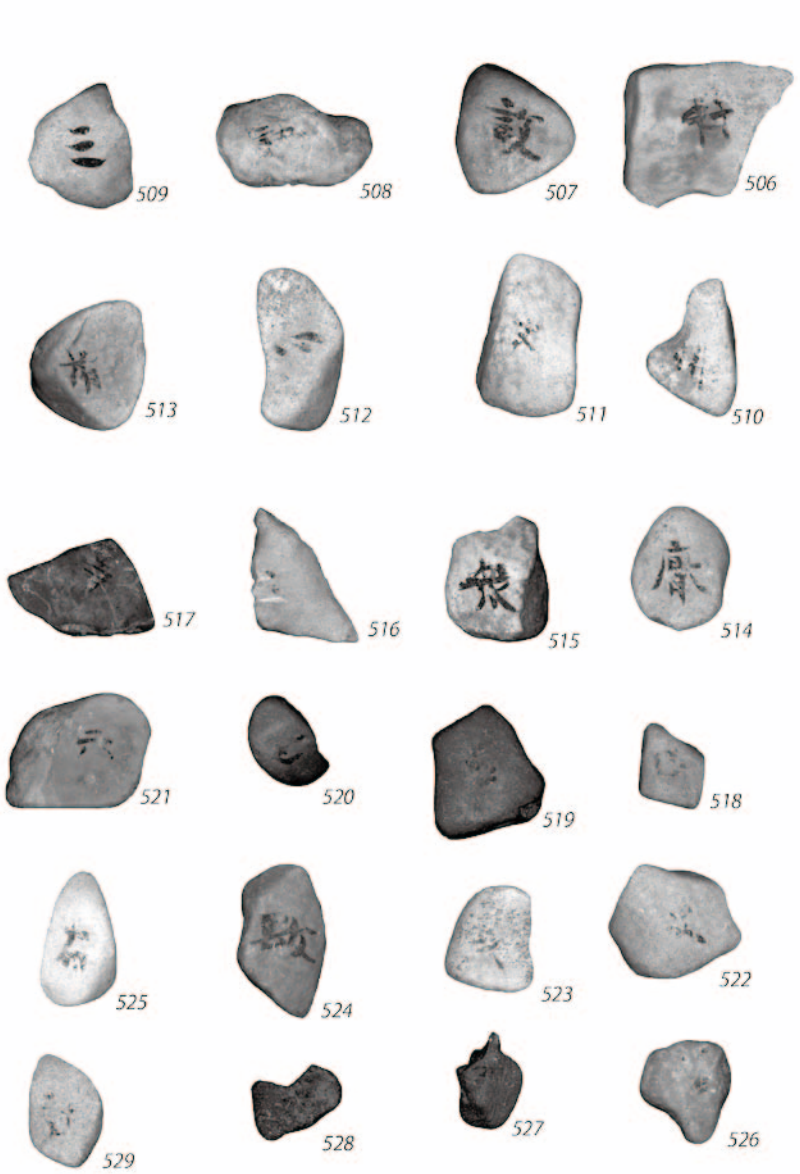
1 区　出土経石（5．214 ～ 251）

1 区　出土経石（8．340 ～ 387）

1 区　出土経石（7．301 ～ 339）

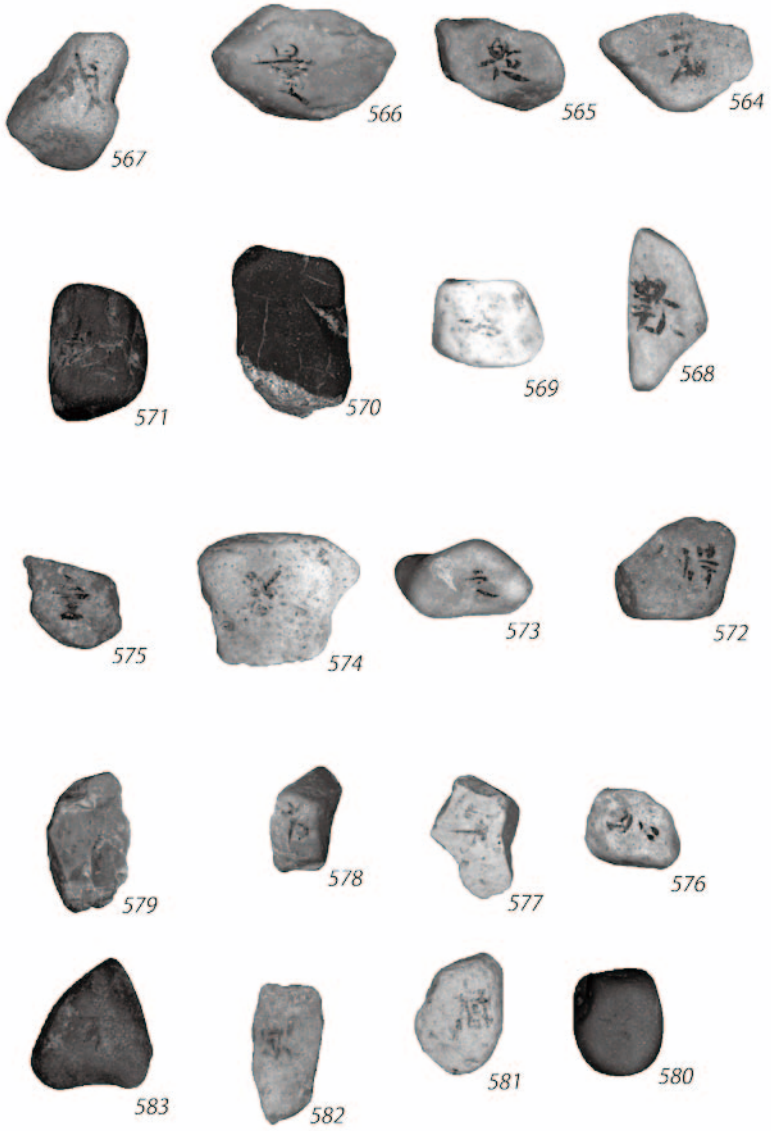
1 区　出土経石（10．436 ～ 465）

1 区　出土経石（9．388 ～ 435）



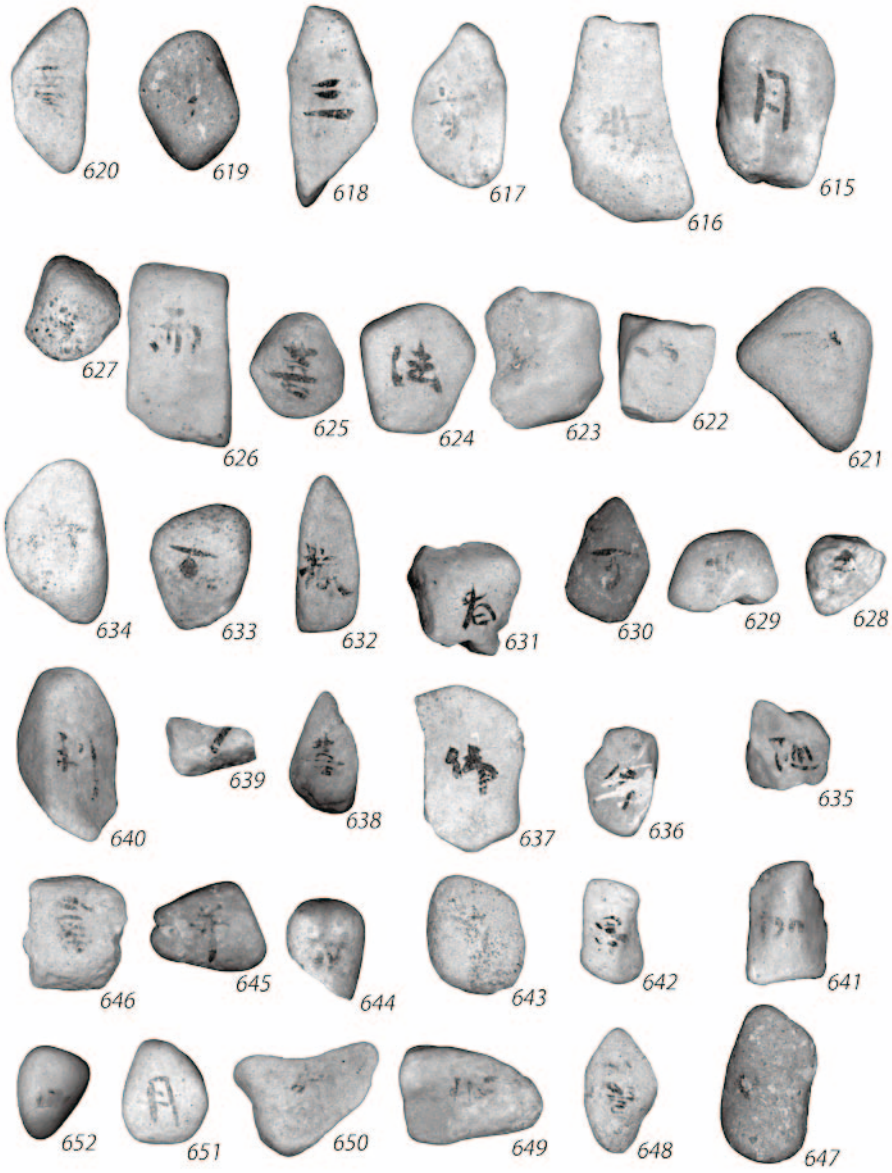
1 区　出土経石（12．506 ～ 529）

1 区　出土経石（11．466 ～ 505）



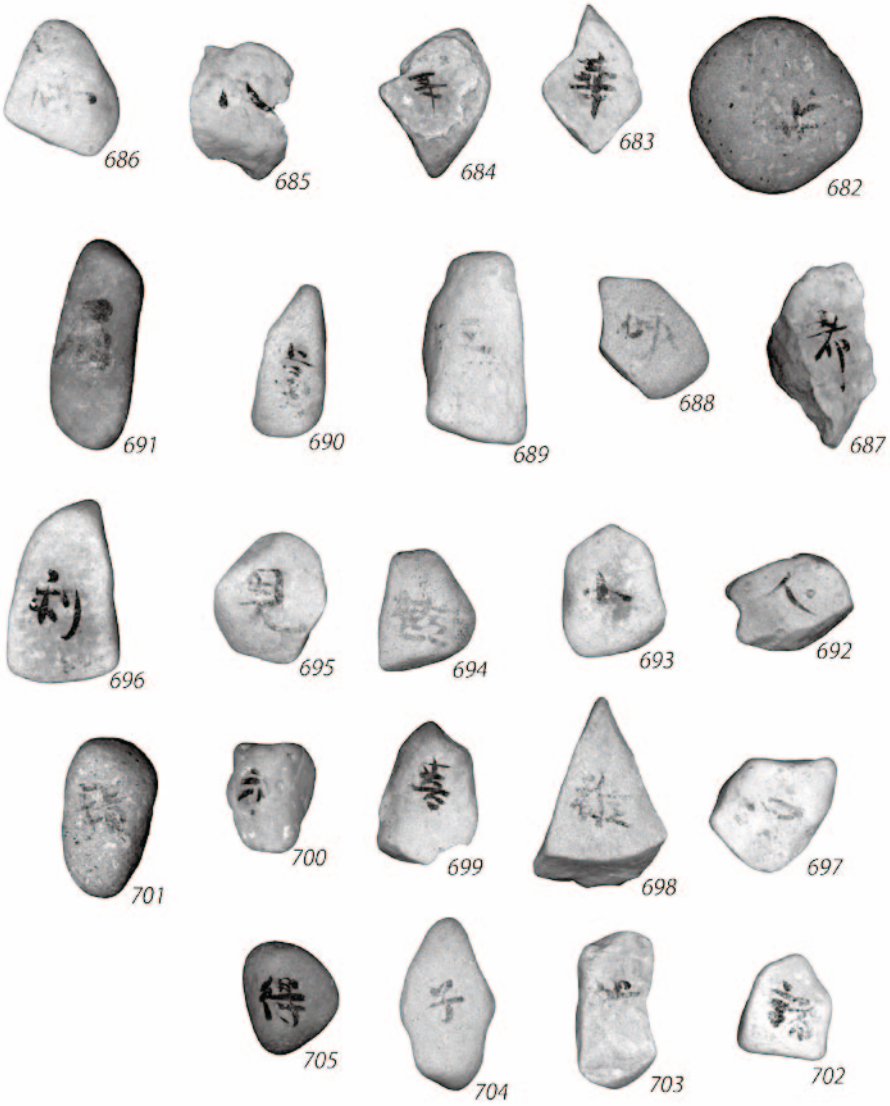
1 区　出土経石（14．564 ～ 583）

1 区　出土経石（13．530 ～ 563）



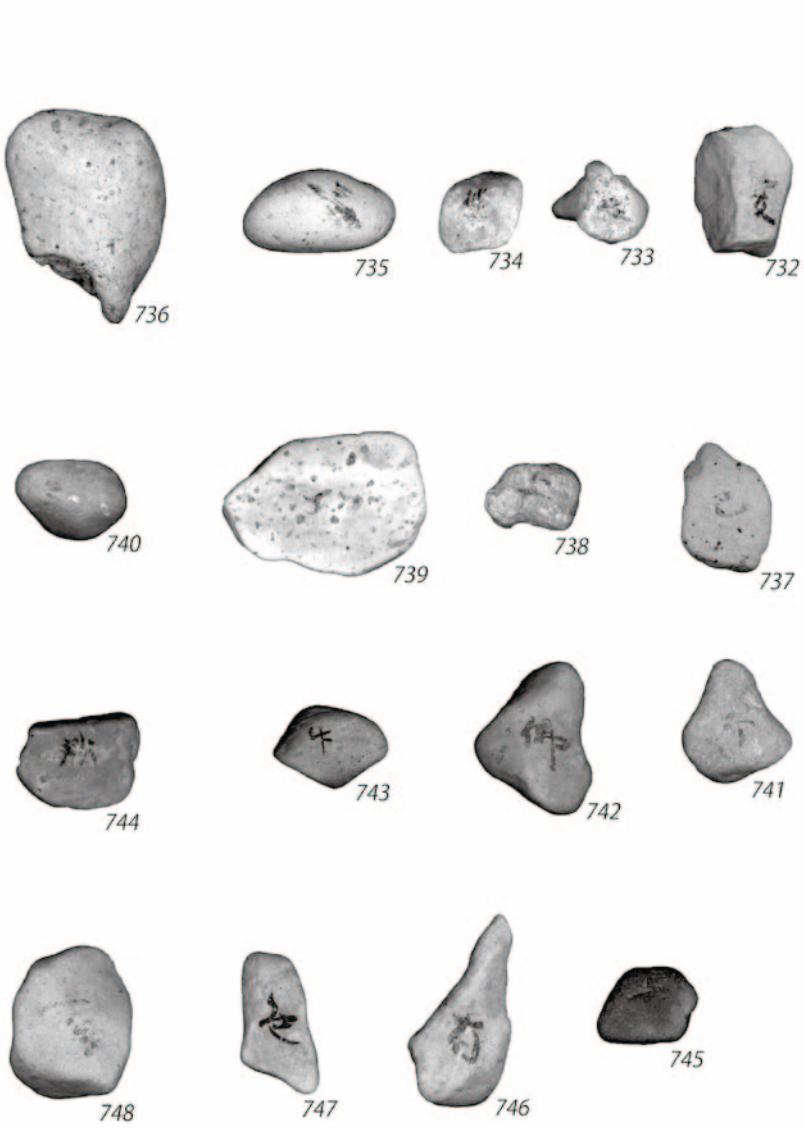
1区　出土経石（16．615～652）

1区　出土経石（15．584～614）

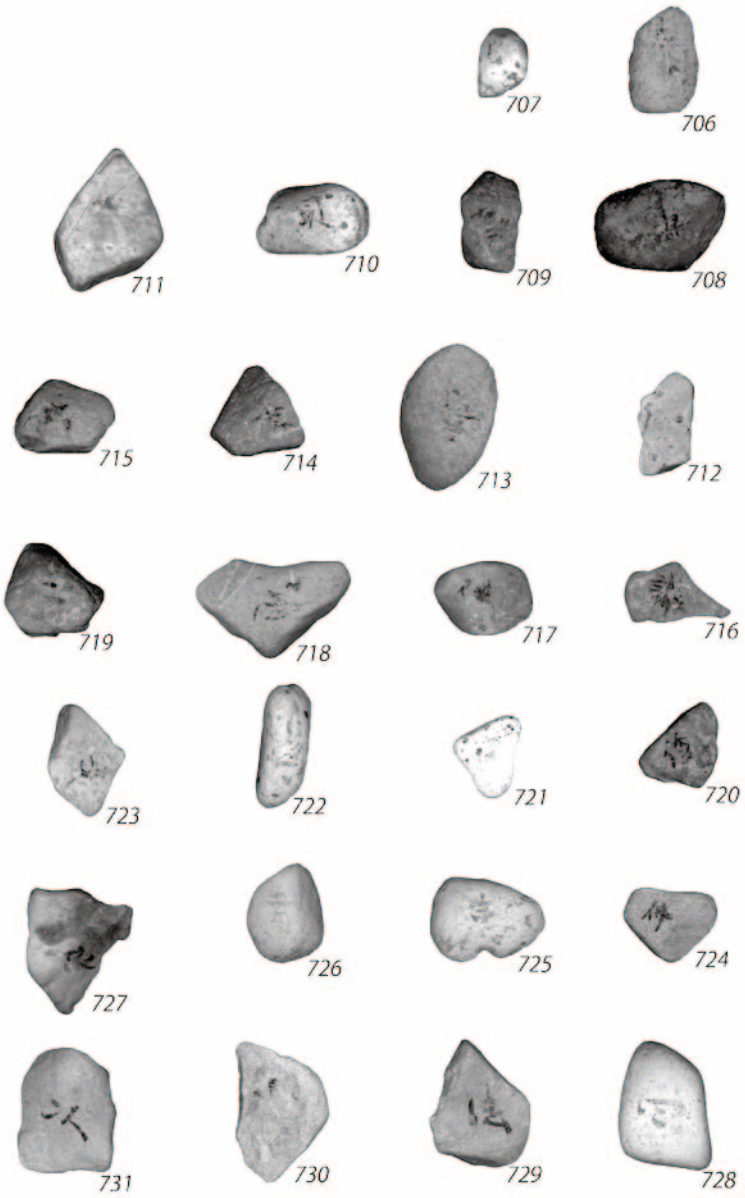


1 区　出土経石（18．682 ～ 705）

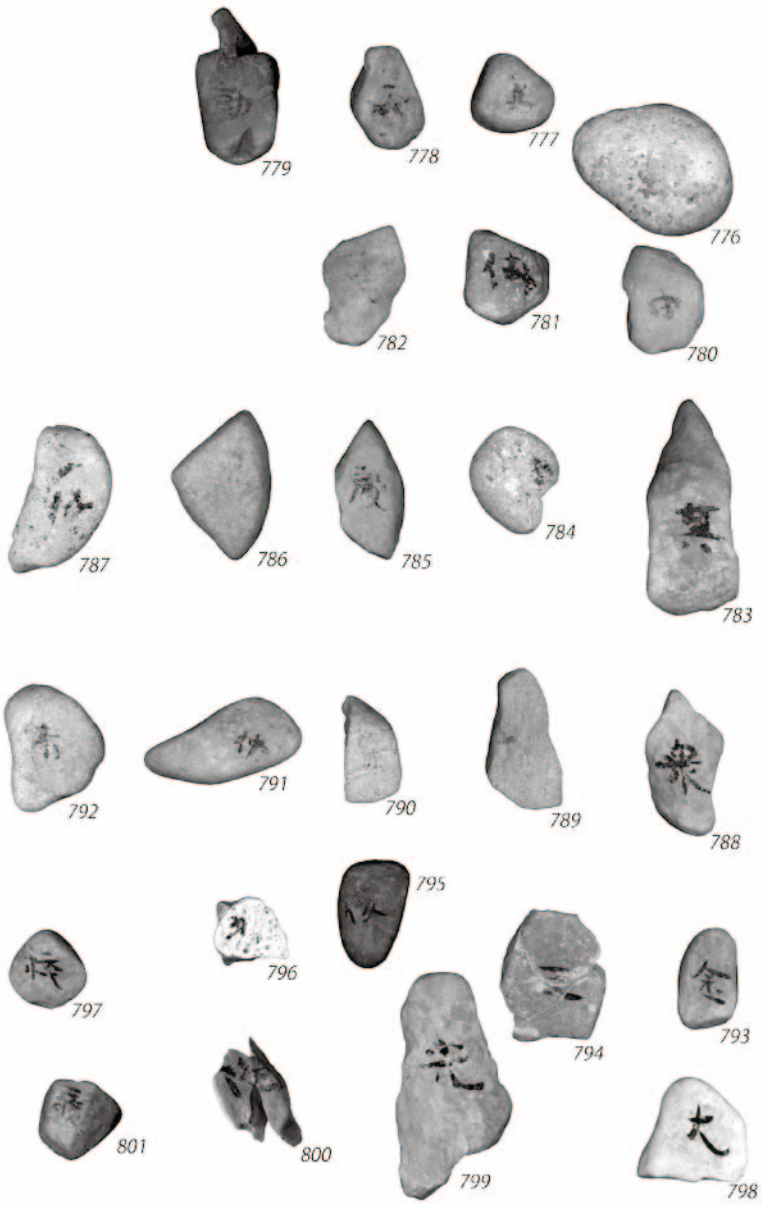
1 区　出土経石（17．653 ～ 681）



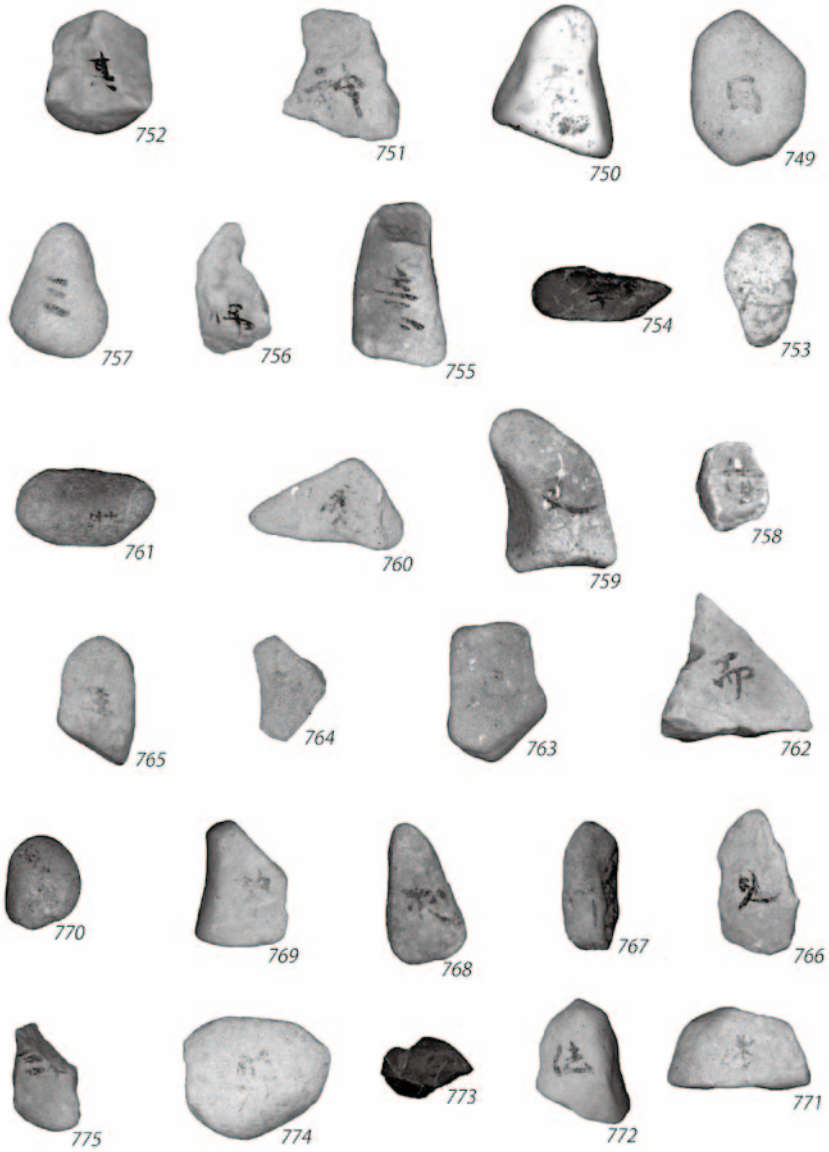
1 区　出土経石（20．732 ～ 748）



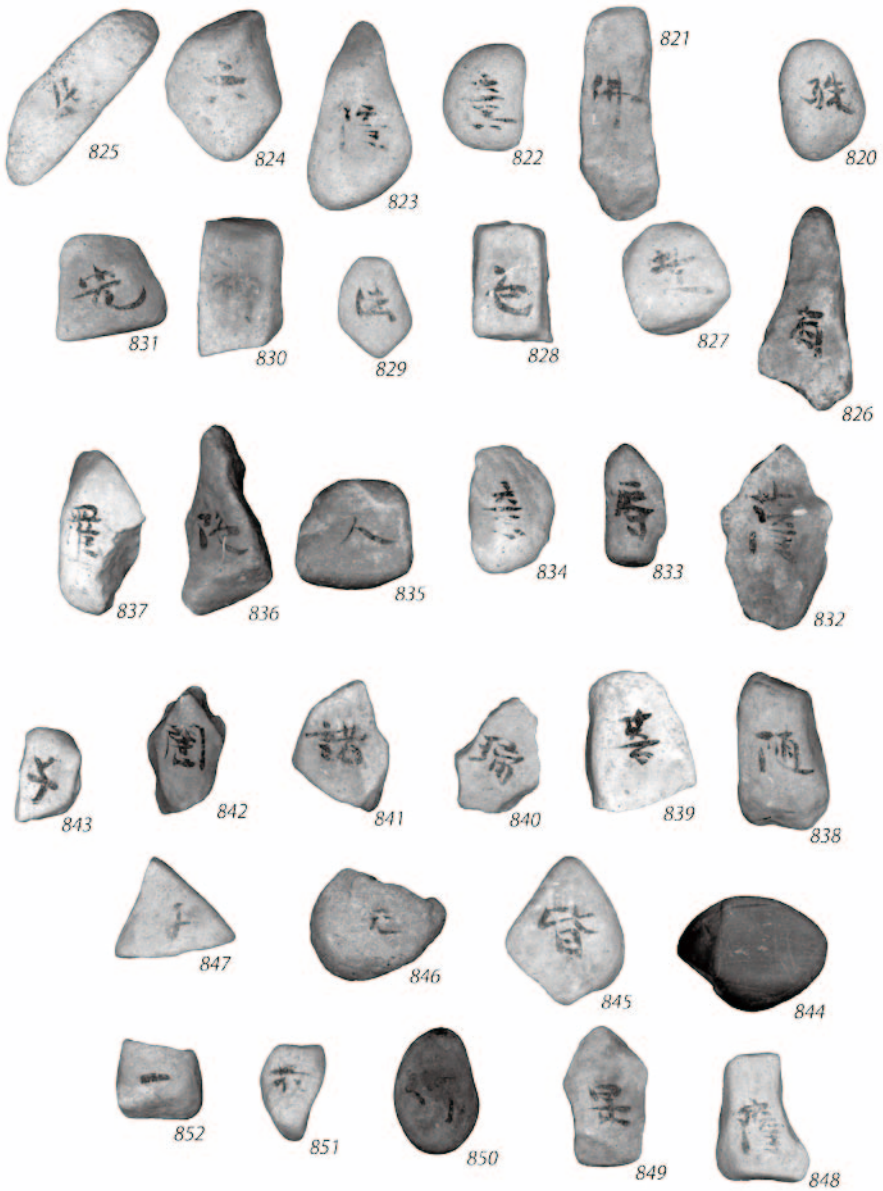
1 区　出土経石（19．706 ～ 731）



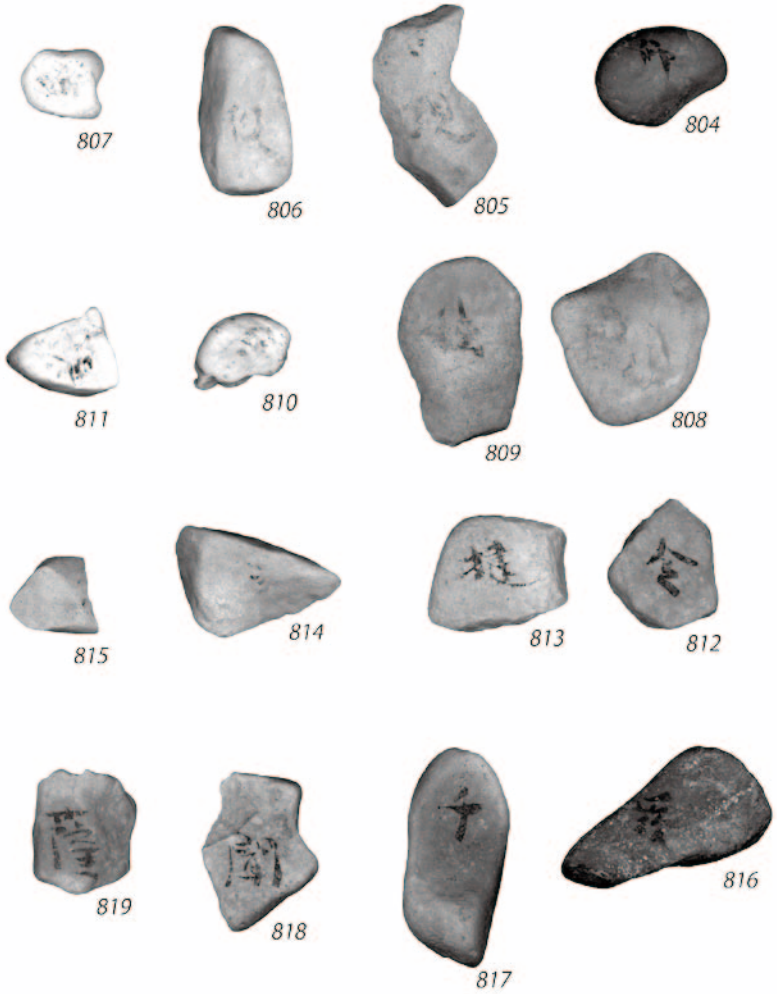
1 区　出土経石　（22．776 ～ 801）



1 区　出土経石（21．749 ～ 775）



1 区　出土経石（24．820 ～ 852）



1 区　出土経石（23．804 ～ 819）

図版 104　米坂古墳群

76-1

77-1

77-2

77-3

77-4

77-5

77-6

82-1

83-1

83-2

83-3

1区　出土石塔

78-1

78-2

78-3

78-4

78-5

78-6

78-7

82-2

1 区　出土石塔

図版 106　米坂古墳群

82-3

83-4

84-1

76-2

76-3

79-1

79-2

79-3

1 区　出土石塔

79-4

79-5

79-6

79-7

82-4

84-2

76-4

80-1

1 区　出土石塔

図版 108　米坂古墳群

80-2

80-3

80-4

80-5

82-5

82-6

84-3

1 区　出土石塔

76-5

76-7

76-8

76-6

84-4

76-9

81-1

84-4

1 区　出土石塔

図版 110　米坂古墳群

76-10

81-2

81-3

81-4

81-5

81-7

84-5

1 区　出土石塔

81-8・キリーク

81-8・アク

81-8・タラーク

81-8・ウーン

84-6

82-7

84-7

81-6

84-8

1 区　出土石塔

集石 1　出土遺物　仏花瓶・正面

集石 1　出土遺物　仏花瓶・右側面

集石 1　出土遺物　仏花瓶・背面

集石 1　出土遺物　仏花瓶・正面斜め上から

土器溜まり 1　出土遺物　須恵器・甕

土器溜まり 2　出土遺物　須恵器・甕

集石 1　出土遺物　備前焼・壺

集石 1　出土遺物　備前焼・壺

1 区　寺跡区　出土遺物

図版 114　米坂古墳群

75-5

85-2

75-4

85-1

75-7

85-9

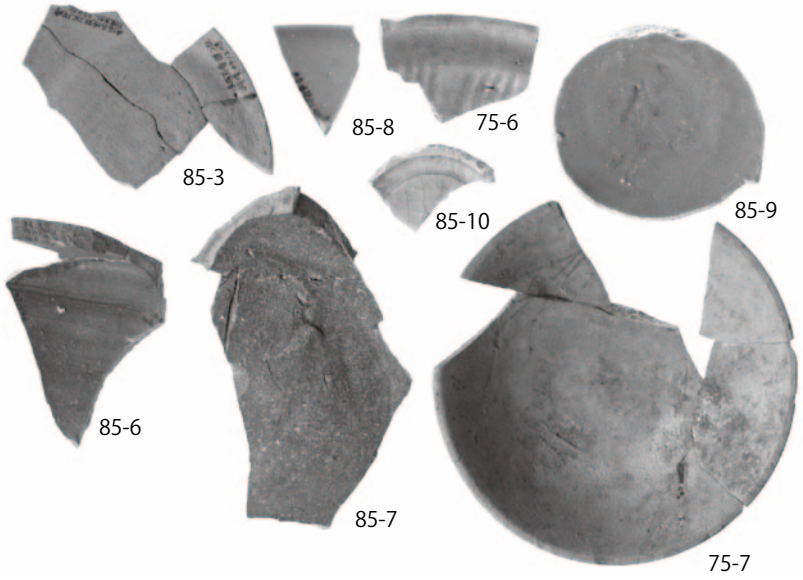
75-8・9

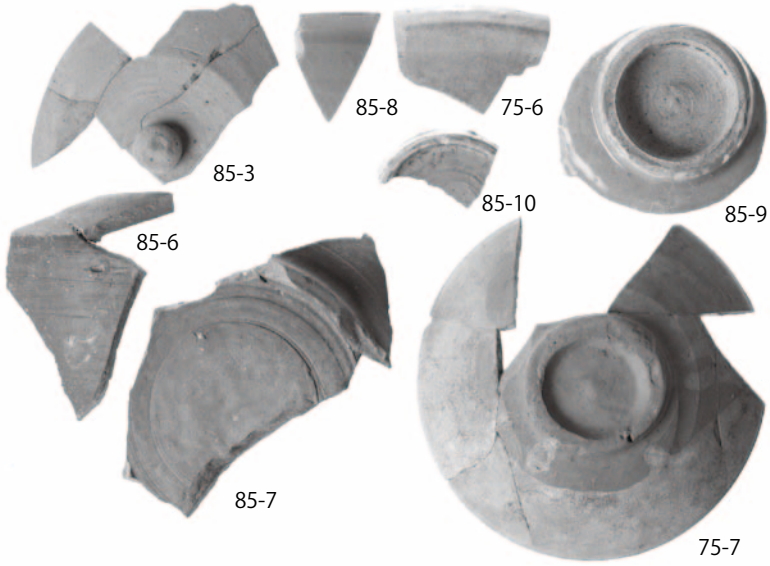
85-11

75-11
土製品頭部・左側面

75-11
土製品頭部・正面

1・2・3・寺跡区　出土遺物





出土遺物　石仏頭部
（左側面・正面）

1・2・3・寺跡区　出土遺物

図版 116　米坂遺跡

調査前状況（西から）

SD01 検出状況（西から）

SD01 礫出土状況
（北から）

SD01 完掘状況（北西から）

SD01 完掘状況（東から）

SD02 検出状況
（北から）

図版 118　米坂遺跡

SD02 土層堆積状況
その 1（北から）

SD02 土層堆積状況
その 2（北から）

SD02 遺物出土状況
（北から）

SD02 完掘状況（北から）

SD03・04 完掘状況
（西から）

同上（北東から）

図版 120　米坂遺跡

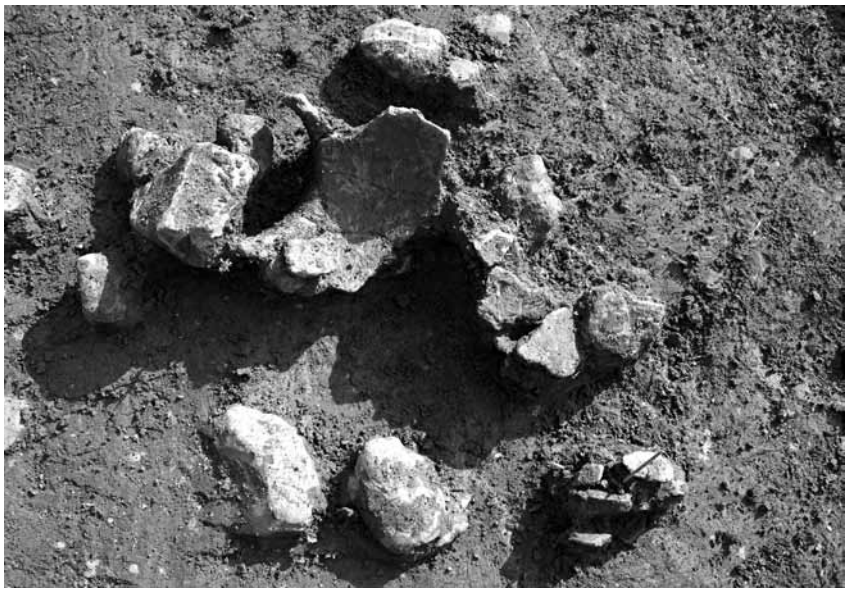
SD03・04 完掘状況
（北から）

焼土面 1 検出状況
（東から）

焼土面 2 検出状況
（東から）

焼土面２土層堆積状況

遺物出土状況　その１



遺物出土状況　その２

図版 122　米坂遺跡

94-3

94-5

94-6

94-7

94-8

94-9

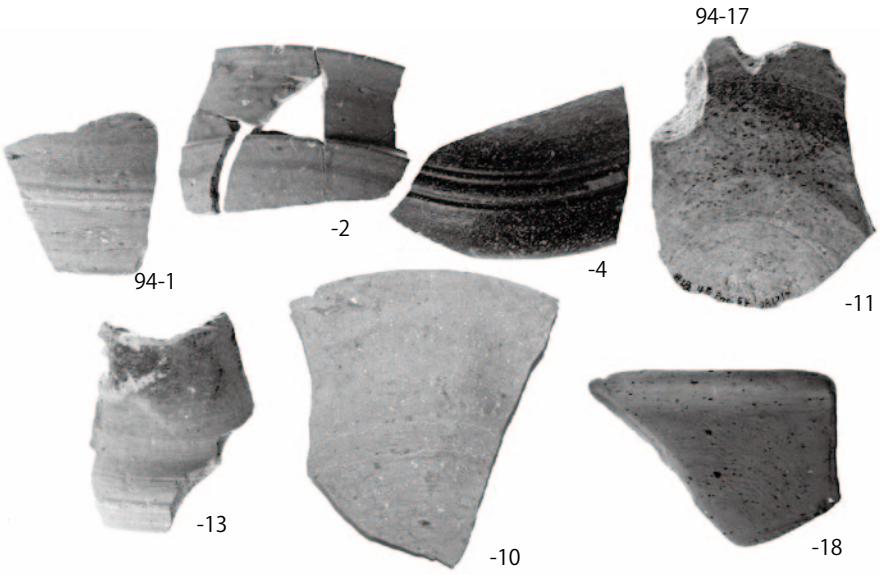
94-12

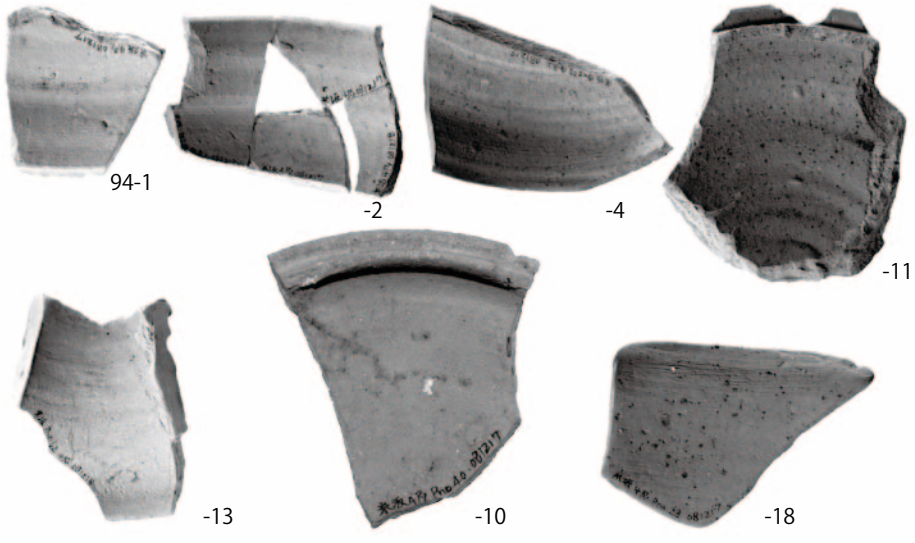
94-14

出土須恵器

94-15

94-16


94-17
94-1
-2
-4
-11
-13
-10
-18


94-1
-2
-4
-11
-13
-10
-18

出土須恵器

95-1

95-2

95-3

95-4

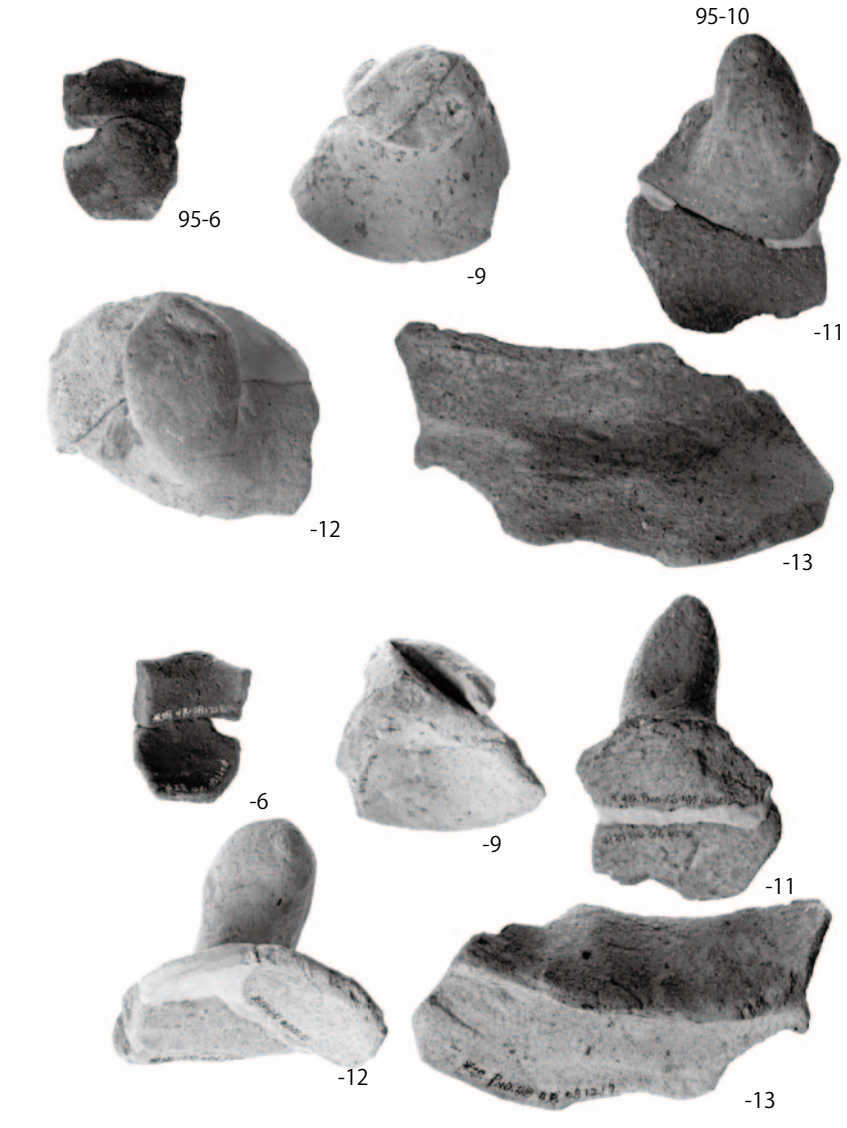
95-5

95-7

出土土師器

95-8

95-9

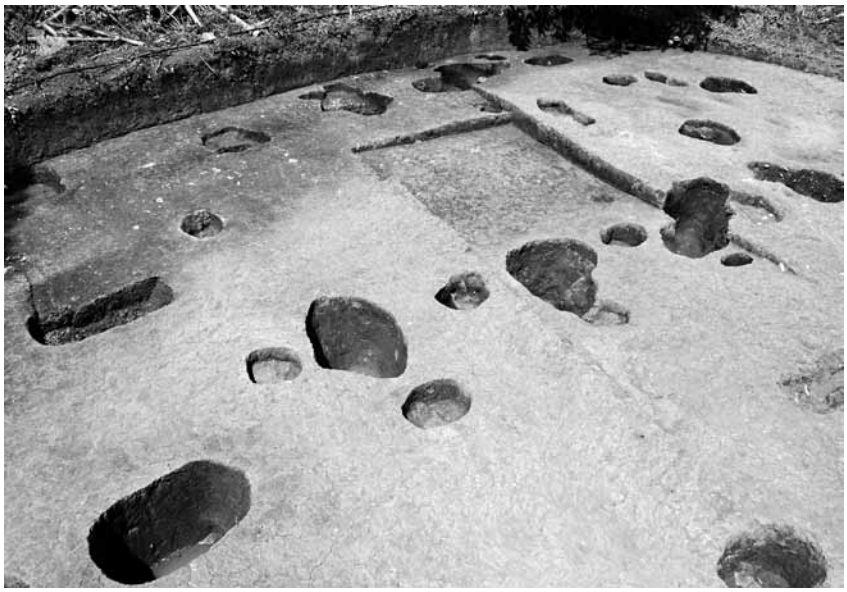


出土土師器

図版 126　客戸遺跡

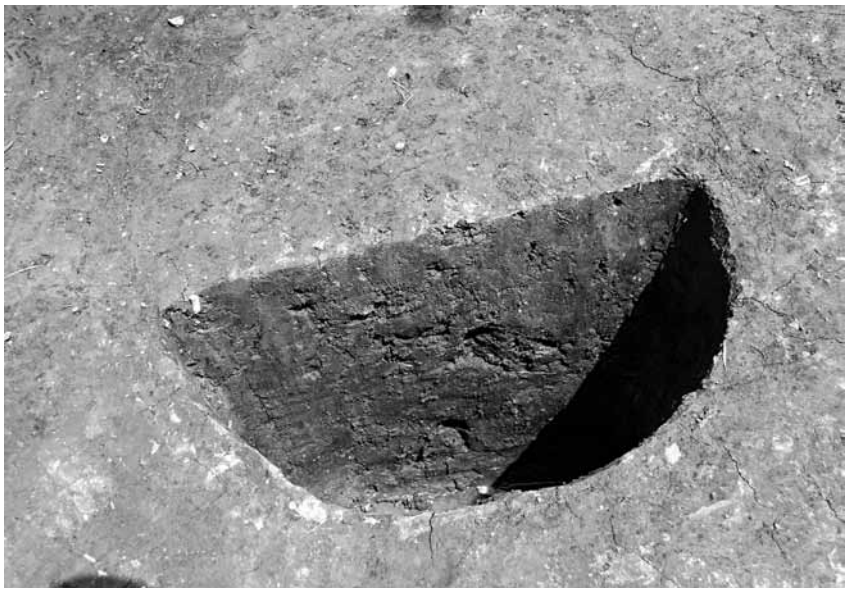
東壁土層堆積状況
（西から）

SB01 完掘状況
（南東から）



同上
（南西から）

SB01(ピット 22)
土層堆積状況
（東から）

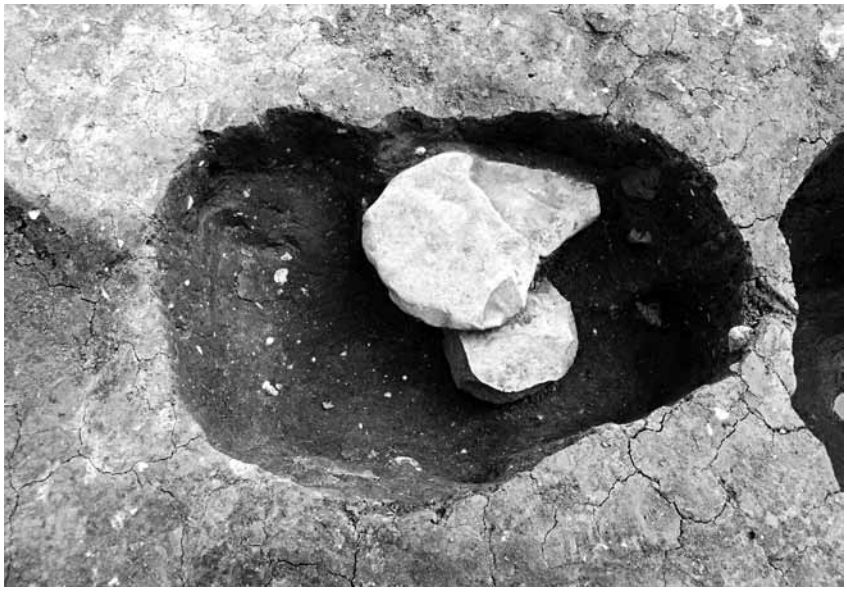


SB01(ピット 28)
土層堆積状況
（西から）

SB01(ピット 15)
完掘状況　（北東から）

図版 128　客戸遺跡

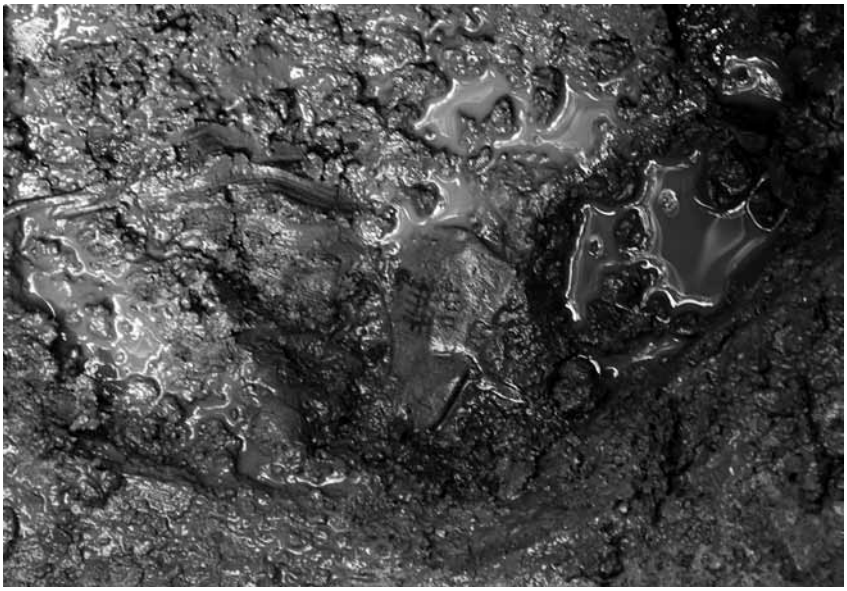
SB01(ピット 37)
完掘状況　（南から）



ピット 21 完掘状況
（北から）

ピット 11 完掘状況
（北東から）

ピット 27 土層堆積状況
（西から）



墨書礫　第 100 図 3
出土状況

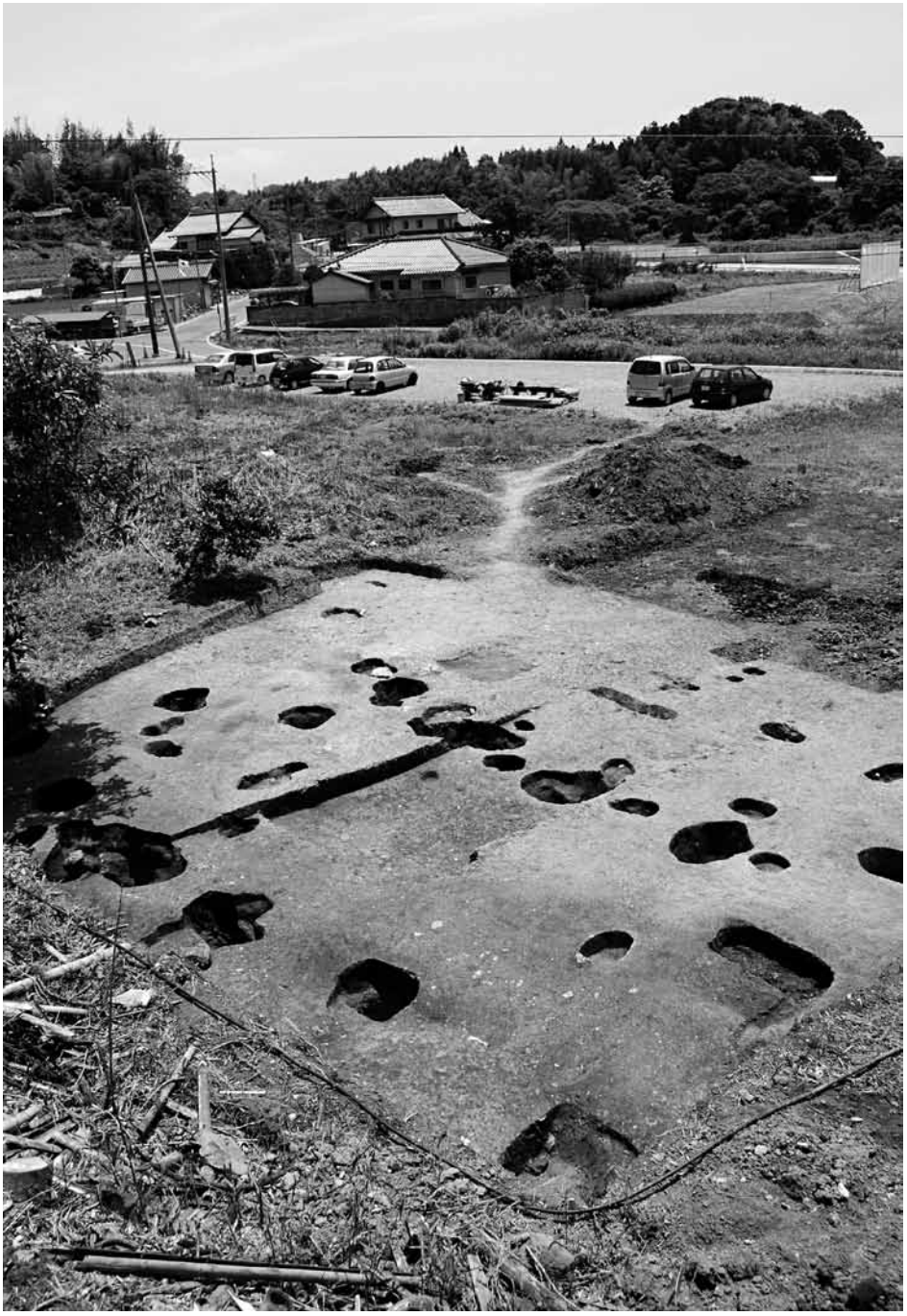
調査風景

図版 130　客戸遺跡

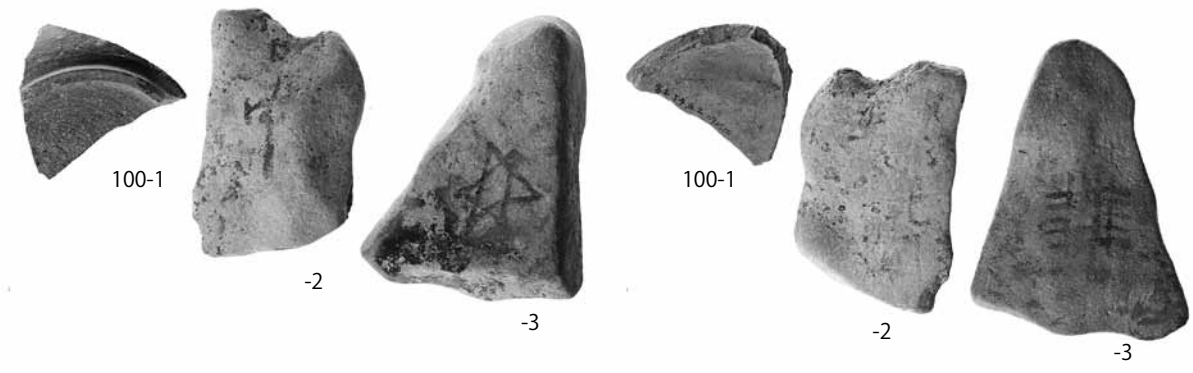
3 トレンチ土層堆積状況
（北から）

4 トレンチ土層堆積状況
（東から）

2 トレンチ土層堆積状況
（東から）



完掘状況（北西から）

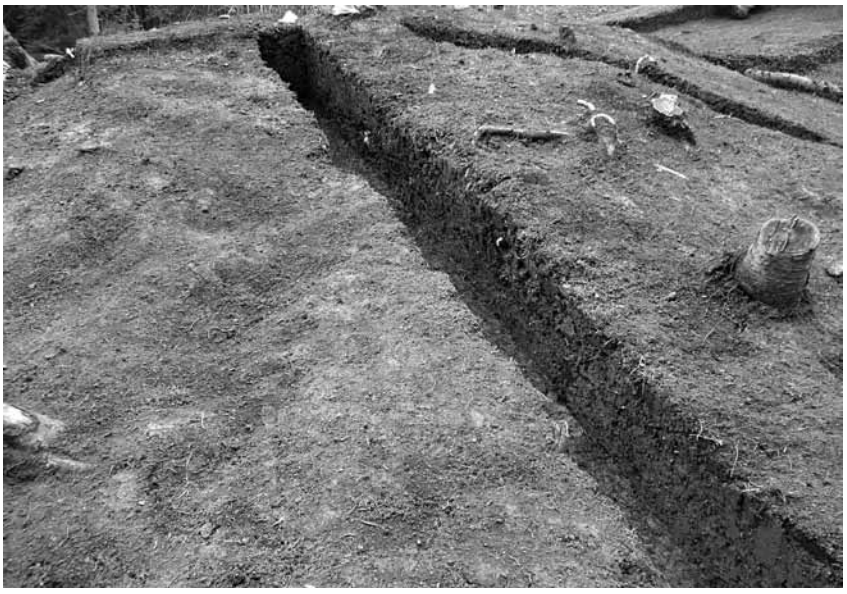


出土遺物

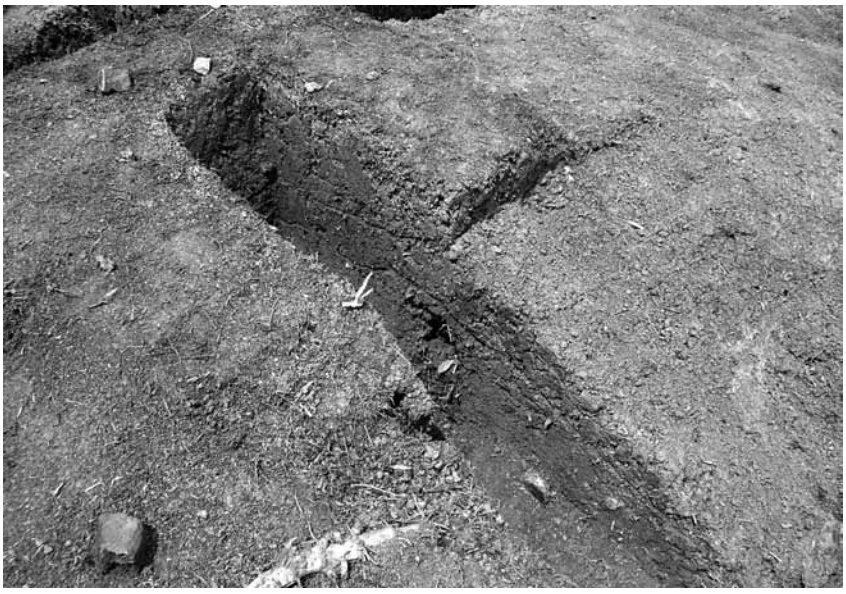
図版 132　藤廻遺跡

盛土状遺構
表土除去状況（北西から）

盛土状遺構（西側）
土層堆積状況（西から）



盛土状遺構（東側）
土層堆積状況（西から）



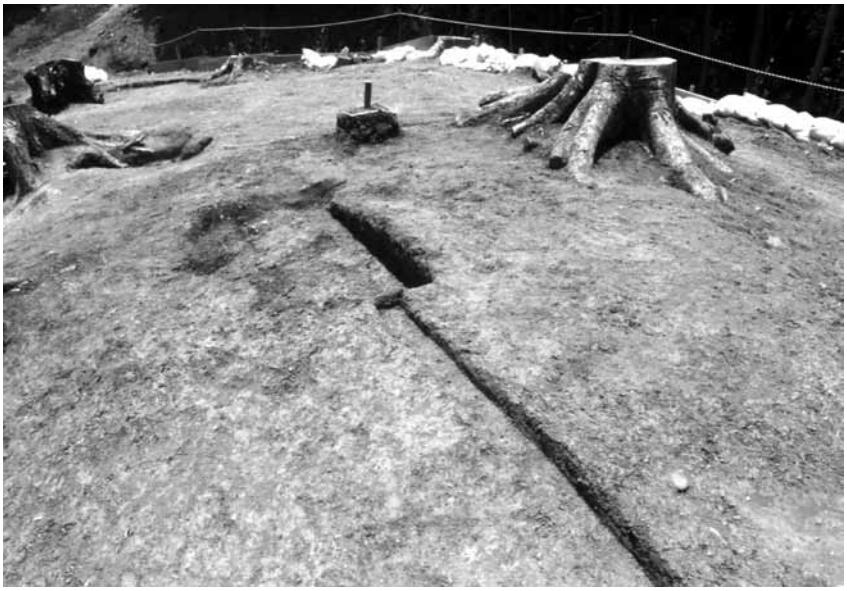
盛土状遺構（南側）
堆積状況（南から）

盛土状遺構（北側）
土層堆積状況（西から）

盛土状遺構
２層除去状況（北から）

図版 134　藤廻遺跡

盛土状遺構旧表土上面
検出状況（西から）

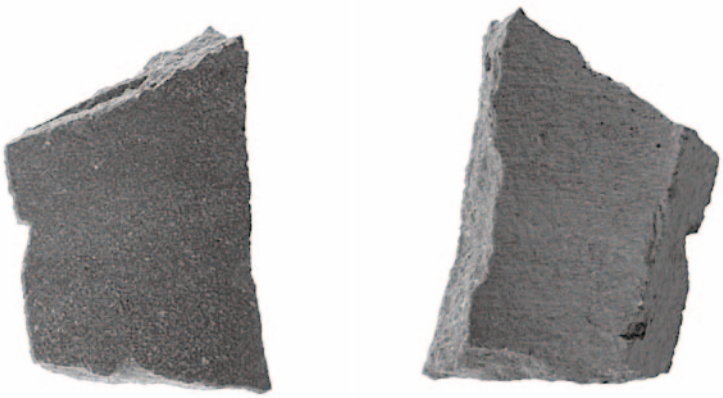


完掘状況（南から）

SD01 土層堆積状況
（西から）

柱穴完掘状況（西から）

調査風景（北から）



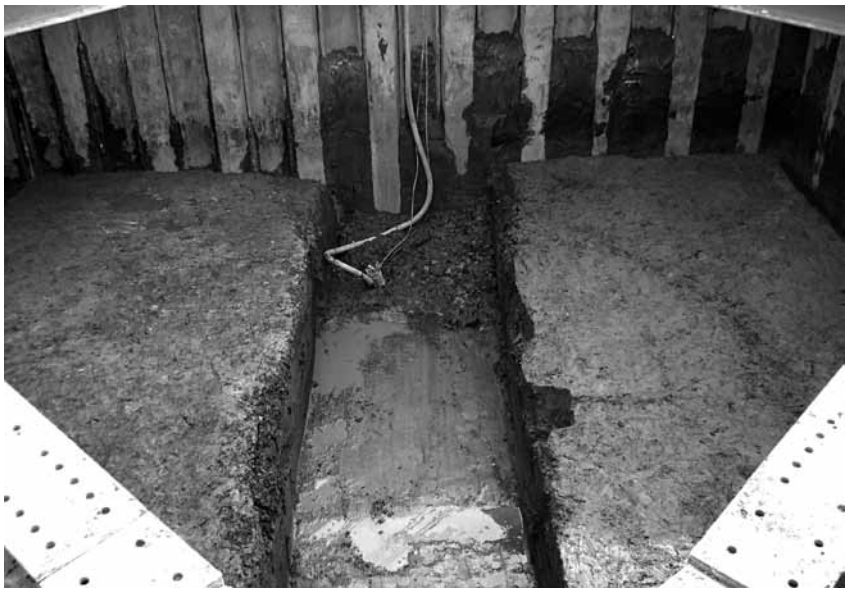
出土遺物（外面・内面）

図版 136　石台Ⅱ遺跡

調査前状況（東から）

矢板打設状況（北から）

東壁土層堆積状況
（西から）



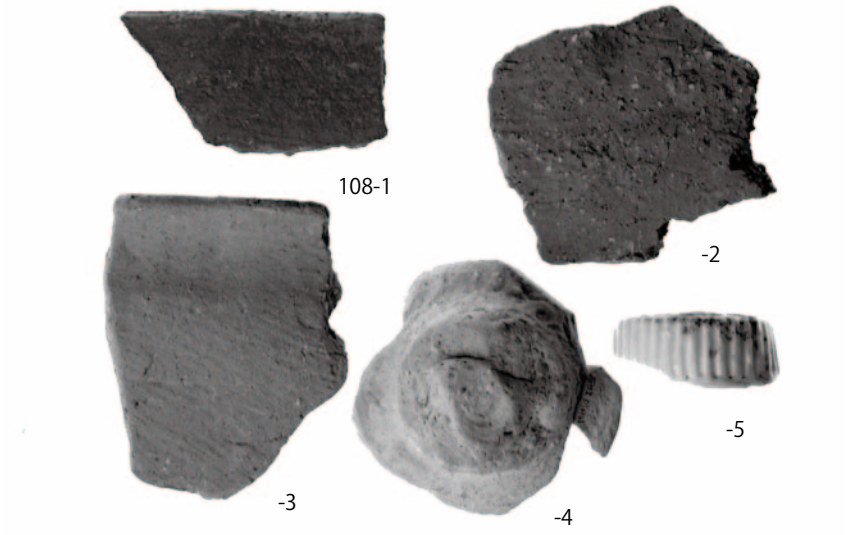
完掘状況（南から）

完掘状況（西から）

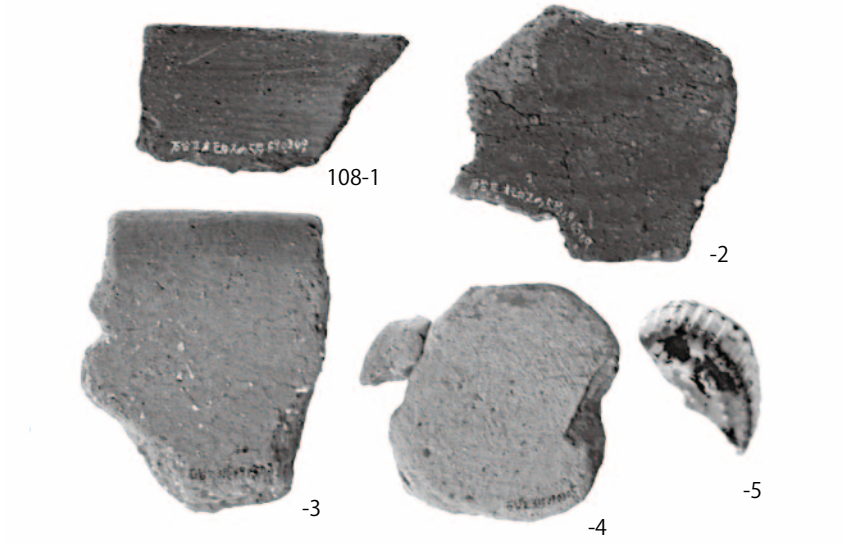
土層堆積状況（北西から）

図版 138　石台Ⅱ遺跡

調査風景



出土遺物



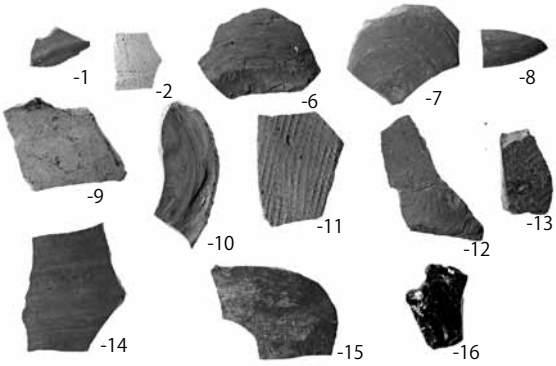
出土遺物

空撮写真（東から）

掘立柱建物跡

SX01

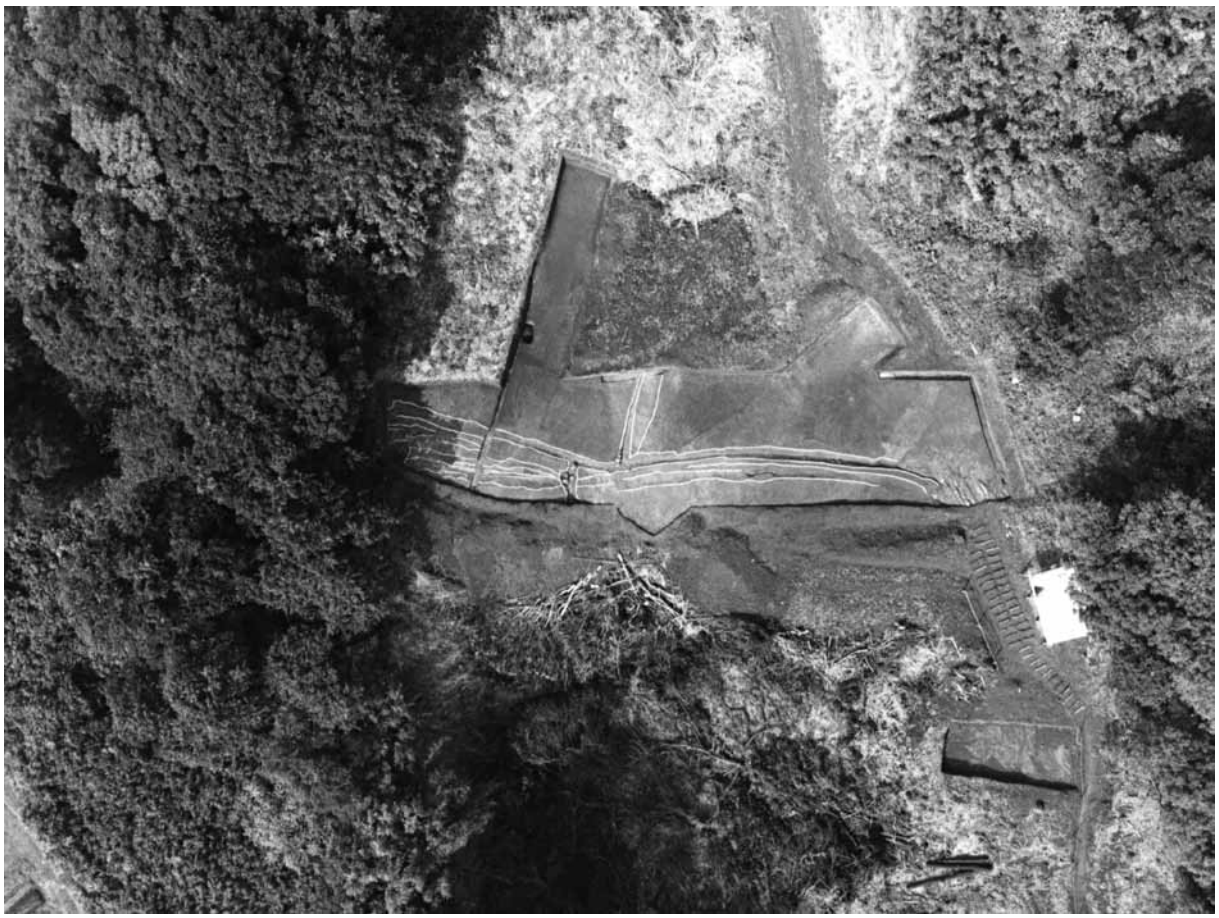
出土遺物 1



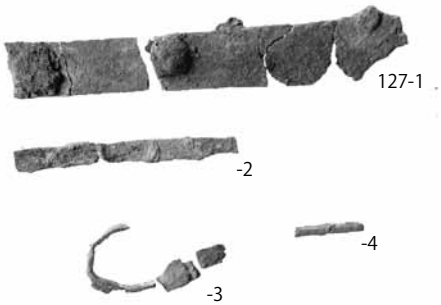
出土遺物 2

出土遺物 3

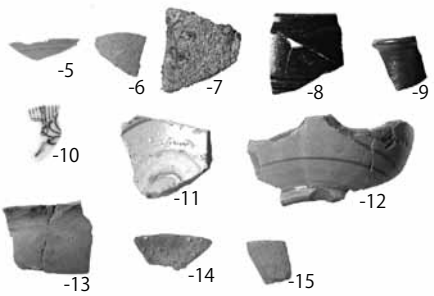
図版 140　長池Ⅰ・番貫Ⅰ遺跡



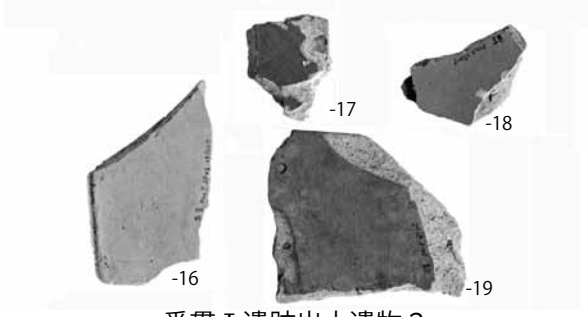
番貫Ⅰ遺跡　空撮写真



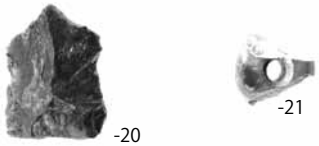
番貫Ⅰ遺跡出土鉄器



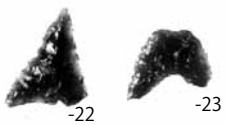
番貫Ⅰ遺跡出土遺物 1



番貫Ⅰ遺跡出土遺物 2



番貫Ⅰ遺跡出土石器



長池Ⅰ・番貫Ⅰ遺跡出土石器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	やまべいせき・くらきりいせき・こめさかこふんぐん・かいさきいせきほか
書 名	山辺遺跡・鞍切遺跡・米坂古墳群・貝先遺跡ほか
シ リ ー ズ 名	国道485号道路改築事業（松江第五大橋建設）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	Ⅱ
編 著 者 名	宮澤明久・内田律雄・伊藤徳広
編 集 機 関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
所 在 地	〒690-0131 島根県松江市打出町33 TEL0852-36-8608 E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp
発 行 年 月 日	2011年３月

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査原因
山辺遺跡	松江市西尾町	32201	D886	35度28分10秒	133度5分41秒	H18.6.6-7.31 H19.8.20-10.31 H20.4.24-12.19	道路建設
鞍切遺跡	松江市西尾町	32201	D884	35度28分15秒	133度5分46秒	H20.4.14-4.18 H20.5.12-6.27 H20.9.26-10.31	
客戸遺跡	松江市西尾町	32201	D887	35度28分18秒	133度5分43秒	H20.4.21-4.25 H21.5.18-6.30	
中坪遺跡	松江市西尾町	32201	D960	35度28分13秒	133度5分41秒	H20.10.20-10.23	
観音山古墳群	松江市西尾町	32201	D617	35度28分4秒	133度5分40秒	H17.12.1-12.16	
一の谷遺跡	松江市上東川津町	32201	D965	35度28分52秒	133度5分44秒	H22.1.12-1.29	
藤廻遺跡	松江市上東川津町	32201	D963	35度29分7秒	133度5分35秒	H21.10.19-10.28 H22.4.19-6.4	
仲田遺跡	松江市上東川津町	32201	D968	35度29分9秒	133度5分33秒	H21.10.29-11.6	
石台Ⅱ遺跡	松江市東津田町	32201	D981	35度27分10秒	133度5分34秒	H21.2.23-3.20	
米坂古墳群	松江市西尾町	32201	D888	35度28分26秒	133度5分43秒	H21.3.16-3.18 H21.7.27-12.18	道路建設
米坂遺跡	松江市西尾町	32201	D753	35度28分29秒	133度5分47秒	H20.2.12-2.20 H20.10.14-12.19	
貝先遺跡	松江市上東川津町	32201	D969	35度29分16秒	133度5分21秒	H21.6.22-7.24 H21.10.13-12.18	
梅面遺跡	松江市西尾町	32201	D958	35度27分59秒	133度5分38秒	H19.9.25-9.28	
番貫Ⅰ遺跡	松江市下東川津町	32201	D970	35度29分18秒	133度5分16秒	H21.9.1-10.30	
番貫Ⅱ遺跡	松江市上東川津町	32201	D971	35度29分14秒	133度5分16秒	H21.11.26-12.4	
長池Ⅰ遺跡	松江市下東川津町	32201	D977	35度29分22秒	133度5分9秒	H21.5.18-7.31	
長池Ⅱ遺跡	松江市下東川津町	32201	D978	35度29分19秒	133度5分12秒	H21.8.3-9.30	
蟻越古墳群	松江市上東川津町	32201	D806	35度29分13秒	133度5分26秒	H22.1.5-1.29	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山辺遺跡	集落	縄文・中世	加工段・廃棄土坑・住居跡・木組遺構	陶磁器・須恵器・土師質土器・炉壁・鉄滓・漆椀・木製品・輸入磁器・石器	中世の鋳造炉片や羽口が多量に出土
鞍切遺跡	古墳	古墳･古代･近世	古墳・土坑・街道跡・落とし穴	埴輪・須恵器・大刀・古銭・石器	2基の方墳の周溝から多量の埴輪片が出土
米坂遺跡	集落	古墳	段状遺構・溝跡・焼土面	須恵器・土師器	古墳時代中期の集落跡
米坂古墳群	古墓	古墳･中世･近世	古墳・中世墓・礎石建物跡	石塔・古瀬戸・備前・経石・須恵器	古瀬戸仏花瓶1個と備前焼壺2個は蔵骨器 宝篋印塔・五輪塔が多数出土
客戸遺跡	集落	近世	掘立柱建物跡	陶磁器・墨書礫	墨書礫は地鎮具と考えられる
一ノ谷遺跡	散布地				
藤廻遺跡	散布地	時期不明	盛土状遺構	須恵器	古墳の可能性がある
仲田遺跡	散布地				
石台Ⅱ遺跡	散布地	縄文･弥生･中世	包含層	縄文土器・弥生土器・陶磁器	
中坪遺跡	散布地				
梅面遺跡	散布地				
観音山古墳群	散布地				
貝先遺跡	集落	中世	加工段・掘立柱建物跡	須恵器・土師質土器	
番貫Ⅰ遺跡	道路	中近世	道路状遺構	鉄製品・陶磁器・瓦	
番貫Ⅱ遺跡	散布地				
長池Ⅰ遺跡	散布地	縄文～弥生		石鏃	
長池Ⅱ遺跡	散布地				
蟻越古墳群	散布地				

要 約

山辺遺跡では、中世と考えられる炉壁や羽口等の鋳造関連遺物が多量に出土している。鋳造炉の構造は三層構造のこしき炉の可能性が高い。鞍切遺跡では、埴輪が伴う方墳２基と、主体部が箱式石棺の方墳１基を確認した。また時期不明の道路状遺構と近世には利用されていた街道跡の調査を行った。米坂古墳群は、15世紀ごろの中世墓の調査を行った。中世墓には３つの蔵骨器が納められていたが、そのうち１点は古瀬戸の不遊環付仏花瓶であった。また、様々な石材で製作された宝篋印塔や五輪塔、３万点以上の経石が以上出土している。

国道485号道路改築事業（松江第五大橋道路）
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

山辺遺跡・鞍切遺跡
米坂古墳群・貝先遺跡ほか

2011年３月　発行

編集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
発行　島根県教育委員会
印刷　株式会社谷口印刷